Zoku Gunsho ruiju

昭和十四年版

# 續群書類從

第拾四輯下

東京

續群書類從完成會

# 續群書類從第拾四輯下目次

## 和歌部

# 續群書類從卷第三百八十

總檢校保己一集
男源忠寶校

和歌部十五

## 千首和歌目錄　正徹

### 春



### 夏

夕顔　蓮　夕立　行路夕立　浦夕立
夏月　夏月明初　蟬　螢　氷室
扇　泉　納凉　夏秡

秋

立秋　立秋〔異本無〕　早秋　早秋露　早秋雨
早涼至　初秋　初秋風　初秋露　風告秋
新秋露　新秋雨　幽栖秋來　殘暑　七夕
〔衍歟〕七月　七夕月　七夕獸　七夕鹿　七夕熊
七夕馬　七夕後　七夕後朝　七夕庚申　閏月七夕
萩　早秋萩　萩告秋　月前萩　夜聞萩聲
萩似人來　萩　栽萩　朝萩　萩映水
月前女郎花薄　槿　隣槿　草花風
淺茅露重　虫　虫吟露　夕虫　夜虫
虫聲何方　叢虫　蛬　鹿　夕鹿
夜鹿　鹿聲何方　鹿隱霧　田鹿　秋夕
月　初秋月　三ヶ月　上弦月　八月十五夜
不知夜月　立待月　臥待月　廿日月　弓張月
在明月　待月　横峯待月　清夜月　秋月添光
朧月　積傾月　殘月　月前露　幽山月
野月　月滿海上　江月冷　湖月　都月
古寺殘月　叢祠月　寢所月　月如鏡　月似扇
廣澤池眺望月忘憂　寄月懷舊　寄月釋教　鴈
風前鴈　鴈隨風來　初鴈横月　湖上鴈　馬上鴈
左右聞鴈　野分　野分後月　秋風　霧
露　原露　秋雨　稻妻　晴夜稻妻
菊　山路翫菊　水邊菊　擣衣　擣衣近
遠擣衣　曉擣衣　南北擣衣　九月十三夜　秋鴫
鶉　夕鶉　小鷹狩　秋田　蔦
葛　紅葉　初紅葉　露染紅葉　紅葉淺深
紅葉如錦　庭紅葉　柞紅葉　秋時雨　秋霜
秋旅行　秋旅情　秋述懷　暮秋　暮秋時雨
暮秋霜　九月盡

冬

初冬　初冬嵐　初冬木枯　時雨　時雨交風
枕上時雨　時雨過易　落葉　落葉風　月前落葉
落葉掩水　橋邊落葉　霜　朝霜　竹霜
橋霜　木枯　暮山木枯　寒草　月照寒草
寒樹　寒樹嵐　椎柴　氷　氷初結
氷閉細流　池水半氷　朝河氷　冬月　冬月冴
海寒月　千鳥　水鳥　網代　霰
曉更霰　夕霰　野霰　屋上霰　鷹
神樂　雪　遠山初雪　曉天雪　薄暮雪

# 千首和歌

正徹



## 春二百首

年内立春

冬に先あひやとりしてくる春の霞や年の中隔つらん

かすめ空年立くれはとしくるゝいさよひの月や春のあけほの

立春

天地のひらけしよりの春霞けふ立まてはいくへなるらん

月も日も半をめくる久堅の山の南に春や立らん

氷よりうち出る浪の初を花春立けふのまのゝ秋かせ

早春

あまの原あふけは高く霞む日も光ある世の春の暮哉

天つ空春の霞もこほれるやうちいつる雲波たゝぬまて

つもりこし雪の白山うち霞冬のとまりに春はきにけり

初春

山の名の千年の坂を今日こえて行末遠く霞む春かな

榊葉になひく霞のあをにきてかけて春しろ天のかく山

くもりなき鏡なりけり山鳥の尾上の松にかくる春日は

敷島の道の春風霞きて誰かことのはも色そ添行

春天

久堅のすめるは空となりし世や春の光も照し初けん

春風

色にふけ草木も春をしらぬまの人の心の花の初かせ

春色浮水
たかれよりなひく霞やにほの海の浪の花おる春の衣手

霞
おき出し夜ふかき鐘の霞つるこゑより色にあくる春哉
あさみとり春の霞の山めくり時雨し秋に染し色かは
久方の天つ霞のはし立を空にもかくるよさのうら浪
暮わたる遠山まゆのかたみたれのほる霞や先かくすらん
天河星合の空は程とをしたれにかすみの衣かすらん
八幡山三のころもの玉てはこ二はたちぬ雲よ霞よ

山霞
染てけり霞の衣色をうすみ山のすそこの春の若草

遠山霞
立こむる遠の山人それも見はわかすむ里や又かすむらん
朝霞もゝえをかくる浦風にはまゆふたかきみくまのゝ山
うつもれし我身の霧はかつ晴てけさ遠山の霞をそみる

嶺霞
霞こめつらなる峯のたりはかり残かわたるかりの面影

浦霞
伊勢の海や渚の玉の光かは霞をみかく興津白波

海路霞
あさ明の霞のかたほかけ捨て浦風となくわたる舟人

關霞
關やふく霞のひさしあれまくもおしみそあへぬ不破の山風

子日
いかなりしいつのれの日の行末に今老松の神と成らん

若菜
あしたつのすりかり衣袖はへてたれ芹川にわかな摘らん
しつのめかこゑ聞しらて鳥やたつ若菜かりくるのへの雪間を

鶯
さく梅の色とはなしに鶯のこゑのにほひや友さそふらん
はし鷹のかりはのをのに巣立てやならしはかくれ鶯のなく
ありあけの月かけきえて鶯の聲のにほひに霞む山かな
あさ露もちりかひなひく柳風うくひすさそへ池のうき草
ふる雪に梅の花かさかたふけて梢やしのく鶯の聲

梅
いつくとも木の下しらぬ三か月のうすき霞ににほふ梅か香
陰にさへはれをならふる契あれや浮へる池のおしの梅かえ
すむ人の心とめよと梅かかを浮世にしめて春風そふく
梅花れやちかくして埋火のもとつ枝とくる露の下紐
宿出ておほくの梅の陰しめはあたなる袖と花もたのもし
かけうかふ山川あさみ水澄て夕の月に匂ふ梅か枝
身にそしむ軒のしのふにさく梅の色にいろつく春の秋風

梅花告春

春の色に鶯あをき鳥のきて枝にかくらむ梅の花笠

月前梅

天つ風光も色に吹わけす梅の匂ひに霞む夜の月

梅風

ふかゝれとさらは思はし梅かゝをしるはかりなる風に任せて

梅薫風

吹ぬ間そ袖にもとまる梅かえの匂ひや風の跡をくるらん

寝覺梅香

むら雨にさめてそ匂ふ夢人にきせてかへさぬ梅の花かさ

柳

さほ姫の柳の髪のさかりはも衣のすそに霞む春風

柳かけふけてみたるゝ糸すちにやとりかれてや風の行らん

あさみとり霞のうちの小山田にかひやのけふり立柳哉

わか草の野への緑もまたみえぬ一もと柳河風そふく

柳辨春

日影さす一木柳色そひてならふ春なき野への朝露

門柳

ふかみとり杉たつ門の古柳めくむも春のしるしなりけり

田邊柳

小山田のさかひの柳一かたにぬしさたまらぬ春風そふく

春雨

草の露木々のしつくにしられけり川音たかき春雨の空

軒はもる有明の月の影なから霞ておつる袖の春雨

雨そゝく門田の草に花そさくをくてになしてしはしかへすな

山風の松に木ふかく音はして花のかくらき明ほのゝあめ

過ぬるか閨のあれまにもる雨のしつくも霞む袖の月かけ

春草

松かけの岡のや形の雪間より秋風しろき葛の下もえ

今朝みれは夕かけ草の露たかく春のよのまに生る野へ哉

早蕨

わらひおるかた山きゝす立歸りのころおとろの陰やたのまん

山かつの衣の色に紫のゆかりそとほき道のさわらひ

春駒

野への駒つなける綱に草そふすいたくな引そ秋の花みん

あれそゆく御牧の駒のしたり髪おきふすのへの草にみたれて

花

よしの山あかぬ心をしほりにて分入花は見ぬ方もなし

花の色になとか此世におはさらん空に月日の光をそみる

初瀬山花より出る鐘はなとくもる契をよそにつくらん

朝露はかゝれとてしも消さりし夕の風にちるさくら哉

身にしめて春の日くらしむかふとや花の心に秋風そふく

はるをへし花はすかたもおとろへて我をや本の散とみさらん
としふとも花は春にやそひにけん別ぬへくも老にけるかな
老ぬれはいとふならひをさく花の心もしらすなるゝ春かな
かすむなよ花の光をゆつりをきて散しかたみの有明の月
さく花にうつる心やうらむらん去年のさくらのふるき面かけ
花そなきさめたる松は嶺にあけてまかひし雲も春のよの夢
山櫻苔の莚に散そしく夢はふたゝひかへるまくらを
いかゝあらん思ひを花にのこすとも我のちの世の夕暮の空
暮ぬとてとゝむる人のこゑせねと花あれは入道のへの宿
春ことに花ものいはてとく法の心しられてちるあらし哉
したひわひ見るもうらめし櫻花風のためなる心よはさを
春の花おもふはわかれいとふにはそふをうき世の跡の山かせ
又あはん花はありともいかさまになこりすくなき老の春哉
色もなき人の心の末の世になれるをうしと花やちるらん
雨風に心あはせて春の花うつろはんとや思ひたつらん
ゆく春もをくれぬ花の木間より事をあまたの有明の月
にほの海渚のさくら花も根にかへる白浪春なあらしそ
玉てはこ明てそみまし櫻さへ遠山鳥のをろのかゝみを
稀にきて此世におはぬ花の香をしむらんものそ天の羽衣
木間より出る日影にみかくなり雲の玉ゐる花の朝露
墨染のゆふかけ草のいろもなし光にてらす花の木の本

ふかき夜の花の木陰にそむき置てともに哀む春の燈火
うすものゝあやなき春の衣かな霞にすける山さくら哉
花さかり世はをしなへて雲にあけ雲にくるゝは天つ空かも
木の本はうつろふ花の古郷にのこす日影や我をまつらん
色そゝふ月も木の間にうつりきて花の香つたふ有明の影
花さかり雲か雪かとまかへこしなさけゆるさぬ春の山風
花をそへ花をのこして行かへる嵐の遠の峯の白雲
たちそはゝやかてを消よしら雲にまかへはつへき山櫻かは

待花

櫻さく遠山寺のたよりしも道さまたけの花やみるらん

栽花

うへをくもよしなし櫻末の世の人の思の種をあまたに
形見ともみむともしらす老か世にたゝ花なれはうへてける哉

山花未遍

梅かゝも衣におつる色なから櫻をたをるはるの山ふみ

花僅開

山さくら花の下ひもときかけて苔のむしろに誰をまつらん

交花

山かつの行袖すりの花の香は厭ふにもあらしとめんともせし

花下忘歸

散までは花に歸らし春の風我家さくら咲とつけすは

暮山花
高根こす木間の夕日影きえてさくらにかへる花の色哉
水郷花
網代木にいさよふ花の波こえて八十宇治山にちる櫻哉
古寺花
色うつむ泊瀬の檜原くもりかれ花にみとりも消る山哉
おくふかき軒のかはらに松ふりて花にかすめる春の燈火
里花
のこりなく雨は晴たる庭たつみ猶雲うつむ花の下かけ
田家花
くろにさく一もと櫻をのつから花のあるしの小田のかり庵
閑中花
まきるへき風たにふかて敲かゝる花の音きく窓のうち哉
名所花
舟人もはやぬさまつれかさはやのみほの磯山花さかりかも
花催懐舊
昔みし花も我身に物いはてむかへは涙露そこほるゝ
落花
ちらはちれおしまし花よ世中の心まかせになきはくるしき
さのみなと憂き夕暮そ見し花のかたみの雲を散らす山風
惜花
心せよ花も花をや惜むらん吹ほとしらぬ春の山かせ
歸鴈
眞葛葉もたえす歸し秋風の行衛はしろや春の鴈金
まてしはし常世もこの世花ならぬ花やはさかん春の鴈金
春の鴈夕の雲に聲すなりあはれかへらぬ老の波かな
毛衣に花の錦も立あへすかへるかいそくかりの古さと
春いてゝ冬にそむかふ天津鴈みやこの霞こしの白雪
かりなれや雲にとちをたつとみて歸るこゑする春のしらへは
遠歸鴈
かすむ日にこえゆく雲の一枝は鴈のつらぬる峯の松原
遠近歸鴈
さほ姫の霞の袖につく墨のおつるや消る春のかり金
玉つさのこすみうすすみ書つられ今遠近にかへる鴈金
橋歸鴈
鴈そゆく猶わたらしともろこしの橋にかきてし文字を連れて
三月三日
盞の石にさはるもことの葉にせかるゝ程はまたれやはせん
桃花
山かつの薗の垣ほにさく桃の枝をはつ木とあさてほすみゆ
梨花

わたの原うち出て見れは山なしの花とやいはん興津白波

春月

天つ風又や霞にたゆむらん月の氷の夜半のむらきえ

わすられぬ昔の袖の影ならて霞めは遠き春の夜の月

春のよにくもると見つゝまとろめは夢路かすめる有明の月

立そひて花に別し春霞はかなや月のくもるかたみは

霞中月

くもらしな霞の袖の中川になかれての名をつゝむ月影

見すもあらす見もせぬ月の深るまてあやなく空の霞む夜半哉

春夕月

空にみてゐまやはおしむゆく月の舟をなかしてかすむ夕風

春曙

見すきかぬ山の花もり色も香も霞にこもる春のあけほの

さためすよ秋の夕のをはりも又明ほのゝ春のあはれに

明るよの月と花との哀をもたゝなしこめて霞む春哉

花に月霞に鳥はさへつりて山本くらきはるの明ほの

山櫻色わくほとの曙に霞をいつるとりの聲かな

曙を花にゆつりて横雲の別てきゆる峯のはるかせ

いさり火のかすむそ見ゆるあまのたくなはの浦はの春の曙

春の夜のうらしまかすみ雲そたつこや玉くしけ明ほのゝ空

閑中春朝

春といへとそともなき朝かな世にもつかへす世をも渡らす

遲日

今朝のまに昨日をけふと思ふには明日もや過し春の夕暮

おくろまの岩ほも雪と成ぬへし春日そ秋のいなつまの影

花そ雪またかたふかぬ春の日に冬の一日を送る山かせ

春植物

志賀のうらやのころ石井のもと櫻花も昔の陰やすくなき

春山松

山路ゆく夕の嵐松にか（こ歟）れ花にそあらぬしら雲のやと

嶺椿

生駒山雲もかくさすみかくなりみねの椿にかゝる月かけ

春山家

春をへて身はすみなから山なしの花にかりなる此世をそしる

春旅

みすもあらぬ心にとふもこたへぬは旅ねむなしき春の夜の夢

春眺望

山本や霞む木の間をたえ〳〵になかれて出るはるの川上

春人事

くらき夜の磯山さくら木下にかゝりみせたるあまのいさり火

春雑物

めくりあひて且みる花をおしむへき命もしらぬ老の春哉

かすむなりいつくの花の奥よりか匂ひにもれて鐘きこゆらん
山つとに手折てのする花筏あらくおろすな春の川風

遊糸

世中はけに事しけき春の野の草葉に遊ふいとまなの身や
草もゆる野島か崎の永き日にあまや釣する棹のいとゆふ

雉

おもふらん子をいかにとも今そきえ焼野をゆけは雉子鳴聲
のかれこしうき世わするゝ山賤か子を思ふ雉の聲な聞せそ
秋の鳴春の雉のたつ澤に哀こもれるきりかすみかな
むら薄のころを陰とれせりつむ澤田のくろにふす雉子哉

燕

庭めくる燕入なりなかはあけてをしはるみすの下もあらはに

雲雀

空たかくあかる雲雀もにくからす哀我身の程しらぬ世に
山本の夕かけ草を吹風にをく露またてたつ雲雀哉
鳴ひはり空にあるまにすきかへす田面の草に床はなくして

喚子鳥

いとへとやうきよの人をよふ子鳥獨深山に音をつくすらん
巣を出て山の霞にまよふとや子をよふ鳥の鳴くらすらん

蛙

散る花にましろ蛙のうたかたも色なる川の水のしからみ
湊河しほに瀬のなる夕浪に小田の蛙そ聲けたれゆく
おもふらん山田の水に數しらぬこはころたてすなく蛙哉
折たちて田歌の聲をならすなり水の蛙の春の夕暮
小山田やまかする水の萍にかくれあらはれ蛙なくなり

苗代

思へとや鳥をふ水の苗代に鹿たつ峯の陰もみゆらん
すさましやあらすく牛のつく息に霞む朝の春のあら小田

菫

つむもうし若紫の菫草しのふのみたれのころあさつゆ
行人も野邊のしのやに一夜ねぬつまぬ菫の春の名たてに

欵冬

陰ゆくも聲する水に山吹の花ものいふと人やきかまし
山城のゐてこす浪に橘の身さへ戀しき山ふきの花
人もかく思ふをいはぬ色こそはあらまほしけれ山吹の花
たをるとも人にかたるな山吹の花に分くる露は落けり
鐘つきて暮行空に山吹のたかしゝまをか色にみすらん

躑躅

峯高き松の下照姫つゝし花咲わたせ天のうきはし
道のへのいはもとつゝし紅のあかもぬき捨誰かいにけん
山ふかくさくや蓮の花つゝししまし浮世にたとる心は

藤

花かつらかけまく波もあらたへの藤江の浦のあまの乙女子

藤花繞松

みとりそふ若葉をこめて咲藤の花のませゆふ松そ木高き

名所藤

高砂の尾上に匂ふ松の藤ゆふへそ鐘の聲にかくれる

暮春

この夕吹くる風をたよりにて思ふかたにや春の行らん

しらさりき春のかきりの夕暮をおのへの鐘にしたふへしとは

いつかたに行ゑしられぬ花鳥の跡をや春の猶したふらん

雲に入又れに歸る花をめて鳥をうらやむ春や行らん

くるかたもかへる所もなき春を送り迎ふと何おもふらん

霞つゝ夕ゐる峯を立別春よりさきに歸る雲かな

三月盡

春は又去年も歸りし古道を尋てけふや思ひたつらん

夏

首夏

あかさりし春は夜の間の夢路にも遠くはゆかし夏の明ほの

今朝そ見る春をとなりの中垣に衣かけほしさける卯の花

首夏藤

夏きても匂ふ藤波あらたへの衣かへせぬ山かとそみる

更衣

夏衣人こそかふれ花の香をおしむにゝたる苔の袖哉

水に住たくひを見ても今しはしかへまく袖のをしの毛衣

しろたへにしけるみとりにかくろへてかふるか夏の鷺の毛衣

餘花

花もまたのこる梢のはつもよき夏と春との色やわくらん

新樹

茂れたゝ春にをくれて獨とも思ふ色なき深山木のかけ

卯花

ゆふまくれ月はこの比有明のかけまきたつる庭の卯花

早川やくたす小舟の岸うつり飛しら鷺やさける卯花

葵

あふひこそあひ生なられ神山の昔の二葉松はふりつゝ

郭公

ほとゝきす待につけてもまとろます蚊の初聲のわたる枕は

一こゑをうたかひあへる人ことに物いひとまるほとゝきす哉

ほのかにそ月はのこれる郭公今一聲をおもかけにして

もり出る雲間の月の一こゑに聲なかされそ山時鳥

よしさらはあかすは老のひかきゝもましれと思ふ時鳥哉

時鳥又もきかせす里の子のゆふとゝろきにこゑましりつゝ

神まつる卯月のしめのうちにたに事いみしける時鳥哉

待郭公

ほとゝきすきかぬ山路を分入は心あらはす峯のまつかせ

初郭公

手にとらぬ初音のけふの郭公これにも又やゆらく玉の緒

郭公一聲

ほとゝきす人もとはのおほかるはしなすくなしと一聲そ鳴く

夜郭公

さむろともいかなる夢かおしからんこゑおとろかせ山時鳥

月前郭公

雲路ゆく月のこゑかとたとるまて光に近き時鳥哉

海郭公

夕浪にこゑをちかへれ入うみの松のむかひの山ほとゝきす

時鳥遍

おちかへり野にも山にも時鳥こゑの種まけこんとしのため

郭公稀

花ちりてしける櫻の影にたに年にまれなる山ほとゝきす

盧橘

あはれにも我そふり行橘の身さへのこりて花にあふ世を

しろたへに匂ひそまさる立花に月の宮人袖おほふらん

秋まちて鳫のは風ににほはなんおなし常世を出し立花

樗

紫の一もとあふちさく野への草はみなから綠をそしく

散過し外面の桐の花の色に面かけちかくさく樗哉

菖蒲

けふこそは賤やの軒も菖蒲ゆへやつるゝよりはめにかゝる覽

ふき捨しあやめのかれはをとたてゝ匂ひのこらぬ軒の下風

早苗

うつりゆく水もみとりの杜の陰うき田の早苗とりはつくさし

時きぬとわさ田の露の玉たすきゆひめかけつれさなへとる也

旅ゆけはさをりの田うた國により所につけてこゑそかはれる

五月雨

千隈川にこれる水の五月雨に消て幾よのあり明の影

夕間くれ雲間のみとりかつみれは月にそまさる五月雨の空

池はらふ風に立葉も下おれぬ蓮の糸の五月雨のころ

杣五月雨

にふの川みほにそにころ杣つくりうつ墨なわの五月雨の比

河五月雨

河舟の水底見れは陸なりし梢そなひく五月雨のころ

水鷄

明ぬ戸をたゝくかひなくをのれのみ千度水鷄のくらきよに鳴

夕まくれ入江にかゝる舟はたをたゝくやいつれ水の底より

江五月雨

五月雨は水の入江の川つゝみこゆるかあさき舟の一さほ

鵜川
舟人の袖にまちかきうかひ火も深てすゝしき瀬々の川風
河上に打かとみゆる石の火の出るや鵜舟夕やみのそら
するせはみ廣瀬をゝふ鵜かひ舟ひとり〳〵そ又落て行

照射
よる鹿もは山の陰にあらはれぬともしの松はれになかれとも
鹿は見てよるやほくしのさしも草もゆる伊吹の峯の夕闇

蚊遣火
こかしけん扇はしらす蚊遣火の煙そ見ゆる夕かほのやと
蚊遣たく道ゆきふりのけふりさへ宿うらめしき袖の移香

夏草
さゆりはのしられぬし水くみたえて野中の草を結ふ山風
時しらすいたゝく霜を夏草の末葉にかけて分る野へ哉

瞿麥
草かくれたかなてしこの花の香を見せはや思ひをく露のまに
一もとのゆかりやいつれ紫の竹のませゆふなてしこの花
ふりのこれなへての草のかそいろも分てあはれむ撫子の花

夕顔
しつかやのおやのかふこの白妙にまゆ開けたる夕貌のはな
暮やらぬ日影しほむゆふかほの葉陰の花や露を待らん

蓮
山本やしけるはやしの前の池にはちすも白き鷺そむれゐる
くもりなく池の鏡をみかゝなむたゝ水かれそ蓮葉の露
すむとりもいかゝれふらん風わたり雨うつ池の蓮葉の聲

夕立
音はしてふりこぬさきに夕立の雲とりさはく木々の山風
槇の戸に吹入かせの程もなくこすのま遠に過る夕立
吹しほる野分をならす夕立のかせの上なる雲よ木葉よ

行路夕立
あらき風まつ吹あけて玉ほこのちりさへくもる夕立の空

浦夕立
うしほふくくちらの息と見えぬへし沖に一むらくたる夕立

夏月
山のはの木をうこかせる風すゝし扇をあけて出る月夜は
蹊のやそ明るもしらぬ夏はきの鹿のをからの白き月夜に
もる月に枝もさはらぬ竹の子のまたみしか夜の窓そすゝしき
そのまゝにほすやさつきの短夜は月にもぬれぬ袂かあさてを
川島のなかれを分る月の影めくりあふまに明る夏の夜

夏月明初
いかゝみるたゝおしひれる玉札の明やすき月はとの葉もなし

蟬
うつりくる梢のとりにおとろきて杜の陰とふせみの一こゑ

風わたる木末の露やかゝるらん月におとろく蟬の一こゑ〳〵
瀧の上の蟬の羽衣をりあましみたれにけらし落る白糸

螢

飛ほたる光は雲の上なから秋風ふくとつけのをまくら
ふかゝらて影なきほとの夕暮はたゝ夏虫の飛螢哉
さのみ子を思し人のなき玉や螢となりて闇にもゆらん
いなりやまうつみし玉や螢とも見えてを杉の窓照すらん

氷室

氷室山たかつの宮のさためしや消ぬ氷室の始なるらん
松か崎いそく都のつとにおきて氷をはこふひむろ守哉
室いたす朝けのまにもうちとけてひ水になりぬ六月の空

扇

木間より影もる宿のあつき日にかさす扇やつまこかすらん
出しまの月のゆかりはむらさきの扇を雲の閨の一むら

泉

くるゝまてあかす泉にむかふ日はおもひ忘れぬ埋火の本
岩間もる水の心にあひの風吹や夏なき松のこゑかな

納涼

瀧のもとよりゐる岩は水よりも身にとをるまてさゆる夏哉
山かくれ岩ほそはたつ松かれの枕すゝしき袖の下水
みな月の夕暮かけてもろこしの風なき山も水や涼しき
山陰の水と風とになかれくる秋の日數や夏をこゆらん
くるゝ夜は夢にかへらん宿もうしすゝむ木陰の風秋にして
松の陰すゝめとなれるゆふへかな風と水との心くらへに
そなれ松水なき陰も涼しきはしける草葉をむすふ山風

夏祓

御祓川入江に捨る麻の葉もすくなる水を尋てそ行
ゆふしてもなかれて早き御祓川あさにひかれて夏や行らん
御祓してけふすかぬきついつくにも茂る淺茅やまはら成らん
みそきして河戸に捨るなかれ輪になかは廻れる年もこえつゝ

## 秋

立秋

露もみす何の一葉も散あへぬ昨日の風に秋はきにけり
秋もけふたつの市人涼しさをなにゝかへけん袖のはつ風

立秋曉

又やみん秋たつ峯のあかつきにあふは別の長月の空

早秋

わきてけふ身にしみまさる音もなしいつも浮世の秋の初風
今朝の間に秋をのせくる小舟とや一葉も風のたより待らん

早秋露

我袖のふかき露のみ消やらて又結ひくる秋にあふかな

早秋雨

草も木もいたりいたらぬ秋やこれ結ふ露さへ村雨の空

早涼至

身にとほる程こそなけれ薄衣袖の日影をはらふ秋風

初秋

一葉ちり一花さきて春をつけ秋をしらせし秋はきにけり

人心こゝろやすくや秋のこし夏をはしたふならひなき世に

初秋風

後にこん冬の心をいそけはやあまり涼しき秋の初風

初秋露

秋もまたをきこそみえれ消殘る命や露のはしめなるらん

風告秋

空吹はしられぬ物と尋きて荻にこゑかる秋の初風

風知秋

秋風の先荻の葉に立よりて四方の草木につけれとそ吹

新秋露

秋はきぬ去年の草葉の夕露も根にかへりしや又のほるらん

新秋雨

雲さそふ初秋風にふる雨のしくれはそれも木枯のこゑ

幽栖秋來

山風も昨日にそ似ぬ秋にたにしられしと思ふ木隱の宿

殘暑

日影なき朝夕露は秋にして袖のひろまに殘る夏哉

七夕

くるゝ夜の舟まちかれて七夕の雲のひれよる天の川岸

七夕に別の星も猶雲の車ひき出るしのゝめやうき

七夕月

よひのまにわたりて月の舟なかせえやは歸らん天の川波

七夕獸

星合のみちとししらは獸の雲にはほえしさ夜ふけぬとも

七夕鹿

我中の契はしらしさほ鹿のそはけかはらぬ星合のころ

七夕熊

かり衣しくまにもあらて天津星今夜にあふやえ物なるらん

七夕馬

八十瀬こく舟路あさくは彦ほしにかさはや天の河原毛の駒

七夕筏

筏士もあまのふみ木にしはしかせなれもそ星のあふせ白波

七夕後朝

七夕の雲の車はあらふへき輪たちの塵もあらし川浪

七夕庚申

深にけりれぬよの後の酉の日を明て千〔な歟〕つけそ星合の空

閏月七夕

七夕に暁かあさてをかけてほせはつきなるへき後の朝そ

荻

荻の葉にうき秋風となり初し世のゆへしらぬ袖の露哉

早秋荻

吹風の音にしれとは荻の葉にいつれの秋か契初けん

荻告秋

いかゝふく都の庭の荻にさへ秋のこゝろのあらき濱かせ

月前荻

荻原や月に天飛かり鳴て秋風さむしほの上のしも

夜聞荻聲

おきはらや嵐は過しみたれはの立なほる聲も夜そ身にしむ

荻似人來

立そへる袖かとそきく夜はの戸になひきてさわる荻の末はゝ

萩

高圓のおのへに殘る萩の戸の花やあれにし宮をこふらん

栽萩

氷室より種やうへけん花の色に雪を出せる庭の秋はき

朝萩

朝霧の野へ立別ゆく鹿の跡に露けき萩かはな妻

たをるとも誰かもすそをひくまのゝ朝をく露の見えぬ萩原

萩映水

かけうつる萩の錦の中絶て水のうへ野に秋風そふく

月前女郎花

霧こめしますの大野の女郎花月のはしゐになして晴ぬる

薄

松陰の岩もと薄ほの／＼とあらはれきゆる峯のあさ霧

あはれめよ面きらひせぬ綠子のさし出す手とみゆるお花そ

槿

あさかほの花と露とはつれなくて光影きゆる有明の月

身そあらぬ秋の日影の日にそへてよはれはつよる槿の花

隣槿

一枝も植ぬ宿とは誰か見ん垣ほは人のあさかほの花

草花風

野への草花のにしきのうら風になりてそこゆる露の白波

淺茅露重

秋ふかき露にかたふくあさちふの末葉も下にかるゝ野へ哉

虫

分ゆけは草葉に音をそ鳴とむるたれ松虫の心をくらん

虫吟露

鳴虫の思ひの露もふかゝらぬ秋を草葉にかろき聲かな

夕虫

風ぬるゝ夕霜をかぬ秋の程草葉にすかる虫のこゑ哉

夜虫

出ぬ間は草葉にしけく鳴虫のまはらに成ぬ月やさゆらん

虫聲何方

草の原やかてまきろゝ虫の音はいつれの露のやとり成らん

叢虫

吹まよふ方もさためす草の原野風のまゝにきほふ虫の音

蛬

野へやうき蓬かれやのきり〳〵す露の丸ねは我そ寒けき

鹿

秋山の鹿やともしの跡にきてなかく別し妻になくらん

夕鹿

柴ましろそはの枯木とかつ見れは角ふりたてゝ鹿そ鳴なる

夜鹿

をしかなく夕の霧に妻かくす矢野のかみ山色付ぬらん

鹿聲何方

鳴鹿もともしせし夜の秋ならはうき妻こひに身をや捨まし

その山としらぬ嵐にまよふなり木葉につるゝさほしかの聲

鹿隱霧

こゑもせす月をもいとへ野邊の鹿夕の霧に妻そこもれる

田鹿

秋ふくる小野の山田にさほしかの涙色こきいねそ殘れる

秋夕

誰そこの憂夕くれをあろしにてとへとこたへぬ宿の秋風

うきをしろ袖をはらひて立さらん涙にやとの秋の夕暮

身のうさも今いく程となくさめて思ひすつれは秋の夕暮

人とにうきを分てもやらまほし獨の上の秋の夕暮

月

山のはの月をまねきて袖ふりぬ出るを待つと入を惜むと

都にもおなし鏡をかけ出る遠山鳥のをは捨のつき

なにゆへにうしとも思ひ哀ともみなさぬ月に涙落らん

雲にあへる月より西のはるゝ夜はなに心なき空もうらめし

入かたの月の後せの山風にうら吹かへす峯の椎しは

月のもる軒ふきあらせ蘆ふきの須磨の關屋の八重の鹽風

秋の浦の鹽干のかたの眞砂風あかれはふゝく雪の月かけ

なかめつゝ哀と思ひつらしとも人のまゝにや月はすむらん

月も又我をめてける行衞ともしらてや人を老となすらん

影そなき月の名のみはくらからす心にすめるよはの雨哉

初秋月

秋きての草木の上はしられとも月に色つく四方の白露

三日月

玉くしけなかはの秋の三日の夜にあらはし出す望月もかな

上弦月

深にけり月のかけたるあつさ弓入江波こす興津鹽風

八月十五夜

過し空あすのいさよひの光をもかろめ名高き月をますとて

不知夜月

たれも見よみてれはやかてかく月のいさよひの空そ人の世中

立待月

花にみんやとりあらさし秋草の露ふむ庭に立待の月

臥待月

千種ふく野邊の嵐にさほしかもおきふしまちの月や知らん

廿日月

民の戸も出て照さぬ方やなき廿日ゐ中の月の都に

弓張月

空に入おなしはゝ矢は見えれとも月や神代のあまのこの弓

在明月

色もおし月の桂の枝わけに夜をへてかろゝ有明の空

待月

嶺におふる松はまとに久方の月出ぬまも千代やへぬらん

横峯待月

月まてと雲もよこ折かひかれに光さきたつ秋の白雪

満夜月

ゆく月に中々雲の一むらは影見まほしくすめる空かな

秋月添光

秋の空みしかかりつる日の影の月にそへはや色まさるらん

翫月

ならひありて哀手にとる物ならは我世に秋の月や見さらん

稍傾月

待とゝむ心なきをや恨らんかたふく月の行末のやま

残月

道しらぬ月とやは見む秋半名をとけしよの有明の空

月前露

秋風もはらはす月も宿からぬ思ひの露は心にそなく

幽山月

秋ふかき山風きかて木間もる月に落椎の霜をうつこゑ

野月

月も叉雲になのりそ行人もかちのはをそし露の下みち

月満海上

わたのはら影をうけゝる色なからかへりて月を照す波哉

江月冷

秋ふかき細江の月の眉の霜水の鏡にふりて寒けき

湖月

にほの海の霧ふきたつる程はかり月に見えたる秋の鹽哉

都月

ならへみん秋は千種の露に咲花の都と月の宮こと

古寺殘月

かつらきや峯なる月にのこるなり遠山鳥のをはつせの鐘

叢祠月

水底もみたらし川の瀬になひく玉藻光をそふる月影

寢所月

心をもかてや床のさむしろに我れぬよひの月やとろらん

月如鏡

夜をへてそむかひまほしきくまなくて老の影見ぬ月の鏡は

月似扇

手にとらは月をあけてやたかへましをき忘れたる秋の扇に

廣澤池眺望

紀の海の浪につゝかぬ廣澤の月の南は山のはもなし

月忘憂

身のうさも見れは思はす月の中に生ふるかいさや物忘れ草

寄月懷舊

昔よりいく世の人かあかすして詠めすてけんふるさとの月

寄月釋敎

あふけとてむなしき空にさす指をまもりて月を人（待問歟）もなし

鴈

雲にたに宿なきさのゝ渡くる鴈金寒し秋のむら雨

秋風を告し螢のかけもなき野澤に落て鴈そ鳴なる

久堅の天の川舟からろをやをし明かたの初鴈の聲

霧たちて柞色つく山もとのさほの川原に渡る鴈金

風前鴈

吹みたる野分の底に先落てつはさをたゝめ鴈の一行

鴈隨風來

越路より鴈のつはさを吹をくる風とはなりぬ駒いはふらし

初鴈横月

天津鴈つらなりくるや山のはの月にかゝれるよひの横雲

湖上鴈

よこの海の夕浪寒く鴈そ鳴秋風いかに鹽津すかはら

馬上鴈

駒とむる夕波さひて日のくまやこの川上に鴈なき渡る

左右聞鴈

かたわくや秋の雲井のこまとりにあらそひきたる鴈の二行

野分

夜半にせし野分うらむる村雨に秋風かこつ庭の松虫

野分後月

風あらき庭の千種はみなふして木葉にましる檜皮ふき板

秋風

八重むくらはらふ野分に空はれて影さしこむる月の閑哉

見るまゝにむなしき空の秋の風さはる聲なき雲そ身にしむ
あはらやにすむ山かつのあさてほす月の山風身にやしむらん
なひきふす萩のみありと人そ見ん風にしかるゝ山の下庵

霧

朝ほらけ千里の浪のうき草や霧にうかへる梢なるらん
しろたへの色とも見えす曙に音ゆく水のあやの川霧
夕くれはそれしもかなし秋の色のかくれかれたる山のうす霧

露

袖をかる露は心にある物をよそけにゐるゝ草の上哉

原露

草の原風そ分くる花薄手に卷かくせ露の白玉

秋雨

思ふときれは心の秋にひく玉のを染るなかきよの雨

稲妻

山本の田面はろかに風さはき村雲まよふ秋の稲妻
風わたる山田のくろの花薄まれけはまれくよひの稲妻
いにしへは心にちかし稲妻の光の間にもいく世へぬらん

暗夜稲妻

心からたゝいなつまの影に見て干とせは過ぬ遠山のまつ

菊

霜そなきうつろふ菊のこ紫たかもとゆひの露結ふらん
心をはいさしら菊の露霜にうつろふ色やさかり成らん

山路翫菊

かさしてもあかぬ秋にこき入て歸る山路も菊を分つゝ

水邊菊

露にたにぬれてほすまは千代そふる折(マヽ)あらふ菊の下水

擣衣

月草の花たの衣うつたへに秋そうつろふ蓬生のやと
さよふけて聲こそよはれ古里に老たる人や衣うつらん
花ならぬ衣してうつさくら麻のこゑさへ秋はちるあらし哉
草の原しほるゝ霜の花衣打こゑちらす秋のこからし

擣衣近

から衣をとよりも猶うつ袖の枕にさはる夜はの夢かな

遠擣衣

はらふらし夜半に衣をうち渡すをち方人の袖の初霜

曉擣衣

明ぬ間に誰まきをきて横雲の衣うつらん峯の里人

南北擣衣

かたふかて月すむかたの枕にもあとにもちかくうつ衣哉
秋さむき砧は風に駒いはへ樹にすむ鳥にこゑあはすなり

九月十三日夜

袖にもる雲間の影そ猶細き夜は長月の中の三日月

風わたり初霜さむし秋の月望に二夜のまへのたなはし

秋鴫

月みても住かたき世のうき數を鴫の百羽にかきそへぬる

たえ／＼に霧吹のこす山本の野分さひしき鴫の羽かき

つみのこす澤邊の若菜草立て鴫のふしとをかくす秋哉

鶉

あまを舟入江の澤による浪のかすかく鴫の夕暮の聲

末野行袖の下より立鶉あはれみなてし世もや有けん

ふか草や秋のうつらの床の夢えやはふしみん野への木枯

夕鶉

秋の霜むすはん草にふす鶉衣ありとも床なたのみそ

小鷹狩

ふみ分て入や野口のかりゝゑに山もとさはく秋の村鳥

長月や草ふみたてゝ花とりの命もしらぬ野への狩人

秋田

秋の田のほのうへくらき山本の夕の霧にかゝるむらさめ

明行やいなはのかれもたつのなく安部の田面に月傾きぬ

早苗よりいなはにかはる秋の田にしつか手玉を殘す白露

鳥もこす鹿おとろかす弓影ゆへ八束ほなかき秋の小山田

ふれはいとひふらねはねかふ世中を秋田もるをも雨にしる覽

蔦

秋風に蔦の葉落てうつのやのむなしき山に猿叫聲

色かはる岡のくすやのつたかつらはふきあまたに秋風そ吹

葛

露霜も嵐にちりて行秋をうらみ絶たる葛のもみちは

秋風に立出し人はしられとも葛のはかへる岡のへのやと

紅葉

ちしほなる色にてらして秋の日のよはきもしらぬ峯の紅葉は

ましりてもこは世の人心もみちするより松そよそなる

雲の上の乙女こひてや天の戸に立らん秋の嶺の錦木

木間行秋の日かけも紅ににほふか上にふる時雨かな

山姫の瀧のしら糸村染になして落そふ嶺のもみちは

これも又都の秋のもみちはを渡らはにし（已下缺）

露染しちしほはちりてのこる枝に初霜いそく秋の紅葉は

初紅葉

秋ふかき心の色のはつ染を木末にいそく露の紅葉は

露染山葉

秋山の時雨の露の上染に殘る色なき四方のもみちは

紅葉淺深

立田姫ならぬ梢のかた思ひいかなる色に染まさるらん

紅葉如錦

山の名のこまの錦のはしさすや苔の莚の四方の紅葉は

庭紅葉
色ふかく照す紅葉の庭はかりしはしよそなる秋の夕闇
柞紅葉
ちらすなよ老木の母そいま一めあひみんまての露の秋風
秋時雨
時雨ゆく木すゑも袖のよそならて我身霜ふる長月の空
染のこせ時雨るゝ山をとふあらし今はの秋の（マヽ）もみちは
山路行袖の時雨に降なして木葉を染ぬ秋の雲（空イ）哉
秋霜
正木ちる外山の秋の松のはに時雨て霜をけつ嵐哉
枕うきたかもとゆひの秋の霜今朝は草葉にむすほゝるらん
秋旅行
あふ人もたかひに心をくはかりやかてかくるゝのへの朝霧
秋旅情
古里の秋に色つけ峯こゆる思ひをせかぬ雲のしからみ
秋述懐
散うせよ世にもあらしにとゝまらぬ秋の木葉をとのはにして
暮秋
長き夜にのこされてこそ殘るらめ月にをくるゝ秋もうらめし
秋やけふかへりあるしもしらさらんはやく隙行駒にまかせて
消やらてをくるゝ秋の形見ともせめては露は身をやたのまん
秋そ猶ゆくゑしられぬ飛鳥の跡は夕の雲も殘れり
したふとやつはさはやめてゆく秋の峯の入日にくもる鴈金
嵐吹草のやとりに我をゝきて秋の露と消ゆる秋かな
暮秋時雨
行秋も別の涙をさへかれもらすか雲の袖にしくるゝ
暮秋霜
いたゝくは秋くる風に先をきて（て脱）草葉そ末の長月の霜（らん脱歟）
露霜をきえぬ憂き身に殘し置の老の坂こえ秋や行
九月盡
風なから西より立し秋なれは入日やかへるところなるらん
別るへき日數なりけり手を折て逢みしよりの秋のうきふし
昔みき篠をかさしてまふ人の神送りせし出雲八重かき

## 冬

初冬
木のもとの落葉か上に音信て昨日の秋をとふ時雨哉
霜寒きみのゝを山の松一木まれなる色をそふる冬哉
初冬嵐
嵐ふく宿の木葉の衣かへ峯はかりにそ雲をたちきる
初冬木枯
冬きては都のうちの木末さへみな木枯しの森の聲哉
時雨

さためなく時雨る空は世の中の人の心や雲となりけん
待とも定なきこそさたまれる世のならひなれ雲な時雨そ
身のうさになかむる空の夕時雨袖より雲や立はしめけん
時雨をはあまの小舟に先立てくもりをくるゝ瀬戸の鹽風
けふは又高根をはらふ木枯に時雨わひてや雲歸るらん

時雨交風

高根より雲を麓にさそひきて時雨にかはる木枯の末

枕上時雨

枕かの木からし吹て窓うつや渡らぬ浪の時雨なるらん

時雨過易

あしはやく過にけるか時雨つる雲のひまゆく駒もうつらん（かへらてイ）

落葉

深山風ふかく吹しく冬の葉に木の實も落ちて谷を行聲
山川や水なわさかまく水の上におちて木葉や又昇るらん
よそにして落葉かきとる里の子も時雨に憑む常盤木の陰
散り行くを心かろしと殘るとも春の若葉の後の常盤木
世の中はつらきもつらききまゝならぬ花の嵐にちる木葉哉
散る木葉渡せる板に音はしてたゆるそあらぬ夢の浮橋

落葉風

はては又嵐を染てゆく木葉時雨し雲にかへす色哉

月前落葉

をくれ月嵐吹夜の有明は殘る木葉の衣〳〵の空

落葉掩水

ちりつもる谷の木葉のめくる哉さかまく水や下に行らん

橋過落葉

枕にも夢の浮橋うつもれて木葉にたゆる布留の中路

霜

白妙の山本くもる朝霜に日の影はらふ峯の松風
老にけるたか手枕にみたるらん黑髮山の曉の霜

朝霜

日影さす軒端の霜のまたきよりたかぬ朝けを立る里人

竹霜

手を寒み袖の朝霜まくりもてゆく人くもる遠方の野へ
まとろまてさ夜もはるかに竹の葉の霜にさえたる風の音哉

橋霜

朝川や小舟ならふる橋つなの長きよのまに結ふ霜哉

木枯

さゆる日の尾上の松の下柴に夕霜いそく木枯の聲

暮山木枯

人もこむ雲もかへらす木枯の山吹あらす霜のふるさと

寒草

草かるゝ冬野の霜の花そのに今もこてふの遊ふ雪哉

難波人思ひすてなてあしの葉にしみつく霜のは（マヽ）の世の中
世のうさを思ふ心もかれせぬや冬の草葉の霜の下もえ

月照寒草

野への（マヽ）こほれはいくへとけぬらん千草の霜（の脱歟）花の下紐

寒樹

こむ年の散へき程の花も葉も木をの枝にくもる冬哉

寒樹嵐

木葉せく小河よとみて霜こほる松の嵐そむすほゝれ行

椎柴

山風の柴ふき返す日影にも椎のうら葉のきえぬ霜哉

氷

氷ゐる岩間に今夜とゝまりて水も旅ねの宿や寒けき
ぬれしより氷かされの袖の口に夜ころも見ゆる衣の寒けさ

氷初結

夕月夜入にし影の猶やとる水やまをの氷なるらん

氷閉細流

引むすふ氷そめくる谷川やきひの中山帯とかすして

池水半氷

まとかなる冬の池邊の水分てかたはれ月の程そこほれる

朝河氷

曉の氷くたきし朝川の駒のひつめにたつ煙哉

冬月

さえつくす霜や氷を月の中にあつめて四方に下すかけ（マヽ）
影さえし月のあゆみも行なやむ霜夜の空の霧の明ほの

冬月冴

いかゝぬるかたふく月の夜半の袖氷に近き遠の里人

海寒月

あし火たく小屋の海士人出て見よ煙の波も月そこほれる

千鳥

須磨の海士の衣まとをのうら千鳥浪こす袖に聲そ近つく
哀とも誰かはみつの濱千鳥跡ちりうせぬ松のをの葉
月深るそかの里人音もせて河原の霜に千鳥鳴なり

水鳥

をし鴨の氷ふみ分け鳴聲にむすほゝれぬる夢そとけゆく
冬の日は入江たちゆく鴨の足の空にみしかくくるゝ比哉

網代

宇治川や網代の布のうちはへて水底しろくやとる月影
かゝり火によりてそあたる里の子の網代もるおを知人にして
川長のあはれ後の世あしろ木のくゐの八千度身をやくたかん

霰

いくたひか音は霰の玉たすき（すたれイ）思ふにちかふ雪けなるらん

曉更霰

有明の庭の木の葉に玉霰一つ二つそ落てさひしき

夕霰

いかなりし夕の雲のさえ分て雪ともみたれ霰ともちる

野霰

旅人のみのゝ中山くもりきて野上方に霰降なり

屋上霰

たか原や夜半のふせやに降霰明れは露と消るはゝ木々

鷹狩

ふる雪は袖のみかろしかり衣とはゆる鷹のはらふ羽風に

犬いるゝ谷のおとろは雪の上に尾を引鳥の跡やみえけん

鳥は猶おとろきふすや箸鷹のならすおふさのすゝの下道

神樂

鶴もれし松にも霜をしきなみにあらし吹夜の莚田の聲

聲々にみたれうたふにしるかりきこれやしつやの小菅成らん

雪

みもなれす所もしらぬ朝あけの雲間の雪やもろこしの山

遠方の入日の影にくれなゐのこそめの雪と見ゆる山哉

行雲に雪をめくらす姿をは見れともまよふ和歌の浦波

笠の雪つらゝの杖をつく松の老かたむきてたてる庭哉

いとまなきみほの杣人やすむらしかりやの雪に煙立なり

うつもるゝ眞柴やたゆる雪折の木をきりもちて出る山人

雪なれし瀧の上なるそなれ松しつく岩ほのたつる力に

つもりあへすみたるゝ雪に吹くもり時雨にかへる峯の松風

草も木も植し所を忘れは跡なき雪に殘る面影

遠山初雪

今朝そ見る山は浪間の外ならぬ興津しほあひに浮ふ淡雪

曉天雪

行人の曉雪をふむ音もまくらにさゆるみちのへの宿

薄暮雪

降しきて雪にあやうき呉竹の立なをる世の夕ともかな

雪似白雲

うき雲の空ふく風にうこかぬや岩れこりしゝ峯の白雪

海邊松雪

興津風雪に木末をあらふなりをよはぬ浪の遠き濱松

深雪

川上の雪そ一村くたりくるこや山人の宇治の柴舟

遠樹深雪

山松の梢の雪の下折をたな引かへすみれの白雲

殘鷹

いなくきに雪はならひて水寒きかり田を見れは鷹ひとり鳴

空にみつ霜よの鷹も鳴落て田中の杉に有明の月

鷹のぬる田中の竹の雪折におとろきさはく夕暮の聲

冬古寺
寺ふりてあらし吹よの霜なから木の葉の打もひゝく鐘哉
冬旅
冬川を夕渡りする火焼屋にたか宿とひて先そ立ぬる
袖さむし道ゆきふりの辻社はたきの後の杜のこからし
炭竈
峯の松枝さしおほふすみ竈のけふりそ結ふ雪の下露
風吹はけふりもすくにのほらぬやよこ山炭のしるし成らん
木をたちしをのゝ行衛か炭竈の煙吹きる山の嵐は
爐火
暁の灰にまきるゝ塵の火も山とやならんよもの炭竈
すさましや圍のうつみ火皆つきて灰もぬるまぬ暁の袖
佛名
契きや三世のさとりの母そはらその木の下の春にあへとは
早梅
降雪の木の間の月の笠にぬふ梅ならなくの冬の一花
歳暮
早川やゆく年なみもをしの毛のぬれぬを老の袂ともかな
あやうかりし世をうき橋にくれはてゝ夢のわたりに歸る年波
老人惜歳
暮行を身にとりとめてふりまさる老こそ年のかたみなりけれ

春巳卜隣
冬の夜の明るをまちてくる春に門の柳もまゆれかくらん
深夜
深にけり今夜はあかせ家々に春と冬とのあひやとりして
戀
初戀
露わけて思ひ入野の初小花いつしかよそにぬるゝ袖哉
下もえに燒としらすや夕まくれみそめか崎のあまの漁火
忍戀
思ふをしれは涙そ袖にもる身にも心を猶やへたてん
うき中を見しれるさまにいふ人もなきや歸りて忍ひそふらん
聞聲忍戀
宿とへはやかてやめつる物の音に我も音せて立そやすらふ
不洩思戀
世のうきに涙の見えはなしもせん思ひの色よ袖にあまるな
聞戀
誰そこの思ふあたりのきゝしれも猶過かたき道のへの宿
見戀
思ふとてさのみみるめはつゝめとも心のゆくをせく方そなき
我にうき君は朝日の影なれやさしむかはれぬ涙こほれて
初見戀

うらなれぬ人のかさしをみるふさに初しほかゝる秋の袖哉
見増戀
花の香も此世におはぬ色をみてかさなる袖のはろさめ〔マヽ〕
不逢戀
それをたにとふ事にせよ戀しなぬ身の息はいひしにも似す
馴不逢戀
よのつれの人に物いふよしなから思ふ心の色やみゆらん
詞和不逢戀
我そしくたのめし人のとのはゝなこやか下のよるの衾は
祈戀
あひ見すは忘んと祈る二かたに神も聞入すなるちきり哉
我神のしろしまてをやをさふらんつれなき人の祈る社は
契戀
先の世の契はありのすまひにや我思ふ人に我うかりけん〔古歟〕
互契戀
衣〱はたゝかりそめそもろともにさらぬ別の道におくれし
還媒戀
袖しほる露をつたへよおなし野のゆかりの原の草の夕風
待戀
月待と人にはいはし中々に其とのはそふりてしられん
をくらすよ曉露に立ぬれて待を別のあさちふの風

乍立待戀
あやしめん人にいふへき便かな今夜は月を立待にして
逢戀
行末もあらはなとかとあはぬはおしからぬ身を思ひなりぬる
人も又夢とたとらはたのめおけこよひの後にしらんうつゝを
あふ事そ聞き夜の夢月の色あらしの聲はれぬになせとも
別戀
衣々のちかき形見はれし床の涙もいまたあたゝかにして
草も木も面かけならぬ色そなきうき衣々の東空の道
夜ふかしと思はん露の心をもぬれ〱はつる道の篠原
歸戀
明ぬ夜の空をうらむる衣々にうたてや月のなに心なき
別路の袖の匂ひをうつしとる草木もつらし曉の露
從門歸戀
をのれのみ歸るもしらす葎生のさす門たゝく葛のうら風
別無書戀
別ちの袖にかけしを限にて跡みぬ文字の關の夕浪
不見書戀
さのみなとはかなき鳥の跡をたにみせぬ眞砂の身をくたく覧
見手跡戀
難波女かたくひとは見す水くきの心とはもあしてならぬに

返書戀
かへりきぬかきつる紙の結ひめもとかぬ氷を垂れしもうし
遇不逢戀
伴に見しその夜の月と幾廻りむなしき空に哀かくらん
露はらふ我袂とも蓬生の本の契は秋風そふく
夕暮そ心もしらぬあひみしは昔かたりの古郷の松
顯戀
遠さかる鹽干の石につく貝のかきこもるへき名さへかくれす
立名戀
しかりとて及はぬ雲に殘るかはうき名を空に龍の市人
とゝまらしはやくうきなは立水の流れての世の末をせくとも
近戀
ほのかなる聲きくはかりいひよれは又引たつる戸のかため哉
遠戀
おくよいかに春の霞も秋風もしら川までの雪の里人
尋戀
見し人のをしへし水のなかれより住宿近き松風そ吹
初尋緣戀
尋くる山路の雲も問かれぬゆかり消にし花の面影
隔河戀
行水に思ひのけふりくらへみよ遠近人の中のあさ川

切戀
さすか身におしき命のかけ物はあふにかへんを勝負にして
しみ〻かく人のとめてし枕香のこかろ〻胸になきあかしつ〻
誓戀
身なしれは袖ぬれつゝもふかき江に誓し神のみるめをそかる
稀戀
大井川あふ瀬をまれの御幸にて袖そ紅葉の淵となりぬる
僞戀
さま〳〵に憑めをきてし一とをもあはぬ心のうらそまさしき
いかゝみる昨日にかはることとくさの末葉の露の重き恨を
悅僞言戀
よりこぬは猶あた浪の聲なから心はなきぬ床の浦風
厭戀
友そかし壁のともし火夜な〳〵にそむけられても消ぬ命は
そむくとて雲にものらは待そみむ歸る夕の人のかたみは
見形厭戀
三室山おろちにつけしをたまきの末の契そたえてやみぬる
歸るなりぬるや磯耳のみるめにも及はぬ浪そかけてくやしき
悔戀
藻しほ火のくゆる煙もかひそなき吹なひかさぬうら風にして
絲戀

年ころもさらは夜かれをならはさて心のまゝに床はなれゆく
夢かとよ日頃うけ引手のうらをかへすはをそき心かはりは

俄變戀

飛鳥の照日をそふる影のまに雲のよそにも人そなりゆく

逢後變戀

草によせ木にもたとへぬ兼言の末吹かへす床の秋風

隱在所戀

雲となり雨となりにし山をたになをしへしまゝの形見とやみん

白地戀

いさしらす道行ふりの袖のかを中の衣になさん契りは

面影戀

思ひしれ我面かけの人の爲うかりしをたに君もわすれし

春戀

夕まくれそれとも見えし面影も霞むそ形見有明の月
梅か香もあかぬ別の袖ふれし人は昔の春の明ほの

夏戀

思ひつゝふすや涙の泉こそ清水のぬるき岩枕なれ

秋戀

契しは末葉の秋の露にたに霜置かはる庭の淺茅生

秋顯戀

秋そ立夏は人めもあしの葉にかくれし小屋の胸の煙は

冬戀

ひとりなと心とくらんあはぬよの涙にぬるむ袖の氷は

契歲暮戀

いそくなり末もとまらぬ年のをゝあはをによりて結ふ契りそ

朝戀

袖におち胸にそさはく立別叉さえわたる朝川の浪

晝戀

照る日をもうき中空にかけ捨てくもる契りの末の浮雲

夕戀

玉きはる夕にむかふ時過はむなしき戀の昔かたりを

夜戀

待にうく別につらきならひかは思ひも戀もふかき夜の月

不叶心戀

何とか此世に思ふまゝならんけにをはりに戀そそむかぬ

戀後世妨

秋の霜見えん植木の影にても君しまれかは身をやくたかん

閑居戀

はかなしと岩間の水の音信もきけは流れをつたふ面かけ
忘れはや人めはたゆる宿なから松も思はむ夕暮の空

旅戀

袖ぬれて旅寢の夢に君やこし我や行けん月そ宿れる

いく夜まて（とイ）うき面影の旅やつれ人にはなくてしたひきぬらん

草枕おもひおこせは古里の人もやこよひ旅寝なるらん

旅泊戀

夜もすからひとつ泊の友舟にみし面影をよする波哉

思・

うき中は立ましれとも身にかへて思ふ心もしらぬ市人

互思戀

とひとはん蓮の門をならへても恨あらはそさしもこもらん

等思兩人戀

我心かた引もせす小車のもろ輪なからにめくり逢てん

いつれをもかけて思ふは輕からてはかりのさほの引方もなし

片戀

興津舟かたほ心にまかせれは思ふうらにもよらぬ戀哉

思川たゝよふ舟のかたのりに身をしつめてや涙にひかれん

幼戀

よりあはん契とまてはかけさりきまたあけまきの年の思ひを

老戀

燒そむる思ひの薪くちはてゝ消ん夕のけふりをそまつ

徑年戀

よしさらは我としつもれなき（本ニ）もさすかふりぬと人を見るかと

久戀

ふりにけり人と二葉の老木まて待としきかは哀とやみん

舊衣（戀歟）

見るそうき其世にもあらぬ紙のかにしみの出ゆく文は破れて

忘戀

忘れけりわすれんと思ふ心あらは忘れまし物を忘れはてつゝ

見そしらぬ此身なからやあらぬ世に生れて人に面忘れする

難忘戀

ふして思ひおきつの濱の松はこて有明の月に殘る面影

恨

こかれてし舟も洲にゐる梶をたえ身を浦風も吹そよはれる

心から恨すてゝはいくたひか我身のうさの立歸るらん

此世にて猶も恨みをつくさすは人にうき身と又や生れん

うからすよ見す知ぬ世のよそ人になして思へは本の身にして

眞葛かはなにのうら葉もやすからぬ秋の野分は心にそ立つ

人傳恨戀

よそにのみなたみの蜑のよひつきに身を浦舟にこすと知せよ

恨身戀

世のうさも人のつらさも身の外にあらはそ更に思ひわかまし

恨前世戀

契なきこの世のまへに生れあふその世かたりも人やつたへし

絶戀

分すてゝ出にしまゝに春秋の草のみかはるやとのかよひち

ありとたにしられすかれぬ奥山の木葉にふれる雪の下草

出はやななかむる庭の呉竹にふるき思ひの家鳩の聲

たのめしは跡なき風のゆふは山見えては消る夢の浮雲

契りしはうきたる雲の山風に跡なき峯の松そつれなき

末とをき恨もふりてかよひこし跡こそ見えれ道芝の霜

互恨絶戀

つらき名のたつを小鹿の胸わけに成てかれゆく野への葛原

絶不知戀

契つる人の向後は天飛し朝の鳥の夕くれのあと

誓思絶戀

いつめ猶ちかひの海に梶をたえ渡らぬ船のよるへなき身は

寄月戀

獨みていむてふ月にむかへともうき身を捨るしるしたになし

思ひかれわさとむかへとかひそなきいむてふ月の物忘れして

戀すてふ人のうれへやおはさらん誰もなかむる月そつれなき

袖ぬれし人そ跡なきやすらひに出にし月の影はとへとも

見るもうき夕月夜かな月待と人にいふへき便たになし

寄風戀

人心ふきあへぬ風の過ぬまにうつろふ色そ草木にも似ぬ

露そちる人の心の秋に吹く風のやとりやわか身なるらん

忘れしの人のとの葉かれしより身はふる霜に秋風そ吹

寄雲戀

生駒山めに見ぬ方の浮雲に身を秋しのゝ里そしくるゝ

暮をまつ思ひや高くわきのほる雲となりてや日をかくすらん

身にそしむむなしき雲のちりはかりはらふたよりの床（秋イ）の松風

寄煙戀

戀しなは人そ煙と身をなさん胸にたてゝはいそかすもかな

猶たてんうき里人のむかひ火は忍ひけたれぬ宿の煙を

寄雨戀

風ませに雨降あれてさ夜深ぬ待へきにあらす獨かもねん

見し人の面影はこふ秋風に雲も幾たひ身に時雨るらん

寄山戀

玉鬘かけて戀めやほのみてしゆふかみ山のよそのうしろて

寄石戀

石はしる瀧なき山も打侘ぬへたつる花の霞はかりに

水上の石にさはるもまたれては終にあふむのなかれやはこぬ

寄原戀

尋ぬとも草の原をは何かせんいきてあるよのうちに（明巌）向すは

それならぬ露を袂に分きても身にそしめちか原ノ秋風

寄海戀

戀の山身は九つをこえくとも人こそ八の海をへたてめ

つゐになと舟よせさらん外の海のあら立浪に風はなすとも

寄橋戀

ほとゝをく思ひをかけてゐる玉や夜とにわたる雲のかけ橋
ふるき世のなからもかくそ我中に絶しをつくれ夢の浮橋
岩橋の夜めにも人やしるからん契はかけし我そ見にくき

寄井戀

つるへ繩心ふる井にをよはすは誰汲しらんおもふ水底

寄草戀

末まては結ふともなき契かなまた初草の枕かはして
ぬるかうちの涙の水のうき草は枕によりて夢さそふらん
今はとて身をもかくさす眞菅よき笠のかりてのとけぬ契に
水まさる川邊の茅原露霜にあはぬ根かるゝ浪はこえつゝ
思川つゐに瀬によるなひき藻を見よかし浪にそむきやはする

寄竹戀

とふ人の涙そめをく紫の竹の一本宿に露けき

寄木戀

との葉の色を見せてもみなれ木のめつらしけなき中や厭はん
をよひなき思ひや高き梢にも生ふるなけきの種と成けん
結ふらん露もかはらてやとり木のならへる枝の契りともかな
ありし世の契を誰にかしは木の落葉時雨の降事そうき
思ふ事色にいつとも人とはゝ花物いはぬかけやたのまん

槇の戸もうつろふ色に明そゆく人の心の花の手まくら
をくれ風花さくら戸のやすらひに出行袖のあかぬ匂を
人心うつろふ花に遠さかるうき身や風の姿なるらん
はらへ風ゆるさぬ中のゆかりうきはゝその森のおらきとのは

寄鳥戀

數ならぬ深山の鳥の跡なれや名もしらすして文をたに見す
鳴鳥のはれうちきするかひの子のかへる名つらき曉の空
人のためあふ夜の鳥はわするともわさとなかせて心見まほし
別よと槇の戸ならぬ羽をたゝく鳥の初音に急くさへうし
夜もやすくれぬかひあらし人心猶あら鷹のすへはおるとも

寄獸戀

ほとゝをく賴む夕のなかはうし犬の臥たけなかくなる日も
見てもしれ空行月の兎たに光にかよふちきりある世を
戀に身を行てもすてんこゝになと虎伏野へのなき世なるらん
とかめつる犬も手かひになる計夜ころたゝすむ宿な厭ひそ
我そかる人の心のいかりゐに猶ますらおかむかふ思ひを

寄虫戀

文の中に生れはつみしとの葉を心にしみのすみ所とて
かくるともいかゝ憑まん軒ふりて板まもあはぬさゝかにの糸

寄玉戀

さらは身を煙となさぬ玉殿にをきてや戀のはてをみてまし

寄糸戀

結ふてふ神のたゝりの糸たえてつゐにあはをによらて亂れん

寄衣戀

さ夜衣中にありしも昔にてかへすも見えぬ夢のかよひち

寄紐戀

つらしともさのみ思ひ入紐〔マヽ〕のとけにし後の心つよさを

寄帯戀

色つゐにまさる方にや引とらんこなたかなたに二あひの帯

月のゆく南の風にとく帯の一すちのころ雲もうらめし

寄衾戀

巻かへす衾の袖よをしの毛のぬれぬ思ひのあらはある世に

寄鏡戀

手のうちにかくすはかりの鏡にも憂き身にあまる影そ曇らぬ

ます鏡かたみぬうらにゐる鳥の音に立てすとも戀や渡らん

寄琴戀

心ひけ手なるゝ琴のゝほり音も中のをたかく思ひかけすや

寄櫛戀

黒髪はむすほゝるともいむ櫛のなけの契に心かけめや

寄枕戀

うらめしく枕に繪かくけた物やあふ夜の夢の道をたちけん

寄莚戀

すか莚こよひは人のれし方に跡なつかしみ我そかたよる

ひとり我しきてそ頼むあや莚くるよたえすは玉の緒にせん

寄書戀

學ふをは物うきまゝに巻よせてまとにも思ふ文そよまるゝ

寄火戀

心から胸に思ひの火や出ん木をもむほとに身をもやすめす

寄塵戀

よもしらし人をみゐめに入塵のくもる涙にまきらはしつる

寄心戀

戀すてふ心のあたのせめくるになとあらそはぬ我身なるらん

寄繪戀

かたみとや難波の春のあして繪もみしかき筆の跡殘すらん

心染紙の墨つき筆つかひ人のかたちもみるにたかはし

寄棹戀

みこし路や雪のしるしにさす棹のふかき契は末そみしかき

寄海士戀

海となる涙のそこのため息はうかはぬ海士につるゝわさかは

寄鐘戀

聞かれもこゑ〳〵たえてはつせ川袖におちくる都〔瀧カ〕とそなる

寄車戀

手にとれはそなたより吹風車廻あふへきしるしとそ見ん

待ふけぬ今は蓮の丸ねにも床あまるへきしちの上かな
うけひかぬ人の心のけはしさは車をくたく道よりもうし

雑

天

あふきみよむなしき空を麓にて高き所はこゝろなりけり

夕陽映島

淡路かた繪島の松の木間より入日を出す興津鹽風

星

ふけ嵐曉出る星清くはれたるみねの松の一もと

夕

明日しらぬ身のうき時を夕暮のならひになして又や過さん

夜

あかしかねうちぬる袖の氷ゆへよゝの夢ちは結ひたえつる

風

入とみし雲やは殘る嶺となき夕の鳥の跡のやまかせ

薄暮嵐

四方に散紅葉を我と吹ませて夕の色に染あらしかな

雲

空にたに風のまゝなる雲そある人にしたかふ世をはそむかし
よもしらし風のやとりは尋ぬとも夕の雲のかへるところを

曉雲

しはしたに月なかくしそ山かつらかけぬ峯とて明ぬよはかは

暮山雲

日をかされすゝむる雲の入山に我ゆふ暮そ遠さかり行

海路雲

やすむらんうきたる雲を帆にあけて風の濟行興津舟人

薄暮煙

河上やくろゝゆらはの村雲をひとつになして立けふり哉

雨

夜の雨心のそこにとをる哉ふりにし人や袖ぬらすらん

橋雨

苫ふかきまへのたなはしをともせて嵐もいそく雨のあし哉

窓雨

くらき夜の窓うつ雨に我こゝろしつめはうかふ世々の古を

山

明わたる遠山眉のかた亂れ一の峯や雲かくすらん

曉山

明ゆくか有明の月のほそくかく遠山眉をみたれ横雲

暮山

思ひ入る心の色も暮とに遠さかるなり山はうこかて

谷

坂くたる民のあさ衣吹かへし谷よりのほる木曾の松風

杣

杣山に生まかゝる木の殘みて身のよしあしを思ひ定めぬ

瀧

せきやらて袖に落やそれならん我身も世にそふるの瀧波

瀧邊鳥

むす苔のみとりに落てたつ鳥の鳴れしたはぬ瀧の岩波

河

湊出る沖中川の水すちはうしほもけたす流てそすむ

長河似帶

たれか着ふもとの雲のうへ衣小川の石の帶そめくれる

河筏

末せはみ廣瀨にうかふ筏士の一もやゐつゝおとす山河

海

とひ向〔明[illegible]〕はぬ舟路いくかそわたの原人の住島人のなき磯

老か身もかゝる時あれなみのしはのふるとみえて浦風もなし

名所浦

わかの浦の芦へのたつと老はてゝ雲井のひなに聲そ及はぬ

湖

みたれにしかふこの糸か桑はらの成けんにほの海の白波

橋

跡そなきたえしなからの橋守にそれも昔や人わたしけん

行人過橋

見すや人夢の渡りの浮をこの世に盡〔マヽ〕て過ぬ日もなし

旅人渡橋

旅人はわたりましろもしろかりき立朝市のまへのたな橋

野

しとゝなく冬野のむはら實にたえて寒きさ枝の霜を吹風

原

いく廻りみし世の人を尋ぬともあはし淺茅かはらの夕風

關

こえみはやあつまつくしのはてに行道のなかはの白河の關

白波の立田をなをそ關の鳥空音や人のしわさ成らん

寺

遠世の祇の園生の四のかれ聞つたへても夢や覺さん

色かへぬ秋をやなけしもろこしの法も高野の松の生するゑ

蕭寺

墨染の袖ふりはへて嶺たかき夕の寺に歸るくもかな

晩鐘聲幽

たえまなく老ては耳になる鐘のこゑをもよそになす夕哉

古鄉

こゝよりや故鄉なりきかし原の宮のあれにし世々の初は

古都夜雨

夜もすから聲をそはこふ世々の人雲と成にし古郷の雨

水郷

みこし路や駒のあし立雪まてや氷にかよふしほつ舟人

ならふとてめの子も舟をよくそさす廻れる川の島の里人

水郷煙

たてなから槇の島人いとふらんさらせる布にかゝる煙を

遠村

何をかはうき夕くれの色ならん煙なみせそ遠の山里

山家

花のさき葉の落るまて春秋をしる計なる山の奥哉

しるらめやひとりむかひて物いはぬ山の岩木にはつる心は

山家嵐

靜にて山の嵐も吹ぬ日やもとの浮世の宿となるらん

夕嵐あらしいまはの山や思ふ住こし物を夢の明ほの

山家風

山をたに忘れて住むは〔イ无め歟〕吹たひにきけともきかぬ軒の松風

山家水

山ふかみ水かけ入る宿に叉爪木をなかすあらしともかな

山當杉

住そめし山の垣ほにさし杉の陰となるまて宿そふり行

山亭人稀

山にすむ鳥獸をみてそしる人のかたちはうけかたき世を

田家

かり庵に弓立をきて人もなし山田もるをやよる歸りこん

苅を田の落ほあらそふ里の子に狩むら鳥のおもかけそたつ

田家煙細

小山田のかりほの薄ひく糸も煙にのこるしつのをたまき

田家老翁

鹿もみて驚くらめや山田もる霜の翁は聲たてすとも

田里

なるこ繩むすへるす戸の明たてに門田の末は鳥さはくなり

閑居

身をかくす宿ともたのむ空木のむなし心をはらふ山風

閑居曉

住あかし山ならすとも心から身をしつかにと思ふやとりは

峯に入るほしとやみまし曉の雲に背るやとのともし火

閑居友

なきかけをふたりや問む水の音松の嵐の友たのこさは

林下幽閑

木實おち木のめたつをも未みす林の陰の庵にすめとも

閑中燈〔明歟〕

夜やふかき誰に向まし灯の殘りおほくも覺るゆめ哉

山樹高低
尾上なる松ともみえす深みとりかたふく枝は根をかくすまて
嶺桂
出るまの峯のかつらを月の中に今夜はなして見るも程なし
松
ひとりたつ浪やのとけき世の中をはなれ小島の松の心は
山松
柴の戸にきかは山風うかれとて松やはたてる我すめはこそ
遠山松
峯高きみとりの空につく墨は松なりけりな夕くれの山
嶺上松
廻りきて高根の松に出る月あすの夕やよそにならはん
檐松
さひしさを軒端の山の松風にまかせはつれは吹としもなし
杉
松の戸のさし入にたてる杉むらに山おく深き栖をそしる
檜
杣山やなをく立檜の老木まてあらん物とは身をも思はす
杜柏
柏木の散し葉守もいつくにて杜のみとりの春を待らん
桐
一葉より秋の嵐にちりはてし梢のきりや名を殘すらん
濱楸
浦風に楸ちりしく濱つゝら下はふ秋の末そかれゆく
合歡
軒近く老のねふりを殘す木も身のうき事を夢にやはみん
竹
かくてみん垣ほの遠の根はひきて庭の中なる竹の一本
窓竹
呉竹のもとつさ枝を切すてゝ又窓あかき紙のうち哉
くれ竹を馬になしつるいにしへを思ふも戀し窓の北風
岡篠
篠分る嵐をとへは岡のへの露にしほれぬ松の聲かな
麥門冬
つゐに我か身を山菅のかりの世をいつまてよそに思亂れん
江菅
君をこそ頼みますけのみくりなは身をまかせてや江に引らん（は脱歟）
萍
風にみし柳の花のかたよりに落ても水になひくうき萍
路芝
學ひみん大和ことの葉我としりてとふへきにあらぬ道の芝草
路苔

右になし左になして遠くきぬ苔の上ゆくのへの小河を

苔の下に名をうつまんとうれしきは道しらぬ身の行末の空

浪洗石苔

岩ほにも誰かはされんあら磯の浪に手にまく苔のさ莚

鳥

哀にも鳥のしつまる林かな夕とゝろきの里はのこりて

水に入雲にまさりて苔ふかき夕の谷に鳥の一聲

鶴

うちむれて立行田鶴の跡さらひひとりすにゐる浦の捨草

遙なる洲にゐる鶴も頼むらん幕なはなけの河上の松

鶴となしてを遠くもろこしの月をも見はや秋つしま鶴

鶏

月をいまのこして見はや鳴鳥の尾上の里の松そ明ゆく

鵲

里くもる片野の雨はきほひきて天の川洲に鵲の聲

鷺

冬枯の林の中の松の葉に雪をさはかす鷺の一つれ

村雨のふる江をよそに飛さきの跡まて白きおもたかの花

鵜

朝河や水の煙に鳥つとりうは玉の夜の色そ消行

獣

これもうし雨くらき夜の道のへに親なしにして系の子鳴聲

床出し親をやしたふ木の本の草の原からつるゝゐの子は

猿

猿さけふ深山の岩根雲とちて梢にさやく椎柴の雨

つなかるゝ手かひの猿のまなひたに庭の教はある世ならすや

馬

いはへつゝむかふ北風ふかすとも馬やせぬへきこしのなか道

龜

川波のよとむふしきに住龜の叉淵に入岸の人をと

別

行末のしらぬ別も宿出し袖にかさなる峰の横雲

餞別問夜

いはひつゝすてに夜ふかく旅立ぬこれそまことの馬の餞

旅

馬いはひ鶏なきて旅人の出たつ聲そ里にあまれる

山人のひろふ爪木に成ぬへし今夜折しく峯の椎柴

誰ならん物へたてたる相やとり聞しにゝたる人のこゑ／＼

都にも見るらんものを枕より枕にかけよ夢のうきはし

宿そもるあすの山ちの雨つゝみぬれすは有とも猶やくつれん

旅宿

ぬる床に吹まく雲を枕にてのほる麓の嵐をそきく

かりねする宿の主もみすしらてあすの道とふあたへをそきく

旅宿曉

したひてや朝立きなん古里の見えこし夢を跡にとゝめは

旅行

おもはしなたとへは行もとゝまるも此世は旅の空のうき雲

遠くきて今夜いかなる宿からむひなひし里そ見しにまされる

旅行友

出てこし故里人やしたふらん袖ふきかへす道の山風

深山ちやあらそひつるゝ雲鳥の友も別るゝ夕くれの野邊

野宿

露はらふ野邊の下荻折ふせて夢路そ更にあらき濱風

行客待人

道のへや廻る日影をあふきみてたてる旅人友か待らん

羇旅

羽をよはみ眞砂に落る鳥の子のひなの長濱あしもつかれて

旅泊

くる舟に火をあはすとやむしあけの松の煙も暮て見ゆらん

鹽風に心はなきぬ舟にこそおろすいかりのなはの浦浪

今夜身は藻にすむ虫そあま小船苫こす波も心くたけて

旅泊待風

あひ思ふ中にそしらぬ浦風のかはるを待は舟路なりけり

眺望

落かゝる入日のしたの山のはをこえて待とる興津白波

夕日さす都の南雲はれて水と山とのかきりをそ見る

たかしやま夕こえのほるこなたより見えぬ浪きく嵜の浦風

淡路かたあまのすさひか筆の海のうかふ繪島の松の村立

夕眺望

西の海や日影そ落る夕波の高きを近き山のはにして

羇中眺望

ことゝひてこよひ旅ねの山見れはくれぬ高根に雲そ先ぬる(ゐ歟)

夕遠望

海山はたゝ面影そみし方の暮行まゝにめちはたゆれと

雲隔遠望

目にも見ぬ心のゆくはかへされす水なき遠の雲のしからみ

晴後遠望

行末の里をあまたに別れけりはるゝ麓の雲の下みち

海路

出しまは奥の小島と見し雲の下になるまて舟はきにけり

漕ちかふ沖つ舟人事とふをこたへんとすれは跡の白波

山ちかく今朝歳ぬらし海原や遠き波路の横雲の松

わたの原けさ追風に舟出して濱ち八百日を一日とそこし

海路日暮

猶もふけ追ての綱手ときおろし夕波おしくとまる舟人

海路山

うしほ風沖の遠山こす波を見おろすはかり舟そたゆたふ

海路遠

興津風眞帆にまかちを鳥舟の天飛はかりわたる浪哉

海路友

風よりもあらき舟子かとの葉にしらぬ浪路を任せてそ行く

舟

あらき浪風心せよ舟板のうすき命のへたてはかりを

渡舟

流行舟の綱手をなをこして引とめらるゝ早川のきし

河舟

舟つなく堤のうへの山風に川音くれて行人もなし

望遠帆

のころとも見えぬ入日をほに上て綱手さやけき興津舟人

遠浦歸帆

釣さほのいとうちなひけ興津風なきたる浦に歸る舟人

述懐

老のなみさのみかさなる和歌の浦に猶とゝまらて出る舟哉

いかはかり子あらは我にそむかまし親のいさめし道ならぬ道

此世にはほまれある名も何かせん花に春、風月に浮雲

人心更らになをらん世そかたき上におきてす下におそれす

ふる雨のはるゝ日もなき浦の蜑のほこらしき世もなき我身哉

あきらけき昔そ鏡あふきみん人こそ人をくらくなすとも

四方の海に皆なのりそをかりもちて民は一人もなき世成けり

世をはへんさかふる人をうらやますおとろへ行を悲ますして

いそけ人いつれの道を學ふとも老は心のつきてかひなし

たくひなく我思ふ事の二人とも世にあるへくは何かうからん

誰かくて住よかるらんとゝへはひとり〳〵のためにうき世を

足柄の木に切かけし舟木とや漕出る世もなくて朽らん

獨述懐

いつまてそ老の波こす身をつくししはし此世の江には立とも

曉述懐

世にのこる我つれなさをくらふれは有明の月は宵の山のは

寄風述懐

いつかたになひくも道にそむかれは風のまゝなる和歌の浦松

老述懐

なからふる身をそ恨むる末の世に生れてしかも老はつるまて

曉遠情

ね覺してかきりしられす行心昔しのふの山路いくへそ

心行思ひの跡に成にけり夜や明ぬらんもろこしの岸

夕幽思

鐘もたえ風も音せぬ夕暮のこゝろにやとをかる心哉

憂喜同夢

うかふせもしつむも夢のわたり川結ひ定めぬ波のうたかた

胸消是非

難波人よしあし火のみたく小屋の胸の煙をけつ嵐哉

心靜延壽

うきなから年はへにけり慰むる心をゆらく玉の緒にして

遊子出山

月もしれ出すはあらんかつら木の嶺の聖も世の人の爲

浮侶暮歸

岩のほる苔の衣の玉たすき夕露いとふ山のこからし

上陽人

消ねたゝ身は光なき闇の中にくらき雨聞まとの灯

陵園妾

たをやかにつらき心もうつろはて挿むなしき閨の白菊

李夫人

なにかせん煙の中の面影の消てむなしき後の思ひは

楊貴妃

鳥となり枝ともならむことのはは星のあふ夜や契さためし、

王昭君

涙のみさきたちけりな四の緒の聲にひかるゝ駒もかへらて

船中遊女

待人は蓬か島も尋見ぬ身を浮船に老となりつゝ

岸上傀儡

あさき江の契としろも袖ぬれぬ岸の上野の草のまくらは

釣漁

海士人の浪にしつむる釣はりの一はうかふ三ケ月のかけ

島漁客

いさり火を跡のすさきに燒すてゝ光をくれと歸るつり舟

浮世をははなれ小島に身はあれと針なき釣にかけし玉の緒

樵夫

上めくみ下たのしめる世の聲を聞はきこりのうたふにもあり

行すりの小篠かやはらこゑさはき柴うこきくる山の下道

樵路日暮

道もせにならひ立かな山人の手につく杖に柴をやすめて

雲間より入日をかくる眞柴もてたかぬ光にかへる山人

市商客

我もつにをもき荷かけ駄をひつれて朝市いそく村の里人

行路市

世の中は市のかりやのたゝしはし誰やはとまる夕暮の空

草の原市に分きてたつ民に朝露ゆつる野への旅人

温泉

ありま山夜ふかき里はもよはれと出湯の方に朝けをそ見る

晴後遠水

一くもりふゝき捨つる末の野にしつきを見れは雪の川橋

寄水雑

何かせん魚なき水は清くとも此世に友の問こさりせは

懐舊

面影に見し世のありて何かせん忘れぬ夢をはらへ松風

身はうきてあやうき淵を忘るゝやわらは心のまゝのつき橋

うかりしも情ありしも古をを忍ふやひとり涙なるらん

竹の馬のりならへにし人はみな忘れぬ夢のよそにさきたつ

いつもそひいつも有るへき事とみし人にも世にも遠く離れて

ましろはん人こそなけれ老ぬるをむかしいとひし心ならひに

のこすなよ昔の筆の海よりはあれこそまされ水くきの跡

懐舊催涙

まきほさし昔の人や涙とも成て袂にいまかゝるらん

往事

かすかにも思ひいつるはをはりの昔のさきそしらて戀しき

往事如夢

ふして見ぬ夢のひま行駒とてや驚く時のなくて過けん

孤夢

跡とめて覺るか夢の中空にひとりの雲の殘るをそ見る

夢談古人

月そとふ歎をすまの海に入渚にみえし夢の名殘を

朝觀無常

これも猶あさけの風の末の露もとあらの櫻一花もなし

釋教水

をのつからあへる時哉やとれとは水も思はす月もたつねす

神祇

石清水水底きよき高根より影をうつすや箱崎の松

まもるへき神の誠は有なから人のいつはる世そしるしなき

〔右正徹千首以圖書寮本校合〕

# 續群書類從卷第三百八十一

和歌部十六

## 宗尊親王三百首

〔右宗尊親王三百首者正編卷第百七十九所收也仍
從省略〕

## 宗尊親王三百六十首

文永二年潤四月三百六十首歌

春

けさみれは雪氣にきえし雲もなくなきたる空に春はきにけり
朝霞たなひきそむるあしひきの山のかひより春やたつらん
風わたる窓のくれ竹うちなひき春やきぬらし鶯のなく
わか身よにふりなはつらし百千鳥さえつる春を送りむかへて
鶯のこゝろはしらす世の中にものうかるれはわれのみそなく
君か爲はつれのけふの野へに出てゝにとる松は千世の數かも
あさかすみふかくや峯をへたつらむ山端にけてみえぬ春かな
雪きえしやけふをみれはあさ霞たつのとはやく春めきにけり
高島やかとりの沖のかすむ日にみをのかちのは若菜つむらし
みわたせは雲間の草も萠いてゝこせのはる野に若菜つむ也
春も猶みゆきふるといふ故郷のよしのゝ山は寒くそあるらし
ふる程はふゆにかはれる色もなしつもりはてぬや春のあは雪
にほはすはわきそかれまし梅の花さけるをかへのはるの淡雪
むめの花さけるをみれはふる郷のならのあすかの昔おもほゆ
梅のはないまもさかりと津のくにのなにはの里に匂ふはる風
盛そとつけはやられとふ人をまたすしもあらぬ宿の梅かえ
色もかもしる人のみる花ならはよそにやきかむ春のむめかえ

春はさそならひそともこのころの月よゝいたく霞ますもかな
あかなくにあけぬる空か久かたのあまの戸かすむ春の夜の月
こゝろありてみる人いかに春の夜の明ほのかすむまつか浦島
たちのほるけふりもさひし難波人あし火たくやの春の明ほの
そことなき風のたよりの花の香にあくかれそむる春の明ほの
あさ朗かすみの空にゆく鴈もきえてものおもふ音をや啼らん
過かてにゆくかり金やとまらましをはなか末の春もありせは
こしかたにかへるはかたき世中をいかにならひて鴈の行らん
さためなきうきよの空に別れてはいつ逢みむと鴈のゆくらん
ありてよはものうき物を今さらに何をひつらん野へのさ蕨
いそのかみふるき宮古の春さめにみとりさひしき道のしは草
衣手のなきのかはへの川やなき春雨ふりてもえにけらしも
今も猶花かとそおもふいつはりにこりぬ心はみれのしら雲
心をはへたてぬものをやま櫻やへにかさなる雲とみゆらむ
伊駒山はなをも人やいとふらむへたつる中の雲にまかへて
雲とのみ山のさくらの名にたつはよしのゝ花やはしめ成けむ
たつれこぬ人こそなけれ芳野山よのうきときか花のさかりは
よしの山消あへぬ雪とみし程にやかてまとの花に成ぬる
春かすみたちなはとこそおもひしになをゆきみする山櫻かな
櫻はなしろくさけるにものもうすちるてふをは何のゆへそも
しめはへてもる人もなきふるさとの花ふみちらし鶯そなく
人はこすうき身は春もしらぬよにたかためをしむ宿の櫻そ
身のうさも花のまきれに忘られて春を此世のなさけとそみる
みるからにものおもひなき花そともいひはてられぬ春の山風
さくら花あるをみるたにあかぬよにわかれなつけそ春の山風
あたにちる軒はのさくらま近くてつらきをみよと春かせそ吹
さらてたにうしとみる世に散花のなけきくはゝる春風そふく
常盤なるをのへのまつもある物を何とて花のちりはしめけむ
ちる花のわかれもしらてあか月を何に似たりとおもひける哉
あたにちるはなこそあらめみる人の泪もゝろき春のくれかな
なかれゆく花たにとまれ吉野河よしや春こそはやくすくとも
いたつらに春をもとめす山吹の花のみかゝる井手のしからみ
たれしかもきぬにするらし杜若あさゝは小野に今さかり也
あめのうちにしぬて折てふ藤代のみさかをこえて春や行らん
惜むともくれさらめやとなくさめてつれなく春に別れぬる哉
今さらに何かゝなしと思ふらむかきりあるよの春のわかれを

夏

わすられぬ今はあたとやかへつくら春のかたみの花そめの袖
諸かつらかけてそこふる故郷に廻りあふひをいつとしられは
をしほ山まつにつれなき郭公神代もかくやれをしのひけむ
しほかまのまかきの島のほとゝきすまつに戀しき初音なくそ
郭公やとりとるてふたちはなのこしまかさきにはつれ啼也

いはき山ゆふ越きてやほとゝきすこぬみのはまに初音鳴らむ
神なひの山ほとゝきす聲たてゝ妻にこふといふ五月きにけり
郭公すめはすむとやしら雲のたえすたなひく峯に啼くらん
何ゆへにねとはしられとほとゝきす鳴をうき身の類とそきく
谷川の水せきかけてまかれふくきひの山田はさなへとる也
袖のかを大宮人やとゝめけむくにの宮こに匂ふたち花
いましはや空曇りあひて古里のあしもやすめぬ五月きぬらし
さらてたにはれまやみえし妹背山へたつる雲の五月雨の比
さみたれはみかみの山に雲とちて岩なみたかしやすの河水
白波の岩こすほともたかせなるのとせの河の五月雨のころ
いにしへの面影みせてあまくたるほしのをかへにとふ螢かな
月みてはやすくあけぬとあきたにもうらみしものを短夜の空
獨のみあはれとやみむわか宿にまきしなてしこ花さきにけり
蟬のなくさやまかすその松蔭はかせの凉しくふかぬ日もなし
夏もいまたくれぬに秋のこゑやとはおもふものから峰の松風

秋

いつとなく物おもふ袖になく露の草はにかゝる秋はきにけり
夕されはやゝうらかなしたかまとのゝへはふくすの秋の初風
織女のあふよもちかしあまの河やそのふなつの秋のはつかせ
天河あふせまれなるみなかみのさためてけりな秋の一夜は
荻のはに風そたよりの音たてゝものおもふ秋のしるへ成ける
いかてかはたえてもきかむ世中の秋にあきそふ荻のうは風
更る夜の荻のは風にねさめしてなみたのいたくこほれぬる哉
いかにせん露ははらはてあき風のふくにつけてもぬるゝ袂を
わか袖は秋の草はの何ならしあはれひまなくをけるつゆかな
人ならぬいは木の山になく露も心あれはや秋をしるらん
たかために玉しけとてかやへ葎しけれる庭に露のをくらむ
いましはや咲にけらしなさお鹿のあさふすをのゝ秋はきの花
後みむとわかしめゆひし淺茅生のをのゝ秋はき散やしぬらむ
こはき原色とりそむる秋風のみにしむよはゝいそれかれつる
あたの名はさもたゝはたて女郎花多かるのへに宿やからまし
淺茅生のをのゝかるかやたれゆへに亂れんとてか秋風のふく
秋風は寒くしふきぬ少女子かゆきあひのわせも今やからまし
をく露もあまりにけりな鴈なきて寒きあしたの小野のしの原
この夕かりかねきこゆあしひきの山のこのはも色まさるらし
小倉山みねのあき風ふかぬ日はあれにも鹿のなかぬ夜はなし
よそにたゝ思ひしよりもさおしかのなく山里の秋そさひしき
たれもまた音にたてぬへき夕暮をなきてなつけそ小男鹿の聲
しかのなくみかさの山は霧こめてふるさとさひし秋の夕くれ
あさち原ねをなく虫のおもひまてみにしられたる秋のゆふ暮
あはれにもおほかたにこそ思ひしかいまはうき身の秋の夕霧
月影をみまれみすまれ秋といへはめつらしけなく落る涙か

風ふけはまねくをはなの露をちてそてにたまらぬ秋の月かけ
夜さむなるまかきの竹の秋かせにをきふしたとり月をみる哉
さかこえてみる人あれやたつのなくあへの田面の秋の夜の月
月みれはすむわれさへにあくかれてたひ心ちする秋の山さと
たひねしてたれかみるらむ白波のあらき濱への秋の夜の月
もしほやく煙もたてぬ磯のうへに妻木おりしき月をみるかな
いせの海士のほさぬ袂にやとりきてしほなれにける秋の月哉
やとしもて今こそみつれ立田河空ゆく月も水くゝるとは
とゝめてもみるかひあらし天の川月になかけそ雲のしからみ
みるたひに袖こそぬるれ世中のうきをそへよと月はすましを
みれはたゝ泪そおつるとにかくにものはおもはぬ秋の夜の月
なきぬらす床のなみたのあきの露はらはゝ袖に月やわかれん
ひとりみてあはれなみたそこほれぬる更ゆく空の秋の夜の月
秋はたゝひとりのためになかきよときゝしまゝなる有明の月
長月のありあけの月にねさめしてのこれる秋の哀をそしる
あまの原とわたる月のなかきよに遠かた人や衣うつらん
おふくまの河かせさむみみちのくのかとりをとめは衣打らし
夜半にふくしまゝつかせや寒からしきなをの里に衣うつ也
花すゝきまねくまかきの秋風にまたそてみせてさけるしら菊
露になくおはなか本のきり〳〵すたか手枕のなみたそふらん
かけろふのをのゝ露しも夜寒にてあるかなきかに虫そ侘なる
しけかりし虫のなくねも秋くれて一むらすゝきうら枯にけり
さおしかの妻とふ山はもみちしてからぬわさ田に秋風そふく
逢坂やしくるゝ秋の關こえてあはつのもりの紅葉をそみる
かたみにもとめてみる（け歟）へきもみち葉を風にまかする秋の暮哉
たつぬへき方こそなかれあとみえぬ葛のうへより秋や行らん

冬

旅ねするはにふのこやのさむき夜に床さへぬれてふる時雨哉
木枯の吹たゝよはすうき雲のけふもしくれてくるゝ空かな
はれくもりしくるゝ空の定なくさもたのまれぬ世にもふる哉
あさな〳〵壁そすくなき木からしの杜の紅葉のちるに任せて
冬されは山風さえてたかまつのゝうへの草は霜枯にけり
淺茅生のしもにうつろふ冬の月つゆに契りやむすへかへけむ
ますけよきそかの河原の河風に千鳥しはなくふけぬこのよは
みなと川夕しほこして吹かせのさむけくもあるか千とり啼也
しらなみのさはく入江の友千鳥よにすみかたき音をや鳴らん
道のくの河風さむみ日はくれてねにゆくをしの聲のさひしさ
冬の池にすむ鴨とりのうきてのみよにたゝよふや我身成らん
こえてゆく人もあらしなさのゝをかふりつむ雪の寒き朝けは
これをたに花とみよとや奥山のかけの朽木にふれるしら雪
日數ふる山のしら雪ふみわけてさらにやとはんみよしのゝ里
杣人のまさきのつなのいたつらにひきもとゝめぬ年の暮かな

## 戀

いつみ川ゆくせのなみの程にのみきゝこし人に戀やわたらむ
人しれす戀はしぬともとませ川ゐてこす浪の音にたてめや
したにのみ思へはくるし奥山のいはかき沼のみこもりにして
うらにたくすくもの烟みてもしれ君を思ひのしたこかるとは
吉野河いはとかしはにこす浪のかけてつれなき人そこひつゝ
雪のうちにもみちぬ松の何なれやつゐにつれなき人の心は
あはておもふ人のつらさのかた糸もてぬきたる玉は泪成けり
駿河なるふしのたかねに降雪の時しもわかすわかこふらくは
はかなくもいつまてよそに思ひけむ我身に増る戀のつらさを
忍はむとさしもおもひし心にもあらて泪の色に出ぬる
君にこひおもふ心のいちしろくいちしの花の色にみゆるかも
こぬまてもなくさむものを僞のなき世なりとは誰かいひけむ
あはれまたたかまことをとたのませてうき僞の人またすらん
いつはりをうきにはなさし頼みけるこゝろそつらき秋の夕暮
たのめてもまたいつはりのことのはにたえせぬ露は泪なりけり
たのめをきし有明の比の宵の間は月まつとたにいふ方そなき
いたつらに更ぬるものか君やこむわれやゆかむの夜半の月影
誰ゆへか月をもみるとなくさめてあはれまつよの更にける哉
こぬ人を猶やまたましいましはと侘にしかとも秋の夕くれ
みるとなきやみのうつゝの契こそ夢にまさらぬつらさ成けれ
山井のむすふちきりのあさみこそあはて別るゝ袖はひつらめ
きぬ／＼にをき別れゆくとしあれはまつなけかるゝ鳥の聲哉
衣／＼にわかれてのちの戀しくはみてもしのはむ有明の月
恨みしなのちは忘れぬかたみそといひしにかなふあり明の月
わすれめやいまはといひてをきいてゝそのよの月の有明の空
のちせ山後にといひし一ことや中／＼つらきたのみ成らむ
わきもこかうはもの腰の引はへてなかくとこそは契をきしか
何そこのおもひのつなの絶もせてひくてあまたの人に戀らん
夏引の手ひきの糸のわくらはにくるとみえしも昔なりけり
山こえてわかるゝ鴈の音をそなくいや遠さかる人にこふとて
をはたゝのいたゝの橋のいたつらに絶にし中を戀やわたらん
かたみとて何おもかけの殘るらん枯にしものをまのゝかや原

## 雜

すへらきのみことかしこみ今もまた聖の代々のあとをみる哉
かくしこそ風静にて四方の海の波のさはきもなき世なりけれ
常陸なる名さかの浦の朝なきにあまの少女らたまもかるみゆ
ちぬの海の沖津しら浪立かへり濱へのこ松みれとあかぬかも
さゝ浪やしかのからさきうらさひてあれたる宮こ松風そふく
昔よりいくそのよゝに成ぬらむとしへてたてる三輪の神すき
あはれしる人いかはかりなかむらむ我たにあかぬ月と花とを
山里をとふ人あらはたきのおと松のあらしにわふとこたへよ

音つるゝものからうたて山里のさひしさそへて松かせそふく
月まちていさこえゆかむ夕やみは道たと〳〵しあしからの山
玉しきの都のやとにいもをゝきてこゝろ空なりたひゆく我は
あはれ也あひやとりするたひ人もよゝの契にあらぬものかは
あかなくに宮こわかるゝ逢さかのこの下つゆは泪なりけり
わすれめや夕つけとりにねをそへてなく〳〵こえし逢坂の關
いかゝせん身はいそけとも越やらぬとゝせあまりの逢坂の關
故郷のこゝろよはくもしのはれてみやことゝけはぬるゝ袖哉
いまは我泪のたまをひろひをきてこほれる冬の瀧にかさなむ
かへりこぬ昔そつらきなきこふるなみたの河は水まされとも
われそうき雪のかはらの埋木もよにうかふへき時はまつらむ
いほしさす神なひ山のとかの木のとかもなき身は沈ますも哉
いかゝせんあはれ〔ゝら歟〕心のなをき木にまかれる枝を人のもとむる
今の世はつらゝおりなる山路のすくにゆくみやまよひはて南
わか身さてうきよをわたる河ふれのかいの雫やなみた成らん
世中は風にまかせてゆく船のいつくをつゐのとまりともなし
水莖のをかのみなとを行舟のあともとゝめぬよにこそ有けれ
あしまゆく湊の小舟とにかくにさはりおほかる世中のうさ
よのうさに心もいとゝ亂れ蘆のよしといふをはなき身えけり
難波潟かりつむ蘆のつかのまもうからぬふしはなき世えけり
いやましにぬるゝ袖哉蘆へよりみちくる鹽のからきうき世は

からくのみやくしほけふり世中に立はのほらて物思ふわれそ
思ふをありそのわたりはふ葛のとにもかくにも恨めしのよや
風わたる沼のあしまにゐる鷺の毛をのみふくはこの世成けり
侘ぬれはくまのすむてふしはせ山しはしの程も恐ろ　〔[illegible]〕のよや
こかくれて身は數ならぬあしひきの山たち花のわれや何なり
苔ふかきまきのつき橋さのみやは埋もれなから世を渡るへき
をりたちてさゝめかるてふ賤男か身のうきにのみ袖は濡つゝ
みちのくのけふの細布それよりもせはきは人のこゝろ成けり
世中は有明までに見るつきのこゝろほそくも成まさりつゝ
うきも又かくてはてしとおもふこそ定なきよのたのみ成けれ
行末そ猶たのまるゝいくよしもあらしわか身と思ひなせとも
賤しきもありと聞しをいかにかくさかりもしらぬ我身なゑ覽
あはれなとをのか物からときのまも憑むにかたき心なるらん
しつみゆくいまこそおもへ昔せしわかゝれをはかなかり皃
世中のうきもわか身のこゝろからいとはぬまての迷なりけり
厭はむといふも中々淺茅生のをのにしめゆふよにこそ有けれ
さてもよをいとふこゝろはをろかなる泪よ袖に何こほるらん
いとはんと思ふこゝろは有なからなきになしてもすくす比哉
憂事を思はんよりはあちきなくたゝいとふへきこの世成けり
いとへとやさてもあられし世中のうきをしけく成まさるらん
いかにせむ身はそむくとも悲しさの慰むへくもあらぬ浮世を

よのうさは身にそふものと知なから猶いそかるゝ山の奥かな

いさしらすわかあらましのゆく末はいつれの山のしはの庵そ

してゝの山誰かはこえむいきうしといひてもかへる習なりせは

はかなさは驚くほとの人のよをいつまてよその夢とのみゝむ

とのはにひかりをそへよ玉つしまこの道まもる神ならは神

〔右宗尊親王三百六十首據柳葉和歌集新補之〕

# 續群書類從卷第三百八十二

和歌部十七

## 正治二年院御百首

作者

御製
三宮
後京極攝政
內大臣
中納言信廣
入道三位俊成法名釋阿
正三位經家
左近權少將從四位上定家
從四位下家隆
前大僧正慈圓
前齋院
御室
入道左大臣尊圓
大納言忠良
前中納言隆房
正三位季經
大藏卿從四位上範光
從四位下隆信
入道少將生蓮號師光從五位上
寂蓮
讃岐二條院女房
宜秋門院女房
小侍從
丹後

## 正治二年百首和歌上

詠百首和歌

御製

春二十首

いつしかとかすめる空ものとかにて行末遠し今朝の初春
春きても猶大空は風さえてふるす戀しき鶯の聲
子の日する今日春日野に雪ふれは松に花咲心地こそすれ
霜かれし野邊のけしきも春くれはみとりにうつる雪の下草
梅か枝はまた春たゝす雪のうちに匂ひはかりは風にしらせて
むかしよりいひしは是か夕かすみかすめる空のおほろなる月
なかむれは雲路につゝく霞かなゆきけの空の春の明ほの

うすくこくそのゝ小蝶はたはふれてかすめる空に飛まかふ哉
なにとなく物あはれなる二月に雨そほふれる夕暮のそら
秋とのみたれおもひけんはる霞かすめる空の暮かゝるほと
さらにまた都の花をみにそゆくしかの山路に立も離て
春雨に野邊のかけろふ見えわかす暮ゆく空のたと／＼しさに
吹まよふよしのゝ山のはる風はにほひをそふる雪けなりけり
はるの輌はな散る里をきて見れは風になみよる庭の淡雪
櫻花ちりのまかひに日は暮ぬ家路も遠し志賀の山越
ちる花を吹來るまゝにこの春はかせそうれしきみよしのゝ里
吉野山木すゑさひしく成ぬともなをやすらはん花のあたりは
こやの池のあやめにましる杜若はなゆへ人にしられぬるかな
すきかてに井手のわたりを見渡せはいはぬ色なる花の夕はへ
明ほのをなに哀とも思ひけん春くるゝ日のにしの山かけ

夏十五首

花になれし袂そけふはおしまるゝ匂をこめし名殘と思へは
くるかたへ春しかへらは此比やあつまに花の盛なるらん
夜もすから宿のこすゑに郭公またしきほとの聲を待哉
卯の花のかけなかりせは郭公空にやけふの初音きかまし
菖蒲草まくらにゆへは今宵こそ我のみ旅のこゝちのみして
夏の夜の夢路にきなく子規さめても聲は猶のこりつゝ
子規そらかきくもる夏の雨におもはせかほのよひのひと聲
夏の月秋にかはらすすめる夜は影さへすゝし蟬の羽衣
夏の夜の月もなかめつ我やとのいはもる水を結ひすさひて
さみたれは猶晴やらて郭公ほのかに名のる明かたの聲
五月雨にふしみの里は水こえて軒にかはつの聲きこゆなり
むら雲は猶なるかみの空なからゆふ日にかよふさゝかにの露
夏草のくさの葉かくれゆく螢さはへの水に秋もとをからす
なにとなく過ゆく夏のおしきかな花を見すてし春ならねとも
御祓する川瀬に風の涼しきはこよひをこめて秋やたつらん

秋二十首

いつしかと荻の上葉は音信て袖にしらるゝ秋のはつかせ
竹の葉を吹うら返す秋かせに露のたまちるゆふ暮の空
萩原やあかつき野邊の露しけみわくるたもとにしらぬ花すり
うす雲のたゝよふ空の月かけはさやけきよりも哀なりけり
あさくらやきのまろとのにすむ月の光はなのる心地こそすれ
まはらなる槇の板やに影もりて手にとるはかりすめる夜の月
大方の秋のなさけの荻の葉にいかにせよとて風なひくらん
うす霧のあかしの浦は晴やらてさたかにみえす沖の釣舟
くまなしや朝夕霧の晴すともかつらの里の秋の月かけ
秋の月霧のまかきにすみなれてかけなつかしきみ山への里
橘のこしまかさきの月かけをなかめやわたす宇治の橋守
月影をなみちはるかになかむれはあま 筈やは山のはもなし

夕暮はさひしき物かよもすから月をなかめてうちれなんほと
須磨のうらのあまのいさり火ほのかにて猶有明の光をそまつ
山風に汀のなみはたかくともなを霧ふかし宇治の河かせ
明暮の空もたとらぬ初かりは春の雲路や忘れさるらん
きり／＼すうらむるころも庭の萩の末こす風も秋更にけり
さほ山のそめし緑やふかゝらんときはの森は猶もみちせて
身にしみて物哀なるためし哉むら雲まよふ秋過るころ

冬十五首

ゆく秋をおしむ心し深ければけふもかへらし冬の袂に
あきくるゝかれの響はすか原や伏見のさとの冬のあかつき
しらきくの昨日は露と見しほとにむすほゝれたる今朝の初霜
神な月しくるゝのみか我やとのならのうは葉に風かはる也
立田山もみちの雨の降まゝにあらしの音は松にのこして
ちりはつる龍田の山のもみち葉を木末に返す木枯の風
竹の葉はおほろ月よに風寒てむら／＼こほる庭のおもかけ
霜かれの籬のきくに雪ふれはなをはつ花の心地こそすれ
さらに又うすき衣にかけさえて夏をやこふるをのゝすみやき
冬さむみひらのたかねに月さえて細浪こほるしかの辛崎
雪つもる有明の月は影さえてまかきの竹のうら緑なる
思ふにも哀なるへきとたちかなかたのゝ原のゆきくれの空
今朝見れは三輪の杉むらうつもれて雪の梢やしるし成らむ
なかむれは春ならねとも霞けり雪をろふれるとをきのゝ里
此比のときはの山はかひもなしえたにも葉にも雪しつもりて
しほ風やさむけかるらん冬の夜のふけゐのうらに千鳥鳴なり
降つもる雪は朝日にむら消てくもにしられぬ軒の雨かな
けふまてはなをふる年の空なから夕暮かたはうちかすみつゝ

戀十首

我戀はしのたの森の忍へとも袖の雫にあらはれにけり
月夜にはこぬ人まつといとひても曇るさへ社れられさりけれ
おもひかれられぬ物を何とまたまつ吹風のおとろかすらん
此暮とたのめし人はまてとこすはつかの月のさしのほるまて
白菊に人の心そしられけるうつろひにけり霜もをきあへす
往古に立かへりけん心さへおもひしらるゝ待よひの空
身をつめはいとひし人そ哀なるいこまの山の雪を見るにも
さりともとまちし月日もいたつらに頼めし程もさて過にけり
住よしの岸におふなりたつれみんつれなき人をこひ忘れ草
まちわふるさよのね覺の床にさへ猶うらめしきかねの音かな

羇旅五首

是まても旅のね覺は哀なりしつかをのみもこゝろ／＼に
いはた河たにの雲まにむらきえてとゝむる駒の聲もほのかに
はる／＼とさかしき岑を分よきてなとなし河をけふみつる哉
何となく名殘そおしきなきのはやかさしていつる明方の空

ひくまつはまた雲深く立にけりあけゆく鐘はなにはわたりに

山家五首

山里の柴のあみ戸に影もりてほのかにかすむ春の夜の月
雪ふかしそこともしらぬ山寺に遙にひゝくかれ(れい集)の音かな
秋の月きりのまかきにすみなれてかけ(は集)なつかしきみ山への里
物とにさひしきつとの住居哉まかきになるゝ嶺のしら雲
なくさめに煙はかりはたえれともさひしき物を冬の住家は

鳥五首

春くれはみとりの空になくたつのなかぬの浦に友さそふなり
しろきさきひとりはれし(の集)の聲すなりゆるきの森の暮方の空
結ひをきし雲雀の床も草枯て顯れわたるむさしのゝ原
風をいたみこ島か崎にすむ鷗はみえても見えす浪のなみまに
しら山の松の木かけにかくろへてやすらにすめるらいの鳥哉

祝五首

萬代の末もはるかにみゆるかなみもすそ河のはるの明ほの
いはし水たえぬ流の夏の月たもとのかけも昔おほえて
みかさ山みれの小松にしろき哉千とせの秋の末もはるかに
冬くれはよもの梢もさひしきにちよを顯すすみよしの松
千早振日よしの影ものとかにて波おさまれるよもの海哉

## 詠百首和歌

三宮惟明親王

春

朝日さすみれの白雪うちとけて風ものとけき千世の初春
千年ともかきらし物を子日して萬代までものへの小松は
分て色のふかくみゆるや煙たつむろのやしまの霞成らん
なかむれは須磨のうら路の春霞あかしにつたふ明ほのゝ空
鶯のなみたの氷うちとけてふるすなからや春を知らん
常よりも身にしむ物は梅か枝の花よりちらす鶯の聲
しろしらすおなし心に野へに出て昨日も今日も若菜をそ摘
梅か香はをのか立枝にあくかれておらぬ袖にもやとりぬる哉
月のもる軒端の梅の花さかり折手にかほる春の淡ゆき
いつくより花の匂ひをさそひきてさかぬ梢も風かほるらん
身にしめてやそうち人はかへれとも花に匂ひは猶増りけり
よし野山あらしや花を渡るらん木すゑにかほる春の夜の月
花さそふあらしに春の空さえて枝よりつもる庭の白ゆき
散つもる庭のはなをも見るへきにいつち嵐の猶さそふらむ
櫻花ちる木の下の旅ねには春をかたしく心地こそすれ
鴈金のかへる名殘に思ふかなこしちの人の秋のこゝろを
おほつかな草たつ程もいかならん霞みこめたるおきのやけ原
春といへはあはれおほかる詠かなあまのかこ山明ほのゝ空
暮てゆく跡たに見えぬ春なれはしたふ心もかひなかりけり
今はとて暮ゆく春の古郷に花ちるやとゝならんとすらん

夏

ぬきやらて花の袂にやすらへはいとふににたる衣かへかな
君か代の神の恵にあふひ草かさす契の萬代までに
聞たひに身にそしみける郭公いかなる色の聲にか有らん
まつ人をいかにせよとて郭公のかさつきも猶忍ふらん
菖蒲かる沼の入江になく蛙おしみかほなる聲にも有哉
萠いつる心地こそすれあやめ草末葉を殘す五月雨の比
なかむれは庭のさゆりに水こえて五月雨深き宿の夕暮
夕つくひいろかとすれは夏の夜のやかて明ゆく山の端の空
夏草に野中のいほはかこはれてわけこぬ程はしる人そなき
吹風になのか匂をたくへてそはな橘は人さそひける
かせ渡るたそかれときに匂ひきてはな橘に名乘かほなる
夏山のこのした露を名殘にてやかて晴ゆく夕立のそら
夏のよは明るほとなき槇の戸をまたて水鷄のなにたゝくらん
かせわたる松の木かけの夕すゝみまたきをとなふ秋の一聲
ならかしは末葉に夏や成ぬらん木かけ涼しき蜩の聲

秋

いつしかと物の哀をさそひきて心にやとす秋のはつ風
琴のねにかよふ松風引かへて秋のしらへにけさはなるかな
天の川水かけ草のうちなひきいその枕に秋風そふく
別ぬる名殘をおしむ七夕のなみたよりをくけさの白露
分てゆく心にとまる色やさはまそての外の萩か花すり
風わたるまくすか原のかるかやはうらみられてや思ひ亂るゝ
風の音をなれも哀とおもひてやまつ萩の葉の露こほるらん
風わたるあさちか原の夕露をうはゝにかけてうつら鳴なり
なかめやるをちのたかれの朝霧は麓よりこそ立のほりけれ
かりいほの秋の哀をのれのみかきあつめたる鴫のはねかき
あふ坂の杉間もりくる月ゆへにおふちに見ゆるかひの黒駒
故郷のみかきかはらの月みれはむかしのとそ偲にたつ
あらし吹さやかた山に雲消て月かけたゝむせとの白浪
み山への松の木すゑを渡るなりあらしにやとすさほしかの聲
あまの川雲のしからみ風晴てよわたる月の影のさやけさ
衣うつきぬたの音をしるへにておきぬの里を尋ねつる哉
ちきりをはこゝぬかとに結ひ置てやへさく菊の花そたえぬる
朝毎に山路の菊にをく露は花にひかれていく千代かへし
山のはに秋をさそひて入ぬれは名殘おほかる夕つくひかな
いかにせん秋のかたみとなかむへき草葉の露も霜となりなは

冬

草の庵に露の情をとゝめ置ていつち時雨の過て行らん
獨ねのやとに音する村時雨もらぬに袖をぬらしつる哉
春よりも心あるかな津の國のなにはわたりの冬の明ほの
木葉ちる深山のおくのかよひちは雪より先にうつもれにけり

もみち散四方の木すゑはした晴て松に曇れる冬の夜の月
をきならす霜のまに／＼きこゆなりおのへの鐘の明方の空
朽にけるまやのまきふきひまを荒みあつめぬ窓も雪積りけり
水鳥のをのか夜とこのうす氷羽かせよりこそ結ひ初けれ
冬されは深山の里の夕煙たえぬにつけてさひしかりけり
浦ふれて千鳥の聲もきこえけりなかめわひぬる磯（こゑイ）の枕に
月かけに千鳥妻よふ明かたの哀たちそふ浪の上かな
汀よりむすふ氷やとゝむらんよせてかへらぬしかの浦浪
つらゝゐる岩間の水は音絶てまかふかたなき嶺の松かせ
網代木により来る色はひとつにてとまらぬひをや宇治の川波
とし暮て今宵計やあしかきのま近き春の隔なるらん

戀

いかにせむ逢坂山をふみまかひもとの戀ちにかへるなけきを
あふ事のむなしき空の浮雲は身をしる雨のたより成けり
我戀は神にいのれるひたち帯の結ふかことを頼むはかりそ
つれもなき君にもつらき人もかな思ひしりなは我をとふやと
逢ことはなたのしほやの白水郎人のからきは戀の心成けり
あはぬよのさのみ積るをいかにせむ枕の塵は拂ひてもれぬ
涙にはとふのすかこも朽はてゝあらはやならふあけて待へき
引かされいつかうらなくあかすへき夜の衣を返し／＼て
きぬ／＼の別れしほとを思ふよりかされぬ袖も打しほれけり
あふとは夢になりにし床の上になみたはかりはうつゝ成けり

羇旅

みせはやな磯の松かせ音さえてかたしく袖にこほる涙を
いはれふむ山のたつきも夕されはしはすり衣打しめりつゝ
泪とも露とも袖を分てましかゝる旅ねのたくひ有やは
みちしはや朝をく露を打はらひぬれ／＼きぬるたひ衣哉
草枕結ひ初つる夕よりおもひこそやれ行末の露

山家

秋山の岑の木すゑをつたひきてやとの軒はもましら鳴なり
たつれくる人のしるへになるはかり煙はたえしみ山へのさと
我やとに深山のすそをかこひ入て庭にそ鹿の聲をなしつる
すきにける一むら雨の名殘ゆへ露のかすそふ深草の里
哀なる人はとひこぬ柴の戸に絶すをとする嶺のまつ風

鳥

秋の田のほなみにすたくむら雀なるこの音に立さはくなり
冬枯の楢にきゐるてりましこ紅葉にかへるよそめなりけり
ともなくて逢にきたる山鳥はかゝみを見てそ鳴はしめける
風をいたみ田中の畔のやふかくれ日かけの方にしとゝ鳴なり
こやの池におりゐる鴨の一つかひたかぬく沓のすかた成らん

祝

君かへんやをよろつ代の行末を朝日のかけやさして知へき

幾千代とかそへもやらぬ君か代のたくひにみやる天の星哉
萬代と山はよはひてたに川の水は千年の色そみえける
なかむれはあまつみそらに月晴て兼ても見ゆる萬代の影
千世ふへきはこやの山のとこ松をたのむ心そ色も替らぬ

前齋院式子内親王 後白川院皇女

春

嶺の雪もまたふる年の空なからかたへかすめる春の通路
山ふかみはるとも知らぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪のたま水
雪きえてうらめつらしき初草のはつかに野邊も春めきにけり
にほの海やかすみの內に漕舟のまほにも春のけしきなる哉
足引の山の端かすむ明ほのに谷よりいつる鳥の一聲
なかめやる霞の末は白雲のたなひく山のあけほのゝ空
袖の上にかきねの梅はをとつれて枕に消ゆるうたゝねの夢
なかめつるけふは昔になりぬとも軒端の梅は我を忘るな
いま櫻咲ぬと見えて薄くもり春にかすめるよのけしき哉
まつほとの心の中にさく花をつゐに吉野へうつしつるかな
岑の雲麓のゆきにうつもれていつれを花とみよしのゝ里
高砂のおのへの櫻たつぬれは都のにしき幾重かすみぬ
とふ人もおらてをかへれ鶯のはかせもつらきやとの櫻を
かすみゐるたかまの山のしら雲は花かあらぬかかへる旅人
夢のうちもうつろふ花に風吹てしつ心なき春のうたゝね
今朝みれは宿の木すゑに風過てしられぬ雪のいくへともなく
今はたゝかせをもいはし吉野河岩こす花にしからみもかな
花は散てその色となくなかむれはむなしき空に春雨そふる
水くきの跡もとまらす見ゆる哉なみと雲とに消る雁金
なきとめぬ春をうらむる鶯のなみたなるらし枝にかゝれる

夏

さくら色の衣にもまたわかるゝに春を殘せるやとの藤かな（なみイ）
まつ里を分てやもらす郭公うの花かけの忍ひねの聲
ほとゝきすなきつる雲をかたみにてやかてなかむる有明の空
聲はして雲路にむせふ子規なみたやそゝくよひの村雨
子規よこ雲かすむ山の端の有明の月になをそかたらふ
水くらき岩まにまかふ夏虫のともしけちてもよをあかす哉
五月雨の雲はひとつにとち果てぬきみたれつる軒の玉水
往古を花たちはなにまかすれは軒のしのふに風通ふなり
かへりこぬむかしを今と思ひねの夢のまくらに匂ふたち花
まくす原うら風なるゝ夏の夜は秋たちそむる蟬の羽衣
凉しやと風の便りを尋ぬれはしけみになひく野邊のさゆり葉
さよふかみ岩もる水の音さえてすゝしくなりぬうたゝねの床
池さむきはすのうき葉に露はゐぬ野邊に色なる玉や敷らん
月の色も秋近しとやさよ更てまかきの荻の靡かすらん
秋風とかりにやつくる夕暮の雲近きまて行螢かな

秋

うたゝねの朝けの風にかはるなりならす扇の秋の初かせ
なかむれは木のまうつろふ夕附夜やゝけしきたつ秋の空哉
日くらしの聲もつきぬる山陰にまたおとろかす入相のかね
あともなき庭のあさちにむすほゝれ露の底なる松虫の聲
我かとのいなはの風におとろけは霧のあなたにはつ鴈の聲
よせかへる浪の花すり亂れつゝしとろにうつすまのゝうら萩
白露の色とる木々はをそけれと萩の下葉そ秋をしりける
秋といへは物をそ思ふ山の端にいさよふ雲のゆふ暮の空
はな薄また露ふかくほに出てなかめしと思ふ秋のさかりを
かり衣みたれにけらし梓弓ひくまの野邊の萩の下つゆ
萩のうへに鴈のなみたのをく露はこほりにけりな月に結ひて
なかめわひぬ秋より外の宿もかな野にも山にも月やすむらん
更にけり山の端近く月さえてとをちの里に衣うつ聲
故郷はむくらの軒もうら枯てよなよなはるゝ月のかけ哉
とけてねぬ袖さへ色に出れとや露吹むすふ峰の木からし
しろきかな淺茅色付庭のおもに人めかるへき冬のちかさは
秋の色はまかきにうとく成ゆけと枕になるゝねやの月影
あさちはらはつ霜結ふ長月の有明の空におもひ消つゝ
桐の葉もふみ分かたく成にけりかならす人をまつとなけれと
思へともこよひはかりの秋の空ふけゆく雲にうち時雨つゝ

冬

神無月みむろの山の山颪にくれなゐくゝる龍田河かな
木すゑには殘る錦もとまりけり庭こそ秋の色はたちけれ
見るまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江の汀うす氷りつゝ
時雨つゝよもの紅葉はふりはてゝあられそ落る庭のこのは（かけイ）に
あれくらす冬の空哉かきくもりみそれよこきり風きほひつゝ
芦かものはらひもあへぬ霜の上にくたけてかゝるうす氷かな
霰ふるのちのしの原ふしわひてさらに都を夢にたにみす
さむしろの夜半の衣手さえさえて初雪しろし岡のへの松
むれてたつ空も雪けに寒くれて氷のねやに鴛そ鳴なる
身にしむは庭火のかけもさえのほるしも夜の星の明方の空
あまつかせ氷をわたる冬の夜のをとめの袖をみかく月かけ
日數ふる雪けにまさる炭かまのけふりもさひし大原の里
和田の原ふかくや冬の成ぬらん氷そつなくあまの釣舟
人とはぬ都のほかの雪のうちも春はとなりに近つきにけり
をのつからなからへは猶いくたひか老をむかへて哀と思はん

戀

しろへせよ跡なき浪に漕舟のゆくゑもしらぬやへのしほ風
かくとたにいはかき沼の身を盡ししる人なみにくつる袖哉
夢にてもみゆらん物を嘆きつゝうちぬる宵の袖のけしきは
我戀はしる人もなしせくとこの泪もらすなつけのを枕

しらせはや姿の池の花かつみかつみるまゝに袖そしほるゝ
わきもこか玉もの裾によるよるとはなしにほさぬ袖哉
あふ事はとをつの濱のいはつゝしいはてや朽むそむる心は
我袖はかりにもひめや紅のあさはののらにかゝる夕つゆ
あふ事はけふ松か枝の手向草いくよしほるゝ袖とかはしる
まち出てもいかになかめんわするなといひし計の有明の空

羇旅

都にてゆきまはつかに萌出し草ひきむすふさよの中山
あら磯の玉もの床にかりねしてわれから袖をぬらしつる哉
都人おきつこしまのはまひさし久しく成ぬ浪路隔て
ゆくするは今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕結はん
松かれのをしまか礒のさゝ枕いたくなぬれそあまの袖かは

山家

我宿はつま木こりゆく山かつのしは〳〵通ふ跡はかりして
いまはわれまつの柱の杉の庵にとふへき物を苔ふかき袖
山の端はみねの木葉にきおひつゝ雲よりおろすさほ鹿の聲
柴の戸を人こそとはれあし引の山よりいつる月はまつみつ
山里は嶺にたえせぬ松のこゑこの葉にしのふ谷の下水

鳥

曉のゆふつけ鳥そあはれなるなかきねふりをおもふ泪に
なく鶴のおもふ心はしられとも夜の聲こそ身にはしみけれ

身のうさを思ひくたけはしのゝめの霧にむせふ鴫の羽かき
はかなしや風に漂ふ浪の上に鳰のうきすのさてもよをふる
うちはらひをのゝ淺茅にかる草のしけみか末にうつら立なる

祝

君かへん千代まつ風に吹そへて竹もしらふる聲かよふなり
あめのしためくむ草木のめもはるに限もしらぬ御代の末々
いくとせのいく萬代か君か代に雪月花のともをまちけむ
かめのをの岩ねか上にゐるたつも心してける水の色かな
君か代はちくまの河のさゝれ石の苔むす岩となり盡すまて

## 詠百首和歌

御室守覺法親王

春

とし暮し名殘の雪やおしからん跡たにつけて春はきにけり
岩間より春をもらして行水のなみにたゝよふうす氷かな
霞しくひかたにあさる難波めは心あてにや礒なつむらん
春の野に霞を分て入ぬとはあさなくきしのはかせにそしる
鶯の聲に光やそひぬらん月にうたひて谷を出るなり
かをとむるたよりにきなけ鶯のすきうかるへき梅の立枝そ
つく〳〵と春雨そゝく軒端よりしのふつたひにおつる玉水
忘るなよ秋こし雁の今はとてかへる山路におもひたつとも
春の色もさかすはいかゝ知そめん梅よりさきに藤なかりけり

なかめてもいかにかたらん梅かえの花に月もる春の明ほの
木のもとに花待かれて詠れはおもかけよりそ咲はしめける
さくら咲岑立はなれゆく雲はせめても花におもひわけとや
さらぬたにおしき名殘をいかに又花よりもろき雪とみゆらん
岩かれにましはおりしき明にけりよしのゝ奥の花の下臥
けふもまたあかぬなかめに暮はてぬ哀たちうき花の影哉
土産に花をつゝみてかへるさは匂ひそ袖にもれて散ぬる
ちりまかふ花のふゝきにかきくれて空まてかほるしかの山越
今そしる田子のうら藤咲にけり音せてなみはよする物かは
君か代のはま松かえの藤の花これさへたれかむすひかけゝん
我もおしむ道になこその關も有を思ひもしらすかへる春哉

夏

今朝も猶青葉かくれにちりやらて春の名殘そ花に成ける
五月やみ卯の花影のしらむよりおりたかへたる雪の曙
五月雨に淀の川長舟出して（ツイ）わけしまこもは浪の下草
さてもなをいつかはるへき日數のみふるのゝ里の五月雨の空
思ふ事いはての森の子規つゐにはこゑも色に出にけり
郭公うの花山のあかすして空にしられぬ月になくなり
まちくらすしるしはこれか郭公雲のはたてに一聲そする
待夜たに露まとろまてならひにきかたらひあかす山郭公
郭公きそへと植し橘におりえてきなく聲にほふなり
いはふれてみなは玉ちる夏川に月こそこほれ浪や音せぬ
いつのまに岑うつりして過ぬらんひとむら雨の夕立の雲
しはつ山風吹すさふならの葉にたえ／＼殘る日くらしの聲
明ゆけはもゆる螢もかけきえて煙を水に殘すなりけり
奥まてもいさ分いらんと山たにはかくれ凉し松の下道
手にむすふ井手の玉水底澄てみえける物を秋の面影

秋

夕され秋の哀をさきたてゝ朝風わたるをのゝ篠原
おほかたの露はかりにやぬれぬらん今夜はかはくあまの羽衣
これのみとおしむもくるし我宿の一むら荻に秋風そふく
心をは色と聲とにわけとめつ萩に鹿なく宮城野の原
千種まて花にうつろふ上露はちるにそもとの色はみえける
木枯に淺茅かたよるけしきより虫の音きかん暮そまたるゝ
絕／＼にうす雲のこるかた山のすそのゝ暮に鶉なくなり
梢ふく嵐の音を時雨にて下もみちする松も有けり
千里まてさえ行月はをとはんあとなき雪はをのか光か
おもかけに須磨も明石もさそひきて心そ月に浦つたひける
またもこん紅葉の山の木間より色に秋ある月も出けり
よはにさへ浦のしほ貝ひろへとや曇りも波に月はすむらん
更ゆけは鹿に一夜の宿かりて月をかたしくをのゝ草ふし
澄月にぬるゝ袂を我ゆへの泪とみてやかけやとすらん

なをさりに有かなきかのかけ見えてみくさに曇る山の井の月

かくとたにまたよもしらし奥山のいはかけまゆみ色付にけり

あはち舟霧かくれ漕さほのうたの聲計こそせと渡りけれ

をとしるし鹿の通路これなれや霧のあなたに木末ふむなり

草かくれ庭に馴くる鹿の音に人め稀なるほとをしるかな

秋はいぬおりしも空に月はなしなにの名殘をいかに詠めん

冬

かれ〳〵のきくにや冬を知にけん下ゆく水もうはこほりけり

今朝見れは龍田かはらの川おろし誘ふ紅葉の波そおりける

時のまにくもるかとこそ詠めつれ思ひもあへぬ初時雨かな

かくれぬと見れはたえまに影もりて月もしくるゝ村雲の空

うら枯て後さへ色そかはりぬるはつ霜しろし谷のかけ草

たちぬるゝ山の雫も音絶て槇の下葉にたるひしにけり

さえわたる梢はかりや冬ならん雪に春めくしかの花その

冬こもり谷の戸たゝく音寒て雪吹おろす峰の松風

なにはには人あし火たくやにふる雪のうつみ殘すは煙成けり

岩ねよりしかのみつたふ嶺の雪は跡ありとても通ふへきかは

きさかたや礒やにつもる雪みれは波の下にそあまはすみける

誰ゆへの池のつらゝの床ならんみなるゝ鳥はよかれしにけり

あらし吹としまか崎の入しほに友なし千鳥月になくなり

昔おもふよるのね覺の床さえて泪にこほる袖の上かな

過ぬるかとしの通路いかならんひまゆく駒は跡たにもなし

戀

いはゝしの中の絕まはさもあらはあれ聞かはや夜の契計を

逢はやなよそなからのみ吉野のみくまかすけの假寢なり共

年へてはつらき心やかはるとてゆく末のみそ今はまたるゝ

戀わひぬつれなき人にあふ道のしるへに通へしのゝをすゝき

思ひねのさよの枕にあひ見れはうつゝに增る夢の通路

たかふなよ契をきてしことの葉にかゝる命のたえもこそすれ

なをさりに空たのめしてこぬ人をまつよそ戀の限なりける

戀しなはまたも此世にめくりきて二たひ君をよそにたにみん

なに事もふりゆく身にはわすれ草戀はかりこそ露もかはられ

通ひこし野中の清水かきたえてくまぬにしもそ袖はぬれける

羇旅

跡もなくやへたつ雲に道分てなみたしらるゝさやの中山

わひつゝもかくて幾夜か過ぬらん假寢ならはぬいなしきの里

をかやしくひらのあらのゝ露けきに心まてやはしほれ果へき

明かたに去とも今は成ぬらんやとるみ山は鳥の音もせす

いそまくらぬるにいとひし鹽風に月かけよする松かうら島

山家

のかれこし山路はかりになかむれはいとふ都はふもと成けり

折〳〵の哀しるへき山里にこゝろなき身そすみうかりける

谷かけの柴のけふりにしられけり思ひもかけぬ家居有とは
山ふかくなるゝ心のいかに又雲よりおくにやともとむらん
岩そゝくこゑよりやかておとろけは夢あらひやむ谷の下水

鳥

諸人をはくゝむちかひ顯れて鷲こそ峯の名にはおひぬれ
たのしみやたからの池に深からん玉もにあそふ鴨のむら鳥
いさきよく蓮ののりをうつしてそはとも硯の水をそへける
なかきよの夢さめよとやにはつ鳥明ゆく空を人につくらむ
あひかたき三の寶のみなをしも聲も惜ます鳥の鳴らん

祝

月かけにひらくるはしの花よりや惠の露はよもに散らん
さゝれ石の巖とならん行末をはこやの山そかれてみせける
あまくたる神は君をそ照すらん玉くしの葉のときはかきはに
二千代をかされてゆつれ君を祈る小松の里のつるの毛衣
雲とのみいなはゝみえてたか宿もうるほひ渡るあめの下哉

## 秋日詠百首應　製和歌

左大臣正二位臣藤原良經上

春

久堅の雲井に春の立ぬれは空にそかすむあまのかく山
よしの山をしも雪のふる里に松の葉しろき春の明ほの
はるはなをあさまのたけの空さえてくもる煙は雪け成けり
かすか野の草のはつかに雪消てまたうらわかき鶯の聲
宮古人野原にいたく白妙の袖もみとりに若菜をそ摘
梅の花うすくれなゐにさきしよりかすみ色つく春の山風
氷ゐしいけの鴛鳥うち羽吹たまもの床にさゝ浪そたつ
霜枯のこやのやへふきふきかへて芦の若葉に春風そふく
から衣すそ野のきゝすうらむなり妻もこもらぬ荻のやけ原
ときはなる山のいはねにむす苔の染ぬみとりに春雨そふる
春はまたいかにとはましつの國のいくたのおくの明ほのゝ空
長閑なる春のひかりに松しまやをしまのあまも袖やほすらん
淸みかた心にせきはなかりけりおほろ月夜のかすむ波路に
かへる鴈いまはの心あり明に月と花との名こそおしけれ
枝かはす花さきぬれは青柳の稍にかゝる瀧のしら糸
はるの池の汀の櫻咲ぬれはくもらぬ水にうつるしら雲
やすらはてれなん物かは山の端にいさよふ月を花に待つゝ
けふも又とはて暮ぬる古郷の花も雪とや今はちるらん
初瀨山うつろふ花に春くれてまかひし雲そ嶺に殘れる
あすよりはしかの花園稀にたに誰かはとはん春のふる郷

夏

なつきぬといふはかりにや足引の山もかすみの衣かふらん
春の色も遠さかるなりすか原やふしみにみゆるをはつせの山
郭公忍ひ〳〵にきなくなり卯の花月夜ほのみゆるころ

今こんとたのめやはせし郭公ふけぬる夜半を何にかこたん
橘のはなちる里の夕くれに忘れそめぬる春の明ほの
五月雨の雲間待いてゝもる月は軒のあやめにくもるなりけり
子規今いくよをか契るらんをのかさ月の有明のころ
いさり火のむかしの光ほのみえてあしやの里にとふ螢かな
玉ほこや道の行手のすさひにも契そむすふ山の井の水
そま河の山陰くたす筏士よいかゝうきねの床はすゝしき
わきもこか宿のさゆりの花鬘長き日くらしかけてすゝまん
ふしの山きゆれはやかて降雪のひとひも夏になる空そなき
小山田のきのふの早苗とりあへすやかてや秋の風も立なん
秋近きけしきの森になく蟬のなみたの露や下葉そむらん
みそき河なみのしらゆふ秋かけてはやくそ過るみな月の空

## 秋

風の音にけふより秋のたつた姫身にしむ色をいかてそむらん
七夕の待こし秋はよさむにて雪にかさぬるあまの羽衣
萩の葉に吹はあらしの秋なるをまちける夜半のさをしかの聲
亂れ芦のほむけの風のかたよりに秋をそよするまのゝ浦波
をしなへて思ひし事の數々になを色まさる秋の夕暮
小萩咲山のゆふかけ雨過て名殘の露に日くらしそ鳴
もにすまぬ野原の虫も我からとなかきよすから露に鳴なり
とこよ出し旅の衣や初鴈のつはさにかゝる岑のしら雲
秋の田のいなはの露の玉ゆらもかりねさひしき山かけの庵
山本のあけのそほ舟はの〳〵とこき出るおきは霧こめてけり
あまつ風みかきて渡る久堅の月の桂に玉やしくらん
さらしなの山の高ねに月さえてふもとの雪は千里にそしく
月みはといひしはかりの人はこて槇の戸たゝく庭の松風
みか月の有明の空にかはるまて秋のいくよをなかめきぬらん
きり〳〵すなくや霜夜のさむしろに衣かたしき獨かもねん
立田川ちらぬもみちのかけ見えて紅くゝるせゝのしら浪
をしなみわかもとゆひの初霜にみそち餘の秋そ更ぬる
忘るなよ秋はいなはの山の端にまたこんころを松の下陰
辛崎やにほてる沖に雲消て月の氷に秋かせそふく
主やたれいつくの秋に旅ねして殘る里人こころもうつらん

## 冬

明かたの枕のうへに冬はきて殘るともなき秋のともし火
さを鹿も分こぬ野邊の古郷はもとあらの小萩あれまくもおし
山颪に人やは庭をならしはのしはしもふれは道もなきまて
むら時雨すくれははるゝ高根よりあらしにいつる冬のよの月
さゝの葉はみ山もさやにうちそよきこほれる霜をふく嵐哉
風をいたみたゝよふ池の浮草のさそふ水なくつらゝゐにけり
吉野河たきつしらなみ氷ゐて岩ねにおつる峯の松かせ
明石かた須磨もひとつに空寒て月に千鳥も浦つたふなり

かたしきの袖の氷もむすほゝれとけてねぬよの夢そみしかき
時雨よりあられにかはる槇のやの音せぬ雪そけきは淋しき
木からしにつれなく殘るおく山の杉の木末も雪折にけり
誰をとひたれをまたましとはかりに跡たえはつる雪の山里
花のちる比にやわかんしら雪のふりまかへたるみよしのゝ山
かきくらす嶺のふゝきにすみかまの煙の末そむすほゝれ行
一夜とや春をまつらんとし月はけふくれ竹の雪の下折

戀

戀をのみすまの浦人もしほたれほしあへぬ袖の果をしらはや
吉野川岩もる水のわきかへり色こそみえね下さはきつゝ
いせ島や潮干にひろふたま〳〵も手にとる程の行衞しらせよ
かちをたえ由良のみなとによる舟の便もしらぬおきつ鹽風
せきかへす袖に時雨やあまるらん人もこすゑに秋そみえぬる
我かくてねぬよのはてをなかむとも誰かはしらん有明の比
しかすかになれにし人の袖の香の其かとはかりいつ殘りけん
稀にこし比たにつらき松かせを幾夜ともなきね覺にそきく
これは皆むなしき事そとはかりは契るにつけて思ひしりにき
いはさりき今こむまての空の雲月日へたてゝ物おもへとは

羇旅

きのふまて雲のあなたにみし山の岩根にこよひ衣かたしく
ちりつもる森の落葉をかきつめて木のしたなから煙たてつる
雲はれや月はともし火かくしてもあかせはあくるさよの中山
むさしのにむすへる草のゆかりとや一夜の枕露なれにけり
うき枕かせのよるへもしら浪のうちぬる宵は夢をたに見す

山家

しら雲のやへたつ山を深しともおほえぬまてに住馴にけり
しほりせて獨分こしおく山に誰まつかせの庭に吹らん
山深みいはしく袖に玉ちりてね覺ならはす瀧の音かな
雲かゝる山のかけはし踏分て入にし道はこけおひにけり
忘れしの人たにとはぬ山路哉さくらは雪に降かはれとも

鳥

和田の原おきのこしまの松陰に鶴のゐるいはを洗ふしら波
をちかたや岸の柳にゐるさきのみの毛なみよる川風そふく
おしき哉人も手なれぬはしたかのとかへる山にころもへに鳬
ゆふまくれ木たかき杜にすむ鳩のひとり友よふ聲そさひしき
むしろ田のいつぬき河のしきなみにむれゐる鶴の萬代の聲

祝

玉椿ふたゝひ色はかはるともはこやの山の御代は盡せし
くもりなき雲井にすゑそ遙なる空ゆく月日はてを知れは
くれ竹のそのよりうつる春の宮かれても千世の色はみえにき
若葉さすたまのうつきの枝毎に幾代の光みかきそふらん
敷島ややまとしまねも神代より君か爲とやかためをきけん

# 秋日於　大上皇仙洞應　製百首和歌

内大臣正二位行兼左近衛大将皇太子傳源朝臣通親上

## 春

いつしかと大内山のかすめるは雲井にはるや立はしむらん
諸人の祈る千とせをあつめても猶數しらぬ春のはつ空
老のなみ立添かすもわすられてけふ若水を結ひ初つる
君か代の春のためしにひきそめん子日の松も千代をかきれは
たまはゝき千年の春をいはひても子日の松はあたりはらはん
つまれともつもる若菜や河上にあらへる人のなさけなるらん
あさみとり春のしるしにひく物はかものは色の駒にそ有ける
花さかてまた色とらぬ梢こそはるの霞の下繪なりけれ
春霞たえまを分てなかむれはとをちの梢なつなよきしも
梅か香にをはうちふれてきなけはや聲の色さへにほふ鶯
はるきてそ匂もふかき梅の花こその雪には咲初しかと
跡たゆる柳のかとの春ふかみあくるもさすも風にまかせて
難波江にはみなれにけるしるしにや葦毛の駒を嘶かさるらん
秋風につけし玉つさ春くれはかへりことかと見ゆる鴈金
むらさきの色のゆかりにさわらひを折袖さへもなつかしき哉
まよふなる野邊の煙ややみならん子を思ふ雉子立もはなれす
みよし野の春のけしきに初めてや花の都といひつたふらん
なつさへは涙の露そをかれけるこゝろすみれのいろの夕暮
ちらぬまは夏にもかゝる色なれは春のかたみや池の藤浪
惜みかれまとろむ夢のうちにさへ暮ぬとみゆる春そはかなき

## 夏

けふも猶春のうちそといひなしていさぬきかへし花色ころも
今朝よりは山郭公またれけりうつれはかはる花心かな
あかなくに散にし花を夢に見て打おとろけは青葉成けり
郭公かよふかきねを尋ればなを卯の花にちらぬ忍ひ音
はるは梅夏にしなれは卯の花になさけをかこふ山かつのかき
五月山みねの木しけきかけなから卯の花月夜ふもとわりなし
橘のかけ踏みちそなつかしきむかしを忍ふ袖のあたりは
我ならぬ人にかたるな郭公きゝつといはん數のつもるに
五月雨に早苗の跡は水こえてもすそもみえすたゝさひくしつ
哀にもすたく螢のおもひかな昔あつめし窓を忍ひて
山賤の露のなさけを置とてやかきほにみする夕かほの花
やまかつの賤か伏屋の夕すゝみをの〳〵とにまとゐをそする
白雨に山下とよみゆく水のひゝきを添る蟬のもろ聲
かりはやす麻のたちえにしるき哉夏のすゑはになれる景色は
またきより河せの風の涼しきは秋のなこしのみそき成けり

## 秋

このねぬる朝氣の風にいつしかと庭の木すゑの一葉散けり
みか月の入ぬる空の名殘とてかけほのめかすよひの稲妻

露しけみ萩の立枝もたはれつゝ朝たつ鹿もむれ分にみゆ
かへる春なを秋かせと契てやたのむの雁のまたき鳴らん
あちきなやをのれは鳴てさをしかのよその枕に涙もよほす
みゆきせし流れややかていはし水秋のなかはにうつし置らん
もとなれしたちのゝ駒のいはゆるは引わけられて友や戀しき
里わかすすむへきなれは唐もこよひの空は曇なからん
岑近き軒端に月は入ぬとやふもとの里の人はみるらん
おかなくに入ぬる空にくらふれは明るおしまし有明の月
さよ衣うらみをつけてうたれとも聞はひとつに袖の露けき
明かたに恨やかよふ燈火をそむけるかへになくきり〳〵す
ゆふされは門田のいなは風ふれてなにそよ秋の心つくし(にイ)そ
こもり江の杉の緑はかはられと初瀬の山は色つきにけり
たつねくる人の心をまよはせてもみちの山をかくす夕霧
さほ山はもみちむらこの衣かけて松のみとりそひとへ成ける
秋をしるふた葉にたにも悲みきおひゆく後の心いかにそ
大方のときの哀をうちそへて我身ひとつの秋にそ有ける
風の音もまたきに冬のけしきにて霜をきぬへき庭の面哉
鳥のねよ明なは冬の空そかし秋の名殘にしはし音すな

冬

けふよりは塵つもるともきよめすな秋の形見に殘す木葉そ
哀をは木葉はかりにをとつれてやかて過ぬる初時雨かな

なにはかたよせくる波に風寒み蘆のかれ葉にたるひすかれり
朝毎に汀の氷ふみ分て君につかふる道そかしこき
をし鳥は氷にうつる影をさへうきれ隔つるつかひとやみる
霜さゆるよるのけしきは曉のかれの音にてしるくも有かな
よたさむみ寒ゆく霜は道のへの小篠かうへにをけと消せぬ
ひささきおふるきよき河原に月すめはしはなく千鳥聲さえ渡る
時しもあれ鳥そなのれる朝くらやきの丸殿をうたふ明ほの
よかれしてつかはぬ鴛の浮寢をも我身のよその物とやは思ふ
埋火の思ひこかるゝうたゝねはひまいる風そ吹おこしける
哀をは煙につけて尋ねはやなかむるにしも心すみかま
葛木やくめちも雪にうつもれていははしのみそとたえ成ける
年の内にふたゝひ春をむかへても花見るかすの重らはこそ
いかはかりけふの暮るを嘆かまし明日とも春を思はましかは

戀

獨ねのまくらにもなを鳥のねは昔おほえてうらめしきかな
なけき餘りあくかれ出るたまなりと君か妻にし結ひとゝめは
おもひもみていかに成ぬるときのまに三年の秋の心地せしかと
きのみやは涙にのみはぬらすへき馴しまくらよ物かたりせよ
思ひくらすなかめはうはの空なれと夕の雲のなつかしき哉
明ぬよのひまを待こそはかなけれ夜床は共におきうからしを
今よりは人には馴し定なきうき身のならひわりなかりけり

ゆきかよふたひに心のなくさまは山河しらす出まし物を
歎きても今かひなしと思へとも忘れはこそはなくさみもせめ
有しよを見はてぬ夢の枕にもなをうらめしきかれの音かな

羇旅

秋かせにひなのなか道送りきて時雨の空に立かへれとや
白雲のかゝれるほとやうちはきんくれはとまらん山路成へき
乘駒もうら吹かせに心あれや月あけぬれと出もやられぬ
明はゝやきちと思ふそたのもしきけふ泉河渡りはてなは
すゝか川ふりにし旅そわすられぬ八十瀬の浪の數も積りて

山家

山深きやとのしるしは月ゆへに厭ひきくにもなるゝなりけり
柴の戸に心ほそくももりくるはかけひの水と月日なりけり
こけの庭道ふみ分しやともなしれむろたつのみあるし顏にて
谷ふかみ山かけちかき住居にはくれぬにくるゝ心ちこそすれ
哀なり都の外のすまゐにはなれぬる物は鹿の音計り

鳥

紅葉するはしの立枝はおり殘せき馴しもとのもすもこそゐれ
獨ねはやもめからすにめさめつゝ夜中になくと今はいとはし
男山はとの杖にもたつさひて猶さかのほるしるしあらせよ
あはれこそたにも傳へれ山鳥の夜床さへにそうらやまれける
思へたゝ雀のひなをかひをきてすたつる程はかなしき物を

祝

君か代は山田のはらにたつちきの千たひかはらん程は限らし
あまの原長閑にすめる君か代は星のやとりもたかはさりけり
君か代ははこやの山にいく度かやつを椿の色かはるへき
ぬれてほす山路の跡や天下のとかに匂ふしらきくの花
君か代はいさめのつゝみとりなれて風さへ枝を鳴さゝりけり

詠百首和歌　　前大僧正慈圓

春

一年はきのふの空に暮はてゝけふめつらしき春の明ほの
あさみとりはるの越ゆく相坂を霞の關と人やみるらん
かすみゆく春のしほやの煙かなふたみのうらの明ほのゝ空
み山邊の雪けの雲を分はてゝ霞にうつろうくひすの聲
庭の雪の消ゆくひまをたとりつゝかきれの草そ春もとめける
山里の梅のたち枝のゆふ霞かゝる住居をとふ人のなき
物ことに身にしむ春のけしき哉そのゝ鶯花に鳴なり
青柳はやよひの空に糸そめて花ゆへわくる人を待けり
峯は花麓はかすみ久かたの雲井に見ゆるあまのかく山
吉野山霞もふかく分入れは花のおくある春のあけほの
いかにいひいかに思はんみよし野の花は霞に明ほのゝ空
入相の音は霞に埋れてはなこそなけれ小初瀬の山

はるの山にもり來る月に風過てなみた露けき花の下臥
花盛雲もおほろにかすむよは月さへふかきみよしのゝ山
よしの山ふもとに花の雪そちる雲の梢に風や吹らん
詠つるよもの木末のむら霞ひとつに成ぬ春雨のくも
よはにくる鴈の涙ゃ露ならん今朝はうつろふしかの花その
はるをへてむらさきくゝる袂よりまつに心をかくる藤浪
はるの越し逢坂山はけふやまたかへる空にはしら川の關

夏

春の衣を泪なからやぬきかへて惜みけりとも人にしられん
玉川やうの花さかりこす浪の折このもしきこのわたり哉
千々にこそかたらはすとも郭公しのたの森に一聲もかな
けふといへは軒に菖蒲やうつむらん顯はれ渡る浪のいはかき
しのふ草はらはぬ軒の菖蒲こそけふのしるしもしとろ成けれ
ともしする火串の陰にくれはとりあやしき鹿の思はさるらん
五月雨にふしのなる澤浪こえてをとや煙にたちまさるらん
五月雨の雲まく軒の郭公雨にかはりて聲のもりくる
まとさそふ花橘のゆふ風に山ほとゝきす聲かほるなり
夏のよの月にすゝまぬ人そなきれぬにあくとも是よりそしろ
蚊遣火をたてゝそ人にしられぬる杜のあなたの里の一村
我やとの庭のしけみの螢こそ秋の草葉になる心地すれ
ひむろたのいなはの末の夕風に夏と秋とを吹みたりぬる

水結ふたもとにかよふ松風をなかめくらせはあきの一聲
深にけり河邊涼しくなかむれはみそきの浪に秋風そたつ

秋

植てけりまかきの荻の夕まくれまつしもしるき秋の初風
さをしかの夏のゝ草を分すてゝ太山の秋にうつる初こゑ
七夕の心やこよひ晴ぬらん雲こそなけれ星合の空
ゆふま暮きくも色ある心地して鹿の聲にも萩か花すり
秋をへて哀に露も深草の里とふ物はうつらなりけり
曇りなきかけを見るこそ嬉しけれはこやの山の秋の夜の月
山の端の月やしるらん君か代の千年の秋はいくめくりとも
あらし吹すそ野の秋のかきりかな晴ぬる霧に殘る月影
風さゆるきよみか關の秋のみは浪こそ月の光なりけれ
山里の門田にかよふいなつまにしはしなくさむ夕やみの空
衣うつ音はまくらにすかはらやふしみの夢をいくよ殘して
うつゝにはなみたのかすを思ひにて夢の枕に鴫のはねかき
いくよともかきらさりけり君か世の秋をかさぬる白菊の花
白菊は秋の雪とも見ゆるかなうつろふ色を冬の花にて
もみちする秋の朝霧たつた山夜半に染けん色なかくしそ
もみち葉の梢にかよふ松風はをとはかりふる時雨成けり
暮の秋梢に月はかたふきてあらしにまかふ有明の空
きかしたゝ長月の上の有明にしもと虫とのおしむわかれを

きり〳〵よもきの霜に思ひ出よ枕の下の露になれにき
秋はけふ錦をきてやかへる暮ゆく空にもみち散なり

冬

秋にまた吹替りぬる風の音と霜枯のおきのうはゝに
高砂のおのへの紅葉散にけりこのまの嵐音のさやけき
神無月しくるゝよはの槇のやは音こそやかて涙成けれ
うすくこき秋の木すゑは散はてゝ色なき風も身にはしみけり
もみち葉の名殘を忍ふ古郷に時雨をはらふ庭の松風
散はてゝ木葉かくれもなかりけり殘るあらしにやとる月影
今朝の雪に情なきなや殘してん跡をおしみて人を問すは
花の春月の秋こそ戀しけれ雪に人こぬ冬のやま里
雪のうちに柴うちくふる夕煙さひしき色の空にみえぬる
よさのうら松風さそふさよ千鳥なみよりほかに袖ぬらせとや
こやの池の氷のうへにこほりして月にすむなるをしの聲かな
哀なるかりはのをのゝ鳥たち哉思へはこれやつみの通路
となふなる三世の佛のよはなれはをのれとなのる雲の上人
身にとまる年こさへこそおしみけれ春と秋との暮しならひに
あまつ風をくれはかへるとしなみに五十の袖をぬらしつゝ哉

戀

いかてわか祈るしるしをあらはさん三輪の社の杉の木末に
我戀はまつを時雨の染かねてまくすか原に風さはくなり
君ゆへは月もなかめつ有明の空たのめさへなをそ嬉しき
思ひきや戀すてふ名はたかせ舟さしもなきさに浪かけんとは
いとゝしく我は恨みそ重ねつる誰まつしまの蜑のもしほ火
いたつらになき名はかりは龍田河わたらぬ袖を幾夜ぬらしつ
昔こそ月やあらぬとなかむなれ春さへくれぬわかもとの身に
誰かまつ今朝淺芝を分つらんもとをく露も人の涙か
あかてのみさゝ分るあさの戀衣ぬれてほすへき契なりけり
墨染の袖をはいかにしほるそとかむる人のなきそ悲しき

羇旅

古郷にとめし心にはなれきて身はかりそめの草枕かな
都出ていくよあかしの浦ならんくもらぬ月も日かす成けり
鳥もかな都はるかにすみた河とはゝや人のよはのね覺を
月影を袖にかけてもみつる哉すまのうきねの有明の浪
さとりゆくまとの道に入ぬれは戀しかるへき古郷もなし

山家

山里にいそく心はさよ更てたのむかきねに松むしの聲
思ひいつる都の友のなきそうき月をまつかせ獨なかめて
山里にあからさまなる都人さひしとや思ふすみうからぬを
み山への哀の空にうつるらんまきの梢に有明の月
いつかわれみ山の里の淋しきにあるしとなりて人にとはれん

鳥

千とせまてつもれる年のしるしとて雪をかさぬる鶴の毛衣
明るをそをのか八聲に人はしる夕つけ鳥といかにいふらん
をにわか一籠はなれてかふぬかのぬかつくをは君を祈りて
我か國は御法の道のひろけれは鳥もとなふる佛法僧哉
いかにして鳩のふつえにかゝるまて君につかへて此世暮さん

祝

神風やみもすそ河による波のかすず限なき君か御代かな
君か代の數はいくよといはし水すむへき末は神そ知らん
はるはると君か千年を三笠山さしてのとけきあめのしたかな
兼てうへて年もつもりの松なれはおひそふ末も猶そはるけき
やはらくる日よしのかけを賴むかなのとかに照せ君か千年を

## 詠百首和歌

權大納言忠良上

春

ほのほのとかすめる空やよをこめて立くる春の雲の通路
朝霞三輪の杉むらたちこめてみえぬそ春のしるし成ける
こほりけん泪も今朝はうちとけてはつねをもらす谷の鶯
わかなつむおきの燒原猶寒て袖にたまるは春のあは雪
山たかみかすみの底やかへり見るは都のはるの雪井なるらん
みよしのゝ霞のうちに雪ちりてゆくすゑ遠き花のおく哉
春きてもまたるゝ宿の梅かえにほかの匂ひをちらす風かな
むめの花さけるかきねの鶯はそのかはかせのにほひとや思ふ
春のくる柳の糸に木づたひて風にみたるゝうくひすの聲
尋きて匂に花はしるけれとなほ雲ふかくみよし野の奧
おもひねの夢路に匂ふ花をさへしはしもみせぬ風の音哉
庭の面は嵐のかせに跡たえてふまゝくおしき花の上かな
み山への木末にしつむ雲分て花の名殘を人のとへかし
はるしこはまたも櫻は咲ぬへしちりぬる枝は名殘のみかは
このもとになれし名殘や殘るらん面影しらぬ花の色かな
水の面にかすめる空やうつるらん雲のなみちにかへる雁かね
みよし野は花ともいはし朝ほらけ横たつ杣の横雲の空
行はるの霞の衣かへしてはちりこし花や夢路なるへき
藤なみのかゝれる枝の梢にはくれゆく春やたちとまるらん
春のゆくかたはいつくとしら雲の霞める空をうちなかめつゝ

夏

夏衣春をわするゝ今とてや花に染てし袖にほふらん
これやこのなきなたつたの里ならんなみのぬれ衣きたる卯花
五月雨に卯花さかぬかきねにも浪こそかくれ玉川のさと
今日くれはむすふ菖蒲の草枕かりそめならぬ旅ね成けり
篝火のかけにも知やうかひ舟こんよのやみの行末の空
橘の花ちる軒のしのふ草むかしをかけて露そこほるゝ
ともしするは山しけ山かきわけて鹿をや深く思ひいるらん

郭公やみのうつゝの一聲はおもひもわかぬうたゝねの夢
五月雨の雲間の月のおりしもあれ身にしむ時の鳥の聲哉
夏ふかき杜の下かけ風すきて梢をわたる日くらしの聲
入日さす高根の空は雲晴てふもとのさとにすくる夕立
みたれとふさはの螢は秋ちかし空ゆく月の夏の暮かた
水の面にをのか影をやうつすらんむすふすゝしき夏のよの月
萩原や秋にかはらぬ夕風に時しもまたぬ袖の露かな
枝しけきならの葉柏をとつれて木かくれ涼し夏の夕かせ

秋

衣手に秋のはつ風吹そめてまたたちなれす野邊の朝霧
夕ま暮雲のけしきも身にしむにいかに吹ぬる荻の葉風そ
七夕の雲の衣に風たちてうらめつらしき星合のそら
三日月のほのめく空に見ゆる哉哀をそへん行すゑのかけ
おなしくは尾花結ひて旅れせむまれくも露のかことならすや
小萩分ぬ袂の露に影見えて空よりうつる月の花すり
なかめ侘ぬいかに忍はん夕間暮さひしき庭の松の秋かせ
月にすむ心もたえすさをしかのあらしにむせふ有明の聲
あはち島おきつ浪まに風立て月はくまなく住吉の松
山のはに秋の半のかけみえていつる空よりすめる月かな
なかめつゝあかてこの世を過しては月の都に住身とならん
昔おもふ袖の雫は古郷の軒端の月になかめせすとも
なかむれはきよみか關のなみの上やとれる月は秋の有明
霧ふかき辰田の里の夕間暮木すゑを分て鴈渡るなり
秋はきてとふ人はなき庭の面にもみちを分て風そよくなり
露さゆるをのゝしの原うら枯て月吹はらふ淺茅生の風
さよ久てむら雲はらふ秋風は月吹かへす心地こそすれ
きり〳〵すけにもかなしき名殘かなよもきか杣の秋の暮かな
野原よりたもとにかよふ風の音におなし露ちる秋の夕暮
ゆく秋は嵐のかせをさきたてゝ木葉そ道のしるへをはする

冬

かきくらし空も秋をや惜むらん露もまたひぬ袖に時雨て
さらに又しくれを染る紅葉かな散しくうへの露のいろ〳〵
聞わかぬ木葉の音に袖ぬれて時雨せぬよも涙なりけり
時雨あへす落るこの葉のこゑさえて嵐にうつむ里の通路
露霜にまかきの萩は枯はてゝ木葉のそこに殘る虫の音
ちるまゝに木の間の月の影もりて紅葉のみかはよもきふの庭
露こほるかれ野の原の霜の上にさひたるよはの月を見る哉
しもかれの尾花かすゑに月さえてこほらて氷るまのゝ浦波
鹽風に月かけわたる友千鳥なみにくたくる有明の聲
褄木こるたかれの霜をうちはらひ山路にまよふ夕暮の空
かきくらし時雨る雲に風寒て深行空はあはれ成けり
朝ほらけさゆるあしまを行舟の氷をわくる跡のしら波

さえわひてふすゐの夢や覺ぬらんかるもの床に霰降なり
庭の面に跡つけしとやとはさらんなかめわひぬる雪の朝を
ゆく年はこよひ一夜の夢路にてさむれはやかてかへる成けり

戀

したにのみしのふもしすり苦しきは心のうちの亂れなりけり
もらすなよたえぬ泪は替ともまつしる袖の色にいたさて
大かたの哀はかりの空ならは月みるとてもしほらさらまし
夢かさは心の闇にくらされてほのかにみえし宵のまほろし
たのめてもこぬは習に成ぬれは驚かぬしもねられさりけり
あちきなくたのめぬ月のかけもうしいひしはかりの有明の空
をはりや人をはなにかまくす原我身をのみそ秋の夕暮
更ぬれはねぬへき物をいたつらに賴めぬ鳥のねさへまたれて
つらきをも人のとかとは思はねと情はうきをきらふ物かは
淚川くちぬる袖やみをつくし深き思のしるしなるらん

羇旅

あらしふく高根の雪をかたしきて夢路もとをしうつの山越
はる〳〵といくへこえきぬいはねふみ重なる山の峯の白雲
露しけきをかやか原のかりねには我ともぬらす夜はの袂を
風寒みとま吹いそのいは枕ねられぬ物を淚たゝすとも
またやみむあかしのせとのうき枕なみまの月の明かたの影

山家

入日さす柴のあみ戸に影もりて枕になるゝ峰のしら雲
軒ちかき岑の雲間をなかむれは窓のうちよりいつる月哉
とふ人は山路の苔に跡たえてよもきか末に風そよくなり
山深き草のいほりの雨の夜にをとせて降は淚なりけり
やまたかみはれぬすみかま淋しきに雪ふみ分て誰かとひこん

鳥

色かへぬ鶴の毛衣千代をへて幾世の霜をかされきつらん
くたかけはいつれの里をうかれきて又よふかきに八聲鳴らん
獨ぬるやもめからすやまとろまて月すむよはゝ鳴渡るらん
朝ほらけのさはの霧のたえまよりたつ白鷺の聲の寒けさ
よをかされ籬の竹にふしなれて軒端にきゐるむら雀哉

祝

曇りなくはこやの山の岑はれて行末遠く出る月かけ
千世すまん影をやうつす石淸水絶ぬ流を君にまかせて
朝日さす三笠の嶺の小松原空に千とせの數そみえける
天くたる神やくまなくみか月の久しき御代を空に知らん
筑波山いはれの松のちよをへてしけきや君かみ影成らん

## 詠百首和歌　前中納言隆房

春

鳥のねをわれとはまたし逢坂の關路にあくる春にまかせて

引そ見む子日の野邊の小松原木たかき枝に風わたるまて
さのみやは谷のかすみにうつもれんたかきにうつれ鶯の聲
かつらきやくめ路の谷のむら霞とたえは橋に限らさりけり
雪の下にゑくの若菜を求むとてゆへにもあらぬ袖ぬらしつる
三輪の山過にし冬や殘るらんしると見ゆる雪ノむら消
咲初るわかきの梅よ鶯のやとかるほとにいつかなるへき
おひをゝくる宿に柳をうへをかんさてそ昔も日をくらしける
みよしのに霞はしはし立しかと花こそ今は峯をこめつれ
しかの浦に霞なかるとみえつるや花のさゝ浪よする成らん
かくしこそ春をもしらぬ宿なれと時を忘れす花は咲けれ
あたにちる花そ思へはうらめしきときはの松もあれは有世に
さひしさをなにゝたとへて詠まし霞に殘る有明の月
春雨のさこそは窓をうつならめ何とかむらん軒の玉水
つれて行かすをも人にみせしとや雲にかくれてかへる雁金
しつみぬと思ひもはてし春の野にふせる雲雀も揚りやはせぬ
影はかりみえし野中のわすれ水たか苗代に思ひいつらん
これを見よ淺茅か下のすみれたにみの程はかり花は咲けり
紫もみとりも雲と見えつるや松と藤とのそらめ成らん
鳥たにもなく／＼谷にかへるなり我のみおしむ春の暮かは

夏

櫻色の衣をかへて今朝よりは袖にも春のかたみをそたつ
やへ蓮はれぬかきれと見しかともうの花月夜雲なかりけり
きゝつやとゝふ人あらは郭公こたふはかりの一聲もかな
我宿をれやまとたのめ子規またてをきかんをのか物から
やと毎につまとそみつるあやめ草いかて心をわけて引らん
夏の夜はいつれの里もとさしすな叩く水鷄はさてもくるかと
ほにいてん秋をけふより數へつゝいほしろ小田にさ苗とる也
みそらにはいをへの雲の晴すのみ雨まもなかぬ五月雨の比
橘の下吹かせのかをとめて人はすきにし方よりやくる
暮をまつおもひは誰もある物を螢はかりや身にあまるへき
風わたるゆふくさかけに凉みきて唯一ときの秋そうれしき
かつら川うきれの棹のとりもあへすはや雲あくる夏のよの空
道のへの清水にしはし立よれは月さへこゝに宿をかりけり
種まきし木の下麥のほに出てかけに秋ある山かたの庵
みな月も過て御祓をしつるかとおみつくほとの川風の音

秋

けふよりやはをふく聲は蜩ゆらん朝けのかせも秋をつくなり
星合の空はこよひそあまの川もろてにいそけ妻むかへ舟
女郎花よはの名殘やふかゝらんまた立のかぬ野邊の朝霧
秋風の後いかならんかるかやのふかぬさきより亂れぬる哉
夏野をはおなし緑を分しかと秋そおりつる七草の花
虫の音のしけきのへにそ思ひいつる一むら薄うへし昔を

いなは吹風のたよりに聞ゆなりほのかになのるわさ田雁金
雨そゝくいはれの野邊の萩かえにひまなく露のすかる鳴なり
秋といへは露は草葉にかきるかは袖にも餘る夕くれの空
月よりもなくさめかたき詠哉をはすて山の夕きりの空
山風に夕ゐる雲をはらはせていつるよりすむ秋のよの月
うき身をは思ひな捨そ秋の月むかしよりみし友ならぬかは
むら雲もいかゝへたてん秋といへは心のそらにすめる月影
今こんとたのめし人やいかならん月になく／＼衣うつなり
いかにこは我身ひとつの秋とのみ枕につくるきり／＼す哉
しなのちやすかのあらのを吹風のをのか哀を人にをしふる
いつのまに霜のをきなと成ぬらん菊をは花のおとこと（とイ）思ふに
紅のうすそめ衣かけてけり枝に一しほ秋やきぬらん
みるたひに心にふかくそめつれは紅葉は色やうすく成らん
けふとのみ秋をもしらぬ山かつの心さへこそうらやまれけれ

冬

かへりゆく秋も山路をこえゆかは今朝や時雨に廻りあふらん
深く淺き木葉の色に見ゆるかなうつろしくれの心かかりは
清見潟浪にこのはそせかれぬるふしのなるさは風こえぬらし
太山へのおくの通路いかならん霰たはしり寒しこのよは
日比へて山さえわたるむら雲に心はえてき今朝の初雪
龍田姫松をはよきて染しかとみな白雪に山そみえける
雲はらふ嵐に空をおもはせて見るよりさゆる冬のよの月
つの國のこやは何とかかくるらんくきのみたてる霜枯の芦
さえわたるやすのかはらの明ほのに霜にあとふむ友千鳥かな
しはしとやみかくれしつる鳴鳥のやかて氷の下に成ぬる
浮寢する床をつらゝにとちられてわれてもかつくすかの村鳥
こきおろす紅葉をさへもよせんとやたなかみ川に網代うつ也
ふゝきするかたのゝ原をかり行はくろふの鷹の雪にまかはぬ
遠かたにたゝ一むすひたつ煙思ひとくにそをのゝすみかま
春のくる道をや年もかへるらん今宵はとちよ逢坂の關

戀

またしらぬ戀路にけふそ入そむるまよはぬ程にあふ人もかな
人しれぬ心にたつるにしき木の朽ぬる色や袖に見ゆらん
おもほえす種をは誰かまき置し軒にはしのふ身には戀草
戀衣くれなゐふかく染おきてあらふもおなし泪なりけり
我にこそかくともいはめ情なき心と身をはおもひしるらん
かれ／＼になりしためしや石の上ふるのわさ田の萎れ果にし
さよ衣そなたの風をかたしきてうらむる袖に夢をまちつゝ
物思へは哀くるしきたくひ哉たかたの袖に宮木引人
手もたゆく拾ふはいとゝ袖ぬれて名をはたのまし戀忘草
風わたるくすの末葉のかへりてはとかむはかりの我恨かな

羇旅

臥わびぬいなのさゝやに宿かれは都にすみし月そきにける
鳥のなにもとこしかたを思ひ出てすみた河原に袖ぬらしつゝ
深草の里よりおくに宿かれはうつらの床そとなり成ける
いさゝらはかけちにしはし庵せんきそのみさかに夕日さし鳧
しなか鳥ゐなのゝ海に舟とめてをさゝか原の風をまつらん

山家

わきてなを岑の庵のかなしきはましらなくよの村雨の空
かくてすむ心細さを人とはゝかけひの水の音をこたへん
柴の戸をたゝく嵐にきゝなれてくる人さへをとはす成ぬる
山ふかみ跡たえはつる住居かなつまきこるおかかよふ計そ
なをさして都のいほにかよへとも心は深くいらはこそあらめ

鳥

春といへ（くれはイ）は野邊にしはなく大鳥のいやとしのはに面替りせぬ
むらからす木末の床をあらそひて稲荷の杉にゆふかけてなく
大鳥のはれに降にし霜の色を我もとゆひの物となしつる
神のますうなての森を朝ゆけはこゑを手向てまとり鳴なり
何とかや風にしりそく鳥のなよ嘆きて年を渡るとそきく

祝

かけきよくはこやの山の岑にこそ秋をかきらぬ月はすみけれ
行末を誰かはしらん白鶴の千世よりほかの君か代なれは
伊勢の海の岸うつ浪にゐる玉やひろへとつきぬ萬世のかす

早き瀬を渡るあきまのよかせにも浪をそたてぬ君か御代には
あめにますとよをか姫にととはんいく千代までの君か齢そ

## 秋日詠百首應　太上天皇製和歌

正三位臣藤原朝臣季經上

春

鳥のねをきゝてや春も越つらんさしてはあけぬ關の戸なれは
音羽川いはまの氷とけぬれはせきいるゝ水に春はみえけり
おなしくは千本をひかん姫小松君かよはひの數にまかせて
ゆくまゝになを遠さかる霞かな我をこめてや春はたつらん
都へと出はてにける鶯のたにの古巣は風やもるらん
さほ姫のそむる緑を色に出ていつしかみする雪のした草
はる風のなさけならすや梅の花かをしるへにて人のとひくる
梅さかぬ宿はうらみし春風を遠の垣ねのかをさそひけり
うすくこく花の匂ひはかはれともおなしすちなる青柳の糸
霞しく春としなれはおひにけり折しるものは野邊のさ蕨
いくへとも思ひもわかぬ白雲はかさなる山の櫻なりけり
なにゆへに名をとゝむれは吉野山花をはあたにちらす成らむ
今はわれかけの朽木と成はてゝ花咲春をよそにきくかな
芦のやに春のなかめのつく〳〵とよにも聞えて降そはてぬる
立なつむ野澤の駒も春くれはもとのけしきはかへぬ物かは
雲路にやしほりをすらん鴈金のうはの空にも立歸る哉

いまそしる吉野の山のよふこ鳥うきよを出て庵させとは
谷かくれ苔の下ゆくむもれ水春は山田に人のひけかし
家つとにおりてかへれは山吹をおしみかほにも鳴蛙かな
散てゆく花にそ見ゆる暮〳〵行春をも風のさそふ成けり

夏

たちかふるかひこそなけれ夏衣心はもとの花そめの袖
これもまたなくさめかねぬ卯花の月かと見ゆるをはすての山
一聲に心はつきぬ郭公またきなくとも誰かきくへき
なのれたゝ明はてぬまに子規たそかれ時にかきる空かは
よを重ねまちつるよりも郭公あかぬ名殘そ限りなりける
なかきねをひきてける哉菖蒲草こゝとさしては思ひわかぬに
鹿たゝぬさ山か峯のますらをは我さへめをや合せさるらん
時しもあれあたらあかしのうきね哉月たにすまぬ五月雨の比
蚊遣火やあまの笘やにをきつらんたくもの煙立そ増れる
うちたゝき心さはかす水鷄かな人まつやとのまきの板戸を
いかはかり思ひにもゆる夏虫のすゝしき秋の風をまつらん
おほかたの照日は夏の空なから木かけはかりそあきの夕暮
春秋のとめるみよにはむかしより氷室に冬もとまるなりけり
松かれの岩もる清水結ひあけん濁らぬ御代はすみよかりけり
わかたくみみへのかはらにいくしたて夕かた待（かけイ）て夏祓しつ

秋

風の音は竹のさ枝に音信て一夜かほとに秋はきにけり
あまの河逢瀬まれにはみゆれとも思へはふかき契なりけり
宮城野の小萩を分てゆく水や木のした露の流成らん
さほ鹿のしからむ萩をかたしきて我さへしつるのへの草ふし
花薄たれに心をつくすらんまねく袂に露のこほるゝ
女郎花あたにや思ふ草枕一夜結ふも契ならすや
をみなへし色めくとてや白露のむすひなからも心をくらん
淺からす身にしみにけり藤袴ひとのはかりの匂ひなれとも
荻の葉の音せぬ宿にすむ人はたゝおほかたの哀計か
暮ぬまにのはら篠原過なまし道さまたけの花の色々
しら露もあさちか末にやとりけりいつ〳〵を頼む我身なるらん
やへふかき霧のまかひに岩橋をわたしやはてぬかつらきの神
朝霧の晴ゆくまゝに見ゆるかな我にさきたつのちの旅人
老となるなかめはこれと知りなから猶捨かたき夜半の月
もろともに哀とおもへ秋の月みて久しくもなりにける哉
すかのねのなかき命そ忍はるゝそこらの秋の月をみつれは
いさゝらは憂身を月にまかせてんうはの空にはすまぬ物かは
風吹は老せぬきくのあたりなる水のおもにも涙くみけり
たつた姫のへの錦ををりかへて梢にさらす神南比の社
とゝめあへす隙行駒といひなからいかに暮ぬる秋のかけそも

冬

高砂のおのへの松に秋くれていつしかかはる木枯のかせ

暮し秋の行衛やいつこ霜さえてかたみにをきし露たにもなし

鹿のねをきゝし計はなけれとも枯野も冬の情ならすや

定なく又かきくもりしくるめり晴ともぬくなみしますか笠

霰ふるのちの篠原風過てさえよとすめるよはの月かな

百數や玉しく庭のきよき上に光をそへてつもる白雪

降雪に三輪のやまもと埋もれてたのめし杉は木すゑ計そ

ゆきふれはとひくる人も跡絶ぬ花にかはらぬ梢なれとも

わかひおりくるすの野邊をきて見れは雪降に皃おとろ〳〵に

はりまかた吹鹽かせや寒からん妻よふ千鳥聲しきるなり

きりのまに友よひかはすさよ千鳥聲に河瀬の程をしるかな

あまてるや豐のひかけのみかりにはあさる雉子も疊なき哉

をしなへて霞わたれるをの山はいくすみかまの煙成らん

冬こもり木々のこすゑに顯てときはをみする峯の椎柴

暮てゆく年ははかなく思ふらん身につもるをもしらて惜めは

戀

言の葉はいはての杜にくたしてん色にいつとて人もすさめし

嬉しくはむかし語に成なましつらきそ絶ぬ契なりける

逢見てもかひやなからぬ世中にうきなを人にしられ果なは

うき身こそ思ひかへせは忍はるれつらきも君か契ならすや

我袖に見えける物を世とともに浪にしほるゝすみのえの松

戀衣かさぬるつまもなき物をわかれをつくる鳥の聲かな

淺ましや淺間のたけにたつ煙いつしめるへき思なるらん

それをたになけきし物を朝ほらけあかて歸りし袖の白露

人心つらさもさらはかはれともうれしきのみやうきに成へき

羇旅

すみなれし心はもとの都にて雲のなみ路を隔つ計そ

いつくまてけふはいくのゝ道なれやえそしらすけの草枕哉

いもを置て草葉は分しさゝ枕露より外に袖しほれけり

すきかてにおもふ心そ淸みかた浪にしられぬ關と成ける

思ひいるゝ心に道をまかすれは鳥の音きかぬ山の奧まて

山家

心ありてすむにはあらす山里はしけき人めをいとふはかりそ

山里の哀はいつとわかれともなをあやしきは夕暮の空

今さらに誰か音をせむ柴の戸に思ふにすくる嵐なるらん

あと絶てしられぬほとの山路かはとへかし人のなさけ計に

宮古をはよそのなかめになりはてゝ哀なりける身の住居かな

鳥

おもふ人有となけれと都鳥名はむつましき旅の空かな

あさりするいらこか崎のあまの子はうかふ鷗をともとみる覽

夜を殘す老のね覺としられはややもめからすの鳴かすらん

峯こえて鳴かさゝきの聲にこそ夜は明かたに成りぬとはきけ

なるこひく門田の面のむら雀おとろく程の嬉しさもかな

祝

諸人のをの／＼千世とおもふらん君かよはひの末のはるけさ
庭もせに二葉の小松うつし植て千代をは君か物とこそみれ
常磐なるひらの丶宮の杉村は君かよはひのしるしとそ見る
君ゆへに心は人にかきるかな千年を外へやらしと思へは
萬代とはこやの山にきこゆれはこゑをあはする岑の松風

## 秋日詠百首應　太上皇製和歌

正三位臣藤原朝臣經家上

春

嬉しくも千世の初の春にあひてけふ若水をむすひつる哉
子日する野邊のみゆきにいて丶社我身の千世も君にひかれめ
かれてよりわかしめしの丶小松をはいかにたなひく霞成らん
春霞まつらの山はよきてたて行手にも見んいもかひれふり
朝かすみこしちもみえす立ぬれは音にこそきけ田子の浦波
としをへて春にしられぬ我身にも鶯のねにおとろかれつ丶
も丶しきのまかきの竹を鶯のをのかねくらと思ひかほなる
春の日の光にもる丶谷かけの岩間の雪や我身なるらん
香をとめて吹くる方を尋ぬれは風こそ梅のしるへ成けれ
霜枯の野邊は綠に引かへて雲雀そあかる春の夕暮
うちなひく河そひ柳枝ひちてそこの玉もにわきそかれつる
雉子なく朝のはらを過行はさわらひわたりほろ丶うつなり
春の夜の月をなかむる人とてもいとはぬ物は花のしら雲
春風の枝もならさぬ御代なれはのとかに花の色も見えけり
夜と丶もに匂はむをはかたくとも春たにちらぬ櫻なりせは
きなけともおとろかれすや呼子鳥我さそふへき友しなけれは
春くれはこしかたへとや雁金もかへる山路にいそきたつらん
紫のゆかりと見えてむさしの丶菫は色に顯れにけり
吉野河花のしからみなかりせはしはしも春のとまらましやは
惜めともけふはかりなる春なれは曇るにくる丶心地こそすれ

夏

心さへ衣とともにかはれはやいとひし風を今朝はまつらん
久方のあまのかはらにおひれとも年の一たひあふひ成けり
み山をはいつか出けむ郭公こゑをならしの岡になくなり
よもすからかたらひ置て子規いつち行らん明ほの丶空
心さしあさ丶は沼の菖蒲草いか丶はれやのつまと見るへき
小倉山ほくしのかけのたえせれは鹿のたちとや替らさるらん
五月雨の日をふるま丶にをはた丶やいた丶の橋は水わたり㒵
五月雨にたえせぬ物はわきもこかこやのしのやの軒のいと水
何となく過そやられぬ橘の袖なつかしくにほふあたりは
とはるへき花の春たに音もせて何ゆへた丶く水鶏なるらん
さらぬたにしきと見ゆる常夏の花もてはやす露の白玉

わきかれし草ふかゆりも有けれと花さきてこそ人もしろらめ
夕立の晴ゆく空に夕日さし蓮のうき葉に玉そみたるゝ
夕間暮秋はあすかの川かせにまたき涼しき夏衣かな
御祓してぬさとる袖の涼しきは河せの浪に秋や立らん

秋

よをこめて秋はたつたの山邊より吹くる風もけしきとなり
あまの川よせくる浪の程もなく立かへるにや袖はぬるらん
小萩咲のへの旅ねは心せよ思ひのほかに日數へぬへし
秋霧は立かくせとも女郎花あたなる風になをなびきけり
白露の結ふかひなく見ゆるかな亂れかちなる野邊のかるかや
年をへてあれのみ增る古郷の荻の葉さやき秋風そふく
初雁の雲路はるかにこしほとはうはの空なる旅ねをやせし
外面なるいほしろ小田にひたはへよ霧かくれくる鹿も社あれ
都にもいかに待らん逢坂のせきはやいてよもち月の駒
月かけの尾花か末にやとる夜は露ふきみたる風もうらめし
月をたにすませてしかな奥山のいはかき淸水み草はらひて
みそらゆくかけを岩まにうつしもて月に聲ある谷の細道
とふ人もなき山里はあたら夜の月の光を我のみや見ん
こしかたも今行末のともなをさもくもりなきよはの月哉
月ゆへに空にもなとかしらさらんこゝを明石の泊りなりとは
衣うつきぬたの音のいかなれは哀もよほす妻となるらん

植て見んきくの淸水の末結ふ人たに千世の年をえてけり
筏士はいかてかくたす大井川となせもしらす紅葉散しく
ゆく秋は西へかへるにきなるへに心つくしのけふにもある哉
かへる秋和田の原より行ならはふなかくしせよ沖つ白浪

冬

もみち散袖は冬のけしきにて庭にそ秋はたち歸りける
神無月木の葉ふりそふ時雨にはかつく袂も色かはりけり
なにとこはたえぬ時雨の音ならん降かひもなき宿としらすや
木葉ちる音はまかへといたまよりもるそ時雨のしるへ成ける
宮城のゝ小萩か原に霜をけは露ものこらす枯果にけり
柴の庵床さへ渡る冬の夜のね覺の友はあられ成けり
さよ衣かたしく袖のさえしかはかれてしりにき今朝の初雪
日數へは道もそたゆるなかゐせし初雪ふれはをのゝ山さと
庭の雪跡をつけしと思ふまに人もとひこぬ宿とみゆるらん
紀國やをみのうきはの友千鳥ゆふかけてこそ聲はきこゆれ
更しなやをはすて山に降雪をなくさめかれし月かとそみる
しかのうら汀の氷かさなれはよるさゝ浪も聲そかはれる
霜かれの蘆間の氷ひまやなきほすゑをまはるおちの村鳥
合せつるましろの鷹をさしとりてとたちかへすは賴もしき哉
ゆき深き山里のみや春まつと暮ゆく年をおしまさるらん

戀

よそなから三室の山のいはれ分いはれはいとゝ苦しかりけり
よそへても思ふ心をしらせはや秋風わたる葛のうら葉に
しろらめやてひきの糸の一すちにわくかたもなく思ふ心を
落つもる泪は淵と成にけりいつかあふ瀬にかはりゆくへき
淺ましやいかなる神のちかひにて戀てふことをあらせ初けん
戀しさにならふなけきやよに有と哀をしらん人にとはゝや
わか戀は深き沼田の心ちしてこゝともえこそ思ひかへされ
あちきなやあたのしのへの草枯に虫こそかゝるれをは鳴しか
逢事はうつゝとも猶おほえれとまたこれ程の夢は見さりき
おひみての後のつらさを思はゝやと思ひしとそ今は悔しき

羇旅

なかむへき都の方のなかめさへあさゐる雲のへたてつる哉
草枕都を夢にみつるよは明ゆく空もいそかれぬかな
木の間もる山路の月はなか〳〵におほろなるさへ心すみけり
暮ぬとてのらのをかやをかり敷は露もねられて明しつる哉
見るまゝにおらすなりゆく山路にも空は都にかはらさりけり

山家

春をあさみまた花さかぬ山里は梢までこそさひしかりけれ
柴の戸をしけるむくらのさし籠て風たに夏はいらす成ぬる
谷ふかき槇の葉しけきみ山邊は思ふはかりに月をたにみす
した柴のかれ行ほとに成ぬれはつま木こりつむしからきの里
戀しさの深き山への住居には都のかたのかけもなつかし

鳥

小山田のすこかなるこに風すきて穂なみにさはくむら雀哉
をく霜に枯もはてなて萱くきのいかてお花の末にゐるらん
うきしつみ逢ふ淺瀬や多からん淀のかはさに鶴むれゐる
いかなれは明つけ鳥をいとふらん老かれ覺の友と思ふに
稲荷山みねの杉むらたち出て明ぬとつくるともからすかな

祝

さかへさすはこやの山のわか松は千世もやちよも花そ咲へき
君か代は幾よろつ代としらはこそ濱の眞砂もかそへあはせめ
わたつ海のはてをはそこと尋ぬとも限もしらぬ君か御代かな
千とせともなにか限らん君か代はしら玉椿數もしられす
君か代はなからのはまに舟とめて猶も千年をつみそくはふる

# 正治二年百首和謌下

詠百首和歌

沙彌釋阿

春

萬代のはしめの春としるきかなはこやの山の明かたの空
霞たつ四方の山邊を見渡せは春は都の物にそ有ける
春のくるつかひのためや鶯のあをき色には成初めけん

たまはゝき初子の松にとりそへて君をそいはふ賤のこやまて
春日野の春のわかなに祈りをけはやを萬代も君そつむへき
さわらひは今はおりにも成ぬらんたるひの氷岩そゝくなり
梅の花さきぬる時はをしなへて春の空さへ匂ふなりけり
むかしよりいかに契りて梅の花色に匂ひをかされ初けん
さほ姫の春のすかたや是ならんなつかしくもある玉柳かな
春雨の靜にそゝくけしきにてあまねき御代は空に見えけり
嬉しくもわか君か代の春にあひて風閑なる花をみる哉
雲やたつ霞やまかふ山櫻花より外も花と見ゆらん
名に高きよしのゝ山の春よりや雲に櫻をまかへ初けん
たましきや風しつかなる花の本心もちらぬ物にそ有ける
しら河のむかしはまつそ思ひ出るうれしき春の花をみるにも
花はゝる春は花をやおもふらん時も草木も契りしあれは
君か代はゐての酴醿さきそひて千代をかさぬる玉水のかけ
いとゝいかに日吉の神も守るらん春のみ空の長閑なるよは
むらさきの雲と浪とそつらなれる花とはわかすたこのうら藤
いくかへり春のわかれもおしみきぬ緑の空もあはれとはみよ

夏

余所に見る心も涼し夏くれは大宮人のせみの羽衣
夕月夜ひかりをそへて卯花の名よりこえたる玉河の里
いにしへを思ひよそへて忍ふれは花たち花や我を待らん
子規まつ夕暮のむら雨はきなかぬさきに袖ぬらしけり
なつかしき聲をとゝめは子規さ月のたまにむすひそへまし
ゆくかたをおもひそをくる時鳥みむろの山の明ほのゝ空
みたやもり外面の池に水こえて秋ある五月雨の比
五月雨は泉のそまの民なれや宮木は水のくたすなりけり
かゝりさしよ川のたなはうちはへてのちせもしらぬ鵜飼舟哉
幾よかもは山か露にしほるらんともしになるゝ賤のますらを
凉しやとうきぬの池に袖ぬれてひしとりすさみくらす比哉
あふ坂は關の清水にせかれつゝ過そやられぬ杉の下陰
神代より君をも神とまほりをけはこほりも夏の物とこそなれ
鳴神も聲おさめたり稲妻のひかりはかりそ夕立の空
麻のはやとのもとゝそ御秡するあらふる神はあらしと思へは

秋

伏見山松の陰より見渡せは明る田面にあき風そ吹く
七夕のあふせを近くおもふより秋は心の空になるかな
三日月の野原の露にやとるこそ秋の光の初めなりけれ
秋になる野邊の氣色のあはれをも先しる物は荻の上風
女郎花匂ふさかりの萩か花うつる心をわきそかれつゝ
誰ための手枕にせんさをしかのいる野の薄ほに出にけり
秋の野は心もじのにみたれつゝこけの袖にも花やうつらん
かすならすうき身と何に思ひけんおほくの秋の月はみけるを

さらぬたに月みる程はなくさめし心はれたる秋も有けり

き丶をきし明石のうらの秋の月みるはかきりの猶なかりけり

秋の夜の月を見るこそこの世にもこんよの空も光り成けり

秋のよは雲も心のあれはこそ月のあたりは遠さかるらめ

うれしさそ猶かきりなき君か代にわかのうらちの月をみるとて

秋とに時をたかへすくる鴈は代々につかふる心あるらし

たのめをく人やあるらん波風にころもうつなり松かうら島

冴まさる秋の衣をうちわひて人まつ虫も聲よはるなり

となせ河紅葉におとす猿士はにしきを浪にたゝむなりけり

秋のくれとへかし人の山里をかり田の原にうつら鳴なり

かへる秋あらしの山をゆくならは猶ふきかへせ岑のもみち葉

たとふへき方こそなけれ春日の丶萩と鹿とをなれてみるにも

## 冬

冬きぬといはは田のをの丶柞はら色そめそふる時雨ふるなり

このはちる霜寒まさる淺茅生は心ほそさの住家なりけり

をしれほす山田も冬に成てこそおさまれる代の程は見えけれ

千世ふてふ山ちの菊のうつりきて小萩の庭に匂ひ添へけり

かみな月しくれてわたるむら雲に心は空に袖はしほれぬ

外山なるまさきのかつら色付は吉野の奥の冬そしらるゝ

冬きてそとふへかりけるみ山へは柴おる道も霰玉しく

炭かまの煙はかりを人めにて初雪ふりぬ大原の里

雪ふかき山のは出る冬の月心とはもをよはさりけり

かめ山や大うち山をみ渡せはふたおにみちぬとよの雪かも

うれしくそ尋れとふなる友千鳥老の寐覺の有明の空

よを殘すさひしき窓は埋火のあたりはかりそたのみ成ける

あし鴨の入江の床に氷とちはかひの霜ははらひかぬらん

雪の中に佛の御名をとのふれはきく人も皆つみそ消ぬる

舟路よりゆくともしらは年の暮まつらの山に袖もふらまし

## 戀

戀衣いかにそめける色なれはおもへはやかてうつる心そ

さしも草さしも忍ひぬ中ならは思ひありともいはまし物を

いかるかのよるかの池の寄邊にもいひたにとをせ思ふ心を

かくしもは契あれはそ思ふらんたゝかされてよをしの毛衣

ひとりねは騎にしつけの枕さへかはすこよひは哀なりけり

契あへす明行床にさらにねてかへる別を夢になさはや

枕たに知なる物をかはしをきてなそしも人のつれなかるらん

君をのみたちてもゐても思ふ哉かりちの池の鳥ならなくに

我はこれ岩うつ磯の浪なれやつれなき戀にくたけのみする

恨みてもなに丶かはせんあはてのみこしの湖みるめなけれは

## 覊旅

かりそめの袖も浪こす須磨の浦にもしほたれけん昔をそしる

都路は遠かられとも草枕しかのは山も涙はかけゝり

かりそめと思ひなせとも篠の庵もよやなかゝらん露の置そふ
旅衣しほれぬ道はなけれともなほ露ふかしさよの中山
たひの道しのふの奥もしらるれと心そ通ふちかのしほかま

山家

心あらん人のとへかし梅の花霞にかほる春のやまさと
夏きてそ住かへりける山里は卯の花かきれ子規なく
思ふにはなをまさりけり奥山の松のあらしに鹿の鳴秋
見る程は花と月ともいかゝあらん雪降しける冬の山里
身のうきはいとふ人こそつれなるを哀なりける松の門哉

鳥

たくみとり
難波人あしのあなはやほさてたくみとりにかすむ夕煙哉
かはらすゝめ
大さはの池のげしきはふりゆけとかはらすゝめる秋の月かな
はやふさ
恨みかねたえにし床は昔はやふさすなりにきよはのさ莚
しらふのたか
山里は秋をまつ風をしらふ野田かる賤は千代うたふなり
みやまつくみ
大和路をたえす通ひしおりのみやまつくみゝけん井出の玉水

祝

君か代はあまてる神にまかすれは空に千年は兼てみえけり
萬代に千代をかされてやはた山君を守らん名にこそ有けれ
幾萬君を惠まん紀の國やみつの山にも千代を添へつゝ
君か代はかもの山風しつかにてみたらし川は千度すむへし
敷島や道をはともに住よしの松もうれしと千代を添ふらん

## 秋日詠百首應　大上皇製和歌

散位正四位下臣藤原朝臣隆信上

春

夜をこめて春たつ空の朝ほらけかすむと見れは鶯の聲
ひくたひに千年をそふる小松原いく萬代を野邊にきぬらん
鶯の聲にもしるきけしき哉春きぬとしもなかぬ物ゆへ
跡たえし雪かりそこのいほりまて吹あらたむる春の山風
いかなれはつむへき物とまたるらん種まくともしらぬ若菜を
をしなへてよもの梢はかすめとも梅か香のこす春の曙
梅の花色も袂に吹とめは木末の風はうらみさらまし
秋よりも梅かほる夜の月を見ん鹿こそ鳴かれ袖は露けし
花ゆへにまたれし春の氣色にもかすむはつらし岑の月影
枝かはす梢のさくら咲ぬれは花をむすへる青柳の糸
道たえてまた雪きえぬ山里は花はさくやとゝふ人もなし
かつらきや高まの山の峯つゝき朝ゐる雲や櫻なるらん
しろきかなのとけき春の花さかりちらぬ櫻にかほる山風

年をへて惜みなれにし花の色も長閑けくみゆる世に社有けれ
花ゆへにそむきもやらて過る夜のけふこそ春にあふ心地すれ
山さくらちりなん後のおもかけをかはらすみせよ峯の白雲
かくはかり惜む名殘にたへぬ身を誰とへとてか花のちるらむ
いまはとて餘所になりゆく鴈金も春のあはれは猶殘りけり
つきもせす心にとまる春の色をけふ暮ぬとはなに歎らん
おしみかね春の名殘はさもよ更ぬあとなき空をなかめ殘して

## 夏

夏木立あをはましりの花もあれは猶染かへしけふの袂は
なつのよはいらても月そ殘りけるうの花山を西になかめて
子規たゝ一聲のつらさにはまちえぬ人そうらやまれける
すきぬなりやよまてしはし子規二聲とたに人にかたらん
杜宇なこりそいとゝをしほ山小松か原の明ほのゝこゑ
あまならていかゝかるへき五月雨に沼のあやめは浪の下草
五月雨にたのむつなても朽果て波にひかるゝ淀の川舟
さらぬたに猶なつかしき夏の夜のね覺に匂ふ軒の橘
老か世は猶のこりけり夏のよをねぬに明ぬと何うらみけん
夏草のしけみに宿はうつもれて露にもくもる山の月影
春秋の木末のほとももとへかしなすゝむたよりの夏の山影
またきより扇そさらに忘れける岩間の水を手にならしつゝ
山の端に入日の影はさしなから一むらくもそ夕立の空
身をこかす夜はの螢のおもひにもちかつく秋は凉しからすや
ゆふかけて袖をいはふ川社おりめつらしきさゝ浪の聲

## 秋

衣手はまたひとへにていかなれは今朝たちかはる秋の初風
秋をへてなかき契はたえねともあくるかなしさ天河の糸
その名とはしらてもみはや女郎花さても匂はむつましきかと
うつらなく入江のお花うちなひき浪かけそふるまのゝ浦風
見るまゝにやかてきえゆく野邊の色を又ほのめかす夕月夜哉
くまもなき月をなかめぬ心にや千里はほかの物としるらん
あまの原おもへは秋そあはれなる一夜も月のあたにすまれは
昔いまみるにもあまる光かなおりから月の影やそふらん
すみのほる心やゆきてのこるらん月の都の有明のそら
なかめても六十の秋は過にけりおもへはかなし山の端の月
横雲のはれゆく跡の明ほのに峯とひ渡る初鴈の聲（にみつらんイ）
心なき野邊のをしかのいかて秋の哀を聲たつるならん
秋はたゝさなから夜半のね覺にて鹿の音なかき曉そなき
秋とても誰かはつらき眞葛原こは何ゆへの恨なるらん
衣うつそなたの風にさよ更て枕にひゝくつちの音哉
しら菊の花になくさむ日數かな秋にかきらぬ匂ひと思へは
をとらしとをのかさま〲よはるなり秋は末野の虫の聲々
草も木も今朝は名殘のみえぬかな野分や秋の恨なるらん

立田山すその丶霧はへたつれと空に紅葉そあらはれにける
この葉ちる深山の里に秋くれて心はかりそ猶とまりける

冬

今朝見れは野邊の千草もうつもれて木葉そ秋のへたて成ける
わけ過し露をは霜にをきかへて生田の小野に冬はきにけり
たれ住て宿の梢となかむらん時雨にくもる遠の山本
月のもる旅れの夜床さえ〳〵てはたれ霜ふり明ぬ此よは
いろ〳〵にちりし紅葉も音絶て月影寒き木からしの空
音さゆる風のまに〳〵霰ふり夢路たえれとなれる比かな
うきれするさよもふけゐの浦なれてあかすかほなる友千鳥哉
沖津風夜半にや寒き友千鳥くもにつきてそ浦傳ふなる
ひまもなくおつる時雨に風さえてしのふの森は垂氷しにけり
み山邊は雪けの氣色たゝならてつもらぬさきにとふ人そなき
何事をけさなけかまし出る日にしはしやつれぬ雪と思へは
それをたにうつみなはてそわくらはにとはれし跡も雪の下道
かりくらし枯野の草の雪をれをやかて枕にむすふ寒けさ
雪うつむ山路のそこの夕煙柴おりくふる誰か住ゐそ
なにををまつとしもなきみ山邊はとしもかくてすきの村立

戀

色ふかく思ひたつたの山路にもかくや時雨のひまなかるらん
けふこそは思ひしりぬれ陸奥のしのふの里の深さ哀を
思ひれの夢も景色やしろきとてえそまとろまぬ人のあたりは
朝夕の露のみふかきおもひ草色をみすへきとのはもかな
錦木もなけきをたつる物ならはいくちつかにか今はならまし
まつほとはいけろ心もなき物をいつくにのこる恨なるらん
わひつゝも幾夜になりぬ敷妙の枕さためぬうたゝれの床
別れしもいまの寢覺のかなしきはあらし身にしむ曉の空
おもひれに見果ぬ夢の名殘たにさむる別れはいける物かは
あかぬよの別れをつけし鳥よりも獨かなしき鐘の暮かな

羇旅

夢にたに通ひなれたる旅ならはまた見ぬ道もなくさみなまし
露けしな草の枕をすか原やふしみの里のゆふくれの空
こし道を今朝たちかへりなかむれは雲に消行古郷の空
今こんの契たえにし旅の空なをまたれぬる有明の月
まつらかたみはよにしらぬうきれ哉袖も枕も浪はかけつゝ

山家

都人とはぬもいかゝうらむへき雲にわけいるやとの通路
まきしける山下露に袖ぬれて麓の里をすみそ佗ぬる
いかてなを古里人につけやらんよな〳〵かなしみれの松風
とはゝやな猶山ふかき門もあらはこれより月や淋しかるらん
をとしろき柴のさ枝を折敷て軒端の岡を人かよふなり

鳥

尋ねこし鶯の草くきかくれなく霞晴行身にこそ有けれ
おりにあへは鳩吹秋の山ひこも萬代とこそこゑはたつなれ
行末をかゝみてみする足引の山鳥の尾のなかき世迄に
みさこゐるあら磯浪の音までも風閑なる君か御代かな
かゝる代に逢そ嬉しきいかるかやとみの小川の跡したえねは

祝

千年ふる松には竹そくらふなるためしもなきは君か萬代
鶴かめも千とせまてとそ聞しかはそれより後は君にまかせん
君か代は雲井になれしたつもみな和歌の浦にて千年をやへん
萬代もつきせさるへきわか君を遙にたのむ身こそ老ぬれ
今はわれ惜からぬ身そ惜まるゝ君の八千代にあはんと思へは

## 秋日侍 太上皇仙洞同詠百首應 製和歌

従四位上行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家上

春

春きぬと今朝みよしのゝ朝ほらけ昨日は霞む嶺の雪かは
あら玉の年の明るを待けらしけふ谷の戸をいつる鶯
春の色をとふひの　守たつぬれは二葉の若菜雪もきえあへす
打渡すをちかた人はこたへねと匂ひそ名のる野邊の梅かえ
梅の花匂ひをうつす袖の上に軒もる月の影そあらそふ
花の香のかすめる月にあくかれて夢もさたかにみえぬ比かな
もゝ千鳥聲やむかしのそれならぬわか身ふりゆく春雨の空
有明の月かけのこる山のはを空になしてもたつ霞かな
おもひたつ山のいつくもしら雲に羽うちかはしかへる鴈かれ
よしの山雲に心のかゝるより花の衣は空にしるらん
いつもみし松の色かは泊瀬山さくらにもるゝ春の一しほ
しら雲の春はかさねて龍田山をくらの峰に花匂ふらし
高砂の松とみゆるにことつてよおのへの櫻いまさかりなり
花の色をそれかとそ思ふ乙女子か袖ふる山の春の明ほの
春のをる花のにしきのたてぬきに亂れてあそふ空のいとゆふ
をのつからそこともしらぬ月はみつ暮なはなけの花を賴みて
櫻花散にし春の時しもあれかへす山田をうらみてそゆく
春もおし花をしるへに宿からんゆかりの色の藤の下陰
しのはしよわれふりすてゝ行春のなこりやすらふ雨の夕暮

夏

ぬきかへてかたみとまらぬ夏衣さてしも花のおもかけそたつ
菅のねのひかけもなかくなるまゝに結ふはかりにしける夏草
卯花のかきねもたはにをける露散すもあらなん玉にぬくまて
もろかつら草のゆかりにあられともかけてまたるゝ子規哉
いかはかりみ山淋しとうらむらん里なれはつる時鳥かな
あやめふく軒のたち花風吹けはむかしにならふけふの袖哉
ほとゝきすしはしやすらへすか原や伏見の里の村雨の空
郭公なにをよすかにたのめとて花たちはなの散果ぬらん

たか袖を花橘にゆつりけん宿はいくよとをとつれもせて
わかしめし玉江の芦のよをへてはかられとみえぬ五月雨の比
夏草の露分衣ほしもあへすかりねなからに明るしのゝめ
片糸をよる〳〵嶺にともす火にあはすは鹿の身をもかへしを
荻のはもしのひ〳〵に聲たてゝまたき露けきせみの羽衣
夏か秋かとへとしら玉いはねよりはなれておつる瀧川の水
いまはとて有明の影の槇の戸にさすかにおしきみな月の空

## 秋

けふこそは秋の初せの山おろしに涼しくひゝくかねのをと哉
しら露に袖も草葉もしほれつゝ月影ならす秋はきにけり
秋といへは夕のけしきひきかへてまた弓はりの月そさひしき
いくかへりなれてもかなし荻原や末こす風の秋の夕くれ
もの思はゝいかにせよとて秋のよにかゝる風しも吹初めけん
から衣かりいほの床の露さむみ萩のにしきを重ねてそきる
秋萩のちりゆくをのゝ朝露にこほるゝ袖も色そうつろふ
秋の野に泪はみえぬ鹿の音はわくるをかやの露をからなん
おもふ人そなたの風にとはれともまつ袖ぬるゝ初鴈の聲
夕より秋とはかれてなかむれと月におとろく袖の色かな
秋をへてくもる涙のます鏡きよき月もうたかはれつゝ
思ふを枕もしらし秋の夜の千々にくたくる月のさかりは
もよほすもなくさむもたゝ心から詠むる月をなとかこつらん
淋しさも秋にはしかしなけきつゝねられぬ月にあかすさ莚
秋の夜のあまのとわたる月影にをきそふ霜の明かたの空
染はつる時雨をいまは松虫のなく〳〵おしむ野邊のいろ〳〵
しろたへの衣してうつひゝきより置まかふ霜の色にいつらん
おもひあへす秋ないそきそさほ鹿の妻とふ山の小田の初霜
秋くれてわかみしくれとふる里の庭は紅葉の跡たにもなし
あすよりは秋もあらしの音羽山かたみとなしに散紅葉かな

## 冬

手向してかひこそなけれ神無月紅葉はぬさと散まかへとも
山めくり猶しくるなり秋にたにあらそひかねし槇の下葉を
うらかれし淺茅はくちぬ一とせの末葉の霜の冬のよな〳〵
冬はまたあさはの野らにをく霜の雪よりふかき東雲の道
よしさらは四方の木枯吹はらへ一はくもらぬ月をたにみん
をとつれしまさきのかつら散果てゝと山もいまは霰をそきく
山かつのあさけのこやにたく柴のしはしと見れは暮るゝ空哉
冬のよのむすはぬ夢にふし侘てわたる小川は氷ゐにけり
庭の松はらふ嵐にをく霜をうはけにわふる鴛の獨ね
たれを又よふかき風にまつ鳥やをしまの千鳥聲うらむらん
なかめやる衣手さむくふる雪に夕やみしらぬ山のはの月
駒とめて袖うちはらふかけもなしさのゝわたりの雪の夕暮
白妙にたな引雲を吹ませて雪にあまきる峰の松風

庭の面にきえすはあれと花とみる雪は春まてつきてふらなん
いくかへり春をはよそに迎へつゝをくる年のみ身に積るらん

戀

久方のあまてる神のゆふかつらかけて幾代をこひ渡るらん
松かれをいそ過の浪のうつたへにあらはれぬへき袖の上かな
哀とも人はいはたのをのれのみ秋の紅葉を泪にそかる
忍ふるはまけてあふにも身をかへつ難面戀のなくさめそなき
わくらはにたのむる暮の入相はかはらぬ鐘の音そさひしき
あかつきはわかるゝ袖をとひかほに山した風も露こほるなり
まつ人のこぬよの影におもなれて山のは出る月もうらめし
うきはうくつらきはつらしとはかりも人め思はて人を戀はや
誰ゆへそ月をあはれといひかれて鳥のねをそきさよの手枕
みせはやな待とせしまの我宿を猶つれなさはをゝはすとも

羇旅

草枕ゆふ露結ふさゝの葉のみ山もよそに幾夜しほれぬ
なみの上の月をみやこの友として明石のせとを出る舟人
妹とわれといるさの山は名のみして月をそしたふ有明の空
こまなつむいはきの山を越侘て人もこぬみのはまにかもねん
みやこ思ふ泪のつまとなるみかた月にわれとふ秋のしほ風

山家

露霜のをくらの山に家居してほさても袖のくちぬへき哉
秋の日に都をいそく賤の女かかへる程なき大原のさと
浪の音にうちの里人よるさへやねてもあやうき夢の浮橋
柴の戸の跡みゆはかりしほりせよ忘れぬ人はかりにもそとふ
庭の面は鹿のふしとゝあれはてゝよはふりにけり竹あめる垣

鳥

宿になくやこゑの鳥はしらしかしをきてかひなき曉の露
てなれつゝ末のを頼むはし鷹の君の御代にはあはんと思ひし
君か代に霞を分しあしたつのさらにさはへの音をや鳴へき
いかにせんつらみたれにし雁かねのたちともしらぬ秋の心を
わか君にあふくま川のさゝ千鳥かきとゝめつる跡そ嬉しき

祝

萬代にときはかきはにたのむ哉はこやの山の君のみかけを
あまつ空けしきもしるし秋の月のとかなるへき雲の上とは
わか君の光りそゝはん春のみやてらす朝日の千世の行末
おとこ山さしそふ松の枝ことに神も千とせをいはひ初らん
秋津島よもの民の戸おさまりていく萬代も君そたもたん

## 詠百首和歌

上總介藤原家隆上

春

あまの戸の明る氣色のしるき哉はこやの山の千代の初春
谷川のうち出る浪も聲たてつ鶯さそへはるの山風

けふもなほ雪はふりつゝ春霞たてるやいつこ若菜つみてん
雪きえてのちさへたとる山路哉霞にのこる松の下おれ
春の色とこれも見るこそ哀なれきゝす鳴野の荻の焼原
梅か香にむかしをとへは春の月こたへぬ影そ袖にうつれる
くもるとは雪けの空に見しほとに霞も果す春のよの月
青柳の糸につらぬく白露を玉にみかくは朝日なりけり
初瀬山一むらかすむなかめより雲井にあまる花の面かけ
春きてもいまいくかありて櫻花よしのゝ山は雪きえにけり
よしの山峯の櫻をきてみれは霞は春の麓なりけり
春霞わけゆく空の白雲もひとつになりぬみよしのゝ山 花イ
庭の雲うつらふ花のこすゑまてたつれぬ人の心をそみる
たちとまり猶みてゆかん春風の櫻吹まく志賀の山越
つく〳〵とあさちにそゝく春雨は庭のすみれをまはら也とや
みよし野や尋ぬる末は霞つゝたのむの鴈の聲そかへらぬ
よし野河きしの山吹さきにけりみれの櫻や散果ぬらん
春風のゐてのうき草吹分てよるへの浪にかはつ鳴なり
ぬれつゝもおりてかへらん石はしる瀧つ岩根にかゝる藤波
心さへかたもさためすなりにけりけふ暮果ぬ春のなかめに

夏

春夏もうつらふ色にならひける花の袂を猶おしむ哉
浪の音は松のあらしにきこゆ也卯花かほる玉川の里
たつれてもいかにまちみん子規三輪の山邊の夕暮の空
思ひれのよはの夢路のほとゝきす心の空に一聲そきく
衣手のなみたもるらし郭公雨うちそゝく忍ひ音の空
つゝみけん昔やしのふたち花の匂ふま袖にくる螢哉
雲路まて匂ひやいつる時鳥花橘にこゑのおちくる
五月雨に軒のあやめの匂ひきてえならぬ袖にかくる浪哉
ふもとまてひとつ雲路と成はてゝ山のはもなし五月雨の空
ともしするは山の峯のかり衣秋にもまさる夜半の露かな
あたらしやまかきもしつむ夏草のしけみにましる大和撫子
空はみなこりもみえぬ夕立の露にやとかる淺ちふの月
夏の夜はならの葉そよく風よりも月のかつらの影そ凉しき
し水せくまた夕かけのいは枕やかて明ゆく秋の空哉
ほにも出ぬ門田の稲葉うちなひき暮れはかよふ秋風の聲

秋

いつしかとさひしかりける草の原今朝ふく風に秋やきぬらん
篠分し道たにあるを天の川かへるあしたの袖をしそ思ふ
かりの鳴峯のむら雲吹まよひ秋風さむし夕くれの空
ゆめちより露やをくらん草の原さむれはやかて袖そしほるゝ
いろ〳〵の千種の露やなく虫のこゝろ〳〵の泪なるらん
露さむき淺茅か本にうちわひて月影かこつ松虫の聲
たか秋にあらぬ光をやとしきて月よなみたに袖ぬらすらん

立田山また色つかぬ木すゑより秋にはあへぬ月の影かな
をは捨の山のはいつる月影のかたふくまてにすめる空かな
こよひ誰れて明すらんいたつらになかめすつへき秋の月かは
あふ坂のせきの清水はこほりして影はへたてぬ望月の駒（けイ）
心あての煙はかりをくもりにてふしの高根を出る月かな
ものをにたゝかりそめの秋の色を月こそなかき光なりけれ
うちもねすこゑもあはれにおとろかす門田の末に鹿そ鳴なる
秋はきの下葉の露も色つきて鶉なくなり宮城のゝはら
石の上ふるのゝまくすいくかへりうつろふ秋は風うらむらん
とふ人の袖かと見れは古里のきりのまかきの白菊の花
里はみないてみしまゝにあれにけりたれ深草に衣うつらん
あらしふくすゝの下草うらかれて吉野の山に時雨ふるなり
秋もくれ鹿もいまはのこゑすなりをくらの山の夕暮の空

冬

見るとなき夢もこのはにむすほゝれはかなく明る神無月哉
をのつから紅葉ふみわけとふ人も道たえ初る庭の霜哉
このほとは駒うちわたす山川もこの葉の底に聲むせふなり
しくるともなれなはとこそ思ひしかならへはかはる庭の松風
をとへとちきらぬ夜半の嵐たにたゝには過きぬ柴のあみ戸を
玉ほこやかけ見し水のいかならん空さへこほる冬の夜の月
霜のうへに霰ふるよはあしかものはらふ羽音のしけくも有哉
うらつたひけふも汀のともちとりいたくなれそ須磨の浦
有明の月を千里になかめつる光をやかてうつす雪哉
我宿のすゝきをしなみふる雪は秋風よりもさひしかりけり
雪ふかみたつぬる宿はうつもれてわれよりさきの鹿の通路
さひしさのともたになきは庵さす野中の松の雪の夕暮
さゆる夜の汀にのこる浪の音やうら風わたるしかの濱松
山里はかきねの梅の匂ひきてやかて春あるうつみ火の本
峯の松澤邊の鶴も年暮てをのかさま／＼ふりまさるらん

戀

山深みしられぬ戀をすかのねのなかくや人に思ひ亂れん
ほのみてし人の心はうき草の下ゆく水のさそふ面影
みすもあらす見もせぬ人のためしかはさつきの空の夕暮の雲
いかにして忍ひも果んよとゝもに床に浪こす袖のうらかせ
たのますよさてやはこひん月草のうつれはかはる袖の白露
泪河なかめにまさる袖の上にせきかぬはかり人そ戀しき
をのつからあすまてあらは尋ねみよそをたに長き契と思はん
うつせみのなく夕暮にかはれとも契らぬ袖にかくろ露かな
今はたゝまたしと思ふよな／＼のふくるもつらき鐘の音哉
あふと見てをそともなく明ぬなりはかなの夢の忘れかたみや

羇旅

月かけもけふみかのはらいつみ川浪のやとかせ今しはしみん

海山もそこはかとなき旅ねかな馴し都は夢路かはらて
足引の山のあなたにみし雲を幾重か旅の空にわくらん
はまひさしはるかに霞む詠めにもこしまの浪は袖にかゝれる
ちきられと一夜は過ぬきよみかた浪にわかるゝあか月の空

山家

いとひてもなをふる里をおもふ哉まきのお山の夕霧の空
ふみわくるをさゝか原の道たえて庭も笆も苔生にけり
時しあれは淺ちかむしも鹿の音もかはらぬ宿に秋風そ吹く
いりぬとやみやこの人はなかむらん窓より西に廻る月影
瀧の音松のあらしも馴ぬれはうちぬるほとの夢はみせけり

鳥

とゝのれもみつのみのりたきかすなりみ山の庵の明かたの空
深き夜に雪のみ山の鳥のねをおもふもかなしれやのさむしろ
故里の栖の木末をなかめてもすむらん鳥を思ひこそやれ
をのか身にいかなる鳥の殘すらん紅葉をはらふ冬の山風
哀なりこしのしられにすむ鳥も松をたのみて世を過すらん

祝

神路山雲井はるかに出る日のいく千代君にかけをならへん
君か代は春のみやまの峯つゝきおいそふ松の末もはるかに
君か代に名をあらはれて友千鳥なからの濱に聲きこゆなり
たつれつゝ山路の菊をおる袖に露も幾千代をかんとすらん
萬代を八千島かけて見渡せは浪もきはある心地こそすれ

# 秋日陪太上皇仙洞應　製百首和歌

從四位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守藤原朝臣範光上

春

きのふまて雪けの雲と見し空のやかて霞の春の明ほの
今朝みれは霞こめたりこれやこの冬と春とのへたてなるらん
春はなをあさまの野邊のいつのまに雪も消あへすもゆる草そ
いつしかとわか物かほに鶯の春のみやにて聲ならすなり
古巢出てまた里なれぬみ山邊の霞のうちの鳥の一聲
春霞たえま〳〵をなかむれはしきつの浦の松の村きえ
色そむるゑしまか浦の月をまたうすゝみわたす夕霞哉
櫻さくしかの山越風すきて吹よせてけり花のさゝ波
海原やしほちはるかになかむれは霞にきゆるあまの釣舟
れやちかき梅の匂ひは人しれす袖のありかと思ひなされて
この春は櫻か下に家居して花のあるしと人にいはれん
なひきなはさてもはてなて青柳のいとおしきまて思ひ亂るゝ
ふしの山すそ野にもゆるさはらひや峯には春の煙なるらん
よしの山みねの櫻のさかりこそ霞（雲霧イ）につゝくなかめなりけれ
みて歸る人にとはゝやよしの山霞のうちは花さかりかと
つみふかく花に心のとゝまれは春の命のおしくも有かな
山高みふもとの里を見渡せは四方の木末はなつなりけり

野邊に出る跡はなかめてきえにける霞のうちや都なるらん
春ふかみ青葉ましりの梢よりなを花おもふみよしのゝ山
おしめとも春のなかめはつきはてゝ物あはれなる入相の鐘

夏

今朝まてはきのふの春のとなりとや名殘にかすむ曙の空
夏のよは卯花かきに波こえて月をうかへる玉川の里
よもすから卯花山をなかむれはかけかたふかぬ月そ澄ける
軒近く聲おちくなり子規花たち花に風かほるころ
杜鵑なく音につけておもふ哉なにとやみちにまよふ詠そ
杜宇なを一聲はおもひ出よ老その森のよはのむかしを
子規雲路はるかになのるなり五月の空の明暮のほと
あやめふく軒のしのふの白露はよもきの人の玉の秋か
五月雨の晴ゆく空の明ぬれはなかめそ近き横雲の峰
露のみといはゝかしこしあたにてもたゝ蓮葉にやとる計そ
わか窓に聚めぬかけといはゝうし澤の螢をいかてかくさん
み山出るすそのゝ鹿を朝立て袖そほぬるゝ夏かりの露
とるたひに袂に風の凉しくてあふきに秋はかれてきにけり
夏のよのすゝむまとゐを同しくは月見るかほに人にいはれん
御祓して深ゆく袖の露けきは河瀨に秋の風や吹らん

秋

つの國やこやのうら風音信てあしの枯葉に秋はきにけり
いはれともけしきにしるし初秋は風うちそよく荻の夕暮
秋の月しのふの露に影そへて星にそかよふ菊のなかめは（かけイ）
しかの浦に深ゆく月をなかむれはさゝ波こゆる西の山風
村時雨うすこほりてやわたるらん木々の梢を染るいろ〳〵
うす雲の星にそかよふ夕霧のまかきのうちの白菊ゝ花
をのつから心の水のすむはかりわれをもてらせ秋の夜の月
夕されはまのゝうら風うちなひきお花か下にうつら鳴なり
月もいかに哀とや思ふわれ昔かつらおりてし一もとゆへに
ひこ星のゆきあふ影をうつしつゝたらいの水や天の河浪
横雲のしらむとすれは影消て朝日にかはる有明の月
初鴈のすかたゆかしくおもはせて聲にてつくる秋霧の空
鹿の音にこはたか色を吹そへて風わたるなり宮城のゝ原
秋の夜の空を色にうつすかなをく露ことに月をやとして
秋霧のそこととしるしはなけれともうすゝみわたる三輪の杉村
紅葉ちるよもの山邊にあくかれて行衞さためぬわか心哉
物ことにあはれなるへきけしきにて秋にはあへぬ袖の露哉
とゝひし虫の音もやゝよはりつゝ深ゆく秋を何にこたへん
秋くれていまはの比のむしの音もよはり果なは何心地せん
何事に露もこよひに秋果てあすは朝の霜となるらん

冬

秋霧の更ゆく空のうちさえて今朝は雪けの曙の空

むらさきにうつろふ八重の菊に又白きかはきとみゆる初雪
とふ人もなき山里は庭の雪に跡つけぬまてこひしかりけり
庭もせに紅葉のにしきしきはへて光をやとす冬のよの月
月さゆる須磨のうらちをなかむれは泪もよほすさよ千鳥哉
哀れなる白水郎のしほやのけしき哉雪の戸さしに煙たえせて
山おろしの庭の木葉を吹風に月もたゝすむ心ちこそすれ
もみちははまかひはつとも松の葉はかなはし物を木枯の風
炭かまの煙の空をなかむれはやかて雪けにかきくもりぬる
みなかみの谷の小河に氷してかけひの水の音たにもなし
ちりつもる峯の木葉をさそひきて風に色ある冬の山里
雪ふれは身に引そふるはし鷹のたなさきの羽そしらふ也ける
しなか鳥ゐなのさゝはら風さえて霰たはしる音そよくなり
立田山峯の嵐にあらはれて木葉の雨は音はかりこそ
春まては花になかめやつゝくへき吉野の山の雪の明ほの

戀

かくはかり面影にのみたちそへは是をやあふと思ひなさまし
ならはれは戀の泪とえそしらぬかたしく袖の露けきやこれ
かすしらすあまさぬよはの暁にあはれをとふは鴫の羽かき
まちまちてなをいつはりとしる程は有明の月の山の端の雲
何となくさしいつるいもか我をみてふりくるかみや月の村雲
こひ衣袖のしらなみせきかれてあふせもしらぬ泪河かな
こひこひてあふ嬉しさの泪こそつらきにまさる袂なりけれ
わかこひはいはての森の下紅葉いつの人まに色に出さん
おもひかねほのめかしつる俤のなかめそにしに有明の月
うしやいかにあふは夢にてなきゐつゝ今はの空の明暮の雲

覊旅

あはれなる春の明ほの朝立ぬ霞の底や暮の旅ひと
さくらさく木の本ごとにたちよれは日數へぬへき春の旅かな
出しより駒もはやめすゆきくらす月に宿かる東路の空
たひ衣物かなしさにはらはれはなみたにきゆるまくりての雲
東路のなかめはにしにかよへともなみたにきゆる浮雲の空

山家

都人しはしとゝめよよふこ鳥さてこそなれは名をあらはさめ
おなしくはみやこの友とむすはゝや袂涼しき山の井の水
あはれたゝ山里はみしをのつから世をそむくへき心もそつく
さゆる夜のこしの白れをなかむれは雪こそ月の光成けれ
山里のなかめは空につゝきけりひはらか末に有明の月

鳥

春の夜はみしかき物をあなにくやいとゝよなかのやまめ烏や
山里のわさ田の庵にをのつから友なふものはみなくちまもり
秋の野のもすのにくさしいかならん露ふき結ふ夕暮の風
山河の心ほそくもみゆる哉をしのうきねのたゝ一つかひ

やみとても厭はぬものはうかひ舟瀬々の浪やくかゝり火の影

祝

萬代の花を見るへき君なれは春のこゝろものとけかるらん

君か代にすむへき水をむすひあけていく萬代か夏を忘れん

わか君の千とせの秋としりかほに長閑にすめる夜半の月哉

み火白きかけにたちまひいのる哉君か千代ふるからかみの袖

更に又明日より千代の春なれは君はけふをやおしまさるらん

## 詠百首和歌

沙彌寂蓮

春

明るより空にけしきのしるき哉霞や春のさきに立らん

いつしかと谷の戸ほその明かたに霞そめたる鶯の聲

雪ふかき窓をへたつる梅かえのさきぬるかたや鶯の聲

あはち島かよふしるへに立けふり霞にまかふ須磨の明ほの

春もなを雪ふる里は若菜つむ今朝よりこそは野邊の通路

春風に池の氷はとゝまらてうきねの鴨そ猶のこりける

青柳のなひく木末の色のみそ風にまかせて見るへかりける

ゆふ霞入日の影にたつた山春の木末も色かはりけり

白雲のかさなる峯に尋つる花の都はふもと成けり

山の端もあたりに遠き宮古にそ雲にまかはて花はみるへき

春の色ひとつにこめてあまの川雲のみなとやみよしのゝ山

山ふかく心すむへき庭かな花ゆへなれてかたらましかは

たつねつる木の下風に雪散りて花ゆへ春もわすられにけり

やへしけるむくらの門はをのつから庭まて散らぬ花も有けり

うらみわひ空にもかへるなかめ哉花ちる里の心よはさは

霞しく野邊の氣色はあさみとり染こそやられ春雨の空

こしちにはまたふる雪もある物をそなたの空に消る鴈かね

春ふかき井手の旅ねのかへるさは袖よりそちる餘藤の花

鶯のふるすにとめし子規かへらはさそへ雲にいる聲

しかの浦やけふ立かへる春風にこほらぬ浪も遠さかりけり

夏

今はとて山ほとゝきす松かえに春もかゝれる池の藤なみ

我もゆき人もかよひて卯花の垣ねそなかはへたて成ける

はれまなき五月の空も卯花のかきねにはるゝ玉河の里

ふかきよの夢よりほかに子規心そさむる明方の空

名にしおはゝおいその森の杜宇おなしとこそ聞まほしけれ

軒ちかきはな立花の匂ひきてねぬよの夢は昔成けり

五月雨やあやめの末につたふらんとをさかるなり軒の玉水

しほみたぬまのゝ濱路のさゆりはも入ぬる礒は五月雨の比

おりたてはにこる山田の程もなくすむと見ゆるは早苗なり鳬

とこ夏のあたりは風も長閑にて散かふ物はてふのいろ〳〵

ゆふたちの晴ゆく空の雲間よりおもひあへなる夜半の月影

山かつの煙はかりとたくかひのうへにもゆるは螢なりけり
きえやらぬ名殘のみかは氷室山松にそ冬の風は吹なる
夏のよのいはもる水にすむ月は袖より結ふ氷なりけり
御祓する河瀬の浪も秋風をへたつるほとはせみの羽衣

秋

夏もなを名殘はおしきうたゝねの枕のにしに秋の初風
七夕の物思ふ袖や銀河紅葉の橋をしくれ初けん
余所にきくみねの嵐も荻のはに里なれ初る夕暮の空
むらさめは軒のしのふに露落て松風にいろひくらしの聲
みやきのゝ萩の朝露うちはらひ花に亂るゝしのふもちすり
物思ふ袖より露やならひけん秋風吹はたへぬものとは
うつしうへし小萩か本の秋の野に成はてれとは思はさりしを
みやこよりいく夜の草をむすひても月をおもはゝをは捨の山
名こりなく明石の浦に雲消て月にそやとる沖つ白浪
ものことに秋のあはれものこるなり霧のまかきにすめるよの月
山ふしのほらふく峯の夕霧にそこともしらぬすのゝ上風
里人の山風いとふから衣うつをとしもそ夜寒なりける
雲につゝく峯の庵にね覺してたゝこゝもとに初鴈の聲
としもへぬ淺茅か原の虫の音にむすほゝれたる宿とみなから
きり〳〵すまちかきかへに音信てよるの雨ふる庭のはせをは
野分せし小野の草ふしあれはてゝみ山に深きさをしかの聲
立田山しくるゝまゝに松の葉も紅葉に色のかはるなりけり
紅葉はの衣におつる名殘こそ袖より下は時雨なりけれ
かりのこす山田のそうつ心なき袖たにぬるゝ秋の夕暮
野邊はみな思ひしよりもうらかれて雲間にをそき有明の月

冬

千々におもふ秋の名殘や冬のよのね覺ならはす初なるらん
あさち原むしのねまても古里の時雨にのこる夕霧の空
みし秋もあかてや暮しうす氷紅葉をむすふ山の井の水
秋のうちは木末はかりとみし程に今は嵐も紅葉しにけり
雪ふらは道もたえなん山里をしくるゝまてはとふ人もかな
こからしのさそはぬ松の音まてもまきの板屋にふる心地して
さひしさは思ひやるたにある物を正木のかつら霰ふるなり
山里はとなりの竹の末のみそ雪の朝にしほれきにける
跡たゆる山路の雪をあはれとも心はかりそ我をとひける
東路の雪の朝はしら浪の下よりわたるさのゝ舟はし
早きせはむすひもやらて山河のさゝれつたひに氷しにけり
さよ千鳥明石のせとの浦風に鳥かくれゆく聲きこゆなり
きよみかた雪ふる空になく千鳥岩に音せぬ波や立らん
山かけに友たえぬとやをし鳥の岩間にやとる月にのりつゝ
いにしへの春まてしのふ心かなむかへんことも一夜はかりに

戀

身をつめは春まつ花のいかはかり色にもいてぬ物おもふらん
ひきかけし神の誓ひを頼むかな身こそうきたの森のしめなは
うきをしる袖のしつくは音もせて秋の夜深きね覺をそする
袖の上はちへにも露やかさぬらんしのたの森の秋の下草
人しれぬむねの煙を敷妙の枕の下のあまのいさり火
泪川しはしをさへんかたそなきよしのゝ瀧はせきとゝむとも
水鳥の玉もの床のうきねかは浪よせかけぬ時のまそなき
身のうさを思ふなみたもかはられと怨みぬ袖と誰か見るへき
うらみしな秋の夕へは今そ是それにもとはぬ心つよさは
有明になるまて夜半の月をみはこぬ人をこそ待へかりけれ

羇旅

都おもふ須磨のせきやのうたゝねに磯たちのほる夕波の聲
里人のよるの宿とふあつまやの軒端に月の先やとりけり
主しらぬ旅ねの跡の草枕なれけん袖の露はとゝめて
里近く山路の末は成にけりのかひの牛の子を思ふ聲
うらちかき山路の末に日は暮て麓の庵にあまのもしほ火

山家

山のはを軒の木末に住なして窓より出る有明の月
今はたゝ雲の八重たつおくにてもあたりをとはん山人もかな
あらしふく嶺のこのはをひろふまに袖に紅葉そ先つもりける
すむ人のかよはぬ外は跡もなし庭よりおくの谷の細道

住わひてなを山ふかく跡たえは誰をかこゝにまつたてる門

鳥

一はれにちさとをかける鳥もなをゆたかに遠し行末の空
目にみえぬ鳥も世にふる身の程はかのまつけにもすは作なり
ともすれは雪の深山になく鳥のおもひさためぬ身の行ゑ哉
哀ともいはゝやいはんをのはをかへすあふむの同し心に
百敷や梧の木末にすむ鳥の千とせは竹の色もかはらす

祝

万代の末はるかなるけしき哉はこやの山の春のあけほの
みな人の心も涼しいはし水ひかりを君か袖にまかせて
四の海浪のほかまて空晴て風ものとかにすめる月かな
八千世ともかきらし物を友千鳥むれゐる磯のをのか聲々
きみか代は八雲の空のはしめよりよむともつきし和歌の浦波

## 詠百首應　製和歌

沙彌生蓮

春

いつしかと春はこれより過にけりあさまの山の今朝は霞める
おとこ山いかてか春のこえつらん人もかよはぬ岩陰の道
ひめこ松あまたの千代を引つれて君か宿にも移しうふる（つるイ）哉
雲をたにいとひて人のなかめけりいこまのたけは霞へたてつ
たちそむる霞はそれとみえねともおなし木末の遠さかりぬる

鶯は外面の竹にふる雪を花のねくらに思ひたかふな
賤の女かかたみの底はむなしくておひぬ若菜に日數をそつむ
人なみに水田のこせりつむほとはおもはぬ袖のぬれにける哉
かた山のこかけは雪のきえやらてのこるくまなき春のよの月
梅か香を吹くる風の末なれや物なつかしき春の明ほの
かすならて賤かかきねに消のこる雪や我身のためしなるらん
あつさ弓ともやたはさみ諸人のをのかひき〳〵いとむなる哉
なさけなき人や都にとまるらん花のさかりのしかの山越
年ことに花はさけとも人しれぬ我身ひとつそ春なかりける
今はわか住家とすへきよしの山花ゆへにこそ入はしめけれ
春雨に草たつ庭のけしきよりおほゆる物を秋の夕暮
信濃路やすかのあら野にはむ駒はいはへそ優るまかふ人なみ
ますらをかうなての道にいくしたてみなくち祭る程はきに㒵
いくさとの人の心をさそふらん花よりつたふ春の山風
かはつなくきしの山吹散りにけり色〻かへたるゐての浮草

夏

たちかふる是や卯月の白かさねあさの衣は時もわかぬに
いろ〳〵の花ならねとも時くれはおりめつらしき夏木立かな
心にはかけてこそおもへあふひ草かさすとよそにみえぬ計そ
うへたつる笆のうちの茂りあひてはつかにみゆるふかみ草哉
子規いまやきなくとおきゐつゝ待事ありと人に見えぬる
五月雨に身をつくしとそ成にけるふるかはのへの二本の杉
みわたせは末せきわくるたかせ川ひとつに成りぬ五月雨の比
五月雨のひましなければ夏引のてくりの糸もほしそわつらふ
夏衣袂涼しく風吹きてほたるみたるゝゆふやみの空
宿との外面のかひの煙さへ民のかまとに立そひにけり
かしこきはなにはのとも多けれと高津の宮の氷室をそ思ふ
山川のいはもとゝよむせみの聲木末もやかてひゝきあひけり
ゆふたちの過ゆく雲になりぬるは心よりこそ晴はしめけれ
てらす日になを下露のころまも分入草の茂りぬるかな
ひまもなく軒をならふる山かつのすまゐをわかつ夕貌の花

秋

なにとなく哀秋にも成ぬなとおもひあへすも夜床さむしも
吹風もそのことゝなく身にしむは心に秋の立にやあるらん
銀河たえぬ契りのわたりにや羽をかはせるかさゝきの橋
ひこほしはまたこん年のけふまてを長き夜すから契をくらん
眞萩原朝立鹿のむれわけに風をもまたすちらすへしやは
たかまとの野邊の秋萩わけ行はおきなさひにもにたる袖哉
うつしてもうへまし物を女郎花老をいとはぬ花ときゝせは
秋風にたへぬ心もあるものを分てみたるゝかやか下をれ
風わたる荻の葉そよく是やこの物わひしかる秋の夕暮
めつらしや朝霧かくれきこゆなり外面の小田を初鴈の聲

時きぬと鴈やなくらん野邊見ればほころびにけり萩の初花
夕さればあきたのほなみうちそよぎ鹿そ分よるみ山邊の里
たどり行きそのかけちのほと計しばしはゝれよ秋の夕霧
草むすぶ露の枕にいつなれて月をさへまたやとす成らん
むら雲のたえまの月に鴈鳴て荻のはそよく有明の空
よ舟こぐ須磨の關やの月影にまつすむ物はかこのよび聲
暮ぬとも秋の野邊には花を見ん扨こそ虫の聲も聞けれ
秋といへは物をおもはぬれ覺まで聲うらめしききり〳〵す哉
うへたてし門田の稲もかり果て風たに今は音信もせす
暮て行秋をも空にみせかほに光りともしき有明の月

冬

なかめやるをちの山邊のむら雲の晴れはこゝに時雨ふるなり
きく人もなくて時雨や過ぬらんかり田の庵に雲そかゝれる
なかめこし四方の木葉も散果て（梢イ）跡にあらしの音殘るなり
いつしかも冬のけしきに成りにけり朝ふむ庭の音のさやけさ
朝な〳〵霜をく庭の草むらののころみとりもみえす成ゆく
ふく風にあられふりしくすのはゝ散ての後も玉そさきける
寝覺してきけはおれふす呉竹によのまの雪の程そしらるゝ
あたご山しきみか原に雪ふれは花に花をもそへてつむ哉
跡たゆる雪にみ山は成にけり里なれ初る鳥のこゑ〳〵
ひかたふくよさのうら浪高からし汀の千鳥むれて立なり
さゆる夜のほそ谷河のうす氷下ゆく水の音もいつまて
きゝすゝむかれのかくれのかひもなく草とる鷹の音聞ゆなり
池水の汀にむつるあちむらにくたけてみゆるうす氷なり
賤のをか冬のわたらひいとなみてすみつみ車ゆきゝしるなり
みわたせは軒のしのふにたるひして吹雪にこもる大原の里

戀

わか心いかなる色に出ぬらしまた見ぬ人をおもひそめつゝ
心あてに人やしるらんたくひなくつゝむ思ひの身にあまる哉
人心うきもわか身のとかそとも思ふに過てつらき君かな
嘆くとてよそにもときし物思ひの泪にいたる袖のうへかな
つらさをも怨むはかりの身なりせは唯一かたに袖はぬらさし
命にもあひみるをかふへきにうきみにそれもつゝましき哉
あちきなやこひしなんみを大かたの老ゆくはてと人や思はん
思ひきやありしその夜の面影の立ゐにつよくならん物かは
數ならぬうき心にもいかにして人のつらさを思ひしるらん
あひみてのあらまし事をせしなかに唯一夜とは思はさりしを

覊旅

秋風の日數やつもる旅衣たもとさむくもなりまさる哉
わひつゝも衣かたしきいほさきのすみた河原に今夜あかしつ
けふもなをおきの名殘の高けれは風そ舟路の泊りなりける
てる月のみちゆくしほにうきれして旅の日數そ空にしらるゝ

東路やゆきゝにあへる旅人はまつ故里をとひかはすかな

山家

餘所にては淋しくみえし山里をかくても人はすめはすみけり
春といへといつらか人のとひきける梢の花もぬしによりけり
初雁のをしれとりほし今はゝやにへするほとになれる山里
詠めやる煙はかりやこの里のたのむとなりのしるへなるらん
しはしこそたのむ心もおほえけれきゝ馴れにけり峯の嵐も

鳥

万代のみつはよつはの殿作りかれてもしるきたくみ鳥かな
おほ鳥のはかひの山にふる霜を誰につけよといそくみとさき
かほ鳥は人にもいたくみえしとや草かくれつゝ鳴わたるらん
百敷にすみか定めよ火たき鳥なれかやとりもよはに見えけり
ゆふされは笆の竹のむら雀これをも友にたのむなりけり

祝

君か代はなかすの里に年をへて千年かさぬる鶴の毛衣
天地のさかへますへき君か代をつたへし國も嬉しからすや
君か代は老せぬ門を立をきて過る月日ののとけかりけり
君か代をあたにはえこそいはし水たえぬ流を神にまかせて
海原やゆらのみさきに立波の數かきりなき君か御代かな

## 詠百首和歌

入道左大臣實房　沙彌靜空

春

あら玉のとしのをなかき君かためつきせぬ春の始なりけり
君かためしめし板ゐのわか水を汲てそ千代の初をはしる
ひきかへてのとけき物は霞しく春の御空のけしきなりけり
君か代にあへるは時をわかれとも春の光そさして嬉しき
つれよりもめつらしきかな鶯のまたしとろなる曙の聲
よそにてもきくそ嬉しき位山高きにうつる鶯の聲
有明の月に木つたふ鶯の色なき聲も身にはしみけり
ぬししらぬ宿をもわかす梅花匂ひになるゝ心なりけり
春の夜のおほろ月夜にかほりきて袖なつかしき梅の下風
春の日の光にめくむ青柳のまゆひらけぬる身にも有かな
玉柳池のかゝみにまゆかきてうちたれかみをけつる春風
野邊の草またあさしとや片岡のをさゝかくまに雉子鳴なり
もろともに見るとはなきを春ことに花ゆへなるゝしかの山人
よしの山高峰をこむる明ほのゝ霞につもる花の白雪
山櫻なつさふけふのうつりかをちらさて袖につゝみつるかな
山風に花いかならんと思ふ夜は夢もうつゝの心なりけり
山人よのころ櫻のしるへせよいつれの谷の下枝なるらん
われのみとなくかはつかな山吹のうつろひ行を誰か思はぬ〔玉葉〕
木の本に花はかはらす積るともあすをは春と思ふへきかな
鶯は羽風にちりをはらひてや谷の古巣に今夜ねぬらん

夏

諸人の衣のすそを引かへてひとへに見ゆるしらかされ哉
足引の山あゐにすれる衣とや卯花かされひかけさすらん
老か世の思ひ出かなほとゝきすまつにほとへぬさよの初聲
まつほとの心もくるし子規いかておもひのほかにきかまし
郭公夢にもなくやと思へともきかぬかきりはねられさりけり
風かほる花たちはなに子規聲なつかしきゆふまくれ
かたしきのさ夜の枕にかよふなりあやめにかほる軒の下風
五月雨に音する軒の雫こそをとせぬよりもさひしかりけれ
雲の浪たちそかさなる五月雨にあまの河もや水まさるらん
池水にしまぬ蓮の花よりもきよき心をいかてすまさん
こゝのしなおもひよそへていろ〳〵の蓮の上に心をそやる
夏の夜の空ゆく月し淸けれは氷をむすふ山の井の水
夕立のはるゝ雲間に出る日のひかりにみかく淺茅生の露
久堅のあまのかこ山くもるかと見ゆれはゝるゝゆふ立の空
圍ゐして夕すゝみする松かけは木末の風に秋そさきたつ

秋

とはすとも秋きにけりとしりぬへし昨日にかはる風の氣色に
たきものを雲の衣にゝほはせて七夕つめの暮を待らん
織女をおもひやるこそくるしけれまたむつとも有明の空
露しけき野原をわけて墨染の袖におもはぬ萩か花すり
秋萩の露にめくみをあらはして春たつかとのうちにうへけり
かりかれのかきつられたる玉つさはあさみとりなる空色の紙
山颪に鹿の音高くきこゆなりおのへの月にさ夜や深ぬる
ゆふされは秋野の風にま葛原うらかなしかるさをしかの聲
むら雨に萩の上葉に玉散りて月のいさよふ夕暮の空
さき匂ふ千種の花にをく露や月にくたくる心とはなる
まつほとは山の高ねにあくかるゝ心しつめよ有明の月
はれくもる空にもまつそ思ひやる常にすむなる山のはの月
さらしなやをは捨山に月はみしおもひやるたに泪落けり
きてみれはうつらなく野と成にけり住あらしてし深草の里
夕されはわか身一の露なれやあはれは秋のならひなれとも
霧こめて千種の花はみえねとも色ある野邊の夕まくれかな
時雨すると山かすそのうす紅葉今いくしほかそめんとすらん
たつた山こ末の空をなかむれは紅葉は風のすかたなりけり
けふのみと秋をおもはぬ暮にたに聞ことやすき鐘の音かは
よもすから惜む袂にをく露やかはりて秋のかたみなるへき

冬

今朝みれははたれ霜ふる庭もせの木葉か上に冬はきにけり
過ていぬる秋をや空も惜むらん山かきくもりうち時雨つゝ
まきのやに時雨の音のかはるかな紅葉やふかく散つもるらん
さ夜ふかき笆の竹の下をれにふりつむ雪の程そ聞ゆる

さえわたる月のくまなく見ゆる哉をは捨山の有明の雪
白妙の雪に木末はうつもれてうら緑なる松のむら立
みくまのゝ浦のはまゆふうつもれぬ幾重か雪も降かさぬらん
雪そゝく花の木末のかり衣うちはらへともむちかへりつゝ
うはけさへしらふの鷹とみゆる哉拂ひもあへぬみかりのゝ雪
すみかまにのほる煙のたえ〳〵に心ほそきは大原の里
眞柴たく煙もたえぬ賤かやはたるひにつたふ雪の下水
秋との空に名高き月なれと冬そひかりはさえまさりける
さえわたる月の氷は水鳥のうきねの床もかはらさりけり
はりまかたすまの浦風月さえて千とり友よふ明方の空
いそかれぬ年の暮こそ哀なれむかしは餘所に聞し春かは

戀

思ひたつ心に身をそまかせつる末をもしらぬ戀ちなれとも
人しれぬなけきにもゆるおもひ哉心のうちにいかてけたまし
なにかその心のほかにしほりせん立かへるへき戀路ならねは
思ひわひうき世中をそむきなは人のつらさやうれしかるへき
ひたふるにうらみつる哉戀そめし心のとかを人におほせて
御祓するしるしはなくて人心うきものとのみみこもりの神
年ふれとあはぬなけきはときはにて泪そもろき木葉とはちる
身のうさも人のつらさも覺えけり戀しきにのみぬるゝ袖かは
みをつまは思ひしらすもなからまし人は恨にならはさりけり
よとゝもにしほる袂やあふとのなき名をたにもたゝぬ濡衣

羇旅

春といへはつれていくのゝ人ともにおなし霞の衣をそきる
ゆきなつむ駒に草かへ我もまた木下陰にしはしやすまん
旅衣かたしく野邊の虫の音に今夜も草の枕をそかる
旅寢するきそのみさかに風しみて拂へとのひぬまくりての袖
しほたるゝ蜑とゝもにてあかす哉玉もかりしき磯のとまやに

山家

今はとてふる巣にかへる鶯よ宮古の春の物かたりせよ
岩間もるかた山陰のさゝれ水せかれと宿のうちにこそすめ
おのへより松の木末にそなれきて門田の稲葉風そよくなり
をかやふく宿にはしらす初時雨餘所の木葉そ袖ぬらしける
柴の戸を立出て見れはかた岡のならの葉かくれましら鳴なり

鳥

諸ともにきみか千年を松かえにすたちはしむる鶴のひな鳥
ともすゝめひきゐておりぬ山城のとはの田つらに落ほ拾ふと
相坂の關もる神にあけぬとやゆふつけ鳥のあかつきの聲
ゆくとくといかなる里に急くらんかり田におるゝ稲負せ鳥
あら磯のさきつる（いつるイ）宿にゐるみさこたえすや浪の花をみるらん

祝

あまてらす神ハ光りはさしそへて君かみかけをます鏡かな

君かへん今ゆく末も天地のひらけはしめてけふに成ほと
萬代の聲しきるなりおとこ山ねさす二葉の松のしけみに
動きなきときはかきはの君なれは千世も八千世も限らさり㒵
色かへぬ松にさく花いくかへり君かかさしに折らんとすらん

讃岐二條院女房

春

岩そゝくたるみのをとにしるき哉氷とけゆく春の初風
うくひすの谷のふるすをとなりにて友に待つる春はきにけり
山里のかきねにこむる小松原野邊にも出ぬ子日をそする
若菜ゆへひとつ雪間に尋きてちきらぬ友になるゝけふ哉
山の端に雪氣の雲の晴ぬれは霞にくもる春のよの月
をしなへてかすめる花と見ゆる哉こしの白ねの春の明ほの
匂ひくる軒はの梅のうつり香にむかしおほゆる墨染の袖
たちそめしのへの霞のあさ緑春とゝもにやふかくなるらん
鶯のこほれるなみたとけぬれは花の上にや露とをくらん
くもりなき池にうつれる青柳やみとりの空に遊ふいとゆふ
秋風のいなはの音をちきりをきてたのむの鴈も立かへるなり
おもひやる春のね覺の床なからよもの山邊の花を見る哉
枝かはす松に契をむすひをきて花もときはにさきかはれかし
吹風ものとけき御代の春にてそさきける花の盛をもしる
ちらぬまに今ひとたひと契るとも花にまかせぬ春の山風
山高みみねのあらしに散花の月にあまきる明方の空
よふこ鳥なく音そいとゝあはれなる柞の森の明方の空
よしの河さくらなかれし浪のうへにあらぬ色なる山吹の花
さきかゝる杜の木陰にたちよれはおらても藤をかさしつる哉
春はなと行衛もしらて歸るらん年は我身にとまりし物を

夏

草も木も花の袂はかへてけり今朝は野山も深緑なる
子規出るつはさに雨散て忍ひ音よりやしほれ初けん
橘の花ちる里に住ゐして昔忍ふの露そひまなき
ほとゝきすまたすといかてきかれまし我を恨て鳴夜有やと
あやめふく軒端涼しき夕風に山ほとゝきすちかく鳴なり
五月雨にきしの松かね水こえて汀そせはき廣澤の池
有明の月よりにしの郭公わか思ふかたに鳴わたるかな
ともしする比にしなれは筑波山このもかのもそあらは成ける
夜もすから草葉につたふ螢こそ風にこほれぬ露と見えけれ
ませのうちに露もはらはぬ常夏や玉をかされる錦なるらん
秋といへは紅くゝる龍田河夏はみとりの色そみえける
またしらぬ衣の玉のおもかけも心にかくる蓮葉の露
しめはふるきねか外面の柴の戸に又さきかゝる夕顔の花
なくせみの聲も涼しきゆふ暮に秋をかけたる森の下露
御祓川ゐせきの音の涼しきは秋よりさきに浪やこゆらん

## 秋

今よりの秋のね覺をいかゝともおきの葉ならて誰か問へき
七夕のこひの煙やはれぬらん秋の今夜のあまの河風
そのをとさしておもはぬ袖の上にけにあやしきは秋の夕露
をきて見る物ともしらて朝との草葉の露をはらふ秋風
風わたるお花か上に散露をなみにくたくる玉かとそみる
心にはうつらぬ花もなけれとも袖にみゆるや萩か花すり
なく鹿にこゑうちそふる高砂の尾上の松もつまやこふらん
中〳〵に心なくてもすみぬへし深山の里の秋の暮かた
玉つさをいかなる里につたふらん秋をわすれぬ初鴈の聲
吹をくる風のたえ間はよはるなり笆の野邊の虫のこゑ〳〵
秋のよはたつぬる宿に人もなし誰も月にやあくかれぬらん
むかし見し雲井をめくる秋の月今いくとせか袖にやとさん
なかむへき浪の花をもこめてけり籬か島の秋の夕霧
旅ねする山田の庵は夜寒にて稲葉の風に衣うつなり
ちりかゝる紅葉の色はふかけれとわたれはにこる山河の水
さま〳〵の野邊の千草も日をへつゝ一色にそ霜枯にける
うへて見る心もちらすわか宿にたゝ一もとのしらきくの花
秋ふかみ森の下草うらかれて木末にすさふ日くらしの聲
なか月の有明の月も更にけりわか世の末を思ふのみかは
暮てゆく秋もやしはしやすらふと風立むかへ浪の通路

## 冬

大かたもこけの衣はうすけれと冬をしらする山颪の風
おもかけに秋の名殘をとゝめ置て霜の笆に花をみる哉
かれにけり鶉とゝもに住なれしあしのまろやの内もあらはに
はなれたるおきのこしまのこ末まてわたりて染る初時雨哉
あやなくも音を時雨にかりなからくもらぬ空にふる木葉哉
あさちはら庭に日影のさすまゝに霜は露にそきえかはりぬる
めつらしく雪まにみえしわか草の霜かれはつる冬はきにけり
千鳥なくそかの河風身にしみてますけかたしき明すよは哉
いけ水にあられふる夜はをし鳥のかつかぬ浪に玉や散らん
難波かた汀の風も寒ぬれはこほりそつなくなたの捨舟
ふる雪にみねの煙はのこれともふしのなるさは氷ゐにけり
ふる雪にをのかなさけをみせかほに冬の里とふ小野の山人
まとゐする夜はの埋火かきのけて春より冬に又かへりぬる
暮はつる年のつもりをかそふれはむそちの春も近付にけり

## 戀

我袖やみるめなきさのいかならん空しき波のかけぬまそなき
いかにせんうきもつらきも契そとしらぬ昔になくさむる哉
ものおもふ心に秋や更ぬらん色になりてもちる泪かな
出てゆく跡もさなからまつ物をたか通路とおもひなすらん
をのつからいつか逢瀬にかはるへき泪の淵そつれなかりける

折こそあれなかめにかゝる浮雲の袖もひとつにうち時雨つゝ
露しくれひとつにしほる山人の麻の袂もかくはぬれしを
露けさはおきわかるらん床よりもなかめわひぬる明かたの空
なみた川瀧津心のはやき瀬をしからみかけてせく袖そなき
駿河なるふしの煙のたゝぬ日はあれとも胸ははれしとそ思ふ

羇旅

都出てかさなる山にゐる雲のへたつる中をなを隔つらん
よそに見し浪の上にも床なれやいくよあかしの浮寝なるらん
旅ねするすまの浦路のとまやかた音せぬ浪も袖にかけゝり
ゆきとまるをかやかりしく旅の庵を吹なみたりそのへの夕風
草枕露をきなから立ぬれは又こん人やあはれかくへき

山家

都出てふかく入にし奥山になをのこりける夢のかよひち
をのつからあたりにたつる煙こそ柴の庵の友と成けれ
山里は野原につゝく庭の面にうへぬ芭の花をみるかな
軒近き秋の小山田かりにたに思ひかけきやかゝる住ゐを
つま木こるわかかよひちのほかに又人もとひこぬ谷の岩はし

鳥

今はとて澤邊にかへるあしたつのなをたち出るわかの浦波
をのつから立寄る方もなきさなる鴎のうきすの浮身なりけり
いとひけん昔おもふそ哀なるゆふつけ鳥にめをさましつゝ
呉竹にねくらあらそふむら雀それのみ友と聞そさひしき
とる方も無身なからにはし鷹のすたつに身をも捨やらぬ哉

祝

あまの原ゆく末遠き雲の上に月ものとけき君か御代かな
行末はしら玉つはきしるへして猶もをよはぬ君か御代かな
わたつみによせてはかへるしき浪の数限なき君か御代かな
たけ川の水のみとりの末まても流たえせぬ君か御代かな
霜をけと色もかはらぬ榊葉のさしてもしるき君か御代かな

小侍従

春

くる春のすかたは其と見えねとも名のみやこふる相坂の關
三輪の山尋し杉は年ふりて春のしるしの松たてゝけり
朝日山いつしか春のけしきにて霞をなかす宇治の川浪
よそにてやかすむとみまし吉野山峯に庵をむすはさりせは
春くれはふもとめくりの霞こそおひとはみゆれきひの中山
鶯の谷のふるすのとなりにてまたかたことの初音をそきく
初春の草のはつかにつむとてやわかなといひて年のへぬらん
聞なきしその形見にはあらねとも芹つむ袖はたゝもぬれけり
君か代のあまねき雨や是ならんめくみわたらぬ草の葉もなし
いつかたの梅のたちえに風ふれて思はぬ袖に香をとゝむらん
かしかまし主ある野邊のさ蕨をおらはおとろと成もこそすれ

さきそめし花やさかりに成ぬらん雲に色そふみよしのゝ山
年へたる花にとはゝやかくはかりのとけき御世の風や有しと
むかし見し吉野の山は年ふりて花は都そさかり成ける
れやまころしつかかりれに旅枕さてものとかに花をたに見は
見渡せはまた草たえぬ春の野に思ひあかるやひはり毛の駒
なつかしき妻もこもりき同くはこの野邊にてや菫つまゝし
住吉のあさゝはをのにかきつはた衣にをすらん人もさそせし
咲かゝる下枝は浪のあらへともなを色ふかしたこの浦藤
さりともと年をたのみし昔たに春の暮るはおしからぬかは

夏

夏くれは心かはりのいつのまに花にいとひし風をまつらん
日かけさす卯花山のをみ衣誰ぬきかけて神まつるらん
子規いつくをかとゝさためてや雨ふるやみに啼て過ぬる
一こゑに雲路過ぬるほとゝきすまたいつかたの人さはくらん
れらひするほくしの影にさを鹿のうらなく何かめをあはす覽
おりたちてつむへきなきのはもみえすたなかのゐとに霖の比
五月雨の日をふるまゝにかはり行つたの入江のみをつくし哉
五月雨に庭ハ蓬や朽ぬらんすたく螢のかすそひにけり
ふきゝつる花たちはなの身にしめは我も昔の袖のかやする
さきにけりをちかた人にをとひて名をしり初し夕かほの花
この里は過ぬとみゆる夕立のほかに成ゆくかたをしそ思ふ
うかひ舟月をいとふにしろき哉こんよの闇にまよふへしとは
いかてわかれかふ蓮の身と成て花になるてふ夢をさまさん
さのみやは山ゐの清水凉しとてかへさもしらす日を暮すへき
わきも子かすかぬくかみも靡くめり是や御祓のしるし成らん

秋

よのほとにかたへ凉しき風吹て秋に成ゆく荻の音かな
まれにあふ秋の七日のくれは鳥あやなくいかに明ぬ此夜は
いかにせんあまの河風身にしみて恨をのこす明暮の空
わきかれしおなしみとりの夏草を花にあらはす秋の夕暮
たはるれとおらてそ過る女郎花うき身を得たる罪のふかさに
きゝをきし名をあたしのゝしの薄いつなれかほに招く氣色そ
そよといふ荻のは風の人ならはおなし心の友とみてまし
こしちよりその玉梓はかけれともくる鴈かれの數そよまるゝ
契てもよかれやすらんさほ鹿のうらみ顔なる聲きこゆなり
草むすふ旅ねの夢のさむるまにおり哀なるさをしかの聲
白露やわかそめかほに思ふらん千種の花の色をうつして
舟よはふ淀のわたりの朝霧にのりをくれたるみつの里人
あたにをく露にぬれたる朝貌はかた〳〵世をや思ひ知らん
月の比八十の秋をみぬはなしおほえぬものをかゝる光は
何事に露も心のとまらまし月をなかめぬ此世なりせは
詠めても誰をかまたん月よゝしよゝしとつけん人しなけれは

終夜月をなかむるうたゝねの心のうちをしる人もかな
散なましおりうれしくそ見にきける紅葉の錦風たゝぬまに
秋はつるかれのゝ草の下葉にはさもよはるへし虫の聲〳〵
いかにせん過ゆく秋の日數へて今夜にかきる夕暮の空

冬

落つもるならのかれ葉に吹風は音にそしるき冬の氣色は
よかれせす音信わたる時雨かな空たのめする人もあるよに
雲かゝる比良の高根にふゝきしてさゝ浪よするまのゝ浦松
すみうしと昔いひける難波江に又わひ人のあしかるやたれ
濵きよきゆらのみなとに鳴千鳥夜舟やのほる立さはくらん
すみなれし池は氷にとちられてゐもさたまらぬあちの村鳥
霜いとふ鳥の上毛に紅の紅葉をのこすたつ田河かな
こやの池に宿りし月はさもあらてあるし顔にもゐるつらゝ哉
冴渡る風によるなるひをなれはまつとも今夜かひやなからん
さかきとる庭火の影に圓ゐして八十氏人の聲あはすなり
暮ぬ共はつとやたしのはし鷹をひとよりいかゝ合せさるへき
雪ふかきをのゝ炭かまよそなから心ほそさは煙にそしる
てすさみにとふはひうらのあたりまてうつめと消ぬ我思ひ哉
行年やうらしまか子の箱ならんあくれは老の身につもりぬる

戀

紅のこそめの衣ぬれ〳〵てくちん袂をなにゝかこたん
思ひあまりあまり思へは前の世にわかつらかりし報なるらん
つらきをもうらみぬ我にならふなよ憂身をしらぬ人も社あれ
わすられき戀しきよりはあふをのくやしさまさる袂（物思イ）かな
忍へともかひやなからんかへしつゝ落る涙の色かはりなは
われこふる折もありなんあすか川昨日の淵もせにかはるなり
たまさかに逢みし夜はにあふとみし夢はまをにいみける物を
こりつもるなけきの果を尋れはもゆる思ひはこの世のみかは
これやけに淺瀨をはやく行水にかすかくほとの心なるらん
いかてわれ夕の雨と身を成て軒の雫に物をいはせん

羇旅

駒なへていく野のおくの人里にみゆる煙やしるへなるらん
むやゐするゑなたの舟の笘やかたいふせき比に雨さへやふる
今夜もや宿かりかれん津の國のこやとも人のいはぬわたりは
またよひの人におとろく鳥のねにふかく越ける相坂の關
われはかり朝たつ旅と思ふまにまつ出にけり有明の月

山家

しきみつむ山路の露にぬれにけり曉おきの墨染の袖
いかゝして住はゝつへき雪つもる筧の水の音も絶なは
朝夕の煙はかりをあるしにて人はをとせぬ大原の里
あらしふく嶺のましらの鳴こゑに哀もよほす瀧つ音哉
暮とにたえす音せよおなしくはふかき山路に入相の鐘

鳥

羽かはすこからめふしをみてもまつわか獨れの契をそしろ
二むらの山のはしらむ東雲に明ぬとつくろはこ鳥の聲
余所なから心そみゆる山鳥のをろのはつおの鏡なられは
とらせけん行ゑもしらぬそのにきてわたらひうちと鳴や何鳥
をゝひしすみた河原の鳥の音はわれも心に忘れやはする

祝

もゝよへて世を守へきちかひにも君をは分てときはかきはに
いく千世かきみはみるへき朝とに煙たえせぬ民のかまとを
君か代にあふみの海を幾そたひ田につくれはか定めをきけん
いく千世とかきらぬ御代の數にこそたとへんとの空に覺えれ
君か代は二萬の里人數ふれて數より外にかすそひにけり

丹後　宜秋門院女房

春

としはくれ春は明ゆく鐘の音の霜はかすみにきゆる成けり
ひく人のよはひもしろし小松原子日の千代を野邊に出つゝ
春きては音なし川もなかりけりこほれる水の名にこそ有けれ
みよしのゝ花のさかりをまつ程は麓の野邊に若菜をそ摘む
霞ゆくさかひもみえぬ雲路かな春のなかめの明ほのゝ空
よそなれし春のすみかをこゝそとや軒端の梅にきゐる鶯
梅か香のおらぬれやまて匂ひきてかたしく袖に猶うつりぬる
風わたる春の野澤のさ蕨はなみにまかせておるにそ有ける
春雨のふるの小山田うちすてゝさもあらぬ草の緑をそみる
玉つさをかけてはやらしかへる鴈空ゆくつらに筆をまかせて
よしの山霞の上にゐる雲や峯のさくらの梢なるらん
明わたる外山の櫻見わたせは雲ともわかす霞ともなし
花の香を一方ならす吹風に春の心の空にちるかな
かすみつゝ花ちる嶺の朝ほらけ後にや風のうさもしられん
風をいたみいくよ明しつ木の本に花の旅ねのひしきものにて
とふ人もこすゑをみてや歸るらんあはれ戀しき春の庭かな
うちなひき柳なみよる春の庭露をは風のはらふなりけり
春ふかみゐての河浪おりをえてさかりに匂ふ山ふきの花
はま松の末まてかゝる藤の花雲と浪とにまかふ成けり
春はけふ霞の衣花の袖宿の梢にぬきかけてけり

夏

けふといへは一夜の春のへたてとや思へはうすし蟬の羽衣
花ちりて人も尋ねぬ山かけにしけり果ぬる森の下草
ひきかへて闇にはしろき月なれやくもらはくもれ卯花の比
便ありとけふふくしつや思ふらん蓬かやとの軒のあやめゑ
梅か香に染しもおなし袖なれとむかしにかよふ軒のたち花
橘の香をとめてなく子規やみに五月もあやなかりけり
郭公たつねてきけと思ひけりみ山のおくの夕暮の聲

五月雨は沼の入江のみをつくし岸のひさきの梢なりけり
五月雨はふりしむれとも夏むしの思ひは消ぬ物にそ有ける
雨の後みきはのこさゝ風吹は露に玉そふ池の蓮葉
ゆふたちのなこりの空に雲はれていさよふ月に秋そほのめく
夏の夜は山の端出る月影にやかて有明の空を見るかな
瀧つせのおつる岩ねの夕涼くたくる玉や秋の白露
秋風をまちつる空にうつせみの鳴音涼しき森の蔭かな
まち〳〵てあすをは秋とおもふよりまつをく物は袖のしら露

秋

きのふみし芭の荻はかはられと秋としなれはあらぬ風かな
野邊に出て風の氣色をみぬ人は音はかりにそ秋をしるらん
秋たちてけふみか月の影をたにおほろけならぬ光とそみる
銀河深き契りはたのめともとたえそつらきかさゝきの橋
立田山木末はなをも緑にてすそ野の萩に秋をしるかな
女郎花しほれふす野の藤はかまたかぬき置し露の名殘そ
物ことにそむるもくるし秋はなを人の心をつくすつまかな
またしらぬ野邊にそ今夜やとりぬる人まつ虫の聲を尋て
大空に秋の哀やしるからん月すむ夜半のはつかりの聲
秋の月いかなる影をそふるそとおほつかなさのはるゝ夜半哉
秋しらぬときはの山の麓にはあやしかるへき月の影かな
なかめやる心のはてもなき物は雲路はるかにすめる月影

秋のうちに今宵や月のすまの關なかはの影そしはしとゝめぬ
さらぬたに老のね覺の袖の上は露けき物をさをしかの聲
庵さす山路も秋もふかき夜の松吹風に男鹿鳴なり
秋といへは庵もる賤かさ筵にいなはの露のをかぬ日そなき
あちきなく我にはうときさよ衣うつ音はかりよをや重ねん
はゝそ原また色あさき紅葉はや時雨まつまの露の下染
なか〳〵にまくすか原の風よりも紅葉にのこるうらみ成けり
秋のくる方へかへらは大江山いく野の霧に道まよはなん

冬

暮果し秋の時雨の山めくりまたふるたひは冬の明ほの
今更におとろくはかり身にそしむかゝる嵐は秋もふかれは
ねやの上に木の葉まかはぬ時雨とも風の絶まそ聞わかれける
吹はらふ嵐のゝちの高根より木葉くもらて月や出らん
神無月梢にすさむ風の音をまちとる物は庭の紅葉は
故郷のあさちか原の霜の上を夜半にふみわけ誰か問ふへき
友ちとりよさのうら風よや寒き浪まにしきる曉の聲
かたしきの霜夜の袖におもふからつらゝの床のをしの獨ね
庭の面に木葉はうつむ雪の上にかされて澄る夜半の月哉
散しける花は分てもかよひけり雪にそまよふ志賀の山こえ
雪の色は庭白妙にかはられとやとらぬ月に袖そさえぬる
あまの原おなし空よりふる雪にひかりをわくる冬のよの月

雪つもる音羽の山はをとたえてしのひにかよふ松の下風
かよひこし山路は雪にうつもれて煙そたえぬをのゝ炭かま
かくしつゝふけゆく身こそ悲しけれ年は暮ても立かへるなり

戀

いはぬまは心ひとつにさはかれてけふりも浪も胸にこそ立て
世中はかくこそありけれと思ひけん心しらるゝ荻の上風
つれもなき人の心はいはきにてあふをかたき戀もするかな
つらかりし心は今もうつゝにてあふとみえしは夢かとそ思ふ
忘れ草おふる軒はをなかむれはむなしき霧そかたみ成ける
うつり香はうすく成ゆく衣手に泪はかりそふかく染ける
はかなくそこんよまてとも頼みけるけふめの前にかはる心を
いせの海浪のよる／＼人まつとくるしき物はあまのたくなは
物おもへはなかむる影もかはりけり月やあらぬと我をみる覽
人心かれ野にのこるこひ草の末葉の露のかゝりけるみを

羇旅

ゆく末もまた白露の草枕いつをまてともえこそ頼めね
岩かねの枕におつる松風の夢路たえぬるさよの中山
よはの月われのみをくる山路そとなれし都の友につけこせ
ゆくゑなきうらちをしへよあまを舟こきゆく跡にかへる白浪
しらさりしやそせの浪を分過きてかたしく物はいせの濱荻

山家

おもはしなかゝる人めをつらしとも淋しかれとてしめし庵は（そイ）
すみなれは雲も嵐もうとからし何山里に友おもふらん
尋きて見るもかなしき住ゐかなかさなる山のおくの通路
まれにこしおほろの里に住なれて老そし水の主なりける
ひとゝせの都の人の空たのめおもひたえぬる冬の山里

鳥

うれしさの身にしむわかのうら風を袖にそつゝむ鶴の毛衣
わか宿のそのゝ呉竹霧こめてねくらもとむる村すゝめかな
よはの床時雨て過くる跡にまたしきたつ庵のあかつきの聲
いつかたをあはれとか思ふ鳥の音にわかるゝ床と急く關路を
おほつかな都にすまぬ宮古鳥をとゝふ人にいかゝこたへし

祝

神風やみもすそ川の底すみてなかれ久しき君か御代哉
君か代はいくちとせともいはし水なかれ初けん末をくみつゝ
千早振神にもとはん君か代をうれしといかにみたらしの水
ゆく末をみかさの山の松風のをとにもしろき君か御代哉
君か代にひきくらふれは住吉の松もたよはぬ心地こそすれ

## 詠百首和歌正治元年十一月

中納言得業信廣

春

今朝よりは空も長閑に都人霞や春をいはひこむらん

岩間とちし氷も今朝はをとは河關いれて落る瀧の春風
萬代の君にひかれて子日よりをのか千年をのへの松原
思はすよ若菜ゆへとてしめし野に昨日も今日も雪をつめとは
うへはなをまた消なくに谷川のふかくもなるや雪の下水
いつくより谷の鶯さそふらん花の香そふる風過ぬなり
かへるへき程はいつともしら雪に春はふるすを出る鶯
軒近き梅の木間をもる月に色をも香をもうつすほと哉
いく里の人の袂にかほるらん霞て過る風すきぬなり
うち出し初春よりや山さくら下ゆく水の色そかはれる
櫻花いかなる風のおりそめて雲のはたてに色をみすらん
世中をいとひはてつゝみよしのゝ花の心をつらしとや思ふ
色そむる花やひかりをかさぬらん雲にくもらぬ春の夜の月
しほるなよ花の木陰に雨ふりて櫻にぬるゝ袖のしつくを
春やしるをかのかけ草もえ出てあさなくきゝす聲やすむなり
猶よそに見てすきれとやかつら木のたかまの山の雲の霞める
ひきつられ高根のこしに歸る鳫是やおひする吉備の中山
すみれつめといはたのをのに鳴雲雀誰につけてか聲の落くる
みかくれてすたくかはつに山吹の影さへさはくゐての浮草
おしみかね心のはては行春のふるさとゝこそみはなれてけれ

夏

うらむなよ心のうちにのこる春ならひはかりにかふる袂そ
夏かけにかゝれる藤もある物をかきねのうつき春をへたつな
卯花のかけとやしのふほとゝきすほのめく月の雲に入る比
一こゑもまたとへはきく子規たゝ人つけそ名殘なりける
みしか夜はなれか物かは杜宇なくねにこもる有明の月
あやめおふる沼の岩かき苔むしてふるき五月の影をこそひけ
むかしおもふ花橘に風過ておつる泪にかほる袖かな
五月雨のうきたの水や大あらきのかられと見えぬ森の下草
雨のこる思ひたえぬる五月夜におろ〳〵（おほえすイ）月の影そもりくる
袖は雲心はなみに遊果て身より外なる五月雨そなき
草ふかきみをはのきはにつゝめともあまる思にもゆる夏虫
清水もる山かたつきてすむ庵も心よりこそ涼しかりけれ
夏山のみねのこ末やいかならん入日にひゝくせみの夕聲
露はらふ風もてひゝく蓮葉は月にたとへぬ扇なりけり
夕たちにをかたのわさほ露散て秋風ちかし山畑の庵

秋

日はくもり梧の葉かくれ秋やときさよ風すゝしねやの手枕
秋といへはおとろく風の音よりもまつ面影に出る月かけ
七夕はいかに契りてあふをのかたわれ月を待ならひけん
袖の上にしかなくへくもみゆる哉しからむ萩の色をうつして
しはし唯うつさて余所に宮城野のちらは小萩の袖につゝまん
きくたひに泪も露もこほれきて哀つきぬは荻の上風

引むすふ草のとさしは露とちて人またまれと更ぬこのよは
玉つさを見するのみかはやかてその空にことゝふ初鴈の聲
あなかまの床のあたりの虫の音や月にのみかは秋はねられす
月のよはゆかぬ旅ねをすまの浦なく心ちする浪の音かな
さひしさは夕のみかとなかむれはいつくもおなし有明の月
なかめつゝ身は大空にあくかれぬねやもる月よ枕ゆつらん
鐘の聲こたふるまてはしられとも月にしもふる有明の空
深草のうつらの床をもる月にはねかた敷てふせる霞を
夕されは河風ふかしものゝふのやそうつ浪の音むせふまて
あかつきに夜や成ぬらん鳥のねに砧の面のうちつゝくなり
とり／＼に時雨も霜もふる里のみやきの紅葉色やますらん
あらしふくみねの紅葉のこゑくれて鹿のね殘る秋のこの本
くすはうらみお花はまねく夕風にうたての秋や過て行らん
秋は今杉の葉しろくをく霜をかたみとはかりみわの山本

冬

色かはるなみより冬のむつたかは神代もしらぬけふにも有哉
をとそへし森の木葉はふりはてゝ時雨よゝはる神無月哉
わけわひしはまの道芝霜かれぬ草も人めをたのむ宿かは
やまめくりとはぬすみかを音信てわくかたもなくぬるゝ袖哉
をき渡すまきものあさしふかき山梢おれふす程はなけれと
なをすこし木葉かくれにすむ月は秋と冬との影やわくらん
そよいかに霰ふるよのさゝのやに獨はねなん夢はみす共
眞柴たく庵の煙たえ／＼にさひしさまさるをのゝ山人
いつのまにうつもれぬらん初雪のふるかはのへの杉の二本
見すしらす雪ふりつもる山の端にひかりを分て出る月かけ
みわたせは花の白浪たちかけてみつわけ山にふれる雪哉
秋まてはかけみし水も音信れてまとにこほる冬の夜の月
すむあまのなかめもまつに浦傳ひ心ありてもなく千鳥かな
山川の岩きる水にうくをしの鳴ねくたくる浪の上かな
身の果をみまくほしとやいたつらに行てはかへる年積るらん

戀

ほのかにも人をみ山の草かくれなれより月のしける袖かな
〔一首闕〕
いくよわれ月をあはれと久方のおもかはりせぬ物思ふらん
心さへこぬ夜あまたに成にけりまたしとおもへは猶待れつゝ
をのつからさらはいかにと思ふよりかれてもつらき鳥の聲哉
心こそやるかたなけれ泪河袖きりとほし水はゆくとも
あかつきは更にもいはす夕暮の空も恨もまたてやはぬる
戀しのひしなは中／＼よしの川はやくといはゝいかゝいは波
まつかとも人の心もあれ果ぬつれなきはたゝ我身成けり
くるしさはまれにみしまの恨みても猶ほしあひのおりを待哉

羇旅

たち出る煙はかりをしるへにてしらぬ宿かる夕暮の空
おもひ出る人や都になかるらんとふ月にそはぬおもかけ
枕よりくさと浪とにかはれとも旅ねはおなし月をこそみれ
鳴蟬をかそへもあへすきよみ潟おとろく駒を引とむるまに
さはの山木下柴のしはしたに夢もさためすふくあらしかな

山家

秋山のすそ野の小萩笆にてうつさぬ鹿の音をも聞かな
山のはの軒にかたふく家ゐして窓より出る月をみるかな
年ふれとたれ尋なん杉の門おり／＼はかりみわの市人
思ひ入しみ山の奥に跡とめて世にもあらしのすみかとそする
雪うつむ庵はかりにきゝなれて人こそしられ谷のまつ風

鳥

和歌の浦のしほみつ[よイ]まにもあしたつの寄方もなみ鳴まよふ覧
なをたのめわしの御山の法の聲うきもめくみにもるゝ物かは
はし鷹のそらしもはてす引すへてとかへる身共今はならなん
鳥羽にかきつられたるをのはも見るをなしにちりや果なん
たのもしや夕つけ鳥のなく／＼も道ある御代に相坂の關

祝

一すちに御代も久しくみもすその末の流も君にまかせて
朝夕にきけははこやの山高く叫暮よはふ萬代の聲
君か代は濱の眞砂の岩となりてみななてつゝきん天の羽衣
津國の難波のしはさみをのり皆住吉の神や守らん
敷島の道もとたえし磯の上ふるまふ名をは御代にそへつゝ

【右正治二年院御百首以百首部類校合】

# 續群書類從卷第三百八十三

和歌部十八

## 後花園院御百首

題

### 春二十首

立春　霞　鶯　殘雪　野若菜
里梅　簷梅　春月　春曙　歸鴈
春雨　柳　待花　初花　見花
盛花　落花　款冬　藤　暮春

### 夏十五首

更衣　卯花　待時鳥　聞時鳥　早苗
橘　五月雨　夏草　夏月　鵜
螢　夕立　蟬　納涼　夏祓

### 秋二十首

初秋　七夕　荻　萩　虫
鴈　鹿　秋夕　秋田　山月
野月　關月　橋月　浦月　菊
擣衣　霧　杜紅葉　河紅葉　暮秋

### 冬十五首

時雨　落葉　霜　寒草　冬月
氷　霰　千鳥　水鳥　淺雪
深雪　神樂　鷹狩　炭竈　歲暮

### 戀二十首

寄月戀　寄雲戀　寄風戀　寄雨戀　寄露戀
寄山戀　寄原戀　寄海戀　寄橋戀　寄關戀
寄木戀　寄草戀　寄虫戀　寄鳥戀　寄獸戀
寄玉戀　寄鏡戀　寄枕戀　寄衣戀　寄糸戀

雑十首

曉鷄　松　竹　山家　田家

旅　浦鶴　述懐　神祇　祝

## 詠百首和歌

### 春二十首

立春　　御製後花園院

いつしかと空も霞て出る日の影のとかなる春や來ぬらん

伏見殿無品親王

けふといへは春をむかふる世の人の心もやかて長閑にそなる

二條殿關白太政大臣

天下のとかにみえて朝日さすみかさの山に春や立らん

一條殿前攝政左大臣

春はきぬ霞の衣白妙の雪にかけほすあまのかく山

公方左大臣

いとはやも霞そめつゝ雲の上に道ひろき代の春やきぬらん

霞

今朝みれはまた春あさき山のはをよそにへたてす立霞かな

眞榊の春のみとりの花なれや霞そ匂ふあまのかく山

今朝は又ふかき霞にうつもれて雪まにみえし山のはもなし

春の色のいまひとしほやこれならん緑にかすむいその松原

きの海や霞の衣はろ／＼とうら吹かへすおきつしほかせ

鶯

いとはやもふるすを出し鶯の雲井のとけき春にあふなり

うくひすも谷にのこらす出にけりかしこき御代の春に逢とて

谷ふかみ雪も氷もとけやらて何を春とか鶯のなく

うちきえし雪ふる里の梅か枝におりしるも　と鶯そなく

のとかなる日影とゝもにのきちかき梢にうつる鶯のこゑ

殘雪

春來てもなをふる年とみゆるまて殘るそ寒き山の白雪

春の日の光にもれぬ山里も道ある時と消るしら雪

花やとき春やをそきとみえてけりなを消かての木々の白雪

吉野山つれなく消ぬ白雪やまた初春の有明の月

とふひ野やもえ出し色もはるをあさみなを消かての雪の下草

野若菜

うちむれてけふ里人や春日のゝ雪まもをなし若菜つむらん

年をへてつめともつきぬ春日のゝわかなは神のめくみ成けり

けふははや同し心につむ人もおほかる野への若菜なりけり

はる毎に君かためにと野へに出てわかなとゝもに年をつむ哉

衣手にかつふる雪をはらふとて野への若菜はつむ隙そなき

里梅

外所までもにほひそふかき山里の垣ねの梅の盛成らし

やま里は人もすさめぬ梅の花あたら色香のちらまくもおし

山さとのあるしも知らぬ梅か香にさそはれきてもいかゝ尋ん
朝日かけにほへる山の春風にふもとの里は梅か香そする
やま里の梅をあるしになしてこそ數ならぬ身も人にとはるれ

簷梅

幾春もなれてそみまし九重の軒端に近くにほふ梅かえ
今は身の色にもめてぬ老の袖あやなく移ろ軒の梅か香
さたかにもみえぬいたまの月影に梅か香もらす軒の春風
とをつ人軒はの梅の花の香にさそはれぬ春は松風そふく
難波なるこやといはぬにとふ人は軒はの梅やかに匂ひけん

春月

雲晴て霞は殘る高ねよりおほろに出る春の夜の月
霞む夜を月やあらぬとなかむれは我身ひとつの泪成けり
大方の春のならひや浮雲のかゝらぬ月もかすむそら哉
はるの日のかすみし空もとをからて光のとけき夕月夜哉
おほろなる月にほすてふかひもなし霞の衣春のよな〳〵

春曙

有明も殘らぬ空のなにとなく霞渡れる春のあけほの
花なれやたちもわかれぬ横雲の外山に匂ふ春のあけほの
天の戸は霞のそこに猶とちてあくるやをそきしのゝめの空
山の端にやゝわかれ行く横雲の跡よりかすむ春のあけほの
こゝろなきなにはのあまもわすれては詠やすらん春の曙

歸鴈

あさほらけ雲路しのきて歸るらし霞に遠き春のかりかれ
みよし野の花をみすてゝ行かりやこしちの月によると鳴らん
いまは又をのかこしちに歸る山ありとやいそく春のかりかれ
恨侘たのむのかりも今はとてかへすたまつさかけて行らん
いまよりは歸るこしちも寒からし何ゆく春のころも鴈かれ

春雨

かきくらしふる春雨にいとゝなを野邊の草葉の色まさるなり
やま陰の埋木までも春雨のあまれき御代のめくみをそ待
春雨のかすめる空はふるとしもみえぬにおつる軒の玉水
染殘すしろしもみえす春雨のふる野にたてる松のみとりは
山の端のかすむはかりをしるしにてふるともみえぬ春雨の空

柳

吹からに糸くりはへて青柳の露の玉ぬく春のゆふかせ
花ならぬ色こそにほへ朝みとり霞の内になひく青柳
なみかくるきしの柳の糸なからひくても遠き淀の川ふね
青柳のうちたれかみや移るらん池の玉もに春風そふく
青柳のいともかしこき御代そとて草木も眉をひらくとそみる

待花

白雲よしはしなはれそみ吉野の花まつ程のなくさめにせん
まつころは心にかゝる白雲の花にみなさぬ山のはもなし

待佗る日數も花に立歸り咲て盛のひさしかるらん
咲やらぬ花をまつちの山の端に入たのめなる春の白雲
ともすれはわすれていそく心かな待にはよらぬ花のならひを

初花

百舗や大宮人のかさしそとはやみえそむる庭のはつ花
花はまたかつ咲そむる色なからやかて盛にむかふおもかけ
昨日まてかすむはかりの山の端に朝ゐる雲や（は花やさくらんイ）さくら成らん
色ふかくいつなれぬらん山櫻はつ花そめのころもへすして
をりそむるにしきとやみん糸櫻かつ〳〵にほふ花の都を

見花

雲もさえ霞も晴てあし曳の山の櫻の色そまかはぬ
萬代の春をふるとも山櫻あける心を花にみえめや
くれなはと思ひし花の木陰をもなをあかなくに歸り兼つゝ
いやしきもよきも盛の櫻花おなし心にあかすとやみる
見るまゝに花にわするゝ家路ともしらてや人の我を待らん

盛花

吉野山花の盛りも今そとやみねにもをにもかゝる白雲
吹風も長閑なる世の花そとやなへて盛りの色そ久しき
ふくとてもちるへき物か櫻花よしや盛は風もいとはし
有明の空にかさなる雲みれは月の盛そ花に移れる
かつらきや外そめにかゝる白雲は高まの山の花盛かも

落花

吹風にちりしく花は木のもとに消あへぬ雲とあやまたれつゝ
梢こそあをはにならめ庭にさへ花もみとりの雪の下草
あつさ弓おして春風ふくなへに心よわくもちる櫻かな
あたに散花をもかつは恨みなてなと風のみのうきになすらん
みよしのゝ花の雪まやとふ人の歸るはかりの跡をみすらん

欵冬

川浪はをとにたてゝもいはぬ色にみえてそさける井手の山吹
またみむとゐての山吹ちきれともこたへぬ花に蛙なくなり
袖のかやこれも殘らん橘のおなし小島にさけるやまふき
みなそこにきしの山吹影みえてふかくなりゆく春の色かな
山吹の花のかゝみにうつるよりちらてもくもる井ての玉川

藤

春をへてみきはの松にさきかゝる盛りも久しいけの藤なみ
松か枝にかゝるとならは藤の花ちらてときはの色にさかなん
いまかゝるめくみをみても春日山なをこそたのめ北の藤なみ
松のはに色こきまする藤のはな春のにしきのゆかりとやみん
十かへりのはなのゆかりや紫の庭に色そふ春の藤なみ

暮春

をしめともつゐにとまらすくれて行春の別れを又やしたはん
花鳥の名殘をちゝに思ふかな我身にくるゝ春ならねとも

はなちりし後はおひなき日數さへせめてとしたふ春の別路
きくもうし春の別のをしき日に花さへさそふ入あひのかね

## 夏十五首

更衣

今朝よりはたもともうすくたちかへて花のか遠き夏衣かな
夏衣うらなき物をいかにしてひとへに春を立へたてけん
けふといへはかふる衣のひとへにもいかてか春を立へたつ覧
花の色をかふる袂はにほはぬを今朝はかとりの名にや立らん
春の色そ心に殘る夏衣昨日にかはるたもとなれとも

卯花

咲そへていとゝかきねも白妙の月にそまかふ庭の卯の花
時鳥きなかさりせは卯花をかきほにつもる雪かとやみん
卯の花のまかきは人のとはれとも月と雪とを一つにそみる
卯の花のかきねやいつこ榊葉にしらゆふかけて神まつる比
うの花を時しらぬ雪とみゆるかはふしのあなたの白河の關

待時鳥

いたつらにいく夜な〳〵かれ覺して待につれなき山時鳥
木の間もる月影よりも時鳥心つくしはまつよひのそら
かならすとたのめもおかぬ時鳥うはの空にやなをまたるらん
つれもなき心はみえつほとゝきす何たのむらんくるゝ夜毎に
いかにしてまつともつけむ時鳥しらてつれなき中もこそあれ

聞時鳥

月もいまみ山はつらしほとゝきすふけ行空に聲のきこゆる
やよやまて人にもつけむ時鳥ひとりはきくもおしき初音を
鳴すてゝ過行空のほとゝきす又たか里の初音なるらん
たかためにまたれてきなく初音ともぬしさたまらぬ時鳥哉
たへてすむ人の心よかりそめにきてたにもきく山ほとゝきす

早苗

せき入て水ゆたかなる小山田にはや打むれてさなへとるらし
すゑ遠き千町のたのもうへやらて日次にうつる早苗とるなり
さ苗とる菅のを笠もをのつから雨にやたのむ小田のさをとめ
あま人のしほたれ衣ほしもあへすみなとの小田に早苗とる也
けふすきは老もやするとくるゝまて隙なく田子のさ苗取らし

橘

うたゝねの袂にかほる橘のうつりかふかきわかたもとかな
袖のかを花橘に殘しても我昔にはおもひ出もなし
ふるさとの軒の橘さきそめてむかしを今にまたかほるなり
いつとなく忍ふむかしを橘のさ月のみとはなに匂ふらん
しけりあひて春はむかしの花のかを袖にそ殘す軒の橘

五月雨

あすか川ふちせも同しみかさにてはれまもみえぬ五月雨の比
侘つゝもうき身ふるやの詠して心もはれぬ五月雨のそら

あすか川あすさへ氷のまさりなは淵瀬もみえし五月雨の頃
五月雨はこけの下行山水のいはこすまてになりにけるかな
山川の水かさまさりて久かたの空にもふかき五月雨の比

夏草

日にそへていとゝふかくや成ぬらんしけりのみ行野邊の夏草
とふ人のさらてもうとき山里になを道埋む庭の夏草
なつ草はしけるはかりの庭の面になにを言葉の花とみえまし
まとふりてふみゝぬ庭のさゆりはに猶草かくれ殘るともし火
とこなつの花にをきまよふ白露や塵をとはらふ野への夕風

夏月

そこきよき水のなかれにすむ月の影もよとまぬ短夜の空
なつかりの入江のあしの短夜にみる空もなく明る月かけ
さらぬたにほとなく月の短夜をいかにせよとか更て出らん
なつの夜はいかなる時そ有明の頃をもまたてのころ月かけ
我身まつふもとの野邊に出るより月吹嶺の風そ涼しき

鵜河

みれはまつわか心さへうかひ舟此わさのみもなき世ならぬに
うかひ舟一せを今やくたすらん波まにしつむかゝり火の影
夕やみのほとはみえつるうかひ舟ふけ行月にかゝりきゆなり
うかひ舟月もをくらの山陰にやみをしたひて篝さすなり
はやせ川のほれはくたる篝火もこの月はかり影をこそみめ

螢

あしの葉にみたるゝ露の光かとみゆるは夜の螢なりけり
をのつからまとの光とみつるかなしのふにすかる軒の螢を
とふ螢いかに思ひをふかめてか水底までもかけのもゆらん
わきかへる思ひをしれと山川の瀧ついはふちにとふ螢哉
ともし火の光を友と終夜あつめぬまとにとふ螢哉

夕立

夕立の過行跡のうき雲も殘る入日の影そすゝしき
小初瀬の山かきくもる夕立にふしみのくれは風そ涼しき
なる神の音羽ゥ山に雲消るせきのこなたも夕立の空
夏の日の入野の薄打なひき一村すきぬゆふ立の雲
夕立の雲の衣はかさねても空に涼しき風の音かな

蟬

風渡る杜の梢の夕つゆもおちて聞ゆる蟬のもろこゑ
夕たちのもりの下露ふかけれとしめらぬ物は蟬のもろこゑ
たちよるにもらぬ雨かと聞ゆるはこの松かけの蟬のこゑ〳〵
風ふけはいそへのなみもうつせみのれにあらはるゝ松の陰哉
をのかれも秋をかけたる夏引のいともてをるかせみの羽衣

納涼

吹風も涼しくかよふ松かけに夏をわすれて立暮つゝ
夏ふかきは山のかけの夕すゝみ外にはふかぬ秋風そふく

夏の日もゝりこぬかけの涼しさは風も秋にやならのはかしは
おもふとち木の下かけにまとゐして千年をまつの風そ涼しき
河風になひく柳のいなむしろしく物なしとすゝむ暮かな

夏祓

みそきするかもの川風ふくろ夜に秋をかけたる波の白ゆふ
御祓して人のうれへもみな月の小繩なしつる神そおさまる
みそき川いく秋かけてあさの葉もなかれよるへの水の白ゆふ
さらぬたにたつをやすき秋風にけふのみ風のみそきせし哉
みそきする波にや秋のきふれ川あさの葉なひく風の涼しさ

## 秋二十首

初秋

秋来ぬと四方の草木に吹そへて昨日に替る風の音かな
めにみえぬ秋とはいかておもひ草はすゑの露も今朝そ置そふ
このねぬる朝風たちて衣手もいつしか秋と身にやしむらん
しきたへの枕のみこそ白露の袖にも通ふ秋のはつかせ
今朝よりは音吹かへてめにみえぬ風をしろへに秋やきぬらん

七夕

戀々てあふよの袖に七夕やまた初秋の露をほすらん
七夕の逢は一夜のほとなさをまちこし秋の日數ならはや
七夕に心をかして我中の契りかほにもいそくくれかな
待わたる雲井はるかに思ふ哉あふは程なきかさゝきのはし
七夕の年に一夜の契りよりくるゝその日を待や兼ぬる

荻

聞侘ぬ軒はの荻に夜もすから音信て行秋風のこゑ
そよき立荻のうはゝにちる露を袖に殘して秋風そふく
さらにまた泪そ落る我袖の露をも露と荻のうは風
荻のはをなにと嵐のしほるらん秋の草木はこれはかりかと

〔歌闕〕

萩

みやきのや盛とみゆる秋はきの木のした露も花とちるらし
みやきのや木の下ふかき露落て染ぬ袂も萩か花すり
秋風も猶をとたてゝたかまとの野邊のまはきの露くたくなり
あき風のをとをはけしみたかまとのおのへのま萩散や過なん
みやきのや木の下露も袖かけて雨にうつろふ萩か花すり

虫

あさちふの露もはらはぬ秋の野によな〳〵しけき虫の聲哉
夕つくひかけろふをのゝあさちふに月やおそきと松虫の聲
夕暮のきりのまかきもほのかなる草の戸さしの虫のこゑ〳〵
鳴虫の泪はしらす秋の野の草の袂につゆそこほるゝ
秋そとはわかぬ名をかる松むしもかれゆく聲の色そしらるゝ

雁

夕くれの空吹く風や寒からしきつゝかさなる衣かりかれ

偽のなき世しれとやたのめこし秋をたかへぬ初かりのこゑ
歸りつる春の雲路やたとるらん雲にまとへる初かりのこゑ
白露の木のは色とる夕暮に秋風さむみかりそ鳴なる
ぬしそとは誰をたのむの雁なれはうはの空なるをのか玉章

鹿

くるよなきつまをうらみて夕くれの小倉の山になしか鳴なり
山里は松のとほその明かたに庭より歸るさほしかのこゑ
秋の田のいなはへたてゝもる庵をありともしらて鹿や鳴らん
ま萩ちるをのゝ露しも寒からしつまとふ鹿のさよ更てなく
露ふかき野邊の尾花の袖のうへに泪かたしき鹿や鳴らん

秋夕

なにとなくさひしさ思ふ夕暮の袖に置そふ秋の白露
草木なる露社おちめ泪さへさそひてもろき秋の夕風
心なき草木も露にしほれけりよしや袂の秋の夕くれ
つの國のいくたひ袖に露かをく雫も杜の秋の夕くれ
わきてなとひとり心をくたくらん我のみならぬ秋の夕へに

秋田

吹しくとみれは田の面のはる〳〵とほなみの末によはる秋風
雨すくる鳥羽田の面のいなむしろ露を吹しく秋の山風
夕日さすをかへのわさ田かりしほにみゆる稻葉の露そ色こき
秋の田のかりほのまはきちらまくもをしれ色つく露の寒けさ
みなと田の苅しほまてと賤の女かからきみるめも暇なのよや

山月

うき雲を嵐のよそにさきたてゝくまなく出る山のはの月
よそなから雲井の月をあふく哉身は山陰のすまゐなれとも
吹おろす山の嵐に雲はれてみれにもをにも月そさやけき
かひかれの雲をあらしのはらふより月もさやけきさよの中山
小初瀬や入あひの鐘も聲そひぬ山の端いそけ秋の夜の月

野月

秋ふかき野原の草を分きても露にそやとるよはの月影
春日のゝ露にあまれくやとるより月社神の光成けれ
秋もはやすゑのゝあさちうらかれてさひしきをのゝ有明の月
露むすふ手枕のゝのよはの月床は草葉と影そやとれる
月影は草のはつかに出そめて入方とをきむさしのゝ原

關月

秋寒きふはの關屋の板間あらみ月こそ獨もりあかしけれ
あれけるもをしからぬまて板ひさし月もり明すふはの關の戸
關の戸のあくるはをしき月影にいかなる鳥のしゐて鳴らん
關の戸も明かた近くなりぬとや夕つけ鳥は月になくらん
すゝか山ふりさけみれは天の戸の明行月に關もりもなし

橋月

すみわたる月影とをく引鹽の濱なの橋にかゝる旅ひと

道しあれは昔の秋に立歸り月すみわたる雲のかけ橋
すみ渡る月を夜な／＼片敷てさそさむしろのうちの橋姫
橋はしらむかしなからの秋の月いく代をかけてすみ渡るらん
月もなをすみわたれとや岩橋をよるのみかくるかつらきの神

浦月

須磨の浦や浪路はるかにすむ月の光をみかくよはの鹽風
秋の空いつくかかはるなそしもに月は明石の浦にさやけき
さやかなる月に煙のたつもうし夜はなやきそ鹽かまの浦
月影の雪もつもりの浦風になを秋寒し住吉の松

〔缺闕〕

菊

年をへてさきそふ菊のまかきにや老せぬ秋の色もみゆらん
千世をせくふちとやならん谷河に菊の白露おちつもりつゝ
いく千世もなを露のまを袖ぬれん山路の菊の花の行末
秋風にふきあけの菊の匂はすは花をも浪とみてや過まし
あきの色をはなにかされて久方の雲の上なる庭の白菊

擣衣

月影のふけ行空にきこゆなりころも夜寒の衣うつ聲
をのつからしつも月にやなれぬらんなかき夜すから衣擣とて
影さむみかさねて袖にをく霜の白妙衣月にうつなり
うちすさむ曉か衣のおさをあらみまとをにつちの音そ聞ゆる
しつの女か夜寒の里をとはすとも人にしれとや衣うつらん

霧

そことたに梢も見えす立こめて夕霧ふかし秋の山もと
木々の色山のすかたはへたてゝも月をはこめぬよはの秋霧
たちこめて人こそ見えれ舟よはふこゑはむかひの淀の川霧
秋風になひく庵のくれ竹や霧のまかきのたえまなるらん
心して霧のまかきも夕暮の月まつ程の山なへたてそ

杜紅葉

染つくす色社みえれ時雨するはゝその杜の秋のもみちは
紅葉するいく田のもりの陰なれや秋の色あるこやの池水
うすくこき紅葉の色もとり／＼にぬさとやみゆる神なみの杜
舟よするなきさの杜のもみち葉は色そふまゝに猶そこかるゝ
梢をはまたそめいてぬ色なから秋のけしきのもりの下露

河紅葉

うすくこき紅葉はなかる神なみの龍田の河はにしき成らん
大井川紅葉をくたす筏しのさほにゝしきの中や絕なん
大井川山の梢もあらはれて紅葉をかさす秋のいかたし
となせ川紅葉はかりはしくれぬをにしきにもるゝ瀧の白糸
しら波の龍田の河そもみちはのよるのにしきに心ゆるすな

暮秋

今はとて暮行秋よしたふにもよらぬ恨や長月のそら

ことはりやさそな名殘も小鹿なく秋の別は誰も思へは
うきものと思ひし秋もしかすかに暮れはをしき名殘ならすや
神かきにぬさとちりかふ紅葉かなしめなもこえて秋や行らん
うかりつる秋の日數もかきりそと思へはおしきけふの暮哉

## 冬十五首

時雨

むら時雨ふるかたみえて山の端にうつり定めぬ夕日影かな
木の葉さへ空にみたれてうき雲の時雨をゝくる山颪の風
夕日さすおなし高ねのうき雲に何とわけてか猶時雨らん
我身はや三十あまりの神無月猶や時雨のふりまさるへき
とやまなる時雨の雨のあしはやみいこまのたけに嵐吹らし

落葉

いろ／＼に山の木葉のちりしきてふもとの野へそ又錦なる
散しくもそのまゝならて紅葉はを又吹たつる庭の木からし
庭の面の落葉ふきたてゆく嵐ちりし梢に又かへすなり
はゝそ原散とやいはん時雨とやいはたのをのゝ木からしの風
谷川の水より色そまさり行木葉の雨の日數かされて

霜

冬草になをさく花とみゆるまて結そへたる霜の色かな
みし秋にさひしき色はつきにしを霜の枯葉の殘す色哉
ほすほとの日影もみえす谷ふかみ又さえこほるしもの下柴
霜さゆるまのゝかや原うつもれて秋みし露の面影もなし
かれの音もふけ行まゝに高砂の尾上の霜のほとそ知るゝ

寒草

しほれゆく野邊の尾花の袖さむみ朝霜ふかくをきまさるなり
冬されの枯野をさむみかる人も嵐に殘るかやかした折
霜かれのまのゝかや原そのまゝに亂て殘る秋のおもかけ
秋まてはみさりし花や櫻あさのかれても殘る霜の下草
枯わたる野へはあさちにをく霜のふかきや冬の色をみすらん

冬月

薄氷いしまの水に影おちて光そ寒き冬の夜の月
秋風を身にしむ物とおもひしは冬の月みぬ心なりけり
村時雨たまらぬねやの板まよりまたもりかはる有明の月
村雲のたえまの空に影みえて時雨を出る夜はの月かな
くまもなき空にあらしのふくる夜は月の桂や落葉しぬらん

氷

岩間ゆくをとそたえぬる谷川の水やさなから氷とつらん
とちそめてひとへ氷れる池水のそこにみえ行浪のした草
なかれえぬあさせの木ノ葉とりそへてこほり色ある山川の水
よとゝもに寒し嵐の山河にうかふみなはそ氷はてぬる
池水の氷のひまやあしかものうきねの床もせはくみゆらん

霰

木からしのはけしかりつる行衛とやあられ玉散る夕暮の空
さえとをる嵐のをとゝ聞程にやかてあられのふりつゝくなり
さゝの葉にこほれる露の白玉かなにそとみれはあられ散なり
こほりゐし瀧の白玉をたえして山のいはれにふるあられ哉
夢をたにいかゝみ山のいほならむあられ玉散るさゝの枕に

千鳥

さ夜千鳥聲打そへて風さゆるいそへの浪の立ゐにそきく
わかの浦の波も昔にかへる世をたえす八千世となく千鳥哉
友千鳥ともにや聲を川島の水のなかれもさむきよな／＼
月影はおきに出にけり友千鳥いその涙わけよると鳴らん
明かたもちかくなるみの浦千鳥入鹽とをき月になくなり

水鳥

冬の池に數かくをしのひまをあらみ上毛の霜やはらひかぬ覧
氷ゐる玉もの床やさむからしつかへるをしの羽をかはして
山川のあさせはこほるかた淵に床せはしとやをしの鳴らん
はらひえぬよのまの霜はあしへ行かもの羽かひも色替るまて
水鳥の春待ほとやよしの川なみのはなをも宿とすむらん

淺雪

ふゆかれの野への草葉の色たにもかくれぬ程にふれる白雪
庭の面に跡はそれともみえぬまて風にあまきる雪そ晴行
ふりかくすほとはつもらて松の葉のうす緑なる今朝の初雪
今朝の間にふる白雪はあさはのゝ梢も草もそれとみえつゝ
とはれぬる跡とや見えんかつ消てつもる程なき庭の白雪

深雪

かきくらしよしのゝ山に降雪の日をかさねてや深くなるらん
うつもれて木末の雪は落にけり嵐に歸る松の下折
跡つけて人もとはれはいたつらにいくへかつもる庭の白雪
山かせもはらふ程こそはらひけめ尾上の松の雪の下折
ふりつみて枝もたはゝにくれ竹の夜のまにいかに雪の下折

神樂

あくるまてうたふ神樂の聲さえて庭火の影もはやしらみつゝ
神の代のみぬ面影も有明の月にすみゆくあかほしのこゑ
たきすさむ庭火のまへに置霜はほしの光にさえまさりけり
星うたふ庭火のまへの霜よりも神の心のとけやしぬらん

〔歌闕〕

鷹狩

降雪をはらひもあへすはしたかのつかれの鳥をなをたつる哉
はしたかのおふさのすゝのなら柴になれたる鳥や立歸るらん
けふも又かりくらしつゝはし鷹のとやまの月の影そほのめく
ぬれにけりやとゝはならぬやかたをの鷹もましろに霰降つゝ
白雪のふるきにかへる跡みえてさか野の原にみかりをそする

炭竈

さひしさはよそまてみえてすみかまの煙をたつるをのゝ山里
ふりすさむ雪けの雲のひまはあれと烟そはれぬをのゝ炭竈
しからきのと山の雪はふるけれと猶たきやまぬまきの炭竈
人しれすさむさをこふるすみかまの煙もなをや下こかるらん
大原やまきのすみやく夕烟くもるをあすの雪けとそみる

歳暮

いそかれてすくる月日の程もなく春にちかつく年のくれ哉
行年のつもれは老となる物を春にめてゝもなといそきけん
日數さへふりかさなれる白雪のつもり／＼て年そくれゆく
いかたしのさすともいはすそま川のなかれてはやき年の暮哉
春ちかくまた年なみやかゝるらん殘る日數も末のまつ山

## 戀二十首

寄月戀

見せはやな泪ひまなき我袖に月はよな／＼やとるならひを
まつ人のとはてふけ行つれなさのたくひもつらき有明の月
待いつるほとをは月にたのめても人の契そうはの空なる
この夕ほの三日月のよひ／＼に影そふことく戀やわたらん
見ても猶おもひしれとや有明の月出るまてつれなかるらん

寄雲戀

峯高みたえすたなひく白雲のはれぬ思をいかてしらせん
かたみとは契らさりしに横雲のわかるゝ空をなかめ侘つゝ
しらせはや心うきたつ雨雲のよそなる中に思ひかけきと
はれすのみ思ふ心や君かあたりいまこの山の雲となりけん
衣／＼のうらみそふかき横雲のひきとめかたきしのゝめの空

寄風戀

うはの空に吹秋風も折からや身にしむ戀の妻と成らん
きかしたゝ泪さそふもあちきなし人も梢の松風のこゑ
秋風の吹にも過て夕まくれいかなる戀の身にはしむらむ
かくはかりうはの空なる秋風を我身にしめて猶思ひけん
吹初し身を秋風にこひ衣恨はかりやかされきぬらん

寄雨戀

來ぬ人を待夜ふけぬる村雨に思ひ絕たる床のさむしろ
さはるへき人の心の末なれやまつおりしもの夕暮のあめ
我身世にふけ行そての雨そうきさはるつらさに詠なれても
ぬれつゝもわれやゆかんの宵の雨にやすらふ程を問人もかな
いかにせん泪の雨のふるさるゝ身には思ひのはれぬ習ひを

寄露戀

忍ふとも色にやいてん我袖に泪の露のをきあまる身は
みやきのゝ露はわけれと戀衣雨にまさりてぬるゝ袖かな
人しれぬ泪を露とこたへてもほしえぬ袖はいかゝみすへき
袖の露を小萩かうへと思ひせはたゝ夕くれは風やまたまし
夏はつる扇子の風に身をあきの泪の露やさきにおくらん

寄山戀

とけてねはさすか夢にやみわの山待見ん物をうつゝならても
いまはたゝ思ひ入なんよしの山戀のうき世におしからぬ身そ
さのみなと人に心をつくはねのは山しけ山なけきのみして
夢にさへあふ共みえすうつの山うつゝにまさる人のつらさは
ひろまなき袂や色にいつみ川泪にぬれぬ衣かせやま

寄原戀

しのふれと人しるらめやあやにくに泪露けき小野のしの原
忘れしとしめしか原のさしもこそたのめしをのなと替るらん
人心あさちか原にをく露を袖にかけつゝなをそ戀しき
わきもこか衣にはすゝしま萩原うつろふ色にならひもそする
あふみちときゝし計そみるめたに泪の水のあはすのゝ原

寄海戀

おもふことありその海にたつ浪のよる〳〵かけてぬるゝ袖哉
逢事はいなはの海にあまのかゝみるめはかりに袖やぬれなん
わたつ海のなみにたゆたふうき舟の行衛もしらす戀や渡らん
しらせはやうさもつらさもありそ海の濱の眞砂の數を盡して
おなしくは思ふ心のおくの海を人にしらせて沈みはてなん

寄橋戀

あふことはたえの橋と成しより年月かけて戀わたる哉
よな〳〵の契たえ行わか中はくめちの橋のたくひ成けり
くち殘るいたゝの橋も通ふなりたえにし中を何にかけまし
おく山の谷の柴橋まれにたにあふ人なしに戀や渡らん
戀わたるまゝのつき橋つれもなき命をかけて猶やたのまん

寄關戀

こえやらてまよふ心のへたてをは人のこたへるあふ坂の關
しら川の關はこえれとうき人のつらさ戀路に秋風そふく
音にきくなこそのせきの名もつらし我通路にありと思へは
關守のうきねぬよはゝ東路のなこそといふそとふにまされる
玉つさのもしの關路の行衛こそ心つくしのはしめ成けれ

寄木戀

人しれぬみをのそま木のいつまてかつれなき方に心ひかまし
人しれす思ひそむれとときは木のつれなき色にさてや果まし
むすひつる契もかたき中ならはその名を殘せいはしろの松
相坂はなのみなりけり人心つれなき色にすきたてるやま
數ならぬみわの神杉人しれす思ふしるしやなくてくちなん

寄草戀

忘れ行人を忍ふの草の葉に泪の露そをかぬまもなき
身の秋の契りかれ行道芝をわけこし露そ袖に殘れる
たのまめやうつろひやすき月草のひと花心色にそむとも
みちのへの小花かもとのなもつらし我戀草のしけき心に
荻の葉のそよとはきけと秋風の吹につけつゝ音つれもなし

寄虫戀

身を秋と思ひたえぬる夕くれに誰松虫のなをも鳴らん

兼てより思ひたえにし夕暮はまたれぬ物をくものふるまひ

心かられをのみ鳴てうつせみのむなしき戀に身をやかへまし

されはとてけたぬ思ひに己か身をいたつらになすよはの夏虫

虫の音のかれ〳〵になる中にこそ我身の秋も思ひしらるれ

寄鳥戀

つれなしと夕つけ鳥のなく〳〵も猶そうらむる衣々の袖

我思ひ初鳥やいてのたかなれやかりにもなれぬ戀のまよひは

戀となる初めもつらしなにとてかいなおほせ鳥の敎へ置けん

明ぬるか君かこぬ夜の數そへて門田のしきのもゝ羽かくなり

聞侘ぬ別につらき鳥よりも待夜むなしく明る八聲は

寄獸戀

身のよそにきゝもなされすさ夜更て妻戀侘る棹鹿の聲

われもさそ身にしられても哀なりつまとふ鹿の秋の思ひは

思ひやれかゝるもかきたえとはぬ夜に獨ふすゐの床の露けさ

夜もすから妻こふ鹿も我戀にたれかまさるとなくねくらへん

我そうき妻こひかぬる鹿たにも秋はかりこそそれにはたてしを

寄玉戀

いつとなく人そ戀しき玉のをのたえすしたには思ひみたれて

から人の玉をなけきし袖の色もかくや泪の千入なりけん

白玉と袖にくたけて落やまぬ泪は人のつらき數かも

泪こそ先せきあへれうき數をとへと白玉いはぬたもとに

かはくまも泪の玉のかす〳〵をつゝむにあまる袖や朽なん

寄鏡戀

日にそへていとゝ思ひそます鏡みし面影のくもりはてれは

くもれたゝみれは泪のますかゝみ誠にそはぬ人の面かけ

市人のかへし鏡のわれてたにあふためしある世をや頼まん

草ふかき野守のかゝみかりにこし影たにみえす遠さかりつゝ

ますかゝみわかうき影をうつさすはいとふ人をや猶恨まし

寄枕戀

夜な〳〵は涙のかゝる枕こそ袖よりも猶ぬれまさりけれ

かこたはや誰にかつけの枕して我むつことをもらし初けん

いかにして思ひゆるさんあふとたにしらは人にもつけの小枕

あかさりし人の契りの朝ねかみ我手枕に又もみたれす

枕より跡より戀のくるしさに物思ふよはいこそねられね

寄衣戀

おもひ餘夜の衣をかへしつゝうちぬる夢にみるよしも哉

うらなくもなにたのみけんうす衣ひとへにかはる人の心を

我袖にいかゝ忍ふのすり衣涙のみたれ人もこそしれ

しかのあまの鹽やき衣かけてなを思ふもかなし恨みはてなて

打侘てぬる夜かさなるから衣たえぬ恨に秋風そふく

寄糸戀

逢事はかたむすひなるしけ糸のおもひみたれて月日へにけり

つひにさてあはてはてける片糸の思ひしよりも今はくるしき

しけ糸の賤のをたまきくりかへし思ふとたにもしろよしも哉

うきふしはなをしけ糸の年をへてたえぬ思にむすほゝれつゝ

わくらはにくる時よりそ白糸のふしはなくても絶ぬへしとは

## 雜十首

曉鷄

鳴渡る八聲の鳥に見る夢もやかておとろくあかつきの空

むかし思ふ老の寢覺の手枕に泪をかけの音をそ添ける

曉を夕つけ鳥のつくるよりつかふる道におきならひつゝ

たれしかもあふ坂山の鳥の音に旅れあけぬとをき別るらん

長閑なる老の寢覺にしられけり八聲の鳥もおとろかぬ代は

松

行末もなをそさかへん年をへてみとり立そふ庭のまつかえ

君か代にあひ生の松のふる葉まて露の惠にもれぬうれしさ

をしほ山生そふ松にしられけり君か八千世の限なしとは

みちのくのあこやの松も人ならはしのふ昔のことやとはまし

おなしくは代々にひろひし玉松の言の葉こえよ和歌の浦浪

竹

うへてみるみかきの竹のふしことに千世萬代の數そこもれる

いにしへの風もかはらて九重のみかきの竹は千世そさかへん

百舗の庭のくれ竹いく千世もかはらぬ影を君そみるへき

紅葉にも花にもあらぬ竹のよの色にはかはる折節もなし

君やいまかはらぬ色に契らし竹のうてなの萬代のかけ

山家

山里の軒端の松にをとつるゝ嵐の音もときはなるらし

伏見山むかしの跡はなのみしてあれまくをしき代々の古さと

山さとの松の嵐のふかぬまや中々これもこひしかるらん

我庵はたえす嵐のなら柴になれはまさらて住うかれつゝ

老らくの身ひとつと住山里は門さゝすとも誰かとひこむ

田家

秋過てもる人もなき庵にもなをかよひちのみゆるを山田

かはりはてゝ人はいなはのを山田に殘る庵を月のみそもる

秋ふかきしつか門田のいな莚庭もひとつにかりやしくらん

小山田のひたのかけなは引むすひかり庵つくる秋（時イ）はきにけり

時雨のみ秋のまゝにやもりぬらし人もかよはぬ小田の庵は

旅

をのつから月に友なふ旅人や夜の關路もさはらさるらん

やとれ月露分きつる旅衣たちし都のわすれかたみに

ふしなれぬ野邊のをさゝのかり枕一夜のほとも明しかねつゝ

ふる里のとをくなりゆくむまや路にかされても聞すゝの音哉

夜はなをしほれやまさる旅衣露をかたしく草の枕に

浦鶴

今そはやかひある時と和歌の浦のあしへのたつの聲も聞ゆる

和歌の浦や雲井の友にさそはれて蘆間かくれのたつも鳴なり

わかの浦の松にむれゐる友つるの千年をよはふ聲そのとけき

わかの浦やあしへのたつの代々をへて更に雲井に遊ふけふ哉

浦風のふけゐにかよふひなつるの雲井へたてぬ聲そ聞ゆる

述懷

いかはかり心をそへて政すくなる代そと人にいはれん

君か代にあはすはわかの浦なみによらてもくつの朽や果なん

愚なる身を社なけゝつかふとて君のたすけの名をはかれとも

人なみに世をや渡らんさほ河のすみ濁るをもわかぬ身にして

立歸り和歌の浦なみさそはすはかゝる藻屑のいかてしられん

神祇

誰人もさそあふくらん神かせやみもすそ川の淸きなかれは

おとこ山たゝ（テイ）しき御代をまもるへき神のちかひは今の時かも

天地と分れし代々の神もいま一心にきみまもるらし

なみならぬ惠そふかき石淸水むすふ契や代々をかけけん

〔歌闕〕

祝

天津空くもらぬ時としられてやてらす月日も光そふらん

八隅しる君を佐てかしこくもおさまる御代は千世もつきせし

くもりなき君か光りは日の本の國の外まてさそてらすらん

君か代はなみ靜なるあし原や大和島根そけにうこきなき

行末のためしにもひけあつさ弓八島の波のおさまれる代を

〔右後花園院御百首以內閣本校合〕

# 文明十五年將軍家百首 常德院

## 春二十首

都初春　通秀

みやこ人またきたちきる花染の袖よりはるの色はみえけり　實隆

野へははや雪まそおほきはるのくる道も都やはしめなるらん　基綱

九重のみやこの山のあさ霞千代のはしめの春そこもれる　宗伊

ことの葉の花のみやこのあさ霞八雲をかけて春やたつらん

里霞　通秀

あくる夜のかすみの底にしつむなり峯よりはるゝ山もとの里

實隆
たちつゝく夕けの煙吹ませてあらしの末にかすむ山本
基綱
もしほやくあしやの里やくる春もわかすむ方と猶かすむらん
宗伊
あけわたる外山の霞うちなひき春來にけりな秋しのゝさと
寢覺鶯
通秀
ねくらよりはやほころひてさめやらぬ夢の枕に鶯そなく
實隆
夜をこめて鳴鶯の初音こそ覺の後のめをさましけれ
基綱
軒端もる月かけかすむはるの夜のつれなき夢をさそふ鶯
宗伊
ふしなからおとろかれけり吳竹の夜床ならふるうくひすの聲
水間若菜
通秀
若菜おふる野澤の水のふかくのみ盡せぬ御代を祝ひてそつむ
實隆
うきにのみ老ぬへき身のたくひかなやま澤ゑくは摘人もなし
基綱
はるさむき雪けの水もをのつから綠すくなきねせり摘けり
宗伊
袖かけてあらふやなみもしろたへのねこめにつめる芹川の水
餘寒風
通秀
いつしかと長閑なりしをはるの風あまりにも又さえかへる哉
實隆
けさはまたゆきの玉水音たえて軒端にこほる春の山風
基綱
木すゑにもつもらぬ雪のうちかすみ春の色なき山かせの聲
宗伊
雪みたれ山風ふきて春のきる衣をそらにかされわひつゝ
軒梅
通秀
かすむ夜の月は軒はをもりかれてなれのみ袖にうつる梅か香
實隆
たをやめの花のよそほひ色そへてちりしもさそな軒の梅か香
基綱
あかすおもふ心をかせのやとりにて袖にもしめつ軒の梅かゝ
宗伊
たえす我袖にもかよへ梅か香にやとりなれたる軒のまつかせ
柳帶露
通秀
こゝろもてなひく柳の露をしそ玉のみきりのたまとあさむく
實隆
おきふしを風にまかせて青柳のいとはなかく〱露もみたれす

基綱
しるしにといひしかさしの玉柳みとりのまゆにゝほふ白露
宗伊
朝露もこほれてにほふ青柳のねくたれかみにはるかせそ吹

歸鴈連雲　通秀
見るかうちに伴ひそ行をくれつるほとは雲井の春のかりかね
實隆
かへる鴈ともなひすてゝ雲ははや夕ゐる峯を猶やこゆらん
基綱
しるへなき雲路にまよふ春の鴈思ひのみとやなをいそくらん
宗伊
まかへても花をわするゝあまつ鴈かへるこし路の春の白雲

尋花　通秀
そことしもわきてしられぬ花の香に猶あくかるゝ春の山ふみ
實隆
山櫻まつこそとはめさきにほふ花のところは都なからに
基綱
分きつゝけふこそ三輪の山櫻はなも尋ぬる人やまちけん
宗伊
花にゆくこゝろのおくや三輪の山すきの梢にまよふ白雲

折花　通秀
とかむなよはるの山守おるもたゝ咲あまりぬる花のしつえそ
實隆
一枝もいかにいひてか手折ましのちの春まつ華のあるしに
基綱
心なき名やあらはれん折かさす花にかくるゝ老はありとも
宗伊
ちらすよりおるはおしとや櫻花かさす袂をしたふはるかせ

竹間花　通秀
一むらの竹の葉かくれさく花にやふしもわかぬ春は見えけり
實隆
うくひすもねくらや花にうつむらん櫻咲そふ軒のくれ竹
基綱
下をれのまたるゝ雪やさく花の色をへたつるまとの呉竹
宗伊
咲ましる園生のはなは呉竹にすれる衣の匂ふとそみる

依花待人　通秀
いかにせん花かつちりてこのくれもなを待人はこすの春風
實隆
待侘てちらはちらなんとはかりや人のつらさを花にかけまし
基綱
こゝろなき我友よりも我宿のはなはいかなる人をまつらむ

宗伊
しろしらす誰もとへかし心にも身にもすきたる宿の櫻を

閑居花

通秀
身におはぬ花の色哉ふりはつる淺茅かやとのはるに咲つゝ

實隆
春の色のあはれそこもる白雲のなかはの戸ほそ花にとちつゝ

基綱
はるといへはむくらの門もとちはてす花にさはらぬ人の心に

宗伊
人とはぬ春のすみかは鳥の音もきこえぬ山のはなそちり行

旅春雨

通秀
春雨のこゝろほそさもたへわひぬ旅のかりやの軒のいと水

實隆
鳥かなくそらもかすみてあつまのゝ草の枕そ雨に夜ふかき

基綱
旅衣しほるゝ雨に色まさるかすみの袖をかすやともかな

宗伊
ほしわふるみのしろ衣はる雨の故郷いてゝいく日きつらん

山田苗代

通秀
たえ／＼におつるもほそし山水の筧につたふ小田の苗代

實隆
木かくれし山下水も春の田にせきいれておとす末はみえけり

基綱
山川のはやきなかれをせく小田の苗しろ水は末もにこらす

宗伊
すきかへしせき入ておとす山水に田子の心もみゆる春かな

庭菫

通秀
一夜ねん人こそしられ春の野とあれ行く庭に菫つみても

實隆
あれにけり庭の芝草春ふかみすみれつみにと人のくるまて

基綱
しめをきし誰つほすみれ今も猶野となるかたにはるな摘らん

宗伊
いく日まてつみてをあかん野へにたに一夜はねぬゝ宿の菫を

松下躑躅

通秀
なをしはし下てるつゝしゝるへせよ松にくれゆく岡越のみち

實隆
岩根松みとりの外もはるの色の一しほみする下つゝしかな

基綱
ねもふかく松の生そふ岩つゝし種しあれはと花も咲らし

宗伊
松の葉のときはの山の下つゝし花もちりうせぬ色にさけかし

籬欵冬　通秀

ゆふ暮のまかきかひなしやすらはて春はくれゆく山吹の花

實隆

八重にほふ枝もやをもき山吹のはなにかたふく春のまかきは

基綱

ゆくはるも今そまかきの山吹にやとりとるへく匂ふころかな

宗伊

いはすとも人やはかへるやまふきのまかきにゝほふ夕暮の宿

浦藤　通秀

こゝろなきうらわのあまも立かへりみるめやあかぬ松の藤波

實隆

しゐてなを袖はぬるとも折てみんおり立田子の浦のふし波

基綱

そことなくうかへる舟も田子の浦やこゝそ泊とさけるふし波

宗伊

ふし浪のかけなるうみにわたつみのかさしの花も匂ふ春かな

惜春不留　通秀

春や猶あかつきまてとしたはまし入相の鐘にけふはくれにき

實隆

花鳥のしたふによらぬ年もへぬ身をゝろかにや春の思はん

基綱

またこむをあたの命に待よりもとまらぬ春をなけくはかなさ

宗伊

よともなく花のなかれし山水に春の白波いかゝせかまし

## 夏十首

首夏朝露　通秀

はるも又忘られぬへし階のもとの夏にひらくる花の朝露

實隆

はなにあかぬたか涙をかそゝくらん青葉つゆけき朝ほらけ哉

基綱

名殘うきはなそめ衣露ふかみ今朝はぬきかふる袖そしほるゝ

宗伊

夏にはや入野のすゝき朝な〳〵穗にいてん秋の露そみえゆく

岸卯花　通秀

川きしのうつらぬかたもうの花の咲ころのみそ月はみえける

實隆

月そすむうの花さける谷川の岸によるなみよるもすからに

基綱

きしかけに咲卯の花は月雪のありし舟出をしのふ色かな

宗伊

月かけのうつれるいさこあきらかに水みとりなる岸のうの花

雲外郭公　通秀

横雲のそらに鳴つゝほとゝきすたか別路のなみたなる（かイ）らん
實隆
今そけに鳴一聲に明にけり横雲かゝる山ほとゝきす
基綱
かつらきや見るたによその雲間より聞つとやいはん山郭公
宗伊
月のころ山ほとゝきすおりしもあれ曉の雲にあへるひとこゑ
通秀

故郷橘
雲井にもなりしむかしはつてにのみ聞てしのふる軒のたち花
實隆
あれまさる軒端にもなを立花の世にふりかたき香を殘しつゝ
基綱
くちにける軒はにうへし袖のかも今はむかしと匂ふたち花
宗伊
ことゝはん今も名におふたち花のその世はしるやゐての里人
通秀

池菖蒲
池水のあやめにましるわかこもはひき殘されてけふやわく覽
實隆
枕にやこよひからまし水鳥のうきねになれし池のあやめを
基綱
かる跡にのこるあやめの匂ひのみありしにまさる庭のいけ水
宗伊
菖蒲かる池水はれて舟の中にけふみかくてふこゝ（かゝみイ）ろをそみる
通秀

橋五月雨
山人の往來はたえて五月雨に岩波こゆるたにの柴はし
實隆
更にまた中絶はてゝ五月雨のふるき跡みるさのゝふなはし
基綱
五月雨に朽やしぬらん波かゝるまゝのつきはし人もかよはて
宗伊
〔歌闕〕

深夜鵜川
在明の月よりさきといさなひて鵜川にいつるかゝり火のかけ
通秀
月まちてかへるやいかに夕やみのみちもたとらて出しう舟は
實隆
冬川の網代にさえしかゝり火の鵜舟にふくる影そ涼しき
基綱
鵜飼舟ふかき闇路をかゝり火のまよはぬしもそ猶哀なる
宗伊

鳥夏草
涼しさそまつほに出るなみかくろ野島か露にしけるすゝきは
實隆

しけり行草をまかきの島とみてしほかま近き庭のおもかけ
基　綱
五月雨のみかさのあとの川しまに末葉なひきてしけろ草かな
宗　伊
夏草のたれまきそふる粟路野のゝしまをかけてしけろ比哉
通　秀
樹陰蟬
琴の音にまつ吹かせをまかふれは木すゑの蟬も聲をそへつゝ
實　隆
露になく聲さへ涼し蟬のはのうすみとりなる木々の下影
基　綱
夏ころも蟬の羽山はなのみしてかさなる木かけもろ露もなし
宗　伊
秋風もしのひ／＼に吹そめて木かくれ涼しうつ蟬のこゑ
通　秀
河夏祓
けふをせめてまつ御祓せん飛鳥川あすうき秋は身に歸るとも
實　隆
川水の絶ぬ御祓□古花のせ戸のしほせをはらめとそきく
基　綱
水鳥のかもの川瀬にみそきしてうかふや麻の靑葉なるらん
宗　伊
御祓してかへるゆふへに龍田川水のあきくろ波の音かな

# 秋二十首

新秋風
あき風の吹はかす／＼まつおちて老の涙そ一葉にもにぬ
通　秀
吹もあへすやかてしほるゝ草木より秋くる風の色にみえけり
實　隆
草も木もにし吹風にくる秋の身にしむ色をはつしほにして
基　綱
夏かりのあしの若葉もうちなひき秋來にけりなこやの浦風
宗　伊
野外七夕
七夕の手向をしらはいとはやも花とさかなん野への七草
通　秀
名にしおはゝ近きわたりを天川なにとかた野の星のあふせそ
實　隆
銀河ほしのあふ瀨の岩まくらかた野の露もよそにをくらし
基　綱
草の上にけさとろつゆを天川かた野の御野に誰かわくらん
宗　伊
簷荻
荻の葉をたのむのきはの草かきにあらくな吹そ秋の夕風
通　秀
こすの中を風のやとりとみろはかり末葉吹入のきのした荻
實　隆

基綱

軒におふる忍のつゆも秋の色にみたれそめぬるをきの上風

宗伊

なみの音を軒はの荻にうちそへてあるゝはまやに秋風そ吹

通秀

澤女郎花

女郎花たてる澤邊のみつかゝみ見ても心のおこらさらめや

實隆

影しあれは野澤の水も女郎花はなに心をうつしてやすむ

基綱

せりつみし澤邊の水にかけとめていまも露けきをみなへし哉

宗伊

入はしにあらぬ澤邊のをみなへしつましあれはと誰か折らん

通秀

岡萩

夕つゆの岡のくすはな咲そひて色もひとつにほふあき萩

實隆

萩か花ちるやをか邊のゆふつくひうつろもおしき秋の色哉

基綱

眞葛はふをかの萩はら秋風にうつろふ色をうらみかれつゝ

宗伊

をちかたに行て草かれ小萩さく岡のやかたにむまはありとも

通秀

薄似袖

夕されはをかへの薄うちみたれこえゆく人の袖もわかれす

實隆

ふかぬまはまれくともなし花すゝきたゝ秋風の袖とそ見る

基綱

こゝろなき尾花かそての夕風もなを世を秋の露そこほるゝ

宗伊

花すゝき露けき袖の誰まちてぬるゝかほなる月やとすらん

通秀

戸外槿

山陰やしはしはかりの柴の戸に花もはかなくかゝるあさかほ

實隆

おりてみるかひもあるかな槇の戸をおし明方の花のあさかほ

基綱

をそくとく終にくちなん松の戸のあくる待まをたのむ朝かほ

宗伊

夜半の露おき出てみれは閨の戸のあくるまさけゝ朝かほの花

通秀

苔徑露

風あらく夕なみこえて熊の川こけちの秋やいとゝ露けき

實隆

つま木こる岩かれさむき松風にこけのみたれて露そこほるゝ

基綱

いはかれのつゆふみわくる谷かけに苔の袖ほす庭そふりぬる

宗伊
苔ふかき山路のあらしくれわたり行そてかけて露そこほるゝ
虫怨
通秀
たえすなと音には鳴らん秋の虫のさせる怨も世にはあらしな
實隆
鳴虫のおもひよいかに色かはるあさちをみてもあはれとそ聞
基綱
あまのすむ浦風さむくなるみのや里のしるへのむしの聲々
宗伊
きり〳〵す思ひなそへそさらぬたに音なきかちなる秋の枕に
古渡秋夕
通秀
ゆふされはわたりを遠み立こむる霧にかゝれるよとのつき橋
實隆
松に吹浦輪の風も秋はなを夕かなしきむしあけのせと
基綱
みやこ思ふこゝろよいかにすみた川舟まつ程のあきの夕くれ
宗伊
漕かへるそてのわたりの夕霧に家路やたとる秋の舟人
杣鹿
通秀
杣木とる人はかへれるゆふ山にまた聲たつる秋のさをしか
實隆
そま木引太山の鹿やたかしまのみをつくしても妻や戀らん
基綱
宮木伐そま山かけにたつしかも妻まつくれに心日くらし
宗伊
槇檜はらきるてふ山に鳴鹿やつまゝつの木のかけたのむらん
薄暮雁
通秀
天つかりこしちの夕いかなれは都の秋にかへてきぬらん
實隆
かせさはく湊江さむきゆふ波に聲をかはしておつる雁かね
基綱
春いにし雁はまたきぬつく〳〵とすくる月日をなけく夕に
宗伊
かりのくる夕の涙おちそひていろつくみねに秋風そふく
月契秋
通秀
あらましのちきりわするな墨染の袖まてなれん秋の月かけ
實隆
いかならん秋かゝれせん天地とゝもにねさせる月のかつらは
基綱
言の葉もかはさぬ月のみや人にいく世の秋を契りきつらん
宗伊
月はたゝ秋にそあへる花にゝほひゆきに光はさえまされとも

禁中月　通秀

うちたゆみなれも月をやみかき守衛士のたくひもけふり消行　實隆

にしになるひかりもあかすすむ月の花のとほその明方の空　基綱

あきの葉のいろをなかせし御溝水月のかつらも影ひたすらし　宗伊

かけたかき雲井の月の秋の花ひらくる門にさすひかりかな

草庵月　通秀

雨をきく夜半こそあらめ草の庵の月よ何ゆへ袖ぬらすらん　實隆

月みよとなれる宿かな草の戸の露しく床はうちもあらはに　基綱

へたてなく月も心をかはすらし草のいほもる露のあるしに　宗伊

草の庵もる月影はさはられと涙によるの雨そのこれる

月前遠島　通秀

浪の上の興津しま松月かけのかたふくまゝにあらはれにけり　實隆

こゝろある誰あこかれて行舟の月にもかよふまつかうら島　基綱

水無瀬川山もと遠くみしかけや千さとのおくの袖のうへの月　宗伊

心ある月もすみけりもしほくむをしまのあまの沖の苫屋に

月前行客　通秀

行末を誰に問ましそことなく月にうかるゝみち芝の露　實隆

深ぬともあはれをかはす友しあらは殘の月に猶やゆかまし　基綱

こゝろあるいつくの友をとふ人か夜ふかき月にいてゝ行らん　宗伊

さしいらぬ宿はなるれと人毎にあくかれいつるみちのへの月

擣衣幽　通秀

おもひやりあはれもふかし里遠み誰待わひて衣うつらん　實隆

から衣まつ夜かさなる手をたゆみうつとしもなき音に立らし　基綱

ほのかなる音しもさむしやまかけの夜ふかき霜に衣うつ人　宗伊

霜なからわれもかたしくあさ衣うつこゑさゆる夜は深くして

紅葉誰家　通秀

ぬしやたれはしもかへても色ふかき紅葉にかこふ山もとの庵

實　隆
誰かすむいろつく梢ほのみゆるきりのまかきのおくの夕暮
基　綱
ぬしらぬやとの木すゑも行秋のいまはの色をかへり見る哉
宗　伊
色ふかき心そみやるひとむらの紅葉の庭はゆきてとはれと
鐘聲送秋　通　秀
たか砂やあきもいまはの鐘の音を尾上の雲につゝみてそ行
實　隆
鐘の聲に秋もくれぬとけふの暮おとろく上におとろかれつゝ
基　綱
松ならぬ尾上のかれも行秋をしる人にしてつくるこゑかな
宗　伊
敷なれし枕の露は霜となりて秋も殘らぬかれの聲かな

## 冬十首

時雨告冬　通　秀
冬きぬと更にそしるき村時雨きのふもかゝる袖とみなから
實　隆
みし秋のおなし雲路をふりきてもけふよりふゆの初時雨哉
基　綱
いつしかと秋より後の初時雨野山を冬の色にそめつゝ
宗　伊
暮てゆく秋もなみたにかす袖のさらにしくるゝ冬は來にけり
聞落葉　通　秀
閨の上に葉ひろかしはのちる音はなへての木々のしる哀かは
實　隆
たきの音に秋きゝそめしあはれまて落葉のそこに殘る山風
基　綱
山風におつる木の葉のそよさらに身にしむ色そみる心地する
宗　伊
ちるまゝにせかれてこゆる山水やもみちの上（こゑイ）となりて落らん
樵路霜　通　秀
山人や爪木のみちもしもまよふありあけの月にわひて行らん
實　隆
眞柴とるやま路の霜の朝な〳〵雪に絶なむすゑをしそ思ふ
基　綱
やま人のま柴におへるゆふ霜はさむさやつらき重荷なるらん
宗　伊
わけ入し薪の山路はるかにて夕しもこれるかへるさのそて
冬夜難曙　通　秀
霜さむみいくれ覺してあくるかとみれは板まの月そ夜ふかき
實　隆

いく度のねさめの床にまたれても霜につれなき鐘の音かな
基綱
ひましらむ窓はありあけの月影に手枕こほる夜半そつれなき
宗伊
さゆる夜のなをあけやらぬ天の戸は月の影さし霜やとつらん
通秀

河水

みれの雪ふる日やゝかて冬川の汀のこほりむすひそめけん
實隆
夜をかされこほるかうへにこほりゐてよする汀にたかき浪哉
基綱
よせかへる音こそなけれしかの浦や汀はたかくこほる浪かな
宗伊
なみの音は松にのこりて志賀の浦や興を汀になすこほりかな
通秀

泊千鳥

須磨の浦や波の枕に鳴千鳥もしほたれとてね覺とふらん
實隆
なれのみや友なし千鳥ひとりこそわれもあかしのなみの枕に
基綱
とまり舟袖になみこす磯かくれなくもうきねの友千鳥かな
宗伊
あかしかた獨ねになくさよ千鳥いつくか妻のとまりなるらん

霰殘夢

通秀
みるもたゝはかなき夢やねやの上にあられ亂て霜こほる夜は
實隆
さえ〳〵てあられちる夜の手枕にぬるたまの緒そ結ふ程なき
基綱
闇にもるよるのころものたまあられまとの夢は誰さますらん
宗伊
霜こほる夢の枕におとろけは霰こさ(本ノ)るゝねやのうへかな
通秀

逐日雪深

今朝はたゝ雪のみたかし昨日まて面影わきし松と竹とに
實隆
日をふれはとはぬも人のことはりにみちたえはつる宿の白雪
基綱
時雨たにそなたにさむきみこしちの旅の日數もつもる雪哉
宗伊
かきおとす軒端の雪の朝ことにつくらぬ山の高き庭哉
通秀

向爐火

ふくるまてなにか殘らんわひてたく木の葉の下の夜半の埋火
實隆
ふけぬるか有明のかけはほのみえて殘る程なきねやの埋火
基綱

かへに殘る影もほのかにふくる夜のきえかた寒きねやの埋火

宗　伊

ねやさむみ目もあはぬ夜は埋火をかきおこしてやしはし臥覽

通　秀

家々歳暮

しな／＼の宿のことわさなそへなくたかき賤しき春迎ふなり

實　隆

春をまつ家ゐはさそな花ならぬかきねのうちも年そ暮ぬる

基　綱

くれてゆく年のさはきの市の中に誰隱家のはるか長閑けき

宗　伊

門の松しめのゆつる葉とり／＼に山路さりあへぬ年の暮かな

## 戀二十首

寄月戀

通　秀

思ふかたの詠めのみして秋の夜の月をはうはの空になしぬる

實　隆

あやしくやたのめもをかぬ宵々に月より外の思ひそふらん

基　綱

偽はしくれもはてぬ形見にてふるきなみたに殘る月かけ

宗　伊

まちいてゝ君やはとはん深ぬまに我こそゆかめいさよひの月

寄雲戀

通　秀

別路にいつ恨みましひとりねのあくる夜いそく峯の浮雲（増イ）

實　隆

ゆくゑなき思ひよいかに空にたつ雲も岩ほそれさしなりける

基　綱

隔とてわれも忘れは伊駒山思ふあたりの雲もいとはし

宗　伊

よそへてもなくさめわひぬ空の雲なひくとみれは又わかれ行

寄煙戀

通　秀

せめてさは思ひ消なんほとをまてゆふへの煙よそになひかて

實　隆

忍ひにもこかれけりとはさすか身のかきりの暮の煙にもみよ

基　綱

思ひやれありし一夜のうつりかも今は獨にくゆるけふりを

宗　伊

あさましやもゆる思ひの後の世にむすふ煙となるてふ物を

寄嶺戀

通　秀

いたつらに月日はこえぬ嶺におふる松をまつとも人は思はて

實　隆

なけきこり身はつくはねの嶺なれや袖をは戀の淵とせきつゝ

基　綱

ひまもなくしくるゝ秋の袖の上は雲ゐる嶺にいつならひけん

宗伊

つくはねの峯は思ひの日にそへて猶しけ山にたとるなるかな

寄杜戀

通秀

いかにせん常盤の森をたのみてももの思ふ袖のわきて時雨も

實隆

すかのねの長き夜あかす鳴ぬらす袖やうなての杜の下露

基綱

とはるへき身は秋ふりぬいつまてかいのち生田の森の下露

宗伊

人こゝろかれてうつろふ思ひよりそての千(かイ)入の神なひのもり

寄市戀

通秀

色にいてゝいさあなかちに尋みんしかまの市に染るてふ名は

實隆

つれなさは色もかはらぬ海石榴市の八十街に身はまとへとや

基綱

いかさまにしかまの市ち行歸りたえまかちなる中をとはまし

宗伊

いかにせんしのひて山にかくるとし心は人にさはく市ちを

寄江戀

通秀

あふまての縁はなくて難波なるみつゝはかりや契なるらん

實隆

哀にもなかはの月のえにしありて夢になきける袖をみせはや

基綱

逢見まくほり江の床のうきねにて玉しくものや涙なるらん

宗伊

ちきりしはいなさ細江にひき捨る小舟の綱のたえ〳〵にして

寄瀧戀

通秀

いかにせんおつる涙の瀧つ瀬をせくはゝかなき袖のしからみ

實隆

なにゝなをぬるゝたもとそ瀧の糸のたえて久しき中の契に

基綱

袖におつるこゝろの瀧よ音なしの同し流れにいかてせきけん

宗伊

瀧なみのよるはすからに岩枕かたしきあかす袖なみせはや

寄原戀

通秀

あはてこし夜半たにあるをおきて行朝のはらもなそや露けき

實隆

露の身のやかてきえなは草の原あらはれてうき契ならしを

基綱

いかなりし檜原槇原つれもなき我こひ草にねをかはしけん

宗伊

暮はまたわけかへさはやおきて行あしたの原のみちしはの露

寄猪戀

通秀
戀やもしさてもやすむと奥山にふすゐのかるも床しはしかせ

實隆
見せはやな臥猪のかるもそれならてかきも掃はぬ床の景色を

基綱
わか思ひあまのかるもに亂わひひとりふす猪の床をみせはや

宗伊
しれかしなくたく心はいかり猪の岩をくゝむといはぬ計を

寄山鳥戀

通秀
思ひ出るためしもかなし契のみとを山鳥のうちのあけほの

實隆
いつまてのとはれし中に山鳥のをのかうらみのよるを待けん

基綱
へたてゆく人の心を尾上にて身は山鳥の音をやなかまし

宗伊
音をそなく山鳥の尾の長夜をへたてゝあかすあきの思に

寄蜻蛉戀

通秀
つれなくて物思ふ身にはあきつてふはかなき虫の命ともかな

實隆
かけろふの立や夏野のわすれ水しられぬ中にもゆるはかなさ

基綱
わするなよたのめし人もかけろふのこの夕暮にかくる命を

宗伊
なみた川流るゝ水にかけろふのたつおもかけは泡ときえつゝ

寄淺茅戀

通秀
露はなをむすひのこして枯はつる契もしらぬ宿のあさちふ

實隆
秋にあへす思ひしほるゝ身をしれは淺茅は猶そ霜につれなき

基綱
色かはるあさちか宿の秋ふけてとはれぬ袖にさむき露かな

宗伊
心にもむくらしけりてまつ人のあとたえはつるあさちふの庭

寄海松戀

通秀
難波潟しほのひるまもある物をなとうきみるの夜のみはくる

實隆
よりもこぬよそのみるめにはかなくや袖濡しけん志賀の辛崎

基綱
みるふさの寄過そしらぬ我袖に近きあしやのなたはあれとも

宗伊
おり立て誰かゝるらんわたつみとあれ行床によらぬみるめを

寄沼縄戀

通秀
れぬなはのくるをはよしや厭ふともたえぬそ殘る契なりける

實隆

たのむへき夢さへかれてれぬなわのくる夜もしらぬ床の秋風

基綱

思ひあれは獨はとけてれぬ縄の我身のうきに結ほゝれつゝ

宗伊

れぬ縄のれぬなはたつと厭はれはつねにくる夜を猶や頼まむ

通秀

寄澁蠧戀

あはてのみとしをふる江の澪標こふるしるしも浪にくちぬる

實隆

徒に朽やはてなんみをつくし思ふしるしを人に見えすは

基綱

深き江にたつとはきゝし澪標うらやなきなのいつならひけん

宗伊

難波江の深き思ひをあはれともみをつくしてや人にしられん

通秀

寄懸樋戀

わか契水もらさしはむかしにて山の下樋のやかて絶ぬる

實隆

こけふかき山の下樋をゆく水のたえぬ心もよそにみえめや

基綱

ともすれはとたえかちなる契さへ朽し筧のみつからそうき

宗伊

丸竹の中行水の世々かけて袖にもるともたれかしらまし

通秀

寄木綿戀

かけてたに人はなひかていなり山たのむ日數も杉のゆふして

實隆

つれもなき心を神やみしまゆふ我にかくへき契ならしな（とイ）

基綱

きけかしな榊の枝にかけてたにいふには神もなひくならひを

宗伊

みしまゆふ靡くとなしに逢事をかたにとりかけなに祈るらん

通秀

寄答簀戀

面影をわすれかたみにえそみちぬつむ空もなき野邊の若菜に

實隆

あたにのみ名は浪はてゝ逢ことの形見にくめるみつからそうき

基綱

あたなりし心はさそな花かたみめならふ誰にうつろひぬらん

宗伊

人のうき名をは流さしさもこそは忘れかたみに水もらすとも

通秀

寄頭挿戀

なにかせんことなし草を尋てもうき名かくれぬかさし成せは

實隆

竹河の忘れぬふしもかけていはゝかさしの花の匂ひなき身に

基綱
はかなしや露の命のもろかつら落葉をうしといひしかさしも
宗伊
袖かけていかゝおらまし色みえぬ人の心の花のかさしは

## 雜二十首

社頭曉　通秀
神垣のいつくはあれと有あけの月影きよし加茂の川なみ
實隆
霜もいまをくや八たひの鳥か音に榊葉さむきもりの神かき
基綱
影たかきをひえの月のあり明も光をかはす神の玉垣
宗伊
岩戸いてし光は代々を照してもなをありあけの月よみの神

古寺朝　通秀
朝からす梢になきてふりはつる寺にはのりの聲もきこえす
實隆
朝日影出るやいかにたかの山まつあかつきはすきぬ物から
基綱
やま寺はちかきしきみの枝折て朝露きよき手向涼しも
宗伊
朝日さすはるの木すゑの高雄山花いつくしくにほふ色かな

關屋晝　通秀
關の戸に午の貝こそふかれともまた時をしろ庭とりのこゑ
實隆
うち出の濱へにぬれし今朝の袖ひろまになりぬせきの下道
基綱
かたふかん日をもつけゝり關の戸の月をゝくりし鳥の入聲は
宗伊
あさもよひ紀の關こえてむかふ日の南にうつろ山そ春けき

山家夕　通秀
都にてはけしときゝし風の音はふかぬ深山のゆふへなりとも
實隆
やまふかみ夕になれは雲霧のしめりも袖の露をそへつゝ
基綱
我のみと思ふのきはの山かけてちきらぬ雲やまたかへるらん
宗伊
とふ人にいつならひてか日くるれは峯の松風聲うらむらむ

田里夜　通秀
山かつのいくよ心をつくしてかあはれほとなき門田もるらん
實隆
月もしらし鳥羽田は世々の洞の中を民の家ゐに住なさんとは
基綱

夜な〳〵はいとはぬ鹿も冬かれの田中の里の庵そさひしき

宗　伊

もりわひぬかりほの床のいな莚しく〳〵ふれる夜半の時雨に

通　秀

窓燈欲消

よゝの雨五十年の老にきゝふりぬきゝなは消ぬ窓のともし火

實　隆

まてしはし我世はいたくふけなくにかゝけてもみん窓の燈火

基　綱

窓ふかくそむけてあかきともし火にかへの草葉もつゆそ消行

宗　伊

曉の窓にむかへははるの雪秋のほたるのかけそのこれる

通　秀

簷忍草

軒はあれて昔しのふそしけりぬるましろ草葉の忘しもせて

實　隆

今も誰かへりみもせすつかふらんしのふの軒の古きためしに

基　綱

都にはありししのふのみたれよりふるき軒端そ稀になりぬる

宗　伊

軒はあれてわするゝ草も茂り行しのふの里はとふ人やなき

通　秀

門杉

我門に心の杉のすゑみえはしるしあらなんしき島の道

實　隆

とはゝやなたれを心の松の色はみえぬもゆかし杉たてるかと

基　綱

杉の門すきても人のとはぬこそ數ならぬ身のしるしなりけれ

宗　伊

老らくのとひくる門はとし〳〵に苔むす杉やしるしなるらん

通　秀

砌松

かす〳〵のをの葉ひろふ宿の松代々にふるさぬ千代の影哉

實　隆

かきためてこの砌にそちりうせぬ名をもとゝめん松の言の葉

基　綱

見し夢のその程よりやかけなひく砌の松はおひはしめけん

宗　伊

うつしうふる宿にもとしは高砂の松もこも（本ノマヽ）たる影をならへて

通　秀

濱樹

立ならふはま松かえはつれなくて秋にあへすもちる樹かな

實　隆

吹からに眞砂もなひく浦かせに枝やすからぬはまひさ木かな

基　綱

ちれはまたもくつとよれと樹生る濱の眞砂をあらふ波哉

宗　伊

ひさきちる夕や秋になるみかた濱風きよく波のすゝしさ
通秀

麓柴

こゝろして嵐もよきよ我庵はふもとの眞柴かりにさしにき
實隆

日の影のもらぬ麓はつゆしものしつくひかたき木々の下柴
基綱

薪きるたかねの雪にふもとなる霜の下柴道あらはなり
宗伊

人かへるふもとをみれはかり殘す柴のさ枝に山風そふく
通秀

暮林鳥宿

かけふかき林の梢くれはてゝやとれる鷺のいろそまかはぬ
實隆

こゑしけき林の鳥もくるゝ日にひとりはねしと友さそふらし
基綱

ねくら出る朝けの聲はしられねとくるゝ林にさはくむら鳥
宗伊

あはれ又われをもいつか見つくさん林の鳥のかへりゆふへき
通秀

晴後遠水

くれ竹のふしみの暮に雨はれてよとの澤水いろそのこれる
實隆

あけわたる宇治のやまもと雨はれて朝日をひたすゝゑの川波
基綱

雨はるゝ名殘の雲もみなの川嶺よりおつるいろそまちかき
宗伊

いり日さすにしの川上雨はれてやまもとめくる水そさやけき
通秀

磯波

奥に出てなにをしら波まよふらん我身いりぬる磯かくれなて
實隆

むす苔そおなし色なる篠さきやいくとしなみもこゆる磯邊に
基綱

世をうしと思ひいりぬる磯ならはまては袖こす波もあらしな
宗伊

よる〳〵の波の白きをのちみれはゑしまか磯に月そのこれる
通秀

名所眺望

夕なきの霞にしつむあはち島またあらはるゝ浦風そ吹
實隆

すみよしは菊のはなさくあきの波まつの色そふ春の濱風
基綱

なかめこし心にきえぬあはなれや明石の奥にうかふ島山
宗伊

重ねあくるふしをさこそと大ひえの高嶺をみてそ驚かれぬる
通秀

寄軍神祇

忘れすよなれし平野の神まつりむ杉か外に立しくろまは

實　隆

しめのうちに三輪さすまて老ぬなり車をかけよ神のみや人

基　綱

かの國の名をはとゝめてをくろまのゆかぬ所を神やしめけむ

宗　伊

ことの葉のつゝりもうけよ小車の錦は人のたむけなりとも

寄鏡釋敎

思へたゝ臺しなくはをのつから心のかゝみなにゝかゝらん

通　秀

かの國を思へはこゝをとをくしてさゝぬ鏡にむかふはかりそ

實　隆

後の世はつらきかけにやむかはまし心をいろの花のかゝみに

基　綱

心をもみかゝてむかへをのつからかはら〔くイ〕なからそ鏡なりける

宗　伊

寄舟無常

山もとのきのふの煙殘る身のつれなやけふもあけのそほ舟

通　秀

なみ風にをくれさきたつほとをみようきたる舟のあはれ世中

實　隆

ふれ行は月日も共にうつり行かの岸ちかき身をわするなよ

基　綱

あたなみの玉の緒よはみ深き江に繫かぬ舟そよるかたもなき

宗　伊

寄弓述懷

みてもしれかけて弓つるのすくなるを人の心の本とせよとは

通　秀

おなしその人やとらむと梓弓おしまぬしもそをろかなりける

實　隆

すてはやな獵夫の弓つるかけて代に鹿まつともなき身一つは

基　綱

あはれとてきみも日數はあつさ弓とり所なき身をいかにせむ

宗　伊

寄國祝言

天か下なへておさむる君か爲こまもろこしも人のくにかは

通　秀

あふけなをしらき韓國それたにもみな我君になひきける世を

實　隆

君をまほる神の玉垣うこきなくうちなる國はおさまりにけり

基　綱

國となるほこの雫や世にひろきめくみや露のはしめなるらん

宗　伊

右文明十五季於將軍家着到和歌也。從九月二日至十月二十二日終功畢。每月二首詠之云々。

中院。十輪院内府。

西三條。

姉小路。

宗伊。杉原伊賀入道平賢盛。

〔右文明十五年將軍家百首以百首部類校合〕

# 續群書類從卷第三百八十四

和歌部十九

## 應永廿一年頓證寺法樂百首

### 春二十首

立春　宋雅

けふよりの春をは空に吹たてゝ浪そをさまる松のうら風

山霞　道歡

さほ姫の袖のかさしの山さくらかすみをかけし雲そあけゆく

海霞　性光

わたの原なきたる浪は見へわかて霞に浮ふおきのつり船

子日　兼宣

をしなへてねの日の松をひく人の手ことに千代の數は見えつゝ

若菜　爲尹

春のきる霜の袖を先かけて若菜にをそき野邊の里人

朝鶯　持元

谷ふかみまた夜をこめて出ぬらしあしたの原の鶯の聲

津梅　堯孝

梅の花匂ふ春へは難波津やふるきにかへす浦風そ吹く

夜梅　雅永

かすむ夜の月のかつらも梅の花うつる匂ひやさたかなるらん

岸柳　常永

青柳のおきふしなひく水かけはきしうつ浪もみとりなりけり

春雨

うすかすみそれとはかりにふりいてゝ風はをとせぬ春雨の空

春月　滿久

いまもなをみかくと見へて玉の床光そへたるはるの夜の月

春曙　有光

霞立つ山のはとをき月かけのゝこるもうすきあけほのゝ空

歸雁　正徹
たちまよふ幾重の雲のかよひちにつはさたゆまて雁歸らん

栽花　持之
行末の春を契りてうへそむる花には風も及はさらなん

翫花　公種
あかすみる木末の色はしろみれの雲さへおなし花の夕はえ

惜花　惟清
心あれはたをらぬ花の梢をも風はのこさてなと誘ふらん

春駒　滿祐
のとかなるよとの川波春見へてみつのみまきに駒そいはゆる

款冬　持賴
吉野川春の名殘の花の色にしはしそうつろきしの山吹

紫藤　尹賢
そめてけり水の心も春の色もこきむらさきの池の藤波

暮春　基親
まころまて惜みあかさはいたつらにねぬ夜の夢と春や過なん

## 夏十五首

首夏　元昌
春ふかく見えし青葉の梢よりおなし色そふ夏はきにけり

更衣　直親
たちかふるほともしはしと袖ふれて花の香したふなつ衣哉

卯花　梵燈
山里にちりし櫻の雪はまた夏にのこりてさける卯花

郭公　道歡
むら雨の雲にをくるゝほとゝきす木々の梢やゝとり成らん

砌橘　元保
古郷の軒の立花匂ひきて風のたよりも今そしらるゝ

早苗　益之
わきもこかすそわの田井にとるなへの雫も露も袖にかけつゝ

沼蒲　重阿
かくれぬのみくさに餘る菖蒲草あやめ〔マヽ〕わきてけふや引まし

梅雨　常松
わかの浦になみやたちそふ敷島のなかのみなとの五月雨の頃

夕立　元久
しくるへき頃は今よりとをけれとさためぬ雲の夕立の空

夏衣　實城
松山のまつはときはの色なるを夏きにけりとしける下草

夏月　實密
いつるまも浪間にあけてあみの浦やめにもたまらぬ短夜の月

瞿麥　爲尹
なひきよる露の小薄みたれても色うつもれぬ床夏の花

氷室

納凉　之　重
夏としもしられぬ物を氷ゐてとけぬ氷室のあたりはかりは

夏祓　宋　雅
木の間もろ夕日の影もうすころも袖にすゝしき松の下風
ゆふかつらあさの夏そに引そへて御祓もたへぬ玉のをにせん

# 秋二十首

早秋　元　俊
露たにもむすはぬ袖の朝あけに風こそ秋をまつしらせけれ

七夕　常　建
かちの葉のたむけもうくろ中に猶うれしき君か水茎の跡

稲妻　尹　賢
秋の田のほのかにむすふ露のまもかけはとゝむるかひの稲妻

籬荻　元　繼
風のをとの松にうつれるたえまとやまかきの荻に結ふ夕露

野萩　聖　信
名にしをふろ枝も見へす花咲きぬわかむらさきの野への秋萩(マヽ)

路薄　元　衡
わけゆけはまれくに花も我袖もひとつにつゝく野への秋風

曉露　性　光
これもまた玉の床とや松山の下露みかく有明の月

籬槿　通　益
中垣にしはしさきこす朝貌のぬれて色こき花の白露

葛風　宋　雅
まくす原露ふきみたす秋風に下なる草もうらみやはせぬ

夕鹿　道　歡
夕暮の色にや峰を隔つらんうはの空なるさを鹿の聲

初鴈　有　光
秋きりのたつにつれてや越ぬらんみれよりつゝく初鴈の聲

叢虫　満　久
露やそふ夜寒やまさろきりくすなくれあまたの庭の草むら

崎霧　正　徹
にほの海や夕きりうつむからさきの松の一木の面影もなし

嶺月　持　之
秋風の雲吹はらふあとよりそ光をそふろ山のはの月

湖月　基　親
ひらの山高峯の雲のなみかけて月に吹しく志賀の浦風

關月　堯　孝
よなくは須磨の關守われとこそ夢路ゆるさて月を見るらめ

濱菊　公　秤
さかへゆく君かよはひはなか濱の菊もちとせの色にたへつゝ

擣衣　持　賴
あさちふのをのゝしの原秋ふけてよさむのやとゝ衣擣つなり

黄葉　雅永

いくしほそ露も時雨も立田姫心のまゝにそむるもみち葉

暮秋　妙文

いのりこし御代長月の秋の暮いく千とせまて君かしらまし

## 冬十五首

初冬　益之

霜となる夜のまの露のきゝの葉にけさよりさやく冬は來に見

時雨　兼宣

染かれてすくる時雨の露をたにはらはてのこせ松の夕風

落葉　基之

さそふかときゝし落葉のひまことに月こそのこれ木からしの風

枯野　爲盛

もゝ草もかれふの野への露の下に菊のみ花の名は殘りつゝ

寒蘆　持元

さは田川こほりの上の芦の葉もたへぬ霜夜に風さやくなり

井氷　有高

たちよれはたもともさむき山の井の水底清く氷ゐにけり

千鳥

夜やさむきみきはの浪におりはへて千鳥しはなくあやの川風

殘鴈　雅清

秋たにも衣かりかれいとゝしくたへぬ霜夜の空に鳴なり

網代　元久

ひたすらに月にやむかふあしろもり氷魚のよるへも浪の氷に

寒月　道欽

わたの原八十島かけてこほるとは浪より上の月やみゆらん

庭雪　常永

雲井よりふりしく雪の白妙に名をはうつまぬむらさきの庭

炭竈　之重

立のほるけふりまかはす見へにけり雪のうちなるをのゝ炭竈

埋火　信承

山里は雪の下折とりそへてほたさしくふるうつみ火の本

佛名　常松

となへつる御名こそ三世にかはれとも心ひとつは隔なき哉

歳暮　尹賢

わたの原とまりありとやゆく年にかけても春をまつか浦浪

## 戀十五首

初戀　寶密

みそめしは君のむかしも柏木もたよりやおなし思ひなりけん

忍戀　持元

袖にせくなみたは色にいてすとも物おもふ身と人やとかめん

聞戀　梵燈

しくれにもつれなきものと松風をきくよりやかてぬるゝ袖哉

見戀　元久
との葉もかなはぬ中はかりそめのみるもそせめて契なりける

尋戀　爲盛
我のみやもすの草くきたつれみん人はゆるさぬしるへなり共

新戀　持之
逢まてとかけし御祓のかひなくはなをや浮身を恨みはてまし

契戀　雅清
涙こさぬ中をもまもる神ならはこの松山をかけて契らん

待戀　兼宣
契なきほとをはやすく過しきてたのむるけふそ暮しわひぬる

逢戀　性光
とにかくに何と思ひをすかはらやふして逢夜もなけく別れに

別戀　直親
さのみかくあけぬにいそく別路は人のまつよや思ひ出らん

顯戀　重阿
心にも袖にもつゝく涙川なにゝもれけるうき名なるらん

稀戀　満祐
かきたえていかゝ恨みんわくらはにとふさへかゝる袖の涙を

絶戀　基之
新枕またもかはさてそのまゝに月日も塵もつもりこそゆけ

恨戀　持頼
夕暮は雪の衣のうらみへてなをうきまよふ我心かな

舊戀　實城
忘るなといひし昔のなかりせはふりぬる中に何をかこたん

## 雜十五首

山家　満祐
山影のうきふししけきさゝの庵に一夜もいかて明しそめけん

田里　宋雅
もろほとはかりなる庵も數そひて田の面にきはふ里の一むら

閑居
いまかゝる身のなにとを松山に住わひぬとはなけきはてけん

離別　基親
をくれしとしたふ別れに身をわけは我も幾夜の旅寢してまし

羇旅　盛貫
あさゆふに野山の露をわくるよりほすひまもなき旅衣哉

海路　満久
西の海や神の守のひろけれは舟路にさはる浪風もなし

野宿　元高
折しけるふもとのましはしはしたにねられぬ袖にかよふ山風

故鄕　通盛
いたつらにその名はかりや古里の昔にかへる志賀のさゝなみ

眺望　常永

舟かけて浪しつかなる夕なきに月のてしほやまつかうら人

述懐　元　昌

なにとに惜むとはなき身なれとも今更にとやすてはかぬらん

懐舊　有　光

松山の露にももろき濃(淚歟)かなしらすみぬ世をしたふはかりに

夜燈　元　賢

燈火のきえぬ光や夜もすからひとりおきゐる友となるらん

舊寺　公　種

水くさのあとの惠をまつ山に千代ふる寺やなをさかへまし

瑞籬　爲　尹

玉床の隔てもちかきみつかきにこえてやかよふ峯の松風

祝言　道　歡

沼もけに神となりてそかくはかり末の代かけてなを守らん

應永廿一年十二月八日

# 永享九年住吉社奉納百首

## 春二十首

歳中立春

一年はわつかに暮る日數をもまたてや春の立歸るらん

山霞　義　―

春といへは霞の衣たちかさねきさ山松もみとりそふらし

春雪　御　詠

時しらぬふしの高根も春の色にすそのはかりは雪まとはなる

朝鶯　道　―

春はまた朝風さむき雪のうちにこほらぬものは鶯の聲

澤若菜　公　保

もえいつるあさ澤水のふかれ芹氷のひまをたつねてそつむ

餘寒　實　雅

春そとは名にのみたちて風さむし霞はいつら雪の山の端

梅薫風　持　之

木の下に行てとふへき梅か香を誘ひし風のやとりしらはや

行路柳　定　親

なひきよる道のゆくての青柳は袖もみとりに春風そふく

春雨　雅　世

軒端まてかすむとはかりなをみへて空にしられぬ春の雨哉

若草　實　豐

白雪のふる葉すくなき若草やをのか色もて野邊を染らん

春月　瑞　禪

夜もすから霞める月の山のはに鐘の聲さへをほろなりけり

歸鴈　宗　繼

いかなれは月にめてこし心もて都の花に鴈のゆくらん

初花　資任

それと見し高根の雲のたへまよりかつさく花の色そまかはぬ

見花　持春

人つてのいつくはあれと櫻花見ろにまされる色やなからん

翫花　雅親

山もりに梢のさくらそれならてかさす心のは〔な歟〕る〻とかめそ

惜花　持康

惜むにもとまらぬ花のならひとは思ひしりても猶したふらん

落花　實勝

吹風のよそにさそはて散花や木下ふかき雪と見ゆらん

籬欵冬　持堅

山吹のまかきの色に春くれて殘る日數をへたてやはする

松上藤　雅世

高砂の松の木末に咲しより尾上をこゆる藤波の花

暮春　凞貴

おしみきていく日もあらぬ春の色のあはれに霞む夕暮の空

## 夏十首

首夏　義雅

櫻吹風にも花はのこる世にけさよりきぬる夏衣哉

待郭公　教親

宵のまはまた初音をも忍ふやと更てまたるゝほとゝきす哉

聞郭公　義一

行方の山ちかゝらしほとゝきす過かてになく明ほのゝ空

早苗　宗繼

五月雨ににこりし水もすみ吉やみとしろ小田に早苗とるなり

溪五月雨　實雅

うつもれし谷の下水をとふかみ雲間にひゝく五月雨の頃

夏草　資任

吹わくる風のあとさへみえぬまて夏野の草や茂りゆくらん

夏月　雅世

さえのほる影も短し夏しらぬうたの氷室の山の端の月

水邊螢　雅親

池水のいひ出かたきおもひとや身をのみこかす螢なるらん

夕立　公保

よそにみるほともなくてや山風の雲吹をくる夕立の雨

六月祓　道一

御祓する幣もとりあへすくる秋のよるせ涼しきかもの川浪

## 秋二十首

早秋　實雅

秋きぬとつけの枕を數妙の袖にすゝしき風の音かな

乞巧奠　義一

またよひの星合の空の月かけをふけても殘す庭のともし火

荻風　宗繼

秋風に露も夢をもむすはれはうへしそつらき庭の荻原

荻風　實量

夕露のむすふと見ゆるいと萩を吹とく風に花そ亂るゝ

秋夕　道―

老ならぬ人にとはゝやたか身にも同しつらさの秋の夕くれ

初鴈　雅世

風渡るわさ田の稻葉一かたになひくをみれは鴈もきにけり

秋田　雅親

やゝさむき秋の山風吹ぬらし鳥羽田の稻葉色かはるなり

夜鹿　公保

をのれのみ立田の山になく鹿の夜半にや獨り妻を戀らん

曉虫　御詠

今はゝやとひくる人もあらしとや曉よはる松虫の聲

山月　持之

山の端に夕ゐる雲をさそひつる風こそ月の光とはなれ

潮月　持康

から崎や松の一木もかつみへて浪にいさよふ秋の夜の月

野月　持春

月かけのやとかる野邊の秋の露あらくは分し萩の下道

渡月　定親

夜舟こく淀のわたりの末見へて月かけきよき浪の上哉

庭月　熈貴

月やとる庭のよもきに露おちて霧のまかきもあるゝ秋風

關霧　道―

逢坂やせきの清水の影もみす木の下くらき秋の夕霧

聞擣衣　雅世

秋ふかき夜寒はたれもしろ物を音にたてゝもうつ衣哉

重陽宴　宗繼

長月やけふの日數も九重の雲井にめくる菊のさかつき

杜紅葉　義―

木陰まてしくるゝ色は見えなくに雫やもりの下葉そむらん

川紅葉　瑞禪

谷川にうつるもちるも紅葉はのうかふは峯の梢なりけり

九月盡　貞國

さま〳〵の秋の名殘もけふまてとゆふへうからて猶惜しむ哉

## 冬十首

初冬時雨　持之

晴くもるさためなけれと冬くれは必すやかて降る時雨哉

寒草
霜さゆる野邊の尾花のかれしをれ招くもよはき袖とみへつゝ

落葉　定親
しはし又しくれぬひまも眞木の屋にね覺さひしくちる木葉哉

冬月　義｜
さそひきていく度影も時雨るらんあらし吹夜のむら雲の月

淺雪　道｜
すみよしの神の心も夜やさむき雪もひとへの薄き衣に

積雪　雅世
今朝も猶雪はつもりのあまの袖はらひもあへぬ浦風そ吹く

池水　持堅
庭の池の鴨の住かや氷るらんとけてねぬ夜は聲さはくなり

豊明節會　公保
山あゐのをみの袂やしろからしとよのあかりの雪の光に

濱千鳥　實雅
なるみかた夕潮こゆる程そとやうへ野をかけて千鳥鳴らん

歳暮　實量
春秋にめてこし月の光のみつもりて年の暮となりぬる

戀二十首

寄月戀　公保
涙のみ晴ぬうき身は月夜よし夜よしとつけは言のはもなし

寄雲戀　實量
きへかへりしたふとをしれ衣〳〵のなこり今はの峯の横雲

寄雨戀　宗繼
うき中のなかめにしけき玉水も袖のしつくもたへぬころ哉

寄風戀　定親
今はうき身を浦風のたよりにもさすかに波のよるへをそまつ

寄烟戀　雅世
くらへみん思ひの烟いかにせん室のやしまもよその夕暮

寄關戀　義｜
うき人の心の關はゆるされと名をこそたのめあふさかの山

寄瀧戀　持之
かくとたに人にはいはぬ思ひゆへおつる涙もをとなしの瀧

寄原戀　道｜
いつまてかつれなき色に年もへんおふの松原なほたのめとも

寄橋戀　實雅
契りこそをたへの橋の名にふりて又もふみみぬ中にかけゝれ

寄湊戀　持康
たのまめや涙の袖のみなとふれよるへもしらぬ中の契は

寄木戀　持（ニイ）堅
逢事はしらぬふせやのはゝきゝのなにその原は有とみゆ覧

寄草戀　雅親

うちとけていつかはされんされ葛くるよをしらぬ人を待身は

寄鳥戀　持春

人はうしさても思ひも山鳥のへたつるまゝの身をいかゝせん

寄獸戀　義雅

かるもかくふすゐの床の露けさはわか獨寢の袖にしらるゝ

寄虫戀　雅親

うき中の契は身をも秋虫の音にたてゝしもかひやなからん

寄玉戀　實勝

せきあへぬ泪の玉も袖の上にくたけて思ふ心とをしれ

寄鏡戀　教親

うつしなく影はなけれと見るたひに猶も思ひのますかゝみ哉

寄枕戀　資任

もらすとも誰かは知らんひとりぬる我手枕にあまる涙を

寄衣戀　雅世

いたつらにうすき契りは空蟬のもぬけの衣きてもかひなし

寄弓戀　實是

をしてなをわれこそたのめ梓弓人は心もひかぬちきりを

雜二十首

曉雞　雅世

鳴そむる夕つけ鳥の尾上より影さしのほるありあけの月

夜燈　實雅

いたつらにかゝけぬ窓の燈火そまた宵なから影かすかなる

峯松　道—

三笠山君をさしても萬代とよはふる聲は嶺の松風

里竹　資任

代々をへて猶もさか行く此君になひかぬはなし里の吳竹

磯巖　瑞禪

淡路かたゑしまか磯のゆふ波やよする岩ねに音くたくらん

島鶴　持康

松島や松も久しき友なれは千代をかたらふたつのもろこゑ

岡篠　實量

しゐてなをいかなる露かをかのへのさゝのはそよき嵐吹なり

江芦　義—

芦の葉のみたれぬ御代を守るらし難波江ちかき住吉の神

浦舟

分て猶海士もこくそや住吉のきしによりくる沖の釣船

杣山　持之

しからきの横の杣山たつ民もなけきなき世を今あふくらん

岸苫　實勝

住の江の岸の岩根の松かえにおなし綠の苔やむすらん

山家水　持堅

山里のかけ樋の竹の夜とゝもにれふりをさます水の音哉

山家嵐　熈貴
なれぬれは夢も見えけりいほしむる山の嵐はいつとなけれと
田家雨　義雅
かるとみし稻葉の雲ははれぬれと雨ふりすさふ小田のかり庵
旅行　公保
日數のみたちかされ行旅衣幾へかこえし峯の白雲
旅宿　御詠
かりねしておとろくさゝの枕にもうき世の夢はなをさめぬ哉
旅泊　定親
いとゝこそぬれまさりけれ旅衣袖のみなとの浪の枕に
海眺望　雅親
はる／＼とよさの入海あかす見て心そかよふ天の橋立
寄松祝　宗繼
松のみか君も千とせと住吉の神もさこそは契りをくらめ
寄日祝
影高くあまつみ空にめくる日のかきりもしらす世を照らし
此百首續歌永享九年三月十五日住吉之御社奉納之畢。
〔右住吉社奉納百首以內閣本校合〕

# 永享十年石清水社奉納百首

八月十五夜
雲霧はたちもをよはぬ空なれや今宵名高き望月の影
望月　御詠
かそへれと隈なき空にみへてけり名におふ月の秋のもなかは
不知夜月　道｜
昨日見し最中の空をかはらぬ〔マヽ〕今宵はをそくいさよひの月
立待月　義｜
名にめてし夜半もまちかき佛の空にたちまちの月のさやけさ
居待月　公保
晴にけり峯にいさよふうきくもゝゐまちの月の影をいそけと
臥待月　實量
おきゐつゝたへてなかむる影をしもたれふし待の月といふ覽
二十日月　雅世
ふして待起てこよひは又や見ん雲のはつかの山の端の月
有曙月　宗繼
高砂やつゐに紅葉ぬ松かえも尾上に殘る有明の月
三日月　實雅
しのゝめの面影かよふ三日月のつれなからてやゝかて入らん
弓張月　定親
ものゝふの矢田のゝ淺茅露滋みやとる光や弓張の月

月前星　　定親

照まさる月のかつらの紅葉はや星のはやしの木のまなるらん

月前風　　持之

すむ月の秋の光となるものは雲ふく峯の風にそ有ける

月前雲　　資任

吹まよふあらしや空にまよふらん月にをよはぬ四方のむら雲

月前霞　　義一

はらひゆく雲を嵐の吹かけてしはしそ霞む秋の夜の月

月前霧　　公綱

空に行月のかつらの秋風もはらひやのこす夜半のうす霧

月前煙　　雅親

もしほ焼夜半の煙もあま人の心なき名も月にたつなり

月前時雨　　雅世

秋風の誘ふしくれもゆく月の雲にたまらぬ影そさやけき

月前露　　實勝

照月もひかりをそへてやとるらし露の玉ちる庭の草葉に

月前霜　　實雅

秋寒き野邊のあさちにをく霜の色をかされて宿る月影

月前雪　　持賢

まさこちの雪ふみわくる月かけに汐くむ蜑も秋やわするゝ

山月　　凞貴

山風も月のためとやはらふらんいつるよりこそ雲も消へけれ

杣月　　道一

斧の音の聞ゆるたひに杣山の梢にはるゝ月をみるかな

嶺月　　教親

かつらきや月ふく夜半の秋風にかゝるもよその峯の白雲

谷月　　實量

月すめは峯なる松の影までもうつりてふかき溪の下水

杜月　　持春

ひと葉をも月にさみしとさそへかし常盤の森の秋の夕風

林月　　持康

風わたる木末に晴るゝむら雨の雲のはやしに月そもりくる

岡月　　雅親

あれまくも誰か惜まん水莖の岡のやかたは月のみそすむ

關月　　義雅

草まくら露にや宿をかるかやの關のこなたに月そかたふく

野月　　雅世

いつくにも隈ありとしはみへぬ哉すかのあら野の秋の夜の月

原月

露しけき淺茅はこれもひとつにて月影あまるをのゝしの原

水月　　公保

わきて猶所からにや岩淸水そこまて月の影もすむらん

河月　宗繼
影うつす雲井そ遠き水無瀬川ありて流るゝ月はすめとも

瀧月　持之
龜の尾の瀧津波さへのとかにて千代もすむへき月の影哉

湖月　雅親
さゝ波やにほてる月に見渡せは氷をわたる夜半の舟人

花洛月　雅世
照月の光を花のみやこにて風ふかぬ夜はなをやみるらん

禁中月　公保
曇りなく千里をてらす影なれや大内山の山の端の月

古寺月　熈貫
月も今たつれ入ぬる山寺のあれたる軒をとふ人もかな

汀月　教親
難波かた汀の芦の夜もすから浪によりくる月の影かな

湊月　持賢
みなと風雲ふきをくる波の上に月のみふれも影そよりくる

渡月　資任
霧はるゝ淀の渡りの波のうへに月のみふれも影そとまらぬ

泊月　實雅
月かけもあかしのとまりさよふけて雲の波なき秋のうら風

淵月　義｜
夜もすから月かけ淸し竹河のふちのみとりも空にかよひて

瀬月　滿政
明渡るかた野の末のみなせ川かはらぬ瀬にや月はすむらん

橋月　貞國
はし姫の袖にも月の霜をきて夜寒流るゝうちの河風

池月　道｜
影淸き月のすかたの池水にすめる鏡をうつしてそ見る

江月　實量
澄のほる空にも雲はなこの江にこほりをしける夜半の月影

沼月　實雅
秋はまたあさかの沼にすむ月もかつみる影やさやけかるらん

澤月　瑞禪
足曳の山澤水のこかくれにたへ〳〵見えてやとる月哉

浦月　御詠
明ぬまも夜とは見へす筥崎やうら波きよき月の光に

濵月　持康
秋の夜は眞砂の數も見るはかり月そさやけき雪の白濵

濵月　公綱
明石潟波路はるかにすむ月の影もみちひのしほ風そ吹く

磯月　雅世
浪かくる礒の松かれそれよりも木の間そ月にあらはれにける

崎月　定雅
波かゝる野島か崎の秋萩にやとゝふ月そぬれて色そふ

月前萩　雅親
誰となく月にまたれし音信も萩にそ殘る夜半の秋風

月前薄　雅世
風わたる尾花のま袖秋ふけてまねく方にや月も行らん

月前女郞花　實雅
をく露に心をうつす月影もえならす咲る女郞花哉

月前蘭　公保
ふちはかまほころひ初し露の上にうつるも匂ふのへの月影

月前松　義雅
秋風に夕ゐる雲は峯はれて松のはのほる月のさやけさ

月前杉　貞國
此里はそともの杉の葉かくれになりて軒もる月そすくなき

月前檜　瑞禪
はつせ山峯のあらしはふきしきてひはらにくもる秋の夜の月

月前柞　義｜
秋ふかきさほ山嵐をとつれて夜寒の空に柞ちるらし

月前槿　道｜
うすくこきはしの立枝のむら紅葉色をわけても宿る月哉

月前鴈　雅親
馴にけるをのかとこよのかたみとて月に鳴なり秋の初鴈

月前枕　雅世
なきて見る月そかたふく今は身のよはひもかくとつけの枕に

月前席　資任
うき秋も忘れはてつる月みれは心をのふる夜半のさむしろ

草菴月　實將
いとゝなをすめる心の友とのみ月そやとれる草の庵哉

田家月　實量
秋寒みしくろゝ小田の露ならて月ももりくる夜半のかり庵

閑居月　持春
引結ふまかきの萩の風の音もしつかになりてすめる月哉

月前萩　持之
萩か枝の露に宿かる月かけを夜のまにさそふ野邊の秋風

社頭月　義｜
なへてすむ月ともいかゝいはし水ことしの秋の神の光は

古郷月　滿政
虫の音も露けき宿は淺茅生の月に幾世の秋かふりぬる

水郷月　宗繼
きしのほる月にひかれてつなて繩浪路やすらふよとの川長

山家月　道｜
木の間もる心つくしに山里は家出しぬへき夜半の月哉

月前糸　實　勝
なれもけにれられぬわさとかた糸をよる〳〵月に嘆のをた巻

月前扇　持　春
すむ月の入なん後のなくさめにならすき(るふ歟)も秋風そ吹

月前舟　貞　國
月清みこきゆく船も三保か崎の松にも波のくまは殘れる

月前筏　雅　親
月影のさすにまかせて大井川筏の床は浮れすらしも

月前燈　實　量
明るまていつれか殘るきえかてにまとのともし火窓の月影

寄月戀　御　詠
とはるへき夜半も更行月みれはかたふく影を猶したふ哉

寄月旅　實　雅
くれかゝる麓のさとをとひすてゝ月にこえゆくさよの中山

寄月眺望　持　之
我社はあくかれにけり(れ歟)夜半の月みるめもしらぬ蜑のいへしま

寄月懷舊　道　—
面影は見ぬ世をかけてうかふなり月やむかしの恨なるらん

寄月述懷　持　賢
月はかりすむそと思ふ露の身を岡邊の宿はあき風そふく

月前鴨　定　親
門田もる庵の軒端に月さえて手枕ちかき鴫の羽かき

月前鶉　滿　政
有明の月のよすかもふか草の露をうらみてうつら鳴なり

月前雞　雅　世
をそく出る有明の月はをのつからゆふつけ鳥や友と見るらん

月前鶴　宗　繼
老となるためしもしらぬあしたつは月にめてゝや猶あさる覽

月前鹿　凞　貴
をく露はさなから玉の萩原をみかける月にをしか鳴なり

月前猿　持　之
影さふる月もこのまの木葉猿いとふもしらて聲しきるなり

月前螢　持　康
入月の影をやしたふきり〳〵すふけゆくまゝに聲しきるなり

月前松虫　義　雅
我のみと心を誘ふ松虫の聲のかきりや月にしるらん

月前鈴虫
露霜のふりそふ庭の月かけやなれも身にしむ鈴虫の聲

月前玉　公　保
しほかひに玉やましれる伊勢の海のなきさの月も光そふ也

寄月鏡　公　綱
神路山木の間に出る月かけをかけしかゝみのたくひとそ見る

寄月衣　　教親

このころはいく夜かされて暁の女か月にもあかす衣うつらん

寄月夢　　定親

まとろまてなかむる夜半の數み〔ママ〕へは月にもさゆる夢の浮橋

寄月往事　　宗繼

さゝなみやしかのうら人むかし見し月の都をさそ忍ふらん

寄月神祇　　雅世

男山代々にこえぬる月をみてことしや神もひかりそふらん

寄月釋教　　義―

おもひやる心もともにゆく月のかたふく西の空たのめすな

寄月祝

久方の空ゆく月にたくふらしあふくも高き君か光に

## 永享十一年石清水社奉納百首

元日宴

けふさらにめくる雲井にさかつきや春を迎るしるし成らん

餘寒　　道―

冬かともさらにそまよふ峯の雪汀の氷春寒くして

春水　　義教

ふきおろすあらしも猶やこほるらんをとたてかぬる春の山水

若草　　公保

春日野やまた春あさきさいたつまもへ出る色も雪にこもれり

野邊　　實量

花は猶またき木蔭のすみれ草つむまてけふも野へに暮しつ

賭射　　雅世

長閑なる雲井の庭にとる弓のかへりあるしを又やいそかん

雉子　　宗繼

なれも今妻やこもれるむさしのにきゝすなくなり春の夕暮

雲雀　　實雅

春かすみたつ空くらきなるみ野によとこたつぬる夕雲雀哉

遊絲　　定親

長閑なる比とや人もあそふいとの長き春日を野へにくらして

春曙　　持之

めなれつる四方の梢もかすみつゝ明ほのとをき春の色かな

遲日　　實勝

さきやらぬ花まつ比やいとゝ猶くるゝもおそき日影なるらん

志賀山越　　資任

古里の花にしはしとやすらひて行こそやられ志賀の山こえ

三月三日　　雅親

君か代に三千たひめくれみちとせに花さくもゝのけふの盃

蛙　　公綱

せきいるゝ苗代水にすむかはすなれも心やゆたかなるらん
殘春　持賢
散はてゝ花もにほはす成にけり今や名殘りの春の古里
新樹　熈貴
おもひ出る心の花そ猶ちらぬ梅も櫻も若葉なれとも
夏草　持春
もへ出し草の若葉もしけりあひて夏ふかくなる野邊の色哉
賀茂祭　教親
もろかつらけふにあふひの昔より幾世かけこしかさし成らん
鵜川　滿政
心なき鵜舟なりともこの神のいけるをはなつ河はよくらし
夏夜　貞國
衣手に露はをけとも夜もすからねやへもいらすすゝむ比哉
夏衣　瑞禪
なれきつる花の色香も夏たけぬふけや山風たもとすゝしく
扇　道―
草木たになひかぬほとにあつき日も扇はかりそ風はすゝしき
夕顔　義―
をく露も光をかはす花なから契りいやしき宿の夕顔
晩立　雅世
いもせ山ゆふたち過てなる神も中をはさけぬ雲そ晴ゆく
蟬　持賢
袖にもこ露は涙か雨すきて蟬なきつゝく杜の下みち
殘暑　公保
あふきをはまたうちをかぬ秋の色や庭の草葉の露にとはまし
乞巧奠　實量
をく露の玉の緒ことにかよひきて秋風すゝし星合の空
鶉　義―
草かくれ身ひとつ宿すとことはになにを鶉のさのみ鳴らん
野分　道―
夜もすから野分あれつる名殘とや今朝は草木の露も殘らす
稻妻　雅世
むら雨の雲もみたれて秋の田のいなのめしらむ稻妻のかけ
秋雨　宗繼
たれか又たへて聞らん秋ふかみ槇たつ山のおくの村雨
秋夕　實雅
もろく散る木々の木の葉もそれなから秋風わたる野邊の夕露
秋田　定親
を山田のいなはの雲のはたてにも天つ空なる秋風そ吹く
鴫　公綱
夕されは澤邊の秋の露けさも袖にしられて鴫やたつらん
廣澤池眺望　持之

よそまても氷をしける月かけになを廣澤の池とこそ見れ

蔦

紅葉するころもしられて山かつのかきほの蔦も色にいつなり

柞　雅親

つれもなくうすき柞のもみちかな時雨はいたくそめぬ物かは

九月九日　凞貴

いくめくり千世をかされん露の間によはひをのふる菊の盃

秋霜　持春

夜のまより軒端の竹に聞ゆなり初霜はらふ秋風の聲

暮秋　雅世

うきにしもとまる心の何なれはわかるゝ秋を今したふらん

落葉　義—

をのれともちりぬはかりにをく霜のまたぬ嵐や木の葉吹らん

殘菊　道—

白妙に秋みし菊のむらさきに色をかへてもなとのこるらん

枯野　公保

かはしつる尾花か袖に今はとて霜にやつるゝ野邊の寒けさ

霙　實量

それにのみふるとは見へて庭の面に積らぬ雪やみそれ成らん

野行幸　雅親

はし鷹のをふきのすゝのふりにけるかた野ゝ御幸跡殘さはや

寒松　實雅

日影さす木末にこほる朝霜のとけて露けき松の下草

冬朝　雅世

おちつもる木の葉も塵も埋れてあさ清めする庭の雪哉

椎柴　教親

くちやらぬ落葉の上にこほるなり霜もつれなき谷の椎柴

衾　瑞譚

風をいたみかさぬる閨のふすま哉なれしあふきの恨む計に

佛名　宗繼

柏なしの御酒のさかつきとり〳〵に名もあらはれぬ雲の上人

初戀　道—

こひそむるなみたは袖のはつしくれやかて思ひや色に出なん

忍戀　義—

くるしくそ思入ぬるみちのくにありといふなる山の名もうし

聞戀　公保

よそにのみきくの籬の花の色をへたてぬ中も見るよしもかな

見戀　實豐

いかにせんめにかゝるよりあま雲のかりそめにたに晴ぬ思を

尋戀　雅世

思そめし心にとひて問わひぬ人には忍ふ人のゆくゑを

祈戀　宗繼

いのりこし初瀨の山の鐘のねをたか衣〳〵の空にきくらん

契戀　實雅

きえやらぬ命のたれか言の葉にかゝるは露のちきりなからも

待戀　定親

よしやとてまたれぬ程はつらからて人たのめなる中そ苦しき

會戀　持之

年をへてあひみぬさきの恨をもこよひわするゝ心よはさよ

別戀　實勝

幾夜かは鳥かなく音をあかつきのつらき別にかこちきぬらん

顯戀　資任

契りさへあさ野のきゝすねにたてゝかくれもはてぬ我思ひ哉

稀戀　持賢

七夕は年に一夜とたのむらんうはの空なる身の契りかな

絕戀　雅親

そのまゝにかよはぬ中のかたみとて袖にそのこす道しはの露

怨戀　雅世

なをさりに思ひ返さぬうらみ哉ふきとふきぬるくすの秋風

舊戀　熙貴

したひわひ恨みかねつゝいくたひか又は戀しき年つもるらん

曉戀　持春

わかれ路のつらきはしらす戀わひてれぬよのまゝの横雲の空

朝戀　定親

夕くれはもしやと思ふたのみたにしらぬあしたの床そ物うき

晝戀　持之

とことはにしほくむ蜑のたくひとやひろまもなみの袖の浦風

夕戀

いりあひのかれてたのめぬ契たにゆふへはつらき心つくしを

夜戀　實雅

うちもねは戀すると人や思はまし夜こそ戀のまさるならひを

老戀　義―

こひしさは昔にのみそならひこしあらぬ物思ふ老のね覺よ

幼戀　瑞禪

たのまめやはつかに見つるはつ草の老行末のとをき契りを

遠戀　滿政

うき中は遠山鳥のちきりのみかさなる峯をへたてゝそふる

近戀　貞國

かくはかりなれてかひなき我袖の露もゝらさん人つてそなき

旅戀　實量

たひころも夢にも思ふ人はこて草の枕をとふあらし哉

寄月戀　道―

なみたとふ袖によかれぬ月影のわか待人のかゝらましかは

寄雲戀　公保

袖のうへは雨とふりても晴やらぬ思ひや空の雲と成なん

寄風戀　雅世

うき中は相坂山もこえやらてあらしの風や身をしほるらん

寄雨戀　實勝

よひのまの雨にも人のさはりなはいとゝはれゆく空や待れん

寄煙戀　雅親

風をいたみおもはぬ方になひかすは我したもへの煙はかりは

寄山戀　公綱

うらみてもいさ立よらんかゝみ山わかうき中の影やうつると

寄海戀　定親

あさからぬ思は同しわたつ海のみるめになとかよそになか覽

寄河戀　持賢

淡ときえしつむせもなき身さへ猶うき中川の水のうたかた

寄關戀　實量

逢坂や越てはつらき別れ路をしはしとゝむる關守もかな

寄橋戀　持春

身にあまるなみたの川の逢瀬には稀にもかけぬ夢の浮橋

寄草戀　教親

いかゝせん種まきそめし思ひ草かるゝよとなく茂るつらさを

寄木戀　實雅

色かはる人はこすゑの秋風に松の名をかるわれそつれなき

寄鳥戀　持之

あふさかやふみみぬ中に鳥かねのうからぬをうき契とをしれ

寄獸戀　滿政

獨のみふすゐのかるもかきたへてとはれぬ中を恨みわひつゝ

寄虫戀　雅親

恨みゝな蜑のたくもにすむ虫のけに名もしろく身をこかす哉

寄笛戀　貞國

たか方にふく笛竹のよとゝもにしのひてたてぬ音をかはす覽

寄琴戀　熈貴

ゆく舟の跡の波かはつなてなはひくことのねにしたふ袂は

寄繪戀　瑞禪

かきて見ん人の心をうつし繪にはかなき筆のすさみなりとも

寄衣戀　教親

あけは又思ひの色も見へやせん涙かさぬる夜半の衣手

寄蓆戀　公保

つれもなき人の心のあやむしろをになるはかりしき忍へとや

寄遊女戀　雅世

はかなしや室のとまりの梶枕うきてねしよの契りはかりは

寄海人戀　道一

うき戀をしかつの蜑のいたつらにみるめもなきにぬるゝ袖哉

寄傀儡戀　宗繼

しられしな契さためぬうかれぬのうかれてまよふ心ありとも

寄樵夫戀　義　｜

山かつの思ふつま木はいかならんわれはこりはてぬ人の心に

寄商人戀　資　任

恨みてもかひやなからんかすならぬ身をあき人の心と思へは

這一册者以飛鳥井雅親卿眞蹟本令書寫卽時校合訖

# 永享十三年松尾社法樂百首

初春

出る日の光のとけき雲の上に今朝よりしろし千代の初春

霞　義　｜

くれやらぬ霞の色に殘る日の空に春風音もきこへす

實　量

朝霞たつ白波も名のみしてこすとは見へす末の松山

鶯　御　詠

咲やらてまた冬こもる梅かえに春のくるとや鶯のなく

春雪　定　親

色かへぬ松のお山の神垣に春をかけたる雪の白ゆふ

若菜　道　｜

君かため若菜つむとて萬代と祝ふはしつも心あろらし

梅　持　之

吹風も治る春は咲梅の花も匂ひもちらしとそ思ふ

公　綱

白雪のふれる梢にさく梅はいつれを花の色と見てまし

柳　雅　世

ふる川のせゝ行水も打けふりなひくはそれか靑柳の糸

春雨　持　春

いつかたの山の緑も見へわかす霞める空の夕くれの雨

歸鴈　公　保

古里は雪をや分ん都たにまた春寒き天つ鴈かれ

花　宗　繼

しはし又花にめてゝも忘れぬは風おさまれる御代の嬉しさ

實　雅

めかれすよ春の日影を長しとは花待わふる程や思ひし

持　康

山風もよきてふくらし長閑なる花の都の花の盛りは

實　勝

吹風も治る時と見るからに心のとけき花のかけかな

資　任

のとかなる春と思へは嵐山名をさへ花にいとはてそみる

春月〔比擬〕
朧なる夜ひもつらし春のきる衣を月に霞ますもかな　雅親
欵冬
いひ出る色とやみまし池水の底に影ある山吹の花　持世
藤
沖つ風霞吹しく波の上に波を重ぬるたこの浦藤　持賢
三月盡
こん春をたのめ罷てやさを姫のかへる夕の入合のかね　爲富
卯花
夕附夜匂ふ籬の山かけにひかり待とる庭のうのはな　貞國
郭公
聞つとも人にはいはし忍ひねを今はたもらせ山子規　教親
なけやなけ千聲なりとも子規待し數にはまさりやはせん　熈貫
誰にかは忍ふの山の子規木かくれに鳴よはのひところ　瑞禪
夏月
夏のよの月のかつらの里人やまたきに秋の色を知らん　滿政
五月雨
川上の瀧のひゝきもまさるらし大ゐの淀の五月雨の頃　義―
名にしおふさ月の雨の梅津川濁りて波の花たにもなし　雅世
螢
風吹けは露ちる軒の忍ふ草なれも亂れてとふ螢哉　貿量
夕立
東やの餘りほとなき夕立におちたにあへぬ軒の玉水　道―
納凉
凉しさは類ひも夏の夕暮に松のお山は秋風そ吹く　貿量
初秋
木末ふく音こそかはれ名にたてる松のお山の秋の初風　定親
七夕
銀漢人めつゝみにせき侘てけふのあふせも名にやもれけん　道―
七夕後朝
天河けふの舟出のわたし守梶もとらてや急かさるらん　持之
露
久方の月の桂の下露は落てやよもの木葉そむらん　持春
荻
明は又よそにうつさん閨近く植しそつらき荻の下風　公保
萩
しはしたにへたてなはてそ色こむる霧の籬の秋萩の花　雅世
薄
夜や寒きいつしかいもか手枕の野邊のお花に秋風そふく

虫　雅親
淋しさも今一しほそ野分吹くおのへにたてる松むしこゑ

鹿　持世
ともしせしよはのほくしのまつ人もなしとや秋は鹿の鳴らん

初雁・　實勝
夕まくれをちの雲路に音信て聲かすかなる秋の初雁

義―
木間ふくよはの秋風神さひて松のお山に殘る月かけ

持康
仰きみる松のお山の月影もくもらぬ御代に照り増るらし

公綱
なかむれは秋の心もをのつからくまなき月の空にこそなれ

爲富
出るより入まて松のお山なる月や千年の秋をしるらん

持賢
山風のふけ行まゝに岑の月秋の光も澄のほるらし

擣衣　資任
寢覺して聞人あらは夜寒をもよそにしれとや衣打らん

霧　實雅
さらぬたに峯もをくらの山陰に猶立迷ふ秋の夕きり

紅葉　雅世
染てけり露も時雨も同しえをわきえぬころの峯の紅葉は

宗繼
色かへぬ松のお山の下紅葉染ぬ雫になにこかるらん

暮秋　貞國
分て猶西こそ秋の名殘とも梅津の里の梢にそみる

初冬　道―
明方に冬はきぬらしいつしかも霜にきえたるかれの音哉

時雨　定親
一とをり猶そ時雨る山風のさそひも果ぬ空の浮雲

落葉　義―
しくるとは見えぬ高峯の風はやみ空にのみしてふる木葉哉

公保
今はとて木葉ふきしく山風にたへぬ時雨の音そ晴ぬる

冬月　實雅
終夜冴にけらしなをく霜も氷る秋のをのゝ月かけ

霰　雅親
さゝ波はこほりてよせぬ池の面に亂るゝ玉やあられ成らん

御詠
降つみて宮もわらやもなかりけり千里の雪の曙の空

宗繼
今朝はまた跡こそみえれ名にしおふゆきゝの岡の雪の曙

歳暮　持世
行年の名残はあすや忘れまし誰も心を春にうつして
初戀　御詠
もえ出る我戀草のたもとまてはらふはかりに露や置らん
忍戀　道一
ほに出ぬ思ひはくるしみこもりの蘆の下ねの下にみたれて
雅世
世に洩ぬうき名とのみは頼ましよしらす顔なる人も社あれ
不逢戀　義一
あふ事にいつならひてか夜はなをねられぬ迄に戀しかるらん
定親
我身こそうきにもたへめ何とかくさのみは人のつれなかる覧
持之
つゐにかくあはぬ恨はいかにとも別を歎く人のとへかし
持春
逢事はかたゝの沖に引あみのめにみるさへそいとゝくるしき
初逢戀　實雅
限あれは今宵心の行末も色かはるなよ中のしたひも
曉別戀　實量
かたみとやさすかみるらん別路は人の袖にも在明の月
後朝戀　宗繼
わけ初し手枕の野の朝露も袖に亂れて消ぬへき哉
逢不遇戀
今更にうき僞のある世とは又もかよはぬ中に社しれ
持之
かり初に遠さかりぬと思ひしに又もあひみぬ中にこひつゝ
實勝
みにそへしかひ社なけれそのまゝに又もあひみぬ人の面影
資任
わけきつるみちのさゝわら跡たえて又うきふしと成そ戀しき
致[親當]
猶そうき夢みし夢は一夜にてもとの契にかへるうつゝは
忘戀　持世
いつとても遠の衣今更になにをわすると恨たにせん
凞貴
うき中の心のたれにわかつ哉同し軒端の忍ふ忘れを
恨戀　滿枝
獨のみ袖にかけてやしほらまし忘れはて行道しはの露
公保
よそにのみなひく煙をあまの住里のしるへと見るもかひなし
曉　雅世
鳥のねも聞えぬよはの曉は老のね覺そしるへなりける

松　實量
もしほやくあまの笘屋の夕煙なひかてたつや浦の松原

竹　貞國
民のともすくなる御代を仰きてや植はをくらん軒の呉竹

山　宗繼
秋も又常盤に君を守れはや松のお山に所しむらん

河　道｜
君か代はみもすそ川の末とをくすまん限りは神にまかせて

橋　持世
行水のあとみぬ波の上にさへなをみち廣き淀のつき橋

關　教親
今年猶おさまる御代のしるしとて關の戸さゝぬ四方の國〳〵

旅　熙貫
横雲にけさわかるゝやかりねする山にかされし衣なるらん

滿政
へたてこし跡はいくよの空なれは旅寢の末に有明の月

海路　實雅
諸人のねかひもしをもかなふよに今そ貢の舟出するらし

山家　雅親
山里やまつ吹風の音までものとかなるよを今あふくらし

瑞禪
聞馴てきけは淋しき音そなき住はすまるゝ山のまつかせ

田家　定親
雨露の恵を添てしつのをかもるや門田の水ゆたかなり

述懷　義｜
我身よに思ひしよりもなからへてつれなき老の名をや殘さん

公保
君か代にあへる恵は愚なる我言の葉も及やはせん

懷舊　持康
いにしへのすくなる御代のためしをも今我君の恵にそしろ

夢　持之
うつゝには思ふも遠しいかにして千代を一夜の夢にみつらん

神祇　持賢
影高き松の尾山の宮柱千代の綠もなをそたちそふ

尺敎　雅世
色にそむ心しなくは山櫻それも御法の花の下かけ

祝　爲富
治れる大和しまねの外までも仰くは君の恵なりけり

右以難波人金屋奥　本書寫了

# 玉津島社法樂假名題目百首和歌

和歌部二十

文明四年五月廿八日御當座

あさかすみ　　義政
天の原はる立色をかつみせてたなひきそむる朝かすみかな

あさかすみ
さして日の影はくもらぬあさ霞ひかりやかはす玉つしま山

あさかすみ　　勝光
かきくもり又霧ふかくたかれにもさすかまきれぬ朝霞哉

あさかすみ
すきたてるみわの山もとそことしもみえぬはかりのあさ霞哉

あさかすみ　　爲富
みよし野やおくふかくなる朝霞花にわくへきみれとみなから

むめのはな
むかしたか袖ふれぬれは梅の花人よりふかきかほりなるらん

むめのはな　　有注親長
めくりあふちきりは深き梅の花それそとみゆる宿のしるしに

むめのはな　　教秀
軒ちかくたれうへをきて梅の花にほひへたてぬ神の玉かき

むめのはな　　綱光
春へとはにほひにしるし梅の花ふりし難波の里もかはらて

むめのはな　　貞宗
なへて世にふれる雪かとさく梅の花もさかりや久かたの空

たまやなき　　季春
たむけつゝいのるをはの玉柳神やめくみの露をかけまし

たまやなき　　玄就
まゆひらくみとりのいろに置露のこほれてなひく玉柳哉

（や）たまやなき　雅行
やそうちや河せになひくたま柳きしうつ波に露そくたくろ

（な）たまやなき　雅康
なへてなくめくみの露のたま柳糸につらぬく數みゆるまて

（き）たまやなき　致國
岸かけやうちいつる浪の玉柳春の光にまゆひらくらし

（か）かきつはた　之親
河風に浪もくたけてむらさきの花に露ちるかきつはた哉

（き）かきつはた　賢盛
きゝわたるその八橋のかきつはた花も幾代をかけてさくらん

（つ）かきつはた　永繼
露のほる池のみきはのかきつはた花に色そふ夕暮の雨

（は）かきつはた　貞隆
はる〳〵ときつゝなかめし杜若たゝその葉の花にさくらん

（た）かきつはた
〔歌闕〕

ほとゝきす
〔歌五首闕〕

（と）とこなつ　賢盛
時にあへるよ葉の花の色そへてなをとこ夏にたれか見さらん

（こ）とこなつ　昭慶
このれぬるあさけの露やさくまゝの色になき出るとこ夏の花

（な）とこなつ　爲富
名にをはぬ草はなけれと花の色のとこなつかしき庭の朝あけ

（つ）とこなつ　光種
露もなをにほひをそへて見るまゝにはしゐになれる常夏の花

（は）はなたち花　長恒
葉かくれに花たち花のなり行や枝もたわゝにしけりそふらん

（な）はなたち花　貞秀
なれ〳〵て花橘のいく千代の枝さしかはす軒の松かけ

（た）はなたち花　雅康
たか世より誰袖ふれしにほひともはな立花にとはゝこたへよ

（ち）はなたち花　明宣
千里まて匂やしるくをくるらんはな立花にかよふ夕風

（は）はなたち花　長興
はらひつゝちりをきよむる庭の面に花たち花の露そ玉しく

（な）はなたちはな　爲富
なからへてわれもむかしをしのふ草おふてふ軒の花橘に

（を）をみなへし　明茂
女郎花おほかる野への露をゝもみなひく心は誰思ふらん

（み）をみなへし
身にそしむ露もさなからをみなへし吹みたりたる野への秋風

をみなへし　　数秀
名にしほふ花としみれは女郎花なひくすかたの色にめてつゝ
をみなへし　　数國
へたてゆく野もせの霧の八重垣にたかつまこむる女郎花そも
をみなへし　　雅康
しら露のおくとはなけきぬるとなく風にしたかふ女郎花哉
はなすゝき　　義政
はる／＼となひく末のゝ花すゝき袖うちかはしゆく方そみる
はなすゝき
〔歌闕〕
はなすゝき　　季春
末遠く分ゆく野邊の秋風をまねきもとめぬ花すゝき哉
はなすゝき
〔歌闕〕
はなすゝき　　爲信
霧ふかき籬も露の光よりあらはになひく花すゝき哉
ふちはかま　　親長
ふるさとの秋を忘れすきてみれは露をかさぬるふちはかま哉
ふちはかま　　綱光
千種さく野をきてとへは藤はかま春みし花の名はのこりけり
ふちはかま　　玄就
はらひかれ分つゝ行や藤袴すそのゝ露のしほとそふらん
ふちはかま　　英基
かことにも匂ひはしるし藤はかま猶おなし野の露やゆかりに
ふちはかま　　顯豪
眞葛はもましろ野もせの藤はかまうら吹風にほころひぬらし
はしもみち　　之親
初しくれ檜原かおくの下露にかつ色見ゆるはしもみち哉
はしもみち
時雨てそ共としらるゝはしもみち常盤の木々のましろみ山に
はしもみち　　中薫
もろ程もした枝に見えて露時雨はやそめわたすはし紅葉哉
はしもみち　　爲富
みろかうちに色こきませて夕日影くれ行山のはしもみち哉
はしもみち　　長恒
ちろらめやむかひの岡のはし紅葉立枝あらはに秋風そ吹く
はつゆき　　雅康
濱木綿のまたひとへたにつもらねはけに初雪とみくまのゝ浦
はつゆき　　元爲
つもろらん風は音せすさゆる夜の明ほのはやき松の初雪
はつゆき　　貞秀
ゆふくれにさえつる風の音よはくきくよりつもる夜半の初雪

はつゆき　雅行
昨日見し野原の霜のけぬかうへに又ふりそふやけさの初雪
をのゝすみかま　季春
をやみなき雪のよそめはかきくもり烟を埋むをのゝすみかま
をのゝすみかま　賢盛
のこりなくうつめる雪の山かけも烟やしるへをのゝすみかま
をのゝすみかま　政孝
軒はより雪にむかへは里々のけふりもよほすをのゝすみかま
をのゝすみかま　之種
すみのほる月に山風をとふけてけふりそ薄きをのゝすみかま
をのゝすみかま　数秀
みやこにと此ころはこふ路遠み絶すもやくか小野のすみかま
をのゝすみかま　永継
かきくらしふる雪まより立つゝくけふりそ細き小野の炭かま
をのゝすみかま　勝光
ま柴たく煙とみゆる一方や雪にこもれる小野のすみかま
うつみひ　親長
うす雪はちりかふ闇のうへなからさらぬしるしや埋火のもと
うつみひ　為富
月や先れやもるいろに埋火の影さへしらむさゆる夜ころは
うつみひ　貞隆
みろうちにきゆるは霜やかさぬらんはゐさへ寒き埋火のもと
うつみひ　長興
ひとりわかおきゐる床に埋火のきえぬを友とむかふ夜半哉
おもかけに　為信
おきもせすれてのあさけの面影にむかふや人の形見なるらん
おもかけに　賢盛
もろともにみし夜の空は秋ふけてなをおもかけに向ふ月哉
おもかけに　数岡
かきりあらはめくりやあはん面影にとくると見ゆる人の下紐
おもかけに　義政
けふ幾夜うちぬるひまもなけきわひうき面影に戀つゝそふる
おもかけに　玄載
にほひをはわかれし袖の面影にのこして人の猶したへとや
こひわひぬ　中薫
こよひさへふけゆく中の偽に戀わひぬとはさすかしるらし
こひわひぬ　為富
日にそへて猶こひわひぬ夕をもわするゝ人にせめてつけめや
こひわひぬ　季春
わりなしやつらき心のほとをなと我のみかくは戀わひぬらん
一すちにうき身をしれは今更に戀わひぬともえこそもらされ

こひわひぬ　　教秀
ぬれてほすひまも涙の袖をみゝ戀わひぬとはしるき物から
うちもれす　　貞宗
うくつらき島かれよりや小筵にうちもれすりの衣〳〵のうら
うちもれす　　雅康
千世をふる思もかくや一夜たにうちもれす待こゝろつくしは
うちもれす　　雅行
物おもふ夜半の枕にうちもれす千々に心をくたくとをしれ
うちもれす　　明茂
れぬなわの長きよなから打もれす明せは心むすほゝれつゝ
あかつきは　　長興
末よいかに夢さへたえていたつらに打もれすのみなけく契は
あかつきは　　爲富
秋の夜の霜とみるまて曉は月もすゝしきかれの聲哉
あかつきは　　雅康
かけたのむ君につかふる曉はほしをいたゝく人そひまなき
あかつきは　　義政
つもりこし身のつみとかもれ覺してうき曉はなけきそへつゝ
あかつきは　　之親
きかはやな高野の寺のかれて思ふその曉ははるかなれとも

春秋の花と月とをときならて見はてぬ夢の曉はうし
つゆふかし　　顯家
月影もやとりて袖の露ふかしあかつきおきの水むすふ手に
つゆふかし　　英基
ゆふされはきくもうつらの野となりて猶露ふかし深草の里
つゆふかし　　昭慶
ふりにけるうき身の袖の露深しかくはかりやは秋の草葉も
つゆふかし　　明宣
から衣をく露ふかしはる〳〵ときつゝなれぬる草の枕に
つゆふかし　　綱光
敷島の道にめくみの露ふかし神やゝはらく光そへけん
おもふこと　　雅康
おこたらす思ふ事とていつか身にみかく言葉の玉津島姫
おもふこと　　長恒
百舟のかす〳〵見えておもふとけふみつしほのわかの浦風
おもふこと　　親長
ふるき世にかへりてなをやみかゝなんおもふとはの玉津島姫
おもふこと　　勝光
心をもくらへぬ人を我のみにおもふとこそおろかなりけれ
おもふこと
とにかくに思ふとなき時にあひて君か千とせを仰かさらめや

百首之内

闕歌

かきつはた　たの歌一首闕。

ほとゝきす　五首とも闕。

はなすゝき　なの歌すの歌二首闕。

右八首闕。

百首作者

義政。足利八代將軍。從一位左大臣。號慈照院贈大相國喜山。

御製。百四代後土御門院。御諱成仁。

勝光。日野内(左イ)大臣從一位。唯稱院朋安。

勾當内侍。四辻季春妹。

爲富。權大納言從一位。法名仙空。二條家也。

藤大納言局。

親長。甘露寺參議大辨大納言。法名蓮空。

教秀。勸修寺贈太政大臣從一位。

綱光。廣橋准大臣從一位。

貞宗。伊勢守從四位下。

季春。四辻。

玄就。

雅行。庭田權大納言。按察使從一位。

雅康。飛鳥井權中納言。法名宋世。

教國。滋野井權中納言。從二位。

之親。細川家人伊丹兵庫頭。

賢盛。杉原伊賀前司。

永繼。高倉參議權中納言從一位。法名常祐。

貞隆。伊勢氏武家。

照慶。竹田法橋。

之種。

長恒。杉原安藝守。

明宣。

明茂。和氣典藥頭。院昇殿。正四位上治部卿。

爲信。高倉從二位刑部卿。

英基。

顯豪。飛鳥井大納言雅親弟。

中薰。

元爲。

貞秀。中川。

政孝。細川家人池田新左衛門尉。

長興。小槻宿禰。

以上三十二人。

假名百首短册寸法

長一尺一寸七分。　巾一寸八分半。

水引ノ穴。上ヨリ五分。　短冊八雲紙。上下紫也。
折本寸法
長一尺四寸二分。　巾六寸三分。
表紙。白地錦。　同裏。金打目。
右折本者從　國君大納言源賴宣卿所給于紀伊國造七十代　大膳大夫俊昭也。

折本を給へる時の書狀寫
紀大膳太夫樣人々御中　闕本十右衞門
改春御慶猶更不可有盡期。何方ら御同前目出度申納候。獨御堅固之由珍重令存候。然は去冬申談候通ニ。其元御所持之玉津島社奉納之和歌短册。押申候樣にとの　思召之折本出來候付。箱ふくさ共に相添爲持差越申候。兼々申入候樣。御內證に而被遣候間。何方へも御禮入不申候。其元へニ爲成候節。急度なく折本被下置。忝仕合之段。御側に罷在候者へ御申達可被成候。猶期面上萬々可申達候。恐惶謹言。
正月十四日　勝維判

# 文明九年石淸水法樂百首
文明九年八月十五日

入後惹月　持通
猶そうき老のれ覺をなくさめし月より後のなかしてふよは
兼待十五夜　道永
月のみやそらにしろらん待侘て秋の最中にかゝる心を
十五夜當日　一位局
けふといへは暮ぬさきより空はれて半の月はかれてしるしも
十五夜夕　禪空
おとこ山峯にゆふぬる雲きえて空に名高き月そ待るゝ
十五夜待月　舊院上﨟
名に高き夜半そと人に待れてや山の端を今月の休らふ
十五夜翫月　政嗣
あふきみん月の桂の男山神まつりする秋のこよひを
十五夜惜月　上﨟
更行もわきてこよひはおしき哉名高き月の秋の半に
十五夜曉　爲富
石淸水はなすいけるも影すみて月の有明もやとり添つゝ
十五夜易過　公敦
水にせくしからみやなき月のすむ最中の秋の移りやすさよ
十五夜難忘　權大納言典侍
しはしなた心にのみそさやかなる秋のもなかの月は入ても
十五夜後朝　敎秀

池水にうつる朝日や過しよの最中の秋の月の面影

三日月　大納言典侍

今しはし面影のこれ三日月のほのかにみゆる夕暮の空

夕月夜　諦紹

夕附日入ぬる跡の山のはに影ほのかなる月をみるかな

上絃月　親長

出つるとみえしも西の空なれはいる方はやき弓張の月

望月　政長

わきてなを今夜名高くみえてけり秋も半の望月のかけ

不知夜月〔つ歟〕　東御方

山のはを出てるもかゝる白雲に心つくしのいさよひの月

立待月　雅行

浮雲のなをきえのこる山の端にほのめく影や立待の月

居待月　新典侍

更ぬとも閨へは入らし名にしおふ居待の月のこよひなりせは

臥待月　致國

更過る程もあらしとしきたへの枕とらてやふしまちの月

廿日月　高清

臥待のそらは昨日に呉竹のはつかにやとる露の月影

下絃月　廣光

ものゝふの名にもめてゝや小夜深み心ひくらんゆみはりの月

有曙月　勾當内侍

待出てゝなかむれは又程もなく影しらみ行有明の月

嶺上月　資益

いさきよき光をそへて男山峯もさたかにすめる月かけ

岡上月　宗綱

しゐてなほいかなる露か岡のへの草葉の月に秋風そふく

原上月　忠富

一しほの色こそまされはゝそ原露にうつろふ月の光に

橋上月　顯長

駒とめて今夜も爰に月はみん宇治の橋姫我なとかめそ

江上月　公兼

芦根はふ玉江の水もくもりなくすむ影きよき秋の夜の月

池上月　量光

くもりなき空さへすめる池水にわきてこよひの月そやとれる

湖上月　季經

さやかなる光はかりそみちにける鹽ならぬ海の秋の夜の月

河上月

影みれは水の緑もそめ河やそら行く月の色になりぬる

庭上月　爲廣

名にふりしとはの花の梨壺にうつろはぬ色や秋のよの月

苔上月　兼顯

うこきなき岩ほの苔に置露をいく代かやく〔マヽ〕月もすむらん

霧中月　言國

立まよふ霧のまかきの山の端をほのかに月の影そのほれる

山中月　實隆

男山月のかつらもおりをえて秋の光そそらにさかゆく

水中月　季熙

悪ふかくいけみをはなつ河水にきよくもすめるよはの月哉

洛中月　實興

雲はるゝこゝのかされの秋の空月に嵐のこゑもきこえす

禁中月　義政

曇なき影をあけぬとすむ月の雪やはらはんとものの宮つこ

閑中月　俊量

わきてなを月みる夜半の淋しさはころはかり成柴の戸の内

閒中月　元長

もろ月の影をふすまにかされても夜寒はおなしれやの内哉

籬中月　邦高

置まよふ草葉の露をよすかにて籬をさらすやとる月かけ

牕中月　政顯

ねられめや長き夜すから呉竹の葉分もりくる窓の月かけ

舟中月　安禪寺宮

難波潟あしまを分て行舟も月はさはらぬかけを見る哉

月下荻　以量

秋風のはらはぬ程は荻のはの露にやとかる月の影哉

月下萩　源富仲

花のみか月もえならぬ萩原や下葉の露に影をやとして

月下薄　爲富

うつろはて草の花野の花すゝきまねかは月のしはし休らへ

月下女郞花　持通

咲しよりよな〳〵月をかたらひてよそになひかぬ女郞花哉

月下蘭　道永

藤はかまにほふ籬のよな〳〵は下露よりも月そうつろふ

月下葛　一位局

岡のへや露の玉まくくすのはに數さへみえてやとる月影

月下淺茅　祐紹

秋ふかみ野への淺茅の露每によかれすやとる月の影哉

月下菊　政嗣

白菊もおなし光の露の上にあひやとりする秋の夜の月

月下紅葉　禪空

もみちはのちりかひくもる秋の空月の桂を風や折けん

月下擣衣

衣うつ音にもしるし名にたかき月に千里の外もれぬ夜は

澤邊月　親長

伏見やまあけぬとや思ふ月はろゝ澤田の面に鳴そ羽ねかく二

沼邊月　教國

しけりあふ芦の下根もかくれぬの底さへはれてやとる月哉

浦邊月　上﨟

みるまゝに光さやかに敷たへの袖師の浦の波の上の月

濱邊月　公敦

松かれを浪にうつろふ月影もあらふはまへの秋風のこゑ

渡邊月　勾當内侍

終夜月のみふねにあくかれてとをに渡りにあかしつる哉

海邊月　教秀

波や花うらのとまやの夜は又月の桂のもみちをそみれ〔る歟〕

磯邊月　宮御方

荒磯によせくる波のかへらすは其のまゝ月のかけや宿らん

島邊月　宗綱

さしのほる月はくもらて鹽風のあとにきえ行あはちしまやま

水郷月　邦高

あけてこそ煙はたてめ難波潟月に顯汲秋の浦人

山家月　持通

雲にふし嵐におきて月をのみ友とや結ふ柴のかり庵

田家月　公敦

鹿の聲鳴の羽音も小夜更て月はたのもの庵の內哉

關屋月　祐紹

うき旅をこよひわすれて東路や不破の關屋の月をみる哉

荒屋月　政嗣

澄月もさひしや秋の風ならて露はらひこぬよもきふのやと

竹亭月　實興

なひきあふ竹の煙の下庵ももりくる月の影そくもらぬ

草庵月　雅行

よもすからそむけもやらて草の庵にもりくる月や窓の燈火

貴賤憐月

我のみか月にはともの宮つこも心をくたくむらさきの庭

緇素見月　親長

やとしみる月はかはらし露むすふ苔の袂も花の袖にも

寄月聞戀　教秀

みゝなしの山の月影なみたにもきかすは今宵くもりはてぬや

寄月契戀　曇華院宮

いく秋もかはらぬ月をうき中に契やをかん行末の空

寄月待戀　政嗣

休らへははや更にけり月みはといひしはかりを面影にして

寄月別戀　宗綱

なこりなを有明の空の月なくはおもかけとめぬ別ならまし

寄月顯戀　俊量

それとなく月みておつる涙をも立名にそへて人やとかむる

寄月尋戀　兼顯

月になくあくかれぬとやいひなして忍ふろ中の宿は尋れん

寄月變戀　爲廣

かはるをもおなし涙とやとるなよ恨なれにし袖の月影

寄月稀戀　權大納言典侍

形見そとせめてやみましたまさかに逢夜はかりの月なられ共

寄月忘戀　季[illegible]

共にみし秋はかはらぬ月にさへ思ひいてすはなをいかゝせん

寄月怨戀　眞乘寺宮

思ひたえ今は月にやかこたましさても影見ぬ人のつらさを

寄月久戀　一位局

身のうきを月にそかこつ秋をへて袖にくもらぬ影しなけれは

寄月絶戀　舊院上﨟

月花と見し面影をのこらすらん人の契はあらすなるよに

寄月逢懷　忠富

すむ月はなを影わかし石清水とをき流の末となるまて

寄月懷舊　持通

そのむかしみぬよの人の心まて月にそうかふ秋の夜の空

寄月餞別　政長

わかれ行旅のそらにも月影はおなしなかめと思ひいてなん

寄月旅行　言國

とまるへき宿をもとはて夕月のかけをたよりにいそく旅人

寄月旅宿　教國

よなくの假寢になれて旅衣あくれは月に立別れぬる

寄月旅泊　勾當內侍

夜とゝもに鹽干の月をみつるかなうちもねられぬ波の枕に

寄月閑居　爲富

月はかり獨秋なる色なからむくらのやとは人影もなし

寄月眺望　高清

いはし水うつろふ月に見渡せはあらはれ出るよとの川波

寄月哀傷　親長

すみはてぬ月をみせけりやはた山神も御幸のかへるさの空

老人翫月　禪空

かすむとも猶やめてましとても身の老ぬる後の秋の夜の月

遊子行月　數秀

やはらくる光やあふく男山分行夜半の月にめてゝも

浄侶對月　爲富

三室戸や岩屋の苔の衣手にすむらん月もみてやおかさん

仙人伴月　高清

月影のいつれはいつる仙人や又入空に立かへるらん

商人翫月　業政

別れなはおしまぬ人やすさましき入江の浪の月はなかめし

海人歌月　政顯

波のよるあくかれいてゝ海人もうたふ聲する浦の月影

漁父棹月　季經

難波江やあしまを分る釣舟のさほにみたるゝ露の月影

樵夫歸月　資益

山人の爪木に紅葉折添て月を友とや道いそくらん

月似古　廣光

いかにして月の桂は昔よりかはらぬ花の光なるらん

月似晝　爲廣

なれもさて夜半をわかてや山鳩の嶺さやかなる月に鳴らん

# 明應四年水無瀨宮法樂百首

## 內裏百首續歌　水無瀨殿御法樂明應四年十一月廿二日

伊勢

いすゝ河代々の流のみつからと行末遠くなをいのる哉

石淸水　勝　一親王御方

世にひろき誓ひとならはいはし水わか人ならぬ人もへたてし

賀茂　堯胤梶井法親王

神まつるかものゝ瑞籬霜ふかみいのりをさゝくし松風そ吹く

平野　敎秀勸修寺前大納言

あふけなを宮ゐもちかき紙屋河なかれたえせぬ八のうち神

松尾　蓮空甘露寺大納言入道

としもへぬ松のお山の神もさそたえしまつりの使待らん

稻荷　宣胤中御門大納言

神垣にともす火みえていなり山きつなく杉の陰そ暮行く

春日　實隆侍從大納言

天てらす身をあはせてや春の日の名にもやはらく光なるらん

住吉　敎國滋野井兵部卿

あらはれてうち出し波のそこつゝお今住吉と宮ゐしむらん

日吉　宋世飛鳥井中納言入道

月讀は夜よしとまもり日吉のはひろめの神も光添けん

北野　基綱姉小路宰相

生て世のうらみ殘らす望みゝちていひしまゝにや君守るらん

大日　勝　一

中空にてらす時こそはしめなく終りなき日の光なりけれ

釋迦

二月や雲かくれにし月もなを光を花にのこすとそおもふ

多寶　蓮空

とくこゑの空に御法の聞えしにやかて其の名そ四方に滿ぬる

彌陀　堯胤

彼岸に船さしよせてあひみてん御法の門のあるしをそおもふ

藥師　宣胤

大ひえやこゝに佛の名もたかきるりの光や世を照すらん

文珠　實隆

今もなく古もなききさとりこそ世々の佛のおやとなりけめ

普賢　教秀

誓ひをく御名もあまねくかしこしと說けん法をきくそ妙なる

觀音　基綱

海士小舟初瀨をとへは海もなく山も程なきちかひなりけり

彌勒　教國

はるけしな今きく法の後の世に出ん光のあかつきの空

地藏　宗世

今の世の心にかなふちかひあらはやすくや後の身をも賴まん

天　堯胤

心からなかめてけりな天の原むなしき色は春秋もなし

地

古は穴をほりても住しをやはにふのこやに今うつすらん

東　實隆

なこの蜑の釣する舟のいとまあれやあゆ吹わたるけさの浦波

西　勝―

海原や月さしのほる末はれてまちかくなりぬ紀路の遠山

南　教秀

紫の雲のむかへもこなたそと峰に入日のしるへかほなる

北　蓮空

今もなを七の星のありところうこきなきよをさそ照らん

巽　基綱

一かたに思ひたつみのためにこそ世を宇治山もみやこ近けれ

坤　教國

西にみん影も程なく行月の中空過てかたふきにけり

乾　宣胤

なへてたかき雲より上も乾坤のあめといふ方をまつや仰かん

艮　宗世

春は誰もこゝろよすらし鞠庭の櫻をたつる方にうつりて

春　蓮空

咲ちるも程もなけれは雲の內をせめて花にてくらしはてはや

夏　宣胤

あさひこの光を色の時津風空にめくりてみなみにそ吹く

秋

わきてなを床も露けき時來ぬと老のね覺そおとろかれぬる

冬　教國

秋の色もしらて過こし小笹原しのに花みる雪のうちかな

朝　勝―

道をきく友やなからん打むれて朝にいつる人はありとも

晝　基綱

つとめあれは夜さへおしく思ふ身も唯に朽木のふしや暮さん

夕　實隆

今日過ぬとはかりいひていく夏の入相の鐘に身をわするらん

夜　數秀

ねぬにこそさたかにはきけ同世のはしめも後も鐘はこゑ〳〵

歳　堯胤

つかへしる君か惠にまかすてふ千とせをよそに思ひける哉

時　宋世

何にさておこるともなき身は老てうしなひやすき時をしる哉

寒　數秀

いかはかり池の心も寒からん水よりいてゝむすふ氷に

暑　勝―

しほれてそ草木もなひく夏の日はうすき袖とふ風たにもなし

日

あふけなを岩戸をあけし其日より今にたえせすてらす惠は

月　實隆

めくりきてつもれは老のことはりを影みぬ月に打なけきつゝ

水　宋世

ちりもゐす清き板井を飲人の心は何のにこゐ成らん

旱　蓮空

おろかなる民の願ひもみつはかり草木うるほすあまひこの神

山　宣胤

たかゝらぬ山は昔の塵ひちをすくなみ神やつくりすてけん

河　堯胤

水無瀬河波の白ゆふかけまくもかしこき時を神やまちけん

草　基綱

あやにくに昨日のこともわすれ草老てうれへの種はそへとも

木　數國

幾世ともいさしらかしのおひのほる枝さへ葉さへ霜を重ねて

青　宣胤

むれてゐる鴨のうはけもひとつ色に淵の岩かき苔むしてけり

黄　數秀

もろこしや千世に一たひすむ河は日の本にても名に流れけり

赤　數國

紅葉ははちらてうつろふ下草の色や千入のあまり成らん

白　勝―

冬枯のあしまをひろみ立鷺や水にもたまる雪をみつらん

黒　實隆

むは玉のあかつき晴の明やらて太山鴉のほのかなる空

廿

みとり子の乳房のみかは政あまきに民もはく丶まろらん

辛　蓮空

羨まし鹽やかぬ志賀の浦人はからき世そともしらて過らん

苦　基綱

あひにあひて夏を時なる味を園生のうりそしらて色つく

酸　宋世

尋てもあはれをかくろ隣あらは物おもはすをわれやこはまし

鹹　堯胤

末の世はよろつ流をくむしほのからき心をなとあはすらん

眼　實隆

色といへは移ひはて丶うつせみの人めはかりのあた物はなし

耳　基綱

爭ひのありのすさひをうしとたに猶たし（マヽ）には聞やたかへし

鼻

匂ひきてこすの隙もろたきものや色にも香にもあらぬ床しさ

舌

世のうさも身のわひしさもいはした丶舌を結ひし人も社あれ

身　堯胤

はつかしやなにの罪にか人に負ぬこの身をさへに作いてけん

意　教秀

讀哥の道にかきらし人はた丶心を種と世にそむまろ丶

前　勝｜

霜に枯露にめくむも庭草のた丶めのまへにむかふ内かな

後　蓮空

何事をいふもかひなし我も人も後あはせにかはろ世なれは

左　宣胤

御狩野や弓よりもてろ奥の手に鷹すへ出ろ人もこそあれ

右　宋世

をのつから立錺袖も寒からしふむ跡みゆ丶雪のしら濱

甲虫　教國

うかひ出て君万代を龜の尾のみとりの淵の色にみせぬろ

昆虫　教秀

雪霜の比過ぬれはさま〳〵にいてぬろむしの數もしられす

鱗虫　堯胤

山河の月の氷にうく魚の影たにあはれ袖ぬらしつ丶

雛　宣胤

あくろまつ神の岩戸のひさしきに長鳴しけん鳥もかしこし

犬　實隆

よそにやは汝を思ひの家の犬のつなくとなしにさり難き身よ

牛　宋世

物おもふことといの牛も鼻さ丶ぬをのかみとせや戀しかろらん

馬　勝｜

千里をも行より名にや龍の馬の雲にものほる道は知らん

猪　基綱

ならひきていのねられさる夜半も有しからもの床は露寒く共

羊　蓮空

これも又君か惠にゆるしあれや羊をからす名をもたてとも

人

天地とわかれしなかのをはりをおもへは人はかしこかりけり

管　宋世

吹たえしその物の音そしのはるゝそならぬ家の風はのこれと

絃　堯胤

逢にあふやいつれの緒よりかきかへす東の調わきてなつかし

歌　基綱

とほき世の八雲を花と詠むれはけにはしめなきをのはの春

舞

袖ふりし我代も遠き乙女子をとしにかはらすいかてみるへき

書　實隆

むすひても縄もその代にくちぬへしなかきためしや水莖の跡

畫　勝　｜

一筆の墨かきにしも山水のをちこちみせてたゝむ色かな

碁　宣胤

橘の身のかくれ家をとひもみは又をのゝえや爰に朽なん

酒　教國

身のうさを忘れはてける盃の光はくらき物としらすや

弓　教秀

武士のひかぬ弓まも天下おさまる道にかへる御代かな

鞠　蓮空

おゝはすに七十あまり立なれぬ四本のかけも所かはりて

一　基綱

天地とわかれぬさきを今きけは數のはしめを形とやせし

二　教秀

よろひろの影こそかはれ月も日も行めくる道のおなし空なる

三

雪の夜は月と花とのみ芳野に春の色をもわすれてやみん

四　宋世

茂り行花のなかにもあちさゐの露の宿りやせはたこゆらん

五　勝　｜

さま〳〵のかたちは物をかりの身の心ひとつそ數のほかなる

六　教國

となふなる佛の御名の數々におもき罪をも身にはなけかし

七　實隆

ことの絃のいつの情に玉くしけ二の聲をしらへ添けん

八　堯胤

はかなくもこれより上にとはりの阿梨耶と人は數へすてける

九　宣胤

月も日もあひにあひたる其數の九かさねに御酒たまふなり

十　蓮空

いくとせとかそへもあへし君か代は十つゝ十も限なけれは

## 後土御門院長州一宮住吉社御法樂和歌

初春

よる浪の音はかはらて住の江や松の緑そ霞そめける

霞　靜仁

遠き世の春をも見せて山となるちりのまかひに霞む色哉

霞　政家

春の日の光にのみはさもあらて霞に消る嶺の白雪

鶯　冬良

しるへせし風の行衞か花の香の匂ふ山路の鶯の聲

春雪　道興

下もえの草葉數そふ程みえて緑になりぬ野への淡雪

若菜　尙通

摘殘す澤の若なはをのつから下行水や根を洗ふらん　尊應

梅　實淳

冬と春と行かふ年の雪の枝にかたえそかほる梅の下風

梅　實淳

梅か枝にたくふ匂ひは木にもあらす草にもあらぬ春風ニ吹

柳　敦秀

朝露の緑の糸の玉柳光をみかき色を染つゝ

春雨　宣胤

青柳のうれ葉にをもき露にこそ音せぬ春の雨もしらるれ

歸雁　宗綱

故里の春にとそ行天つ雁山より山の花にわかれて

花　豐通

春風に行衞もしらぬ花の香のいかて櫻に猶のこるらん

花　實隆

吹よるも盛の花はつれなくて松にそかへるはるの山風

花　貫香

わつた海のかさしの浪も匂ふらし礒山さくら春風そ吹

花　敦圓

見れはまつうちおとろきて木の本のまはゆきまての花盛哉

花

あひにあひて花の盛は日も永く風も長閑き春の空哉

春月　政爲
花の香は袖にとめこし夜半の月やとす影なく霞无(明七)む空哉
欵冬　勾當内侍
よる波の露をきそへて山吹の枝もたはゝにみゆる岸影
藤　宗世
咲のほるしろしそみゆる藤の花はふ木を浪のみをつくしにて
三月盡　爲廣
心ならぬ春の別も今しはとおらは柳やかたみならまし
卯花　季種
夕暮の露光そふ卯花は籬も山の月かあらぬか
郭公　元長
思ひ寝にねられはせめて時鳥うつゝより聞夢もみてまし
郭公　通世
誰さとに又急くらん時鳥夜かれかほなる一聲の空
郭公　基綱
住吉のまつ夜もいはす時鳥月も西なる海をこそとへ
夏月　公助
入會の鐘より出し夏の夜の月もや秋の曉のこゑ
五月雨　雅俊
夏草の靡く末葉はうきなからさそはぬ水に五月雨の庭
五月雨　宥柏
船そよる名には田簑の島隠れ賴むともなき五月雨の比
螢　行二
住の江や松にかよへる秋風ををのれつけてもとふ螢哉
夕立　宗祇
かきくもり夕立すなりなる神の音羽の山の瀧もとゝろに
納涼　宗長
水の上そ幾日もあかぬ夏引の手引の糸の長き日暮し
初秋　勝仁
荻の音に秋とはしるし一葉ちる梢にわかぬ風のゆくへも
七夕　玄清
天の川漕行船に一年の恨もけふやあとの白浪
七夕後朝　雅俊
思ひやる心をかして織女のけさの別やなけきそふらん
露　實隆
言の葉の色そふ秋につくは山しけき恵の露をみる哉
荻　實淳
九重の都も秋は荻のはに軒端の山のあらしをそ聞
萩　尊應
契あれや鹿たちならす山陰の園のに(明七)一樹の本あらの萩
薄　冬直
穗に出る秋待えても賤の男か尾花かりふく軒そみしかき

虫　基綱
かり衣すその丶花に宿とはて歸る袖をや虫は恨むる

鹿　宣胤
又よそにうつろひ行かさを鹿の臥跡みゆる萩の花妻

初鴈　教秀
はる〱と馴ぬ都の旅にきていつくに宿をかりの鳴らん

月　季種
海遠く月をも西に仰きつゝつゝをの神の昔をそ思ふ

月　宋世
神もさてめてさらめやは是そ此津守の浦に月そ更行（ふくる月影イ(明七)）

月　勾當內侍
（此歌明七闕）何事か思ひ殘さむつく〱と隈なき月にむかふ夜な〱

月　政家
みし事も聞しも今はあらぬよに是や昔の秋の夜の月

月
秋は又照そふ月の習をも見わかぬ老は春や忘れぬ

擣衣　實香
ほのかにも有明の月の更るまてをちの里人衣うつなり

霧　宗綱
あらしつる野分の跡に夕霧の籬をたのむ宿もはかなし

紅葉　道興
露霜をたてぬきにしていとはやも折しろ木々の唐錦哉

紅葉　爲廣
紅のけちめあらはす松か枝や木の葉むなしき時雨なるらん

暮秋　政爲
送りこし名殘は猶や身にしまん野にも山にもくるゝ秋風

初冬　尙通
住の江や色にはみえぬ松風の音に時雨て冬は來にけり

時雨　豊通
此ころは木の葉みたれて夕時雨あらそひかぬる音の淋しさ

落葉　政家
今も猶時雨の雨の名殘とて苔路をそめてちる木葉哉

落葉　元長
定なき時雨に染し木の葉とてちらてしとまる一枝もみす

冬月　尊應
雪寒き（み(明七)）尾上の嵐更る夜につかぬ鐘きく月の下庵

霰　政爲
一とをりふり來る霰はけしくて雨になる日そ（たゝ(明七)）かつ長閑なる

雪
白妙の高峯はそれか都まて雪吹をくれ比良の山風

雪　勝仁
とははやな冬籠にし槇の戸も（にイ）雪の朝そこゝろみえける

雪　實淳
白雪の積れるうへは里人のふむ音もなきまへのたなはし

歲暮　宗祇
行かへりかきりはなきを暮はつと思へは年も老そかなしき

初戀　宋世
つゝむへき故をもしらてあちきなく馴ぬ涙を洩しつる哉

忍戀　尙通
覺束なはていかならん愚なる心ひとつにつゝむ思ひは

忍戀　宗綱
しらせはと思ふ心を賴にてつゝむもいつを限なるらん

不遇戀　實淳
さきの世の契しらはやかく計つれなかるへき報ありやと

不遇戀　實隆
沈ても此世にかへる罪しあれなあはて命のうきに絕なは

不遇戀　肖柏
よそにのみ闇の現もまたしらてはかなき夢に身をや盡さん

不遇戀　行二
人そうき花の下紐春風の吹をも待ぬためしある世を

不遇戀
(此歌明七書)
よそにのみ思はむよりは僞のうきをたにしる夕暮もかな

初逢戀　(宣胤イ)尊應
ならはしの涙吹ほせ我思ひ今宵すき間の手枕の風

曉別戀　基綱
行かへり後も賴まん逢坂にたゝこのたひの鳥の音そうき

後朝戀　季種
けさは猶うき曉の心さへ身を別れては誰したふらん

逢不會戀　道輿
月は猶其夜を殘す閨の中に人はかけせぬ床の淋しさ

逢不會戀　政爲
うかりつる別にこりぬ心をも見えはや人の夢の枕に

逢不會戀　後イ(明七)　爲廣　りけイ(明七)
其まゝに渡瀨もしらて一夜川渡るや何の夢路なるらん

逢不會戀　宋世
はてはかくつれなき色の有なからなそや一夜のあふの松原

逢不遇戀　冬良
(此歌明七在後朝戀季種後)
今は又なけく涙やつゝましみつの柏のたちし袂に

忘戀　政家
是も猶同し心にあられはや忘らるゝ身は忘れさるらん

忘戀　敎國
さすか又思ひや出ると計に問ぬ月日をおとろかさはや

忘戀　通世
それをたにかそへて今は忍ふ哉驚かされて問し夜ころを

恨戀　　雅俊
たかかたに豐浦の島の二心かけても浪に袖しほるらん
曉　　爲廣
鳥の音はよしはかるともつかへ行道はまよはん心ならめや
松　　宗長
時分ていく代高砂住の江や梢〔もイ(明七)〕にしろく松のへぬらん
竹　　教秀
降うつむ雪に臥ても下折の聲をはきかぬ庭のなよ竹
山　　豐通
濁りなき流れの末に誘はれて猶水上の山そゆかしき
河　　公助
つくはねの絶ぬ流やみなの川淵も瀬になる恨なるらん
橋　　雅俊
山人のをのか手なるゝわさなれや渡すもかりの谷の柴橋
旅　　玄清
幾日へていつこへはてん行末の山も七尾の八重の白雲
旅　　尙通
故里に通ふ夢路の關守や枕にちかき山風の聲
關　　冬良
(此歌明七在橋雅俊後)
心たに浮世にとめぬ物ならは外に隔つる關はありとも〔らしな(明七)〕
海路　　勝仁
船出す追手もあれな浦遠き汐干の名殘波風もなし
山家　　政爲
遁ても此世の內はとにかくに心にかなふ山すみやなき
山家　　實隆
尋ねはや道ある世をも松風に猶山ふかく人やすむらん
田家　　宣胤
なかれ行みつのゝ里の末みえて田面はるけき淀の川船
述懷　　爲廣
捨はやの浮世の風のはけしさは絶たる嶺も聞やのとめん
述懷　　基綱
何かせん今たに末の世語にたとへは殘る其名ありとも
懷舊　　教國
さま〲にかはりもて行老の後うかりしもとの身〔元(明七)〕をも戀つゝ
夢　　勾當內侍
現には又もかへらぬ古へをうちぬる夢にみてそ慰む
神祇　　宗祇
立登る朝日をみても〔そイ〕波の底に和らけ〔き(明七)〕初し光をもしる
釋教　　道興
むれのうちにやとしとゝめてむかふ哉鷲の峯より出る月影
祝　　宋世
神の代をかそへんとすれは海も淺く君を仰けは山も及はし

明應四七(明七)年十二月十二三イ(明七)日

長門國住吉社法樂

(以下明七无)長門國住吉社者最初垂跡之靈地焉。威光培增之神明也。爰新撰菟玖波集修撰之時。宗祇法師竊凝丹心以祈素願。遂終彼一集篇什。奉納此百首和歌。忝交御製之金章。相擬報賽之玉帛。蓋非神助之感應者。豈得吾道之再昌乎。伏希住吉浦之浪鎮傳万歲之聲。筑波山之陰遠加千秋之惠而已。于時明應乙卯嘉平中旬記之。

從二位行大納言兼侍從藤原朝臣實隆

右御短冊百枚。實隆卿序一卷有。

安永八己亥年五月六日寫之。　可林

〔右以圖書寮本內閣本校合更以明應七年住吉社百首加註(明七)即是〕

# 明應七年長門國住吉社法樂百首

〔右與明應四年同社奉納百首相同故從省略但百首和歌作者本書所載也而奉納百首闕之〕

百首和歌作者

御製。　勝仁。親王御方。
政家。近衛。　冬良。一條。
道興。聖護院。　尚通。關白近。
尊應。靑蓮院。　實淳。德大寺。
教秀。勸修寺。　宣胤。中御門。
宗綱。松木。　豐通。久我。
實隆。三西。　實香。三亞相。
教國。滋野井。　勾當内侍よる浪の露をきなにことかおもひのこ
政爲。冷泉民部卿。　宋世。二樂院。
季種。小倉中納言。　元長。甘露寺中納言。
通世。中院。　基綱。姉小路。
公助。定法寺。　雅俊。飛鳥井。
肖柏。　行二。二階堂。
宗祇。　玄清。
宗長。

# 續群書類從卷第三百八十六

和歌部二十一

## 後鳥羽院御百首

### 春

霞行たかねを出る朝日かけさすかに春の色を見る哉

あさひかけさすといふ詞あれは。さすかとつゝけたり。春のくるをみれは。昔都の事を思ひ出てやるかたなき間。みましきと思へとも。さすかにまたみちるゝ也。

墨染の袖の氷に春たちてありしにもあらぬ詠をそする

すみ染の袖に二有。幼少より法師になるを墨染の袖といふ。又俄に心ならす染るを墨染の袖といふ。俄隠岐院(島衆)へうつりたまひて。古は東岸西岸南枝北枝の梅を詠つるに。いまはありしにもあらぬ袖になかめをするとなり。

解にけり紅葉をとちし山川の又水くゝる春のくれなゐ

なかれ出てはるの詠に二度なるとなり。我はいましられ侍る心もなく。世間をなかれ出ぬとなり。

百千鳥囀る空はかはられと我身の春とあらたまりぬる

古今の歌に。百千とり囀るはるは物ことにあらたまれとも我そふり行とよむ本歌をふまへて。鶯のなく春はかはられと。我みはかり本のはるにかはりてあらたまるとなり。

里人のすそのゝ雪をふみ分てたゝわかために若菜つむなり

たゝ我ためとはをのかためにつむとなり。我都にありし時は。きみか爲とてわかなをつみさゝけぬれとも。島へうつりぬれは。わかためにはよもつまし。心のれ〳〵か爲にこそつむらんとなり。里人のうへをあそはされしなり。

ふる雪に野守か庵もあれはてゝ若菜つまんと誰に問はまし

野守とは大内の庭をはく者の名なり。正月二日に此者の役に若菜をつみて參らする。里人もこの人して捧しなり。我籬に居侍られは。我庵も野守か庵もあれぬへし。里人は誰にとはんとなり。

根芹つむ野さわの水のうす氷またとけやらぬ春風そ吹く

野澤の薄氷とはとけやらぬをいはんため也。薄く氷りたれはこそねせりはつむらめ。我心ははつるゝをなけれは。春風ふくとよめる。

かきりあれは垣根の草も春にあひぬつれなき物は苔深き袖

かきねの草も枯はてぬれ共。はるにあふかきりあれは又萌出る也。我苔の袖はいつかよに出ましとなり。苔の袖とは物おもふ袖をいへり。

春雨に山田のくろをゆく賤のみの吹みたすくれそ淋しき

風ともなくて吹みたすの詞てからにて侍り。はるさめにぬれてしつか歸る。うれしきやうに。蓑のひれゆるくを風のやうなるとなり。家路に歸らすと。春雨の暮はさひしきと也。

遠山ちいくへも霞めさらすとてをち方人の問ふにもなけれは

さらすとてとはさあらすとての詞也。遠方人とは遠きにてはなし。皆人遠きかたに心得ぬる以外誤なり。今の義ならは。遠山ちとなく字と同し字なるへけれは。うちむかふ方とかきて遠方人とよむなり。うちむかふ人たにとはぬとあれは。まして遠山ちやうにいくへもかすめとなり。

うらやまし永き日影の春にあひていせをのあまも袖やほす覽

いせをのあまをいひ出る事深なり。其故はいせをのあまは日に七十五度海へ入て魚をとる間。心くるしくかなしきたとへなり。またいせをのあまとは天照太神の御事なり。昔神武天皇の御時。魚を取て供御に備へ奉る神は鳥につかへたまふなり。いせをのあまとは男士と書り。女神士神天を表するなり。

萌出るみねの早蕨ゆき解ておりすきにける春そしらるゝ

折に過けるとは詞蕨にひかれておるものなれはいへるなり。我都にありし時は。花のちるをみて春のすくるをしり。今は花をもみれは。賤のわらひを折てかへるをみて。はるの過るをしるとなり。雪解てならては。蕨はもえ出ぬなれは。春の暮るをしるとなり。

春雨も花もとたえて袖にもるさくらつゝきの山のした道

さくらつゝきの山とは大内山をいふなり。櫻をかさして大宮人の翫し時は。春雨をいとひぬるを。いま我そての涙のはら〱とおつるは春雨と也。去年別れし事を思ひ出てよめり。下道とは我しのふ身となるを云り。さくらのとたえたる時なれは。なみたの雨とふりて思ひ出るなり。

をのれのみ春にあふかと思ふにもみれの櫻のいろそ憐き
菅丞相なかされし時。飛梅松なといひて。心なき木も在所をさりて。墨染櫻なといひて。花も色をそへつるに。我いまおちふれたるに。草木たにも歎かす。嶺の櫻は花やかに色をみせぬるを恨みたまひてよめり。

詠むれは月やは有し月はあらぬうき身は本の春にかはれる
業平月やあらぬはるやむかしのと云を本歌にして。業平は二條宮を思ひて。そはすして我みひとり都にあれは。我身ひとつはもとの身とよむ。われはかくうつりきぬれは。みももとの身になしとなり。

宿からんかたのゝみのゝかり衣ひもゆふくれの花の下影
此哥はみのとはかたのゝ縁なり。みのはかり衣の縁なり。衣は花の縁なり。日も夕暮になりぬれは。さひしきのみに思ひて。木々の花もちり。我はこゝろの花もちりけれは。日もゆふくれの花の下風。何國の夕暮かすみよからんと思召。やとからんとそ侘給ひぬ。

墨染の袖のあやなく匂ふかな花ふきみたす春の夕風
あやなくは無益也。このすみ染の袖に花のにほふは無益也といへり。

散花にせゝのいはまやせかるらん櫻に出るはるの山川
花にせかるゝ水をさくらに出るとなり。此詞專の詞也。

物思ふにすくる月日はしられともはるや暮ぬる岸の山吹
山吹はみのならぬ花なれは。わか身もみにてはなきほとに。わか友には山吹ならてはなし。實のなる花は實のなる間。はなのおもはん所もはつかしと也。すゑに山吹はさく物なれは。春の暮をしると也。

夏

けふとてや大宮人のかへつらんむかしかたりの夏衣かな
大宮人とは內裏の人をいふなり。卯月朔日都にありしときは。衣をかへつるに。此島へうつりぬれは。もとのふるき衣なりけれは。大宮人のさそ衣をかへぬらんと。うらやましとなり。我はなはかりのなつかとなり。

古里をしのふの軒は風過て苔のたもとに匂ふ橘
こけのたもとはものおもふ袖の朽ぬるをいふなり。もろこしにふわうと云者有。六歲の時父母にをくれて。あまりに戀しきに。かの墓所へ行てかなしひけるに。木の二本生出たるを。この木に嬰兒よりつきけれは橘の木なり。父母の袖のにほひはなにしけれは。昔のひとの袖の香そするといひ傳たり。橘をはむかしの人をいひならすなり。

たをやめの袖うちつゝく急雨(こさめイ)に取やさなへのたちはならはす
たをやめとは。卯月二日にたをやかなる女房をそろへて。田を植るまれを內裏にてしけるをみつけたまひて。又此

しまにて賤の田を植るをみて。都にて見しには似たれとも。哥もみなちかひたろとなり。

暮かゝろ山田のさなへあめ過てとりあへすなくほとゝきす哉

山田はさなへをいはんためなり。早苗はとりあへすといはんためなり。ほとゝきすは雨のつよくふる時はなかぬなり。やみける時はなくなり。雨すきてとりあへすなくとなり。

あやめふくかやか軒端に風過てしところにをつるむら雨の露

菖蒲はかならすはのなかくみしかくあるものなれは。長きはつゆをそくおち。みしかきは早く落る間。しところに露の落るなり。

今はとてそむきはてぬる世間に何（ふイ）とかたらん山ほとゝきす

ほとゝきすは蜀の公の魂なり。くわいわうと云者にむははれて。ほとゝきすになりても不如帰となくなり。今又我はよにすてられてかひなき身を。都へかへれとなくを。古へは全なき事を鳴とおもひしに。いまはともなひかへらんとなけはうれしき也と。卑下してあそはしたるなり。

五月雨に池のみきはやまさるらん蓮の浮葉を越る白浪

いつもかの御窓には。夏にもなれは蓮の花を賞翫したまひて。五月雨に池の水ましぬれは。蓮のいたむとて。かの水をせかせたまひしなり。さて五月雨のいたくふりけれは。都の事を思ひのこさせたまはす。さそやみつからかなれぬる蓮の上をも。このさみたれに水まして。徒にしらなみの蓮の上をや越ぬらんとおほしめして。さてこそはすのうきはをこゆるしらなみとあそはしける。

さみたれに宮木も今やくたすらん槇たつ山にかゝる白雲

（イ二此歌有）みのうきはとふへき人もとはぬよに哀にきなく時鳥哉

かゝる物うき身となりぬれは。とふへき人さへとはぬよに。ほとゝきすは我をとはんとて。哀にきなくよとおほしめし。さてこそあはれにきなくほとゝきすかなとあそはしける。

難波江やあまのたくなは燒（もえイ）わひて煙にしめる五月雨の比

けふりにしめるとは制の詞なり。あまのたくなはに二の義あり。あまの鹽にくちたる繩を火にたくを云。又長き繩を打はへてあまのたくるをもいふ。さて煙はなくやくかと思ふへし。けふりこそしめるへけれ。煙を五月雨のしめろといふは。さるへき樣なり。我こそ王にて天下をしめすへきに。このしまへなかされて。天下のものにしめさるゝを。たとへてあそはさるゝなり。

したくゆるむかひの杜の蚊遣火に思ひもえそへ行螢哉

下くゆるとは思ひの事なり。かやりは賤か蚊をふせく煙也。むかひの森は出雲國と隱岐國はむかひあふ也。出雲の

大社に神の母は御座す。きみを守護し給ふなり。何とて我
を守らせたまはて。島へなかして置給ふそとて恨てよめ
り。螢の行をみて。我もゆる恨も大社へゆく螢のとくもえ
ゆかは。さそむつかしくおほすらんと也。
ゆふたちのはれ行峯の雲まより入日すゝしきつゆの玉さゝ
玉さゝに露のをきたるをみれは。涼しく心よけにみゆる。
うらやましくあるに。我は夕になれは思ひたえす。こゝろ
はれぬかなしさよとなり。
あはれにもほのかにたゝく水鷄哉老のねさめの曉の空
夕すゝみ芦のはみたれよる波のほたる數そふあまの漁火
あまのいさりひにほたるかすそふ。おもしろき體をよめ
り。求魚火に螢かすそふ詞。尤しかるへき體なり。
吳竹の葉すゑかたより降雨にあつさひまある六月の頃
くれ竹は葉末いはん爲也。あつさひまあるは。我都に在
しときは民の爲衣をぬき。熱き時は衾をかされてきたま
ひぬるか。今は民もにくゝこそ思へ。ふすまをもかされ侍
られは。あつさひまあるみな月のころとなり。
みるまゝにかたへすゝしき夏衣ひもゆふ露のやまとなてしこ
見るまゝにはみるゆへにと云心なり。かたへすゝしきは
夏の末の體なり。すこしすゝしきとなり。衣のひまもと云
事を取て。ひも夕露とつゝけたまふなり。

# 秋

かたしきの苔の衣のうすけれは朝けの風も袖にたまらす
秋(夏歟)の詞更になし。されは世のなかもあつく。風の音もせさ
る間。うすき袖をもしらさりけるか。はつ秋となれは。風
身にしむ時。うすき衣としると也。苔の袖はもの思ふ袖の
よを出たるをいふ也。
よのつれの草葉の露にしほれつゝもの思ふ秋と誰かいふらん
よのつれのくさはのつゆとはすこしのをとなり。誰すこし
の露にぬれて物思ふとはいひなしつらん。我深きおもひ
に秋たゝてたにすこしはつるにとなり。
秋されはいとゝ思ひをましはかるこの里人も袖や露けき
秋去はとあれは。さり行なとにてはなし。されはこそなと
いふ事なり。いつくもたへぬ思ひなから。秋ことにますと
いふかと。眞柴苅は此里人もといはん爲也。さと人も我を
恨て。さそ袖をぬらすらんとなり。
思ひやれましはのとほそ押あけてひとりなかむる秋の夕暮
心あるものはおもひやれ。女御も更衣もなく。ひとりまし
はの戸ほそおし明てなかむる夕をとなり。たゝたにも秋
はものうきにと云也。
さきかゝる山下道もまかふまて玉ぬき亂る萩のあさ露
咲かゝるとは萩のひまなく茂りあひたる事をいふ。山の

下道ふみまかふほとに。朝露の玉のことくに置侍れは。その露にはきの花の亂て散侍れは。山下道うつもれてみえぬといふとを。玉ぬきみたる萩のあさ露とこそあそはされけれ。

故里を別ちにうふるくすの葉の風は吹ともかへるよもなし

くすのはゝ風ふき返り〱する物なり。我は風吹とも都へは歸らぬといふなり。

いかにせん葛はふ杉の時のまに恨てふかぬ秋かせそなき

ときの間とはほとの事なり。いかにせんとは何とせんといふ心なり。葛はすこしの風にもからみてける間。風は少し吹ともうらの見ゆることく。わかおもひもちとのまもうらみのやむ事なきなり。

なきまさる我なみたにや色かはる物思ふ宿の庭のむら萩

もろこしにくはひ王の時に。后に空名をいひかけられて。ある夕暮に北面の庭にうち出て。萩にむかひて歎きかなしみたまへは。一夜の内にうつろひけるとなり。また我やとの萩もうつろひ行は。そのことく萩もわかおもひの涙にや。先しほれうつろふとなり。

いたつらに秋の日數はうつりきていとゝ都はとをさかりつゝ

おもひやれいとゝ涙もふる里のあれたる庭の秋の白露

いとゝ涙もふる里とは涙もふるとなり。またあれたるやとの庭の露とは。わかやとも鳴へうつりけれはあるならんとなり。あれたる庭の露もわかなみたにやと也。

軒はあれて誰かみなせの秋の月すみこしまゝの色はかはらし

後鳥羽院もとは攝津國山崎水無瀨殿にまします時。月のおもしろき所なれは。諸人集りてみるに。又流されて次の年家隆參られけれは。いかゝに水無瀨の月をみるらんと御尋ありけれは。君ます時こそ人もにきはひみ侍れ。いまは誰も見す候と申されけれは。我こそなく共。いかてか月はかはらんとなり。

故里の一もとすゝきいかはかり茂き野原と虫のなくらん

いかはかりはいかほともとなり。君か植し一むらすゝき虫の音のしけきのはらと成にける哉。在原寺にて業平よめり。是は我植し一本すゝき。いか程もひろくはその哥をふまへて。我都の宿にもむしはかりおほくさそ鳴らん。すゝきも茂りてそとなり。

野邊染むるかりの涙は色もなし物思露のおきの里には

鴈來草といふ草は鴈のなくをきゝて色付なり。鴈の涙にや染らん。此我すむ里には草はも野にて悲しとなり。

晴よかしうき名を我にわきもこかかつらき山の峰のうす霧

わきもことは女のことなり。かつらき山は女にかつらと云物あれはかつらとつゝけ給ふ。女ゆへにかく我にも成

けれは。白拍子なと世に絶よかしとの心に。はれよかしとをき給ふなり。

ぬれてほす山ちの菊も有物を苔のたもとはかはくまそなき

もろこしに山ちの菊の露深きと御かときこしめし。いかに深くあり共。われゆきてみは。露をうけてみまし物をと思召。一念つもりて一夜に菊の露たえてなかりけり。それたにかく宣旨は背ぬ。なと我袖の露はほしあへぬと也。

たのめこし人の心は秋ふけてよもきかそまに鶉なく也

逢かそまとはしけりたる宿のそはといふこゝろなり。この秋も人をたのみけれはかへさて。我をは草のしけりたる所にすてゝをけは。うしといはんとて。うつらなく也となり。

山本の里のしるへのうす紅葉よそにもおしき夕嵐かな

都にてこそ薄もみちよりあらしにちらさしとおしみしに。この島にてもみちもなか／＼やとの戀しきにと思へ共。さすか里のしるへみえけれ共。道なけれは。都ならね共名残おしきとなり。

よもすからなくや淺茅のきり／＼すはかなく暮る秋を恨みて

あさちとは草木のことなり。よもすからあさちのきりきりすかへらぬ秋を恨みてなきぬると。みつから不叶事をたとへて。はかなくくるゝ秋をうらみて。なくやあさちのきり／＼すとあそはされける。

おなしくは桐の落葉もふりしけな拂ふ人なき秋のまかきに

式子内親王の桐の葉の哥をふまへて。みちあれはとてとふ人もなき問の。はもちりしき道をうつめ。中／＼道あれは人まちかほにしてうらめしきことなり。

〔本書秋部左二首闕〕

哀なりたかつくとてか初鴈のね覺の床に涙そふらん

岡の邊の木間に見ゆるまきの戸にたえ／＼かゝるつたの秋風

## 冬

見しよにもあらぬ袂をあはれとやをのれしほれてとふ時雨哉

むかしはみつからか袂かくはあらぬとて。しくれさへをのれもしほれて。哀とて弔ひ侍れ共。終に冬も人もとはぬよと覺しめす心を。をのれしほれてとふ時雨かなと。みしよにもあらぬ袂を。哀にもこそあそはしけれ。

冬くれは庭のよもきも下もえて枯はの上に月そさひ行

庭の蓬葉たにも。根にめくみて春に逢はんと思ふに。我は春にも世に出んとおもはれはうれしくもなし。枯はと我やとのさひしとなり。月そさひゆくは。我さひ行月とたとへたり。

霜かれは尾花ふみわけゆく鹿の聲こそきかれあとは見えけり

ふゆのしかはなかぬものなれは。是にてきこえたり。

神無月時雨とひ分行かりの翅ふきほす峯のこからし

鴈の翅吹ほすはめつらしき詞也。鴈のしくれにぬれて行たに。峯の風にふかれてほすに。我袂は木からしにもほされぬとなり。

をのつから問かほなりし荻の葉もかれ〳〵に吹風のはけしさ

荻のはに秋のはしめてよりとひかほなりつるに。木間の風も今は枯はにあれは。あれてすさましく吹様に。都の者も情なくあたるとなり。

去年よりも庭の紅葉の深き哉涙やいとゝ時雨なる（そふイ）らん

この深きはちりて深きにてはなし。色の深きとなり。こそより色ふかきは我涙にて染ぬる。時雨獨していかほと色ふかくはあらしと也。

青むとて恨し山の程もなくまた冬枯の風おろすなり

青みて我ありかほなる山の草木も。又冬枯てみえけれは。世間の體皆かやうなるとなくさむ哥の心也。

たつた山まかふ木のはのゆかりとて夕つけ鳥に木からしの風

ゆふ付とりとは鷄のことなり。もみちもにはとりもまかふはかりありけれは。冬の木のはかろし。木枯とにはとり殘りけれは。もみちのゆかりに二のいろのこゝろなり。

散しけるにしきは是もたえぬへし紅葉ふみわけかへる山人

もみち分かよふと有へけれ共。にしきを着て古郷へかへると云本文あれは。この紅葉もにしきの様に。山人の着て歸らはたえぬへし。

ふゆこもり淋しさ思ふ朝な〳〵つまきの道をうつむ白雪

雪はとりわけ朝夕ふるものなり。さるほとにふる時はおもしろけれ共。爪木とる人の聲をきゝていつもなくさみつるか。この雪に道埋れは。つま木とる人もうしと思へは。淋しさおもふ朝な〳〵。爪木の道をこの雪に埋れはとあそはされける。

山風の積れはやかて吹たてゝふれとたまらぬみねの白雪

さなからや（にイ）佛の花におらせまし樒の枝につもる白雪

けさみれは佛の閼伽（にイ）も摘花もいつれ成らん雪の埋木

おく山の臥猪の床やあれぬらんかろ（るイ）もゝたえぬ雪の膵（印イ）は

かそふれはことしの暮はしらされと雪かくほとの營もなし

雪かくほとのいとなみもなしとは翫といふ心なり。都にて百官こと〳〵く初雪よりめしよせて。雪をかゝせ翫ひたまふなれと。此島にては日數をかそへ日を送り。いとなみもなしとなり。

## 雑

古の契りもむなしすみよしやわかかたそきの神とたのめと

皇の御元服をかたそきと申なり。又すみよしの末社の中

にも。かみそきと申神あり。帝王の烏帽子親になり給ふなり。肩よりなかく生たる髪をそきて。此日なから大君を守らせ給ふ也。この神をたのみぬれ共情なく曲なしと也。

なましゐに生れはうれし露の命（今朝イ）あらは逢よを待となけれと

この五文字珍らしく。あふよをまつにてはなけれ共と云こゝろなり。

問かしな雲の上よりこし鴈の獨ともなくうらみなく音を

昔蘇武といふもの胡國へとらはれて。廣野にすてられけろ鴈の翅に文を云傳へて。二度都へ歸しなり。又我もこの島へなかされてあれは。鴈も情有て一度都へかへせとなり。

鷗なく入江の鹽やみつなへに芦の浮葉（うはゝイ）をあらふ白浪

みつなへにとはみつるゆへにといふ心なり。

藻汐やく蜑のたく繩うちはへてくるしとたにもいふ方もなし

あまのたくなはに二有。たくなはゝ栲たる繩を火にたくなり。たくなは打はへてとは。たくるは人めもこそくるしとあらんと思ふに。我をは哀む事こそなくとも。昔とたにといふ人なしと云心也。繩はくる物なれはくるしといふ心なり。またなはにて物をゆふたれは。あはれと云人もなしとなり。

波ま分沖のみなとに入舟のわれそこかるゝたえぬ思ひに

みなとへ入舟のこかるゝ思ひにと云は。よそよりみやりては。こかるゝ思ひのありと押はかり侍れとも。そのかのゝなれは舟も思ひなし。我思ひこそ眞實の思ひにてこかれ侍れとなり。

しほ風に心もいとゝ亂れ芦のほに出てなけととふ人もなし

しほ風は芦の穗をみたすものなり。我もしほ風をきけは心亂れてあるに。ほに出てなけ共とは。顯れてなくとも問はぬと有へけれ共。あしに縁にひかれてほに出るとなり。

里とをみきれか神樂のこゑすみてをのれもふくろ窓の灯

問るゝもうれしくもなし此海を渡らぬ人のなけの情は

なけの情は義理はかりの淺き情を云也。都より人々とふらひ給へ共。淺きなさけなる間うれしくもなしとなり。心あらは此海を渡りてこそといふへけれと。都への御歌とそ。

長きよをなかく明す友とては夕（やイ）つけ鳥の聲そまちかき

鷄は別れをすゝむる鳥なりとて。ゆふを付て相坂へ放したまふによりて。木綿付鳥とは申すなり。さしもいとひしゆふ付鳥なれ共。いまはとふ人もなく夜も長けれは。此鷄はかりは我友なる間。鷄の心もさそ思ふらんと也。

曉の夢をはかなみまところめはいやはかなゝろまつ風そふく

いやはかなゝるとはいよ〳〵はかなく吹と也。夢をはか

なみとは。宵はまつ風夢を覺して驚きぬれ共。曉は孤ぬるゆへに。何ともおもはすまとろみぬれは。松風いよ／＼夢をさますとなり。

とにかくにつらきは沖の島つ鳥うきをは汝か名にやこたへん

島津鳥とは鵜の事なり。なれは我といふ心なり。鵜と云鳥は名にやかく鵜と聞ゆるなり。うきれをなきてきかするはつらしとなり。うらちとり。濱千鳥。磯千鳥。さよちとりとはいへと。鳴千島とはせぬ間。鳴津鳥とあれはなり。

すきにける年月さへそ恨めしきいましもかゝる物おもふ(みイ)とは

年月さへうらめしきとは。時刻きたりてかゝるしまへなかされんとも生れつきたるみ。されは年月さへうらめしきとなり。科はなけれ共。いつの何時かかやうにならんと生れつきたる月をうらむとなり。

ゆふ月よ入江の鹽やみちぬらんあしのうきはをたつの諸聲

たつの諸聲とはかされて鳴さはくを云也。重てなくは入江に鹽やみちて。床をうしなひてたちさはくらんとなり。

沖の海をひとりやきぬるさよ千鳥鳴音にまかふ磯の松風

いその松風の物すこきを聞たまふところ。うきさよちとりの猶更て鳴つるを聞て。松風をわか獨きゝてなくとくに。千とりもひとりなくらん。物すこくあはれなると也。

日にそひてしけりそまさる青つゝら来る人もなき槇の板間に

青つゝらとはかつらかといふなる間。つゝらはかつらのくると云緣ある間。くるといはん爲也。くる人あれは茂る事有ましけれ共。問くる人なきほとに。かつら計しけるとなり。

何となく昔かたりに袖ぬれてひとりぬる夜もつらきかれ哉

あかつきのかれを聞ては別をすゝむるとて。二人れてこそいとひぬるに。今は我はかり獨ぬれ共。むかしを思ひ出れは物うきに。すこしまとろまんとずれは。又あかつきの鐘のなるを聞て。夢をさまし給ふとなり。

人こゝろうしともいはしむかしより車をくたく道もたえにき(きゝ歟)

もろこしに大行路といふ道は。車を通せはうへより巖石落かゝりて車をくたくとなり。科なき車たにも摧色あり。我は罪あれはこそかく流すらめと思ひなくさみ。人の心をもうらむましきとなり。

よそふへき室の八嶋も遠けれは思ひのけふりいかゝまかはん

晴やらぬみのうき雲をいとふまにわかよの月の影そふけぬる

よそふへきとはたとふへきと云にひとしきなり。いかゝとは何となり。室の八島播磨の室にてはなし。おくの室也。八島といふ所に戀をして死する女あり。塚に築籠てあれは。朝夕けふりたちける時。ちかくは思ひの烟をたとふへけれ共とをきとなり。

みほの浦を月とともにや出ぬらん隱岐のとやまに更る鴈金

月前鴈と云題にての歌なり。みほの浦は隱岐の國には末にあたる。月をともにや出ぬらんとなり。月は沖の海に殘るに。鴈の遠さかり行を聞て。なと月とはつれもせて鴈はかり行となり。連歌ならはみほの浦を月と共にや出ぬらんとあらは。出る者なしと云へし。歌にくさりぬれは腰をれとや申へきなれとも。鴈のあつまる浦なれはかく讀り。みほの浦は駿河の名所也。又美保の關とて出雲の地の海はたにもあり。名所なり。

我こそは新しま守よ沖の海のあらき浪風心してふけ

われこそはと云肝要なり。家隆卿隱岐國へ參り。十日はかりありて歸らんとし給ふに。海風吹歸りかたければ。我こそ新しま守となりて有共。なと科なき家隆を波風心して都へかへされぬとあそはしける。されは假に凪しつまりて家隆卿都へ歸られしとなり。

思ふ人まつもこゝろやなくさむと都鳥たにあらはとはまし

家隆參られし時。都にうへをかれし松の事を御尋ありけれは。かれこゝちのありしよし申されたれは。何とて我こそかくありとも色をかふるとて。御製を家隆にまつのかたにつかはし給ふ。都鳥は業平問たとへあれは色をかふるとも。もしやまつはことゝふ事もあらん。枯すともまてとなり。

ことつてん都までもしさそはればあなしの風にまかふ村雲

あなしの風は東風也。

憂しとたに岩波高き吉野川よしや世の中思ひ捨てゝき

うしとたにとはうしともいはしとなり。いは波の移るやうに年月もうつりぬれは。よしやよの中をおもひすつるそと觀し給ふなり。

とにかくに人の心も見えはてぬうきや野守のかゝみなるらん

野守のかゝみこそうき事もみ侍るといふに。かの島へきて。うき故に人の心をしるとなり。その故は都にありし時は。萬人あふき奉りてなをさりなく思へとも。いまこの浦へ尋くる人もなし。情のふかきをも淺きをも。うきゆへに知るとなり。野守のかなしといはんとて。鏡の字を置なり。家なとうきにてはなし。凡慮にあらさる御心なり。

故里の苔のいはゝしいかはかりをのれあれても戀わたるらん

限あれは萱か軒端の月もみつしらぬは人の行末の空

下の句祝言也。古へは玉樓金殿に居て思ふ事もなきに。因果のかれかたくこの島へ來りて。萱か軒はの月を見る。はや爰にてしられたり。定なき世なれは。又都へ歸りやせんとの御心に。しらぬは人の行末の空とあそはされしなり。

おなし世に又すみのえの月やみん今こそよその沖津島守

すみのえの月とは都の月をみんと也。同しよとは。生たる内にとく都へ歸りて。月をみてこそと覗給ふなり。さてこそ同しよとなり。

なひかすは又やは神にたむくへき思へはかなし和歌の浦波

わかのうらなみは日本國を和國といへはわかの浦といふ也。本は神代にて天照太神の御國。中ころに王土と成しかは。我民〻もなひかすは。又本のごとく神へ返し申さんとなり。主なき國はあるゝと云間。此うへも萬民憐てかくあそはされけるとなり。

「右後鳥羽院御百首以内閣本校合」

# 土御門院御百首

建保四年三月
定家卿點九十二首朱「今用━」
家隆卿點九十八首墨「今用━」

## 春二十首

立春

朝あけの霞の衣ほし初てはるたちなるゝあまのかくやま

本歌の心をみるへく姿詞心かたし。氣賓殊勝目もくれ候。

子日

しら雪の消あへぬ野への小松原引手に春の色はみえけり

義理相叶。詞花珍重。

霞

しら浪のあとこそみえれ天の原霞のうらにかへるつり舟

下句美麗。

鶯

雪の内に春はありとも告なくにまつしるものは鶯のこゑ

あなうつくしの姿詞や。こは誰にか。

若菜

誰かための若菜ならねと我しめし野澤の水に袖はぬれつゝ

心も葉みな相叶へり。おな上手の所爲かな。

殘雪

埋木の春の色とや殘るらん朝日かくれのたにのしらゆき

おほく埋木を詠するに。なと此こゝろは候はさりけるぞ。

梅

梅か香もたか袂をか契るらんおなし軒端のはるの夕風

一事無難。但普通の當世歌。

柳

鶯のよるといふなる岩はしのかつらき山に靡く青柳

早蕨

朝みとり苔のうへなる早蕨のもゆる春日を野邊にくらしつ

櫻

み渡せは松もまはらになりにけり遠山さくら咲にけらしも

如法秀逸。

春雨

鶯の木つたふ木にも春雨のふる巣戀しき聲そものうき

ありかたく候。

春駒

難波江やまはらにみえし蘆葉もめくめはやかて駒そすさむる

此駒こそ神妙に覺え候へ。

歸鴈

御吉野の花にわかるゝ鴈かねもいかなる方によると鳴らん

いかなる方によるとなくらん。是當歟に候。

呼子鳥

まきもくノ檜原ノ山の呼子鳥花のよすかに聞人もなし

以外こゝろにまかせ候物哉。これなと大方おほへす候。

苗代

氷とけし山田の雫せきかけて苗代水にさゝ波そたつ

菫

すみれつむ春の野原のゆかりあれはうす紫に袖やぬれなん

杜若

春風の池吹はらふ波の上におのれうつろふかきつはた哉

これ程のものとこそ知り候はさりつれ。

藤

此比は田子の藤なみ浪かけて行手にかさす袖やぬれなん

款冬

波かくる井手の山吹咲しよりおちれぬ水になく蛙かな

三月盡

吉野川かへらぬ春もけふはかり花のしからみかけてたにせけ

## 夏十五首

更衣

昨日まて馴し袂の花の香にかへまくをしき夏衣かな

此句そいつも愚意にうけ候はぬ。

卯花

月日へてうつれはかはる詠哉櫻はちりし庭の卯の花

葵

葵草かけてそ賴む神山の峰の朝日のくもりなけれは

郭公

時鳥なくや卯月のしのふ草しのひ／＼のふる里の聲

とはすかた神妙なり。

菖蒲

夏ノ池の汀のあやめ打なひき吹風ことにさゝ波そ立

さゝ波候つればふく當然。

早苗

早苗とる伏見の里にあめ過てむかひの山に雲そかゝれる

此むかひの山はいかに候事そ。これなとよみ候ぬへき人こそおほへ候はね。あなうつくしや。

照射

ともしする端山の末に立鹿の鳴ぬ頃たに露そこほるゝ

五月雨

飛鳥川淵瀬もえやはわきもこか打亂かみの五月雨のころ

盧橘

雨おもき軒の立花露散りてむかしをしたふ空の浮雲

螢

夏の夜は我すむかたの漁火のそれともわかす飛螢哉

蚊遣火

夏くれはふせやにくゆる蚊遣火の煙もしろし明ぬ此夜は

此句いつれも〳〵。

蓮

風吹けは波に露ちる蓮の葉にかす〳〵もろき不知夜の月

氷室

來るとあぐととけん事なき氷室山いつか流れし谷川の水

泉

秋やとき月や遲きとやすらへは岩ちる水に夢も結はす

六月祓

行螢秋風吹くと告れともみそきすゝしき川社かな

秋二十首

立秋

小笹ふく嵐やかはる足引の太山もさやに秋はきにけり

七夕

秋も猶天の河原に立波のよるそみしかきほしあひの空

殊勝々々。

萩

萩か花うつろふ庭の秋風に下葉もまたて露はちりつゝ

女郎花

女郎花うゑし籬の秋の色は猶しろたへの露そかはらぬ

薄

すゝきちる秋の野風のいかならんよるなく虫の聲のさひしさ

苅萱

山かけや暮ぬと思へはかるかやの下置露のまたき色なし

蘭

露のぬきあたにおるてふ蘭秋風またて誰にかさまし

荻

夕くれは籬の荻に吹風の目にみぬ秋をしる涙かな

初鴈
峯越て今そ鳴なる初鴈の初瀬の山のあききりの空
鹿
太山田に曉かけて鳴鹿の聲すむ方に月そかたふく
露
山賤のあまの衣手まとをにて嵐やうすき露そおくなる
霧
詠れは峯の朝霧たつ鴈の數さへ見えぬやまのはのいろ
槿
今朝のまの色もはかなし槿のはなにをくるゝ秋の白露
駒迎
逢坂や行旅人の梓弓今日やひくらんもち月のこま
月
秋の夜もやゝ更にけり山鳥のおろの初尾にかゝる月かけ
擣衣
里遠き擣衣の音も夜寒にて我衣とやかりもなくらん
虫
芸すきにしおきや忍ふらんふるき枕の下になくなり
菊
誰ゆへにうつろはんとか初霜のたはゝにをける白菊の花
紅葉
奥山の千入のもみちいろそこ部の時雨いかに染らん
九月盡
けふも又誰夕くれのわかれちと秋の名殘の小鹿鳴らん

## 冬十五首

初冬
紅葉はの降かくしてし我宿に道もまとはす冬は來にけり
時雨
呉竹のみとりの色はかはられと時雨ふりにし纔ともなし
霰
をしなへて時雨しまてはつれなくて霰に落るかしは木の森
これなとこそふしきに候へ。つれに人のみつけ候ものかは。
霜
たつた山木の葉もあたに散はてゝゆふつけ鳥に霜はをくなり
雪
吉野山けふ降雪やうつむらん入にし人の路たにもなし
寒蘆
難波江や住うき里の芦の葉にいとゝ霜をく冬の曙
千鳥
夕暮は浦も定めす鳴衜いかなる郎人の袖ぬらすらん
氷

山の井の結ひし水やむすふらんこほれる月の影もにこらす

勝于貫之。

水鳥

をし鴨の羽かひをこゆる白波のよるは玉藻の床も定めす

網代

網代木によとむ木のはの色みれは都のたつみ秋そ殘れる

これなとは普通にてよき歌とて候。

神樂

榊とる八十うち人の袖の上に神代をかけてのころ月かけ

鷹狩

なら柴や枯葉のうへに雪ちりて鳥立の原にかへる狩人

炭竈

餘所にても寂しとは知れ大原や煙をたつる炭竈の里

此句こそ面白くあまりなるまて覺え候へ。

爐火

烏羽玉の夢も寒けき曉は殘るともなき埋火のかけ

歲暮

今日と暮今年と暮ぬ明日よりや昨日と思ひし春のあけほの

## 戀十首

初戀

思ひ初る森の木の葉の初時雨しくるとたにも人にしらせん

此時雨たれにて候そ。

忍戀

とへかしな槇たつ山の夕時雨色こそみえねふかき心を

不逢戀

あはてふる泪のすゑやまさるらんいもせの山の中の瀧つせ

初遇戀

新枕契りをかはす草の葉にたれかならひの露や置らん

後朝戀

忘れめや面影さそふ有明の袖に別るゝ横雲のそら

逢不遇戀

月草の花の心やうつろらん昨日にもにぬそてのいろかな

初戀

物思へは田蓑の島の海士衣ぬるゝならひの波やこゆらん

思

夕されは蓮の宿の白露も思ひあれはや袖になくらん

片思

伊勢島やみるめにましるうつせ貝あはてしほるゝ袖の悲しき

恨

涙ちる袖に玉まく葛のはの秋風ふくととはゝこたへよ

## 雜二十首

曉

かたしきの泪の數にくらへはや曉しけき鴫のはねかき

松

幾世とも岩根の小松秋をへて嵐も露も色はかはらす

竹

呉竹のよわたる月の影そもる葉分の風や雲はらふらん

いつも御氣色あしき事にて候へは。よも御さたは候はし。

石床留洞嵐空拂。玉案抛林鳥獨啼

苔

むかし誰住けんあとの捨衣岩ほの中に苔そ殘れる

煙霞無跡昔誰栖。あなめてた。文時再誕歟。最殊勝々々。

鵆

芦田鶴のつはさに霜や寒からし小夜もふけゐのうらみてそ鳴

山

岩かねのこりしく山の椎柴も色こそ見えね秋風そ吹く

河

駒とめてひの隈川に休らへは都戀しき秋風そふく

野

武藏野や山の端もなき月をみてこよひは草の枕結はん

關

浦風に須磨の關戸や明ぬらん曉またて千鳥鳴なり

橋

おはたゝの宮のふる道いかならんたえにし後は夢の浮橋

海路

かさゆひの嶋立かくす夕霧にいや遠さかる棚なし小舟

旅

かけろふのおのれ茂れる草の葉もかりにや結ふあきの旅人

離別

朝霧によとの渡りを行舟のしらぬ別も悲しかりけり

田家

稲むしろ荒し余波のいほなれは月を伏見のかたしきの袖

山家

夕暮は我すむ山の秋風も誰とはなくてまつにふく聲

懷舊

秋の色を送りむかへて雲の上に馴にし月も物わすれすな

夢

烏羽玉の覺ても夢の仇なれはいやはかなゝる袖の露かな

無事

花の春秋の紅葉の情たにうき世にとまる色そまれなる

述懷

閑か成こゝろの内も久かたの空に隈なき月やしるらん

祝

天津空雲井をさして行鶴の行末遠き聲そ聞ゆる

定家卿裏書云

されはこそ只事ともおほえす候つる物を。いたしぬかれまいらせて候けり。道理にて候。すてに露顯。感涙千行。あさましきたはことを仕候ける。あさましく候。はやう破られ候へし。

あかさりし月もさこそはしのふらめふるき涙もわすられぬ世は

いまはかきくらして物もおほえす候。

家隆卿定家卿のもとへつかはす状

何事か候らん。此庚申の歌にやみふして無術候。眞實にいまは無下の事にまかり成候。多日所勞之旨難出意候。抑此歌を一巻反古の中よりもとめいたしたる事の候也。此題はいまはもろ〳〵の人手にとりてたにも見ぬ物にて候そかし。それにかく見にくからす。うつくしくたかき心詞候事は見さるやうに覺候。もし老ほれてひかめにて候かと迄。能々御覽しわけて御點申請へく候。片點諸點いますこしの事も大切也。おもふにたちて候けん。見すしてうちおきて候ける事。庚申の御案の中に。かゝるそゝろことを申候へは。さためて御ふせい候はん歟。いつにても覺はて候給へく候なり。但此歌一切に御口よりほかへ候へからす。其故はぬしおほえす候間。かた〳〵はゝかり存候也。御邊はさりともとてたゝひとり見候か。おつる涙もすこしひまやとてまいらせ候。和歌は末代にもうせす候けり。上様の事をそ不思議にみたてまつり候。此題よみならひ候ける人のめつらしくも候へは申合候也。思なから人に申候はす。御目となろかなる日とは事の外の相違候はれは。おなし御心にやかて申候。如何〳〵。

定家卿返事

庚申にあしほれてたましゐもしりそき。くひほれもいたくほけゐてし中に。ふる反古たまはり。歌よませしとて御きやうまん候也。せめてよみおほせてゝ。御ふみけしかし候歟なと。はらたちいて物とも思候はれとも。あまり歌のよまれ候はぬに。けしかる物みてなかしとも思はし。もし秀句事なともせられ候かと。ゆかしくてひらき見候に。兩三首目をとろかし候。こはいかにたれかかゝる事はしいてゝそ。猶物をそろしく候御邊かな。左衛門督兵衛督の歌よみのいてきて候かと心も得候はれは。又たちかへり候はむもうろさくて。やかてしれ事ともをゝゝゝ書付て候ほとに。をくさまにほうちやうなくめをところかし候うへに。やうありぬしおほつかなき事ともの候て。心のおろかさは思もわき候はて。こはたそ〳〵とたとり候ほとに。この雲のうへにとひあかり候。又あなおそろしさはかゝる世にて候けるかな。戒刀のやうにうとましき事こそ候はれ。もれ承候へは。しろしめさるゝ事のみかけはなれて承及候へは。御のみ候はしと存て候へは。こは夢にや候。たゝをのつから先生

の事にて。うちあてらるゝ樣に。別のことにはいかにかく秘藏して。無盡のわたくし事ともをはすかさせおはしましてけるに。かくたれか申候そ。物をそろしくあさましく候。十善の御力たより候へは。白河鳥羽院あそはされ候へかし。こは何事の世中にかと。いまは中〳〵けす歌にて候なん。心こそさりとてはとて今一度見候へは。しり候はさりつる時雨初冬なとも。はやその事となく涙こほれて。はなかみ入て候也。是さすかに見せむとおほしめし候ける。御心さしこそはかり候はれ。いかはかり御ひそう候らんとおもひしりたてまつり候。されはかたみ事にて。よも御秘藏候はしとて。くるひ事しるし付なかし返しまいらせ候。これをやりうしなひて。こと本にて御清書候へし。申ても〳〵あさましく候事かな。猶〳〵如何なる事にて候歟。御申かきりなくおほえ候。是をみて庚申も御らんしそ。いかに常の事に候。いかてかくしろしめし。御覽しもきはめたるやうに。よく候へきやうをは御心え候けるそ。故攝政殿の御歌よみをは。ノみそかことには上手風運たてまつりたるやにおほえ候き。當時のをそれ候世間をは。又故とのゝいかに哉らん。ましなひまいらせ給たると推量し候しに。是はけんこうたかはしき事も候はす。されはたゝ御戒力につき候けるな。さらは藤ノ花とや人のみるらん。定このやうに候。日のみ見しり候はぬかと。末代にはかくみしられたる。不思儀(議)ともは候そ。凡心も詞もをよはす候。いまはかく上の上候て。中下は歌も候ましきにさりけん。わたくしの太郎二郎のやうたいこそ。これにつけても思しられて。さすかによくよみし入道か子は。をろ〳〵わろなからし候に。この物とものほと見候にそ。そもいとゝ思しられ候。猶々このしれをとも。とく〳〵うちをかすやかれ候へし。あさましくすかされまいらせて候ける。但去三月より御秘藏そうたてく候へとも。御そく事に候か。せめてうちすてたる御かまへに候歟。

家隆卿中院江まいらする御文

何事か候らん。さしたる事候はぬには。申候はてのみまかり過候。所勞無術候て。いとゝ年よわくまて身もよはくなり候て。今年いまゝて院へもまいり候はて。まかりこもりてのみ候なり。さては一日御百首をまかりあつかり候しに。少々しるし申へきよし。御をかうふり候しよりをとりあかりて候。あさましく心詞もをよはす。たゝ老の涙のみこほれて候也。心なかき物ゝ四ゝ日はよるひる此卷物ひきひろけ候より外の事候はす。は如何なる御事にか候らん。此道ことに御沙汰候とも承候はす。これこそはしめにて候。見まいらせ候へ。いかにめてたく候歟も。やう〳〵こそめてたくもならせ給候事にて候に。さすかに此道よくはしり候はれとも。年來にまかり成候て。身にもつかまつり。人をも見候て。是はすこしいかゝ候へきなとみる

事も候に。すこしも思もよりも候はぬ事とも心も及候はす。かくこそ候へかりけれと。今老の心も候事ありかたく不思義に候御事に候。但昔も今も歌本躰めてたく候ことは。只此御歌にて候。ふるき詞のよきにて。風情めつらしくけたかく。文字すくなにきこえて候事。いかにも〳〵候はぬ也。御歌なとのめてたくおはしまし候よしは承候へとも。しり候はぬ事にて候へは。よく申に及候はす候。かならすそれにひかるゝ事にて候へは。いよ〳〵道理にて候。君の御事にて候へは。なとかやうに申あくるにて候はす。身によりてたゝ歌の候へきやう。心詞たゝ此御製こそはめて見まいらせ候へ。申も猶をあさく覺候。いさゝかも君の御事にて候へはとて。おもひ候はぬ事を申候はゝ。八幡住吉明神御をはりも。返々も申候もことあさくおほへ候。あなかしこ〳〵。歌はふしきの物にて候也。きとうち見候に。おもしろくあさからす候へ共。次日又〳〵見候へは。ゆゝしく見さめのし候。是をよしと思候けるこそ。ふしきに候へなとおほゆる物にて候へは。猶詞をかさりあやつりたる物の中に候けり。此御製は見まいらせ候にしたかひて。次第にふくまさり候やに覺候は。申様に只ふるき詞のよく候を。めてたくつゝけられ候て。心のめつらしく候によりて。かく見えさせをはしまし候也。〔後脱歟〕天智天皇小松御門の御歌なとこそたけも候。めてたく見えへとも。それにおほえ候はねはしり候はす。むかしもありかたき事にこそ候めれ。近世となり候て。崇德院御歌を社めてたく申候へとも。院御歌内御製なとを見まいらせ候へは。いまひとかさの事ともとこそ見まいらせ候に。此百首返々も申はかり候はぬ御事に候也。いたく年もつもり候はぬさきにまいり候て。をかみまいらせたく候事もおそれおほく候に候。この御製にいかにて人丸か歌もかたはらたへかたくきこへぬへくや候らん。かへりて後いかなる前世の御事にて候けるにかと。をそろしなから見まいらせ候に候。御所に見まいらせをはしまして。いかにおほしめし候はむと思て。かれて涙とゝまらす候。このよしをもらしひろうせしめ給候へと。

〔右土御門院御百首一稱中院御百首舊本和歌五首闕定家家隆點共不載仍以和田英松氏藏本爲底本以舊本及同氏所藏一本加校合了〕

# 順德院御百首

判詞定家卿點八十九内兩點十五

法皇御點五十七内兩點七首墨後鳥羽院〔今用――〕

朱定　家　卿〔今用┃〕

## 春二十首

風わたる池の氷のひまをあらみあらはれ出るにほの下道

かせ渡る池の氷とけて。鳰の下道あとあらはるゝよし。首尾相かなひ。委詞調ひ候か。

けさのまは光のとかにかすむ日を雪解にかへす春の夕風
朝陽雖属晴。晩風猶吹雪のよし尤宜候。但いさゝか存旨候之由。せむと申上候。

ふりつもる松の枯葉のふかければゆきまも遅きたにのかけ草
枯葉の松深く埋れて。雪間の草をそくみゆる心。谷の草はトに埋たる景氣あらはにうかひて。感情深く候。

なにはかた月の出しほの夕なきに春の霞のかきりをそしる
月の出しほのなきわたりて。霞のかきりはるかに見ゆるこゝろ。また殊勝に候。

夢覺てまた巻あけぬ玉たれのひまもとめても匂ふ梅か香
珠簾未巻。羅幕猶垂。梅氣求隙。枕席帶匂のよし。其心妖艶其詞美麗候。

たか島やあと河柳風ふけはぬれぬしつえにかゝる白浪
此第二句難忘不覺悟候。始末隔凡俗。至愚及かたく候。

淺みとり霞の衣ふく風にはつるゝ絲や玉のを柳
かすみの衣風にみたれて。柳の絲玉をつらぬくこゝろ。見所おほく候。たまのを柳のしさいは先度申上候。

夕かすみきえ行かりや雲鳥のあやをりみたるはるの衣手
かすめる鴈の趣。雲鳥のあやをれる心。ことはことにめつらしく候。

歸る鴈なみたや秋にかはるらん野邊はみとりの色そ染行
萩の上の露にかへて。みとりのゝへをそむるよし。又古來よみ殘し候ける風情興味無極候。

秋風にまたこそとはめつの國の生田の森のはるのあけほの
生田の森の秋の歌。清胤僧都か弟子おほく耳に満て候へ共。春の曙はしめて。愚眼感情を催し候。

花鳥のほかにも春のありかほにかすみてかゝる山のはの月
鶯花之樓閣。錦繍之山川にあらすとも。朧月之景氣。烟霞之幽艶。見所まさりて候歟。

雪とのみふるの山邊はうつもれて青葉そ花のしるし成ける
ゆきとのみふるの山へは埋れて。青葉そ花のしるしなる心。またためつらしく其興候歟。

ちりまかふよもの櫻をこきませてぬきもとゝめぬ瀧の白絲
よもの櫻をこきませてぬきもとゝめぬたきの白いとのおもをけ叉艶に見所おほく候歟。

むすひあへぬはるの夢路の程なきにいく度花の咲て散らん
須臾夢中開花之色。一生八旬之夢。紅葉黄落之悲。おもひよそへられて。潯陽之青衫墨深にあらたまり候。

春よりも花はいくかもなき物をしゐてもおしめうくひすの聲
かやうにやすらかにもとめ出しくさりつゝけ候はても。三代集以上の姿は候物を。誰もかたはらくるしくこのみ候雅。かゝる心の候へかし。

ちくま川春行水はすみにけり消て幾日の峯の白雪
西行法師か濤たき川。うるさく仕候よし。年來おもひ給候。はるゆく水はすみにけりきえていくかの峯の白雪。美麗のすかた其隔に候ける事を誰も不仕候。おもしろく候。

あし鴨のはかひの山の春の色にひとりましらぬ岩つゝし哉
羽かひの山青字あらはれ候はて。紅つゝしのましらぬ色に聞え申候。殊に染心肝に候。

河の瀬に秋なや殘す紅葉はのうすき色なる山吹の花
紅葉のうす色。古來歟冬によみ殘し候。不可思議候。

かけしあれはおられぬ波もおられけり汀の藤の春のかさしに
五句非新造。風情始出來候。如此事殊難有目を令喜候。

なけやなけしのふの森の喚子鳥終にとまらん春ならすとも
つゐにとまらん春ならすとも。又三月盡に讀のこし候ける。毎度驚愚眼候。

## 夏十五首

山城のときはの森は名のみして下草いそく夏は來にけり
下句又珍重候。

たれしかも松の尾山のあふひ草かつらにちかく契り初けん
此始の五文字亡父の說他門の說相違候。今度出來候。宜面白候。

夏の日の木の間もりくる庭の面に陰まてみゆる松の一入
風情又興味候。終句其深趣於愚意近年經頭之子細候之間。先度令披見候。

いまこんといはぬ計そ時鳥あり明の月のむらさめの空
景氣又如當眼路候。

五月雨のくもゐにたかき時鳥月の桂のかけしたふらし
交霖雨之暗雲。莫桂月之清輝。姿詞たかふしておよひかたく候。

五月雨はまやの軒端も朽ぬへししさこそうき田の杜のしめ繩
五月雨のまやの軒はも。もりのしめ繩も。ともにふりたる事に候へとも。おなしゝめ繩もかくひきなしてはめつらしく候。

みねの松入日すゝしき山陰のすそのゝ小田にさなへとる也
入日の山かけ。すそのゝさなへ。これもとりなされ候景氣色なまして候。

ともしゝてこよひも明ぬ玉くしけふた村山のみねの横雲
五句卅一字悉秀逸如擲玉。光明照耀殊勝候。

蚊遣火のけふりは人のしわさにてなのれくもらぬ夏の夜の月
けふりは人のしわさ。又新造珍重に候。

あかつきの八聲の鳥も徒になかぬはかりにあくるしのゝめ
なかぬはかりにあくるしのゝめ。これもあたらしく承は

め候。
ゆふ霞たなひく山のはなよりもいろの千くさに咲る撫子
はるかすみかすみていにしかりかね。讀上候時。例春歌候。增其興候。色のちくさの石竹可然と。殊勝に候。
かきりあれはふしの深雪の消る日もさゆる氷室の山の下柴
ふしの雪みな川望にきゆる心。氷室の風情。又興感をもよほし候。
村雨のくも吹すさふ夕風に一葉つゝちるたまのた柳
玉の緒柳の子細は。先度令披露候。
白雨のくもにさきたつ山風に秋になひかぬ草の葉そなき
山風雲に先たつ草のは秋になひく景趣。細眼見候。
御そきするかもの川波ゆふかけてたゝすの森にひくらしの聲
此すかた又同前に候。

## 秋二十首

時しもあれ秋なき色も年波のなかは越行末の松山
するのまつ山としなみは半越ゆく心。又ふるき物のく。あたらきし寶となり候。
さをしかのつれなき妻もあるものを待ならうらみの星合の空
まつを恨のほし合。殊勝候。
秋風や千くさなからに亂れけん花咲かはす宮城野の原
みやきのゝ原ちくさの花みたれあへるとの景氣。又美麗に候。かはす詞於愚意聊存旨候。
人ならぬいは木もさらに悲しきはみつの小島の秋の夕暮
此點三十一文字又每字難抑感淚候。玄之玄最上候。
爪木こる遠山人は歸なり里まて送れ秋のみか月
山樵之歸路。纖月之微光。面影殊艷候。
はしたかのとやのゝあさちふみ分ておのれも歸る秋の狩人
上下の句相叶。始末之詞相應候。
秋風の枝ふきしほる木の間よりかつ／＼みゆる山の端の月
すかた詞まことにうつくしくつゝき候。歌の詞時の景氣かくこそあらまほしく候へ。
追風にたなひく雲の早けれはゆくとも見えぬ秋の夜の月
たなひく雲早く過て。晴間の月しつかにすめる心。又染心肝候。
月みよと軒はの荻の音せすはさてもねぬへき秋の寢覺を
軒端の荻にもよほされて。床の月ねさめ淋しき心。上陽之空床四五百回之むかしの事まて思ひやられ候。
白露も鴈のなみたもなきなから我袖そむる荻の上風
我袖そむる荻の上風もる山の露しくれにはあらて。まちかき袖の色は荻の上吹風の音に染らるゝ心。殊珍しく艷に聞え候。
山鳥のうらみも秋やかさぬらん八重たつ霧の中のへたてに

とを山とりの尾をへたつる怨も。秋は八重たつ霧にかさなるよし。詞の餘情理りもかくこそ候へけれ。

ふし侘る籬の竹のなかき夜に猶をきあまる秋の白露

籬の竹のふしわふる長夜に。秋の露猶をきあまる心の。まことに心肝に染と申も。君は千代ませの同し事にや候らん。

山里は軒端の松を吹からに鹿の音ならぬ秋風そなき

かこつへき野原の露もむしの音も我よりよはき秋の夕暮

野原の露よりも行宮の色かはり。其の思ひよりも松の臺の風は聲怨て聞え候ことはりに。をしなへての人の袂も。心つよかるましくや候らん。

さらしなや山の嵐も聲すみて木曾のあさ衣月にうつなり

たくさめかぬる山のあらし。月の下に打はへて候らん搗衣の音。星の前のかりの翅よりも飛立ぬへくや候らん。

霧晴はあすもきて見んうつらなく岩田のをのは紅葉しぬらん

かせになひく雲の行てに時雨けり村々染る木々の紅葉は

一めみしとをちの村の櫨もみち又も時雨て秋風そふく

谷ふかきやつ尾の椿いく秋の時雨にもれて年のへぬらん

以上四首詞花加光彩。景氣銘心府。每度催感情候。

いく年の秋の別にをくれゐてよりそふ霜の消るよもなし

五句相續。每字殊勝に候。

## 冬十五首

詠人のはなすり衣ぬきかへて紅葉こき入しかたみたになし

さくら色の衣はかへうきならひに。耳なれ候へとも。紅葉こき入し紀念は。是やはしめにて候らん。

鐘の音の霜になり行あけかたや蓬か露も氷り初けん

豐嶺の鐘動霜。閑庭之露爲氷。寒夜之景氣。又以蕩意染心肝候。自鳴鐘

ふゆきても猶時あれや庭の菊こといろそむる四方の嵐に

隨紅　之聲。變紫菊之色。又以美麗候。

御室山秋の時雨に染かへて霜かれのこる木々の下くさ

しくれの木の葉色おとろへて。霜のした草かへりてあらはれたるも。冬山の氣色おもひやられ候。

ふく風やいく度みちによはるらんみな霜枯の武藏野の原

皆しもかれの武藏野の原の。風の聲さへよはれる。盛衰あはれにきこえ候。

淸見潟雲もまかはぬ波の上に月のくまなるむら千鳥哉

きよみかた雲もまよはすさえ渡りて。千鳥の月にかける翅はかりくまとなれる。おもかけもうかひて候。

亂れ蘆の葉末の露もこほる夜は忍ふにすれる鶴の毛衣

しほれあしの影に。鶴の毛衣しのふすりの風情も。かきりしられすや候らん。

蘆の葉にかくれてすまぬ炭竈も冬あらはれて煙立なり
あしのはにかくれぬやとも冬あらはるゝ烟。ふるき跡にもたちまちさりてや候らん。

山嵐あられ吹しく篠の上にたふみまよふ今朝の狩人
あられ吹しくさゝの上。芹川の行幸の日もおもひやられて。興感深く候。

駒とめてしはしは行し八橋のくもてに白き今朝の淡雪
八はしのくもて説々おほく候へとも。古歌にも詠し来り候。近年しろきと申候詞。かしかるへき言葉には候はねとも。末生初心毎人毎歌よみ候故に。餘滿耳候て猒却のおもひ候。

吹拂ふ雪け（の）雲のたえ〳〵に待ける月の影のさやけさ
景氣又現形殊勝候。

かひかねは山のすかた埋れて雪の半にかゝるしら雲
雪の半殊に珍らしく候。山のすかたは建保のころをひ秀歌とそ聞え候き。

なかめやる里たに人の跡なえて野中の松に雪は降つゝ
野中の松に雪も猶おもかけ哀に候。

とりかさす日影のかつらくり返し千代とそうたふ神の御前に
日かけのかつら。千代の聲。句々其興候。

里わ（か）ぬ春の隣と成にけり雪間の梅の花夕風
さとわかぬ春の隣。よみ殘しける風情珍らしくうつくしく候。

## 戀十五首

茂山もふかく入てそしほるなるあさちか露のかゝらすも哉
いかにせんおくもかくれぬきゝかきのあらはに薄き人の心を
猶ふかきおくとはきけとあふ事の忍ふにかきる戀の路哉
ひるは来るとを山鳥の契りたになかき思ひに亂れてそぬる
四首皆妖艶美麗候。

僞のなき世なりともいかゝせん契りてとはぬ夕くれの空
此夕猶拔群最上候。

ちきらすな人たみるめのよそなから心のうらに袖ぬらせとは
みるめのよそなから心の占にぬるゝ袖。又殊勝候。

尋てもみぬめの浦にやく鹽のけふりはそれと人もたのまし
みぬめの浦の煙又同前候。毎度のことは還る無念候歟。

鳥の音の曉よりもつらかりき音せぬ人のゆふくれの空
晨鷄再鳴征馬頻嘶て。いきて別しあかつきの根よりも。道行人の跡たえて。漂とふ鴈も音せぬ雲のはたてのつれなさを色まさり候らん。

あふとみて覺る夢路のなこりたに猶おしまるゝあかつきの空
よひ〳〵に袖まきほさん人もかなとひくる月はなみたそふ也
夢路にはかよひてしほる袖にたに人の泪のぬらしやはする

きえやらぬならはしものの心みよ玉の緒計幾世へぬらん
雲井にもたか關守のまもるらん通ふ心の中のへたては
五首一々に妖艷。いつれと難申候。
月も猶みし面影はかはりつゝなきふるしてし袖の涙に
不似昭陽花哀看。夜かはる光も古きためしに候へと。なきふるしてし袖の涙。猶古今向後無比類候。
暮をたになを澄佗し有明のふるき別になりにける哉
ふるき別に成にける哉。又銘肝入骨甚深無双候。

## 雜十五首

みよし野の瀧の白あは落たきり吹とも風の峰はきこえす
たきのしらあはのひゝきに。山風の聲もけたれたるよし。山中の景氣又殊勝候。
夕付日やまのあなたに成まゝに雲のはたてそ色かはり行
夕陽入山晩雲變色之由又如眼見候。
くれすとも麓の里に宿からんよるやはこえん山のかけ道
すゝ分るしのにおりはへ旅衣ほす日もしらぬ山の下露
やとをかる夕。嶮におもむく朝。とり／＼染心肝候。
なれにけん芦屋のあまも哀なり一よにたにもぬるゝ袂を
とまやかた枕なかれぬうきねにも夢やはみゆるあらき濱風
芦屋の一よ。濱風の笘屋。毎數いつれと申かたく候。
いつ[illegible]舟追風はやく成ぬらしみほの浦はによす[illegible]涙
みほの浦半のいつて舟。追風のはやさもおよふへき物なく候。
しほ木つむあまの小船そいそくなる心とたゆむ宿の煙に
又下句珍重殊勝に候。
海松布ほす濱のまさこの白妙に日影もなひくをみの浦風
白妙の濱にみるめをほして。山藍にすれるをみの浦風。言葉の色も無雙候。
かつら木の神や心に渡すらん明てとたゆる夢のうきはし
又下句殊勝銘肝候。
秋風のうら吹かへすさよ衣みはてぬ夢はみるかひもなし
定文か葛のはゝさよ衣にてこそ色勝候へ。
かけろふは命かけたるゆふ露に玉の緒なかき蜘のいとすし
聞度に哀とはかりいひ捨てゝ幾世の人の夢をみつらん
陸士衡四十之歎逝。蜜友不半在。老桑門八旬之懷舊。古人悉凋落。心中彌難忍候。
暮るまもたのむ物とはなけれともしらぬそ人の命なりける
至愚意惘然之思始覺悟候。
いくちよのかけとか神もちきりけんふるの社の杉の下かせ
嘉禎三丁酉歳應鍾月以盲目滿老筆了　沙彌明靜
此本書云
けさのまは光のとにか

首尾相叶神妙候。但かへす詞近年誰人始天詠候之樣思給候。不審誰人詠歌。明靜壯年之時當好之。老後猒却之思候。

高島梛

其本歌定候出來。當座不覺悟候間不辨存。

夏の日の木のまもりくる

又不他子細候。松の一入明靜往年頗好之。近年一切棄生之歌。於七ヶ字此句候故見他候畢。

かきりあれはふしのみ雪

卿も不其難候。雖神妙候。每合點。無念思給之故漏之候。

むら雨の雲吹すさふ

其景氣幷眼。殊感興之思候。此すさふと申候事。古人不好詠候。西行誰すみてあはれしるらん山里の雨ふりすさふ夕くれの空。此歌世以賞翫之後多出來候。尙貫之等所詠候之由思給候。

玉緒柳

西行法師のさかひに立ると詠候。此歌宜候か。入千載集哉之由申候時。稱岡事體雖可然。此七之字始詠候歟。押事賦之由申候。又事體頗非普通。尋常詞名幷詞。一座之歌。不當其多少。不可詠之由申候き。

秋風やちくさなから

かはすの詞。枝かはすなとゝ申候は不立耳候。俊頼朝臣。思くまなくても年のへぬる哉物いひかはせ秋の夜の月。此詠頗非尋常被聞成時候。

山里は軒端の松を

首尾神妙其難雖不作。凡一首之心姿。卿大納言藤原朝臣其。歌之姿候。世稱歌讀之大納言候。

駒とめてしはしはゆかし

尤其興候。元久之比以後。世間之歌仙。不論初學舊老。詠歌一同。白き靑き。吹や嵐。ふく嵐哉。此故猒不詠候。

甲斐かねは山のすかたに埋れて

依殊勝に候合點候。建保四年百首。家隆の山の姿にかゝる白雲。自讃無極之由時人稱申。候間雅經卿依召參御前。淸範讀上其歌候之時。猶此山者怖畏候之由令奏聞候畢。其後弟子共又多詠山姿候。

あふとみてさむる夢ちの

三十一字之內卿雖不候。只旅非珍心候漏之候。

蜻蛉蜘蛛　又別之子細候はす候。

布留社　又神妙候。

當時之哀樂年序多隔。當世之興遊。言葉美物忘耳目之氣味候之故固辭。作之者名字。一事以上絕伯牙之絃候之處。如尋陽之琵琶曲。赤續倦隨之思。耽道之志候之由。面々申披候訖。

# 續群書類從卷第三百八十七

和歌部廿二

## 伏見院御百首

春廿首

長閑なる心にやかてしられけりけふたちかはる春のしるしは
にほひつる霞のうちの朝つく日のとけき色は春そこもれる
なかめやるゆふ日の山のうす霞かすみにすける松のむら立
夕つく日のとかに霞む山もとの竹のあなたに鶯の聲
もえそむる野へのわかなの雪ませにつむても寒くこほる袖哉
山のはの霞もさむくふる雪に春とはいはしさゆるあらしも
春もまたひとへの梅のしろたへに雪のしたなる色そまかへる
くれなゐの色とにさく梅の花しつやのゝきにあまりなるまて
花はまた柳の糸のあさみとりくる人あれなこのころの春
降けりなをとにはたてぬ春雨のみれは草葉の上そぬれゆく
山うすき霞の末の夕つくひかたむく峯をこゆるかりかれ
山風に霞も雲も拂はれてみかける月は春としもなし
またれつる花こそすてにちかゝらし梢の色の匂そめぬる
おほそらの霞も色にうつりけりよそまてあまる花の香りを
雲とのみよそよりみつる色もみな花にわけなる春の山すみ（ふイ）
さくら花あたに散とて恨しよ浮世のうちはかゝらてもまた
山あらしのあらくすきつる一とをり花のふゝきに空とちぬ之
はなにそめし心をやかてうつすとはいはてもふかし山吹の色
うち霞みはるものふかきあけほのゝ木たかき岸に咲ける藤波
春もはやあはれいく夜そ有明の月かけほそき横雲の空

夏十五首

夏ころもたちかへしても忘れぬはわかれし春の花そめの袖
しのひねはふけてやきくと郭公いもねぬよはを重ねてそまつ
月はいま木のまはつかに見えそめて山ほとゝきす一聲そなく

むら雨はくもりもはてぬひとそゝき晴行く空になく郭公
にしのたつふもとの雲に雨すきて露もさなからとろ早苗かな
月のもる軒はの風のひとふきにれやのおくまてにほふ立花
五月雨はしはしたえまとみるほとになを雲深しをちこちの山
つれ〱と餘るなかめのつく〱と暮しかれたる五月雨の頃
ならのはのたかき木末に風を聞ていさこにしろき月そ凉しき
かくてみんそをたに秋の花のため草の緣はよしふかくとも
月もまたくらき夜川の水の上にうふれのかゝり影そほのめく
水の上にもらてゝきえぬほたるこそ風にうこかぬ光なりけれ
あらくすくる木末の風の一かたへよこきる雨にいなつまの影
さきのとふむかひのきしに瀧落てすゝしさふかき松の下道
おほぬさや麻のゆふして打なひきみそきすゝしきかもの河風

秋廿首

秋はまたその色とたにわかなくになにそ心にうかふあはれは
天津星ゆきあふ夜半は我さへに心そらなるなかめをそする
袖のつゆもいかゝくたくる荻の葉にそよやうれへの秋風の時
つれよりも心うつろふなかめかなまたよのまゝの露の玉荻
かけよはみうつるとなしの秋の日に雁金さむしうす雲の空
さよふかみ枕の山の松風にたくふをしかのこゑもまちかし
うけてむかふ心よりこそ悲しけれわすれてみはや秋も夕部も
見渡せははろかにつゝく小山田の色こき方はかりそめにけり
秋風はこすゑをはらふ夕暮に雲もかゝらぬ山のはの月
嬉しくも月の秋しも長きよゝさてたにあかぬなかめと思へは
見ろまゝのすかたはかりか月はたゝ心のそこにすみける物を
人はたれか月よりほかのかけも見すあれていくよの秋の古里
秋ふかきありあけの月の影さむしあさち色つく初霜の庭
月はまたかけ見えそめぬ草むらの露にみたるゝ虫のこゑ〱
やゝにほふ朝日の影を峯にこめて霧にきえゆく秋の山のは
衣うつなれもさこそは寒からしあかつきふかき霜におきゐて
うつろなよ霜はをくとも菊の花つきて咲へき色しなけれは
もすのなく山のすそのゝ夕つく日色見えそむるはしの一もと
たつね入山より山のかさなれはもみちもふかき色そそひける
秋もいまつれてやいぬる夕暮のあらしにはやき雲の一むら

冬十五首

かきくらしのきはの空はしくるれは（とイ）あらしの末に雲そ晴行く
山風にふるや木葉のひとくもりみすは時雨にきゝまかへまし
わけてゆくあともすくなき道のへのをさゝか上にこほる朝霜
かれはつる色こそかはれ猶秋のおもかけのこる尾花かるかや
山川や秋の名殘を猶とめてこほりにすけるそこのもみちは
霜か雪かはたれに見ゆる庭の上にこほれる月の影の寒けさ
浦風に雪ふきませてなにはかたあれたる波に千鳥なくなり
さえわふる覺のとこのふかきよにきくも淋しきをしの一聲

竹のはにあらしもさやくゆふくれの雲のゆくてに霰ちるなり
夜すからの嵐のまゝの跡なれやむら〳〵薄き今朝の初雪
降つもる雪のこのまの朝つくひ花にかほりし春のおもかけ
ふりはてゝ雲はむら〳〵こほるよの月にみかける雪の遠山
みかりする交野の原のおち草はかくろゝほとにつもる白雪
炭竈のけふりは下になひきつゝ雪ふきかくろなのゝ山かせ
くれてゆく年は我身にそふ物をおもへははての哀れなる哉

## 戀廿首

吹風のつてにもいかてしらせましかゝる思のありとはかりも
さてもそのはれまやいつそあま雲のみたれたちぬる戀も恨も
人しれぬこゝろひとつのおもひより胸に煙のたえぬまもなし
もらすなよなみたの露はしけくとも人をしのたの森のとのは
こえてこそなをまとはるれ逢坂の關のあなたを何なけきけん
今よりのとたえよましてうちはしの長き契もたのむとや思ふ
あま人の玉もかりほす袖の浦にわれたちぬれぬ浪のよる〳〵
きぬ〳〵になきぬらしつる衣手に露わけそふる路のさゝはら
祈りこししるしや何そ日にそへてつらさのみこそみわの神杉
にほとりのしたの通路絶さらは波のうきすはうかれたつ(リイ)とも
獨のみふすゐのかるもかきつくしおもふ思にあけかたき床
たのめれは待ともなしの夕暮にすかくやいかにさゝかにの糸
むかはましあはれならまし増鏡見なれし人の影のとまらは
たのめつるくれなまつよの床の上にぬれて殘れるつけのな枕
まちたえてはらはぬとこのすか莚なみたの下によじ朽もせよ
なかれ出る涙にそまる紅ゐのやしほのころもあさしとはみし
下紐のとけてもとけぬ心こそありしより猶結ほをれけれ
忘れしのちきりも今や(いさやイ)しらま弓わか引方にたのむはかりか
わか方はおもはぬ浪にとまりする芦間の小舟さそさはくらん
ゆふくれはさてもと思ふあはれよりなみたにゝほふ入相の鐘

## 雜十首

山もとの鳥の初音もほの〳〵とまた雲ふかきあかつきの空
かゝけてもほのほみしかき灯のまとにしたゝぬ雨のよすから
波しろきうらはの松のはこしよりかくれあらはれ見ゆる釣舟
うきふしもよしや世中いくほとゝなくさめて見る庭の呉竹
とりかへるふもとの林日はくれてのきはの山にやとる白雲
秋はつるたつらの庵はかたはよりひた引すてゝもる人もなし
大かたもいつくかゝりの宿ならぬ旅とてなにかさのみ悲しき
入かゝる日影は山のはつかにて里のつゝきに烟たつみゆ
猶すへてくるしいとはしいくほとの命まつまのまとは思へと
君か代は千年の松のいくたひをうゑてもつきしもゝしきの庭
(玉葉)そのまゝにそはまし見ましいたつらにおしや哀やよその年月
契りけりまちけりあはれそのときのことのはのみか水莖の跡

やゝ寒く風のけしきも吹なりてすさましき夜半の月の色哉

〔右伏見院御百首以圖書寮本校合〕

# 後小松院御百首

## 春二十首

立春

たちかへる神代の春やしろからしたかまか原に霞たなひく

山霞

ふしのねの雲井にまかふ煙よりしたにかすみて春やみゆらん

浦霞

春やさてみるめも波にまかふらん霞なかつく伊勢のあま人

若菜

春淺みわかなはまたき野邊に出て雪みんためと人や思はん

梅二首

袖になをあまらぬほとは梅か香の又むせひくる春の夕風

うつしてはまつわきかれぬ梅か香もしみふかき夜の袖の月影

河柳

青柳の枝こすなみの谷川やすゑはかけひの軒の糸水

歸鴈

たかためのつらき別そ空なきの聲してかへる春の鴈金

春月

はれぬへきうらみはいつの春ならんとしも月の又かすみぬる

春雨

人しれすまたる花のかそいろとはやなつかしき春雨そふる

花三首

吉野山高ねの櫻さきいてゝ及はぬ雲の色になりぬる

秋の夜の月とはいはし春ことの花にめてゝも老となるもの

ちる花のうき世を人の歎かすはたか身の夢としられさらまし

春曙

花もなく月ものこらぬ比をしそをのか物なる春の明ほの

苗代

なはしろのあせもしとろに行水のすみもさためすなく蛙哉

野雉

霞たつ末野のきゝす狩人の跡をいのちと音をや鳴らん

躑躅

春雨に笠とり山の岩つゝしひかけの色にてりかへてけり

松上藤

あひおひの松に契をかけしより藤のちとせや春にそふらん

里款冬

春の色そわつかにみゆる古郷に人もすさめぬ庭の山ふき

暮春

人なみにあくかれきても本の身のうきにかへれと春や行らん

夏十五首

新樹

枝かはす木々にもわきて青によしならのひろはやまつ茂らん

卯花

夜もすからまかへし月はかけきえて雪をまとのけさの卯花

時鳥二首

我をまつならひもあらは郭公こぬ夜のうさや思ひしらせん

雲はやみふりくる雨の足引の山ほとゝきすわたる一聲

菖蒲

ねをかけぬたか袖ゆへに殘きてぬまのあやめの露こほるらん

五月雨

ふりて世にすむかひもなし五月雨の雲のそこなる在明の月

里樗

ほとゝきすたゝは過しと見えてけりあふち木くらき里の遠方

庭橘

夢さめてむかしも遠き手まくらにわすれかたみの軒の立花

夏月

それならぬ草木にすむもいかならんいさゝをさゝの短夜の月

夏草

夏草のふかきこゝろの色なから跡の道にまよふはかなさ〔マヽ〕

照射

つま戀の秋にもならは思ひしれしか待あかすしのゝめの空

鵜河

うきしつみあはれにもゆる篝かな鵜舟の後の行ゑしらすも

夕立

夕立のなこりなからも朝日山日かけは峯にさしのほりつゝ

晩蟬

木の間もる日かけやうすき鳴蟬もしたえにうつる夕くれの聲

荒和秡

御秡する麻のみたれは取捨てそよやかへさの袖の秋風

秋二十首

初秋露

袖のうへ枕の下も打しほれわきえぬ秋の露の明更

七夕

たゝ一夜袖はすゆへそみなし川秋よりさきの名には流れし

荻風

吹むすふ軒はの荻の露なからきえゆく夢の跡の秋風

野外萩

をく露もふかくや秋の戌ぬらん野邊の眞萩の花かはるまで

薄

と草はさきこほれても花すゝきなひく姿にゝる物そなき

女郎花

すり衣それにはあらぬ女郎花なと山あひに咲てみゆらん

虫

おもひありと聞ふすからに秋のよのふくろはかなし松虫の聲

秋夕

やよしはし軒の一はの夕あらし袖の涙のもろさくらへん

深夜鹿

なをさりのさよのねさめの物そとや泪をもみぬさをしかの聲

江鶴

あしたつのたつぬる跡か濱川の入江の波にうつらなくらん

月三首

月出るやまとしまねもうかふなり涙もいなみの海の夕なき

をは捨や入ぬる月の跡までもなかめはあかぬ山のはのそら

身をてらすかけともあふき憂事をかこつもおなし秋のよの月

暮天鴈

折しもあれ聲も色にてわたるなりとよはた雲の衣かりかれ

朝霧

立のほる霧より上に時雨けり朝露はらふ峯の松風

擣衣

夜や寒きうつや衣を數妙の袖にかさぬる秋の里人

紅葉二首

庭の草野はらの淺茅うら枯て木末にうつる秋の色哉

龍田姫おもひの色の秋ことにしのひもあへぬ木々のもみちは

籬菊

置まよふまかきの霜もふかき夜の有明の月の白菊の花

暮秋

しほれしはその數にもなみた哉いまはの秋の袖の夕くれ

冬十五首

初冬

神無月立田の山の雲風も木の葉にまかふ色そさひしき

山時雨

しくれつゝくれてきのふの秋篠やと山の雲のうつりやすさよ

落葉

さらけ又染もつくさてそのまゝにうすきもはては敷木葉哉

枯野風

道のへの尾花もかれて旅人の袖をせはしとふあらし哉

江寒蘆

見るまゝに難波江遠く成にけり汀のあしの冬枯のころ

千鳥

松たてる磯のうら風さえぬらし由良のとなみに千鳥しはなく

池水鳥

くるゝまて池のさゝ波たつ鴨のなりる夜半は氷してけり

冬月

あたにしもうきみの袖を頼む哉草木かけなき冬の夜の月

雪三首

ふりにけりすからにさめしさよ衣うらめつらしき今朝の初雪

尾上なる松よりあまる程なれや山下里の軒のしらゆき

いかはかり河せの波も氷るらん林の雪の夕くれのそら

鷹狩

面影もたえていく世に成ぬらん野寺のかゝみうけしみゆきは

神樂

神さひてうたふゆ立の本末もよりあひの音のいつれともなく

炭竈

すみかまの煙にきはふ里みえて民のかまとのひまそしらるゝ

除夜

とにかくに身にもおほえぬ年暮てなやらふ夜にも成にける哉

戀十五首

尋縁戀

いかにせん世語ならすなしはてゝ倣へん人のあはまほしさよ

初戀

いつのまに染ける色そ初もみち秋(我イ)たに露もしらぬしほれに

忍戀

色にみえ袖にもあたに散すなよしのふの露は置あまるとも

聞戀

思餘り名も立ぬへくくるしきにきゝをとりせは嬉しからまし

見戀

かくはかり袖をかはさぬ中たにも靡く習ひはありとしらなん

祈戀

きえかへる命を神にまかせてもなみたの露のかゝる白ゆふ

不逢戀

なをさりに思ふ色とは疑はしうたてもなとかつれなかる覽

契戀

あたならす我こそちきれおくの海のいさしらなみの末の松山

待戀

此まゝにさしてゐる夜の槇の戸に明ていかなる心ちかはせん

逢戀

こよひこそぬれし袂もひたち帶の紐とけてこそめくりあひぬれ

過不逢戀

さたかなるうつゝにたにもわかさりきされは戀しき夢の契よ

通書戀

玉章のその端書のつれなさを思へはしちのまろれせよとや

惜別戀

さらにこそゆろしもやられ又とたにしらてはかなき袖の別路

題名戀
うきなのみをしあけかたのならはしに又や忍ふと夕暮の空
恨戀
うつり行松のひゝきの絶しより身を秋かせの末のまくすは

雜十五首

曉鐘
世の中の夢もしはしと殘けりあかつきとの鐘のひゝきに
名所山
との葉もふもとの塵の數とたにつもらはゆるせ玉つしま山
名所浦
田子の浦やおきつの波は遮莫ふしの煙そたゝぬ日もなき
古松
名にしおふそのかみよりや千とせ山峯なる松も生はしめけん
栽竹
くれ竹のはしに我身は成ぬともうへてや世々のかけを頼まん
幽徑苔
山里の下樋に水の道はあれとうへなる苔を人はかよはす
鶴
今はゝやわか身ふりゆく霜の鶴雲井にをよふ色そかひなき
鷺
まかひつゝ比しもわかす飛鳥のさき坂山にふれる白雪
河舟
日くるれはこもかり舟ものほるなりかへさやいそく淀の里人
旅宿
野邊の露はたかならはしと結ふらん夢もとまらぬ草の枕に
旅泊
宮こおもふ夢も波路にまよふなりやとかる月も袖にくたけて
山家
あはれなる花の盛も杉のいほにすむ人ありとみよし野の奥
海眺望
名も遠きなにはの宮の跡とては高津の海の末の白浪
述懷
身の程に身をも較ふる身なりせは愚なる身を身とや頼まん
寄神祝
あしはらの國常立のはしめにて幾代をまもる神となりけん

應永廿六年十月　日

〔右後小松院御百首以内閣本校合〕

# 後土御門院御百首

春廿首

立春

風の聲人の心もけふよりそのとけかるへき春はきにけり

山霞

春はきた霞の袖をさほ姫の高角山にふるかとそみる

竹鶯

我友と鶯たにもおもへはや竹の驚に馴て鳴らん

野若菜

心して摘こそわかめ春日野のをとろ交にみゆる若菜を

春雪

とふ人の跡もいとはし春はたゝ積れと消る春の淡ゆき

行路梅

咲佗ぬ行かふ人の折とりて古枝にゝなき道のへの梅

梅風

さえかへり吹もいとはて梅か香に匂ふ嵐を身にそしめぬる

柳露

露むすふ柳のかけの川の瀬になひく玉もゝみたれあひつゝ

春雨

霞さへよそめへたてゝふる音もしのふの山の春雨のそら

歸雁幽

歸行聲もあまたの天津かりかすは霞に見えわかれとも

春日

うし只かたわれ月の折しもあれ殘のかけのなを霞ぬる（や脱歟）

寄雲花

匂はすは珍しきなき雲とのみまかひや果ん峯の初花

霞隔花

風をこそいとひし物を霞さへつらき名にたつ山櫻かな

雨中花

春雨のあすさこへふらはいかゝせんやゝしほれ行花の夕暮

風前花

限ありてちるたにうきを春風のいかにせよとて花に吹らん

花如雪

春の日に消ぬはかりそ花さくらちるもちらぬも雪の面影

苗代

みつしほをいとひやすらん湊田のなはしろ水はかくれとも（マヽ）

岸款冬

水底にきしの山吹うつり來て砂のこかれを敷かとそみる

松藤

春をへてよる年浪も藤なみも木高き松の上にこそみれ

三月盡

曉は夏とやつけん夕まくれ春の限りの入相の鐘

夏十五首

更衣

たちかへて薄き衣に夏のくる今朝は中〳〵風そ寒（身にしむ）けさ

河卯花

岸をこすなみかとみゆる卯花のうつらふかけもみえぬ下水

初郭公

人傳に聞もならはぬ比をこそ初音とはしれ山ほとゝきす

郭公遍

誰里もおなし心に聞つらん今宵の月になくほとゝきす

盧橘

あれにけり志賀の都の昔をも花橘の香にや殘さん

簷菖蒲

わか宿の軒にかりふくあやめ草いつれの沼に根をのこすらん

早苗

種まきて今はた賤か哀てふをあまたにとるさなへかな

五月雨

けふいくか天の岩戸も雲とちて神代覺る五月雨の比

夏月

うたゝねに誰明すらんまた宵と起る□と思ふ短夜の月

夏草滋

夏木立ひとつ緑に大あらきの杜の下草しけり添つゝ

蚊遣火

隣までかやりとそ成ほともなき賤か伏屋にうつる煙は

窓螢

我心くらきにつけて窓のうちに螢あつむる人そ嬉しき

夕立

鳴神の音は高雄の山なからあたこの峯にかゝる夕立

納涼

つくはれのいつくかわきて涼し〔や脱歟〕と木本毎に舍りかへつゝ

六月祓

御祓してけふより夏の淵は瀬にかはるも涼しあすか川風

秋二十首

早秋

いつのまに秋と吹らん明るまてさしも待れし風の音つれ

七夕契

僞をしらぬ契や七夕のまをなからも嬉しかるらん

深夜萩〔荻歟〕

萩〔荻歟〕の葉にむすほゝれてや秋風のさ夜も半の夢さそふらん

水邊萩

をり分る錦とそ見る白波の花にまかはぬまのゝうら萩

薄似袖

打出す袖口なれや玉たれのこすの大野になひく尾花は

原虫

秋寒きあさちか原に鳴虫の命かけたる露もいつまて

暁鹿

なかき夜な獨ある鹿のいれかてに妻こひわひて鳴あかすなり

雲端鴈

ほのかにも聞ゆる空を詠れは姿は雲の衣かりかれ

秋夕

しくれ行袖はとはり心なき石木も露の夕暮の秋

駒迎

雲居にて今宵待みん逢坂の山路を出る望月の駒

嶺月

旅人はさやかにも見しかす〔つ歟〕はる〳〵かひかれ出る秋の夜の月

關月

夜もなを心ゆるさて起居つゝ月やみるめのせきの關守

杜月

晝と見てねくらの鷺や鶯かんゆるきの杜の月清き夜は

磯月

うきねして誰かは涙のよる毎に黒き磯部の月はみるへき

潟月

秋の夜は月の光のあかしかた浪の千里もみゆるはかりに

朝霧

なかき夜のなを殘るかとたとるまて秋霧くらき朝明の空

擣衣

さゆる夜の霜にもかれす秋草の花すり衣打しきるなり

山紅葉

秋はまたから紅のふり出てときはの山も色付にけり

瀧紅葉

岩根なる紅葉の色に染かえて錦をゝれる瀧の糸すち

暮秋

行秋の名殘を思ふ袖の露消すは後やかたみならまし

## 冬十五首

時雨過

時雨つる雲の返しの夕風に殘ると見るも寒き日のかけ

落葉深

散らせぬ秋の木かけもなをしなへて嵐に積る山の紅葉は

殘菊

見し秋に移ひかはる色なから匂ひはおなし白菊の花

寒草霜

浮草の枯葉や殘る瀧津瀬の氷らぬ上も霜とちてみゆ

湊氷

冴暮すみなとの涙は氷れともなを音高きひらのねおろしに

冬月

さへ渡る雪けの空は中〳〵に嵐にくもる冬の夜の月

枯葦

かれ果し跡はさなから夏川の玉江の蘆の庭の池水

浦千鳥

とうらの敷したふらし月殘る波の〔と脱〕となたに千鳥鳴なり

池水鳥

はなちかふ友かとみれは池水に空とふ鴛のきつゝ馴行

篠霰

ふるあられ音計してたまらぬはさゝ分る朝の袖もしほれす

夕鷹狩

いかにせん又かりゆかは歸るさの暮果ぬへき鳥の落草

里雪

海士人や蘆屋の里の雪中に我住方の道たとるらん

庭雪

積えぬ程もわかれす白妙の庭の眞砂にふれるうす雪

炭竈

身のわさをなけきこりつみ寒る日に哀翁の堪て炭やく

惜歳暮

年はゝや暮ていくたの池水に浮へるをしと思ふかひなき

## 戀二十首

初戀

おもひ入その日よりはや逢坂の心はかよふ戀路なりけり

忍戀

もゆるとも人はいかてか白雪の下に忍ふか原の若草

不逢戀

戀しなん後までもなをうき人を及はぬ枝に見てや歎かん

祈戀

解難き人の心もひたち帶かけてそ頼む神のしるへに

尋戀

我さそへその名とともにもれぬへし人の行衞を人に問とて

聞戀

吹風の音に聞つる人ゆへに心の花のちるもはかなし

見戀

我心亂れにけりなよそなからほのみちのくの忍ふもち摺

契戀

僞のある世としらはちきりをく我言の葉も人は賴まし

待戀

たのめをきてまたるゝ人もわすれ〔る脱〕は心にかくる夕なるらん

逢戀

わすれしなかりねかてらもあふみのや鏡の山の夜半の面影

後朝戀

今朝はなを名殘に戀しあはてたに幾夜むなしく過きつる比

顯戀

忍ひしをくろしと何かおもひけん顯れぬは〔れ脱歟〕猶つらき身に

僞戀

かれてより賴まぬ中の僞に今更何と人をかこたん

變戀

つゐにかくかはるつらさを歎けとやおもはぬ中も契置けん

稀戀

さくら花よそに移らふ心より年に稀なる身の契哉

久戀

黒髪はしろくなれとも戀初し心の筋のかはりやはする

被厭戀

かけて今鏡の神のねかひても心移さぬ中そかひなき

被忘戀

はかなくもわすらるゝ身にかへる哉さてもや人の思ひ出ると

絶戀

いにしへのなからの橋はほくるとも絶し契は又もかけしな

恨戀

數ならぬ身は蜑人の類ひにもほさぬは袖師の恨のみして

雜十首

寢覺鷄

庭鳥の驚かす音に寢覺して老の心をかれてしろ哉

古寺鐘

昔をもとはゝこたへよとも〔マヽ〕名に立花寺の入相の鐘

名所松

古しへもたくひはあらし盡なるみのゝお山の松のとの葉

山家

いつよりかたえぬ願ひも山水も心をすます庵むすはん

田家

冬もなをあけの細道行かよひ門田の面そ人めかれせぬ

霧中衣

旅衣たちかされても秋風の吹と吹ぬる暮そ身にしむ

旅泊夢

音高きうらはの浪のかきれにも身はならはしか夢結ふ之

思往事

夢現誰に問まし過きつる身のいにしへのさたかならぬを

述懷

神ならて治めんとやかたおかの森のあらしのさはかしき世を

祝言

鶴龜を我世の程の友として有經ん數を契りをく哉

點　右准后東山殿　右三十二首
　　左右兵衛督雅康　左二十一首

# 後奈良院御百首

曉立春

をのつから春たつ空もしらるゝやこの夜明行鳥の初聲

溪餘寒

つもるとも春はとおもふ雪もよに猶さえくらす谷の下風

檜原霞

吹わくる峯の檜原の朝霞はれてあらしや又くもるらん

杜霞

里まてとおもふもとをし見渡せはかすむいく田の森の下道

名所鶯

うくひすの聲する道に打いてゝあけくれたとる逢坂の山

若菜

うちむれて若菜摘なり都とてはやくも野邊の雪は消れと

草漸靑

むすへともみとりそひ行若草のねたくや春の霜は消らん

里梅

春風も人をそわかむとはてゆく袖にもおしきやとの梅か香

門柳

舟つなくたよりもあるか渡しもり我門近き靑柳のかけ

初花

またれつゝはやくも咲と櫻花散らすもおれやおしみやはせぬ

朝花

ひかりある花の木末の朝かすみうつろはんとも見えぬ色哉

峯花

みつゝゆくよし野は山のおくもなし峯もふもとも花に忘れて

嶋花

人すまぬおきつ嶋にも咲花のかけこそあるし舟やとめまし

殘花

いさ櫻我もといはぬ身のうさもよしやしはしと花そ殘れる

濱春月

さす鹽のみつの濱風よるよると深たる月そ浪にかすめる

湖歸鴈

鴈かへるしかのうらなみ末かけて思もとをしみこしちの空

松藤

底きよく色香にすめる池水や藤さく松のかけをしるらん

苗代

苗まくや鳥をふ聲も遠近に水せきかけてかへす荒小田

折欵冬

一枝は手折て行ん山吹の花はうつろふ色あさくとも

暮春

花ちりて春はかきりと思ひしに殘る日數のくるゝしもうし

遲櫻

夏まては心ありける色〔マヽ〕かな春はなへての花とこそみめ

岸卯花

卯花のさける岸かけ水もなしいかなる波のかけて行らん

待郭公

忍ふへき誰ゆへまてもほとゝきす待人をにつれなかるらん

海時鳥

そことなき夜の舟路のほとゝきす鳴音にあけて山も見えけり

遠時鳥

入月もおなし雲間のほとゝきす山のあなたの誰をとふらん

瞿麥

たか袖にゆるす色とも手折ましくれなゐうすき瞿麥の花

岡邊早苗

うへわたす田面の末は野をかけてをかへの里に早苗とるなり

樹陰照射

ともしたて歸るますらを木隱にしるへはかりの月はもるらん

五月雨

五月雨はかひやかしたも水こえて雲そ煙にたちかはりたる

鵜川

篝火の猶とをさかる鵜かひ舟いま一せとやさしのほるらん

簷盧橘

月も猶おなしむかしともりくるや花橘のかほる軒端に

旅夕立

此まゝにほさてやれなん旅衣日も夕立の雲のしたみち

野螢

けふりにてたつ蚊の聲も遠さかる野への螢の何ともゆらん

納涼

ふみ分て此さと人やすゝむらんしけりをくるゝ山のかけ草

六月祓

今年はやけふを半のみそき河我よはひとも思はましかは

早秋

うちなひく小田の早苗の一穗にも秋を見せたるけさの初風

七夕別

うすくなる光もかなしたなはたの別にちかきあけかたの空

萩風

そめてみん色をもまたて萩かえの下葉の露をはらふ秋風

籬萩

萩の葉に音するほとや吹さらんまかきあらさぬ庭の夕風

行路薄

行人のたちもかへらす花薄しゐては何と猶まねくらん

田上鴈

をくれけん雲路はいつく雁のなくおなし田面におつる一つら

外山鹿

あはれをもうきをもしらし小鹿鳴外山の里の秋をとはすは

原露

吹しほる袖の秋風身にしみて夕露わくるなすのしの原

夜虫

なかしとも思ひわかてやきり／＼す秋の夜をしも鳴明すらん

渡霧

舟よはふ里はむかひにとをからて波間へたつる淀の川きり

駒迎

名にしおふこよひのかけも望月の駒引こゆるあつまちの山

關月

波風のうきれなりとも清見潟關路の月はたれかみさらん

竹間月

なひきあふ竹のさ枝にもる月の影さたまらぬ秋風そ吹

浦月

心すむあかしの浦の月にこそこの山里もとはまほしけれ

古宅月

ふりはてゝしけき板間の月もみつうき住ひとや人はいふらん

浪月

雲もなき空にすめるはしつかにて波間の月や影さはくらん

擣衣

うちたゆむあしやの里のあさ衣しのにおりはへ今やほすらん

秋時雨

晴やらぬ雲は時雨をこゝろにてふりみふらすみ秋寒き空

紅葉

もみちかり時雨を袖につくすかな心に秋の色をふかめて

九月盡

しはしともいはて別るゝ秋よなと行衛をたにも知せやはせぬ

初冬

秋もこそ衰けめ冬のきてあらはにみゆる野邊の色哉

瀧紅葉

此ころはちれるもみちの紅にそめてそさらす布引の瀧

庭霜

霜むすふ岩根の小篠うちそよき音すさましき庭のやり水

柴霰

袖さむみ眞柴をひろふ山かつは玉とてしらて(り歟)散る霰哉

嶺雪

大ひえやよ河の峯をさしてこそ浦こく舟も雪はみつらめ

杉雪

人とはぬしろしなりけり山里の雪にあとなき杉のした道

杜雪

さそひくる雪は梢に積りけりもみちはちりし木枯のもり

枯葦

あま人やこれも妻木と求めけん霜のかれはのあし火たくかけ

杣寒月

中たえて月もかひなし杣川の氷の上をくたすいかたし

磯千鳥

友なひてたつや磯部のさよ千鳥波のうきれをおなし心に

冬曉

さひしさに鳥の空れもかこつまて猶明やらぬ冬の夜なかさ

河氷

こす鹽のしたにこほれる湊川水をへたてゝなみや行らん

鷹狩

鳥立する尾上のとをみ聲たてゝ駒をはやむる野邊の狩人

澤水鳥

何をそのおもふ事とて澤水にうかへる鳥のこゑかはすらん

歲暮

つもりては老となりぬる哀をもしらてやとしの暮て行らん

不逢戀

契たえはかなからしとつれなくは思ひしるまて身をや盡さん

切戀

おしとおもふ命もかろし何を身の苦しきこひと人にしらせん

遠戀

はる／＼と分こし道のわりなさも思ひしらすはうちの里人

近戀

たちなれてつらきけしきをみるもうし戀しくてこそ思暮さめ

別戀　閑居戀　忍戀　片戀

あはさらはかゝる別もなからまし戀そ報ひのたゝちなりける

負戀

我ためにこはたの里の馬もかな人のかちゝにをくるゝもうき

逢夢戀

おもひれに必かよふ夢もなし人やゆるしてあふとみつらん

後朝戀

しらす猶露の命の殘るかな思ひきえにしきぬ／＼のあと

聞戀

きくのみはあやめもわかすあやめ草れたくも人にひく心哉

久戀

あかさりしおもかけとめて夕貌の露わすれすもぬるゝ袖哉

白地戀

あふ事になさはさもこそ有明の曉いてゝ見るほともなし

恨戀

何とかくなけの情もなかるらんうらみは人のあはぬのみかは

絕戀

たちかへり又わたらんもいさや河たれせきとめて逢瀨絕けん

契戀

かはゝなといくたひ人にちきるらん身の行末は我もしらしを

祈戀

戀せしのみそきな神のうけさらは思ふすちをや獨いのらまし

僞戀

ふえの音による行鹿もいつはりのある世悲しきもの思ふらん

變戀

あらすなる人の心に草も木も霜をきてこそ色かはりぬれ

寄衣雑

うきねするたみのゝ島のあま衣ぬれすはかゝる月をみましや

寄枕雑

ともなくてひとりぬる夜の手枕はあけぬ物とや思のとめん

寄莚雑

花ならぬ心の上にかけてみはさける草木も色やなからん

寄市雑

市人のかへりすみぬるしかま川たちつるなみや猶さはくらん

寄舟雑

いかにこしよるの舟路そ浪風のなこりは今朝も猶そはけしき

寄橋雑

名はかりはなからの橋と殘る世に我身ふりぬる類ひもそなき

寄鐘雑

鐘の聲に分こし峯を見渡せは我跡とめて月はいてけり

寄木雑

秋ことに草のかつらの朽ぬるもあはれいくよの霜の松かえ

寄苔雑

くち殘る苔の埋れ木あはれまたいつを忍ふの草と生けん

寄水雑

あたにちる露ともいかていはし水結ふ手毎に千代を數へて

# 正親町院御百首

立春

きのふまて雪にみなれし山の端も霞にあけて春やたつらん

朝霞

いつくそと四方の梢もしら衣のたちかさなれるあさ霞哉

谷鶯

谷の戸を都にいつるうくひすの聲にも春の色やそふらん

殘雪

さえかへり風にや氷る山かけはつれなく殘るこその白雪

若菜

朝霜もまた消あへぬ春の野の若菜つみにと誰いそくらん

里梅

日にそへてなを（マヽ）咲こるや梅かえのにほひにふかき春の山里

簷梅
春風に軒端の梅や誘ふらんしはしはにほふうたゝれの夢
春月
所からかはるともなし春の夜はあかしのうらも霞る月かけ
春曉
たくひなき名にたつ春の曉や波間もかすむ住よしの濱
歸鴈
かりかれの歸るさいそく越路には都にまさる花や咲らん
春雨
降つゝきはれまもなくて永日になを暮やらぬ春雨の比
岸柳
さほ姫の春のすかたかかはきしにしたり柳の玉かつらして
待花
木の本に待もつれなき心哉花の下紐とけぬ日數は
初花
かつさきし櫻か枝や見るかうちになをかすまさる花の色哉
見花
行人にゆきをくれてん今日もまたみやまさくらの春の夕暮
花盛
梢まてさきも殘らぬ花の枝にふくとも風の心あらなん
落花
吉野山いつはありとも朝ほらけ花のしら雪ちりつもる比
欵冬
春深きうちの河島ゆく行〔水歟〕におもかけひたす岸の山吹
池藤
池ひろみ吹たつ風もをのつから松のしつ枝にかゝるふち波
暮春
越きつる道もかはらてかへるさも東の關も春やゆくらん
更衣
花染の春の衣をぬきかへしたもとよりけふ夏はきぬらん
卯花
雨の夜も月にやまかふみちのくのまかきの島にさける卯花
待郭公
初聲をまつちの山のほとゝきすきゝても人にかたらんなおし
聞時鳥
ほとゝきす曉のをたまきいかにせはくり返しなく聲に聞なん
郭公稀
一聲を名殘になして横雲にあかてわかるゝ山ほとゝきす
古郷橘
古里はすむ人もなし袖の香をはな立花に誰殘さまし
早苗
うらわかき早苗の末葉打なひきとる手にいそけ小田の夕暮

五月雨
さみたれに瀬たえし川も淵なれや舟よはひする水の行末
鵜川
月影に鵜舟の篝きえやらて波こき出る夕くれの空
叢螢
しけりそふ草の葉かくれ飛ほたる露にひかりのみたれてそ行
夏草
籬より咲こほれとや白露もをき所なきなてしこの花
夏月
山のはにいつるも入も程もなくはや明かたの空の月影
夕立
なる神のたゝ一とをり一里の風も涼しき夕立のあと
杜蟬
夏の日の聲のうちにや秋近きせみの羽うすき衣手の杜
夏祓
河水に七瀬よりくる六月のぬくみあまたのぬさの追風
早秋
いつれにかさためて聞ん今日よりの草木か上の秋の初風
七夕
せめてさは夜を長月にちきれかしほとなくあくる星合の空
荻風
荻の風枕にちかし音つれてなをれ覺する秋の夜半哉
萩露
白露にに きの紐をとく花のみたれて匂ふまのゝむら萩
女郎花
あたし野のあたなる露の秋の色に風のまゝなるをみなへし哉
夕虫
色かはる風もあらしのあさちふに虫の音しける秋の夕暮
夜鹿
さしのほる月もくまなき秋の野をおのかたちとゝ鹿や鳴らん
初鴈
海山や越路ほとなき空の雲いく行すきぬ初かりの聲
秋夕
それとなくすゝろに物のかなしきは色かはり行秋の夕暮
山月
深にけり山のはつかに影そひて雲をはよそに月や出ぬらん
野月
しみし猶心して吹月やとる露はこほさし野邊の秋風
河月
くもりなくてりそふ月のかつら川名に流れたる影のさやけさ
江月
長夜の有明まてもあかさりし名殘を今やみしま江の月

浦月

暮かゝる波より月や出ぬらん底もくもらぬ秋の海原

籬菊

咲あまるまかきの菊の花の上ににほ〔ひこほ衆〕ろゝ秋の白露

擣衣

きぬた（ころもイ）うつぬしけたれとも知れとも月に寢覺の友となるらん

曉霧

きりふかき淀の川瀨の明ほのや春の霞も思ひ出らん

岡紅葉

露時雨染なくかたやまさるらん夕日色こき岡の紅葉は

庭紅葉

秋はみな一木か上も殘りなくうつろひかはる軒の紅葉は

軒にて庭はきこえて候と存候

九月盡

おしみてもなにかは一あたならぬこよひはかりの秋の夕暮

初冬

花にみし千草も淋しかれて行野邊のけしきに冬は來にけり

時雨

秋にゝはかはらぬ雲の夕しくれさすかに空の冬こもりして

落葉

もみちはのみなちりはてゝ後にさへ又木のもとにいとふ山風

朝霜

いとふかくなくとはすれと朝霜のさすか日かけに消は殘らし

寒草

庭の面に殘る〔ら衆本〕さひし冬草のかれたにはてぬ影の寒けさ

千鳥

沖津風鹽みちくるやむらちとりたちさはく聲の浦つたひ行

水鳥

うきねしてつかはぬ鴛の思より上毛のしものひとりきえぬる

氷始結

山おろしはけしく吹て谷川も氷にむせふ水の白波

冬日

ふる雪の空にははれて冬の夜の月のひかりやつもりそふらん

鷹狩

かり人のとたち落草分やらて行衛もしらす野邊にくらしつ

野霰

分て行袖にたまらぬ玉あられおちても野への草はにやちろ

殘雪

都にはあさきといはん程もなし深山のおくの雪の心を

積雪

山よりもなを山たかし降かくす松のこすゑや峯の白雪

閑中雪

友なまつ雪なは雪も思ふらんふりぬる宿やとふ人もなし（きイ）

歳暮

花の春月の秋にそめくりあはんくれ行年のおしきものから

寄月戀

なかむれは猶うき事やまさるらん袖の涙にやとる月影

寄雲戀

晴間なくそなたの空もかゝるらん空にみたれて物思ふ比

寄露戀

思ひあまる袖の泪を君かあたりみつゝ草葉の露とをかなん

寄雨戀

待わひし心もしらて夕暮のまたかきくもり雨になり行

寄風戀

身にそしむこひのつまなる秋風のたよりにちりし言の葉の末

寄山戀

時雨してうつろひやせん秋の色も青葉の山も人の心も

寄關戀

いかにしてしけき人めのをのつからしのふる中に關と成らん

寄海戀

物思ふ袖の中にも海はあれとみるめかるへき舟たにもなし

寄原戀

袖の上の涙をはるあ〔さ歟〕まちはら露をきそふる夕暮の空

寄橋戀

さめてこそ猶戀わたれ逢みても末たえぬへき夢の浮橋

寄木戀

やとり木のれもみぬ物のかりそめも契とならは無名たにたて

寄草戀

いかにせん磯かくれかく藻汐草よりくる波にもれてみえなは

寄鳥戀

有明の月にうかれて初鳥のまたきになくや衣〳〵の空

寄虫戀

しろやいかにもにすむ虫にあられともわれからぬるゝ我袂哉

寄獸戀

中〳〵に待人もなき夕くれはやすくふすゐの床のひとりね

寄玉戀

つらかりしをのは毎に消やらて涙の露や玉とちるらん

寄鏡戀

うき人の心のうらはみてもうしかけもみなれぬ鏡なりとも

寄枕戀

みとせをはまちわひぬとも新枕又いまさらにいかて定めん

寄衣戀

くちまさる袖や忍ふのすり衣かきりもしらぬ露のみたれに

寄絲戀

こひ路よりまつみたれたる心かと糸にはあらぬ我身なれとも

浦松
浦とほく鹽やみつらん波間より梢すくなき松のむら〳〵

窓竹
さひしさの友とやならん寝覺する枕にさやく窓の呉竹

山家嵐
山人の薪こりつゝかへるさを嵐そをくる夕暮の空

田家
秋の田の色つく比のかり庵をしつか家に住(居家本)やなすらん

古郷
忘るなよみしにもあらぬ古里もかはらぬ友は月の影哉

海路
とまりせはいつくともなく舟人の風にまかせてなみち行らん

羇旅
たひ衣たちし都をへたてつゝ峯こえて又山そかさなる

述懐
うき世とて誰をかこたん我さへや心のまゝにあらぬ身なれは

神祇
君か代はちとせをかけて松の尾の神のめくみも猶やそふらん

祝言
なにの道もまさきのかつら末つゐにたえすつたへよ家々の風

# 續群書類從卷第三百八十八

和歌部二十三

## 後崇光院御百首

春

立春水

けふといへはきつ若水をむすへ〔手歟〕とやつらゝ吹とく春の初かせ

山霞

みとりこき松一むらを立こめてかすみ色あるおちの山本

殘雪

下りえの程こそみゆれかつきゆる雪まもあをき荻の燒原

野若菜

たれかまつ野はらのわかな摘てけんわかあとならぬ雪の村消

里梅

おのつから花の名たてにさそはれて梅津の里にきゐる鶯

梅香

色々にこゝろのうつろ花はみれと梅のにほひにしく物そなき

池柳

靑柳の影しうつらふ池水に春のみとりをあらふさゝ波

岡早蕨

岡のへやおとろの下のかきわらひおる手もさむき雪のむら消

春月

春は猶うき身ひとりのなかめゆへ袖とふ月もかすみそふらし

春雨

春の雨のあまれきめくみいくすか〔マヽ〕よ身は時しらぬ松の下草

海歸鴈

こしの海の千重の霞に飛鴈のかへる浪路はなれてまよはし

春曙

野へはみとり山はかすみて草も木も春そにほへる明ほのゝ空

栽花

うへをきてみさらむ世には花もまたひとり老木の我や忍はむ

見花

春をへてあかぬこゝろの色そふは花も年にやさきまさるらん　下句古歌有等類

翫花

木の本に千世の春とやくらさましあかれぬ色の花しちらすは

花未飽

命とやかきりならまし櫻花あかぬおもひの春をかされて

花如雪

山櫻昨日のしおりあとたへてけふかへるさは雪のかよひ路

摘菫菜

菫草春の日くらしつみつれとあかてや野へに一夜やとらん

躑躅紅

秋ならはもみちするとやいはつゝし紅にほふ春の山かけ

惜暮春

春よいかにおしといひてもくれは鳥あやにかなはぬ浮世之皃

夏

更衣

おしと思ふ春のかたみの花衣たかならはしにけふはかへけん

殘花

かすみたゝたちもとまらぬ夏山もいかてか花のさきのころ覽

卯花

卯の花にいさよふ月のむら雲やかつちるかたの木すゑ成らん

時鳥未遍

五月まつほとゝやしはし時鳥また里なれぬ忍ひのこゑ

里郭公

時鳥むかしやしのふたち花の花ちる里と過かてになく

雨中盧橘

草も木もしふきはてぬる五月雨に露もしめらす匂たち花

山五月雨

千世のかすになをやあまらん五月雨も龜の尾山の瀧のしら玉

夏月凉

雲井にはまつ秋かせや吹ぬらし夏のゝわたる月そすゝしき

照射

ともしする端山の鹿は妻こひの秋にもあはて身をやすつへき

鵜川

こむ世にもさこそこかれめ鵜飼舟哀にもゆるかゝり火の影

水鷄

月影のさすにまかする槇の戸をなにと水鷄のたゝくなるらん

常夏

花の色のわきてえならぬ常夏にあはれをかけぬ露のまもなし

夕立早過

夕立のきなふとみつのむら雲のあとよりやかて山の端の月

水邊納凉

山川の岩こす波に秋かけて夏とはよそに峯のまつかせ

晩夏螢

秋近みおもひもなをやみたれまさる螢とひかふ夏のくれかた

## 秋

早秋日

昨日にも照日の影はかはらぬにけふを秋とは風や告らん

七夕

憂身いのろなみたの露の玉章をあくれとみすや星逢の空

朝露

秋の日のうすき光やよはからし玉ゆらきえぬ野への朝露

夜萩

さひしさは秋のねざめにつきにけり萩ふくかせにあり明の月

籬萩

里あれて籬の露の玉ゆらも萩のさかりをとふ人はなし

野女郎花

秋の野におほかる花の中にしも心をかはすおみなへしかな

秋田露

もる人の袖しほるまていな莚田の面にしける秋のしら露

秋夕霧

さひしさのその色わかぬ霧の内にあくれはこりる秋の夕くれ

秋急雨

木の葉たにまた色つかぬむら雨のはや物さむき秋の空かな

初聞鴈

玉章をたれかまちみんぬつらしくいまなきわたる初鴈のこゑ

田邊鹿

くれぬより秋の山風おくりきて鳥羽田の鹿のこゑそちかつく

初秋憶月

三日月の影たにきよし行すゑのなをいかならむ初秋の空

十五夜月

わすれしな今夜そなかの秋の空さやけき月は又もみるとも

庭月靜

月影に虫のねはかりおとつれて秋かせよくるあさちふの庭

山中月

秋もたゝみやまは月そかすみける木の間の外の影しなければ

水郷月

舟くたす宇治の川浪よる〳〵は月にさほさす槇の島人

野分

しほれても草木のすゑはのこる物を野分にたへぬ萱の下折

墻葛

すみわふる宿のかきほにはふ葛もうき世の秋は恨みかほなる

水邊菊
せきとむる菊の下水なかれての千世をこゝろにまかせてそ汲
紅葉遷松
夕日さす尾上の松の下紅葉そめぬこすゑも色そうつろふ
暮秋風
行秋のかたみなるへき露たにもなを置とめぬ野への夕かせ
## 冬
初冬朝
昨日まてかくやはおとのさむかりし朝けの風に冬やきぬらん
袖上時雨
心して我袖よけよはつしくれうき身を秋の露もほさぬに
落葉混雨
秋はけにそめし木の葉をさためなく冬はさそひてふる時雨哉
篠霜
風さむき小篠かうへになく霜のかれぬ色にも冬はみえけり
野寒草
みし秋は夢かとそ思ふ霜枯の小野のあさちふ露たにもなし
冬冴月
露にこそ宿のなれにし袖のうへと霜をきかへてさゆる夜の月
網代寒
あしろ木に宇治の河波さえ〳〵ていさよふ物は〔マヽ〕
渚千鳥
思ひかね音をやなくらむさ夜千鳥ともしなきさの月に恨みて
柏霰
あらし吹ならの葉かしわかつ落て霰をうくる音のさやけさ
松雪
花もみちなさけの色はつきにしになをのこりける松の白雪
竹雪
なひきかゝる軒はの竹の下折てあつめぬ窓につもる雪かな
梠雪
しら雪のふる川のへをきてみれは杉の木たちも面かはりして
狩場風
かり衣袖さむからしはし鷹の鳥かへる山の峯のあらしに
忘歳暮
老となる身を忘れても人ことにくれゆく年をいそくはかなさ
## 戀
春戀入法樂
梅か香も月もみし世にかへられと契し人はあらぬ身にして
夏戀
かよひても身は空蟬のから衣あらぬうらみに音をそなきつる
秋戀
とひもこぬうき面かけをさそひきて人たのめなる秋の夜の月

冬戀

わけきつる心のまよひ思ひしれうちのわたりの雪もこほりも

曉戀

いまそしろわかれにけるやうき物といひしまゝなる曉の空

朝戀

待あかす今朝のおもひにくらふれはあかぬ別をなに歎けん

夕戀

秋しらぬ時しも物のかなしきは人まちわふる夕くれの空

夜戀

さりともとまつに心をなくさむる月やこぬ夜の命なるらむ

逢戀

命にもかへてあはしとおもひしはつれなき程の心なりけり

別戀

いつかたかぬれまさるらん別路にゆくもとまるもしほる袂は

近戀

色に出ていかにしらせん花かたみめならふ人にしのふ思ひを

遠戀

宮こにて思ひやるこそかなしけれ誰ゆへならぬすまの浦みと

旅戀

わすれしな野路のたひれの篠枕うき一ふしの契なれとも

片思

先の世にいかに契てあちきなくつらき人しもしゐて戀しき

幼戀

おもひみたる心の色もまたしらぬ振分髪をあく〔ヒ無〕れとそみる

老戀

はかなくもひとり心をつくも髪人のおもはむ身をはわすれて

雜

寄日雜

いは戸あけしそのかみよりや天津日の曇なき世を照しそめ劔

寄月雜

入かたに心をおくる山の端に我身ともなへ明ほのゝ月

寄雲雜

いかにせん身は中空にあま雲のはれぬおもひのゆく方もなし

寄山雜

雲のよそにみてこそやまめ位山麓をたにもこえぬうき身は

寄海雜

あさりするあまの釣なわなかき世もくろしき海を猶や渡らん

寄川雜

我君のおなしなかれもたへせすはむかしにかへれすゝか川浪

寄木雜

いかにして朽はてぬまに埋木の花さくほとのおもひ出もかな

寄草雜

かきなくもかひやなからん藻鹽草わかの浦わに跡をとめすは

寄舟雑

おきつ舟雲の浪まにこきわひぬ蓬の嶋をたれにとはまし

寄鳥雑

なかき夜にうきねさめする曉は鳥の初音をうれしとそきく

寄鐘雑

うきみ思ふ心もつきぬ我世はやふけゆく鐘におとろかされて

寄枕雑

露なから草引むすふ手枕にともなひあかす夜半の月影

寄世雑

うしとてもいかに遁れん方もなし此世はなるゝ道しあられは

寄社雑

君か世をまもる心はひとつならし四方の社の神はかわると

右後崇光院眞蹟一巻課門人山本篤盈模寫以納不忍文庫

享和四年二月十日　源弘賢

# 陽光院御百首

〔右舊本闕〕

# 宗尊親王御百首

弘長元年五月百首歌

春

あまつ空のとかにかすむ山のはの朝日のさとに春はきにけり

春もなをふるさとさむみ吉野山花まちとをに雪はふりつゝ

いさやこら若菜つみてむ近江なるをかたの原は雪もけぬらし

鶯のやとあれぬらしくたらのゝはきの古枝はいまそやくなる

いつの春とはれならひてむめの花さくより人のかくまたる覧

めくりあふ春もむかしのよはのつきかはらぬ袖の涙にそ見る

いまさらになにかうらみむうきときといひしきにける春の曙

身にしむる香にも匂はぬ柳かけたちよるとても人はとかめし

とゝまらぬ別をかれてなけくとや花よりさきに鴈のなくらむ

あしほ山花さきぬらしつくはねのそかひにみれはかゝる白雲

うへて見るわれをや花の恨むらんうき宿からに人のとはれは

あた人のこゝろや種となりにけむうつろひやすき山さくら哉

ありはてぬ春の日かすの程にたにうきをしけく花のちるらん

またの春あひみん事はいのちとてことしも花にわかれぬる哉

したふへき便たになしいつかたへゆくともみえぬ春の別れは

夏

神まつるう月にときやなりぬらむゆふしてなひく杜のした蔭

としことにかくまたむとや郭公こゑをあはれと思ひそめけむ

待わひし時こそあらめほとゝきすきくにも物の悲しかるらむ
なけきわひもの思ふ比は郭公わかためにのみなくかとそきく
さならても人やは見えしやへ葎しけれるやとの五月雨のころ
短夜のふくろにやすき空にても猶またれけるありあけの月
思ひありともゆる螢のれにたてゝなかぬは何を忍ふなるらむ

## 秋

みなとこそゆふ波すゝしいせの海のをのゝふろえの秋の初風
きくたひに物そかなしきくる秋はわか爲なれやおきのうは風
ゆかむ人こむ人かさせたかまとの野の上のこ萩花さきにけり
はかなしとなにかはいはむ世中はかくこそありけれ朝顏の花
なかきよのねさめの涙いかゝせむ露たにほさぬ秋のたもとに
淺茅原うつろひぬとやたか秋にあらぬ物ゆへ虫のなくらむ
草も木もうつろひかはる世中のことはりみせて秋風そふく
思ひしろ時にそあるらし世中にうきもつらきも秋のゆふくれ
あまを舟いりしほたかくてる月のかけのみなとに秋風そふく
淋しさはなかめなれぬる影とたにおもひなされぬ秋の夜の月
山端にさそひもはてぬつきを見てなにと心のうかれそめけむ
袖ぬらす月ともなにかわきていはむ思ひのみこそ涙なりけれ
秋の夜はもの思ふをのかきりとて月になみたをまかせつる哉
さと人は衣うつなりあし引のやまおろし吹てさむき月よに
こたかみの山の木葉もいろつきぬよこのうら風寒くふくらし

## 冬

たまもかる衣手寒しあこの海のあさけのしほに冬やきぬらむ
秋をこそかなしき時とおもひしにしくれてつらき神無月かな
そらもうき時や知らむ神無月なみたのほかのまたしくれつゝ
戀しくはみてもしのへと山風のさそひのこせる庭のもみち葉
入江には鴨そなくなるかつしかのまゝの浦風さむくふくらし
いく度かねさめしつらむ霜こほりあられふるよの床の寒さに
宮こ人またてもいかゝやま里にひとりみるへき庭のゆきかは
如何にせむまたとしさへ徒におしめとしるしなくてくれぬる

## 戀

しらすへきひまこそなけれ難波なるこやのしのひに思ふ心を
せきかぬる泪に戀のあらはれはいかにせむとか袖のぬるらむ
あらはまたあふ夜ありやとなからへて物おもはする我命哉
人しれすたかひに忍ふあふ事のたかけしきより色にいてけむ
心こそわれにもそはれいまやまた誰ともなくて夢にみゆらむ
山のはに月さへいてぬしのふれと戀しき時か秋のゆふくれ
待わひてひとりなかむる夕くれはいかに露けき袖とかはしろ
僞はうきにのみやはありもせむたのめぬ夜半も人のとへかし
哀けにかゝらぬ中もあるものをいかなる月日あひ見そめけん
さきのよにいかに契りてあちきなく我爲つらき人をこふらむ
身の程をおもひしりつゝ恨みすはたのまぬ中となりぬへき哉

今はたゝしなはやと思いのちたに心になとかゝなはさるらん
忘草たれあれはこそしけるらめのきはや人のこゝろなるらむ

雑

きさかたのあまのとまやに宿とへは夕波あれてうら風そふく
はるかなるもろこし舟の波ちにもおなし國とや月を見るらむ
山高くすまはとこそは思ひしになを身をさらぬ浮世なりけり
うくてのみ過こし方にこりもせてはかなくなにと末を待らむ
今もよはやすく捨てむ年ふとも身の思出のあらしとおもへは
うきよそとおもふ物から厭はぬはいつくにとまる心なるらむ
見すしらぬさきの世までもつらき哉なと物思ふ身と生れけむ
夢はなを昔にまたも歸りなむふたゝび見ぬはうつゝなりけり
うしといひて誰かとまらむ賤しきもよきも遁れぬ終の別れは
おさまれる君か御代にや葦原のみつほの國もいやさかゆらし

〔右宗尊親王御百首舊本闕今據柳風和歌集補之〕

# 邦高親王御百首

點中院一位通秀公

## 春二十首

立春

河かせはかすみの袖になをさむし春たつけふのこゝろもかせ山

子日

子日する野への小まつの二葉よりおひさきしるき千代の影哉

霞

さほひめのかすみの袖にたちかくす山はいく重そ春の曙

鶯

さとわかぬ春を知らせて數ならぬかきねのうちも鶯そなく

若菜

かたみにはつむほともなし春さむき雪けの澤の水のふかせり

殘雪

來る春の光とやみむきえやらて山まとさむくつもる白雪

山家歌にては猶不幽玄候歟。

梅

袖みゆるみすのまとむるおひ風ににほひあらそふ軒の梅かえ

此初の字も只玉たれのなとや御座候へき。

柳

春ことにくるとはすれとさほひめやころもにおらぬ青柳の絲

蕨

雪もなをきえせぬ松のしたわらひ折しる色にいかてもゆらむ

櫻

雪をわけ雪をしのきて山さくら花をそたとるみよしのゝ奥

春雨

つれよりもかすみしけさの名殘とやゆふへの空は春雨のふる

春駒

うらわかみもゆる草葉をかけろふのをのか時とや駒いはふ覽

歸雁

月の秋にきつゝなかすは天津雁かへるをはるに猶やうらみむ

呼子鳥

たちこむる霞もふかき山かけに道やまとへる友よふ子とり

これも下の七文字いさゝかつまりてきこえ候歟。上を下へ。ともよふことり道やまとへるは可然候歟。

苗代

山川のすゑせき入てますらおか苗代つくるころもきにけり

菫

むつましき色にはさけとすみれ草野となる庭はとふ人そなき

杜若

かきつはたさはへの水のあさからぬ色にゝ見えて咲る花かな

藤

春をへて色こそみゆれかのみゆる池邊にたてる松の藤なみ

款冬

吉野川ちりし櫻のはなのあとにあらぬ色して咲る山吹

三月盡

めくりあはむ春は千とせと契てもなくさめかねつけふの別路

## 夏十五首

更衣

うしつらしかたみは花の袖たにもいかにかふへきけふの習そ

卯花

春すきてあはれ淋しき山さとに世をうのはなも今そさくなる

葵

小松ひく子日の後や神やまにふた葉もおなしあふひとろらん

郭公

郭公なをもなくやとあまの戸のあくるをさへもしたふ比かな

菖蒲

たか軒はいかなる袖にかゝらまし引手あまたの沼のあやめは

早苗

みし春は水せき入し小山田にはやいつしかととる早苗かな

照射

いかはかりくるしき業そますらおかは山蓁山ともしする夜は

五月雨

もしほやくけふりも雲に立そひてさみたれくらしすまの浦浪

橘

軒近きたちはなかほる袖のうへに月もむかしの影やとしけり

螢

みをつくしたてる入江にとふ螢ふかき思ひのしるしとそみる

蚊遣火

くれ行は賤かふすふるかやり火のけふりあまきるをちの山本

けふりをもあまきると申候證歌御座候やらん。いさゝかおほつかなく存候。

蓮

夕立のすきゆく水のにこりにもしますやいかに池のはちす葉

氷室

氷室守夏をはしらぬ山にてもそなふる時やたかへさるらむ

泉

涼しさそわきかへりぬる秋の色も岩もる水にまたきみえつゝ

荒和祓

松かけにあまの青葉のゆふかけてみそきやたれもしかの辛崎

## 秋二十首

立秋

目に見えぬ風のすかたも（行衛も）ちりて行ひと（知る歟）はにしるく秋や立らむ

七夕

戀わたるたなはたつめの涙にやもみちの橋は色にいつらむ

萩

たかまとの野邊のふる道秋はきの花さく頃や人のわくらん

女郎花

ふく風をかことになしてをみなへし思ふ方にも靡く色かな（は歟）

薄

露はなをきこそまされ秋の野にまれく小花の袖をたよりに

苅萱

いかにして露はやとりをかるかやの野原の風にたえす亂れて

蘭

露にはやほころひぬとや藤はかま秋かせまたてにほひ行らん

荻

さひしさもはけしきほともいかならん嵐にそよく山のした荻

初雁

秋風も身にさむしとやくる雁も雲のころものうらふれてなく

鹿

夜もすから妻かふ（と歟）鹿の聲す也をのゝ草ふし〳〵わひぬとや

露

さま〳〵の千草の花にうつろひてをのれともなき露の色かな

霧

秋のいろはそれとも見えす野も山も霧にこもれる明仄のそら

槿

夕露のちきりもまたぬあさかほはけにたのまれぬはなの心か

駒迎

名もしるく㝡中の秋にもち月の駒ひきわたす逢さかのせき

月

かすむより明やすき夜もなかめきて秋を時なる月のさやけさ

擣衣

よをさむみ遠里小野は露霜にうつろふ草のころもうつ也

虫

あかつきは壁にそむくる燈火に聲もきえゆくきり／＼す哉

菊

うつろへとちらてしとまる花なれや霜のまかきに殘るしら菊

是は冬題のやうにきこえ候歟。

紅葉

しくれゆく雲間の夕日影さして（さえ歟）又てりかはるみれのもみち葉

九月盡

暮て行秋のこよひの袖の露あすは霜とやむすひかへまし

## 冬十五首

初冬

吹まよふ嶺の木葉の風のうへにありかさためす冬やきぬらむ

時雨

一とをり風にうきたつ村雲やふるもほとなき時雨なるらむ

霜

枯はてゝはなにゝむすはむ草の原いたくなをきそけさのはつ霜

結句野へのゆふ霜とや候へきと存候。

霰

石はしる瀧津あたりにふる霰くたくるなみの玉やそふらん

雪

庭の面にちるかと見れは梢にもいまをさかりの雪のはなかな

寒蘆

難波かたあしの末葉はかれふしてたてるも寒き鶴の一聲

千鳥

わかれゆく妻をやしたふさよ千鳥明かたちかき月になくこゑ（なり歟）

氷

山川のおなしなかれもゆく水の淺きせよりやこほりそむらむ

水鳥

氷とちみるたにさむき冬の池にねふるかもめそ心とけたる

網代

あしろもる河せの月はさえにけりよりくるひをの數みゆる迄

神樂

霜八たひをきそふまて（きし歟）によは更て榊葉さむくうたふ聲哉

鷹狩

けふも猶くるゝを道のかきりにて分もつくさぬ野邊の御狩（かり人歟）は

炭竈

小野山や雲ふみわけて炭やきの都にかよふ道やくるしき

埋火

冴るよはかきおこしても埋火のありとしもなき閨のうちかな

歳暮

いたつらにつとめぬ身にはくれて行歳の名殘をいかて惜まむ

## 戀十首

初戀

はつかなるわかこひ草は物思ふこゝろを種とおひやそむらむ

忍戀

もらしてもつれなかりせはとはかりに年月かけてせく涙かな

不逢戀

同し世を頼むはかりのなくさめもさていつまての心なる（ゆふへ歟）らん

初逢戀

新枕かはすひとよもなをさりの契ならすはかゝらましやは

後朝戀

けさはまた身にそふ夜半の面影やくれ待ほとのかたみ成らむ

逢不逢戀

おもはすよ又とたのめしとの葉の有し一夜にかきるへしとは

旅戀

わするなよたひねの床のかり枕かりそめふしの契なりとも

思

よそにても哀とはみよあま雲のはれやらすのみ物思ふ身を

片思

かくはかりあはれともしらぬ中にしも何ゆへ盡す心なるらん

恨戀

我中はしほくむ蜑にあらねともうらみて袖のほすひまそなき

## 雜二十首

曉

身のうさをおもひねさめの手枕に涙もよふす鐘のこゑかな

松

陰しけき濱松かえのいかならむ眞砂もなひく浦風そふく

竹

うきふしもいさかたらはむむかねゝてわか友とみる窓の呉竹

鶴

あしへにはたちもかへらて夜の鶴なとか雲ゐに聲のきこゆる

苔

木の葉して嵐やゝかて岩かれの苔のむしろのちりはらふ覽

山

時わかぬ花とや見まし泊瀬山檜原かおくにかゝる白くも

河

なかれゆくちくまの河の底きよくかす〲見ゆるさゝれ石哉

野

夕されはさひしくもあるかいなみ野や淺茅色つき小鹿なくこ

關

なかめやるあかしのうらの月影にさそな心もすまのせきもり

橋

明日川いくとし波はこえゆけとくちすやいか（せんゝのか歟）にせゝの岩はし

海路

はる〱と沖のとも舟數見えてなきたる朝の浪のうへかな

別

うき旅の別おもへは野邊の露わけぬたもとそかれてしほるゝ

旅

ふる郷をたちし日數もたひ衣かさなる山をこえそわひぬる

山家

山ふかみわれより外にすむ人もあらしにたゝく柴の戸のうち

田家

色つける鳥羽田のいな葉うちなひきかり庵さむき秋の山かせ

懷舊

さま〱に移り變れる世の中を見しはいつれと身に忍ふらむ

夢

なにかそのぬるよはかりと思ふらん現もおなし夢のまよひを

無常

空蟬のこのよの中のはかなさを思ひつゝけて音をのみそ鳴

述懷

神に今祈るれかひをすみの江のまつことにして世にもふる哉

祝

友にいま君にしちきれ万代をふるてふ龜と鶴の齢も

〔右邦高親王御百首舊本闕今從得補之〕

# 貞常親王御百首

文明元年九月九日

右勅點　後花園院
左點　慈照院義政公

## 春二十首

歲中立春

冬過てのこる日數の一とせを春のくれとややかていはまし

山霞

かすみつゝ遠さかるより面かけの都にちかき春のやまの端

春雪

をのつから殘るもこその垣根より外には消る春のあは雪

朝鶯

春寒み野へのやとりに朝ねして夜床をさらす鶯そなく

澤若菜

つみかれぬ澤邊の水の下にはふ芦のねせりのむすほゝれつゝ

餘寒

山さとはをはりなれや都たにさえかへりつる春のならひに

梅薫風
散かたの匂ひや花にかへるらんあらしにむかふまとの梅か香
行路柳
青柳のいとまつはるゝ道のへはかたよりてこそ人も過けれ
春雨
芦火たくこや春さめの雲ならん霞の空のすゝけてそたつ
水草
二葉よりをのかさま〳〵もえ出てひとつ草ともみえぬ春哉
春月
霞む夜の月もかこたし是そこの昔なからの春の面かけ
歸鴈
いつとなく心そらなるかり衣きてはとまらぬ春のかへるさ
初花
此あさけと山の櫻咲けらしうつろひそむる嶺のしら雲
見花
山さとにすむ身となれは歸るさを忘れし花の春そ戀しき
翫花
こん世にもみるめにあらぬ蚕と成て花の淵にや身を沈めてん
惜花
おしむ身のはるそ定めぬ咲花は常なる花の世こそ有けれ
落花
さそはるゝつらさになして春風の吹をかとにちるさくら哉
籬欵冬
秋の色もそれかと匂ふ山吹のまかきは霧の面かけそたつ
松上藤
松の葉をしからみかけて行春のいせきの山に咲る藤なみ
暮春
有明のかたふく山のうす霞春もそなたに殘るとそみる

## 夏十首

首夏
たちかふるけさの袂のぬれ衣は花のなき名にしほれけらしも
待郭公
おほつかな忍ふ夜比は時鳥名のらてあらぬ音をや鳴らん
聞郭公
鳴ふるす里にて聞とほとゝきすあかぬ心そかはらさりける
早苗
片そはの山田のさ苗一むらにいそく乙女のたつきなのよや
溪五月雨
岸たかき谷のふせやのたな池もさしくむ計五月雨そふる
夏草
たれ行てかりちのをのゝ薄原我みまくさにのこすしけみを
夏月

影しあれは岩井の水を結ふての雫のまゝに月もめかれす
水邊螢
月やとる朧の清水とふほたるをのか光とさたかにもなき
夕立
大江山こえ行雲のあし早みいくのを過るゆふ立の雨
六月祓
ゆふかけて祈る御祓の川やしろ神も神をやけふはなこむる

# 秋二十首

早秋
吹にけりしのたのもりの葛のはに有しにかへる秋の初風
乞巧奠
雲の上の星のしらへは名をかけし一夜のをそ更に忘れぬ
荻風
音信るたよりすくさて荻のはのいく秋風にそよきそふらん
荻露
妻こふる涙なりけり夕間暮しか鳴草の花のうは露
秋夕
老ぬらしうきに心のたえかれて涙のおつる秋の夕くれ
初雁
やつれこし旅はさこそと思へともいつしかなれや衣かりかれ
秋田
末をゝもみかたふく小田のほの上にのほるも下る秋のしら露
夜鹿
思ひあれは長夜あかす鳴しかのねられす我も明しぬる
曉虫
きり〳〵す枕の下に鳴よりて老のね覺の哀をそとふ
山月
たれつけてこゝに澄らん月よゝしともみぬ山陰の里
湖月
みちひなき鹽津のかたのはる〳〵と月なきたる（に歟）夜はのさゝ波
野月
大空の思ひなしにやすむほともほとなきまやのあつまのゝ月
渡月
いさりするあまにはあらしたそや此なるとの沖の月にこく舟
庭月
秋深き山の木葉のしくるれはふもとの庭の月そうつろふ
關霧
行人もみえぬはかりにたつか弓きの關の戸の秋の夕きり
聞擣衣
更ぬるかとをちのかれも打衣同しひゝきの霜にさえつゝ
重陽宴
仙人のもゝをうかへし醉の中にきくの盃又めくるらし

杜紅葉

もみちより外にはそめて何かせんあたら時雨のもりの下草

河紅葉

うすくこき色こそやかて飛鳥川うつる紅葉の淵せなりけれ

九月盡

なごりのみしたふ袂に置そへて露は盡せぬ秋の暮かな

## 冬十首

初冬時雨

いつしかと柴の庵の冬かまへかこひそへてももろ時雨哉

落葉

夏はふく蟬のは山にちる木葉聲の時雨そかはらさりける

寒草

夢かとも雪よりさきにとひて見よ小のゝ千種の霜枯の色

淺雪

おくも又ふかくは見えす山人の薪におへるけさの薄雪

降雪

降雪に秋の宮人尋（見イ）こしあとはむかしのをのゝ山さと

池水

朝日さすかけひのなかれ先解て氷にかゝる池のしらなみ

豐明節會

霰ちるとよのあかりの夜はさえて亂るゝ玉のをみの衣手

冬月

有明の雲間の月のうす氷くたけてかゝる村しくれかな

潟千鳥

友ちとりまた浦つたひきさかたやあまの苫屋も同し夜寒に

歳暮

いつまてか老を我身のよそとせにおほくもあまる年の暮哉

## 戀二十首

寄月戀

君こんとたのまぬものゝ悲しきはなかめて更る山端の月

寄雲戀

かつらきや嶺のうき雲跡もなしよそに立居もかゝらましかは

寄雨戀

明ぬとてつれなく出る椎柴のとかへる山は打しくれ筒

寄風戀

人しれす心の松にさはくかな音せぬ暮の風のけしきは

寄烟戀（マヽ）

いかにせんむれの外に立消て戀のけふりはしる人もなし

寄關戀

我袖は清見か波の關なからもりてかひなきうき名にそたつ

寄瀧戀

思ひかれ岩間の波のうち出て心のたきの音しらせぬる

寄原戀
及なき思ひをふしのれに鳴て袖はなみたに浮島かはら
寄橋戀
里の名もわかみの上にまさしくはかけてもとはしうちの橋守
寄湊戀
我袖のみなとによするしろへせよ外行舟のあとの追風
寄木戀
さくら花それよりあたの人こゝろ殘りなくこそ移ひにけれ
寄草戀
言の葉をかき重れつゝ濱ゆふのいくえもいはゝ哀とやみん
寄虫戀
鳴くらし夜はたもゆる夏虫も我身ひとつのためしとそなる
寄鳥戀
曉はならぬ翅の鳥なれやつらき別をしらてしもなく
寄獸戀
床もしれふすゐのかるもかくれ筒こぬよは塵のつもる恨を
寄玉戀
光ある袖の涙の玉ならはよるたにもらすひまやなからん
寄鏡戀
さきの世のむくひのかけもくもりなき戀こそつみの鏡成けれ
寄枕戀
朽やらぬ涙のとこの埋木や我人しれぬまくら成らん
寄衣戀
たまさかに君か衣手朝露に(下句闕)
寄弓戀
しらさりきかけしゆつるのそのまゝに引み引すみ給ん物とは

## 雜二十首

曉鷄
山さとの鳥の音きけは哀なるあらぬね覺の旅心地して
夜燈
身をてらす法と書との爲ならてむかふはおしき夜のともし火
嶺松
谷こしのむかひにたかき嶺つゝき外面にめくる松の村立
里竹
かきこもる便もあれやくれ竹のそのふのかけの大原のさと
磯巖
鹽のまに磯の中道あさりして岩かれしのき玉もかる身そ
島鶴
しらつるの立るすかたは浦島のこやいにしへの翁さひぬる
岡篠
かりのよに殘る計のつれなさや我友岡のさゝの一むら
江蘆

難波なる入江のあしの夏かりは今はた同し若葉さす也

浦船

もしほやくあまのしわさの釣舟やけふりの波に又こかるらん

杣山

法の師のわかたつ山（そま歟）の名も高きをひえの杣にいく世へぬらん

岸苔

たきはしる岸の岩間にむす苔はさらしさらさぬ布かとそみる

山家水

濁る世に心ひかれて山水の深きかたにはすみもならはす

山家嵐

みねわたるあらしの下にならしはの庵の松は音も聞えす

田家雨

かりほもる袖いか計しほるらんいなはそよめき村雨そふる

旅行

忘めや一夜の宿の行末に又わけ侘し篠かみねこえ

旅宿

草まくらたゝかりそめと思ひねの夢の中にも世を過す哉

旅泊

風あらきなみのよすかのいかりなは心細くもうきねする哉

海眺望

こき出て和田の沖よりなかむれは猶はてもなき末の白浪

寄社祝

あとしめて神も心やえふみ山みねの岩ほの動なき世に

寄日祝

くもりなく出てそ守る朝彦の御影は君か國の爲かも

魚山百首（吏部親王貞常御獨吟。自文明元年重陽日課云々。）

依應仁亂隱坐大原之時御百首云々。故有此號也。

仙洞御點（後花園院）三十六首

准后御點（慈照院）四十首

# 續群書類從卷第三百八十九

和歌部二十四

## 等持院殿御百首

秋日侍　太上皇仙洞同詠百首　應製和歌

征夷大將軍正二位臣源朝臣尊氏上

春二十首

雲路より春やきぬらし久堅の空こそ今朝は霞初ぬれ
子日する野への小松も君か代の數限りなき例にそ引
小鹽山ふりさけ見れは松か枝に神世の春と霞棚引
難波かた蘆火の烟そのまゝに頓てそ霞む小屋の松原
谷の戸のふる巣なからに鶯の初音まつ聞山陰の庵
かつ消る雪まはかりに萌初て積ほともなき若菜也けり
この里は風の便に匂ふかな梅咲かたやいつこなるらん
袖に待匂ひそ移るあしかきのま近き軒の梅の下風
もえ初る柳の糸のかたよりに靡くを見れは春風そ吹
春の夜の空は朧に霞めとも曇るにはにぬ月の影哉
遠さかる程こそなけれ春霞やへ山越に歸る雁かれ
傾くもかすむにしらて山鳥のおのへに長き春日影かな
さかぬまの思寢に見る花なれは夢路にさへそ猶待れける
足曳の山の櫻や咲ぬらん空にしられて匂ふ春風
よそなから咲そふ花の色見えて隔て厭はぬ峯の白雲
吹まよふ風のまに〳〵散敷てむら〳〵積る花の白雪
雪は尙跡もみえけり散積る花にそ迷ふしかの山越
おしとたにいはぬ色とて山吹の花散里の春そくれ行
咲かゝる花にさなから埋れて松こそ藤の梢なりけれ
行春の名殘をしたふ涙にや猶おほろなる有明の月

夏十首

昨日こそ春は暮しにぬきかへて花の香遠き夏衣かな

夕やみのころとしらすは月影にまかへてみまし庭の卯花
神山の杜の下草踏ならし待日かさなる郭鳥かな
夢路にはさたかにもなき時鳥今一聲な寝覚にそ待
あやめ草引てあまたに沼水の濁て暫しすむ程もなし
ふらぬまも雲のゆきゝはとたへれは月影うとき五月雨のころ
軒ちかき竹の葉分に涼きは風にもりくる窓の月影
おく山の岩かきぬまは水草ゐて螢飛かふ影も移らす
この里はふらぬも涼し風すきてとなちにはるゝ夕立の空
難波人みそきすらしも夏菊の蘆の一よに秋な隔てゝ

秋二十首

このねぬる朝氣の風のかはるより荻の葉そよき秋やきぬらん
暮ぬより待渉るらし七夕の稀に逢夜の鵲のはし
天の川涙の川となりにけり棚機つめの今朝の別に
影やとす月のためにそ秋のよは徒ならす露も置らん
なく露なかことに靡く女郎花咲くもあたなる花と見えつゝ
秋風に野なつかしみとまれとや招く夕の花薄かな
夜寒なる曉露にたかまとの野への眞萩そ下は色つく
ふけて猶夜寒やまさ・蛬寝覚の閨に聲よはるなり
秋風に浮立雲はまよへとも長閑にわたる雁の一行
夕つくよ入ぬる後の小倉山鹿の音のみそかくれさりける
霧はらふ比良の山風更る夜にさゝ波はれて出る月影
まきもくの檜原の山の夜半の月木間の外に見る影もなし
木間もる心盡しの影もなし山端遠くふくる夜の月
なのつから人はまとろむ不破の關軒の板間な月そもりける
うきことも月見る程は慰むに秋なうれへと誰かいひけん
更るまは暫しとたえて曉の寝覚よりまた擣衣かな
うつろはゝそれとやみえむ吹上の浪にまかへる白菊の花
今朝は猶色こそまされ立田山夜半の時雨の染るもみちは
ひとつ色に染なすよりも薄くこく変るもみちそ錦なりける
暮て行秋の道とや成ぬらむうら枯わたる草の原かな

冬十首

しからきの外山の雲の打時雨今日や里人冬なしるらん
日かけさす都この方は空晴て時雨に殘る峯の浮雲
散積る木の葉まて尙通ひきて庭にも風の音は絶せす
晴にける雪けの雲の跡に又かはりて月の影そこほれる
置霜な拂ひかねてや青葉なる鴨の羽かひも色かはるらん
冴る夜のせとの汐風吹なへに綿島なかけて千鳥鳴なり
庭まては積るともみすたゝひとへ松の上のみ降るしら雪
なとつるゝ松の嵐も絶果て雪に友なき山の奥かな
若鷹はみな白ふにそ成にける雪かき暮す今朝のみかりは
誰もみな老と成へき年波の行ゑもしらす何急くらん

戀二十首

自ら人も教へぬ思ひにて迷ひ初るゝ戀路なるらん
猶も又つらさのそはゝいかならむ今たにもうき心迷ひに
をさふれは中々色に出ぬへし人まにいかて涙ゆるさん
せく袖の涙をそふる月影を等閑にこそ人は見るらめ
わたつうみの深く思ふもかひなくて人をみるめのかたき中哉
うき中はあはての浦にやく鹽のからき思そ慰めもなき
憂ことや習はさるらん我思ふ心をいかて人にかへまし
連もなきひとの心に習ひてや我さへこりす猶慕ふらん
貴船川玉ちる波のくたけつゝ思ふこゝろを哀とはみよ
思ひわひねられぬまゝに夢にさへ通ひ絶ぬる人の面影
たか方のまことになしてかはるらんうき我からにさはる契は
人目こそ猶くるしけれした帶の解ても下にむすほゝれつゝ
鷄のねは鳴ともいまた夜ふかきになと憂人の急く成らん
いとゝ猶袖そしほるゝ白露のおき別れ行今朝の道芝
僞りの誠になるはなき世にてうき方にこそかはり安けれ
逢坂や越て苦しき道ならむ又立かへる元のつらさに
今更に人も迷はし蓬生のもとのこゝろに又もかよはゝ
その葉もかよはすなれは僞りと恨みしころを又しのふかな
心をはしほるゝ袖の色にしれうきは涙の外ならはこそ
かきくらす涙ならては憂人に恨るふしの言の葉もなし

雜二十首

こしかたもいま行すゑのあらましも思ひのこさぬ曉のそら
おのへより朝氣の雲や晴ぬらん顯れ初る松の村立
君を思ふ心ひとしき呉竹の代々の守りになれる賢さ
吾妻路は故郷なから武藏野の遠きに末を猶やまよはむ
わたりきて身は安くとも浮橋の危き道をいかゝ忘れん
草枕今宵は野路の假寢して明日や都にあふ坂の關
更ぬれはあふ人もなき道すから伴ひ明すよはの月影
わたの原なきたる沖の遙々と八十島遠くいつるつり舟
をのつから妻木に通ふ山人の聲のみなるゝ谷陰の庵
秋すくる時雨はかりは猶もりて苅田の庵に住人はなし
古への賢き道を學へとも心をかふる人そすくなき
よしあしと人をはいひて誰もみな我心をやしらぬ成らん
山ふかく心はすみて世の爲めにまた背きえぬ憂身成けり
何事も思はぬ中に敷島の道そ此世の望みなりける
身を祈る人よりもなほおとこ山すなほなるをそ守るとはきく
人よりもわか人なれは石清水清き流れの末守るらん
一かたに教へさためぬ理をのれとしるや御法なるらん
何事も心のなすとしりなから迷ふこそ猶愚なりけれ
あきらけく岩戸を出し朝より天てる神の國そさかゆる
君は百世寶は三の護りにて異國よりも國そ久しき

[右等持院殿御百首以內閣本校合畢]

# 冬日同詠百首和謌

征夷大將軍源尊氏

## 春二十首

立春

民の戸の煙もけさは霞むにきはふ御代の春や立らん

霞

朝日影いつる方のみあらはれて余所なる嶺そ霞はてぬる

新續古今 さゝ波や春にかへりてしかの浦や湖とをみたつ霞哉

鶯

雪消ぬ深山の春を谷の戸になきてそ告る鶯の聲

若菜

新拾遺 霞たつあしたの原の雪消て若菜摘らし春の里人

春雪

まきもくの檜原の嵐猶さえて消かてにふる春の淡雪

梅

山かつの垣ほよりまつ咲初て都はをそき宿の梅かえ

新拾遺 此比はさける咲さるをしなへて梅かゝならぬ春風もなし

柳

新後拾遺 雨晴て露の玉ぬく青柳のはなたの糸も春風そ吹

春雨

若草の露にそ知ふるとしも霞てみえぬ春雨の空

歸鴈

山こえはへたてやはてん朝ほらけ翅霞てかへるかり金

春月

雲は猶はれ間もあるをいかにして霞みはつ覽春のよの月

花

尋いる杉のしるしもみえぬまて花に成行三輪の山本

新千載 こもりえの初瀬の櫻咲しよりあらはにかゝる花の白雪

よそにのみ猶あくかれて此宿の春は中／＼馴ぬ春哉

心とはまたもろからて春風の吹度ことに花そ散ける

雲よりはふるともみえす春風のさそふにつもる花の白雪

欵冬

芳野川はやくも暮て行春に花はさかりの岸の山吹

藤

行春の立かへるかとみゆるまて花咲にけり池の藤なみ

暮春

花はみな散はてにけり今幾日日數計の春なしたはん

## 夏十五首

更衣

夏衣まつ日となれは山姫の霞の袖もぬきやかふらん

霍公

郭公まつともしらは片岡の森のしめ縄うちはへてなけ

有明の月につれなき郭公此夕暮の雨になかなん

月影に道やまよはぬ霍公我宿過て余所に鳴之

早苗

ふる雨の折をたかへぬ御代なれは年もゆたかに早苗とる也

盧橋

新千載三 袖ふれしむかしの跡はしのへ共よそにみはしの軒の橋

五月雨

日数へて浪やこす覧五月雨のふるの高橋人そ渡らぬ

をのつから雲間の日影みえなから晴るともなき五月雨の比

夏月

いて初る山のはよりや明ぬ覧まつとせし間の短夜の月

夏草

玉ほこの道ある御代はしけれ共跡をそ殘す野への夏草

鵜川

はや瀬をやのほりかぬらん鵜飼船同まゝなるかゝり火の影

螢

難波方入江の蘆はしけれ共さはうぬ影にとふほたるかな

夕立

ふりきつる山は跡よりあらはれて里に成行夕立の雲

納涼

新拾遺三 呉竹の夜をへて秋やちかゝらん葉分の風の音の涼しき

夏秡

麻の葉に浪の白ゆふかけそへて此ゆふへより通ふ秋かせ

## 秋二十首

早秋

花はまたさかぬ草葉も秋来ぬとけさ白露の結ひ初ぬる

七夕

新續古今四 七夕の涙の露に天川水かけ草やなをなひく覧

荻

新拾遺四 袖にのみをきこそまされ荻の葉の風にたまらぬ秋の白露

萩

たかまとの野への秋風吹なへに花なからちる萩のゆふ露

鴈

長夜のね覺の空を渡る也身にしむいろの衣かり金

鹿

棹鹿の妻をもまつと宮城野のもとあらの萩の露に鳴覧

秋夕

いつもきくやまの草木の秋風も身にしむ時は夕成けり

秋田

新續古五 夕日さすあきの山もと霧晴て鳥羽田の稲葉露そ亂るゝ

月

新續古今四
山端に夕ゐる雲の絶間より光あらはれいつる月かな

又新後拾遺五入
たえす吹ま木の葉分の秋かせに深山の月や夜寒成らん

新拾遺八
音はかり時雨るとそ聞月影のくもらぬ夜はの嶺の松かせ

澄のほる月のあたりは月晴ていてつる山に雲そかゝれる

うらかるゝ野への草葉の色なから殘るもさひしあり明の月

虫

夕暮は我にかきらぬ涙とや同うれへに虫も鳴くらん

霧

あさ日やま晴行嶺は明ぬれと猶霧くらき宇治の川浪

擣衣

さそひくる風には近くきこえけり里はとをちに衣うつこゑ

菊

白菊の花咲秋を分てみむ山路の露に袖はぬるとも

紅葉

新千載五
露時雨ふりいてゝ染る紅葉ゝや唐くれなゐの色にみゆ覽

小倉山松のみとりにましりてそ紅葉はいとゝ錦なりけり

九月盡

長月もけふにかきりてくれは鳥あやなく秋の別ぬる哉

## 冬十五首

時雨

高根には晴間の日影さしなから雲のはたてそ猶しくれ行

落葉

一村の雲に時雨はすきの屋に音もかはらてふる木葉哉

霜

庭は猶時雨の跡のかはかれは結ふともなく消るあさ霜

寒草

新拾遺六
霜ふかき籬の荻の枯葉かと秋のまゝなる風の音哉

氷

池水も殘る浪なく氷る之夜をへて風やさえまさる覽

冬月

深行は比叡の山風猶さえてさゝ浪なから氷る月影

千鳥

新後拾遺六
二見方月影さえて深る夜に伊勢島とをく千鳥鳴之

水鳥

そこひなき淵は氷て水鳥の早瀨にうかふ冬の山川

霰

冬枯に成ぬる後もならの葉に音を殘してふる霰哉

雪

しからきのと山はかりにふり初て里には今朝の雪もつもらす

新千載六
あらち山あさたつ雲のさゆるよりやた野をかけてふれる白雪

關の戸をさゝぬ御代にも降つもる雪にやすらふ不破の中山

鷹狩

けし鷹のとたちの原をわけ暮て今夜かたのゝ草のかり臥

炭竈

新拾遺十八 炭竈にかよふ往來の跡はかり雪にそみゆる大原の山

歳暮

新千載六 老の坂またこえぬへき歳の暮いそかぬしもそくるしかりける

## 戀二十首

寄風戀

吹來るをそなたの風と思ふさへうはの空なる便なりけり

寄雲戀

新千載十四又後拾遺十二入 しられしな人の心の浮雲は我袖はれぬ時雨なれ（り集）共

寄煙戀

下にたゝ思ひこかれてかはらやのうへにはみえぬ煙ともかな

寄杜戀

をきなからいくたの杜の幾度かとはぬつらさを恨きぬらん

寄關戀

新千載十三 こえてのち又つらく共あふ坂の關路の鳥をきく夜はもかな

寄橋戀

戀渡る道はあり共逢事のをたえの橋のゝちやうからむ

寄藻戀

みかくるゝ玉藻もあるをいかなれは我憂名のみ世に流るらん

寄篠戀

夜をかさねうきふしみえて篠の葉におく初霜といかて消なん

寄杉戀

つれなきもなひくときけはゆふかけていつか驗を三輪の神杉

寄鴨戀

池水のしたに道ある鴨とりのたくひにかよふ契ともかな

寄猪戀

新千載十二又新後拾遺入 獨ねはいかにふすゐの床なれは夢路もやすくかよはさる覽

寄蛛戀

篠かにのいとはるゝ身と知なから猶も心をかくるつれなさ

寄鏡戀

面影におもひはいとゝ増鏡なと涙にもくもらさるらむ

寄枕戀

夜もすからつもる恨をかこつにそかはす枕も泪成ける

寄筵戀

深行はまたとはれしと思より涙かたしく夜はのさむしろ

寄衣戀

新千載十一 唐衣また身に馴ぬ年をへてなみたのいろや千入成らん

寄紐戀（落字歟）

したひもうちとけぬ夜の數そひて思は猶そむすほゝれ行

寄弓戀

新續古今十五
ひくかたに人の心はつき弓の思かへさぬ中そくるしき

寄船戀

今夜さへさはるときけは湊船人の心やあし間なるらん

寄鐘戀

深行はうかりし鐘の音なからまたれし比そいまも忘れぬ

## 雜十首

曉鷄

寢覺してなみたもよほす曉は鳥の鳴れそ我に友なふ

夜燈

うは玉の夜や深ぬらんかゝくれと光そうすき窓の燈

浦松

みつ鹽の音はあしへにさはけ共風しつかなる和歌のうら松

庭竹

こゝのへにおひそふ竹の數／＼を此君のみや幾千世もへん

山家

獨すむ太山のいほの松かせや音信るしもさひしかるらん

田家

此里の庭は田のものいな葉にていま更結ふかり庵もなし

羇旅

さゝ浪やうち出の濱の旅衣たち初るよりぬるゝ袖かな

眺望

難波かた蘆まの波は暮初て日影かたふく淡路島山

述懷

新千載十七新後拾遺十七入
我かたに和歌の浦風吹しより藻くつも浪の便をそまつ

初春

新拾遺七
四方の海七のみちも我君の御代そおさまるはしめなりける

〔右等持院殿御百首一通以和田英松氏所藏古寫本校合〕

# 寶篋院殿御百首

春日同詠百首和謌

參議左近中將源義詮

## 春二十首

立春

あさ緑春をけふとやさほ姫の霞の衣たち始むらん

霞二首

ふしの根の雪には春も知られぬを煙や空に霞初らん

立こむる霞や春の色ならむ柵引からに空そのとけき

鶯

春きても猶谷風や寒からむ舊巢に殘る鶯のこゑ

若菜

消初る雪間待えて里人や我しめし野と若なつむらん

春雪

萌出る野邊の草葉の淺緑顯れ初る雪のむらきえ

梅二首

梅花梢はみえすかすめとも風にもりくる香にしられつゝ

人はこて今日の日影もくれなゐの花のみ匂ふ宿の梅かえ

柳

今朝みれは柳のまゆの淺緑みたるゝまてに春風そ吹

春雨

はる雨に軒の玉水音せすは霞むとのみや思ひはてまし

歸鴈

故里の春に心やいそくらん花みてたにも歸る鴈かれ

春月

涙をやかこち果まし春の夜の月は霞まぬ習ひなりせは

花五首

咲やらぬ花待ほとの山のはに俤みせてかゝるしら雲

幾たひか同し山路に出つらん今日や盛と花を尋ねて

空に立雲とそみゆる葛木や花もたかまの山の櫻は

わけ行は花に限りも無りけり雲を重ぬる御吉のゝ山

散積る庭も梢も吹風に雪と消行花の色かな

欵冬

玉藻苅井出の欵冬咲にけり水底清く影移るまて

藤

これも又おなし千歳の春やへむ松にかゝれる鶴のふちなみ

暮春

山のはに殘る日影を惜むかな暮るれはくるゝ春とおもへは

## 夏十五首

更衣

夏のきてかふる袂は薄けれと春は隔る蟬の羽衣

郭公三首

心をも我こそ盡せ郭公誰ため惜む初音成らん

ほとゝきすいま一聲も鳴やとて明る雲間を詠めつる哉

さのみやと思ひしかとも時鳥聞につけてそ猶待れける

早苗

ゆたかなる歳をしらせて里々に田面のさなへ取ぬ日そなき

盧橘

間ちかき花橘の匂はすはむかしにかへる夢やなからん

五月雨二首

今日みれは河波たかしみ吉野のむつたの淀の五月雨の頃

五月雨に水かさをみれはあすかゝは昨日の淵も淺瀬なりけり

夏月

山のはに惜むまてこそなかりけれ傾き果ぬ短よの月

夏草
夏草のこと繁くとも玉桙の道たかはすは人も迷はし
鵜川
川しまの陰をやくたす鵜飼舟暫しは見えぬよはの篝火
螢
よな〳〵の思ひをしれと玉笹の葉分にもえて行螢かな
夕立
夕立のふる程みえてなる神のをとはの山に雲そかゝれる
納涼
山風の吹ぬまも猶片岡の楢のひろ葉の蔭そすゝしき
夏祓
秋かけて涼く成ぬみそき河岩根を越る波の白ゆふ

## 秋二十首

早秋
今よりの涙をやかて白露の置あへぬ袖に秋そしらるゝ
七夕
いつよりか渡し初けむ天の川替らぬ中の鵲のはし
荻
夕されは軒端の荻に通ひきて身にしめと吹風の音哉
萩
花の色に光りを添てしらすけの眞野の萩原露結ふ也

雁
いつしかと鳴て消けり秋風の夜寒しらする衣雁かね
鹿
妻戀の涙やおちて棹鹿のあさ立をのゝ露と置らん
秋夕
夕暮の哀しれとや結ふらん涙を添ふる袖の上露
秋田
みるまゝに門田の面は暮はてゝ稻葉に殘る風の音かな
月五首
山たかみまた出やらぬ月なれと光さき立峯の松かせ
もりかぬる影こそみゆれまきもくの檜原に月は曇るまもなし
霜といふ葛木山の夜半の雲暫しも月にかゝらすもかな
伊勢の海や波のよる〳〵澄月の影こそ淸き渚なりけれ
明石かたなみち遙に霧晴て月にかくれぬ淡路島山
虫
色かはる淺茅か原の蛬夕露さむみれをや鳴らん
霧
朝霧も晴こそやられ難波潟蚕の藻鹽の煙なからに
擣衣
蘆の葉に音も隱れす津の國の難波の小屋は衣うつなり
菊

置ぬより霜にそまかふ咲初て籬に匂ふ白菊のはな

紅葉二首

いくたひの時雨をかまつ立田山また染やらぬ秋のもみち葉

山姫のあきの泪や時雨らん紅ふかき嶺のもみち葉

九月盡

天つ空暮るをけふの別れにて行衞もしらす歸る秋かな

## 冬十五首

時雨

この里に今日は降こて足引の山かきくもる村時雨かな

落葉

庭のおもに散もみち葉を吹立て風も暫しは梢なりけり

霜

日影さす草の末葉は消初て垣根の霜そ宵のまゝなる

寒草

吹風のをとも秋にそかはりける霜にかれふの庭の荻原

氷

おちたきつ水の流の淀むより氷をかくるせゝのしからみ

冬月

空よりも影や冴らむ池水の氷に宿るふゆの夜の月

千鳥

解て寐ぬ須磨の關守夜や寒き友呼千鳥月になく也

水鳥

池水の汀や氷るふけ行は尙遠ざかる味鴨のこゑ

霰

有馬山雪氣の空に風冴て霰玉ちるゐなのさゝ原

雪三首

かき暮しふれともやかて空晴て積りかれたる庭の白雪

心ありて問はぬを人や恨むらむ跡つけ難き宿のしら雪

降積る雪吹拂ふ汐風に顯れ初るみほのうら松

鷹狩

今日もはやかた野のみのに立鳥の行衞もみえす狩暮す哉

炭竈

炭竈の煙のすゑも打靡き雪吹おろす小野の山風

歲暮

程もなく暮行歲は惜けれとさすかに春や猶またる覽

## 戀二十首

寄風戀

たのめとも猶つれなくてよる〳〵に人もこすゑの松風そふく

寄雲戀

吹風に峯越てゆく浮雲のいかに跡なき契なるらん

寄煙戀

身に餘る思ひの煙遂にはやよそにうき名の立にける哉

寄杜戀
露はまつ色にや出ん思ふともいはて忍ふの森の下草

寄關戀
あふ坂の夕つけ鳥は心せよ又も越へき關路ならぬに

寄橋戀
人はよも心通はし宵々に我思寐の夢のうき橋

寄藻戀
荒磯の波のしたなる靡き藻のなひくに猶そ思みたるゝ

寄篠戀
思ひ出てうき節なから忍ふ哉よな〳〵分し路のさゝ原

寄杉戀
憂きなから我もつれなく存命て猶同し世にふるの神杉

寄鳥戀
つれなしとしる人もなし冬の池に住鳥鳥の下の通路

寄猪戀
我袖の露やかゝるもと亂るらん獨ふす猪の床ならねとも

寄蛛戀
さりともと頼みを懸て思ふかな待夕暮のさゝかにの糸

寄鏡戀
俤のなに殘るらん増かゝみ移れはかはる人の契に

寄枕戀
数たへぬ枕にかゝる涙かないかなる夢の名殘なるらん

寄莚戀
徒に幾よのちりの積るらん契空き床の狭むしろ

寄衣戀
をのつから見しも契の狩衣恨るかひや終になからん

寄紐戀
下紐の解てもかひはなかりけり又も結はぬ人のちきりは

寄弓戀
かはりゆく心をいかてしらま弓たか方に引契なるらん

寄船戀
斯てたゝ浪にや朽むつらさのみ津守の浦の海士のすて舟

寄鐘戀
鐘のをとにあふと見えつる夢覺てこぬ人にさへ別れぬる哉

## 雜十首

曉鷄
一かたに鳴ぬと聞は里ことに傾て數そふ鷄の聲かな

夜燈
つれ〳〵と窓打雨の音ふけて殘るも淋し閨の灯

浦松
浦風は汀の松を吹捨て靜によする奥津しら浪

庭竹

幾千世も限りはあらし百敷の玉敷庭に滋るくれ竹

山家

稀に來てみるも淋しき山里にたへてはいかて人の住らん

田家

音信る人しなけれはみたやもり稻葉の風や友と成らん

羇旅

大江山越ゆく末も旅衣いく野の露に猶しほるらん

眺望

あしやかた汐路遙に見渡せは浪こそ雲の絕まなりけれ

述懷

世の中の人の憂の有にこそ愚なる身の程もしらるれ

祝言

わか君は人を鏡とみかくなり心曇らて千代も仕へむ

〔右寶篋院殿御百首以內閣本校合畢〕

# 後普光園院殿御百首

頓阿慶運兼好合點

〔墨點右側〕頓阿

〔朱點〕慶運

〔墨點左側〕兼好

判の詞各頓阿也

春廿首

いつしかと日影も永し山鳥のおろのはつ尾の初春の空

姿詞克調候。

須磨の浦や鹽風さへて春とたに思はぬ方に立霞かな

誰里にとめて行まし匂ひくるしるへ計の梅の下風

雪消ぬ深山の里は鶯のなくを限りに春を知らん

青柳の糸の綠を染かけて今一しほと春雨そふる

思ひなき袖にはいかて霞らん時にあふみの春の夜の月

梅か丶もかすめる月にうつりきて袖こそ春の物となりけれ

歸りては又や都を忍ふらん花なき里の春の雁かね

かへるさの心つよさもしられけり月と花との春の雁かね

後京極殿

歸る雁今はの心有明に月と花との名こそをしけれ

いたつらに待日あまたの櫻花いと丶盛やほとなかゝらし

さしもこそいとふうき名の嵐山花の所となと成にけん

ありはてぬ花もあたなるならはしにうきこと繁き春風そ吹

俤を後忍へとや有明の月をのこして花のちるらん

ことに見所有躰。絕妙に候歟。

みよしのゝ瀧津河瀨に散花やをちても消ぬみなは成らん

かけろふの小野の芝生の菫草もゆる春日に今や摘らん

花に住物とやいはん山吹の陰行水にかはつなくなり

春の日の長閑き山の松か枝に千世もとかゝる北の藤波
又こんといはぬ別の春なれといけらは後と猶頼つゝ
〔イ紫藤部〕
花鳥の同し別も友なはてをのかさま〳〵歸る春かな

夏十首

たちかふるけふの袂や花染のころも浮世にならふ成らん
〔イ紫藤部〕
時鳥むなしき暮と賴しもあらぬつらさをえやは語らん
世語に鳴ねはもれぬ郭公たか爲誰を猶しのふらん
しはしほす波の間もなし海士衣たみのゝ島の五月雨の比
五月雨は日なみにつきて雨雲のとたえもたへに見えぬ色哉
人しれぬ誰通ひ路の槇の戸をよひ〳〵たゝく水鷄成らん
ともしする端山か下の青つゝら苦しき物と鹿や立らん
夏來てはいとゝ深草茂りつゝあれぬる里と成增るらん
古歌の詞あたらしく成て珍重候歟。
涼しさはいつれともなし松風の聲のうちなる山の瀧つせ
水無月の名こしの山も有てふを今日の御祓は河せにそする

秋廿首
〔イ紫藤部〕

荻の葉の音をも待たて我袖に置てしらるゝ秋の初風
みたるとはみゆる物から荻の葉の末こす風に殘るしら露
無限優美妖艶に候。
つれもなき名のみ殘りて松虫の鳴ねは頓て霜枯にけり
をのれも名のみ松虫の聲といふ歌に相似候。
宵の間にをくなる野邊の露よりも猶こそ繁き虫の聲哉
露霜に衣かさねてつまかくすやのゝ神山しかそなくなる
嵐山ふもとは霧の立こむる河瀨に鹿の聲そ聞ゆる
さる面影のみても猶社結構躰成樣に候。
涙にはくもろ習ひとしらねはや月にもかりの鳴てきぬらん
さらてたに物思ふ事の限なる夕を時とあき風そ吹
我心猶こそみかけ玉くしけはこやの山にてろ月を見て
うは玉の夜更るまゝに月影の清き河原に秋風そ吹
春日なる三笠の山の秋の月あふけは高き影そ見えける
淵瀨には替るとすれと飛鳥川かはよとさらす澄ろ月かけ
秋をへて猶そむかれぬ心哉月こそ人のうき世なりけれ
いとゝしく露けき里はあれぬれと草にやつるゝ月の影哉
草にやつるゝは新古今にとやらんと存候。
思ひ出のなきにはなさし雲の上の月は心にまかせてそ見る
凡俗難背の躰言語同斷に候。
めてゝ見る心たになき賤人の袖には月のなにやとるらん
誰に又山のあなたを契るらん行方いそく秋の夜の月
秋寒き菊の籬の露霜に花こそあらめ月そうつろふ
立田川紅葉を水のみかさとやうつるも深き色にみゆらん
かたみとやうつし置らんあかすしてわかるゝ秋の袖の白露

冬十首

水莖の岡邊の霜の置もあへすねての朝けに冬は來にけり
〔イ朱點无〕山陰は落る木の葉も松風も同し時雨の音をそへつゝ
程もなくしくるゝ雲の立別れいなはの山はまつ風そふく
みなの川流て瀬々につもるこそ嶺より落る木の葉なりけり
佐保川の清き流の友千鳥君か心によるとなくらし
さらにまた結ふもしれす月かけに氷て見ゆる庭のいけ水
池水は氷もやらて芦鴨の上毛の霜そ先結ひける
はし鷹の夕かり衣ぬれ〳〵もすそのゝ雪に立は歸らし
いつかはと待し日數のかひもなく庭につもらぬ今日の白雪
こほれても匂はぬ花とみゆる哉山風さそふ松の白雪

戀廿首

むさしのゝ草のはつかに見てしより果なきものは思ひ成けり
いかにして今は涙をおさへましくち殘たる袖のせはきに
をのつからうき名もたゝは白波の跡なき事と人に語らん
涙にはあらてもれ行浮名こそおそふる袖もかひなかりけれ
なき名ともよしやなけかし君により言をうき身の思出にして
狩人のいる野の男鹿音に立て命を限り戀もするかな
今はまた月をもめてしつらさのみ積れは曇る袖の涙に
心こそ戀にはかゝれあら鷹の手にもたまらぬ人のつらさに
涙ゆへ月こそ曇れ大空におほふ計のそてならねとも
かへしても甲斐こそなけれ夢路にも夜の衣の關や守らん
うき人の俤はかり殘してや月は涙にくもりはつらん
いかにせん人傳にやる言のはに思ふ心ののこるおほさを
つれなさは人をもいはし偽のいく夕くれにたへて待らん
又いつをまてともいはぬ別れかなこれや限りの衣々の空
なよ竹の馴しその夜の思出のうきふし〳〵にまたなりにけん
忘れしよ一夜の夢のさゝ枕人こそかりに思ひなすとも
やす〳〵と心しもありかたく候。
うき中の〔イ紫點中〕枯野の尾花そをたにもかれにし袖の名殘とや見ん
偽のつらさ計を名殘にて後忍ふへきことの葉もなし
つらさのみ絶ぬ契もおしからて心の限りうらみつるかな
恨みのみつもりの浦のうけのをの打はへつらき身の思ひかな

雜廿首

山里に聞わくれともいとはれす世のうきならぬ松風のこゑ
山陰の賤かまろやは中々に心有人のすみかなりけり
いとゝしく聲うちそへて沖津波あらき濱邊に松風そ吹
とまるへき宿はなくして暮ぬとも花野の月に猶やゆかまし
我も又ともに立出てわかるゝは旅ねの山の横雲の空
行末も思ひしられて旅衣たつ日よりこそ袖はぬれけれ
駒なへて猶いそかなん東路の野路の行末またくれぬまに
年をへて世の憂事の増る哉昔はかくと思はさりしを
今も猶かきあつめてやあひそへん家の守の世々のふる事

相坂の關の戸さゝぬ古をしるもしらぬも無忍ふらん
人も無我をおろかに思ふらん我も人をはおろかにそみる

今少しつよきやうに存候。

みかゝれぬ名のみ流れて佐保川の瀬に立ともなき身なりけり
春日野の草の惠の嬉しさをつゝむにさへそ袖はぬれける
我袖に落る涙の白玉を世のうき事の有數と見ん
流れての末の世までも佐保川のすめる心をいかて殘さん
今そしろ人をも身をも恨しは我おろかなる心なりけり
有しにもあらて浮世を渡る哉名のみ昔のまゝのつき橋
すまさんと思ふよりこそ中々に心の色はにこり初ぬれ
から衣袂ゆたかにつゝむかな我身にあまる君かめくみを

一巻さゝけ持てたひ／＼見まいらせ候。いかほとも子細を申入へきにて候を。それも中々其器なるやうにかたはらいたく候て。かつは老の後の思ひ出にもと存候て。計算なとをも仕らす。やかて此御卷物すみをつけ候ぬる恐惶入て候。御歌ことに目をおとろかし肝に銘し候程に。たゝ心のうき立候はかりにて。いとゝ是非にまとひて候。後京極殿の御歌は。地歌候はぬをかへりて無念の御事に時の人の申けるやうに。此御歌一首もなをさりならす見えさせおはしまし候ほとに。めうつりしていつれをいかにとわけかれ候を。しゐて少まき過して候。をしかみを仕たる事とも殊に憚入て候。見參に入させおはしまし候後は。やかてとりすてられ候へて。なを／＼おそれいたみ入候よし。能々心得られ給へと。あなかしこ／＼。

伊勢の海のうらをつくして尋ぬとも　かゝる光りの玉やなからん

觀應三年八月廿八日

六十八首　頓阿
七十一首　慶運
四十二首　兼好

一和歌に五義三躰といふことあり。殊外の秘事にして。一世一人の傳とて。歌道極秘灌頂とて。むかしより一人に傳へて二人に及はす。此傳に三善三惡といふ事有。三惡とは一に品くたりたる人。二には無器量の人。三に不信の人。此三惡の人にはたとひ千金をつむとも授る事なし。此傳受は和歌三神の御まへにて。傳受に弟子より師へ黃金六枚さゝくる事なり。扨又三善といふは一に上臈。二に器量。三に信心是也。幽齋貞德へ傳られし奥書に。くたんの大事をたやすく敎は。住吉玉津嶋の御罸をかふむらんとあり。五義といふは。和歌の五句を漏序題曲流といふ五字にあてゝよむおしへ也。喜撰の我庵はの歌。よく此五義をよくよみあらはしたるゆへ。百

人一首の秘本の第一とせり。其外先達の歌をよく〳〵吟すれは。皆五義そなはれり。たとへは。

ほの〳〵と。遍。大やうにいひ出して。二の句へうつるへき〻さしをあらはしたり。されは五文字は人にとりては頭なれは。よく〳〵思案して置事也。頭大きく又はちいさけれは。かけあはすしてすかたあしきかとし。されは俊成卿定家卿はとかく五文字はあとに置れしと也。後鳥羽院內裏の哥合に。鴨長明遲滯せしを。俊成卿哥はいか〻と問給へは。五文字いまた出來す。案し余りて出來ぬと也。俊成卿五文字を置てつかはれしと也。扨此五文字に君臣の分別あり。君の五文字といふは云出して四句をすへるをいふ。ほのほのと。千はやふる。あかしかた。難波潟等也。臣の五文字はたくみにいひ出して下の四句にすへよするをいふ。たとへはきくやいかに。侘ぬれは。風をいたみの類也。大事の字にて二の句へうつりよく。四句にかけ合様によむへし。これは遍の字心也。

あかしの浦の。序。ほの〳〵とあかしの浦とつ〻きたり。序は緒なりの注にていとくちのとく也。上の五文字をうけて。又下の五文字へいひつ〻くるなり。あかしの風景をいへり。

あさ霧に。題。此句にて本意をあらはす。一字二字又三字四字の題にて。その肝要の字を此句にあらはすへし、此哥朝霧ゆへあかしの景又船を思ふの詞も出たり。

島かくれゆく。曲。二の句のあかしの浦の句の心を顯したる也。曲とは一首のうへにて一ふしおかしくいひかなへたる處なり。曲は一首の魂也。

船をしそ思ふ。流。此句にて一首の心をいひなかす故に流といふ。よく〳〵心得て信すへきもの也。定家卿も題をとりてよむに。はしめの五文字に題をあらはすはあし〻。尤古人によみたるもあれ共。心得て此五義を主としてよむへし。

右基俊より俊成。定家。雅經。有家。爲家。爲氏。爲綱。それより常緣宗祇と傳れり。宗祇より逍遙院へ傳ふ。三代相續す。（逍遙院・稱名院・三光院・三代宗匠。）此内三光院殿細川玄旨に授與し給ひ。地下にては貞德に傳受す云々。

右はたの守りといへる書のうちより抄出す。

秋雨燈下書　志田昆中

明和元年七月寫之。　川島氏

〔右後普光園院殿御百首以圖書寮本校合〕

# 三條相國御百首

元應百首題

秋日同詠百首應　製和歌

大政大臣從一位臣藤原朝臣實重上

## 春二十首

早春

一とせは昨日とゝもにくれはてゝけふあら玉の春の曙

霞（入新拾遺）

春のたつしるし計はかすめとも猶雪きえぬみはの杉はら

子日

年をへてひけともつきぬ春日野のねのひの松は千代の數かも

鶯

春きてはまたるゝ物と鶯も人の爲にや初音鳴らん

若菜

（入新續古今）うつもるゝ若菜は其とみえすとも野へに出てや雪まゝたまし

餘寒

谷かけや氷もいまたとけやらて初花をそき山川の水

梅

梅かゝにさそはれきつる山里の花のあるしよ我をいとふな

柳

春雨のふりわけかみの玉かつらみたれてかゝる青柳の露

春月

たちまかふおなし霞の名もつらしおほろ月夜の春の浦浪

身こそかく世にもかすまめいかなれは春しる月の朧なるらん

歸雁

ゆく雁のたよりやまたん老か身も昔の春にかへる世ならは

花

あかす見てちりにしまゝの面影にことしは殊に花そまたるゝ

へたつるもおなし櫻の色なれはよそめいとはぬかつらきの雲

たか中の戀のあなたに立ぬらん柳櫻の春のにし木々

ちらぬまにおりはやつさし山櫻おも影はかり家つとにして

日かけにはちらぬ木末の櫻花嵐にきゆる雪とこそ見れ

ぬれもせしはらはてゆかむ櫻花袖には雪とちりかゝるとも

風さそふ磯山櫻ちりぬらし花を殘してかへるしら浪

藤

松か枝の今一しほのみとりをもさきて色ます春の藤なみ

欵冬

から國の九かされの山吹やいはぬ色にはさきはゝめけん

## 夏十五首

卯花

月は猶またるゝ程のよゐのまに光さきたつ庭のうの花

郭公

さゝかにの雲のはたての時鳥くへきよひとや空にまたまし

またるゝをならひになして時鳥あたになかしとねや惜むらん

つれなさのたくひならしと有明の月にしもなくほとゝきす哉

なをさりにきゝやなさまし時鳥心つくさぬはつねなりせは

なく聲をいかゝいとはん時鳥物おもふ事はなき身ならねと

夏夜

みしか夜の夕やみなから月影も待いてぬ程にあくる空かな

葵

祈をかむ千歳をかけて諸葛神のみあれにけふあふひとて

早苗

いつか又いな葉にきかむ秋の風けふこそ小田の早苗とるなれ

五月雨

おちたきつ水のみかさの山河もをとさやかなる五月雨の比

水鷄

あくる迄さゝて聞はや槇の戸をさてもくゐなの夜やたゝくと

鵜河

里遠きわかすむかたのうかひ舟ほしか河邊のかゝり火の影

螢

袖につゝむ螢のみかはあきらけき君のめくみも身にそ餘れる

夕立

色かへぬ葉もりの神の手向とやさかきにかゝる夕立の雨

夏祓

さはへなす神なひ川のよるの浪よるせやいつこ麻のおほぬさ

## 秋二十首

早秋

夏もはやけふに暮ぬとねぬるよのねさめよりきく秋の初風

七夕

たなはたに心をかして天河わか中ならぬ逢瀬をそまつ

まれなりと恨みねはこそ七夕は年に一夜もたえすあふらめ

露

身を秋のわか心よりをきそめてのへにしられぬ袖の夕露

夜もすからおきてそあかす小山田やねられぬいほの秋の白露

秋風

吹むすふをとさへかなしいはしろの野中の松の秋のはま（つ歟）風

虫

入新續古今

をき餘る夜のまの露もあさちふのおのか涙と虫やなくらん

鹿

から衣すそのゝをさゝ分くれてあはてや鹿のつま恨むらん

鴈

こしちより身を浮雲に音たてゝさそふ風ありと鴈やきぬらん

入新續古今

初鴈もおもふかたをやしのふらんなくねにまかふ秋のうら波

月

月影も神代をかけて増かゝみみかきいてたる天のかく山

雲はみな山風ふきてまきもくのあなしのひはら月そかゝれる

ふきをくる時雨の空の秋風にむら雲いそく夜半の月影

村雲のたえまの空をもりすきてくまなきかたにすめる月影

なれて見る月はかはらぬ同世にわれのみ老のかけそかたふく

影こほる月の夜寒にをく露を霜にふきなす野への秋風

擣衣

あしたゆく汐くむ蜑のいとまなみ衣うつよもまとをなるらし

菊

おく霜にうつろふ菊もけさのまはまた白妙の花とこそ見れ

紅葉

もみち葉のうつろふ浪の立田川おられぬ水のにしきとや見ん

九月盡

都をはけふをかきりに歸なりいつこなるらんあきのふる里

## 冬十五首

時雨

神無月うたてふりそふ時雨かな涙をたにもいとふたもとに

落葉

入新拾遺
山風のふくにまかせてさためなく木の葉さへふる神無月哉

行末もつかへん道の跡はかりうつみなはてそよものもみち葉

寒草

入風雅
草葉こそをきそふ霜もたえさらめなにゝ枯ゆくやとの人めそ

冬月

すみすてゝいくよの霜を重ぬらん影すさましき故郷の月

池水のこほれる影もひとつにておなし鏡とすめる月かな

水鳥

もろともに色こそかはれ冬枯のあしへのかもの霜のふりはも

千鳥

ふきあけの濱のまさこの汐風にみきはの千鳥跡ものこさす

霰

吹しほる風もひとつに音さえてならの葉なからふる霰哉

雪

ふり積る雪のひかりの白妙にくるゝ空とも見えぬ山のは

ふみゝけるあとや尋ねんたかまとのおのへの雪の夜の光に

おきつ風ふきこす磯の岩根松なみこそかゝれ雪はたまらす

消もせてつかへまつれは白雪のしらかみ迄に身こそふりぬれ

鷹狩

見るまゝにしらふになりぬはし鷹のすゝかの山に雪は降つゝ

歳暮

身に年のつもりそふへき時にしも雪さへ何とふりかさぬらん

## 戀二十首

忍戀

戀しなむ後の浮名はさもあらはあれ命のうちに人のしらすは

きえねたゝくゆる思の下むせひはてては煙の名にもこそたて

不逢戀

あふまてはたれゆへおしむ命とていけるを人の猶いとふらん
かひなしやつれなき人に立添はむおもひの煙よそにきえなは
ありはてぬ老の命のならひとや思なされん戀はしぬとも

疑戀

うきかたに僞しらぬ心こそちきりし末のたのみなりけれ

顯戀

ほしわひぬをのゝしの原しのひかね人めにあまる袖の白露

契戀

かひもあらしうつゝに憑むかねともすきて昔の夢になりなは

待戀

まつも又しぬはかりこそくるしけれ契しことは命なれとも

別戀

かた見かな行もとまるもきぬ〳〵の涙にわくる袖の月影
有明のうき道芝にきえもせてつれなき露の命なかさよ

忘戀

おもひ出て後のよをたにとふへくはいきて忘るゝ人も恨みし

恨戀

恨みても思ふ計やしらさらぬいはるゝ程のつらさならねは
あらましの我思ふまゝに夢を見はよしや現の人のつらさも
うきかきりみはてぬ程の命こそ我身も人もともになしけれ
戀しさの心を分てなけきこしうきかたにこそ思ひはてぬれ
前の世の契あらはにうき中はいつか報のかきりなるへき

絶戀

とはすなる人こそあらめおなしよにわか心たに物忘れすな
存命へてうかりしをこそかひなけれとてもたえける中川の水
したはしと思ひはてぬる月日こそたえにし後の別なりけれ

## 雜十首

曉

わかためと鳴てや鳥のつけつらんかねて時しる老のねさめを

河

行水のあはれと思へつかへこしひとつなかれの關の藤河

海邊

きよみかた鹽風たかく吹こして浪のしたなるみほのうら松

山家

たえて聞かきりやあらぬさひしさになれぬる山の松の嵐も

旅

月も又露のやとりやたつぬらんかりねの草のおなし枕に

夢

こし方のみゆるまことにならふともたのみかたしや行末の夢

述懷

何故にそむかさるらん待事の身のありてたに厭はれしよを
つかふへき心はあれととしたけて根なき身のよなやのかれん
おしまれぬ我身一はのかるとも世はすてかたし家をおもへは

祝

君のよはひなにゝたとへん鶴龜も千代萬よの限ありといふ

# 稱名院殿句題御百首

## 冬日春日社壇詠百首和謌

右大臣正二位藤原朝臣公條

### 春十五首

遙峯帶晩霞

朝霞わか三笠山雲はれてよその夕日の嶺ほのかなり

殘雪更粘枝

若菜つむみやこを遠み深山にはまた目にかゝる枝の白雪

春淺霜連夜

葉かへせぬ心をとめて呉竹の夜な〳〵霜の春にさゆらん

梅殘數點雪

かつさきて年のうちより侘ひし雪をそ梅のならしかほなる

清月上梅花

闇にさへ隱れぬ梅のたち枝より月もさたかに身にやしむらん

柳間黄鳥路

花にゆく道によるとや青柳の糸の亂れてうくゐすのなく

春江浪拍空

のとかなる春のひかりの空かけて玉江のなみをみかく朝風

春深花始開

きさらきはさへかへるうちに送りきて春もいく程さける初花

花開紅樹亂

いつる日の色も霞をふく風の峯のさくらにきゆる白雪

花開風雨多

心からよそめを雲と見えそめて花さきしより雨風の空

座久落花多

うつろふもおほえす花にむかひゐてちりかひくもる歸さの道

花落樹猶香

よそにちる花とはみえて吹風も根にかへる物やにほひなる覽

頽簷掛古藤

松たかみさきかゝる藤の波かけてくちぬる軒や露のひまなき

歳時春猶少

なかき日と名にこそたてれ惜むにはちゝのこかねを一時の春

春盡鳥聲中

今は世に秋は又こん心とやくるれは春に鳥かへるころ

### 夏十首

深谷夏聽鶯
谷ふかみおなしかひここに夏きてはまつうくゐすになく時鳥
綠樹連村晴
蚊やりたく宿のけふりの深綠木々の梢のそこともなき
山雲夏又集
朝夕に見なれし山も夏はたゝ峯かさなれる空のしら雲
松風五月寒
五月まつ花たちはなにふる雨の枝に霜をく松風そふく
風樹鳴蟬咽
風ふきて木葉よりけに蟬の羽のうすき日のこる夕暮の聲
秋聲帶雨荷
ふる音の秋になりゆく雨により笠もかたふく池の蓮葉
扇罷風生竹
月はいてぬあけてたとへん扇をもさしをけとふく竹の下風
泉聲到池盡
おちくるや山をいつみも池水にせきいれられて聲のしつけき
雨餘生晚涼
雨はれてゆふ日みえすく吳竹の風なき露のおちてすゝしき
螢入定僧衣
とふほたる入ぬる苔の袖をこそひかりをはなつ佛とも見め

秋十五首

露氣早知秋
荻の葉のそよきそめてはくる秋のそれとも見えしをける朝露
一雨洗殘暑
秋かけてあせもしみみの夏衣あらふや淸きむら雨の空
野色混秋光
わくる野の影の小草もをく露をひかりは秋にあらはれにけり
天高一鴈橫
雲はみな吹つくしたるあまつ風友もなく〳〵さむき鴈かね
終夜着晴蛩
きり〳〵す誰ことはらん秋の夜のなかき思ひの心くらへは
稻花千頃浪
色つくやとをき稻葉のそよきたつ波の花には秋も見えけり
江聲入秋寺
烏なき月おつる江の聲すみておかひの寺の鐘の夜ふかさ
月色一窓虛
風の竹になる夜は夢も結ひけりあかしかねたる窓の月影
江淸月近人
秋寒み身にならすへきねりきぬの色にすむ江の月やめてまし
鷄聲茅店月
いかゝねんかけのたれおの聲にをく露うちなひく淺茅生の月
山曉月初上

待えても曉ちかしありつゝもきえんはおしき山のはの月

月向白波沉

ふけにけりうかへる月の船ならはしつまし物をおきつ白波

遠山青入霧

時雨にも露にもいまた色かへぬ山はいかてか霧のうちなる

風便數碪聲

かたしきの鳴のはねかき數そへて身にしむ風の衣うつらし

新霜染楓葉

篠の葉にしみつくまてはみぬ色のもみちにふかき庭の初霜

## 冬十首

落葉無行路

秋のゆき冬のくるとて一すちの道たにみせすふる木葉かな

木落見他山

松杉もましらぬ里の一むらの嵐の跡の山のまちかき

人迹板橋霜

くちぬやとあやふむそはの板橋もあとある霜や道をなすらん

破林霜後月

木のもとはあたゝめ酒に燒つくすもみちをうつむ霜の月影

山寒水欲氷

谷風に冬こもりせんこもり江の泊瀬の水はうすこほりして

一鳥過寒水

浪ならて友なし千鳥たちてゆく跡に寒けきあしのむら〳〵

清晨雪擁門

今朝たにもふかき蓬の門さして雪の光やあくる空なき

晴雪落長松

はれてたにけにふりつみし雪おれの枝やすからす松風そふく

獨釣寒江雪

ふる雪をひとりかた帆にかたふけて寒き入江もつりの糸なき

流年川暗度

瀧河は手をさへてともいひつへし身にせかれぬは年の暮哉

## 戀十首

心知人不知

いかゝせんくちかためても我と人ひとしき心なれてしらすや

唯有涙痕多

人のためいかにおほかる物としもしらぬ泪のつくしかた（マヽ）

三年不見書

新枕こよひこそともたまつさにいはぬ計をたのむはかなさ

涙盡腸欲斷

一とをり涙の雨ははれてたに九かへりのおもひくるしき

入夢到如今

あひ見しははかなき夢に成はてゝつらき思ひなしつのをた卷

花開更憶客

さきしより夜のま今朝のま移りゆく花をは見すや心つらさよ

空閨殘燭夜

またゝくもいつまてとかや獨寢の燈火もまた涙おちつゝ

恨別鳥驚心

鳥も又おとろきやせん關の戸のあくるもまたぬきぬ〳〵の空

別後會難期

わ□□□け定なき世も僞りもふたかたに又あはてたえめや

何處更相逢

侘ぬれはこゝもかしこもさはりある處かへてと思ふをろかさ

## 旅十首

棧道雲間沒

ゆくとくと雲こそ渡れたちこめて風はふもとの峯のかけはし

江邊問船子

舟人はあまの子なれやくるゝ江にとへと答へす濱にかもねて

舟行夜已深

はるゝ夜の星の目〔[illegible]〕あても方かへてあまのたく火の波へたて行

棹入黃昏浦

小舟さす棹のしつくやあしの葉をゆふへの色にそむる浦風

蒼苔滿山徑

聞なれぬ鳥の聲より人けなき山くちしろき苔のかよひち

鄕信寄胡鴈

吹風に駒さへいはふふるさとのつて□□の鴈にうれしき

人行秋色中

いろ〳〵の木の葉打拂ひゆく道は身にしむとても秋の山風

路明殘月在

ともし火のうすきやとりをおき出て明はつるかといそく月影

灘聲入夢寒

おちたきつ衣手さむみ早き瀨のこゑは氷も夢もむすはす

客愁雙鬢覺

けふいくかわけゆく道はをとろなる髮もおほえす色かはる覽

## 閑居十首

幽居有餘樂

ねかひたゝ水と山とにありとたに人にしられぬ影をしめつゝ

盡日掩柴扉

我いてし人もとふなと心よりとちめはてたる柴の庵かな

秋月離喧見

山にてはたゝ庭のこゑ耳にたつうき世のことはみな秋の月

深居絕是非

軒の松まかれる枝もすくなるもをのかさま〳〵たのむ影哉

山中無曆日

□くにふく羽風そしるへ奥山もみちかくる月の影かくれなき

鳥啼人不見

人のくるならひあれはそ跡たゆる山かとみれはよふこ鳥なく

殘生隨白鷗

波風の世をもかもめのしるといはゝねむる眞砂の上に契らん

閑門留野鹿

野を近みみれはなれくる鹿をさして馬をやいはん柴の戸の内

身在能無事

味酒はいましめなからなれつへしなすともなき身の友として

竹徑通幽處

おとろかむ人かけもはやくるゝよりすゝめむれゐる竹の下道

## 雜二十首

半山無夕陽〔詩集〕

一かたははや暮はてゝゆふ日影のこるや須彌のなかはなる山

鐘聲殘雲外

雨はるゝ尾上の雲の明かたに鐘の聲より月もいつらん

水窮天盡頭

わたつ海やのほらぬ水ものほるらんひとつにすめる天の川波

流水浸雲根

たえすゆく水のあらへる石の上かはくまよりや苔のむすらん

山光落釣船

出る日の山よりみゆる朝なきにつりする舟のかすもそふらん

船與浪高低

をもきをも又かろきをも波にのせ浪にひかるゝ船はあやうし

風林無鳥宿

花の木々もみちの林風をいとふこゝろに鳥もねくらとやせぬ

天色無情談

遠くして遠からぬ道にあふく哉みてるをかくは久かたの空

人間苦人多

心そよあるにまかせは安からん世をわりなくも何嘆かまし

世路山何險

世をわたる思ひの家を出かたみ車をくたく山はあさしな

清溪照孤影

わたりゆく我もひとりの一橋ともなふかけのきよき谷川

松多寺不見

かはらにもおひつく松の深緑野寺は軒もみえすふりぬる

遠嶠收殘雨

一かたは晴ゆくあとにたつ虹のてらすも雨をのこす山のは

落日沉沙頭

わたし守はやのれといふ船よする眞砂におしき夕日影かな

淸風隔世塵

罪とかも打はらふ塵にましはれる神風淸き空やあふかむ

衰鬢臨明鏡

ます鏡くまとみえつる黑きすちもはてはすくなき影も耻かし

せきあへす水に任せて麗川田の面をうくる山のはろけさ

僧談悟色空

色は皆むなしとしりていろ道にいかにさためし墨染の袖

渠近夜疑雨

かり枕瀧なくもかなはるゝ夜も雨きく夢のいとゝひかたき

鷺立斜陽去

浦つたひ夕日のかたにほす網の香をなつかしみ渡るむら鷺

天文十三年三月十七日書寫之了　尊俊

山田紋々高

# 續群書類從卷第三百九十

和歌部廿五

## 俊成卿述懐百首

堀河院御時百首題を述懐に寄てよみける歌

保延六年のころにや

俊成卿

### 春歌

立春

去年もさて暮にきと思へは春たつと聞にそかねて物そ悲しき

子日

春日野のまつのふる枝のかなしきは子日にあへと曳人もなし

霞

いつしかと春は霞のこえて行をとはの山やわか身なるらん

鶯

花咲ぬやとの梢に中〳〵に春となつけそうくひすのこゑ

若菜

澤に生る若菜ならねと徒に年をつむにも袖はぬれけり

殘雪

春しらぬこしちの雪も我はかりうきに消せぬ物はおもはし

梅

數ならぬ袖にはしめし梅の花此世にとまる妻とこそなれ

柳

春雨に玉ぬく柳かせふけは一かたならす露そこほるゝ

早蕨

歎かめやおとろの道の下わらひ跡をたつぬる折にしありせは

櫻

埋木となりはてぬれと山櫻をしむ心はくちすもあるかな

春雨

春にあはぬ身をしる雨のふりこめて昔の門の跡や絶なむ

春駒

か計といまはわか身をみつのえに何とて駒の立めくるらん

歸鴈

雲の上に行かよひても音をそ鳴花さくころにあはぬかり金

喚子鳥

さらぬたにあらましかはと思ふ人戀しさそふるよふこ鳥かな

苗代

侘ぬとも引はありかし山かつのなるにまかせぬを田の苗代

菫菜

すみれ咲あさちかはらに分きてもたゝひた道に物そかなしき

杜若

世をいとふ宿にはうへし杜若思ひ立道かこひかほなる

藤

はりまかた藤えの岸にみつ鹽のからくて世にもしつみぬる哉

山吹

身のうさにかさねて物を思へとやうつろひぬらん山吹の花

三月盡

世の中を歎なみたはつきもせて春はかきりになりにける哉

夏歌

更衣

花の色はけふぬきかへついつか又苔の衣にならむとすらん

卯花

山賤の垣ほわたりに宿もかな世をうの花のさかりなるころ

葵

神山に曳のこさるゝあふひ草時にあはてもすくしつる哉

時鳥

身のうさはとふへき人も問ぬ世に哀にきなくほとゝきす哉

菖蒲

けふは又あやめあれさへかけそへてみたれそまさる袖の白玉

早苗

早苗をはかけし我身にをくてとも思はゝたのみあらまし物を

照射

ますらをは鹿まつことのあれはこそしるき歎もたえ忍らめ

五月雨

五月雨はまやの軒はの雨そゝきあまりなるまてぬるゝ袖かな

盧橘

思ひきや花橘のかくはかりうき身なからにあらむ物とは

螢

ねやのうちも螢とふらし物思へは床のさ莚くちやしぬらん

蚊遣火

夕立のそゝきてすくるかやり火のしめりはてぬる我こゝろ哉

蓮

にごりにもしまぬ蓮のみなりせはしつむとも世を歎さらまし

氷室

埋れて消ぬ氷室のためしにや世になからへはならんとすらむ

泉

我といへは涼しき水の流さへ岩間にむせふをときかす也

六月祓

思ふ事みなつきねとて御祓する河せのなみも袖ぬらしけり

## 秋歌

立秋

あきゝぬと聞より袖に露そをくことしもなかは過ぬと思へは

七夕

なに事を我なけくらむ星合の空を見るにもみつ涙哉

萩

みるまゝに袖そ露けき世の中にうつら鳴のゝ秋はきの花

女郎花

身のうさにえそたつさはぬ女郎花花のなをさへおらしと思へは

薄

うき世には門させりとや思ふらん出かてにするしのゝを薄

苅萱

萩はらやしけみにましろかる萱の下葉か露にしほれはてぬる

蘭

藤はかま嵐たちぬる色よりもくたけて物は我そかなしき

荻

わか袖は荻のうは葉の何なれやそよめくからに露こほるらん

初鴈

歸りては又くる鴈よ事問んをのかとこよもかくや住うき

鹿

世中よ道こそなけれ思ひ入山の奥にも鹿そなくなる

露

しほりする楢の葉柴にちる露のはら〳〵と社ねはなかれけれ

霧

夕間暮きり立わたる鳥部山そこはかとなく物そかなしき

朝顔

咲てこそきゆともきえめ露のまもあなうらやまし朝顔の花

駒迎

東路や引もやすめぬ駒のあしの稍なつみぬる身にこそ有けれ

月

なくさむと誰かいひけんなかむれは月こそ物は悲しかりけれ

擣衣

長夜に衣うつなりつちの音のやむ時もなく物なおもふに

虫

さりともと思ふ心も虫の音もよはりはてぬる秋の暮哉

菊

うき身にはあまりなるまてみゆる哉匂みちたる宿の八重菊

紅葉

嵐吹嶺のもみちの日にそへてもろく成行わかなみたかな

九月盡

憂身ゆへなにかは秋のとまるへき理なくもをしみけるかな

## 冬歌

初冬

冬されは野原もいとゝ霜枯て物さひしくもなりまさる哉

時雨

しくるゝもよそにや人の思ふらむ憂には袖の物にそありける

霜

みな人の霜となれとや露をのみ草の葉末にむすひ置劔

霰

寒る夜におつれはこほる涙こそ枕のもとのあられなりけれ

雪

杣山や梢にをもき雪おれにたえぬ歎の身をくたくらむ

蘆

身のうきに折ふしぬれはしほれ蘆の世をは難波の何か恨みん

千鳥

行衞なくあくかれぬ共濱千とり留らむ跡を誰かしのけん

氷

春日山いかになかれし谷水のすゑをこほりのとちはてぬらん

水鳥

水の上にいかてか鴛の浮ふらんくかにたにこそ身は沈みぬれ

網代

身をよせん方こそなけれ宇治川の網代をみてや日を暮さまし

神樂

つくへとね覺てきけは里神樂かまかましき世にこそ有けれ

鷹狩

狩暮しあはする鷹の峯こえに行衞もしらぬ程そかなしき

炭竈

けふりたつ小野の炭かま我なれや歎をつみて下にもゆらん

爐火

山賤のなたかきあはせ埋む火のあるともなくて世をもふる哉

除夜

さりともと思ひし程の年たにも暮るはやすき空なかりしを

## 戀歌

初戀

もらしては袖やしほれん數ならぬ身をはつかしの森の滴は

忍戀

うきにのみしつむみくりのくり返し下に亂てやみぬへきかな

不逢戀

恨すや君にのみかはおほかたの世にもあふてふ㕝しなけれは

初會戀

逢見ても夢かとそのみたとらるゝ嬉き事はうつゝなりしを

後朝戀

暮に共契らさりせは世の中に待事なくてやみやしなまし

逢不逢戀

物思ふにかさねし袖を更に又かくしてさへはなけくへしやは

旅戀

世中はうきふししけきしのはらや旅にしあれはいも夢にみゆ

思

むねをやく煙は高立物をわか身は人のしもになりぬる

片思

憂身をは我たにいとふいとへたゝそをたにおなし心と思はん

恨

兎に角に身にはうらみのみち〱てをもてををかん事そ覺ぬ

雜歌

曉

あかつきとつけのまくらをそはたてゝ聞もかなしき鐘の音哉

松

うかりけり昔の末のまつ山に浪こせとやはおもひをきけむ

竹

いかにせむ賤かそのふの奥の竹かきこもる共世の中はうし

苔

岩たゝむ山のかたその苔莚とこしなへにも物おもふかな

鶴

年たにもわかの浦はのたつならは雲井をみつゝ慰めてまし

山

うき身をは我心さへふりすてゝ山のあなたに宿もとむ也

川

もかみ川瀬々に流るゝいな舟のしはしそとたにいも思はまし

野

露けさは我かみのかさそ小倉山ふもとの野への秋ならねとも

關

世の中は關戸にふせくさかもきのもかれはてたる身社有けれ

橋

年ふともうちのはしもり我ならは哀とおもふ人もあらまし

海路

礒かくれまかちしけぬきこく舟の早くうき世をはなれにし哉

旅

あまさかる鄙の長地に日數へて落ふれぬへき身をいかにせん

別

思ふ人なしとおもひし世中にこは又いかにをしきわかれそ

山家

谷川も枕のもとに聞ほとにやかてれ覺の床そうきぬる

田家

世中は秋の山田の庵なれやあせの通路せはしかるらむ

懷舊

我心あれ行やとゝなりにけりむかしを忍ふ草のまもなし

夢

うき夢はなこりまてこそ悲しけれこのよの後も猶やなけかん

無常

石をうつ光のうちにかそふなる此身のほとを何なけくらん

述懷

四方海を硯の水に入とも我思ふ事はかきもやられし

祝

うき身なりかけて思はし中〳〵にいふ限なき君か千とせは

〔右俊成卿述懷百首舊本闕今以東京帝國大學圖書館所藏本書寫以長秋詠藻校合畢〕

## 俊成卿祇園百首

〔右舊本闕〕

## 定家卿藤川百首

### 春二十首

關路早春

たのみこし關のふち川春きてもふかき霞にしたむせひつゝ

湖上朝霞

あさほらけみるめなきさの八重霞えやは吹とく志賀のうら風

霞隔遠樹

三輪の山まつさとかすむ初瀬川いかにあひみん二もとのすき

霽中聞鶯

都いてゝ遠山すりのかり衣なくねともなへ谷のうくひす

隣家竹鶯

山かつのそのふにちかくふしなれて我竹かほにいとふ鶯

田邊若菜

小山田の氷りにのこるあせつたひみとりの若菜色そ少なき

野外殘雪

春日野はきのふの雪の消かてにふりはへいつる袖そかすそふ

山路梅花

色も香もしらてはこえし梅の花にほふ春邊の曙の山

梅薫夜風
にほひくる枕にさむき梅か香にくらき雨夜のほしやいつらん
水邊古柳
年月もうつりにけりな柳陰水ゆく川の末の世の春
雨中待花
けふよりや木のめもはるの櫻花おやのいさめの春雨の空
野花留人
玉きはる浮世忘れて咲花のちらすは千代ものへのもろ人
遠望山花
色まかふまことの雲やましるらんころは櫻の四方の山の端
曉庭落花
あかなくにをのか衣々吹風に苔のみとりも花そわかるゝ
故郷夕花
里はあれぬ庭の櫻もふりはてゝたそかれときをとふ人もなし
河上春月
ゆく春のなかれてはやきみなの川霞のふちにくもる月影
深夜歸鴈
春の夜の八こゑの鳥もなかぬまにたのむの鴈のいそき立らん
藤花隨風
松風の聲もそなたになひくらしかゝれる藤の末もみたれて
橋邊欵冬
橋はしら色に出ける言の葉をいはてやにほふ山吹の花
舟中暮春
今日は猶霞をしのく友船の春のさかひをわかれすも哉

## 夏十首

卯花隱路
卯花の枝もたはゝの露をみよとはれしみちのむかし語は
初聞郭公
昨日こそ霞たちしかほとゝきす又うちはふくこそのふる聲
山家時鳥
この里は待もまたすもほとゝきす山とひこゆる便すくすな
池朝菖蒲
あくるよりけふひく菖蒲池水にをのか五月そなれてわかるゝ
閑居(テイ)蚊火
こかるとて煙もみえし時しらぬ竹のは山のおくのかやり火
盧橘驚夢
袖のかは花橘にのこれともたえてつれなきゆめの面影
杜五月雨
わひ人のほさぬためしや五月雨の雫にくたすころもての森
野夕夏草
あたしのゝをかやか下はたか爲にみたれそめたる暮を待らん
澗底螢火

日影見すきてとくちる色もなし谷のほたるそ光なりける

行路夕立

夕立に袖もしほゝのかり衣かつうつりゆくをちかたのくも

## 秋二十首

初秋朝風

秋きぬといふはかりなるよもきふにあさけの風の心はかりよ

閏月七夕

天河ふつきは名のみかさなれと雲の衣やよそにぬるらん

野亭夕萩

秋萩に玉ぬく野邊の夕露をよしやみたさてやとなからみん

江邊曙萩

明わたる荻のするはのほの〳〵と月の入江をいつる舟人

山家初鴈

秋風の雲にましれる峰こえて外山の里にかりは來にけり

海上待月

淡路島秋なき花をかさしもていつるもをそしいさよひの月

松間夜月

袖ちかき色やみとりの松風にぬるゝかほなる月そすくなき

深山見月

花ならはいたくな侘そとはかりにみやまの月を人やとはまし

草露映月

武藏野につらぬきとめぬ白露の草はみなから月そこほるゝ

關路惜月

あふ坂はかへりこん日をたのみても空ゆく月の關もりそなき

鹿聲夜友

山里の竹よりほかのわか友はよるなく鹿の庭の草ふし

田家擣衣

露霜のおくての山田吹風のもよほすかたに衣うつなり

古渡秋霧

夕霧にことゝひ侘ぬすみ田河わか友舟もありやなしやと

秋風滿野

宮城野は木のした露もほしはてゝはらひもやまぬ四方の秋風

籬下聞虫

みたれ落る萩の籬の下露に涙色なるまつむしのこゑ

紅葉寫水

山川のしくれてはるゝもみち葉におられぬ水も色まさりつゝ

山中紅葉

山めくるしくれの奥のもみち葉のいく千入とかこかれはつ覽

露底槿花

秋風のうは葉にためぬ白露をしほらてひたす朝かほの花

河邊菊花

大井河ゐせきの浪の花の色をうつろひすつる岸の白菊

獨惜暮秋
又人のとはぬも嬉し草木たになれてはおしきあきのわかれを

## 冬十首

初冬時雨
けふそへにさこそしくれの音信て神無月とは人にしられめ
霜埋落葉
朝霜の庭のもみちは思ひしれをのかしたなる苔の心を
屋上聞霰
眞木の屋にあられの音もとたえつゝ風のゆくゑになひく村雲
古寺初雪
むかしへやなに山姫の布さらす跡ふりまかへつもるはつ雪
庭雪厭人
我門はけふこん人に忘られね雪のこゝろに庭をまかせて
海邊松雪
住吉の松やいつくとふる雪になかめもしらぬとをつしま人
水郷寒蘆
あしの葉も下おれはてゝ三島江の入江は月のかけもさはらす
湖上千鳥
鳰の海や月待うらの小夜ちとりいつれの島をさしてなくらん
寒夜水鳥
をきとめす松を嵐のはらふ夜に鴨の青羽の霜そかさなる
歳暮澗水
いまいくかうち出る浪のはつ花も谷の氷の下にまつらん

## 戀二十首

初尋縁戀
思ひあまりその里人にことゝはんおなし岡への松はみゆやと
聞聲忍戀
秋の霜にうつろふ花の名はかりもかけすよ虫の鳴音ならねは
忍親昵戀
めも春にもえてはみえし紫の色こき野への草木なりとも
祈不逢戀
行かへり逢瀬もしらぬ御秡川かなしき事は數まさりつゝ
旅宿逢戀
立田山木葉のしたのかり枕かはすもあたに露こほれつゝ
兼厭曉戀
こよひたにくらふの山の宿もかな曉しらぬ夢やさめぬと
歸無書戀
朝露はさゝ分る袖にほしかねて夢か現かとふ人もなし
逢不會戀
よそ人はなに中々の夢ならてやみのうつゝのみえぬ面影
契經年戀
秋かけてふり敷木の葉いくかへりむなしき春の色にもゆらん

疑眞僞戀
たかまと世のいつはりのいかならんたのまれぬへき筆の跡哉
返事増戀
打なひく煙くらへにもえまさる思ひのたきゝ身はこかれつゝ
被厭賤戀
色にいてゝいひなしほりそ櫻戸のあけなからなる春の袂を
途中契戀
みちのへのゐての下おひひきむすひ忘れはつらしはつくさの露
從門歸戀
おもひやれむくらの門のさしなからきてかへるさの露の衣手
忘住所戀
いかにせんたのめし里を住の江の岸におふてふ草にまかへて
依戀祈身
なからへよあらはあふよと手向して年のをいのる森のしめ繩
隔遠路戀
わたつ海やいく浦々にみつ汐のみらくすくなき中のかよひち
借人名戀
かり初のたか名のりそになひくらん我身のかたはたえぬ煙を
絶不知戀
葵草人のかさしかとはかりも名をたにかけてとふかたもなし
互恨絶戀
もしほ草あまのすさひもかきたえぬ里のしるへの心くらへに

## 雜二十首

曉更寢覺
明やらぬ鳥のねふかく置霜にね覺くるしき世々のふること
薄暮松風
植をきしわか物からの庭の松ゆふへは風のこゑそくやしき
雨中緑竹
色かへぬ青葉の竹のうきふしに身をしる雨のあはれ世の中
浪洗石苔
はや瀬川岩うつ浪の白砂に苔のたもとの色そつれなき
高山待月
比えの山峯の木からしはらふ夜に心きよくも月を待かな
山中瀧水
雲ふかきあたりの山につゝまれて音のみおつる瀧の白玉
河水流清
秋の水きよ瀧川の夕日影木の葉もうかすくもるはかりに
春秋野遊
おなし野の霞も霧も分なれぬはつねの小松まつ虫の聲
關路行客
ゆく人のかたみもあたにをく露をふきなはらひそ關の秋風
山家夕嵐

暮かゝる四方の草木の山風にをのれしほるゝしはのそてかき

山家人稀

故里を忍ふる人やわたしけんさてもとはれぬ谷川のはし

海路眺望

しろらめやたゆたふ舟の波間よりみゆるこしまのもとの心を

月羇中友

ゆふつくよ宿かり初し影なからいく有明の友となるらん

旅宿夜雨

旅衣ぬくや玉のを夜の雨は袖にみたれて夢もむすはす

海邊曉雲

明ぬとてとまり漕出る友舟のほしのまきれに雲そわかるゝ

寄夢無常

まとろめはいやはかなゝる夢の内に身をいくよとて覺ぬ歟そ

寄草述懐

引捨るためしもかなしかきつめしをとろの道のもとの朽葉は

寄木述懐

九重のとのへのあふち忘るなよむそちの友は朽てやみぬと

逐日懐舊

天の戸のあくる日毎に忍ふとてしらぬむかしは立もかへらす

社頭祝言

いのるより神もさこそはねかふらめ君あきらかに民安くとは

〔右定家卿藤川百首得三本校合〕

# 爲家卿藤川題百首

## 春二十首

關路早春

東路に春やきぬらん關の戸もあくれはかすむあしからの山

湖上朝霞

かすみぬと氷も今朝やとけぬらん汀にちかき志賀の浦波

霞隔遠樹

昨日まてそれとはみえし山本の梢もしらす霞む春哉

羇中聞鶯

鶯は梅さく里もたのむらん宿さたまらぬ旅そかなしき

隣家竹鶯

おなしくは墻ねの竹の枝かはすこなたにきなけ鶯の聲

田邊若菜

いさゝらは山田の澤のうす氷とけなは跡に若菜つみてん

野外殘雪

若草のつまもや雪にこもるらん又春さむき武藏野の原

山路梅花

梅か香をふきつゝ山の春風にいく木のもとの花になるらん

梅薫夜風

忘るへき春の夜の間の程をたに心もよほす梅の下風

水邊古柳

澤水にしつえ朽たる川柳まちうる春の色もすくなし

雨中待花

草も木もおなしめくみの春雨に猶そさくらの枝はゆかしき

野花留人

行さきはくるゝもしらすやとるらし花のかけふむ野路の旅人

遠望山花

花の香と吹きて告る風もうしなかめにかゝるみねの白雲

曉庭落花

散かゝる庭の櫻をたよりにてはるゝもつらし有明の月

故郷夕花

なかめあかす今日も暮しつあすからやあすかの里の花の白雲

河上春月

行水は霞の下の音羽川いかに氷てうつる月かけ

深夜皈雁

雁のねよあくるたにうき歸るさを深行空はさそなかむらん

藤花隨風

風わたる汀の松のしつえよりふくかたしれとなひく藤波

橋下欵冬

風吹けはこほれておつる欵冬の花をわたせる谷のかけはし

舟中暮春

行春のかたをしらせよゆらの戸やこき出る舟の跡のしほ風

## 夏十首

卯花隱路

さらに又けふこん人とみるはかり雪に道なき庭の卯花

初聞郭公

きゝつとも人にはいはし郭公たのまぬ程の初音なりけり

山家郭公

いまは又里なれはてゝほとゝきすすむ山本の聲そ少なき

池朝菖蒲

池水のみきはのあやめ朝な〳〵浪にかくるゝ五月雨のそら

閑居蚊遣

夏も猶煙をたにとたのむかなさひしき宿の夜半のかやり火

盧橘驚夢

哀なりたか袖の香のならひとて花橘に夢殘すらん

杜五月雨

榊さす杜のしめなはくり返しなかきいくかの五月雨の空

野夕夏草

秋きなは風にもたへし草の原心とむすへ野邊の夕露

澗底螢火

すむとたにしられぬ谷の下水をありとほたるそもえて告くる

行路夕立

さらてたに草わけわふるぬれ衣日も夕立の雨きほふなり

## 秋二十首

初秋朝風

夏衣またかたしきのさむしろに今朝吹とをすあきの初風

閏月七夕

ふた夜まてなにそはありて天河のちせわたらぬほしあひの空

野亭夕萩

秋萩の花の戸さしの色にいてゝ夕暮しるき野邊の露哉

江邊曙荻

曉はうきねちさひし舟とむる入江の荻にわたる秋風

山家初雁

すきぬなりわかすむ山の紅葉はに涙しらする初鴈の聲

海上待月

さしいつるゆかりはうれし月はまたつれなき沖のあまの釣舟

松間夜月

住吉の浦半の波に音もせて月よりかへる松のしらゆふ

深山見月

山ふかくわれからむすふ草の庵に人もすむとや月のもるらん

草露映月

あきのよは露の底なる草葉まてとをりてすめる月の影哉

關路惜月

よせかへりなにしか浪の清見かた月をとをさぬ關守もなし

鹿聲夜友

夜半に鳴山ちのしかのこゑなくはひとりそ秋の袖はぬれまし

田家擣衣

月のすむ田中の庵のいなむしろもるやすさひに衣うつなり

古渡秋霧

跡もなきすみた川原の秋霧に都とふへき鳥たにもなし

秋風滿野

白露もみなから草のむさしのを吹たにたえぬ秋の夕風

籬下聞虫

風わたる籬の草の下をれにうつもれはてぬ松むしの聲

紅葉寫水

散かゝる色たにあかしもみち葉のかけみるかたの水の鏡は

山中紅葉

あきにあへぬ三室の山の紅葉はゝ草葉をかけていつ時雨けん

露底槿花

哀なりきゆるにやすき白露をやとしよはれるあさかほの花

河邊菊花

いくちよをせきて岩間にとゝむらん菊のかけ行谷川の水

獨惜暮秋
あはれともくれゆく秋もおもひしれ我身ひとつにおしむ心を

冬十首

初冬時雨
忘れては猶秋そともおもはましわれをりしらぬ時雨なりせは

霜埋落葉
散しよりあさをく霜にうつもれてわか色としもみえぬ紅葉は

屋上聞霰
霰ふる眞木の板屋のかたひさし音にたてゝそ冬はきにける

古寺初雪
降そむる雪より跡そ絶ぬへき高野の山の冬の人めは

庭雪厭人
今よりは人をもとはし降雪の庭にはあともつけうかりけり

海邊松雪
難波かたあさみつ鹽はとほけれと雪にかくるゝうらの松原

水郷寒蘆
汀なる芦のしほれにふきさやきこほりもよほすゝまの濱風

湖上千鳥
風さむみ奥つさゝ浪さく花に色まとはせる浦ちとり哉

寒夜水鳥
かつこほる池の玉藻のかり枕むすふ霜夜にをしうらならん

歲暮澗水
谷川のはやく暮ゆく年なみにむすふ氷もあすはとくへき

戀二十首

初尋縁戀
今日こそは浦半によするみるめをもしらする風を尋そめつれ

聞聲忍戀
松風の音をきゝてもなけきのみくはゝるとのねをやしのはん

忍親昵戀
ちらすなよ下に伏屋の夜はの露そのはらからの風もこそふけ

新不逢戀
さらてなをかけてかひなき手向哉人はうき田のもりのしめ繩

旅宿逢戀
わするなよ草ひきむすふ新枕かはす契は一夜なりとも

兼厭曉戀
をのつから待うる夜はのき莚にかねてそ鳥の音はなかれける

歸無書戀
かへりつる道も草葉に分つれとまたふみもみす袖そぬれそふ

遇不逢戀
夢かとよ見しを心になくさめて又よそになる夕暮の空

契經年戀
哀なりたかまとなるちきりとておしむ命も年のへぬらん

疑眞僞戀

たのめしは猶僞のくれかともおもひさためて身をくたかはや

返事增戀

ひき返すうらにかきをくもしほ草やかて涙にくちぬへき哉

被厭賤戀

人そうき賤のをた卷いやしきを身に知とかはなきになされて

途中契戀

めくりあはん末をそたのむ道のへのゆき別ぬるあたの契りを

從門歸戀

秋の夜のあけせぬ槙のとはかりに行てはかへる袖をみせはや

忘住所戀

われそうきそことはそこを白雲のをしへし月の影は入にき

依戀祈身

今はたゝ戀をいのりになしはてゝあらはとはかり身を惜む哉

隔遠路戀

我心いく山川をあくかれてしのふの奥にみちたとるらん

借人名戀

外さまに名をかる草の束のまも靡くにつけて身そしられぬる

絶不知戀

おなし世になしやありやも白浪のよるへ絶にし方のなかはま

互恨絶戀

今は又ゆくゑもしらす跡絶ぬかたみにふきしくすの浦風

雜二十首

曉更寢覺

枕たにうきたちぬへきねさめかなむかしおほゆる曉のゆめ

薄暮松風

そのとおもはぬ暮もかなしきは松吹わたるあらしなりけり

雨中綠竹

雨をもきまかきの竹のおれかへりくたれはのほる露の白玉

浪洗石苔

波あらふ磯邊の石の苔衣ほす間もみえぬ興津鹽風

高山待月

よのつれの峯には影も出なまし富士のねしらむ秋の夜の月

山中瀧水

山にても猶うきときやまさるらんみたれて落る瀧の白玉

河水流淸

底までもなかれてきよし神風やいすゝの川の水の白浪

春秋野遊

櫻花千代もへぬへくみしのへに秋さく色のうつろひにけり

關路行客

知しらすゆきゝもしはしとゝまらん淸見か關の浪にひかれて

山家夕嵐

くれ行はそのふの山に吹嵐なれすはいかにこゝろうかれん

山家人稀

はれすのみ雲しく岩の峯のいほわれより外の跡をやはみる

海路眺望

わたの原波路の末は中絶て雲にうきたつあまのつりふね

月羇中友

旅のそらうきていてにし野山まて道もやとりも月そともなふ

旅宿夜雨

都おもふ涙も露もかりのやに猶もる夜半の雨しほりつゝ

海邊曉雲

くらき夜の八重のしほちの波間よりはなれてあくる空の横雲

寄夢無常

あるも夢なきも夢そといひ乍けにさとられぬ身をいかゝせん

寄草述懷

世の中なわきてはいはす夏草のたゝわれからと露そこほるゝ

寄木述懷

世中はあまの鹽木のからくのみありふるまゝに思ひよられて

逐日懷舊

過にける昔を今と思ふ間にけふもきのふとなりぬへきかな

社頭祝言

ゆるきなくときはかきはに守るらんいすゝの川の神の宮居は

〔右藤川題百首以大納言爲家集校合〕

# 續群書類從卷第三百九十一

和歌部廿六

## 爲相卿百首

夏日侍　大上皇仙洞同詠百首應　製和歌

正二位藤原朝臣爲相上

春二十首

たつ日より空ものとけしなへて世のおさまる時を春や知らん

みよしのゝ瀧のしら糸春くれはあはにとけゆくうす氷かな

かつらきの山の霞はいくはるの同しよそめに立かへるらん

したをれはおのかうつみし枝にしもかくれてのこる松の白雪

さと人のいつるやまちしかすか野のわかなをつめは鶯のこゑ

さきやらぬころよりも梅か香に見そめて後そ花はまたるゝ

佐保姫の作の霞や青柳の糸もてよれるころもなるらん

たまもかるかたやいつくそ霞たつあさかの浦の春のあけほの

朝日さすかたやますゝきもえそめてかれ葉か下そ薄緑なる

いつの間にをきならふらんはつくさの青葉の上の春のあさ露

山さとはまとのうちまてかすむ夜に月の色なる春のともし火

はるのかりしはしも花にとゝ□〔まらイ〕て歸る山路の雪を見

雨にまついこまの山のさくら花さかはこすゑを雲なかくしそ

折そへて花はやつさし三輪の山ひはらも同しかさしなりとも

盛りをものとかにみする春の日のなかき情は花にうれしき

月かけのしらむもおしき名殘かな花にはあくる色をまてとも

つくはねの山のあらしにちる花や雪けの道をまたうつむらん

ひとたひはたしむ人にもしたかはて風の心にちるさくらかな

春ふかき野への澤水せきとめて草かりいるゝしつかなはしろ

なこりこそいふにもまされ行春のわかれをしれとさける山吹

夏十五首

夏にうつるそらや梢も色きよみみとりひとつにはるゝ山のは

卯花の咲散るころやはつせ川しらゆふ波もきしをこゆらん
月にはれ雨にくもれとほとゝきす聲をは同し空にこそまて
郭公はつねのゝちのいくこゑも聞もらさしと心にそまつ
聞をきしならの都の古ことをかたるにゝたるほとゝきす哉
しのはるゝそてはあまたの古を匂ひにわかぬ軒のたち花
つなてをもひきやそふらんあやめ草かりつむ比の淀の川舟
さみたれにくもりはしめし夕より幾夜そ月にうとくなりぬる
やとにはや歸るさつをのあとまてもともしは山に殘る明ほの
よしさらはかつらの名をもいひかへよ夜川に月をいとふ里人
草も木も心のまゝにしけれたゝ我かくれかをほかにもとめし
すくもたく難波のこやは蚊遣火にたつるもゝとの煙なりけり
むさしのゝ露にも雲やかゝるらんとをき草葉にすくる夕立
谷ふかき槇の葉かくれ流れいてゝ日かけうつらぬ水そ涼しき
かりのこせけふのみそきの淺茅原秋まつ露のやとりはかりは

秋二十首　一首不足如本

きのふまて人にまたれし涼しさををのれといそく秋の初風
あまの河みつかけ草のいくあきかかれなてとしの一夜待らん
夕くれにふき殘しつる荻の葉の風のあはれをねさめにそ聞く
行て見る人をもまたてたかまとのうへ（みやイ）のゝこ萩散りか過なん
草ふかき宿をすみかとしりぬらんわかゐる山の秋の夕くれ（つゆイ）
むら雨は夕への雲にふり過てはらふにおつる桐のはのこゑ
夜とゝもに曇らぬかけも久方の都そ月のすみかなりける
うき身にもわすれぬふしはさゝ竹の大宮にみし秋のよの月
山に入我あらましのいつはりに老のかけ見る月もはつかし
和田の原かけをひたせる白波のやえのくまゝて月はすむらし
あらしふく柴のかりふきひまあれてねやはみちたる庭の月影
鹿の音のちかき枕に月をみてあくる夜したふ秋の山里
きゝ侘ぬ外山のあらし吹くれて鹿の音ましる入あひのかね
わか袖に何かはくもる夜半になくかりの涙は月もやつさす
奥見えぬはやまの霧の明ほのにちかき松のみ殘る一むら
朝日さす門田の霧の花そめて色こき秋（稻葉）そ風になみよる
いくかへりしくれし松の下紅葉うへはつれなき山のいろ哉
ひとたにも（里ひともイ）しもにをきつゝ寒きよにさそつま□の衣打らん
山を越え水をわたりてしたふともしらはやけふの秋の別路

冬十五首

したひえぬ一夜の秋を吹すてゝ落葉にすさむ木枯の風
冬枯の草の戸さしによはき日のかけろひあへすふる時雨哉
山風の月を尋てふくからにしくれかねたる夜半の浮雲
もみち葉はむすふ氷にとゝまりてするに色こき冬の山川
ゐたくさの殘りし色も朽はてゝぬもとめて結ふ霜のさむさに
波もまたよるへなしとやさよ千鳥なるとの奥にふけてなく覧
秋まてと人もとひこしふるさとの霜よの月は又ともらなし

よもすから氷をしきてさほかはのきよき瀬わたる月の寒けさ
散る花の面かけ見えてさて(さくら歟)あさのかもふの原に降れる白雪
吹かへすしかの浦風心せよつりするあまのそての白雪
冬さむみ雪をましはに積そへて氷になやむ宇治の川舟
さゆる夜のあしまにすたくをし鴨は氷に水をたとりてそ鳴
雲の上にあかつきかへる山あひのそてふきをくるかもの川風
雲ははやか〻らぬ山の雪の色をけふりにやつすをの〻炭かま
今はた〻したふはかりの年の暮あはれいつまてはるを待らん

戀二十首

心のみしるへと頼むはかなさよたとられぬへき身をは思はて
かれよかししのふか原のしの薄もしほにいつる時もこそあれ
心をはよそなからとふ人もなしよるの袂そなみたをもしる
あふさかの名をしもなとかをしむらんまよふ戀路の末の關守
なくさまぬわか朝夕の心をもいかなるつてにしらせそめまし
えそとはぬにほの下道みかくれてかよふ心のありやなしやを(とイ)
たまさかにちきりし夜半も又更ぬまたれぬ鐘を音つれにして
くもる時は詠め捨てもねし物を月のたのむる夜な〱そうき
戀しさはわか心よりならふ身のわする〻道をとふかたそなき
おしまれぬ命なからもつれなさの限やあると待る〻もうし
わか思ふ人によすかの山ならは心つくしの道もさはらし
うとくなる身をはわれたに惜まぬを同しよまてや猶いとふ覽
よしなしや又もとはれぬとし月になれし心のむかしかたりは
せめて我なくさむかたそまつ夢の面かけをさへ人やおしまん
わすれえぬ心ひとつをかこつそよ戀しきをのか形見にはして
きぬ〱に一度ぬれし我袖にたえぬ涙の今まてそうき
をのつからかよひし比のおり〱(如本)はうき心にも思ひいつらん
袖にのみはらひし露はを〻かりて人こそわけねやとの道しは
又もみぬなさけは夢の一夜にてわすらる〻身のうきそ久しき
折にけり袖ふる川のなかれても絶しあふせは末もたのます

雜十首

かへりみる山のみあとにかさなりぬ□□いつこの雲の遠方
しら波のこすけのまくら夢かれて旅ねものうきまの〻浦風
浦々のいさり火消えてあくる夜にうすき煙そ綿に殘れる
山ふかみ日たけてあくる柴の戸も我こそいつれとふ人もなし
いまそうき行末とのみ思ひしは老を待ける心なりけり
ふた〻ひのとのは計きこえあけてこまかに□身をそ憂ふる
とも舟の殘るこ〻ろもかへりみすまたひとりこく和歌の浦人
住吉のかみのみるらんそれならて人をたのまぬ道そかなしき
月も日もをそくそ廻るわか君のひさにすむへき御代を照して
今はその八百萬代をまつかせやはこやの山の聲と成らん

## 夏日侍　大上皇仙洞同詠百首應　製和歌

# 散位正四位下藤原朝臣爲相上

## 春二十首

立春

來る春も都の空をはしめとやのとけき色にけさ(のイ)霞むらん

霞

かこ山のむかしの日かけ立かへりおもへは遠くかすむ春(空イ)かな

ましはたく煙をこめて山本のさとあるかたは猶霞むなり

鶯

やと近くめくれる竹をふるすにて谷よりまたぬ鶯のこゑ

春雪

山かせのふきまく雲(空イ)にかつきえて庭まてふらぬ春のあは雪

若菜

もえ出る(そむイ)わかなすくなき春日野の雪つみませてかへる里人

梅

さそふへき風は霞にへたゝりて梅かゝちらぬ(しらむイ)まとのあけほの

おる人のつらさもいはし梅の花さかぬ宿にはさそなゆかしき

柳

岸とをき川瀬の霞するはれて柳にみゆる春風の色(の色かなイ)

春雨

ふかくたつ霞はかりに中空(にそらとぢてイ)に見えぬ雲よりそゝく雨哉

歸鴈

我歸るみちはまれなるふるさとにとし〳〵やすく(かりのやすくイ)鴈の行らん

花(眉イ)

花はまたえたにこもりて山さくらまたぬ若葉の色そさきたつ

一枝はいつくの花そあふ人に咲きはしめけるかた(たイ)をとはゝや

暮ぬまは中々かすむ山のはの入日さやかに花そ色つく

けふはまた道ふみかふる櫻かり(はなイ)きのふの花(やまイ)は誰かとふらん

立ならふ峯の梢を吹く風に松よりもちる山さくらかな

春月

はるゝ夜のあはれはいはし月影はおほろにうつる須磨の浦波

藤

春暮る梢の藤のかたはらに又こと花もみえぬころかな

欸冬

暮はつるなこりに咲て山吹の花さへ春をおしみかほなる(けるかなイ)

暮春

ちる花の別にこりぬ心とて殘りの春を又やしたはん

## 夏十首

卯花

おのか咲色よりも猶卯花は月と雪とのなさけ(あはれイ)をそかる

郭公

ほとゝきすいまやと思ふひと聲を(にイ)たのめてくもる村雨の空

なく聲もひはらの奥にこもり江のはつせをいてぬ時鳥哉

寝覺する我をはとはて郭公またぬいつくの夢になるらん

夏月

まち出しはやまの木葉茂りあひてかけとをくなる月の庭哉

五月雨

湊川うは浪はやくかつこえてしほまてにこる五月雨の頃

盧橘

袖の香のあはれ幾世に殘るらんやともふる木に匂ふたち花

螢

行ほたる神たにけたぬ思ひとやみたらし川の浪にもゆらん

夕立

はるかなるなかめもすゝし難波かた生駒の雲の夕立の空

納涼

せく水もたよりありけり木かくれに秋涼しくくらすけふかな

## 秋二十首

初秋

さきたつはいつれともなし草のはら露と風との初秋のころ

七夕

歸るさの袖ぬらすらしかさゝきのよりはにかゝるあまの川浪

露

年へぬるうれへの袖にをきなれて草葉もしらぬねやの白露

荻

朝またきなかはゝ露にかたふきてひとかたそよく風の下おき

萩

うへさりしいま一もとのくやしきは花咲のちの庭の秋はき

薄

をかのへやすゝきかたよる秋風に春の柳の面かけそたつ

秋夕

心からゆふへを秋になかめすは色なる雲の空もうからし

虫

聲たえすうらむるむしも我はかり身を秋になす物は思はし

鹿

山さとは枕はなれぬしかの音に秋とて夢のなかき夜もなし

初雁

霧の上にあまたきこつる聲よりも見れはすくなき雁の一つら

月

くれぬより月のすかたはあらはれて光はかりそ空にまたるゝ

風すさむかきほの草の下葉まて落れは露をしたふ月影

月にのみなくさむ秋はさらしなの里の心やしらて過けん

よひのまの光にもにぬあはれかな人さたまりてむかふ月影

なかめこし身はいたつらに秋をへて行末思ふ月そかなしき

擣衣

ふくる夜の月かけしたふ山かつは庭にいてゝや衣うつらん

霧

露しろき草の上より晴そめてをちかたのへに殘る朝霧

紅葉

秋ふかきみやまの木末雨そめて一葉かつちるくれのさひしさ

時雨よと何いそきけん紅葉はのちしほになれは秋そとまらぬ

九月盡

こよひわかやとにはしめよ行秋のおしむ所にとまるためしを

## 冬十首

初冬

いつしかと時雨の空にうつる日のかけよはくなる神無月哉

時雨

今までにほしこそやられかしは木の影をはなれし袖の時雨は

落葉

おしまれぬくちはゝ下にとゝまりてもみちふきやる庭の木枯

冬月

風をいたみ氷れる雲にかけもりて月も雪けの空そさむけき

霰

山風にふるやあられのころ〳〵をこたへてさやくましは椎柴

雪

霜まてはちくさのあとも見しのへの雪にわかるゝ秋の面かけ

里あるゝよしのはふるきあとゝしてつもるも久し代々の白雪

あくるまて猶もふりそふともし火のかけより見つる庭の白雪

千鳥

夜をさむみつはさに霜やおくの海のかはらの千鳥ふけて鳴也

歳暮

我身世のうきもはてある年ならはちかつく春も急かれやせん

## 戀二十首

初戀

思ひあへぬこゝろより猶さきたちて泪のしるはこひち成けり

忍戀

かひなしや名のみしのふの浦とても浪越袖をほさて見えなは

をのつからかたりあはするかたもなく心ひとつにそふ思ひ哉

不逢戀

一夜たにまちもならはぬ心にはそれもゆかしき空たのめ哉

あふことはなきさの小舟いつかたにしはし心のとまりさためん

きぬ〳〵も我またしらぬ道芝にあしたの露ははろふ日もなし

下紐につけたる草は名のみして心にかれぬ人の面かけ

うきかたにいかなる夢かかよふらん我思ひねはひとつ面かけ

待戀

僞もかきりあれはとたのむ夜のいくたひふけて獨ねぬらん

さのみやはこりす待見ん憂人の忘れやすさにならふよもかな

初逢戀

ぬれなからかさねそめつる我袖にいつはらさりし涙とはしれ

曉別戀

あくるまの鐘をもまたぬつらさかな夜ふかき鳥の聲に別れて

逢不過戀

結はてもあらまし物をなれし夜のたのみを今の夢としりせは

道もなき蓬か庭にみるもうしとはれし程はしけらさりしを

初よりたゝ一かたにつらからて情をませしいつはりそうき

忘戀

なれし程は思ひもしらてわすらるゝ後こそ人の心をもみれ

なのめこしとの葉のこる玉つさをあらぬ筆かと人に見せはや

そのまゝにまたかけも見ぬわすれ水袖には深き流とそなる

恨戀

語れかしかゝる恨のたくひあらは共もなくさむかたも有やと

有さらん後の名迄は思はねはうきをなし世になき身ともかな

## 雜二十首

曉

あまたなくゆふつけ鳥の聲やみて又しつかなるあかつきの床

松

あらましの心のうちの手向草まつとはしるや住よしの神

竹

むなしきを爲とはすれと呉竹のうきふしあまる身にそ數そふ

山

代々の跡をたとるも悲しくらゐ山おやに越たる人もある世に

河

さゝれゆくたましま川のあた波も堀江になれは音そ長閑けき

橋

たよりあるきしの岩間にかけとめてすくにわたさぬ山川の橋

關

わすれすよ夕の雨にせきこえてかね聞そめしあふさかの山

旅

行先のとまりや遠き此里をあさたつほとはあふ人もなし

草枕いかにむすはんふるさとのかたみの夢もあらしふくよに

海路

いそけともなを山見えぬ浪のうへの雲をとまりとむかふ舟人

山家

いほちかきつま木の道やくれぬらん軒端にくたる山人の聲

峯ふかき木末あまたにつたひきてひと聲になる軒の松風

田家

山もとのたけよりおくに家ゐしてたのもをかよふ道の一筋

述懷

君にわかつかへむ爲といひをきし道にしもなと物思ふらん

とのはも人の數にはもれやせん雲井をしらぬ身のたくひとて

夢

おもひいてゝ人に語るは稀なれとよな〳〵つねにみゆる夢哉

神祇

祈りをきし末をはたえす照しみよけふも日よしを仰く神かき

尺教

へたつなよつゐには西とたのむ身の心をやとす山のはの雲

祝

和歌の浦のあまのたく繩なかゝれと祈るかひある君か御代哉

君はたゝ心のまゝのよはひしてちとせ万代數もかきらし

奥の百首之内見他本歌

花

心ありてのこすか花をけふこそはさそひもそむる春の山風

郭公

すきやらてなけほとゝきす立待の月もこよひのあかぬ詠めに

夏草

ときゝぬと野にも山にもをく露のきみかめくみになひく夏草

紅葉

もみちはも心よいかに露霜のかほとにそむる色とやはしる

初冬

冬來てはそめこし秋の木末をはをちはにかゝる村時雨哉

又云。奥百首者無端作。外題藤谷百首云々。

〔右爲相卿百首以圖書寮本校合〕

# 爲定卿藤川題百首

## 春二十首

關路早春

やすらはてこえける春のたよりとや霞の關の名にやたつらん

湖上朝霞

志賀の浦や浪まもかすむ朝なきにのとかにわたるあまの釣舟

霞隔遠樹

花さかぬ四方の梢の春霞まつとはかりのこゝろへたつな

窻中聞鶯

古巣いてゝなれも旅なる程なれやしらぬ野山のうくひすの聲

隣家竹鶯

聲は猶かくれぬ物とあしかきのへたつる竹に鶯そなく

田邊若菜

秋ならてとはるへしとは知さりしおなし田面に若菜をそつむ

野外殘雪

もえいつる草の葉すゑもあらはれてあさゝは小野に殘る白雪

山路梅花

梅か ゝも袂にとまる匂ひとてしはしやすらふ春の山越

梅薫夜風

さそひゆく風のたよりの梅花かを尋ねても猶やまとはん

水邊古柳

影うつす池には草の茂るまて春をそへぬる青柳のいと

雨中待花

またれつる心つくしにふる雨のめくみをいそくやま櫻かな

野花留人

花の香にとめし心の名殘とてすみやはてなん野へのかり庵

遠望山花

まかへつる雲ともみえす山櫻はては霞のたちへたてつゝ

曉庭落花

有明の月はつれなき庭の面に花や別の時をしるらん

故鄕夕花

みる人もなき故鄕の梢とてくるゝもやすき花の色かな

河上春月

春ことにかすむならひの名取川なき名ともみぬ月の影哉

深夜歸鴈

したふそよまたふかき夜の月影に面かけとめて歸るかりかね

藤花隨風

かせ吹は松の下水行かたに木末もなひく春の藤なみ

橋邊欵冬

いたつらにとはれし春をやまふきの花にそかこつ谷のかけ橋

舟中暮春

したへとも春はとまらぬおなし江にたなゝし小船清や歸らん

## 夏十首

卯花隱路

卯花の色にも猶やたとるらん雪にまよひしをのゝほそ道

初聞郭公

數ならぬ身にはならはぬはつ音とてきゝてもたとる時鳥かな

山家時鳥

ほとゝきすきかすといはゝ山深みすむかひなしと人や思はむ

池朝菖蒲

池水の浪よせかけてあやめ草けさひく袖に露そみたるゝ

閑居蚊遣

蚊遣火の煙たてすはいかにしてこの山陰のやとをしらまし

盧橘驚夢

夢ならてむかしにかよふ名殘とやね覺の袖にかほるたち花

杜五月雨

かきくらす日數もしらすかしは木のもりて久しき五月雨の頃

野夕夏草

露結ふ夕になれは夏の野の草のしけみも分ちかねぬる

澗庭螢火

谷ふかみ淺からぬ身のおもひとはよそにしられてとふ螢哉

行路夕立

こえやらて日數かさぬる山ちをもやすくそ過るゆふたちの雲

## 秋二十首

初秋朝風

いつのまに吹かはりけんこのねぬるあさけの袖の秋のはつ風

閏月七夕

天河あはぬふ月をかさねてそなれ（おなイ）し恨の數もそひける

野亭秋萩

秋萩の花もあたなる夕露にむすふもかりの野へのいほかな

江邊曙荻

明わたる入江の浪は（もイ）しつかにて荻の末葉にのこるうら風

山家初鴈

うきとを思ひつらぬる鴈かねもなきてそきぬるあきの山さと（もとイ）

海上待月

わたの原いつくを波のかきりとて空ゆく月のかけをまつらん

松間夜月

もる月の心つくしのつれなさも松にそことにおもひしりぬる

深山見月

花ならて又あくかるゝ心かなよしのゝおくの秋のよのつき

草露映月

むすひをく露の契りもあらはれて軒のしのふにやとる月かけ

關路惜月

夜もすからやとるはかりの月影をとめすはつらし須磨の關守

鹿聲夜友

數ならぬうき身の友とたのむ夜はおもひやまさるさを鹿の聲

田家擣衣

まとろまてもるとはかりのしるしかな秋の田面に衣うつこゑ（なりイ）

古渡秋霧

わたし守舟さしかけていそくまてくれぬとみゆる淀の河霧

秋風滿野

かはりゆく色をはしらす武藏野やなへて草葉に秋風そふく

籬下聞虫

咲みたす花のまかきになく虫や秋は千種に物おもふらん

紅葉寫水

谷川の淺瀨の水やまさるらんふかきもみちの色をうつして

山中紅葉

山ふかきあきの紅葉の色よりも淺からすこそたゝねいりぬれ

露庭槿花

はかなしやあたなる露の色にたに猶うつまるゝあさかほの花

河邊菊花
色かはる霜やはをそき河風にほのかにうつるしらきくの花
獨惜暮秋
とまらすはいかにせんとて行秋の我身ひとつに悲しかるらん

## 冬二十首

初冬時雨
神無月あはれはかなきしるしにてあきより冬にふるしくれ哉
霜埋落葉
さそひこし嵐もおのかまゝならて霜にくちぬる庭のもみち葉
屋上聞霰
いとはれししくれの後の槇の屋に音もかはらてふるあられ哉
古寺初雪
さそはるゝ雲のまよひにかつふりて雪も初瀬のやま風そ吹く
庭雪厭人
とはれける身のならはしのありかほに跡いとはるゝ庭の白雪
海邊松雪
ふる雪はつもりにけりなしら波の音せてこゆるすゑの松山
水鄕寒蘆
難波潟入江の波は音たてゝ蘆の枯葉は風もたまらす（とイ）
湖上千鳥
音絕てしかの浦なみこほる夜はたちもさはかて鳴千鳥かな
寒夜水鳥
池水にたちもはなれぬ蘆鴨のうきねはかりそこほらさりける
歲暮澗水
いたつらに氷かさねて行く年の日數もしらぬ谷川のみつ

## 戀二十首

初尋緣戀
さそひくる霞のひまの春風にまたみぬ花の行衞をそとふ
聞聲忍戀
よそにきく雲井の雁の一聲にうき名忘れていかゝしたはん
忍親昵戀
なき名そといひても果のいかならん親の守りを背くみならは
新不逢戀
いかに猶つれなからまし神たにもうけぬ契の程としらせは
旅宿逢戀
かはらてもあたなる中そしられぬる只一夜なる草の枕は
絲厭曉戀
うき物と聞しはかりの曉をわかれぬさきの身にいとふ哉
歸無書戀
立歸りとはれぬ程もつらからすこよひうき身と人にしられは
過不逢戀
つれなさはかはらぬ中のつらさにてみしを忘るゝ心ともかな

契經年戀

契りしを頼むはかりになからへて消ぬへき身の年はへにけり

疑眞僞戀

かはり行人の心のいつはりはうらみもはてぬつらさなりけり

返事增戀

恨つるわかことはりも忘られてまさるつらさにかける玉つさ

被厭曖戀

うきなから數ならぬ身のつらさをも厭はれてこそ思知りぬれ

途中契戀

あたなりや道の芝草かりそめにむすひはてぬる露のちきりは

從門歸戀

深き夜の別といひて槇の戸のあけぬにかへる身とはしられし

忘住所戀

忘るとて人のからたはなをさりにをしへし宿とわれも恨みん

依戀祈身

神にたにうき身の程をしられすはあふにかへんと猶や祈らん

隔遠路戀

いとふそよかよふ心のたのみたになくてへたつる嶺のしら雲

借人名戀

いかにせんうきなをかへてかこつ共つらき心の人をわかすは

絕不知戀

おなし世に行衞をさへにたとることそ餘りよそなる契なりけれ

互恨絕戀

つらかりし心くらへをたかうきに思ひさためてとをさかる覽

## 雜二十首

曉更寢覺

曉の鳥のなく音をしるへにてねさめの程そ身にならひぬる

薄暮松風

吹風もおなしみとりの松かえに夕は何とさひしかるらん

雨中綠竹

わか君のめくみをそへてふる雨にみかきの竹の色そことなる

浪洗石苔

むす苔は色もかはらてうちよする岩間の波の音そくたくる

高山待月

待出る程そ久しきかつら木や高間の山の秋の夜の月

山中瀧水

瀧の音もまた聞なれぬ山水にならはてすむは心なりけり

河水流淸

千代をへて一度すめる川水のなかれは君そくむへかりける

春秋野遊

立かへりおなし野原にあくかれて花も紅葉も身にそなれぬる

關路行客

旅人のたゑぬゆきゝに相坂の關守いかにくるしかるらん

山家夕嵐

山里にたえてすまんと思ひしは嵐もきかぬ夕なりけり

山家人稀

もひやれかるゝ人めの冬にたにかきらぬ山のおくの淋しさ

海路眺望

みわたせは浪間の日影くれぬらしはや漕歸れあまのつり舟

月羇中友

ちきらすよなれし都の夜半の月草の枕の友となれとは

旅宿夢雨

都おもふかりねの袖にふる雨やほさぬ涙のたくひなるらん

海邊曉雲

へたてつる夜の間の雲やわかるらんあらはれそむる沖津白浪

寄夢無常

あたにみし一夜の夢のそのまゝにさめてはもとの浮世之けり

寄草述懷

うつもるゝ霜の下草あらはれてさかへん春のひかりをそまつ

寄木述懷

さりともとたのみをかれ(けイ)て春日山うき身わするゝ北の藤なみ

逐日懷舊

しのはるゝその古はへたゝりてまたぬ月日のなとつもるらん

社頭祝言

よろつ代に松のちとせの色そへて君をそ守るすみよしの神

〔右爲定卿藤川題百首以圖書寮本校合〕

# 師兼卿百首

〔右舊本闕〕

# 續群書類從卷第三百九十二

和歌部二十七

## 前參議雅有卿百首

## 入道大納言雅世卿百首

〔右兩書共舊本闕〕

## 入道大納言雅親卿百首

秋日同詠百首和歌

左近衞權少將藤原雅親

春二十首

立春

久かたの雲井もけさは霞つゝ長閑なる世と春は來にけり

霞

春はまた朝けの風や寒ぬらんたえ〴〵かすむ四方の山のは

鶯

夜をこめて古巣や出し朝戸明の軒はの竹に鶯の鳴

殘雪

朝日かけさすか高ねはかつ消て山本遠くのこる白雪

野若菜

野澤なる雪も氷も打とけて今日諸人や若なつむらん

里梅

此里の梅の匂ひを吹風にあたりの宿も人やとふらん

簷梅

袖ふれて猶あかなくにしめをかん軒はの梅の深き匂ひを

春月

春の夜の雲のいつくもおほろにて霞はてたる月の影かな

春曙
松かけはまた夜をこめてよさの海や浪よりしらむ春の曙
歸鴈
聲たのみ猶したへとや春霞たつそら遠く鴈の行らん
春雨
若草の下もえいそく程なれやこの比晴ぬ春雨の空
柳
春といへは岸の柳のいとはやもふかきみとりの色にみゆらん
待花
芳野山また梢の空も猶心にかゝるはなそつれなき
初花
まかひつるよそめも嬉し白雲を分入山の奥の初花
見花
あかすみる身には覺えす木の本になれし日數は花そしるらん
盛花
櫻はな今を盛と見る人も心ちらさて日をくらすかな
落花
寒かへる風とやいはん木の本に又ふりつもる花のみ雪を
欵冬
芳野川櫻ちりしく浪のあやにおりえて咲る岸の山吹
藤
松かえも春はみとりの一しほに猶色はえて咲る藤なみ
暮春
かきりある日數の外の春もかなしたふ心のなくさめにせん

## 夏十五首

更衣
けふといへは春吹風も立かへてさらに涼しき夏衣かな
卯花
山賤の窓にまちかき卯の花もあつむる雪のひかりとやみん
待時鳥
忍ひ音は猶そまたるゝ時鳥つれなき名をは世にもらしても
聞郭公
いとゝしく夜はのね覺のほとなきに過かてになけ山時鳥
早苗
早苗とる遠山本の一村に暮ぬとさはく田子の諸聲
橘
しけりあふ軒のしのふも此頃は花橘の香に匂ふらし
五月雨
いつかたに行ともみえぬ雲とちて空に日をふる五月雨の比
夏草
分佗る人めはかれて山里に猶しけり行庭の夏草
夏月

程そなきかたふく影をしたふまにやかて有明の山のはの月

鵜川

短夜や明るもいと丶早瀬川こふねのかゝりかけもとまらて

螢

夕やみは友をもをのか光そと空にみたれて飛ほたるかな

夕立

風渡る高根は晴て音羽山ふもとにかゝる夕たちの雲

蟬

しけりあふ木々の下道分行は空に隙なき蟬のもろ聲

納涼

かくてしも夏をはよそに忘水わすれぬ袖に結ふ涼しさ

夏秡

御秡する袖にそしるき夏と秋と行かふ今日の賀茂の川風

## 秋二十首

初秋

身にそしむ夏は昨日にくれ竹の一夜にかはる秋のはつ風

七夕

絕はてぬ契にかけて天の河いく世になりぬかさゝきの橋

荻

いつのまに露も夢をも結はまし夜るはすから荻の上風

萩

宮城野の木の下かけて色そひぬ露おきあまる萩のにしきに

虫

長夜もはや明かたの露霜にかれなて誰を松むしのこゑ

鴈

したはれしをのか越路の名殘まて空にしらるゝ初鴈の聲

鹿

此頃は山田のなるこなれぬとも庵りまちかく小鹿鳴らん

秋夕

さそひくる入會のかねの聲のうちにさひしさそふる秋の夕風

秋田

風ふかてゆたかなる代のしるしとや穗波みたれぬ秋の小山田

山月

風吹は雲さへよそにさらしなの山のかひある月をみるかな

野月

あらち山嵐は雲を吹しきてやたのゝ露に月そくまなき

關月

關の戶をこゆるそおしき更て猶月はくまなくすまの浦風

橋月

あくかれてねぬ夜やいとゝつもるらん月すみ渡る宇治の橋守

浦月

行舟の數さへみゆる月影に浪路さやけきうら風そふく

菊

をけは又うつろふ物を初霜のきえせぬ程や白菊のはな

擣衣

賤のめか夜の衣をうちつけにいね〔マヽ〕かての秋かせのこゑ

霧

鐘の音は嵐に消て高砂の尾上にふかき秋の夕きり

杜紅葉

もみちはもちしほになりぬ幾度か生田の森は猶時雨らん

河紅葉

山姫の手向なるらん秋ふかき神なひ川の瀬々のもみちは

暮秋

なにをかは秋のかたみにとゝめをかん紅葉も月も長月のそら

## 冬十五首

時雨

神無月さそふ嵐をかことにて猶すきやすき村時雨かな

落葉

ねやの上に音聞そへし時雨こそ夜のまにつもる木の葉之けれ

霜

吹風も猶音寒てさやく也いなのの小篠霜ふかきころ

寒草

枯はつる尾花か袖も霜とちて宿り稀なる野への夕風

冬月

霜寒る軒のしのふを吹風にもりくる月の影そこほるゝ

氷

此頃や人めも草も枯はてゝ野中のしみつこほりとつらん

霰

日かけさす野への霰は消ぬとも霜となりてや又こほらまし

千鳥

とも千鳥聲こそさはけ鳴海かたしほひの風や寒まさるらん

水鳥

池水のこほらぬ程そあし鴨のうきねさためぬ聲そ聞る

淺雪

霜枯の野への芝生もけさはまた隱ぬほとに積る白雪

深雪

ふり積る程やこそにも白雲の下おれしけき庭の呉竹

神楽

燒すさむ雲居の庭火ほの〲とうたふや星の影しらむらん

鷹狩

箸鷹をすゑ野の草は霜枯てかくれぬ鳥を猶やたてまし

炭竈

ふる雪に煙はいとゝあらはれてよそにまかはぬをのゝ炭かま

歳暮

長閑なる春にあふへき心よりいそくならひのとしの暮かた

## 戀二十首

寄月戀

つれなさのたくひとそみる待出て明行空に殘る月かけ

寄雲戀

半天にたゝよふ雲の一かたにさためもやらぬ身の契かな

寄風戀

今はうき身を秋風よさのみなと心もひかぬ方にふくらん

寄雨戀

ぬれつゝもとふへき人の心かはそをたに曇れむらさめの空

寄露戀

つゝみえぬ袖の涙をしのふ草葉末にあまる露とたにみよ

寄山戀

言の葉にさのみはいかてつくは山しけき恨の數はありとも

寄原戀

いかにせんあふの松原名のみしてつれなき色の變りはてすは

寄海戀

思侘今は色にもいつの海やおきをふかむる心とをしれ

寄橋戀

又とたにたのめぬ中やつゐに身もかけはなるへきくめの岩橋

寄關戀

へたて行人の心のつれなさもこえぬにこそはしら川のせき

寄木戀

つれもなきしろしなるらし契てもはや年月をふるの神杉

寄草戀

思ひ河身をうき草のつゐにさてよるへも波に枯はてねとや

寄虫戀

かりにたに涙ひるまもなつむしの夜はこかるゝ身とは知すや

寄鳥戀

庭の池の鳰のうきすのうきとたにしられぬ中の寄邊をそまつ

寄獸戀

逢事はいとゝ照射による鹿の音にたにたてぬ身とはしられし

寄玉戀

思ひ入戀ちもさのみまよはしな涙の玉のひかりありせは

寄鏡戀

涙にもくもりはてなて中〳〵にうき面かけのますかゝみかな

寄枕戀

ひとりねの夜床の塵のつもるとも人には何かつけのをまくら

寄衣戀

返してもかひこそなけれ物思ふ身はいねかての夜半の衣を

寄糸戀

結ふへき契にさはるふし糸のとけぬ恨におもひみたれつ

雑十首

暁鶏

我君につかふへき身は暁の夕付鳥のこゑをまつかな

松

年をへてあふけはいとゝ高砂の尾上の松そふりまさり行

竹

まつりことすくなる時と呉竹の代はみな君かなひくとそみる

山家

かりに住身ならはいかに聞わひんみ山の庵の松風のこゑ

田家

かりはつる山田のひつちもるとしもみへぬ庵は通路もなし

旅

古郷は遠くなり行旅ねにも夢路しあれは立かへりつゝ

浦鶴

わかの浦や道廣き代はあしたつもよるへ嬉しき音にやたつ覽

述懐

言の葉をあつむる君か御代に逢て我思ひ出や身にあまるらん

神祇

道まもる神や受らし光あれはひろふ言葉のたまつしま姫

祝

四方の海の波風きかぬ御代なれは君かめくみにかゝる嬉しさ

# 入道中納言雅康卿百首

詠百首和歌　　沙門宋世上

## 春二十首

立春

春はけふたつやかすかの杉むらにおとするほとの風も吹こす

霞

都にてよそに思ひし峯の空ひとつにかすむかつらきのやま

子日

三笠山もりのしめなは姫小松引くらへてや千代を契らん

暁更鶯

なよ竹のよなかしとてや明るをもまたて軒端に鶯の啼

若菜

身のおいをかたみにつまは年毎の野邊のわかなを何に入まし

紅梅

から錦とはりをかけて色も香も手向にあける梅本の神

柳露

露はかくあたなるものよ青柳のよはき絲をたのみてそおく

春月

木間より花にかすめる夜半の月なかはの秋はさもあらはあれ

春雨

たひ衣きのふの袖にうれしきやけふ降いつる春雨のそら

雉

草かくれありともしらて狩人のこゝをすきのにきゝす鳴なり

雲雀

空になけは澤邊にのこふ雲雀毛のこまほしとのみ子や思ふ覧

歸鴈幽

玉章をたれにみへしとおもひ羽のそれも霞みて鴈のゆくらん

春日遲々

いまそしろあかぬは人の心とも暮やらぬ日をなほしたひつゝ

山花

よしの山花にそみゆる人おほみこゝろの色のこきも薄も

河花

立田川峯の春風吹ぬらしはなのうき浪たゝぬ日もなき

花時不閑

春はたゝかくこそ有けれ山風の心さはかすはなの頃かな

花手向

櫻にはおよはすなからことのはの此神かきの花によりなん

落花

散もうし風の尊の名にしおはゝこのかみかきの花によりなん

藤

年ふれは松もちからやよはるらん老木は藤にかゝるとそみる

暮春

身につもる日數そつらき花鳥の色ね計にしとふとやおもふ

## 夏十五首

更衣

世の中の人のこゝろかなつ衣うつろひやすくけふかへてけり

路卯花

うつ木はら花に敷けり沓の跡もさすかにみへぬけさのしら雪

葵

隔なくけふはかけゝり二葉草三は四はのやともかはらす

郭公何方

時鳥いつちなるらん山彦のこたふる山はそこともしれとも

磯郭公

舟よするかひの雫もをちかへりいそのうきねに啼ほとゝきす

早苗

いとまなくおりたつ田子のあし玉も手玉もゆらにとるさ苗哉

社頭橘

たちはなのにほひそなのる神垣に立まふきねか袖のむかしを

五月雨

日をふれは濁るまゝにて飛鳥川淵瀬もみえぬさみたれの空

夏月易明

ほとやなき夏のよすからみる月も秋の一時のかけにくらへて

夏草
なにゝさてうるほふ迄に雨も露ももらしとはかりしける夏草
照射
夏虫にあらぬ小鹿もともしすと身をいたつらになす思ひ哉
鵜河
かゝり火はう舟のたなはてはまたくるしき海に漕や出まし
螢
ともす火はおのか物から行かへり空にほたるのまよふ影かな
夕立
風さはきよそに音してふり來ぬもかれて凉しき夕立の雨
納凉忘夏
松かけに夏なきのみか闇をさへ忘れてあかす夜半のみしかき

## 秋二十首

早秋朝
いつくにか中やとりして秋風の身にしむものとけさかはる覽
七夕言志
かならすとたのむ契やあやうくもおもはてわたる鵲の橋
荻
秋の草のいつれと分てふかねとも獨音する荻のうは風
女郎花
おく露の契さかのとしりなからあたにもなひくをみなへし哉
薄
なほさりの露こそあらめ一本の尾花の袖にいかゝつゝまむ
苅萱亂風
こゝろ有てたれみま草にかるかやを殘して秋の風をみるらん
野虫
とはゝやな露の限のあたしのになれをいつをかまつむしの鳴
峯初鴈
みねこゆる鴈のすかたはかくらくのはつせの檜はら聲許して
鹿
春日野の音をなく鹿はおのか妻つれなかれとや神もいさむる
秋夕情
あやにくになかめくれけり思はしよ嘆かしとすれは秋の夕暮
秋田
かりはてふ時にそ思ふ秋の田のいなおふせ鳥におふせてし哉
上絃月
夜半の月雲をさまりて弓張のいるいとおそき山のはの空
立待月
あかすみてかへるもみちの錦木に立なからやは月の待へき
月似古
月やしるすむ影はかり古にかはらすなからあらすなる世を
老人翫月

なけくそよつひに心にみかきゑす六十に近き月はみれとも

曉憶月

山かつら心にかけてしたへとも入なんとする窓の月かけ

擣衣

夏の夜にかきるものかは秋もなほねぬに明ぬと衣うつなり

菊

けふとにつむとはすれと菊の露わか世のうちも淵とやならん

紅葉

たつた姫心のかきりつくすかと殘るかたなくそむるもみちは

惜秋

なか月とかねて思ひしかひもなくおなしみそりにくるゝ秋哉

## 冬十五首

初冬

神無月これも春たつ空なからかすみもたゝす風もはけしき

杜時雨

名にしおはゝ時雨はすとも濡しとてみ笠の杜にさしてきに鳧

落葉

苔むしろ青根かみねは色かへて木々に木の葉をしく錦哉

霜

いつとけむ程をもしらす松の霜日をへてしろき老のあはれさ

寒草

たかわけし跡ともみへすくちし野に枯葉しとろに霜まよふ之

氷

冬來ては氷やすらん誰かしる水屋の神と名にはきけとも

冬冴月

さむきこと宮こにまさる影そなきこしちの冬の月もみしかと

寢覺千鳥

よをこめてなほ浦風のあわの崎ね覺をいそく千鳥鳴なり

水鳥

いはのうへにあらぬもそよる水鳥のをしの衣を我にかせとて

綱代

幾夜かは川せのあしろうつたへにいをねぬ床にもり明すらん

竹霰

玉あられふる音はかりすか原やふしみの竹のよるもねられす

雪中厭人

一かたにいとひもはてすあらはをしとはねはさひし雪の山里

鷹狩

鳥はなし今は一夜のやとやあるとかりこゑ計して歸るなり

神樂

此神のこゝろはとけてしもむすふ青榊葉をうたふ夜半かな

歳欲暮

もろ人の行としなみもいとなみもいとなくみへてさわく頃哉

戀十五首

寄曉戀

關守も有明まてはよもたへしわかかよひちにおもひたゝなん

寄朝戀

はてはまた雨にしくれん初そとあしたの雲をみてもしらなん

寄晝戀

せめてこの夕もまたてとはゝやと心の馬のすゝむわりなき

寄夕戀

うき時をいつにかきると人とはゝ入相の鐘をきけとこたへむ

寄夜戀

夜をまてとあはれと思へ(マヽ)せりてはとぬるか中なる契はかりに

寄木戀

つれなきをいはん方なき秋にあへは杜も下はゝ移ろふものを

寄火戀

なひきゝぬ心はいつかかはらやの下にたくひのこかれ侘ても

寄土戀

土さけて照日なりとも晴かたき涙の袖やほさて朽なむ

寄金戀

あふ事のかたき契におもひにはま金もつひにわくとこそきけ

寄水戀

あふとなきわか中川に流るゝやけにけ水のたくひなるらん

寄水戀(マヽ)

紅のやしほそむともあさしとやわか思ふ心にくらへてはみん

寄聲戀

いかてかく恨みそふらん玉たれのすこしにきゝし浪の聲にも

寄香戀

ひとりねは人の殘さぬうつり香を我袖しきてなるゝかひなき

寄心戀

しかすかに思ひはやます歎きあまり心のもとくこゝろなれ共

寄形戀

いろそゝけいつるおもひは山なしの花にかけたる夕暮の雨

雜十五首

松作友

さま〳〵のいは木はあれと(との脫歟)こはの心をうつす庭の松か枝

古寺鐘

たれも今豐浦の鐘の風こしにきこえてふくる夜をやしるらん

山家

みてそ思ふあまりかりなる柴の庵はうき世に心のこす人かと

巖苔

羽衣のしらすなてけるいはほとや苔のみとりの立ものほらぬ

名所鶴

なみたてる松はまつにて高砂やなほとし高きつるの諸こゑ

瀧
世をうみて誰山かけにさらしけんたへぬよしのゝ瀧のしら糸
旅宿
世の中もかくこそすまめ行とまる草の枕をやとゝさためて
野遊日暮
いさなへるのへの圓ゐのさか月も日影も西にかたふきにけり
漁舟
舟はたをたゝけはあくる夜をしらて鮒とるならし志賀の蜑人
眺望
あま小舟浦よりをちに猶まさるなかめやかると我にをしへよ
樵夫
つま木にはさりともきゝし山人の花にやすめる心なりせは
夢
けふはかり現とそみる昨日よりをちなる事はみな夢にして
述懐言盡
道まもる此一ことのすみよしの神に手向ることのはとしれ
懐舊
なほもわかみし世はつらし開し世をせめて哀と忍ふ計そ
寄神祝
いのるなるわか身はさても行末をたのむ子守の神となるらん

右者以自筆本書寫。即時校合畢。
飛鳥井雅康卿號二樂院沙門宋世。

## 詠百首和歌

春二十首　宋世

早春
むかへきてそのみち〳〵のとふきも言の葉かはる春やたつ覧
霞
さほ姫のよらてさらせるいとか山霞のころもいかてをるらむ
鶯
これやこの花をぬふてふ笠とりの山かけちかきうくひすの聲
もろこしの鳥もさこそとうくひすのやとりはなれぬ庭の呉竹
子日
きみにちきりわか身をいはひ心をも二葉にわけて引小松かな
梅
難波津にさくやこの比吹風もありかさためぬむめかゝそする
くれなゐのこそめは去年の花よりも色そふ袖にほふ梅かゝ
花
さく花も心あはせてまきの戸をあくれはひらくあさほらけ哉
まつそ見るかた枝さしおほひ櫻花心は花になりもならすも

しはしたゝさかすは花を待惜みよしあし人のこゝろ見えしを
ちり行をあたなる物とみる中に我身おとろく山さくらかな
はなにあかぬ人やむかしはいとひけむ芳野のおくの春の故鄕

春月

春はなを雲の上こそさむからしかされてみゆる月のきぬかな
おいか身は春こそ月をみるへけれ秋の霞むはつらからぬかは

苗代

たねまかぬ春よりしるし山賤のまつおりたつやわさ田成らん

菫

菫草こなたかなたにつむ人のおほ原のへはみちもさりあへす

欵冬

かくしこそゐての下おひ花のひも時しりかほにさける山ふき
はなも葉もしけりそひつゝ我やとの八重垣つくる庭の山吹

藤

あま小舟それもをろさぬいかり繩なかくそかゝるたこの浦藤
一本の松はさなからむもれ木のひとしれぬまてかゝる藤かな

## 夏十首

郭公

時鳥猶こそまためをのか名にあらぬれをなくとしもありせは
月夜にはこぬ人またる時鳥かきくもるにはなれをしそ思ふ
同巢にすむかひあらは鶯のもゝさえつりになけほとゝきす

五月雨

ふるか中の雨間なりけり軒におつる玉水よはきさみたれの空

瞿麥

もえいてしから藍深きませの內にやかて色こき山となてしこ

夏草

夏ふかき杜のした草おいか身もいけるはかりに人はすさめす
ふみしたくすかのあらのに荒熊のあとしとろなるなつ草の露

螢

學ひえぬ思ひをたかはほたるをもあつむるよりや光そはまし
秋ちかきたにのかけ草かけくらみひるもほたるの光見えゆく

夏祓

あやしやな流るゝ水にみそきせはうきといかて歸りきなまし

## 秋廿首

初秋

さひしさのこれをはしめかおく山はいとゝうけくに秋風の聲

七夕

天川いはほをなてし羽ころもゝ稀の一夜はかすやかさすや

荻

いつかみむほのうへ照す月ふけて風なきよはの露のした荻

女郎花

ととへといはぬ色なりこよひたか手枕のゝにさくをみなへし

露
おほ空のものとやはみむ袖のうへに心よりをく秋のゆふつゆ
初鴈
なかすともをのか妻につらたれる雲井の鴈の名やはかくるゝ
身にさむき羽風もよその物ならしさのみはたれに衣かりかね
鹿
たかさこのこもたる松をためしにや尾上の鹿も妻こめてなく
いな葉かる山田の畔にたつ暮はしかや馬ともいかてわくへき
月
我やとはをはすて山か月をみるよな〳〵秋のなくさめもなき
月さへも二ありけりすきたてるふる川水に影をうつして
うらやまし山より西に入月の又よにかへるかけはうけれと
月はかくかろき物かは淺茅生の一葉のつゆに影をやとせる
いかにして今一さほとさしとめむてにはとられぬ月の御舟を
秋夜
なかき夜はあまりにはやくね覺して曉かたそいのねられぬる
擣衣
我門をたゝくもそれときゝなしてよそのきぬたに人かへすゝ
紅葉
たか折し梢なるらむくれなゐのすゑつむ花にあらぬもみちも
あさ露のおき出てみし色よりも夕日てりこき峯のもみちは
そのかみの秋によせつる心をもあかぬ紅葉のかけに知かな
九月盡
かひなしや長月の名をたのめともありしよりけにくるゝ秋哉

## 冬十五首

時雨
日影さへさためなき名にたつ雲の晴みくもりみゆく時雨かな
さひしさをいかにせよとて一とをりすきの板屋をしくれ行覽
氷
たかわたす駒のひつめそあさ川や水に跡あるうすこほりかな
寒草
あをきさへあはれにみえて寒けきや小田のひつちの霜深き色
冬月
おもほえす身もひえにけり冬の夜の雪の山よりいつる月かけ
千鳥
つゐにわれよみえぬ和歌の浦千鳥浪の數なきねをのみそなく
水鳥
水の上に浮たつとりを見てもなを我あしふみの道をしそ思（有注）
霰
葦の葉のうへにくたけてほり江には玉をもしかぬ玉あられ哉
雪
つけやらはとひこむ人の跡もおしきえむもおしきけさの初雪

春にみしけにはつ花もはつ雪もさけるさかさる色にふるらし

桑原やかふこは見えぬ冬かれにわたひきかくるけさのしら雪

ふりしけは中〳〵ねやをあたゝめて雪こそよはの衾ともなれ

ふるまゝに下折たかく山ひこのこたふる木々も雪やちるらん

埋火

み吉野のふる郷さむき埋火にあたらさくらをきりやとるらん

歳暮

これそけにひつしのあゆみみな人のゆきかひいそく年の暮哉

## 戀十八首

初戀

今そしる人はこれをやこひ衣つゆをかぬ袖のうちしほれゆく

忍戀

我涙とはゝこたへんとしあれは嬉しきせにもるはならひと

おもはゆく思ふおもひは蓮葉のうらにつく名も流石いはれす

見るもうしあまりよそけになすも又人のめたつる中そ苦しき

契戀

おほつかなそのとのはに霜をかはたのむ契もかれやしなまし

待戀

いまはこし思ひやたえむ行かへる心つかひのとかになしても

僞戀

ひとたひはま事やあらむ僞も又いつはりにかはる世ならは

不逢戀

しらせはやつらきこゝろはさてをきぬ報有世を人はいかにと

ひたゝくみ住世なりとも玉手箱ふたみかはるを扨いかにせむ

別戀

殘しをけは我身はなれぬ心にもわかれていつるきぬ〳〵の空

よしさらは別るとのかすそはゝそれにつれたる契もそある

朝戀

人はこす朝きよめするつてもあらはせめて枕の塵やはらはむ

夕戀

とはし唯心にたかふ夕けならはあらぬ人にもうさやそはまし

遇不會戀

しゐて、なとしたふ心そ一夜こそ此世後のよかくるなさけを

久戀

行末のうきにもたゝ、て存命へはなかからの橋と身こそいはれめ

後の世をたのむ契のなかならはあふ事ちかし年そへにける

恨戀

つらしともなか〳〵何かいははしの末もとをらぬ恨はかりに

後にこそかくまていはむとかはとくゐのちたひも恨やりしを

## 雜十七首

地儀

けふあれとあすをたのまぬ飛鳥河我身のうへに月日なかれて

同しくは千代にもこえよ君か齢八十すみ坂をかつ〳〵にして

雜物

千さとまて心をつたふ中たちや手にとる筆のちからなるらん

君を寫す鏡にゝたる世にしあらはすくなる道は直ならましを

名所

高き名をたとへていはゝ富士のねも大内山のふもとにや見む

草

さね葛かゝる憂身といとふなよ後もあふへき御代のさかりに

木

人とにゆつりはをかしをのか千世を君にとのみや松も思はむ

獸

ともすれは朝をまちし古へにおとろきなるゝにはとりの聲

田家

あはれなりいまはそほつを主にて人かけもせぬ小田のかり庵

山家

やまよりも心のおくをもとめすは深くそむくと人にいはれし

そのまゝにあかしくらしつ山里の竹のはしらもまろか丸ねは

旅

宮こいてしこよひそ草のまくらつくつまやの床は妻もま遠に

なさけしもかはる心よたひにして昨日の宿もけふのあるしも

述懐

いきて世に嬉しき人はさもあらて何そはありて身を嘆くらん

懐舊

なをも身に物忘れせぬ老ならはしのふる事のかすやそはまし

神祇

神に身を任せてけれは春日山ふしのうら葉のうらみしもせし

祝

わかきみとあふかさらめや梓弓すゑふりおこし道おこす代に

延徳三年十一月三日春日社法樂　左少將在判

右百首者所故入道宋世自筆無疑。

【右雅康卿百首一通以圖書寮本新補之】

# 入道大納言雅庸卿百首

## 御着到百首

雅庸

第一

立春

三日

長閑にもこゝのかさねはけふに明て嵐もきかぬ春やたつらん

山霞

日 さほひめのつゝむ霞の袖よりや遠山かつらもれてみゆらし

海邊霞

五日 音せぬや奥の小島もたちこめてふかき霞の八重の鹽風

鶯

六日 白雪のふる巣の山もわすれてや春日にむかふ鶯のこゑ

野若菜

七日 春日野の雪の消まも里人のつみもてかへるわかなにそしる

梅風

八日 咲比は花なき庭の春草も匂ひになひく梅の下風

柳

九日 立ならふ木々の中より春の色をまつくり出す青柳の糸

春月

十日 みし秋の哀れも春にまさらめや霞る月の明ほのゝ空

春雨

十一日 しつかにて夕さひしき草の庵に音聞程の春の雨かな

歸鴈

十二日 名殘思ふ春に一たひ行鴈のとこよわすれてかへらすも哉

第二

早蕨

三月十三日 山賤のしらてや折ものこすらんふかき岩木のかけの早蕨

栽花

十四日 いかてかは散を恨みしつらさにもこりす植そふ花にはある覧

尋花

十五日 咲ぬやといりてかりねの夢にさへまたみぬ花を尋行山

盛花

十六日 盛なる花に梢はうつもれてこゑこそきかね雪の下折

挿花

十七日 おらてしも歸るはさそなうらやまん花の錦を袖のかさしは

落花

十八日 ちれは猶みとりもしろくみ山木にさかせて花のあらし吹なり

苗代

十九日 引しめもせきやる袖も水口にかけやみるらん小田の苗代

款冬

二十日 川浪に咲てうつろふ色はたゝうき藻花さく岸の款冬

藤

廿一日 よるのまに花のしからみかけそめて雫もふかし松の藤浪

暮春

廿二日 暮行もしらし物をとかそへこし日數くやしき春にも有かな

第三

更衣

三月廿三日 しゐて猶花の衣やかさねましけふぬきかふる習ひならすは

葵

廿四日
神山にけさ分入て諸葉草かけつゝ露の玉かつらせり

待郭公

廿五日
あやにくにまたすはなれもかくまてはつれなからしを山郭公

郭公遍

廿六日
明方は一かたならぬほとゝきす月をなこりに聲やあらそふ

菖蒲

廿七日
かりのこすかけかとみえて池水にふきし軒端の菖蒲うつろふ

橘

廿八日
ふれにける袖かとはかり立花の香をかくはしみさそふ夕風

五月雨

廿九日
せきとめぬ水上いかに天河雲よりあまるさみたれの比

夏草

晦日
みるに花の秋をそまたぬなてしこの咲そふ色にましる夏草

夏月

四月一日
茂りそふ月のかつらはさはらぬを明るそつらきみしかよの空

蚊遣火

二日
ねやにたく煙やうすく成ぬらんあとよりも又しけき蚊の聲

第四

螢

三日
月いてぬ空にみたれてよるひかる玉をやみする螢なるらん

池蓮

四日
蓮葉は茂りにけりな曇なき池のかゝみもくもるはかりに

夕立

五日
なか雨にまさりしよりも瀧津せは猶音たかき夕立のあと

納涼

六日
岩清水結ふ袂の涼しさや夏山なからあきの夕かけ

六月秡

七日
松かせも袖に凉しく吹をくれみそきにかへる志賀の浦浪

早秋

八日
今よりは桐の一葉に散そひてみるへき月の秋やきぬらん

七夕

九日
彦星も逢瀬まつまは物やおもふ雲のはたての天の川なみ

荻

十日
音たてゝ露吹風も夢さへもむすひやはする軒の下荻

萩

十一日
詠れは山のにしきに先たちて色とる野邊の秋はきの花

女郎花

十二日
秋風になひきやすくてあたなりと名にしおふ野の女郎花哉

第五

叢虫

十三日
あるか中にえらひもてきて草深き野邊より庭の松むしの聲

初鴈

十四日 天飛もそれかとたくふ琴の音に引とゝめてよ初かりの聲

田鹿

十五日 明はなれ歸る門田の跡にしも友したひてや鹿の鳴らん

秋夕

十六日 哀れさの夕にたへす昔よりうき秋とたれいひもそめけん

山月

十七日 晴やらて入さの山とみえなから影は雲まにあり明の月

橋月

十八日 橋姫のしたひみるにもいか計かたふく月はうちの川なみ

浦月

十九日 今までもまたみつの江の月影を思へはくやし天のはしたて

社頭月

廿日 暮るより光さしそふかたそきの行あひにみゆる月讀の杜

古寺月

廿一日 かき置しふるとのはも思ひ出てぬ石山寺の月にむかひて

曉鴫

廿二日 夕より床はなれすもあくる迄ふしみの澤の鴫の羽かき

第六

擣衣

廿三日 吹めくる風につれてやあやしくも里なきかたに衣打こゑ

河霧

廿四日 をはつせやまた夜をのこす朝霧にむせふ川瀬の音はかりして

菊

廿五日 白妙の霜にみとりの菊のはも花よりはなの下かさねかな

紅葉

廿六日 色は春の花も及はぬ枝をみよ山さくら戸の秋のもみちは

九月盡

廿七日 昔人にへたてはあらし秋にけふかきりとしたふ心はかりは

初冬

廿八日 松杉に色をのこして木からしのかけもさひしく冬やきにけり

時雨

廿九日 さしなからぬるゝ日影にほしもあへす雲の衣や時雨きぬらん

落葉

五月一日 谷風に枝よりちるも散しくも又さそはれてゆく木のはかな

霜

二日 さきたちし人もしられてかけはしの霜に跡ある朝ほらけ哉

寒芦

三日 茂りつる□みしま江のいつしかに冬枯はてゝそよく芦原

第七

冬月

四日 寒き夜もおほえすむかふ光哉月の御船に心ひかれて

氷

五日 春はまたさそはん水のうき草の根さしとゝめて氷る池哉

千鳥

六日 すまの浦や礒部にたかくよる浪もしられて空に鳴千鳥哉

水鳥

七日 くるゝ江のうきねの床も氷ゐてくかにまとへる水鳥のこゑ

網代

八日 さよ衣かさぬるたにもさえにけりさそな網代の床の川風

嶺雪

九日 ふりくるを都のうちにいつかはとむかふも遠きみねの初雪

庭雪

十日 明ぬるか雪の光にみかゝれてふかき夜しらぬ玉しきの庭

鷹狩

十一日 かた野にやみゆきまたまし御狩せし代々の昔の跡をしたひて

炭竈煙

十二日 小野山のあらしは雪を吹ませて煙もさむし峰のすみかま

歳暮

十三日 なす事もなきをうき身に数かすは暮行年もさのみしたはし

第八

初戀

十四日 とけなんもしらてなとかはうき人を思ひそめにし中のした紐

忍戀

十五日 ひまもなく哀れかはりぬ我袖はしのふの浦の波のした草

祈戀

十六日 神に祈るしるしあらんのなくさめもあまり年ふる契はかなや

聞戀

十七日 しらさりき語るよりみぬ人の上を聞てもかゝる思ひせんとは

不[illegible]戀

十八日 露の身も思ひきえなて同し世にあらはつれなき限りをやみん

契戀

十九日 忘るなよ行衛はともに波川あさからすしもちきる心を

逢戀

廿日 人心うしろめたきにこえて又たのまれかたきあふさかの關

別戀

廿一日 きぬ〳〵をしたひて鳥の空音かとかとあやなき嶺の横雲

後朝戀

廿二日 傍に枕ならふろゆめ覺て又ねかなしきしのゝめの床

遠戀

廿三日 ひれふりし昔もいかに（さそなイ）かへりこん程をまつらの契わひしき

第九

馳戀

廿四日 知やいかにと計かこつ牧の駒もなるれはさすかなるゝ心を

顯戀

廿五日 うたゝねの跡におちゝる玉つさにあらはれそむる契くるしも

増戀

廿六日 聞てのみ有へき物をあひみすはまさりてかゝる歎きせましや

僞戀

廿七日 我心猶こりすまに僞とおもふもいく夜待あかしけん

悔戀

廿八日 悔しくもしらてうつろふあた人の心の花の跡をとふかな

經年戀

廿九日 いつか風の便りはきかんつれなさも松をためしに年をふる中

忘戀

六月一日 さすかよも忘果てしとゝふもみすしらぬ世の答へのみして

思

二日 なひかぬをまつ我さへもつれなしや心くらへに思ひよはらて

片思

三日 身には猶しけりそひぬる思ひ草人にしわくる根さしとも哉

恨

四日 とに出ん積る恨はものやみとなりつゝよそに見えもこそせめ

第十

暁

五日 むかひつゝ心すむにそ思ひやるそのあかつきの月はいかにと

名所松

六日 夕浪に吹すてゝ又浦風のやとりにかへるすみよしの松

窓竹

七日 竹のはの露ちる音は空にしもしらぬ雨きく窓の涼しさ

山家

八日 馴てたにきけは淋しな柴の戸は嶺のあらしに山水の聲

田家

九日 夕顏の花にもはにもかくろひて田中の庵はすむもしられし

羇旅

十日 陽山やわかれて又と契るにもいつかはかへる都ならまし

述懐

十一日 をろかなる身とてもらすな玉くしけ二つの道の神の惠は

神祇

十二日 國々の神の宮ゐも天地のひらけしよりやさためをきけん

釋教

十三日 今の世に傳へはたゝんはしの山しな〳〵とける御法ならすは

祝

十四日 君か代を仰かさらめやかしこきか治めし他の國のためしに

# 續群書類從卷第三百九十三

和歌部二十八

## 前大納言親長卿百首

### 春二十首

立春朝

あまのはら出る日影にみえてけり曇なきよの春のはしめは

霞隔遠村

はる〳〵とむこの浦よりなかむれは霞みてたてる住吉の松

若菜

ふみわけて若なつむらし里人のわきてしめ野の春のあは雪

梅薫袖

ふきうつすよその嵐に梅か枝をおらても袖は香にそしみぬる

水邊古柳

よしの河なみよるきしのいと柳ふりてもふらぬ緑なりけり

夕春雨

をのつから入相のこゑもうちしめり雨ふる寺の春の夕くれ

曉歸鴈

しはしたにとめぬ名殘のつれなさは有明の月に歸るかり金

海邊春曙

あけわたるよさのうら松ほの〳〵と春にかすめる天の橋立

春月

いつとても曇らぬ月になれやせむ春の霞のなき世なりせは

待花對梢

いまよりのめかれぬ友となりにけりまたるゝ花の春の梢は

遠尋花

たつねいる花よりさきの面影にたちかさねたる峯のしら雲

花久盛

このころそのとかに匂ふ櫻花わか君か代の春のさかりに

惜花

あたにみる花をはなにか惜む覽うきよの春の夢にならはて

落花隨風
こゝろからちるとも見えす山風のふくかたにのみまよふ櫻は
雲雀揚
かすみつゝ行衛もしらぬ夕ひはりあかるも聲はをちの山もと
菫菜
あれのこる春やむかしの故郷にたれかすみれの花はつむらん
蛙鳴苗代
みしめ縄はるの山田の苗代にいませきいるゝかわつ鳴なり
藤埋松
むらさきの色をやはるはかすかやま松の青葉にかゝるふち波
河欵冬
やまふきの花にもつゆやあまるらん浪の玉ちるうちの河きし
三月盡
くれて又めくりくれとも行春のけふのみ別れおしきならひを

## 夏十五首

夏風
昨日まてはなにいとひし春風もさらにまたるゝ夏はきにけり
山新樹
よし野山くものみのこるこのころはあをはに花の面影そたつ
薄暮卯花
夕月夜かけほのかなるかきねかとさくうの花の色まかふなり

五月郭公
いつよりか契りをきけむ郭公卯月のゝちのつきの夜ころと
郭公數聲
ほとゝきすはやいく聲といはしろの待夜はむすふ契ならねと
盧橘
こゝろあれやはな橘にとゝへはむかしにゝほふのきのした風
夏月
なつはたゝいて入やまやちかゝらし影見るほとも中そらの月
夏夜短
うたゝねにひとむすひする夢たにもみはてぬほとの短夜の空
瞿麥露
をきあまる露もしとろにみたれつゝ夕風はらふとこなつの花
蚊遣火
山里のしつかおもひもよそにみえて畑こかるゝかやり火の影
螢火透簾
あつめをくまとゝ思はし玉すたれ上てほたるの影は見てまし
夕立
たか里かはやふりきぬとゆふ立のあとは晴ゆく雲のをちかた
朝氷室（陸奥）
たちならふ槇原かおくのひむろ山猶あさかせもこゑさゆる也
納涼

涼しさにあきよりさきも秋きぬといまやいはたのをのゝ夕風

夏秡

みそきする川せの浪もたちかへり秋かとおもふ風のすゝしさ

## 秋二十首

早秋

やかてはや音こそかはれきのふよりあすかの里の秋のはつ風

二星逢

もろともにいつよりあきの一夜とは契りそめけむほし合の空

荻破夢

かけて見る夢のうきはし絶にけり荻のは渡る夜半のあらしに

萩花移袖

露も袖にうつろふものは宮城野の木のしたわくる萩か花すり

叢虫

やゝむすふ霜のあさちふうらかれて虫のねあるゝふる郷の庭

雲端鴈

あけわたる山のはつかにきこゆなり横雲わくるはつかりの聲

外山鹿

妻こひもゆふへにたへぬ思ひとや山かたかけ鹿のなくらん

水郷秋夕

みなせ河なかめなれてもいかならん夕さひしき秋のやまもと

峯上月

みねにすむ月にやとはむちはやふる神路の山のとをき昔を

野月

風さやくいなのゝ小篠つゆちりて末葉の月の影そくたくる

杜間月

枝しけみこすえの月はもりかねて影やしのふのもりの下つゆ

橋上月

すみわたる月は昔にかはらねとくちていくよをふるのたか橋

浦月

あかしかたせとのしほ風ふくまゝに浪の千里はゝろゝ月かけ

曉鴫

ねさめしていほもる人よいかならむ

〔以下闕〕

〔右親長卿百首舊本闕今據圖書寮本親長卿詠補之〕

# 入道大納言爲廣卿百首

〔右舊本闕〕

# 從三位資直卿百首

〔右舊本闕但宜參照巻第三百九十四所收十市遠忠百首〕

続群書類従巻第三百九十四

和歌部二十九

# 長綱百首

定家卿

わさと御裏に申候。如此御歌をふるはみたる物給候て見候は。點少々あひて神妙候。めてたく候と申て返上候へは。御覽御心にも作者の御心にも。神妙に申たりと御存知候事なれは。さて候へきか。此殿の御歌眞實尋常におもむきて。哥續つへくおはしますと見候。詞なひ〳〵として。哥すかたよくならせ給へく候なり。只春夏秋冬と申哥はよみよく候。聊も文字あまた候題の哥はあるへき樣と申物候也。それを近代の人はおほかたならはすしらすして。むす〳〵とよみ候へは。一字題の哥には失錯の候也。此四五十年かさきまて候し。哥よみともは其骨も候はす。秀哥一もよみいたさす。見たてなけに候しかとも。題よむやらをは皆しりてよみ候しかは。たゝ天性のにくさけなる身の見たてなき哥にてこそ候しことも。ひかとはよみ候はす。近代はこと葉すかたはなたらかに優に候へと。心えぬ哥のきこえ候也。御心得候へし。主の被仰へき要事候て。御出居へ民部大夫左衞門尉藤内まいれと被仰候はんするに。先めされ候はぬ外記大夫馬允か。めさるゝ物かくひにのりて。脇戸より出し候はんは心えす候へき樣に待春月と候に。雨梅なとかましり候事を申候也。御手跡美麗の御哥一卷は。反古に成りて捨られ候とも。事の候へき樣をくはしく申ひらきて。もしもちひ候はんとおほしめさは。此すちを御心得候て御詠候へし。又ひか事いふ老翁躬に心えぬものゝ本躰也。よくよみたるうたをみしらて。いたつらことといふおこの物とおほしめさは。尤道理可然とて。大方物申候まし。被仰合計にては。思事を申ひらき候はんこそ。後のためも心安事候へはこま〳〵と申候なり。御

母詞すかたは世によく候也。一定歌よみにておはしましぬへく候。

## 詠百首和歌

散位長綱

### 春二十首 春歌一首不足以他本可補之

早春雨

はる雨のふるや岡への松か枝にのこるともなき去年の白雪

御歌體宜候。仍合點。但早春雨と申題をはかくは讀ましきと存候也。只春夏秋冬なと申題は此躰よく候。續題と申物は共題をよむ様に申物候也。早春雨はまはしかくしはしなとすへき物に候はねは。たゝ早春に雨のふると計讀候也。岡へ殘雪と申さむ。題にはいさゝかも難あるましき歌にて候也。

殘雪

こほりいる谷の下水とけやらてたえ〳〵出る春のしからみ

雪中柳

青柳の緑やいつこ山風に雪よりかくる春のしら糸

緑やいつこ。殊に神妙候。山風にそすこし心えす候。風前には雪とまりかたくや候はん。

庭梅

たか代より匂ひそめけん卷もくのひはらの軒の春の梅かへ

庭の梅の題は只一條大宮の景氣にて。ひはらにつくりたる家と申さは。つゝかすきこえ候なり。さ様のにくはみたるとは。しはしめも見せすしたるかよく候也。

深霞

尋行ふもとの野へも跡たえてかすむあなたは山の端もなし

草菴霞

年をへて日影もしらぬ草の菴春のゆかりのなに霞むらん

水邊霞

みよしのゝ吉野の瀧もよそにのみ霞のをくの春の明ほの

心は相叶。下句に詞すみしなり。あはす候の、く候。いたく多候歟。

橋邊鶯

花の色もけさはたえ〳〵に鶯の聲さへかすむくも（ぬイ）の岩橋

霞題三首まて相連侍に。（へ脫歟）橋邊鶯と申題には霞不可被交候歟。是は橋邊霞によみつく候也。

旅鶯

尋行花もいく重の跡たえて霞にもるゝ鶯の聲

旅鶯はたゝ路外に行路鶯の鳴たるよくも候也。花霞横入て候也。尋花は旅と申へくも候はぬなり。御歌さまは優に候。

待春月

春雨の名殘の軒そかほるなる月まつ里の梅の下かせ

これは雨後梅を詠歌候也。

窓春月

梅か枝を夜半の嵐や過つらんあれたる窓に匂ふ月影

これも御歌優候。梅花薫夜窓にて候也。春窓なと申春の字はすこしもまはしかくさす。たゝ春と二文字にすへられ候へく候。

歸雁

かへるかり霞のそこに行なやみたえ〳〵夜半の雲に鳴なり

あしくも候はす候。霞底に行なやみとてまた雲に鳴と候。霞の底に雲のあるましきにては候はねと。天象の物のおほく大切なるやうに候也。

曉花

久かたの空行月の在明に花よりもるゝかつらきの山

これも歌すかたはやさしくよく候。曉花のあまりに深山にふかゝらすとも候ぬへきなり。

花前月

山風に四方の霞を分すてゝ花にうつらふ春の夜の月

さたまりたる題をそはにすてゝ。あらぬ物をなか〳〵とをかれ候間。歌の半を外人か領して。下句に題のちりはかりましり候か心得す候也。只二句に題のはいはれなく候。

名所花

春のきる櫻の衣匂ふなり霞のしたのあふ坂のやま

御躰神妙候へは合點。此逢坂の山。させる相坂の要事も候はぬ所にはてきて候也。關路とも不申。なにゝあふ坂ともその故もなくて。名所はかりには。何の理にも見え候はぬ物なり。

江上花

難波江や櫻吹まき行風に花のなみたつ春の明ほの

落花

袖の上にしはし宿かる花の色をありとや風の又さそふらん

鳥歸

くれて行春のかたみに鶯の歸るさしたふみ山邊の里

暮春草

行春をしたひかねてやをく露の野原の草も恨かほなる

をく露の野原の草。つゝきすこし心えす候。

## 夏十五首

原上餘花

かたみとや風もやおらむ櫻花春は暮にし春日のゝはら

閑居卯花

卯花のちるてふをのゝ山おろしにさひしさそふる谷の夕風

上句に山おろしとて。下句に風候へからす。名替なからたゝおなしものにて候へし。

月前時鳥

月影の心をさそふ空に又なきすてゝ行ほとゝきす哉

河郭公

〔歌開〕

此題はあしく被出て候也。題の字も書つゝくるゆへありてこそ。出題は候はんすれと。題を見たるに物に心えたるこそよく候へ。千鳥こそ河千鳥とては候へ。時鳥不水練。河邊聞時鳥とこそ候はめ。

水郷郭公

時鳥夕浪かけて五月雨のふる川のへになかぬ日はなし

此時鳥もつゝきて水郷も非普通題候歟。白鷺小尾なと申物の様に水に付られ候。心得候はす候。

古寺夏草

夏ふかき野寺に風や過つらん草葉になひく入相のかね

鐘聲の草葉になひきなとし候事。亡父殊違背の物に候へは。えほめ候はす候。

名所螢

みしま江や誰を恨て夏虫の暮れはもゆるならひなるなん

うらみてもゆる理不可有候へは。殊に申ならはして。恨みてもゆると申事さたまりたる様候。

社頭螢

したにのみ思ふ心をみたらしのなかれもきよくとふ螢哉

朝菖蒲

古郷の軒のあやめの朝しめりこれもむかしの香に匂ひけり

湖五月雨

にほの海や風とはなしに五月雨のふるにも春の色はみえけり

春の色。愚意心え候はす候。

樹五月雨

五月雨に野中の松の陰もなしぬれつゝゆかん道遠とも

木の五月雨も題の面いはれなく候。樹陰なとや候らん。歌は無難。

山家蟬

鳴蟬の渡は秋にちかつきてかねてうつらふ森の下草

題は山家也。御歌は林非山家候。平地に木多生たるを林と申。山に家作りたるを山家と申。事替候。

〔題開〕

うき枕涼くなりぬから衣袖しの浦に秋やちかつく

田家納涼〔永緑〕

蛙なく山田の筧水こえて名殘涼しき夕立の空

晩夏枕

風の音も物そかなしきさゝ枕ひと夜のふしに秋や來らん（ぬイ）

## 秋二十首

月前杉

谷の戶のふりても月の有明に軒はの杉にかゝる白雲

秋の初題に月前餘に候へく候。いとゝ廿日月に讀なされ候はゝ。秋二十首の始に書下てや候へき。谷戶も別に要用も候はす。月歌にはかまへても雲をあはせしとこそ讀候へ。白雲背本意候。

行路月

露深き山分衣風過てならはぬ袖に月そなかるゝ

なかるゝやあまりに候へき。此字不可然。

竹間月

木枯の露吹はらふ竹の葉にやとれる月の色そつれなき

島上月

なかむれは心も空に行月のおきの小島に影そかたふく

籬頭月

夕露のまかきの薄たか世より月をあるしとおもひそめけん

海上霧

高砂の松の風のみ身にしみて霧にたゝよふあまの釣舟

杜間露

吹風も秋のけしきのもりの露うつろひそむろ霧の下草

江霧

夏かりの玉江のあしのわか草に浪よりのちの秋の夕きり

とはつゝきはよく候。あしの若葉いかゝ候へからん。

夜萩

さほ鹿の入る野のま萩末よはみしからみすてゝ月に鳴なり

詞すかたよくつゝきて候。夜萩と申題は。いかさまも夜字をおかれ候へかし。月にとて夜をかくしよまれて候不可然候。鹿又よこ入て候。

水邊薄

夕暮はたれ待わひて花薄野中の水になみたかるらん

草花

秋もまた淺茅か原の蘭むかしをとへは露そこほるゝ

梅か香に昔をとへは春の月と申歌の後。昔をとへは。歌人讀れ候也。か樣善惡六七十年以後ちかき歌は。とりはたらかさるましき物にて候。

山鴈

夕暮は月まつ山も（あとイ）吹たえて霧のあなたに初鴈のこゑ

鹿聲近

ひとり住軒（宿イ）はの山のゆふ暮は鳴ぬもさそなさを鹿のこゑ

聲ちかきになかぬとては聲不審。

隣家虫

住なれし跡をや秋もしたふらん人のまかきに松虫のこゑ

庭上雨

わひ人のひとりふり行夜の雨庭の蓬生あとや見ゆらん

庭上雨非秋題候歟。

松下擣衣

秋の夜の月の都の明やらて松風すさみ衣うつなり

如前題在下二句。

紅葉多

散つもる庭もまかきももみち葉のはらふかたなき秋の山里

雲隔紅葉

白雲の立田のをくの山のはゝ人にしられぬ紅葉ちるらし

野外紅葉

秋ふかき野邊の嵐やさそふらん此里かけてちる紅葉かな

此里不叶野外。

暮秋風

くれて行秋のかたみのゆふ露をやかてもさそふ風の音哉

## 冬十五首

旅宿落葉

旅枕木葉ちりしく山風のしはし夢かす時もまもなし

夢かす非先達所詠。新儀也。

岸時雨

かたきしのいつもつれなき松の色をうらみかほにも行時雨哉

汀霜

おふ空のさゆる霜夜の月影は汀の松もあはれなりけり

霜の歌は常のならひは朝霜は曉なとは霜のみゆるやうに候也。夜は不審歟。題はなきさにて候歟。

行路嵐

旅人の松の嵐をききたてゝ岩ふむ山にしくれすくなり

時雨列過いつも題の外の物は候まし。此題も凡非冬歟。

洞中嵐

まれにあくる洞の岩戸をよひかほに苔のさむしろ嵐吹なり

古跡寒草

冬かれの草の上葉に霜さえてみし世にゝにぬ武藏のゝ原

古跡荒涼の題にて候へと。たゝ古はみたる所にて候はゝ。名所野は不叶歟。

海寒月

みつしほの音もふけゐの浦風にこほれる月に千鳥なくなり

これも海と寒月にて候へく候。千鳥は不叶候。

夕水鳥

夕暮は霜さえわたるあしかもの上はにこほる月の影かな

夕と申題には月はいたく夜に成はてゝ候也。すみ染の夕とて日は入かた月は出ぬほとをよみて候歟。

濱霞

冬くれは霞降なり住吉のはま松かえに花も咲けり

あられをは玉敷くたくなと申。花とは讀ならはさす候也。あるへき躰の事なき物にて候へは相似候。

苔邊氷

久かたの空すむ月しさむけれはむすほゝれ行苔の下水

これも題の第五句に候。いたくさかり候也。

雪中千鳥

雪の夜に汀の千鳥うちわひて鳴音さひしきさほの河風

源氏歌。霜寒汀の千鳥うちわひて鳴音さひしき朝ほらけかな。古歌の詞おなし句にすへたるは。其歌ときこえ候なり。

雪中鶴

うらみのみつもる澤への雪の中におなし色なる鶴の毛衣

旅泊雪

こきよせてとまる汀のさひしさも今一しほの松の雪をれ

汀ゝつくにも候へけれと。池水なとには今すこし申ならひて候。旅泊とまりの名所なとあらまほしく候。

雪中林

たのめてもまつはかひなき雪のよに吹さへたえぬ里の杉村

林はきはめたる難題也。よみにくき物にて候なり。さとの杉村にて林と聞え候まし。

古郷歳暮

御吉野やうき世の里もいたつらに今年もくれぬとふ人はなし

## 戀十五首

寄色戀五首

花の色に染てし袖も朽にけりつれなき人を待とせしまに

寄色戀。心えぬ題にて候。此五首たかはすも候らめとも。心ゆきて覺候はす。寄色戀と申さは。紅の末つむ花。やしほの衣。紫の一もとゆゝ。山吹の花色衣。月草の花染衣。くちなしにちしほやちしほ。黒かみのみたれて物を。か樣の事を讀れ候へき歟。

夕まくれ草の上葉におく露の染（きえイ）ても人に逢よしもかな

月影のめくりあふへき契たにしらぬ思ひに身をやかへてん

人心いかにそむらん初時雨草の葉ならて色かはりけり

みやま邊や薄をしなみふる雪にきえてもものをおもふ比哉

寄聲戀五首

鳴鴈のなみたの露やそめつらん物思ふ袖も色そかはれる

寄聲とては月鴈もこゑとをかれ候へきか。

月影に嶺立ならす鹿の音もおもひをそふる夜半そかなしき

おもひわひ夜半の衣を返しつゝ松にゆめかるとこの山風

もしほやく浦の白波こゑたてゝなかぬはかりそ袖はかはかす（ぬ歟）

たのめつゝ待夜明行鳥の音はいける物とや人の知らん

人のしるらん。心ゆかす。

寄雑物戀五首

うらみのみかさなる山のさよ衣ふりても袖のかひやなからん

衣は雑物に可然。歌いとも心えす。

僞のうき夜な〳〵を松の戸にうらみをそふる嶺の木枯

戸は非雑物。

知るといふつけのを枕さもあらはおもふ心を人につけこせ

みせはやな待夜あけゆく鐘の音に涙うちそふ袖のけしきを

行舟のなかれあふやとたのみつゝ涙の河に身をや捨なん

## 雑十五首述懐歌一首不足

古松

岩代の野中の松も露落てむすひそめけん昔戀らし

残灯

明やらぬ窓うつ雨もふかき夜の枕にのこる秋のともし火

祝

鏡山のとけき月の有明に君か八千代の影を見ろかな

白雲

山ひめの露にしほるゝ白雲のころもかけほす嶺の松かへ

露にしほるゝ白雲。すこし聞なれす候。

無常

をしなへておもふもかなし鳥へ山たか身のはても嶺の白雲

寄名所述懐十首

身にしみて物そかなしきふるき世のむかし忍ふの里の秋かせ

津の國やなにわの浦のほかも猶君なき里は住うかりけり

小倉山わか身一つの秋なれや松の風にもぬるゝ袖哉

雨ふれは下葉のこらすもる山や物おもふ袖の秋の夕暮

しつみ行うき身よいかに涙川行末しらぬ浪の上の月

いかならんうき身の果をしら浪のまよふもかなしすまの浦風

身のうきをかくとも誰に石見かたおもひみたるゝ浪の音哉

もしほ汲まとをの衣風はやみうらみつきせぬ沖津白浪

位山いく年月もよそにのみへたつる雲に物やおもはん

とにかくにかゝるうき世にさかの山おもひもしらて猶過す哉

本云

此一卷之始返報之詞歌之裏書等。祖父京極中納言入道定家卿。法名明静、眞筆無疑候。往事嘉祿二年九月十七日。今者嘉暦二年二月廿三日拜見之。返々哀になつかしく存候て。

へたてつるむかしの祖の水くきは今も流れて涙とそなる

人の親の親のかきける言葉を子の子の世迄みるも懐し

曉月敬白判

康安二年壬寅八月廿日書寫之。

## 花月百首 蓮乘院入道道灌 號太田持資

權少僧都良春判

權大納言雅親點飛鳥井

春來てもみるめなきさの櫻花霞ふきとけしかの浦風

尤風情優に候。

谷川の波のはつ花そのまゝにさきかさねたる山さくらかな

うち出る浪や春のはつはなとの俤にや。

よしの山花につゝきて咲花やうつろふ雲の匂ひなるらん

つゝきてとは不庶幾詞に候。

けぬか上にまたふる雪とみゆるまて櫻咲そふみよしのゝ山

御吉野の花の盛にゆく鴈やをのかこし路の雪とみるらん

にほひもてたつねもゆかんよしさらは花の名たての峯の白雪

あくかるゝ人の心の春ことに色たちまさる山櫻かな

山庭尋花人影香。菅三品の詩の心にや。尤艷に聞え候。

よしの山よしや風こそつらからめ岩根の櫻なみもをりけり

おもかけふかく候。

ことしより花もときはの山櫻かはらぬ色にさかはさかなん

道遠み匂ひや（たかねイ）くると山さくら花なき里は風をまつらん

谷ふかみこすゑの櫻咲初めてあくるもしるし花のよこ雲

みたれけり霞の衣春風にしのふにはあらぬやまのさくらも

山櫻あかぬこゝろの花の色にことしもならへ長閑にも見む

匂ひをはえやは忍ふの山櫻霞の衣たちかくせとも

水上に嵐ふくらし大井川いせきにあまる花の白波

むすふ手も匂ひそ深く成にける花の下行谷川の水

あし引の山もかひなくうつもれぬ雲も霞も花の匂ひに

優に聞へ候。

かゝみ山うつる日數もかきくもり雪とのみふる花櫻かな

うらむへき風の行衛もしら雲の絶てつれなき山櫻哉

尾上には雪かと見えてちる花やさゝなみよする志賀の浦風

跡たえてふり行宿の花さくらちりつもれともはく人もなし

沖津風八重の汐路も匂ふまて花さきにけり淡路島山

ちりまかふ花のさかりはわれならぬ人も心や空に成らん

ぬれつゝもなをかりゆかん櫻花はるもいくたの夕くれの雨

感吟あまりある事か。

行はるや神に手向の山櫻峯にも尾にもかゝるしらゆふ

おしめとも日數つもれは飛鳥川淵瀬もわかぬ花の白波

にほひくる嵐もつらし山櫻花もさかりを過ぬとおもへは

よしの川いはねの櫻春をへて匂そふかき瀬々のしら波

散はてゝいとゝ昔やしのはれんしかの都の花のさかりは

尋見んよをうち山の櫻花都のたつみにほふ春風

雲わけてたつね入さの山櫻かへさはつもる花のしら雪
あはれふかく候。
世をいとふ心なき身もおもひ入たよりうれしきみよしのゝ花
たねまきしみおひの櫻さきしより外にうつらぬ花さかり哉
待おしむ心に似たるやま櫻長閑に匂ふ春しなけれは
あはれてふ誰故郷の庭櫻まつもおしむも風にまかせて
あたならぬ色とこそ見め櫻花心にそめぬ人しなけれは
山鳥の尾上の櫻長き日もあそふ程なき山さくらかな
珍重に候。
山櫻咲てとくちる世の中のならひも花にあらぬもありなん（千載）
見るまゝに夕ゐる雲も色々の花にそ匂ふかつらきの山
雲となり雪とふれとも山櫻衣手かろく香はをくりけり
くれぬとも櫻に宿をかり衣かへるよのまのうしろめたさに
いまよりは花の心にまかせてんおしむにつけて散もこそすれ
うつしうへてともに老木の櫻花なれもむかしの春や戀しき
風をのみうらみもはてし山櫻おもへは春そみしかゝりける
一かたにうらみもはてし春風のふかぬ梢も花はちりけり
たれうへてよゝのかたみを殘しけん春をわすれぬ志賀の花園
花も又あはれを見すや石上ふりはつるまておしむこゝろを
殊勝に候。
櫻さく山の瀧つせ落つもる末や匂ひの淵と成らん

山さくら雲と見へつる梢よりさそふ嵐のなき世なりせは
荻の葉に秋たつ風のそよや又心つくしを見る月の影
景色かくもあるへくや。
なかめてもなくさみぬへき秋の夜の月に涙のいかて落らん
見れはまつあはれそそふる四十あまり半ふけゆく秋の夜の月
秋のよはもろこしまても思ひやる月に心のあかぬあまりに
秋の野の千種にわけし心をもひとつになして月を見る哉
尤あはれに候。
思ふ事なきいにしへも秋のよの月にや袖のかくしほれけん
秋の夜はもしほの煙かきたえてあまもみるめの浦の月影
何ゆへに秋はねぬ夜のつもりぬるおもかはりすな有明の月
夕暮の哀はものゝ數ならすしきたつ澤の有明の月
珍重候。
よさの海や沖吹風に雲はれて月すみわたる天の橋立
秋の夜の月のかつらの花盛おりしるものは袖のしら露
くもる夜もくもらぬ夜はも秋くれて心の空に月はすみけり
秋のもしあまり聞へ候。
里はあれ野となる露の深草や鶉かねやをてらす月影
尤優に聞へ候。其上本歌のとりより長におもふたまへら
れ候歟。
もみち葉にいま一入をさしそへて時雨にはるゝ山の端の月

風情艶にきこえ候。

秋そとは月のひかりにしられけるあまりな置そ袖のしら露

玉櫛笥あくる雲井の月みれは待しつらさは数ならぬかは

秋の夜の月は見ぬよのなになれやなかむるまゝに涙落つらん

むすひをく露の契をわするなよ月もたひなる（かりねのイ）小夜の中山

身のうさも人のつらさも忘るゝはこの世の外の秋の夜の月

からにしき立田の山の秋はあれとおは捨山の有明の月

長月や有明のころの月みても心はそらになを残りけり

大淀のうらみてのみや秋はへん松のあらしにはるゝ月かけ

風はやみ天の川ゆく秋のよの月のみふねはよとむせもなし

天の原雲も及はぬふしの根の雪に雪しく秋の夜の月

露しけき浅茅か原を分行は袖にみたるゝ秋の夜の月

老樂は秋來てなをそしられける月は見るやととふ人もなし

山端のなからましかは秋の夜の月にふたゝひ物はおもはし

木間もる有明の月は中々に心すみますものにそありける

すみのほる月の光にさそはれて心なき身もさらになりぬる

山のはの月を尾花にまねかせて更行野邊によはる虫の音

あらさらん後のやみ路もてらさなんなれし都の秋の夜の月

　こなたにかよふ心つかひにやあはれに候。殊さら此たひの行軍は大切にや候はんとおもひよられたる趣。尤感ありて聞え候。

秋の色はかれはてぬとも浅茅原月をよすかの月はみてまし

天津風雲吹はらへ長月の有明の月も今いく夜かは

いかにせん袖には露を残し置てくれゆく秋の山の端の月

幾夜かはたなゝしをふね漕かへり同し入江の月を見るらん

有明の月の出しほのまつら船ひれふる嶺に雲もかゝらす

　本説おかしく候。

名にしおふ玉島川の波の上に光をみかく秋の夜の月

ありしにもあらぬうき身の秋をへてなるゝもつらき袖の月影

もろともに月もうきねや忍ふらん物思ふ袖に影もはなれす

　尤感心候。

さゝなみや志賀のうらはをこく舟の跡まてすめる秋の夜の月

草枕むすふかりねの宵々に宿こそかわれ月はかはらす

よもすから妻こひかねて小男鹿の月も入さの山になくなり

露なからおらまほしきは有明の月を宿せる秋萩のはな

名にしおふ光や空にみちぬらん雲もかけなき有明の月

まち〳〵し有明の月も時しらぬふしの高根の雲のならひに

草枕かはるゆふへ（ならひイ）のとことはに出しまゝなる秋の夜の月

ゆふつけのかけのたれ尾の長き夜もみるめなきさの有明の月

待侘ぬ心いく重の山こえてまたいてかての月やみるらん

あはれてふ幾年なれぬ秋の夜の月はむかしのおもかはりせん

　こゝにもおなし心のをもむき。咫尺千里の月に猶疑見古

人かと吟し侍らんや。
儁黑四十五點。

右百首自相州鎌倉比企谷泰雲寺傳寫之。獻藤左府二條殿。者也。

天正十二年十一月下旬七日　藤雅春

右寛政二年春關東下向。江府旅宿。於妙證山乘泉寺從日岱和尚借請。令寫得之畢。本書右字殘缺のものなり

勾勘花押

右元本合武家百人一首慕景集之二部今以僞書不用除之。
享和三癸亥季冬一校畢

〔右太田道灌花月百首以南葵文庫本校合〕

## 詠百首和歌　蜷川新左衛門親當

春二十首

立春風
海山もあれにし四方の冬の空風をさまりて春や立らん

霞春衣
春の色にうらなれてけりさほ姫の霞の衣ころもへすして

渡霞
かちをたえ行末もしらすゆらの戸をわたる舟路の春の霞に

求若菜
尋ねても雪のふるはの下もえはあるにもあらぬ若菜をそつむ

河邊鶯
谷川の岩こす浪も聲たかきましはかれはに鶯そなく

餘寒月
霞むへきならひもしらすはれくもり春のふゝきをわたる月影

若木梅
風ふけはさきそめし春も遠からぬ梅や千里に匂ひゆくらん

江柳
水草ゐるふる江の柳くちぬともゆる緑のかけやなからん

磯春草
春は又おちはかきても松かせの磯なつむなりあまのをとめ子

牧春駒
二葉ともくつの御牧の春の草もゆれはやかて駒そすさむる

海歸鴈
はしたての松もかくとや浪の上に霞てならふ春のかりかね

待花

春はまた立そふ嶺の雪かけて花まちとをにさゆる白雲

交花

あすか川花のかふれてゆく袖の匂のふちよせになかはりそ

花挿頭

手をりつゝかさす櫻の花のかのうつるは老の袖もいとはす

山家花

それをこそとふにはなさめ櫻花ちりなん後の春の山ふみ

落花

嵐ふく花はちりかひくもる夜をよそにやかすむ春の夜の月

澤春雉

おなしえに子を思ふ雉うらふれて鳴や澤へのたつの諸聲

款冬露

すきかてにたれとはさらん山吹の花のかさり（さか歟）の玉河の里

岸藤

住よしの松の葉うつむ藤の花岸におふてふ草にやつるな

暮春雲

名殘をもしはしとゝめし花鳥の入にし雲をさかふ春哉

## 夏十五首

朝更衣

猶もおし花のかのこる朝露のぬれてひぬまもかふる衣は

尋餘花

さく藤も夏にかゝるをしるへにて又たつねつる山さくら哉

路卯花

これや此あなうの花と思へとも立かへりくるしきしまの道

曉郭公

つれなさは曉はかりうき物とおもひはてぬほとゝきす哉

夕郭公

雨かゝる山のは消て時鳥なくやゆふへにまよふうき雲

夜郭公

ほとゝきす雲のいつくの月とたにしらぬやとりのあくる一聲

早苗

なかき日の千町のさ苗うへつかれ山田のくろにやすむさ乙女

簷盧橘

吹風に花たち花もあへぬとや軒のしのふにみたれちるらん

五月雨

浮雲は猶もたかねをうつむなりはれてもはれぬ五月雨の空

夏夜

おほつかなそこらの事をみし夢のさむる枕は夏の夜にして

夏月涼

夏のよの月にこほるゝ聲すこし秋風またぬ萩の下露

杜夏草

かけすみて行や河せのなひきもゝしける生田のもりの下草

橋螢
橋姫のかさしの玉と河浪に螢みたるゝうちの山かせ
河夕立
水かさます都のよもの夕立に先しら川の浪そきこゆる
六月祓
思ふことさしてなき身や夏をけふすつるはかりの麻のゆふして

## 秋二十首

初秋衣
いつしかに昨日の夏を風かはる衣も秋もへたてゝそおもふ
七夕霧
七夕の妻まつけふの夕暮にいふせさそふるあまの河霧
古郷露
幾世までふる野の小篠かゝらまし都のおくの秋の夕つゆ
荻破夢
あともなき風まつ程の荻のはにやとりし夢も露のまにして
行路萩
玉ほこの行手の小萩折とらはのこれる花の色やあせなん
原薄
風かよふ薄はかりの草の原手をになにをまねきとむらん
閑蘭風
藤袴ぬしなきのへに匂ふをは風もあはれとたちやよるらん
野虫
秋なからおち葉もしらぬ松虫の聲うつもるゝ野への初霜
遠初鴈
玉つさを待とはなしの初かりもまた遠かたの秋のをとつれ
田鹿
秋ふくる小野の山田にさをしかの涙色こきいねそのこれる
嶺上月
たちいつるたかねの月の秋風になひく光を千里にそしく
松間月
神かきにちかき林の松の葉の塵にましはる月もさやけし
瀧邊月
浪に出る月はいさこの山よりもくたけておつる布引のたき
關屋月
あらはなる不破の關屋の板ひさしあれしも今は昔なりけり
庭月
露はらふ庭のよもきか杣人の袖とや我を月もとふらん
聞擣衣
時しもあれ梢うつろふ月影にね覺てきくの衣うつ聲
秋夜長
老らくの床も枕も秋の夜のなかきをしるは涙なりけり
谷菊

さく菊のかけうく谷の下水に光なしともみえぬ秋かな

山紅葉

たつた山ちらぬ紅葉に木かくれてゆふ付鳥の聲そしらるゝ

暮秋露

くれぬとて野にも山にも行秋に殘りて露のあすやこほらん

## 冬十五首

初冬

庭草に秋よりをきし宿の霜人めかれそふ冬はきにけり

杜時雨

つゝみあへぬたか衣手の杜のはの時雨とゝもにしくれ行らん

山木枯

みし色のかはるとかはる冬のはを一葉もとめぬ山の木からし

篠霜

冬かれのみ山の霜をかしけたる小篠の色にあらし吹なり

蘆間氷

なには江や風にかれたつあしつゝのうすき氷をくたく浪哉

寒月

久かたの月の光のゆくかたやかきりしられぬ氷なるらん

千鳥

霜さゆるかれ葉のますけふみしたきその〻河原に千鳥鳴也

柏霰

山おろしふもとのならの葉かしはに霰をはこふ音のはけしさ

庭初雪

つもれたゝ庭のをしへの跡たにもあらはと思ふ宿の白雪

杣雪

山人のそまたつをのゝをとたえてひゝきそかはる雪の下折

雪朝望

松原のこなたの浪の朝なきに遠嶋めくる雪の白雲

炭竈煙

雪をたひ氷をねかふ炭かまの煙や雲の浪となるらん

神樂

おりかへしうたふ榊は神さひて庭火もしろし雪の明ほの

年欲暮

やととの春のいとなみ數みえて又豐年のくるゝころかな

## 戀十五首

寄風戀

おもふより涙の袖のしからみは風のかけてや露こほるらん

寄煙戀

下たえすもゆる思もはれやらすたえぬ煙や胸にくつらん

寄雨戀

天つ風雲ふく雨のあしたゆくうきて思ひをなにかさぬらん

寄山戀

いつの世のたか枕よりつもりけん我れし床の塵ならぬ山

寄岡戀

ことの葉もうつろひぬとや水くきの岡のくす原色かはるらん

寄原戀

草の原むすひもはてぬ秋風をたれかしめちか露たのむらん

寄松戀

おふよとのまつとわかれに事よせて心なくへきうら浪もなし

寄榊戀

人こゝろ八たひ霜をく榊はにつれなき色は猶やまさらん

寄藻戀

われからと身をこそくたけ心なきあまのかるもに亂れ侘つゝ

寄鳥戀

明はつる空さへつらしおきて行たか名もしらぬ鳥の野聲に

寄虫戀

人はゝや軒はなからにたのむ也しはしなたえそさゝかにの糸

寄獸戀

さほしかのふしとは露もましるらん涙はかりのひとりねの床

寄衣戀

かへしても何にかはせんさよ衣さむれはつらき夢もほとなし

寄弓戀

契りしもはてはうき名にたつか弓はかなき鳥の跡も殘さし

寄糸戀

たのめつゝ世々にをかけん片糸をあはをによりし契朽すは

雜十五首

古寺鐘

嵐山ふもとの寺のかねのこゑ昔やひとりさひしかりけん

松作友

命をもいかゝのかへん住よしの松のとの葉友とならすは〔あり歌〕

窓竹

山のはのあくるもしらす竹の葉のかけに夜ふかき窓の燈

徑苔

松かねもいはほも苔の道たえて落はにむせふ山の下水

名所鶴

わかの浦に身は老鶴のひなの子もかくやはしらぬ道に惑はん

名所瀧

浪たかみ嵐おちかふ瀧の上にうかふ御舟の山はうこかす

山家水

草かくれ水のたよりにかたかけて山澤ちかくむすふ庵かな

田里

かよひなき田中のさとの一むらはいなはかりての後そ淋しき

樵夫

峰たかくのほりてくたる松かけに薪おろしてやすむ山人

楫川筏
川浪に柚山おろしをくらすはつなてやひかん瀬々の筏士
旅夕
やとるなよ月にそゆるす枕とて草引むすふ野への夕露
旅泊夢
舟とむるむしあけのせとの浪風にいかなる夢をまつの下陰
湖隣望
しかのうらなきたる雲の浪まよりみゆる小島にいそく舟人
尺教
へたてつる十のさかひそをのつから一つ心のうちにひらくる
神祇
千はやふる神の御國に生れあふ我行末を猶たのむなり

永享十年六月七日謹以奉獻當社畢。右百首更不返初一念。
任浮心中卒爾書付之畢。然間一首無一節不外見。

この百首は蜷川親當の詠にあらす。正徹の百首詠也。草根
集にいてたる歌とゝ多くあり。元本蜷川親當の筆なれは。
やかて親まさの詠といひし成るへし。
文政十二年うし年二月廿六日　　　忠寶花押

# 十市遠忠百首

兵部少輔遠忠

廣瀬社法樂十首中
雪こほりいつしかとけてみよし野の水はけ山に春かせそ吹
三芳野はみ雪うちとけ行水のきよき河内春風そ吹
百首中松殘雪
春きてもつれなき松のうへにこそみやまの雪は猶のこりけれ
春の色やいつしら雪のふか緑したの心の松は見へても
七所新宮法樂一日百首中梅
花そ猶露まきれなき梅かえのわか葉もにほふ春のあさ風
よそへても色はみつへき梅枝の花しなへての香やはかくるゝ
柿本法樂續卅首中梅風
なへてよに色もにほひもはつせ風むめさく山に春そしらるゝ
匂へ猶花そむかしの春ことにさけはかはらぬ梅のした風
住吉法樂三十首中
春きてはむかしもかくや難波津に冬こもりせし梅かゝそする
此程はなにはの春も長閑にて冬こもりせぬ花そさきける
太神宮法樂百首中夜梅
春の夜のみはてぬ夢もおしからす袖の匂ひもおとろかされて
曙の空に名殘の梅の花にほひは袖ノ別ならねと
七所新宮法樂一日百首殘雪

春きてもかきほの雪の一むらそはなまつほとの庭にのこれる
春に待鹽手の雪の□はいさおもひ消すも花にたのめよ
百首中華始開
なかめやる花よりはなは咲にけり雲まに見へしをはつせの山
春うときよその恨やはつせ山谷にさくらの花匂ふなり
花五十首中開花
かけみえていまやさくらん逢坂のせきの清水も花のかそする
立とまる春の往來に相坂の關しまさしき花の陰哉
嶺花
明ほのゝおくらのみねにさく花そたつたの山をこゆるしら波
光そふいやはつ花の色よりも今朝はおくらの嶺の白雲
三十首中栽花
花をわかあかぬこゝろにまかせきててつからうへし山櫻かな
一はるも手ことにうへは山櫻十とせの後は花のはやしを
花五十首中花衣
かすみたつ遠山かけてさほ姫のはなすり衣かさねてやきる
櫻色の手染のころも立田姫秋のにしきはにほはさりしを
住吉法樂三十一首中
月殘る春のよふかきしら雲をいとはんとすれは嶺のはつ花
よしやみむ雲も霞もそれなから月の入さの嶺のはつ花
聖廟法樂續卅首中月前花
春の夜はかすむ習ひをしら雲の花にはみねの月もくもらて
かすみ行月より嶺の麓なる遠かた人は花やたとらん
春曙
よしあしの思ひもたえて春のよのなにはへかすむ夢の明ほの
おしと思ふ行衞もよしや難波かた春の夜殘る夢の横雲
花五十首中朝花
春さむみあた露はらふ音きけははなのうへにも荻のうはかせ
花おつる山のした荻風みえて身にしみまさる春の夕露
百首中依花待人
さくらはなとしに稀なる契にてはるはかならす人そまたるゝ
雪にまたむ深き心のさもあらはあれけにこすはみし花の蹊を
三十首中春雨
なかき日をくらしわつらふ春の雨の晴ても霞む空のつれなき
つく／＼と詠めくらせる春の空にまた晴やらぬ袖のつれなさ
七所新宮法樂一日百首中喚子鳥
花あれはたつねやいらん喚子鳥たつきもしらぬ山路なれとも
暮にけり山路の花のよふこ鳥なれこそ聲にたつきしるとも
三輪法樂五十首中はなのあるしや
行くれてやとはとゝへは櫻戸をはなのあるしやいつる月影
契つゝ程は雲井のとふ人を花のあるしや月に待らん
春日法樂卅首中宇治里

あはれたか春のかたみそさはらひの折をわすれぬうちの里人
しつわらひおりを忘れぬ里の名も物うき春のすさひなりけり

百首中春曙鴈

月にかけ花に色かもわすられてかりかへりゆくあけほのゝ空
あけほのゝ月雪花のおも影もきえて霞にかへるかり金

三十首中歸鴈

秋の夜はかすさへ見えて行鴈のなくねもかすむ春の月かけ
歸る鴈餘波やなをも有明の月にわかれて鳴つゝそ行

花五(十無)中首中風前花

いとへたゝちらさぬほとの春風もこゝろをかるゝ花のうへ哉
花はまつさくしも風の心とてたのみそめけむ春そくやしき

樵路花

世は春と賤もつま木に(ゑ無)とりそへてけにいひしらぬ花をみし哉
春の中は妻木こるおのゝとのゝえも朽ゆく花の陰にくらして

三十首中欵冬

物いはぬ花さへ春のくるゝをはをしむ色にやゐてのやまふき
花といふもたゝ散殘る山吹のひとへに今はおしき春哉

百首中新樹風

わすれめや花にかへてのしけりあふかけまて風のつらき心を
今こそはつらき心も山風の青葉の底の花さそはなむ

太神宮法樂百首中待郭公

まつは(ひとに無)とに聲なへたてそしら雲のい〔　　〕にかさなり山郭公
郭公おもはん人にいつなりて心へたてぬ聲をきかまし

柿本法樂續卅首中郭公

ほとゝきすいくさと人の心にかまたれていまのはつ音聞らん
まちまたぬいく里人に時鳥心ゆるさすはつ音なくらん

百首中杜郭公

ほとゝきすもりのした草枕にてゆふへの月のかけにまちみむ
夕月夜もりのした草枕にもかりそめにたになけ霍公

螢似玉

烏羽玉のやみちをてらす光ともみしやそらめのほたる成らん
むは玉のやみのまくらの夢たえて見し空たかくとふ螢哉

遠夕立

ゆふたちは遠山くらくなる神の名こりすゝしき野への浮雲
おきつ波いまたかしまの山風にかち野ははれぬ夕立の雨

聖廟法樂卅首中水邊納涼

夏の夜や月さしのほる山みつをむすひすてたる松の下かけ
月もとへ夏すみ初て山水をたよりにむすふ松のした庵

太神宮法樂百首中初秋

とし又なかはすきつゝ早瀬川とまらぬなみに秋は來にけり
おとろかぬ身の年なみのはやせ河うたかたいかに秋のはつ風

荻

身にしめてきけはさゝ〔ら歟〕なる夕暮におとたてそふる荻の上かせ
〔荻歟〕□の葉もとふ秋風も夕暮も身のためにとてうきはわかしを

七所新宮法樂一日百首中霧

みるかうちに霧たちわたる山陰はさらぬ秋たにさひしき物を
時のまのけしきそかはるみるか中も見さりし物を霧の海山

天神山社法樂十首中

夕ま暮ま萩露けき鹿のねにむしなきそふる山のした萩
虫のねに鹿の音そふる

月五十首中霧中月

明ゆくや山もとこむるあき霧まかきもうすく殘る月かけ
秋はいぬうす霧かくれなく蟬のは山あらそふ月のかけ哉

太神宮法樂百首中湖月

晴わたる浪路遙けきふせの海やありそのかよひ月も見へゆく
霧渡る月のおもてもふせの海やいつくありそのかよひ絕つゝ

鴈

秋とてや常世はなれて來る鴈のいつくもおなしうきになく覽
思ふにはいつくもかりの常世とやうき秋しらて行かへるらん

布留法樂卅首中月前鴈

月待て嶺こへけりと聞まゝにあはれよふかきはつかりの聲
ね覺せぬむかしやとをき初鴈の嶺こす月を枕にそみる

日吉法樂卅首中

照月にさそなおもひはわかぬ身もこゝろの中のさらしなの山
昔わかなくさめかねし影ならぬをはすて山の月はなつかし

月五十首中閑中月

つれ〳〵と月も殘りて秋ふかきおもひはいかゝあさちふの宿
秋も秋かゝる露やは淺茅生にたゝよのつねの月もやとさし

百首中荻聲驚夢

秋さむみ荻のう葉〔上歟〕をふく風に夢路はたへてあり明の空
荻のこるひとりね覺の秋もはやさむしろさひし有明の影

七所新宮法樂一日百首中苅萱

たれもしれ人の身はたゝかる萱のむすふかと露の命とはして
との葉の風をもしろやかる萱の姿をみれは塵をつくなり

南無金峯山藏王權現杏冠置て十六首中

むくらお〔か歟〕ひしけれる庭の夕露をたかため月のはらひきにけん
露の玉しりまし庭の秋風よ月のとふへきよゐこゝろせは

百首中露底虫

うつらなくゆふへの露の深草や猶まつむしの音をもそふらむ
ふか草やかりにも人のこぬ夜はをうつらの床の松むしの聲

春日法樂卅首中須磨浦

たへすみるもしほの煙たつ霧も月におよはぬすまのうら風
藻しほやく煙もさらに秋の月ふけてはかけのすまの浦風

廣瀨社法樂十首中

おもひなき心にも猶〔ふ脫歟〕ゆくれの秋はいかいか〔衍歟〕なる空のうき雲
心なき雲のはたてに物おもはぬたか夕くれの秋をしるらん
太神宮法樂百首中秋夕
露霜の草木に色はなかりけりこゝろをそむる秋の夕暮
秋にそむ心に色の一しほもむなしき空や有てなからん
日待續十首中菊久盛
仙人のこれやすみかとしら露のにほひもふかき菊のしたかけ
すみきけむ世々の仙人と〔マヽ〕ゝみて花もかはらし宿のしら菊
九月十三夜五首中
いひやらん月夜よし共よゝし共とはゝ名にあふ名を重ねつゝ
名にしおふ半の秋の波こえて今はた月の末のまつ山
月五十首中露月眺望
和田の原かきりもなみの半天に月いてぬれはうかふ嶋山
秋の夜の月にはみ〔誤字歟〕の嶋つ鳥うかふ波路のおも影の空
三輪法樂五十首中有明の月の
所から折からいとゝてりそふやあり明の月のあり明の山
半天に有明の月の行末や猶世にしらぬ影したふらん
日吉法樂三十首中
ありすみてしくるゝ月のかへしをもそめます物は心なりけり
秋をへて染ます色や久堅の中におひその杜のした露
布留法樂卅首中擣衣幽

秋の水をとさへ空にすむ月のみやこのたつみ衣うつなり
たへていかに水のみなかみすみ初しむかしの秋の宇治の橋守
月五十首中月下紅葉
露霜にそめてもあかす木の間もる月に色そふしたもみち哉
夜をへつゝ照そふ月の下紅葉露霜よりもこかれはつ覧
七所新宮法樂一日百首中紅葉
ちしほにも猶色そひて今朝みれはそめぬ露おく庭のもみちは
さそひ行嵐もかなやをのつからほかのちりなむ庭の紅葉は
布留法樂卅首中原紅葉
染あへぬあしたのはらのむら紅葉露をのこして行しくれかな
をくと見し木の葉なからに山風の露ものこさてさそふ秋哉
住吉法樂三十一首中
そなたにや秋はくれぬと詠むれは日かけ露けきいりあひの空
暮はてし夕日の雲に秋も今入あひの鐘の聲そ色そふ
百首中暮秋紅葉
秋はけに西にそかへるたつた山みねのもみちの色にいてつゝ
かたみかは今日かへるさの秋の雲立田の紅葉色もわかれす
日吉法樂三十首中
散のこる庭の紅葉はうつむともなにかうらみん今朝のはつ雪
庭のおもは散しく紅葉うす雪にむもれもはてぬ宿のけしきを
百首中冬月冴

吹すさふ外山さひしく冬のよの月に見へ行木からしのかせ
冬かれの外山さひしき月の色に木からし吹て霜まよふ空

布留法樂卅首中石間氷

みるまゝにこほりにけりないしま行水のしら波たちもくらて〔マヽ〕
行なやむ音かときけはうす氷いしまの水もとちかさねつゝ

太神宮百首中霜

日かけをやまちて消ゆく有明のひかりとともにさゆるあさ霜
いかはかりうすき影にて冬の日の空にもきゆる月の氷そ

庭雪

跡つけてとふへき人を待ほとにまたにみも見ぬ庭のしら雪
莫〔マヽ〕遮とへし人の庭の雪跡つけしとの心つかひは

雪五首中

よそにのみなかめなれぬる白雲の雪になり行かつらきの山
降つみてけふそしら雪白雲のよそはきへ行葛城の山

七所新宮法樂一日百首中水鳥

たれもしれよわたる道は水鳥のうかふをみても下のこゝろを
影と身とうかみしつむや誰も此世をうみわたる鳰のかよひ路

春日法樂卅一首中湊千鳥

能登の海や夕鹽たかくよる舟のみなとをかけてたつ千鳥哉
をのつからあまの捨綱よりくるや湊の千鳥たつ空もなし

布留法樂卅首中忍待戀

さらぬたになかめなれぬる夕暮を忍ひわひてはまつかせそ吹
わひつゝも忍の軒の松風にみたれしと思露もいつまて

日吉法樂三十首中

夕くれはいなはのそよとまたれてもひとりぬるよに秋風そ吹
思ひ出よたか秋風の暮とにたへさらむ身のはてやいかにと

太神宮法樂百首中不逢戀

いつとなく油〔涙歟〕行水のあはれ身にしらす逢瀬をたとりわひぬる
またしらぬあふ瀬なりとも泪河わたる世あらはたとらし物を

百首中契經年戀

かきりありと契おきても錦木は朽ゆくまての身をいかにせむ
錦木は朽ぬためしと聞し世もうき身かひなき名にやたてまし

布留法樂卅首中後期〔昔歟〕戀

夢もうしかへるあしたにまとろめはいくたひみるも別れけり
まとろまぬ又ねの床はとさらにみゆやとたのむ夢たにもなし

太神宮法樂百首中歌〔祈歟〕戀

限なきおもひの末か空にたつあさまのたけも富士のけふりも
命たに戀におもひの限なき身は富士のねにこかれわひても

變戀

うつり行花は春ともまつへきをこゝろの色そいふかひもなき
情しる人のこゝろの花ならは移ふ色も見つゝしのはん

恨戀

恨み侘なにはにつけて詠むれはつらきそ戀の身をつくしなる
はかなくそ何身をつくし難波なるえにしもしらて思そめ劒

月五十首中寄月恨戀

つれなさをうらみても猶のこる夜のあり明の月は何ならぬ哉
さても猶うらみ有明のつきもせぬ難面さいつを身の果にせん

百首中恨絶戀

今そしる大方の世のうらみそといひしまゝにてたらん物とは
人はそれと思にもしらはそむき南大方の世のうきになしても

三十首中嶺松

三笠山あふけはたかししら雲のえたさしかはすみねの松かけ
あふきてもなを仰ても三笠山雲井は峰の限なき哉

七所新宮法樂一日百首中曉

ね覺して後前の世をおもふにそ身にあまりある鴫の羽かき
むかし今かす〳〵つもる身のうさを老のね覺の思出にして

夢

おもふとおもはぬともみゆなれは夢はいかなる物とかはしる
おもへ人よしあしわかすうつる世の夢も鏡の影とみつへし

百首中薄暮松風

くるゝ日に夕浪しろし大伴のみつのはままつうら風そふく
浦風の眞砂吹たてくるゝ日にうす雲しろしみつの濱松

聖廟法樂續卅首中山家松

すみなれて聞とはなしに世のうきめ見へぬ山にも松風のこゑ
捨身や所せからむ世のうきめ見へぬ山路と誰も入なは

百首中山家送年

春秋を送りむかへてわか世とや猶みはやさんわかの山さと
しつかなる山と水とにすみなれは吾も心のたのしまん世を

三輪法樂五十首中曉おきを

おなしくは法のためともつとめはやあかつきなき〔お曉〕を武士の道
昔きくそのものゝふの道ならて法のためにもいる箭ありとや

住吉法樂卅一首中

しらせはや鬼神までもやはらけは人にそなへてやゆ〔ま歟〕との葉
をのつからしるもかしこし神世より人になへての言の葉の道

春日法樂三十一首中

名を思ひ身をかへりみてしらま弓あしきかたには心ひかるな
思ひをかむ世にふるわさも高き名も吾はふみゝぬ道しはの露

太神宮百首中旅

露はらふ床の山かせ吹くれてたひねの袖にうつらなくなり
一夜さはゝらひもつくす露もかな旅ねの床の山風の袖

三十首中旅泊夢

都思ふまくらのなみのうつたへにうらかなしくもかへる夢哉
しらせはや見へはやせめて故郷にかへる夢なき浪のまくらを

百首中旅泊波

さらぬたに旅ねはうしや浪の上にうかへる舟のあはれよの中

絵なからいく夜あかしの浦つたひ海士の家たにまれの往來に

布留法樂卅首中閑中燈

いつかさてよな〳〵むかふ灯火を法のためとて我はかゝけむ

よな〳〵はこゝろ傳る燈のもとの光をかゝけてそみる

七所新宮法樂一日百首中懷舊

えらひをくふるきとの葉みても世に誰か昔をしのはさるへき

忍へ猶よはすなから情ある此ころの世といひし昔を

春日法樂三十一首中眺望

そなたにはありともしらぬ山川の夕日に見ゆる水のしら波

秋霧の山邊晴行夕日影さしてそみゆるさほの河水

太神宮法樂百首中田家

民は世になひくすかたそ秋の田のほむけの風の殘るかたなく

民も今田のもの水のくたれるにつく〳〵と世を思ひとくらん

神祇

祈こしめくみをそおもふ神路山いつる日との空をあふきて

神路山出る日とのつとにおき夜半にいねてもあふかさらめや

七所新宮法樂一日百首中釋敎

たらす我たのみをかけて蓮葉のいとくりかへす御名の數哉

たのむらん御名は一度となふるも往て生れん事をのみこそ

三輪法樂五十首中三世の佛に

こゝろとめす三世の佛に手向みんはなももみちも有明の月

手向をけ春秋わかすさかぬまの花も紅葉もみよの佛に

日待續十首中寄神祇

あふきみよ天照神のひかりこそ世々にくもらぬかゝみ成けれ

神代よりかけて天てる光こそ今もますみの鏡なりけれ

七所新宮法樂一日百首中祝言

春秋を富るやとには友鶴のかす毎にこそ千世は見へけれ

そなれきく老もかくさむかけやこれ春秋とめる宿のとも鶴

右金章は去年春夏の中よみおける歌六百首はかり書あつめて。入道前內府にみせ奉られしに。三百餘首合點し給て。ことさらに襃美の語を述給へりとそ。其中百首を書抜て和し侍るへきよしあり。旅窓いとまの日これをひらき見るに。まことに錦繡の色たへにして。立田姫も及ましく見へ侍れは。なほさりのとの葉たちならひて。花のかたはらのみ山木といはんにもたらさるへし。しかあれとも山ひこのうたふるにおなし聲なることをおもひいてゝ。もし此玉のこゑにかよふひゝきもやあらんとてなむ書つけ侍り。管城子の心もはつかしくかたきに。やむとをえぬなるへし。

天文乙未林鐘十八日　　洛下隱士雀軽

一堀河院初度百首。女郎花。仲實。　いさなみに今も又みんをみなへししなふのすかたあく時もなし。是は万十　いさなみに今も見てしか秋萩のしなひにあらん妹かすかたを。是を用られ候。率爾(イサナミニ)此點古より候と見へ申候。しなふのすかたはわろくよまれ候。しなへるすかたにこそ候はめ。

右歌合は享祿四有歌。逍遙院御合點之歌之内を百番とし。天文二年夏御ヽ申上。同三年二月廿日に下給候以本。此一册寫之。同年天文三年四月四日。

　如斯御贈答申。

君にかつあひみるはかりとの葉の花にむかひてくらす春かな

適閲遠忠資直之百首和歌。卷首題下唯有遠忠之名。凡每題二首。而不知孰資直之詠。於是件資矩考之。類題和歌集每題二首。前遠忠後資直也。且推奥書之意。盖資直和遠忠之百首者也乎。因欲無後疑。而貼書之卷末。

　元祿乙亥秋

〔右十市遠忠百首以靜嘉堂文庫本補之〕

# 續群書類從卷第三百九十五

和歌部三十

## 寂蓮法師百首

詠百首和歌大貳入道出題

元日立春

立歸る年とゝもにや春もまたゆきあふ坂を越てきつらん

兼待子日

千年摘子日の友と頼めてもまつは久しき例しなりけり

霞籠行舟

中々にみるめやよそに成ぬらん霞むかすく\あまの釣舟

雪中聞鶯

里馴るかきねも雪にうつもれて猶谷深きうくひすのこゑ

獨摘若菜

雉子鳴春の燒野の若菜ゆへねたくも人を誘はさりけり

門前青柳

さしてのみ人待宿の柴の戶をたれこめたるは青柳の糸

梅有遲速

春風やまつ咲梅を誘ふらんかたへ匂ひの袖にすくなる

早蕨未遍

むれてくる友こそうとく成にけれのへのさ蕨おるにまかせて

櫻花盛開

咲を待散をおしまて花を思ふ心のほとは今朝の梢そ

遙見春駒

難波潟あしの若葉の穗に出て招くと見ゆる駒のふり髮

曉天歸鴈

尋こぬ人こそあらめあたら夜の月と花とにかへる鴈かね

夕呼子鳥

夕月夜霞にまかふ山里に思ひかねける呼子とりかな

蛙鳴苗代
苗代の水にうきねやまかすらん蛙の聲のあせ傳ひ行
故郷桃花
色はみな昔なからも桃のはなふる枝や我を思ひ出らん
杜若映水
唐衣きつゝ馴けん面影もなみまにうつす花の夕榮
杜間菫菜
色深きしのたの杜のつほ菫千枝の雫や雨に添ふらん
款冬添岸
水の面に咲こほれたる山吹は下枝そきしのへたてなるらん
樵路躑躅
賤の男か家路もくれぬ岩つゝしさけるあたりにつま木休めて
藤花初綻
藤波に千年の春や越ぬらんけさ色かはす住の江の松
惜春似友
ならひなき哀はなとか懸さらん春とて人の友ならぬかは
貴賤更衣
人並に賤か袂のかはるこそ花の衣は名さへおしけれ
卯花廻宅
卯花を垣ねのまゝに詠れは出入門にめくりきにけり
水鷄何方
何方とよかるゝ里もしりなまし閑定めたる水鷄なりせは
郭公如夢
こよひかく聞ならひなは郭公まれなるこゑにたゝんものかは
沼邊菖蒲
引殘す跡しのへとや菖蒲草涼しくかほる沼のいはかき
雨中早苗
五月雨はいなはの船を思へとや
盧橘香砌
槇の戸を明れはさけるたち花の花ちる里におしきすまひを
久愛撫子
ことしたに馴ぬる程は知られけり咲すさひたる大和なてしこ
螢火過簾
玉簾いふせき中のむつことを思ひしらても行ほたる哉
深夜鵜河
迷ふへき契そ深き鵜飼舟此世も月の入を待ける
夜々射火
射火すとねぬ夜つもれは健夫かをのれ獨やめをあはすらん
馬上聞蟬
眞柴分はやむる駒もとゝろきて木高くうつる蟬の諸聲
近見池蓮
此世よりなつそふ池の蓮かなをらぬ袂に露移るまて

泉爲夏栖
故郷は岩もる水にすみかへて蓮や庭のあるし成らん
家々夏萩
夏の日をみそきに捨ることよひかな月ゆへ秋をまたぬ宿にも
風告秋便
吹過る風の音たにかはらすはけふも夏野の荻のうはかせ
庚申七夕
こゝにこそねぬ夜なりとも天の川雲の外なる契たかふな
萩散遣水
行水にやかてしからみかけてけり花散さとの萩の下枝
女郎花挿垣
山里にかこひ分たる女郎花幾もとのへのものと成らん
刈萱亂袖
風吹は下葉はかりそ刈萱のまかきのうちのものと見へける
蘭香薫枕
なつかしきたか手枕のあたりそと心をみたす蘭哉
荻聲驚夢
さもこそは跡なき庵と荒果め夢路もたへぬ荻の上風
薄妨往還
旅人のけしきにしたし花薄ひとかたならすまねく心は
寝覺聞鹿
心をはつくしな果そ鹿の音に秋のねさめは今宵のみかは
雲間初鴈
初鴈のかく玉章をまきよとてほのかに見する村雲の空
淺茅露重
置露にをき臥庭の淺茅原末葉にもとの雫をそ見る
霧中聞鶉
夕風に飛たつ空やまゝふらん尾花つたひに鶉なくなり
隣花槿
あれぬとて隣にいとふ中垣はあさかほさかぬ宿そ嬉しき
夜中駒迎
相坂の山のはまてゝ入ぬれは影かたふかぬもち月の駒
湖上月
しかの浦に泊りをさして漕舟のまかせもやらぬよいの月哉
擣衣音遥
小夜深く思ひしつめて聞時は枕のしたに衣うつなり
虫聲悲
あきの野を心々に身にしめて色に出ける虫の聲かな
菊花色々
うすくこくうつろふ色はしら菊の千草にもとを分ぬはかりそ
雨後紅葉
立田山こえ行岸の夕時雨梢にのみそあとは有ける

人毎惜秋

〔上句闕〕秋の別れを思ひわふらん

閑居初冬

あろしとも頼みし虫は音もせて蓬か閑に冬はきにけり

庭草帯霜

水を惜む笆の外は中々に霜にそ草の色は有ける

草庭聞霰

霜枯る茅の丸屋のほとなきは枕のもとに霰ふるなり

雪朝眺

なかめやる心の末も道たえぬ雪の朝の鹽かまの浦

五節舞姫

乙女子か袖ふる夜半のうつりかに匂ひをそふる雲の上人

寒芦満江

小舟さす入江は霜そわけやらぬ芦のほすへにをれかはすまに

古渡千鳥

心あらは隅田河原の渡守しはしは思へ千鳥なくなり

氷閉瀧水

石はしる音は氷に閉られてまつ風落る布引の瀧

水鳥驚筏

程もなく立ぬる跡に歸るなり筏に[ ]むら鳥

網代辟遊

誰も皆あしろによるや待つらん心々のまとひなれとも

禁中神樂

小夜深き大内山に風さえて雲井を過るあさくらの聲

鷹狩歸路

御狩野を雪の光にふみわけて歸れは鳥そ面影にたつ

遠近炭竈

立のほる煙そみゆる炭竈の小野の外にもとなり有とは

埋火忘冬

年月もをくらぬ宿にいかにして春をむかふる夜はの埋火

毎日佛名

年の内に殘る日數のあらはこそ閑ても罪の又もつもらめ

老後初戀

我なからうたて朽木もえにしあへは心の花の下に有ける

忍詩緣戀

ちらすなよ其はゝからを尋てもふせやといはん里のしるへそ

馴不逢戀

朝夕に夜々にのみしむる移り香の重ぬる袖の名殘なりせは

俄初逢戀

逢までもつらささそ見ゆる兼てより思はゝなとか契らさるへき

絶互悔戀

今はさは難波の芦を刈てたにきみかみそきに逢よしもかな

〔題闕〕
思ひやる袖にはしかしあつまの〻露分わふる袂なりとも
等思兩人
津の國の生田の川に鳥もいは身をかきりとや思ひなさなん
尋常片思
うきなから言初しより戀らねは思はすとてもえこそらはね（かはらね歟）
人傳恨戀
涙さへ傳ふる袖にもらせとや恨むるま〻に身にあまるらん
〔題闕〕
〔歌闕〕
曉見釣舟
晨明の月は波間にかたふきぬひとりやさ〻む海士の釣舟
澗底古松
谷越しの松のふるえやともきるの山傳ひする道となるらん
窓前栽竹
心から竹の葉そよく音にさへ窓打雨とめをさましつ〻
苔岩衣
岩そ〻くたるひの上にむす苔はうき世をいとふ袖かとそみる
仙栖鶴多
山ふかく友よふつるのけしきにも雲の通ひち打詠めつ〻
遊山端興
松かねのたけかり行はもみち葉を袖にこき入る山おろしの風
白鷺立川
あゆのふすせ〻の岩まにゐる鷺のみの毛なみよるかもの川風
野亭聞鐘
友もなき野中の庵に日は暮て遙にをくる鐘の音哉
夜過關路
なのりけん鳥の空ねにあらすとも明ぬと見ゆる月にまかせん
行人休橋
衣手に凉しくわたる河風や人をと〻むるうちのはし姫
海路日暮
賴むへき行ゑと見るそ哀なる螢はかりの海士の漁火
羇中風冷
かさぬへきつまもこもらぬ武藏のに袖をはよきにしのくた薄
遣唐使船
勅ならてと〻めもすへきわかれかは唐ふねのしはしとたにも
山家送年
立出てつま木折らし片岡も深き山路となりにける哉
田家老翁
秋過て山田に立る庵こそよろはふ賤かよはひなりけり
夢路古人
逢事は昔にかへる夢路よりね覺の袖をぬらす言の葉

深観夢想
なき數をはかなく歎く事よりも有を頼むはまさる哀さ
山寺懷舊
昔思ふあかゐの水の雫よりぬるとも袖をしほるなりけり
聞法述懷
いとふへし思ひもすへし鷲の山みのり末にあふ世なりけり
社頭祝言
里わかすくもりなき世を思ふかな春日の山の月をなかめて

# 登蓮法師戀百首

あふ坂をなにゝいそきてこえにけん末になこその關も有けり
分かねてきえける人も有物をうき身をくれに又知すらん
風吹はおきつしらすにをる波のまなく契しかひもなき哉
忘らるゝ我身のみこそから衣なにかは人をうらみしもせん
かくはかりなけかし物を錦木のたてなからたに朽なましかは
もろともにつく〳〵とせしかねとの人はらへにも成にける哉
なかれてとたのめし物を水の上のあはれや人に忘られにけり
たちよりていく世の程もへぬ物をふしたえにけり賤のしけ糸（ヒ歟）
かりにたに音信ぬ哉おほあらきの森の草とや我になりにし（マヽ）
君をこそ忘れわひぬれいまゝさせくもさへや戀のかきり成覽
きみかとしなかやの道も草むしてとふふすはかり成にける哉
おもひきやうれしくとけし下紐にはては根をむすふへしとは
人心かゝらん物と思ひせはうちたれかみもあけすそあはまし
今さらになそやつれなきいにしへに我身やかへろ人やその人（マヽ）
ひまもなくかゝろ涙も有物をあたにたえにし人にみせはや
なやうとて過んとこそかたからめ見しかとたにもなき氣色哉
忘らろゝ我身をのみや恨へきわするゝ人のつらからぬかは（命イ）
ありつゝも又もやあふと思はすはおしかるへくもなき我身哉（へてイ）
兼てよりかゝらん物と思ひせはあくれはおきし露と消なまし
なをやさはほのめかさまし花すゝき人の心にあきはゝつとも
我やあらぬ人やはかはるわすられしあふ暮とに契しはたそ
忘らるゝいまこそうけれ古へはなつさひてこそ過し身なれと
夢にたにありしかとく終夜伏あかしつと見るよしもかな
我にのみつれなく見えて誰に又思ひつくまのなへつくるらん
うき人にうしおほゝえむ人もかな思ひしらせて思ひしらせん
しのゝめの袖にたまひく山かつらはなるゝにこそ逢と知ぬれ
夜とゝもにぬれのみわたる袂かな野中のしみつ思ひ出れは
そのまゝにまたこそ我はうちふさね君は誰とか新枕する
あさからすたのみわたりてよものをなとたえにけん堀川の水（マヽ）
心こそ猶ひかれけれおもえすにうたてふりにしたつか弓哉
みさこゐるすまの入江にみつ汐のからしや人に忘らるゝ身は

いかて我みとのまゝ〔て〕はゐならすとも今一度もよそなからみん
うかりける人の心をしらすけのおひの世まてと契りける哉
思はしとおもふ思ひをおもひにて思ひたえせぬ思をそする
いひそめし時に中々うかりせは情なしとてやみもしなまし
忘らるゝ身をつみてこそしられけれ我忘にし人のなけきは
きみかこと思ひつゝけてさぬる夜は涙にうかふすけのを枕
心をはくたかし物を始より岩根のこ松ねかたかりせは
風はやみあさちかすゑのしら露やあたなる人の心なるらん
人しれすせぬわさ〳〵をせし中に何をか君は思ひ出らん
いとはるゝ身にもならはぬ心哉なにとて人のくるしかるらん
今見らむゆつのつま〔く歟〕ゝしさしもよに我も思ふ人もいてこし
思ひいつやあふとかたのうつせかひはなれかたくて過し昔を
君とわかとよさか枕せし時にかくなけかしき事や立けん
とし月はへたて行ともつらかりしその面影は身をもはなれす
しかすかに何をか人もいとはましうきを忘れゐ〔マヽ〕は命なりとは
千年まて葉かへぬ松もある物を程なくかはるこゝろなりけり
おもはんとつく〳〵いひしとの葉は忘草とやはやなりにける
かひなくてやみにしをたに嘆身に戀しさをたに〔ネ歟〕そへてける哉
さり共とゝふの菅菰みふにねて猶ならふをはあきてこそまて
あの〔り歟〕しのち誰にか君はつき草のはなめかしくて世を過すらん
思はぬをおもふといかて思ふへき忘られなから忘れぬそうき
うたてにも思ひはなれぬ心かなさはかり人はふりすつれとも
我からと人のつらさも覺えつゝかこつ方なきねをのみそなく
わすらるゝ我も心のある物をわするゝ人をなそやわすれぬ
我ために君はあたこの山なれや見れはなけきのしけりのみ行
うし時も有し物をとゆふされは思ひやりつゝねをのみそなく
數ならぬ身はくもり夜の月なれや思れてのみやみぬと思へは
むすひつる契そつらきともかくも人をは今はいはしろのまつ
逢事を又もやとこそまつは山かひなくならんとやは思はし
面影は見しまゝにこそかはらぬに心しもなくあらすなるらん
いかにせん涙に袖のくつとてもつゝむはかりの嬉しけもなし
さらしなと契りし物をかひもなく我をはすての山のはそうき
戀してふことの葉のみそ年をへて秋はくれとも色やかはらぬ
思ひこそ遠くもならめみちのくにの忍ふとたにも知せてし哉
夕くれとたのめてをきし曉の袖たに露はひまもなかりき
春されはやふらの雉うちとけてねたくそ人に忘られにける
思ひ出れはあひみし程の月日さへとをさかり行とのかなしき
難波かたなみまにおふる芦のねのふしならひけん身をそ恨る
夢にたに又もやみると夜もすからかへす衣のうらめしの身や
もろともにへし年月のいかなれは我のみならの都なるらん
我なかにたれせき山をつくりけん近江をよそに見るそ悲しき
七夕をもときし中を七夕にもとかるはかり成にけるかな

おもひきやあま夜の共に吹風のめにさへ見へすならん物とは
潸はなれやへのしほちに行舟のほのかにたにも見る程のなみ
別れゆく人をもいはしうかりける身の程のみそ思ひしらるゝ
二葉さすにゐくさ繭〔ヒ歟〕のこはいかに行へもしらすかき絶にけん
いとせめてなにか戀しきつちかりし姿は今もかはらし物を
思ひきやふせやにたつる蚊遣火のかはかり我を厭ふへしとは
かれ〳〵にとふとの葉のなり行は我なかにたに霜やおくらん
つく〳〵とやますゑぬしの敎へけんむすふの神の驗たになし
うとむらん人の心をうとまれてうとまるゝ身のうとましき哉
忘らるゝ我身はさもや大かたのよさへあやなくうらめしき哉
見しや夢わかれやうつゝうつとも夢ともえこそ思ひさためれ
忘れ行人のこゝろはつらからて思ひもしらぬ身をそうらむる
數ならぬ身をうら島のこはいかに契しかひもなき世なるらん
衣手にひまなくかゝるしら露は君や形見におきて別し
見し人を忍ふの岡の花すゝきなひくはまねく心地こそすれ
二人ねてふたりねたりとみし夢はひたりなは〔マヽ〕に有ける物を
うちはらふ袖にもあまる涙哉ひとりぬる夜のところせきかな
枯はつる草の下葉の露けさは我身の上になりけるものを
うつゝにてかゝらん中と思ひきやさらぬ別はある世なれとも
うし〔さ歟〕とのみ思ひなるほのひとつ松又たくひなき嘆をそする
月日きへ隔つる中と成にけりすきまをたにもあらせやはせし
今こそは思ひあはすれ逢とのうれしかりしにくやしかりけり
うしといひ戀ひしとはいへ君ゆへに心のならぬ〔マヽ〕ゝそ見えける
忘〔忍歟〕はるゝ身をいつ方にかくさまし世の中ならぬ世の中もかな
何事をおもひさはりてたえにけん我身はこまの勵ならなくに
よそに人とりてもな〔も歟〕をしつらき哉ありし心はいつちいにけん
水莖のねを見てたにしのはれんうき我身こそ住にくしとも
ほとゝきす待し月日をなかねとも今日こそ我は初音聞つれ

百一首

# 慶運法師百首

## 詠百首和歌

慶　運

### 春

立春

けふしこそ嵐にさやく篠のはの深山も霞む春はきにけれ

浦霞

いつのまに松吹しほる風はやみみほの浦半は霞こむらん
あま衣春くる空の朝なきに袖しの浦はかすみこめつゝ

鶯

うくひすのをのか羽風も吹とちていかにこほれる涙なるらん

若菜

朝みとり野への霞を白妙の袖にかさねてわかなつむなり

春雪

雲こほる空にはしはしきえやらて風の上なる春のあは雪

里梅

あれはてし難波の里の春風に今はたおなし梅かゝそする

柳

さほ姫の霞の衣うちなひき袖にすりとる青柳の糸

早蕨

はつ草のはつかにもゆる煙たになをうつもるゝ野邊の早蕨

旅春雨

袖ぬらすふしのすそのゝ春雨やよそに見えつる雪け成らん

春駒

つなかれぬ春の心とさくらあさのおふの下草駒いはふなり

歸雁

たかかたに行ともしらすみよしのゝ田面のかりの春の別は

花

詠やる遠山姫の花かつらかけてまたれぬ時のまもなし

まかはすは花とも見えし都より雲の八重たつ峯の木すえは

木の本にきてたに雲とまかひけるなにを櫻とよそに見つらん

花のいろにまかひし雲はかたみにてのち忍へきそらめ成けり

花さそふかたのゝみのゝ春風に雲のみをなるあまのしらなみ

菫

我身よに猶すてやらてすみれ草心はそめし色ふかくとも

暮春

年々にあかて別れし名殘たにかこちそへつる老の春かな

## 夏

朝更衣

立かふる衣ならねとこのねぬるあさの袂に夏はきにけり

餘花

夏山の風こそ匂へせみのはのうす花さくらけふやさくらん

卯花

袖ぬらす我身のためや山里のよをうの花も波と見ゆらん

尋郭公

時鳥きかすは何を外山なるまさきのかつらくるかひにせん

やとかれと花立はなはにほへとも心もとめぬ時鳥かな

しるやいかに山時鳥とき過てかれ行ころのたえぬ思ひは

早苗

小山田にとるやさなへの今日よりも稻葉の雲の秋そまたるゝ

五月雨

音羽山雲の浪さへわきかへる瀧のしらあはの五月雨のころ

鵜河

水の泡のあたになかるゝおなし瀬にきえぬよかはの篝火の影

照射

かひなしや幾よもえてもさを鹿にあはぬほくしのむなし煙は

瞿麥

いつしかとおきうからても見ゆる哉さくやあしたの床夏の花

夕顔

かくはかり賤かふせやのいやしきもさかりは見ゆる夕貌の花

海夕立

鹽風のふきこす音もたかし山入うみくらき夕立のそら

氷室

みかりのに見えし氷室や梓弓すゑもたえせぬみつきなるらん

夏秡

御秡すとゆふかけてけりさはた河袖つく水のあさのたちえに

## 秋

立秋

いたつらに吹と思ひしあすか風秋くるけふのしるし成けり

山家初秋

時わかぬみ山のいほのさひしさもいとゝましはの秋の初風

七夕

天河水のこゝろやわくらはにしつめかねてやあふせ待らん

荻

軒端なるいさゝむら竹それならてそよくか夜半の荻の上風

萩

故郷の庭のはき原しけゝれと草にやつれぬ花さかり哉

薄

花すゝき草のたもとの露散りて手玉もゆらに秋風そ吹

槿

朝な〳〵咲か苔地の花よりもさかりは見ゆる庭のあさかほ

鹿

有明の光を見てもなく鹿は山よりいてぬつまやまつらん

虫

いかなれは涙をからぬむしの音もさのみ枕の下になくらん

月

すみのほるほとをはまたし奥山のまきの葉しのき出る月影

みれはなと心すむらん村雲のひまゆく月はのとけからぬを

かくはかり晴なき霧のへたてともしらてや月の空にすむらん

世のうさを捨かねし身や山里の月にもあかぬ心なるらん

わたの原風そたよりと思ひしを夜舟は月のさそふなりけり

霧

あしからの山立かくす霧の上にひとりはれたるふしの芝山

擣衣

色かはるまさきのかつらなかき夜に外山の里は衣うつらん

紅葉

をしなへてまた色うすき紅葉哉いつれ柞の梢なるらん

紅葉はも千入まてこそこかるめれいつをかきりの老の涙そ

菊

うつろはてちるかとそみる濱風の吹上にたてる白菊の花

暮秋

おしからぬ露の命をのこし置てまたあたものと秋そくれ行

## 冬

初冬

柞散いはたのをのゝあさあらしに山路しくれて冬はきにけり

時雨

夜な〳〵の月もるたにも袖ぬれし寢やの板まにふる時雨哉

落葉

たえ〳〵に音そきこゆる花くもりふらぬ木葉の時雨なれとも

寒草

春日のゝ雪まにたにも萠出し草葉そ霜にあへすかれぬる

江寒芦

霜かれに殘るともなき難波江のあしねや老のしるし成らん

湖氷

夜を寒みにほてる浦はさゝ浪のなにのみたてる〔ゝと歟〕しほる比哉

千鳥

道を思ひ身を嘆くとてさよ千鳥和歌の浦はになかぬ日もなし

鷹狩

いつまてとつかれぬ鳥のなからへんとは交野に草隠るらん

水鳥

冴まさる夜半とやわきて思ふ覽ともねのをしのさはく羽風を

篠霰

山風はこすゑにさやく常盤木のかけのゝ小篠霰ふるなり

雪

雲たにもたなひきかくす柴の戸は埋れやすき雪の中哉

草も木も〔ねイ〕埋もれはつる雪にこそなか〳〵山はあらは成けれ

たらちめの聚めし雪はそれなから跡としもなき身もふりに兒

炭竈

大原や小野の炭竈いとまなみもえつゝとはに立けふり哉

歳暮

限なく老ぬる後のひとゝせは身につもるともよしや歎かし

## 戀

忍戀

身にあまる思ひの程もしらるへき涙を人になにつゝむらん

忍親昵戀

そふといへは親のまもるにはつる哉我人しれぬあふ坂の關

寄夢戀

よひ〳〵に見しはあたなる夢そともいつの現に思ひあはせん

不逢戀
戀しなん命のなかをかきりにて後の世まては歎かすもかな
なからへてたのむもくるし同し世の契ありその浦のあみなは

疑住所戀
尋ぬへき君かあたりそたとらるゝわか宿かへて待しならひは

切戀
夢にたも（にイ）あひみぬ中を後の世のやみのうつゝに又やしたはん

寄鳥戀
みかりのにかくろひかねて立鳥もあはて命をすつる物かは

待戀
かく計またるゝ暮をいつはりになれて賴まぬ身とや知らん

寄月待戀
こぬ人をまつとしらてや（とイ）こもるらん槇の板戸のいさよひの月

逢戀
うつゝともわかぬ契はよひ〳〵にみしを夢そと知程もなし

尋逢戀
關守のゆるさぬ道をたとりきてぬるよもまよふあふ坂の山

旅宿逢戀
さゝ枕たゝかりそめと思ふなよ一夜のふしも代々の契を

別戀
別路をとゝ葉のこらすしたへとやかねては鳥のおとろかすらん

祈戀
人しれぬわかねきことを賴む哉いさやよるへの水のこゝろは

未絶戀
種しあれは梢にねさすやとり木のかりそめなからかれぬ中哉

稀戀
たち別（帰イ）いくたひ袖にかゝるらんたえぬと見えしさゝかにの糸

絶後顯戀
人しれぬ尾花かもとは中々にかれにし後そあらは成ける

怨戀
もしほ火の烟にくもる月も見つかひなき里のしるへとふとて
ことの葉をつくして後は立かへり身をしるかひもなきうらみ哉

雜

杣川筏
杣川や高瀨さしこすいかたしのたゝむかうへにたゝむ白波

名所鶴
をくれゐて道まよへとは和歌の浦による鳴鶴や思はさるらん

山家
たつねきて住はいかなる宿とたに人にしられぬ山のおく哉

田家
小鹿伏苅田の霜の寒る夜そ庵もるよりもいねかてにする

寄舟雜

うきてふる我身をささふ松浦舟待らんと思ふかたならねとも

羇中送日

都出し日數かさねてあつまなる霞の關も秋風そふく

懷舊

さのみかくみし古への戀しきはいつより後のうき世成らん

述懷

さすかまた歎くもやすきこの世哉捨ての後のかすならぬ身は

神祇

跡たれしそのかたそきの宮はしら立かゆるへき御代や待らん

伏て思ひおきて祈るも君か代をよるひる守る神そしるらん

延德三年九月十五日　西塔東谷書之

〔右慶運百首以圖書寮本一校〕

# 堯孝法印百首

## 詠百首和歌　權大僧都堯孝

### 春二十首

立春

あまつ空霞のうへは出る日のひかりもたかし春や立らん

霞

わたの原行衞もはてもしら波のたつなかきりに霞む春哉

鶯

これやこのおさまれる世の聲ならしみかきの竹に鶯のなく

殘雪

朝ほらけ山のいつこはみえわかて霞のひまに雪そ殘れる

野若菜

打むれてけふや若なを摘そめん野への雪まのありきあらすも

里梅

春はたゝたか里わかす咲梅のかけなつかしみすみやなれまし

簷梅

さそへともうらみぬ風のやとりかな匂ひつきせぬ軒の梅か枝

春月

さえかへる霞の袖のうす氷なをとけやらぬ月のかけ哉

春曙

霞のみ明ゆく夜はのひかりにて月ものこらす山のはもなし

歸鴈

なきぬなり霞のをちの春のかりたなひかれ行夕暮の空

春雨

ありま山ありつる嶺も見えぬまてかすむいなのゝ春雨の空

柳

なひくなりなきたる朝のあさ緑春の空さへ青柳の糸

待花

咲ぬやといそく心のはなかつら木すゑにかけぬ時のまもなし

初花

かさしにもおらてみはやせはつせめのはつ花櫻さきにほふ也

見花

やとかりて春のいく夜をおしみきぬ月もおりしも花の下ふし

盛花

とをからぬ嶺にやへたつしら雲にさかりしらるゝ山櫻かな

落花

木のもとにみてこし春の日數さへつもれは花の雪となるもの

欵冬

おもふ事いはぬ匂ひの花なからたえすや色にいての山吹

藤

住江の松の木陰に咲ふしはしつえをあらふ波かとそみる

暮春

なにをかもくれ行春に手向山櫻のぬさはちり過にけり

## 夏十五首

更衣

花の香を忍もちすり夏きても心はかふる袖ならなくに

卯花

そことなき里の行手のうつきはら待れぬ花もいまさかり也

待郭公

おりしきてこよひもあけぬ郭公なをやまつちの山のした柴

聞郭公

ことなつはいかゝときゝし古ことも今はた忍ふ郭公哉

早苗

ゆたかなる水のまに〳〵せき入て民やすき世のさなへとる覧

橘

橘にむかしの風のかほるともをよはぬ袖はいかゝふれまし

五月雨

あま人の袖にも波はこゆるきのいその玉ものさみたれのころ

夏草

ほに出ぬ薄かうれも露ちりて秋をそまねく野への夕風

夏月

秋よりも眞砂の霜夜かけさえてつきに夏なき籬のをと哉

鵜川

ほのかなる光みるさへいとゝしくくらき夜川にかゝりさす也

螢

かこつかなみちの光はある世にも窓の螢のおろかなる身を

夕立

此里は日影そめくる山たかみはれぬ雲井や夕たちの空

蟬

なきすさむ蟬のは山の夕つくひもろかけらすし木々の下道

納涼

夏をさへしらぬおきなにむかふ哉むすふ清水に影やうつれる

夏祓

みそきする川瀬もふりぬみ吉野やいつの宮人ゆふなかしけん

## 秋二十首

初秋

今朝よりは音もいつしかたかまとの尾上吹こす秋のはつ風

七夕

けふにあふ七夕つめの天つひれふりはへ契る心しるしも

荻

吹たひにきゝもすくさすかつは恨みかつはなくさむ荻の上風

萩

駒なへていさみにゆかんとはかりも誰かいはせの野への秋萩

虫

夕暮の秋ふく風に聞そへていとゝ身にしむ虫の聲かな

鴈

こしちより夜さむはさすかなれぬらん今更誰に衣かりかね

鹿

夢にたにあひみぬ妻やうは玉の夜半をはかなみをしか鳴らん

秋夕

厭はしようからすとてもうかるへし秋に夕のなき世なりせは

秋田

明渡る門田のいなはほの〳〵となひくかたより秋風そ吹く

山月

あしひきの山のこのまに月も出ぬはたやこよひも心つくさん

野月

更にけりをきそふ露も玉たれのこすのおほのゝ夜半の月影

關月

よとゝもに關吹こゆるなみ風を月にきくなりすまのうら人

橋月

かつらきや明る名殘はなをさりにえも岩橋の夜の月かけ

浦月

吹にけり秋なき波の花もなを月に色そふ夜半のうら風

菊

九重の庭には千代をつむ菊の露もやいとゝ玉をしくらし

擣衣

秋風もなみたもよほす故里にいまやたらちめ衣うつらん

霧

いつみ川いつみしよりも霧立てわたりそ遠き秋の夕くれ

杜紅葉

そめやらぬ忍のもりのうす紅葉おくゆかしくも打しくれつゝ

川紅葉

龍田川なにたつ木々のから錦おりはへ波のたゝむとそ見る

暮秋

しかりとてとゝまらなくにゆく秋のみちの芝草しもまかふ也

## 冬十五首

時雨

村しくれ故郷さむくならの葉の名におふ宮も冬はきにけり

落葉

山里にもみちふみ分人とはゝあらしをさむみわふとこたへん

霜

夜もすからさえし限はとけにけり霜のふりはのあかぬ朝けに

寒草

冬さむみ霜もふるえの萩の露にかりの涙やこほりそふらん

冬月

かさゝきのかけたる橋やこれならん霜さえわたる夜半の月影

氷

さわた川袖つく水も行なやみ氷そかゝるまきのつきはし

霰

ひろふともしはしはきえし霰さへこほりてたまる玉さゝの上

千鳥

明かたは月もかたみのうら風に猶友したふ千鳥なく也

水鳥

池水に氷の關やへたつらんつかはぬをしの聲のきこゆる

淺雪

ふるほとゝあさちにましり咲花のなひくとそみる今朝の初雪

深雪

あらましもつもり〳〵てしら雪のふかき道にや跡をつけなん

神樂

神もさそま弓つき弓をし返しうたふ聲には心ひくらん

鷹狩

いまも猶さかのゝきゝすねにそなく代々の御狩の跡や忘れぬ

炭竈

うすけふりなひくをみれは雨雲のよそにもしるき嶺の炭竈

歳暮

ゆく年も暮なはなけの花の色うつる日數もさのみおしまし

## 戀二十首

寄月戀

人しれぬ袖のなかにもたまり水ありとやこゝに月やとるらん

寄雲戀

おもへともむなしき空にゆく雲のさてもはれぬは心なりけり

寄風戀

此暮も又いたつらにあすか風身にのみしみて吹や過なん

寄雨戀

今宵しも雨はふりきぬおなしくはとへかし人のさ社ぬるとも

寄露戀

おもひしれ露はあたものあたなれと結へは草の靡きやはせぬ

寄山戀

いつよりかおもふかけみんいもせ山中なる川そ神になかるゝ

寄原戀

契りしもあたちの原にさ夜更ぬうきくろつかや獨たとらん

寄海戀

したへともゐなみの海の沖津風ちへにそ人のおもひへたつる

寄橋戀

わたるてふ事はなからのはし柱くちぬうき名のなにと立らん

寄關戀

宵々に誰ゆへならぬ關もりをかこつ身とてもいやはねらるゝ

寄木戀

わたつみのそこはかとなく流木の流るゝしほそからき思ひは

寄草戀

契たにかれすはなにかたとらましよしやうらみし鴫の草くき

寄虫戀

思侘ぬ今はちきりも秋の虫させるふしなきねのみなかれて

寄鳥戀

羽かはす契はしらてむら鳥のたつなはかりにさはきなれつゝ

寄獸戀

しらさりき契もうちに里の犬のとかめし聲をかきり也とは

寄玉戀

つゝまれぬ物にそ有ける心さへくたけておつる袖の白玉

寄鏡戀

思ひのみますみの鏡てにとれは影もとまらすこともかはさす

寄枕戀

さても又いかにみゆへき夢とたにしらぬ枕をたのむはかなさ

寄衣戀

うきなからかくてふるきの狩衣なとかしほれぬ色にみえけん

寄糸戀

いつまてかこなたかなたにかけつらんうきかた糸の絶る契を

## 雜十首

曉鶏

かきりなき我ねさめかな曉のゆふつけ鳥は八聲なくなり

松

ふりにけりいく世の霜をかさねけんかけも齢もたかさこの松

竹

すくなれと窓の呉竹ふして思ひおきてもまなふしきしまの道

山家

やとしめてすむ人かたし山ふかみとゝふまての友はあれとも

田家

身を秋のかりなる庵に詠めつゝ山田もるてふしほりにそすむ

旅

暮るまてこえつる嶺もたかし山ふもとの原に今宵かもねん

浦鶴

雲の上にわかの浦つる所えてかよふもたかき御代のためしそ

述懐

かすかなる庭の教もしたふかなたえたるをつく道につかへて

神祇

五たひの跡に四代へて今も又あへるをあふく玉つしまひめ

祝

我君のありへむ千代のあり數にあつめてけりなやまと言の葉

内閣本奥書云

永享五年九月廿一日。被召百首和歌之由綸旨到來。奉行左少辨明豐。

翌年六月十四日詠進之。同十二年二月十三日書寫畢。

桑門圓雅

〔右堯孝法印百首以圖書寮本及内閣本校合畢〕

# 續群書類從卷第三百九十六

和歌部三十一

## 正徹百首 聖廟法樂四ヶ日詠之

于松末葉釋　正徹

判者　今川了俊

### 春廿首

立春

雪のうちに出る日影のさしなからけふを春とやのとけかる覧

たけすかた誠に相應候。殊勝に候。

山霞

かすめともありとしられて高砂の尾上の松に春風そふく

ありとしられて。ことに金玉に候哉。

海霞

そことなき霞は晴てわたつみにのこるもくもる八重の汐風

そことなき霞の猶のこるもくもると侍すかた艷に候哉。

子日

引うふる子日の小松いく千代のかけをふた葉に宿しそむらん

二葉の松に幾千代のかけをやとされ候。殊勝に候。

若菜

袖さむみかたみのわかなさは水につむもたまらす淡雪そふる

とる躰に候哉。おもしろく候。

朝鶯

あさ戸あけはおとろきぬへきくれ竹の近きさ枝にきゐる鶯

朝因閑座。まことに鶯を賞せられし珍候。

軒梅

うつりきて軒はの花になりにけり嵐にまよふ四方の梅かゝ

始中終其語不可說候。

夜梅

はるの夜のまくらの梅のうつり香にしくかたおしき轉寝の袖
おもしろく候物哉。

岸柳

河岸やなかるゝ水のあはいとをよるにはあらぬ春の青柳
よくつゝきをいひわけられ候。やさしく候。

春雨

やまのはの夕日のいろはさやかにてかすめる庭にのこる春雨
あら〳〵面白や。かはる事ものこりて候ける。御うらやましく候。

春月

夜もすからあらしにはれぬ光り哉月や霞をいとはさるらん
ねこもりたるかゝり又一躰に聞候。殊勝に候。

春曙

さためすよ秋のゆふへのことはりも又曙の春のあはれに
此一首まことに源氏めかしく面白く候。

歸鴈

いそくらん心もさそなあれわたる春の田のもの鴈のとこよを
なひやかしく聞候。

栽花

うへしうへははや木たかゝれ山櫻白雲まかふ花とみるまて
一躰にて候。

翫花

このはるそかさしてもみん櫻花けには四十のおいやかくれん
作者の御心れ聞え。殊勝に候。

惜花

いかにしてまかせさらなんちりやすき花を浮世の風の心に
あら〳〵面白や候。誰もさこそ思ひ候へとも。かやうにつゝけられす候物を。

春駒

すさふらんみ牧の草のふる葉さへ又こまかへる春と見えつゝ
かやうの御詠のましはり候そ。猶たのもしく殊勝候。

欵冬

露かけてむすふやいかに山吹の花はひもとく井手のしたおひ
一ふしに聞え候。

紫藤

さくふちの花のかつらかさほひめの袖の緑の松にかゝれる
此御詠五文字御歌には猶不足に聞候。御案はかへられ候へかし。

暮春

いつかたとゆくゑしられぬ花鳥の跡をや春の猶したふらん
おもしろく候。

## 夏十五首

首夏

けふも又青葉のさくら雪とふる山路わけてや夏はきぬらん

第四句聞にくゝ候哉。山路を分て夏やきぬらんと候か。山をこえてやなとにてはいかゝ候へき。わけてやとすへられ候へは。如何に候やらん。耳に立候。

更衣

たちかふるならひもしらぬ墨染の衣はいつのかたみなるらん

作者の御身にとりては猶殊勝候。

卯花

しけりあふ木のしたとをき夕やみに道はまとはす咲る卯花

とりなし面白く聞え候。

郭公

ほのかにそ月は殘れるほとゝきすいま一聲をおもかけにして

あら／＼すこのけしき候哉。あそはし出され候折ふしの御心のうち。さこそすみ候つらんと。御うらやましく候。

庭橘

たちはなの咲ける軒端の苔衣ふるきいたまに袖の香そする

板間の袖のかめつらしく候。

早苗

もるまてもくるしからしと賤のをや我家のかとに早苗とる覽

一ふし又おもしろく候。萬葉の風躰眼前の間に候。

菖蒲

なかきねの菖蒲のかつら（車イ）よゝかけてたれ九重にひきは染け（はしめイ）ん

古躰作例の相應殊勝候。

五月雨

山の端も又かはなみもわきてみすみな雲水のさみたれの頃

始中終殊勝候畢。又題の聞當社法樂の御心根誠感存候。

夕立

ふきとつる空にもあらす風こえて夕立はるゝ雲の通路

彼をとめのすかたも猶しまさりて候。雲の通路言語こそ候へ。

夏草

ことしけきことの葉なから夏草の花もましらぬ道そものうき

御述懐はさる事にて候へ共。悉く金玉にて候物を。御傷御法樂にはいかゝと存候。

夏月

宿るさへあかてもあかす白妙の我ころもての短夜の月

おもしろくあらまほしきすかたにて候。

瞿麥

たまとのみ花にわきてや結らんまかてても草のなてしこの露

まかても草のなてし子の。つゝきやうやさしくめつらしく候。

氷室

みやこまて涼しかれとやかよふらんうたの氷室にくるゝ山風

おもひより候はす候風情にて。めつらしく殊勝候。

納涼

日〔数イ〕かけさへつもるいはゐにすむ水のそこの心もしらぬ夏哉

第五句ちと何とやらん耳に立候。いかゝ御案候て。ひとことと葉に御かへ候へく候。

夏秡

水上やいく里人のみそき川瀬をせくまての麻のゆふして

あさのゆふして。瀬をせくまてなとのこと葉つかひ優美に候。

## 秋廿首

早秋

わきてけふ身にしみまさる音もなしいつもうきよの秋の初風

下句秀逸の極りにて心肝にそみ候。

七夕

さ夜衣ふたつの星のあまつひれふるき秋にやかさねそめけん

あまつひれふるきなとのつゝき。まことひた新しく候。あらまほしき躰にて候。

稲妻

山もとのたのもはるかに風さはきむらくもまよふ秋の稲妻

みるやうの躰あらく〵おもしろや候。

籬荻

した荻の露もあらしもしほる也秋にやあるゝ籬ならまし

あまにやあるゝ一句殊勝に候。

野萩

花も葉もうつろひそめて朝夕の露のみさむき小野の萩原

朝夕の露の光。花も昔。以おもしろく候。

路薄

獨すむ草のいほりのむら薄たれわけきてかこゝろみたれん

あらすこのさまに候哉。面白候。

曉露

ちきりてきその曉の露の身を照らさん月にめくりあへとは

釋教の心。この曉の前により來し花實共に相備候。

隣槿

中垣のかけものこらすしほるゝやあさ日するこす朝かほの花

かけものこらすしほれぬる槿に。一葉一落の觀心をもよほされし。中たへたて候なか垣も。今は中道實相の妙理に叶候かと。をよそ凡慮にも推はかられ候。此百首の中にて申請候て主に成候はんや。

蔦風

しくれてもともにみたるゝ露はなし松よりおつる蔦の秋風

是又始中終おもふさまによく云たてられ候て。しかも殊勝。

夕鹿

しかはたゝうきを心にしらすとも鳴音はたへぬくれと思はん

此一首何となくやすくといひ出され候なから。心殊にねこもり。五文字なと源氏の夕霧にてや候らんと侍る。理と悉其みなもとよろしく候。

初鴈

露はらふあさけのとこに風たちて衣手さむしはつ鴈の聲

あさくとかろく云たてられ候間。誠の作者のしはさとみえて。おもしろくこそ侍れ。

叢虫

草のはら末葉の秋の霜をいたみかるゝとみれは虫のねもなし

かるゝとみれはと侍て。虫のねもなしと侍る。首尾相應。金玉驚耳目候。

嶋霧

あはちかた浪の緑もうすくこき繪島かさきの松のむら霧

浪のみとりめつらしく候。うすくこきえしまつゝき候て。凡慮にも及かたくて候。

嶺月

こえかゝる夕の雲やうつむらん月にみねなきをちかたの山

風情あたらしく候。

湖月

鳰の海やもちしほしらぬ浪の上にこよひみちたる月の影哉

所からもち潮しらぬ御詞面白候。

關月

あふさかの山路の月はのこるともいさしら川の關の曙

いさしら川と引ちかへられ候。めつらしき相坂にて候。

濱菊

はる秋の千代をともにやちきるらんちらぬ花さく菊の濱松

一かたにて候。

擣衣

なへてよもあさにはあらし都人うつやいかなるころもなる覽

一首のしたて五文字をよくのへられ候。殊勝めつらしく候。

黄葉

風ふけはもろき柞の秋の色をそむるも淺きえにや時雨るゝ

題の心をよくまはされ候。殊勝に候。

暮秋

時しあれはよを長月の夢よりもうつゝはかなくくるゝ秋哉

うつゝはかなく。あらおもしろのつゝき候や。

## 冬十五首

初冬

わきて猶いつもやへかきけふし社神にしたかふ冬もきぬらめ

おかしきさまにて候。

時雨

降まさる袖の涙や槇のやにやすくは過ぬ時雨なるらん

まきのやにやすくは過ぬ時雨。本歌をよくめされし物かな。あらにくきや。

落葉

秋をへし木の葉はしもにくちはてゝちるも色なき神無月哉

おもしろく候。

枯野

冬されは（かイ）又やこほりをうつむらん草にかくれしのへの澤水

まことに心ふかき澤水候。

寒芦

なにはえにおふるのみかはをしなへて豊葦原は冬枯れにけり

御詠一首のしたて御骨をられ候覧。但をしなへて豊芦原のかるゝと候ては。もし今程の人の耳にや立候はんすらん。旡をもとむる世中に候へは。あそはしかへられ候へかし。

井水

山の井の水のこほりや結手の雫にくもるかゝみなるらん

彼山の井より猶以ふかく聞候。

千鳥

なにゝかは身を慰まむわかの浦の友なし千鳥ねにたゝすして

あら／＼御理候や。尤同心銘難堪候。不便の此一首作者雨人かき候はんや。又身をなくさめんは自然ていにて。なくさめんとゝてはいかゝ候へき。御案候て御さため候へ。

残鴈

はつ雪もふるやあられのたまつさに翅をおもみ鴈わたるらし

網代

ありふともよそにやはみん網代木によるひを虫のあたの命を

ひを虫の命はたれもさこそにて候。感涙袖にあまり候。あはれ以面（今歟）申候はや。

寒月

影さゆる月のかつらの木からしや秋にもまさる色をしるらん

五句なから殊勝。尙以第五句ぬけて候。

庭雪

雪のうちにあれのみ増ろ古郷はのこりしみつの道たにもなし

三徑三道共以いつれにても候へはよくより來候。誰かかやうにはよみ候へき。

炭竈

すみかまの雪や氷をいそきてもわかとしさむきをのゝ山人

けにもと覺候事共にて候。

埋火

とにかくにさえあかすこそ埋火のかけまてうすき氷(衣イ)なりけれ

是又殊勝。何(〔ゐ歟〕)とて毎首如此あそはし候やらん(〔ならはし候物を歟〕)。後京極殿の御なむさかやうの事をこそ申なはし物を。ちとは引ちかへられ候へかし。

佛名

ありなしの外に心のみなもとを三世の佛の名をもわすれて

當家御本意けにもにて候。

歳暮

法のみちいそかれさりし月日へてかさなるとしの暮そ悲しき

是又しほれるさま〳〵の御法のおきて。いつれもわたりてあそはし候物哉。

## 戀十五首

初戀

思ひつゝあかしならはぬはつ鳥の音にたてすとも知人もかな

ことはりよく〳〵聞え面白候。

忍戀

しるへせよ心のおくにわけそめてまよふしのふの山の下みち

句のうつり所いつれもよく聞候。

聞戀

うき人の袖やはぬれん世にもれてかゝる涙のあめと聞とも

めつらしきさまにきかせられ候。面白候。

見戀

めかるなよ心のいろのうつろふもけふ(にイ)はあたなる花の姿に

首尾相應候。

尋戀

契あらはかとさせるともさはらめや思ふ葎の宿としらせよ

本歌本說いつれもよくより來候。

祈戀

厭ふとてつれなき人もみそきせ(河イ)は戀をあはれと神やうけまし

誠に神慮にも叶候へき御詠にて殊勝候。

契戀

めくりあはん夕を空に契りてもはかなやけさの月の行末

あら〳〵面白の下句や。あらまほしき樣にて候。

待戀

たのめつゝ急く春日の暮かたみさらは長閑にとふ人もかな

第四句此御詠にてはちと不足に聞候如何。心れは面白候。

逢戀

いつれをかまつあらはさんれしとこの枕の塵と積る言のは

いつれも面白候。

別戀

うかれ行玉とたにみよ雲はらふ身は白妙の袖のわかれち
　身は白妙の袖の別路。めつらしくつゝき候や。誠の金玉は
　是に過へからす候。

　題戀
なかれにきいさと答へてせく方もあらしあふせのとこの山川
　名取川と侍る一説も御詠の爲候か。ならへられ候けると
　面白候。

　稀戀
よしさらは忘れぬへしやあはすして過る月日の立にまかせて
　第三句猶御案候へかし。

　絕戀
たか秋の風の便にかけそめてみたれはつらんさゝかにの糸
　このさゝかに一すち面白候。

　恨戀
忘らるゝ身のうきかたの涙とはなされすとても世をは恨みし
　一躰に候。

　舊戀
しるしなき思ひは年をふる川のすきのふたもととふ方もかな
　又もあひみまくほしきさまをのつからしられ。いとおか
　しき樣候。

## 雜十五首

　山家
山にてもなをうき時や世中をいとふにそむく心なるらん
　うちかへりたるかゝり一興面白候。

　田家
すみすてゝのこる庵もかたふきぬかり田さひしきよもの嵐に
　殊勝〱。

　閑居
いはかねのこけの雫もこかくれて音を心にすます宿哉
　一ふしにて候。

　籬竹
いつる日のまかきをこゆる影みえてみとりそなひく窓の吳竹
　さる躰にて候。

　羇旅
歸らめやさかしき山に日比へておとろへまさるひなの長路を
　誠にひなひなしきかくにてこそ候へ。不便〱。

　海路
山ちかくけさなりぬらしうな原や遠きなみちの横雲の空
　殊勝候，知家卿今夜そみつる山のはの月思ひ出られ候。

　野宿
袖しほる野邊のかりほの草むしろ夢は思ひもかけぬ露哉
　首尾相應おもしろく候。

古郷

古郷とならのあすかにとふとりの聲もむかしの友やこふらん

古跡に成候つるあすかにて候。金玉候。

眺望

かみや川まくらのなみに夢覺て西なる山の月をみる哉

當社御參籠の式さそとをしはかられて候。

述懷

愚なることの葉なから猶うけは神にたむけて世にはもらさし

是又今程の御歌にふかく殊勝候。

懷舊

うかりしもなさけ有しもふることを忍ふやひとつ涙なるらん

伏見院御製をみる心ちして殊勝候。

哀傷

朝夕におくれさきたつ人の世を哀と聞も哀いつまて

哀に聞もあはれいつ迄。能かさなりて面白候。

蕭寺

契つゝ宮つくりせし都哉我たつ杣のをのゝ響に

平安城叡山の昔。內外誰者共以一首に顯候。目出度殊勝候。

瑞籬

神もさそまことの道を（とイ）みつかきのひさしき法の末まもるらん

此一首殊に第二句當社心ねこもる事に候や。能より來候物哉。定而神慮にも叶候つらん。凡慮たにも殊勝〳〵。

祝言

萬代とあとたれそめし敷島の國のさかへや神のまに〳〵

いかにも猶文道さかへて。不斷參會申さはやと。尤同心申候。目出度〳〵。

〔右正徹百首以圖書寮本校合〕

## 正廣百首 判今川範政

〔右舊本闕〕

和歌部三十二

# 心敬僧都百首

詠百首和歌　　釋心敬

春

舟岡やすそ野の煙面影にその世へたてす立霞かな
湿そよ涙おしむな朝な／＼送し人に野邊のうくひす
梅の花我袖よりも草の蔭に匂へ此世の春はこふらし
面影もぬるゝ計に春の草落すもかなし跡の夕露
なき跡を夜半の春雨つふ／＼と語る忍ふの軒の玉水
あさちふや涙露けき跡とへはむなしき花に夕風そ吹く
跡もなき庭のをしへの行末哉散しく花の夢の春風
我そたゝこてふの世々の夢にねし花の一夜の春の山かせ
世にふとも柳櫻をこきませし都の夢は又や見さらん
今の世は花もつるきのうゑ木にて人の心をうつす春かな
消かへりむかしの春をこふる夜の月やは空に何こゝろなき
一度はおつると見ても夕雲雀あかるこの世を誰か思はん
敷島や昔の跡の道柴に誰露分て菫つむらん
旅行は山さとの子の苗代に鳥おふこゑも泪なりけり
何事にさてもまきれて夢の間にあはれことしの春もくれけん

夏

しるやいかに山郭公をのれのみ此世にかへる聲したふらん
山ふかみ世を卯花の草のとに尋る人にしろく語るな
なけかしや人そ昔の人ならぬ花橘は本つ香にして
茂れたゝむなしかたみの野邊の草結ひて歸る人もなきよに
うらめしき五月のけふの別かな世はとこやみの敷島の道
草の原のこる螢の玉ゆらも有増かはの野への夕くれ
あはれとてしはしはゆるせ民は皆これを命に早苗取比

さし捨ねさつをの友に後の世は山のかせきの身をそうけまし
むすふ手に思ふ〔〻既戀〕かなし見しはみな泉のもとにかへるこの世を
此世より氷を見せてくれなゐの蓮に寒き水のさゝなみ

秋

秋かけて都は荻のやけ原になりにし宿は風も音せし
虫のこゑ風の氣色も草の原無人戀ふか野への夕暮
此秋ものこれる花はあたならてたゝ見し人そあさかほの露
植捨し一もと薄無路はさひしくもあるはまねく夕暮
夕暮のよもきか野邊を來て見れは我侘〔マヽ〕て秋風そふく
事わさに光ありしも何ならむ世はいなつまの夕暮の影
よしさらは心のまゝにみたれなむ身はかるかやの露の秋風
去年よりも月にうれへの色そゝふ秋やはかはる老やかなしき
哀とやかたふき終る今の世を山の端ちかき月もみるらん
うらめしな世はくらやみの空の月詠むとすれは胸にさわきて
月にあく心のなとかなかるらん皆うきとは見はてぬる世に
きり〱す夢もつゝかぬあさちふに枯なて世々の誰うらむ覧
忘えすかり路を鹿やられふらん弓張月の影に鳴こゑ
はかなしな昨日は花にうらみつる青葉の山の色にしくるゝ
鴈鳴て菊さくころも何ならん旅ねの夜半の長月の空

冬

はかなさにさためある夜を神無月おろかや空に何しくるらん
我秋に色をかへせる朽葉哉このよの人のはてを見よとて
花の色もうつれはかはる秋の夢枯野は風を問人にして
みしはみなあはれ淡雪消し野の夕影草の露をかたみに
我ならて又聞人もならのはに霰こほるゝ夜半の山里
おこりては程なき夜半の埋火にさかへぬる世の人を見る哉
人の世は氷を踏る方淵にのとけくすめる月の影かな
ころさるゝ鳥のこゝろに身をなして一もたつな野への狩人
大方は雪にもめてゝ一とせのつもれは人のひくゝなるらん
一年のこゝろほそさのかきり哉しはすの月の有明のかけ

戀

今は唯むまれ逢身を憑めともうきかた〱に身をやうけまし
よしさらは涙もくもれ月にたにわかて物おもふ夜な〱の空
夜もすから空に袂をしたひても何ゆへ月のなくとしらすは
浦みけん昔をかけて草の原おほろ月夜の露そ身にしむ
うとくなる夢も怨みしまほろしにふるき枕は見えぬまもなし
さても身にむなしき鐘の行末やたゝ後の世の夕暮の聲
うつゝこそきれはなるともむすへ猶ぬる玉の緒の夜半の契は
月も日も我かふもとをやめくらまし思の山の空に見えねは
はかなしな涙はしなてすめる世の文となるとも誰か結はん
此世より奈落の底のおもひまてさらは憂身のかつゝくしてよ

旅

草原ははてはかへらぬ旅人と誰かはならぬあはれ世間
一夜かる露の枕もかなしきにましてむもれん草の夕かけ
見せはやな田中のわらやあまの家はたうつ山の旅のあはれを
あちきなや名たかき人に國民のなけきを見せは世をや治めん
なれぬれは又身に深きなけき哉東路の終の人のなこりも
うけかたき世に生れてもなにならん都のほかの人と成せは
今はたゝ思捨るを旅なれてなけきもうすくなれるとやみん
何事に心とまれはあさましく見はてし方の戀しかるらん
なけかしな幾程ならん五とせも一夜の夢を旅の行末

述懐

なきやしるさても浮世のおこたりをくひ八千度〔くひの八千たり歟〕なけく心は
人をのみ今は見る世の言葉よつたなくとても誰にはちまし
言葉は今そ見はてし世のするのひこはへまての根盡かな
かゝる世を後やはしのふ何事もみしにはおとるならひ哉とも
生殘る人もなき世の行するに誰聞とてか名をもおしまむ
心たにさてもうき身のしたかはぬ此世に人を何かうらみむ
心なしと岩木をみしかむかしにていまそ岩木や人を見るらん
片時もなからへはうきこの世哉いまいく程と思ひすてすは
さそふ水ありともいなむ方そなき身の浮草はねをふかくして
まとにはみたせる人のとかもなしたゝ世ははての時來るとて

無常

かゝる世にあへるも消ぬ老か身をおろかや露を何思ひけん
誰なれはおろかやさのみなけくらん思しとけは主もなき世に
萬代とあしたに生れ夕には消ぬる虫も身をたのむらん
いつまての世をへんとてか武士の人を失ひ身をくたくらん
劒もて人をきる身のはてやたゝしての山路の柚木ならまし
野へに見し哀もさめて國さとの煙となるを聞そかなしき
草の原敷かふ野へのつかの間もありはつましき世をは嘆かし
思ひ草このよひとつの種ならておはなか本に又やもえまし
消にしはそのあはならぬ淡とみは誰か二たひ世にはめくらん
あかす見てきえし草葉の露はかり其世の人の心とも哉

釋教

いまはたゝむすへる水にまよひこし夢をはすゝく曉の山
かひなしなをしへのほかに我とこる心のなくはすみそめの袖
迷はしな我かいきしにの里をいてゝ又たちかへし人を敎へは
とく人も聞ぬる人もまもろしと思捨すは誰かうかはむ
のとやかにとなへ學へる人そうきたゝ今ならん身をは忘れて
めをとちてむなし心に尋れはふしき一の上につきぬる
六の道十のさかひはめのまへにみな見つくしつ何か生ん
木にきさみ繪に寫しても末の世の人をすゝむる法そかしこき
眞にはうかふとみるも心とは月もうつらし水もやとさし
ほともなくめくれる十年三瀬川今日まち得てや水もひぬらん

春迎満岩和尚十三回忌辰。爲酬年來之恩波。淩傳渓禿筆。從狂歌百首。三箇日之間綴之。嗤〔マ〕愚案靡云。所志之至不過何。皆是實相頓悟菩提直路。

文明第二〔三イ〕天蕤賓九日　　權大僧都心敬

かきおくも袖こそぬるれもしをくさ
なからむあとのかたみともなれ

〔右心敬法師百首以内閣本校合〕

# 道堅法師百首

## 聖廟法樂一夜詠

### 春二十首

音羽川

春やけさ峯たちこえし年浪もかはる音羽の谷の河風

玉島川

白浪の玉島川のあさ氷いつとけそめて霞たつらん

高砂

春たつとよはゝん聲も高砂の峯にこたふる松の風哉

春日野

たかためと思ひわかても春日野の雪間の若なけふや尋ん

三輪山

春のくるしるしはかりを三輪の山杉の一むらたつ霞かな

葛城山

面影に明行雲の葛城山や霞のまゆにまよふ比かな

手向山

鶯の聲もたかため手向山春の行てもさはりやはある

伊勢海

いせのうみや清きなきさの春の色にかすめる波の行衛知せよ

志賀浦

さそはれぬ花も此頃さゝ浪の色にやむせふ志賀のうら風

三島江

みしま江やつのくむあしの下水も枯葉の風にむすほゝれつゝ

塩竈浦

塩竈のうらみなれつる夕煙かすみの月にいかゝみゆらん

宇津山

分くらしうつの山風うつゝとも見ぬかたたとる春の夜の夢

芦屋里

立まよふ芦屋の里の夕霞花にやとゝふ行衛のみかは

吹上濱

散花を吹上の濱の白波にまかふもつらし興津鹽風

由良三崎

春の日の由良のみさきに舟漕て遠くも浪の花をみし哉

忍山

暮て行はるをはいかゝ忍ふ山風にしられぬ花はありとも

水無瀬川

わきてやは此里人もみなせ川山もとかすむ花の下道

大淀浦

うつり行浪に心は大淀のうらみかねてもかへる春かな

田籠浦

長閑にて田子の浦風たゝぬ日も又ちりかゝる藤浪のはな

末松山

年こえし空も程なく見るからうちにかはるや春の末の松山

## 夏十首

井川

大井川いせきによとむ春の色も浪間にさらす夏衣哉

藤田森

たちぬれてたれか聞らん子規しのふしのたの杜の下露

猪名野

時鳥またやはたのむとひすてゝいなのゝ小篠かりに逢夜を

御裳濯川

神風やみもすそ川の浪枕心涼しき旅にもあるかな

伊香保沼

あやめ引いかほの沼のいかはかり憂身はなかきねをも鳴らん

天香倶山

この程の月日もいはし朝ほらけさみたれつゝく天のかく山

大江山

露をたれいく野にわけん大江山こえ行かたは白雨の跡

難波江

難波江や芦のしけみの下くゝるをとにもちかき水の秋風

美豆御牧

刈残すみつのみ牧のまこも草おひ行まゝにしほれんもうし

松浦山

身の秋や松浦の山にゆく年のなかはをしたふ波もこえつゝ

## 秋二十首

泊瀬山

初瀬山河音すみて暮る日の影よりむかふ秋のはつかせ

龍田山

うす霧の龍田の山の木間よりまついろかはる秋の初風（三ヶ月のかトイ）

須磨浦

くれ渡るすまの浦舟をひ風にはやくも出て見ゆる月哉

宮城野

袖ぬれて木の下露にやとりせは物や思はん宮城のゝはら

水茎岡

水くきの岡のくす葉はうらむ共月待程の秋の夕風

小倉山

あま雲のをくらの山になく鹿やよそにつれなき妻も侘らん

宇治川

川音もたか枕にがくだくらん秋風寒き宇治の山かけ

常磐山

袖の色もかはる常磐の森の露かゝるをみすは秋や恨みん

三室山

時雨こしみむろの梢いかならんこの山かけも秋風そふく

高圓野

たかまとの小野の萩原分きても我すり衣色にやはみむ

伊駒山

しくれては紅葉やすらむいこま山見つゝ行衛の空なかくしそ

生田池

誰かおもふ生田の池にゐるをしの聲もあはれにふくる夜の月

清見關

清見かたおき行月の跡まてはたれをかとめむ浪の關守

武藏野

なをさりの袖たに露はふるさとをおきたち初し武藏のゝ原

伊吹山

さゝ浪や鳰の浦風すゑはれていふきのとやま月たかくみゆ

更科里

思ふにもいまさらしなのあきのみかたえて世渡る月の里人

白河關

露の身もいつさそはれん秋の風おもふみちなるしら川の關

野島崎

もゝ草の野島か崎の夕風にあきなきなみの花も散なり

明石浦

わかれてはいつくの波に明石かたうらすむ月にかよふふな人

阿武隈川

浪の間もなをせきかへせ又いつかあふくま河の秋のしからみ

## 冬十首

淸瀧川

水上の山もくもらてきよ瀧や木の葉落行すゑの白波

小鹽山

をしほ山麓の野への夕霜に寒き雲ふく峯のまつ風

住吉浦

住吉のうらのはま松雪しろし里とふあまの袖やさゆらん

交野

ふりにける交野のみゆき今はともたれとひ出て跡をしたはん

田簑島

雪にきる田みのゝ島のゆふわたりそれや誰共見えぬさと人

有乳山
あらち山峯にこりしく雲も雪もいくへかはれぬ日を重ぬらん
浮島原
色かへぬ松を見るたに悲しきをけさ白雪の浮島かはら
安達原
霜さゆる安達原のしらま弓しられぬ色もおしき冬かな
稲葉山
なけかしよ今歸こん春をのみ松はいなはの山ふかくとも
鏡山
鏡山つゐにくれゆく年ことにもと見し影のかへる物かは

戀二十首

伏見里
さゝ竹の伏見の里のかり枕しきもならはぬ袖の露けさ
霞浦
思ひたつ心のすゑもおほろけの霞のうらにまよふ舟人
石瀬森
思ふ事いはせの杜のいはすとももろき木葉の色やみゆらん
筑波山
いつよりか君に心をつくはねのしけき嘆きの露かゝりけん
袖浦
浪こゆる袖のうら風立名をもおもふ方にはよる舟そなき

益田池
くらへ見よわれそます田の池水にふかさもしらぬ袖の涙よ
高師濱
あた浪のたかしのはまの夕千鳥思ひしつまもかよひたえつゝ
阿波手森
人心はけしく見つるけしきよりさてやあはての森のこからし
志賀須加渡
あはれとは思ふ心やしかすかのわたりわひつゝかよふ舟人
濱名橋
こひわたるはまなの橋の夕鹽にさすか心のひくは見えつゝ
磯間浦
貝ひろふいそまのうらのあま少女ほさぬ袖とて誰にみせまし
守山
木間より身にしむ月はもる山のうきかり枕とふ人もかな
佐野舟橋
絕にける佐野の舟橋いかさまに思ひわたりて身を頼むらん
淺香沼
餘波とて何かはおしき徒にかへるあさかの沼のねぬなは
松島
かきりさへ浪にいつまて松島やおしまぬ命あふにかへすは
緒絕橋

ぬる玉の緒たえの橋に行かよふ夢をはかなみ猶や頼まん

三熊野

あさくもや人は心をみくまのゝ浦のはまゆふ幾重ならぬを

鳴海潟

哀とも思ひかけすやおきつ波よそになるみのうらみはてゝは

二見浦

なけきゆく二見のうらのふた道や風のさむしろ浪の手枕

名取川

涙にや身はうもれ木の名とり河さらは此よにくち果もせて

## 雜二十首

芳野川

吉野川かはをと遠く行水のあをねかみねに月すみわたる

鈴鹿川

わか心とゝめははてし鈴鹿川せきもる浪も行かへるらん

富士山

われそたゝふしの高根の雪みんとおもふ事のみよそに積れる

還山

別にし道にやわれもかへる山ありて世中さためなけれは

天橋立

袖ぬれてやとゝふ松の夕波に見しよもとをしあまの橋立

明日香川

うかふ瀬そ猶たのまるゝ飛鳥川けふまてのよに身は沈みても

鳥羽山

秋風のいほもりすてし人はとへとは山松の雪の明ほの

辰市

うきにふる身をかへてさへ思ふ哉いへにあるなはたつの市人

吹飯浦

浪風もふけゐのうらの梶枕いかにしてかは夢をたのまん

布引瀧

白妙の雲井に見えて山姫の心をさらす布引のたき

長柄橋

たゆる名をのこさんよりは橋柱ありしなからの道をたてはや

玉河里

やとりてもいかゝいをねんさ夜風のあられくたくる玉川の里

生浦

思ふ事ならすは憂身朽もせてよにある名をやおふのうらなし

佐夜中山

かきりあれはこれよりこゆる峯もなしけに月雪のさやの中山

嵯峨野

わひはてゝ今は我身のさか野にやきゆへき露の行衛もとめん

隅田川

思ふ人や有明の月の角田川わたりをとをく（みよねイ）まつさしてゆく

志賀麻市
市人のおもき荷をおふ馬はあれとわひてしかまの歩よりそ行
若浦
つゐにわかよるへとまては頼まれと通ひなれたる和歌の浦人
相坂關
くたりこし道を思へはゆくすゑのいかなる世にか逢坂の關
御津濱
君か代にあふみの海のしつかなるときや願ひもみつのはま松

〔右道堅法師百首以道堅法師集加校合〕

## 牡丹花百首

〔右舊本闕但宜參照卷第四百八十八所收春夢草〕

## 四吟百首

### 春二十首

立春　法印玄旨
をしなへてけふこそ霞め四方山のこのもかのもに春や立らん
沙彌貞德
みよしのや消あへぬ雪のふる郷は花の盛に春そきにける
紹巴
春たつと思ふ心の長閑さや天つ光の色をそふらん
昌叱
明ぬまは何のけちめもわかねとも人の心に春やたつらむ
朝霞
寒かへる夕の雲はきえはてゝ今朝こそ春の霞成けれ
照もせす曇もはてぬ朝日影匂へる山やかすみなるらん
よる聞し嵐の音も山のはもかすみにこもるけさのしのゝめ
みわたせはかすむ朝やはかりなき天津空とは成にけらしも
谷鶯
朝またき霧吹はらふ谷風に先うち出るうくひすの聲
あらち山峯のあは雪さむけれと鳴ころしるや谷のうくひす
谷の戸も明るあさ日にうちはふき木すゑにうつる鶯の聲
谷の戸はまたさえぬるもをのつから春をしりてや鶯のなく
殘雪
降つみしこその高根にほの〳〵と又消殘る雪を見る哉
山のはに春をかけたる白雪はさむさを見するかゝみ成けり
身に積るとしをおとろけ春きては見る〳〵消る庭の白雪
またきより降つむかたは消行も遲や雪のたかね成らん
若菜

誰か先わかなつむらん花かたみめならふ人の袖のゆきゝに
誰もけふ生田の野へに昨日さへつまんと思ひし若菜をそつむ
わかなつむ都の野へのかへるさはなへて緑のたもと成けり
おなし野をこなたかなたにもとめ摘若菜に遠き道とこそなれ

里梅

野へに先咲よりなれて見れはあかぬ梅の立枝も里をあまたに
幾里の梅のにほひをさそひ來てひとつにかほる野への春かせ
一もとの梅の匂ひを春風の幾里人の袖に分らん
津の國の難波の里のとゝへはふりせぬ春とむめやさくらん

檐梅

のきちかき梅かゝなから玉簾ひま求め入春の夕かせ
いたひさし久しかれなと思ふ哉軒はの梅の花のさかりは
手枕に軒はのむめの匂ふ夜は戸さゝて春の風そ身にしむ
かけたかきまやのあまりは色見えぬ梅も匂ひに咲比そしる

春月

かすむへき山のは遠く成にけり曇なはてそ春のよの月
心ありてかすみのとつる天の戸をあたになあけそ春の夜の月
心たゝつくさてそみる出入も空にわかれぬ春の夜の月
秋きての月の光もさもあらはあれおほろけならぬ春のよの空

春曙

はな鳥の色にもねにも霞のみ猶立まさる春の曙
我はたかきぬ〳〵よりもよこ雲の別をしたふ春の明ほの
あけほのに春のなかめはこもりけり引なへたてそ山のはの雲
心とめて見そめし人を誰としもしらぬやうらみ春の明ほの

歸鴈

思はすよ都はなれて北に行鴈の鳴ねにともなはんとは
かへり行かたは越路の鴈かねを心つくしに何思ふらん
行鴈の心にそしる夏かけてこしちや花の盛なるらん
天津風雲路はるかに吹とちはわかるゝ鴈のつはさならめや

春雨

花見にと出立もせす八重葎心にしけき春雨のころ
しく〳〵とふる春雨そをりにける音羽か瀧のこけのむしろは
春雨はふるやの軒の草葉よりつたふ雫の音にこそしれ
降くらしふりあかしての春雨にいくへかさなる瀧の水かみ

岸柳

柳よりあたに散てやしら露の水行岸の淡となるらん
にしひかしおなし緑に成にけり岸の柳の春をふかめて
浪のかく岸の柳は見るかうちに幾度露の消かへるらん
うつたへにくつるゝ浪の立田川にこらぬ水やきしの青柳

待花

花よいかにたれとゝもにか詠せんひなの住居に咲を待ても
散ぬれは又くる春の櫻花またぬ月日そ年にまれなる

きのふ瀬花のこのめのはるの雨聞あかす程の空の夜長さ

くやしくも植にけるかな咲ぬより花に心をつくす年〳〵

初花

あめもよにさける軒はの朝戸あけて思はぬ花の色を見るかな

木かくれにこその櫻の殘るかと思ふ計の春のはつはな

一木咲花そかしこき外のちる後とてとはん人しなけれは

色見えてつらなる枝の中に先さく一ふさやはなのこのかみ

見花

くるとあくと花の思はんとはりにわか心をもちらさてそみる

老となる月さへ有を物思ひなしてふ花はめてさらめやも

窓ちかき花にむかひておきもせすねもせて春は夢をたに見ぬ

たちかくす雲も霞も吹分て風の見せたる山櫻かな

花盛

よをこめて花咲にけり枝も葉もうつもれはつる雪と見るまて

ちるもありさかぬもあれはなへて世の花の盛は昨日今日かな

ことさらに久しかるへき盛哉錦をひける花園のうち

定ある春の日數の春の內も春はすくなき花さかり哉

落花

ひたすらに猶や恨みむ咲散もつねある花とおもはさりせは

かたはしの深山木迄も白妙にちりてそはなは盛なりけれ

春風の吹かた分る池水は梢の花そ見えすなり行

ちる花の色なうつしそ忘れては風をそかこつ筆の跡にも

欵冬

早瀬河おられぬ水にうつろひて花やちるらん岸の山ふき

山ふきの花咲にけり橘のこしまの色もかはる計に

やまふきの花のあたりは一筋のなかれも分て水のにこれる

おなし色にみさへ花さへたち花の小島にあやしさける山吹

池藤

水の面に影をひたして紫のあけほのうはふ池の藤なみ

うつろへは池の心も紫のくたけてはするいけのふしなみ

藤の花咲そふまゝに池水も音なき浪の軒はにそよる

かきはらへ水草に池のあせゆかはこき紫の藤浪もおし

暮春

散花も過る齡もさらに今日春のわかれにおとろかれつゝ

梓弓はるのくれしにくらふれはいる矢も更にあたらさりけり

行末のたのみなけれは老の身のけふにとちむる春のかなしさ

花鳥の色ねはいはすくれて行春のみけふはおしまるゝ哉

## 夏十五首

更衣

かふるとて花の匂ひもなつ衣はるをはよそにすみ染のそて

俤のたつをくるしみ花衣わすれん爲にうへやそめけん

春も猶花染ならぬ衣とて立かへぬるもおしからぬ哉

ぬきかふる夏來にけらし今朝よりは打そよめける人の衣手

卯花

夕されは雪かとそ見るうの花のかきほの竹の枝もたはゝに
たゝにこえて行人あらめや卯の花の浪も名にたつ白川のせき
春さくは匂ひもふかき紅をかふる籬の卯の花の色
うの花と名にこそたてれ見る人もなき山里の櫻ならすや

待郭公

ほとゝきす何を契に今こんといひし人をも待心ちして
時鳥としはなかぬ年とたにきかはやさのみ待もくるしき
待さとを分にけらしも時鳥忍音もらし行末の空
しら雲のたちてみゐてみまつ比はいくかに成ぬ山郭公

聞郭公

郭公きゝしとやいはんうたゝねの夢のまかひのよはの一聲
時鳥末もつゝかぬ一聲や明やすきよの夢のうきはし
一聲はさたか成けり時鳥をちかへりなけあかつきのそら
おきあかすとほそならすは夢の内に聞まとふへき時鳥哉

時鳥稀

手を折てかそへやせまし時鳥まれなる聲とつもる日數と
時鳥きゝもふりなて五月雨の空たのめしてやまんとやする
里なれて行衛たのめし時鳥初音にかへる此比の空
時鳥初音の後はよをかさねなれしも夢の行末のそら

故郷橘

ふる郷の軒はに生る草の名を花橘や香に匂ふらん
誰をかもしる人にしてふる鄉にむかしかはらすにほふたち花
古里と成はてぬれは橘もむかしにかはる色かとそ見る
今も猶八十氏人の袖ふれし古鄉とてやにほふたちはな

早苗

植わたすふもとのさなへ一かたになひくと見れは山風そふく
筑波根のすそわの田子のおり立てこのもかのもにさ苗とる也
里人のうふる田うたのふし〳〵の聲にそ國のさかひしらるゝ
わつかにもうへしはわきて茂りそふ早苗におもへ世々の樂

五月雨

さみたれの比はしなとの風とても吹やはらふ雨の八重雲
むさし野やはてなき空の五月雨に堀かねの井も名のみ成けり
くるとあくと知れぬ儘に五月雨はうたゝねのみに床も定めす
夏ふかき草の庵には住なから人こそ見えねさみたれの比

鵜川

うかひふね川瀬の月にかはりてやのほれはくたる篝火の影[よ歟]
篝火の光にはなつうは玉のはるとも見えぬ浪の上かな
かゝり火のかけ靜なるうかひふね水のみわたにさし落すらし
船は猶くたしもはてす川上のうなはに明るなつのよの空

夏草

花はまた咲もさかぬも夏草のわく人なしに茂るころ哉
野への庵人めは夏やかれぬらん行かふ袖も見えぬ草はに
往來なき住家は夏そあらはる丶三の道さへわかぬ草はに
草たかき夏の丶道に分まよひおなし跡をも行めくる哉

叢螢

むかしたかあつめし窓の名殘どてしけき草はにやとる螢そ
身にあまる思ひなからもとやめて草のかきはにとふ螢かな
春やかぬかきもしられて草ふかき中より絶すとふ螢哉
夏虫の身をたきすつるをろかさを螢やおもふ草村のもと

夏月

明やすきなごりをそ思ふ秋のよもなかしどはなき月の詠を
ひむろ山いかに守らん夏の夜の月こそ清き氷成けれ
おきゐつ丶月みぬ人は夏のよのみしかき程もしらしとそ思ふ
みしか夜とおもせて夏はあかしつ丶月見る程や久かたの空

夕立

風の音むら雲なからきほひ來て野分に似たる夕立の空
なる神の音羽の山の夕立は雲にも瀧の浪やたつらん
夕たちの降くる程のくるしさはよそのあつさそ思ひやらる丶
いつくにか夕立すらん入日さす外面の竹に風さはく也

杜蟬

鳴蟬の聲を時雨にまかへても立よる森の下露はなし
たえやらぬ泪と見えて鳴蟬は何をなけきの森の雫は
夕露の森のこすゑに鳴蟬の聲にまかひて雨や過けん
かたふくも猶照そひて夕日影森の木たかき蟬の聲哉

夏祓

けふは身の內外涼しきみそき川にごる心の水もなかれて
はらへ草うき事は皆れをたえてさそへとそ思ふ水のまに〳〵
もろ人のみそきになかす形代をおしまぬは身を惜成けり
うきは皆みそきにすて丶それなから身をかへつ丶も立歸る哉

## 秋一十首

早秋

大かたの野への草葉の露を置て袖よりなる丶秋の初かせ
東より昨日の春に音かへてにしこそと吹秋のはつ風
きのふけふ荻の葉ならぬ草々も風の音して秋やきぬらん
いつくより朝たち初て露しけき夕の宿に秋のきぬらん

七夕

逢とはまれなる中に流ても契はふかき天の川浪
天の川なかれてはやき月日とも知らぬやとしのわたり成らん
雲の上の星のあふよの糸竹を聞て心の手向にそする
かつらきの神やわたしして明ぬれは中たえはつる天川橋

荻風

一葉さへまた散あへぬ木のもとに先うちそよく荻のうは風

秋あさき野への草木はしほれねと音は嵐の荻の上風
涼しさは絶しとそ思ふ吹のほる濱風高き軒の下荻
一もとの荻の末葉のいつこにかこもりて絶すそよく秋風

萩露

えたなからみよといひしを忘れては折袖にけぬ露の村萩
一本も哀なるへき紫のこ萩か原にをけるしら露
袖ふれなやとすも置も諸ともに契かけての萩か枝の露
花さかぬ草葉成ともいかならん小萩か上の今朝の白露

女郎花

をみなへし誰とのはに慰て色めく花のくねるともなき
秋の野にしなを定めは女郎花いつれかしもにをかん白露
おみなへし萎る〻色とかこつをもふみみぬま〻の小野の通路
朝露にぬれつ〻なひく女郎花誰袖ふれし涙成らん

夕虫

秋の〻の露さへさむき草むらに猶夕霜を松虫の聲
かれてより夜寒をわふる虫のねはしはし涙やひるまなからん
〔續百首補〕
虫のねのよはりはてぬる夕〱聞におとろく身の向後哉
みたるれはそれともわかす虫のねは鳴出るきはの夕成けり

夜鹿

よもすから妻やつれなき小男鹿の獨ふしとに恨てそ鳴
高砂のまつよやとはてふかすらんおのへの鹿のひとり鳴也
山風の枕にちかき鹿の音の遠さかる夜や明方のそら
聞からうちにそことなきよの鹿のねは嵐やたゆむ霧やへたつる

初鴈

此ころの秋のね覺のうき事も忘れてそ聞初鴈の聲
春秋のあはれはつきぬあらそひをなれや定てわたる鴈金
白妙の衣手うすき秋風にね覺て聞は初鴈のこゑ
ねさめつ〻すます心も初鴈の聲するかたにさそはる〻哉

秋夕

そのとくさしては物を思はねと涙いとなき秋の夕くれ
世のうさも人のつらさも我からと思ひもなすを秋の夕暮
夕暮の秋のあはれは人との心にはあれとことのはもなし
世の人のとに出つ〻夕くれの秋やはかる〻あさちふの宿

山月

半天にくまなき月(かけイ)を見るよりはうす雲か〻る山端の月
まきもくのあなしの山の秋風に檜原くもらぬ秋を見る哉
よの人の心いさめておく山は月もしつかにすめるよのそら
足引の嵐のかせに雲消て心と月のすみのほる哉

野月

月故にしらぬのはらの露分て旅ねに似たるかたしきのそて
露とに光をわけて照月の猶あまりあるをの〻しのはら
秋のよの月にいくの〻道はた〻とをきもさらにおほへさ[illegible]見

心ありて野守か庵やあらすらん夜渡る月の宿になしつゝ

河月

わすれしなすみなれつゝも久方の中におひたる里の川なみ
ゆけは行とまれはとまる月影に秋おもしろき川そひの道
絶にける煙もよしや鹽かまの跡は月澄賀茂の川水
川上にうかふと見えて遲き夜やなかるゝ浪のまかふ月代

江月

なにはつのよしあしをしも誰わかむ入江の月は雲かくれして
江の水にしはしうかへる月影やつなかぬ舟のためし成らん
住なれし方も忘れてみつの江の月に幾よをあかす舟人
松たてる木のまの浪のほの〳〵とあらはれ出る住江の月

浦月

はる〳〵とよさの湊の霧晴て月に吹こすいねのうらかせ
富士の根や月もうち出て秋のよはみな白妙の田子のうら波
さゝ浪やしかのうら風更行は氷をくたく秋のよのつき
半天になるよや分て澄ぬらんふけゐのうらの月の光は

籬菊

うつろふを花の上にも色そふと籬の菊や霜をまつらん
山のはの星とや見えん夕暮の籬の菊の花のよそめは
明闇の霧のまかきの菊の花色はあやになかやはかくるゝ
うつろはぬ籬の菊の夕露やたゝしらいとの涙成らん

擣衣

その里と明てこそ見ぬ夕月夜おほつかなくも衣うつこゑ
よもすからうつ唐衣はる〳〵とへたゝろ旅の妻やこひしき
聞まゝに都のうちは衣うつつちの音にも色は有けり
里ちかみおなし砧と聞なからかたみにうつや音のかわれる

曉霧

しくれせん明ほのまたて秋山の麓をめくる霧の一むら
有明の雲にこもれる影よりも猶あかつきのうちの川霧
たちのほる霧も心や有明の光おさまる峯にかゝらぬ
ひましけき閨の戸ほそも曉の霧ふたかりて夜を殘すかな

岡紅葉

まつの葉のいつともわかぬ岡のへに今一しほの下もみち哉
かたをかのあしたの原に紅葉はのこかるゝ色に秋もやくめり
吹落るみねの嵐にかた岡の紅葉の色そ猶まさり行
龍田姫そめしもみちの千しほをも八入のをかといはゝ恨みん

庭紅葉

嶺はちり麓の色はこかるれとまた庭もせにうすきもみち葉
ふる里の庭のもみちは年々にたかきてかへる錦成らん
山川をめくりになかす砌にはおなし紅葉をいく度か見る
庭の内に錦をあらふ江の水をうつすや池のもみちはのいろ

九月盡

今はとてはひまつはれる行秋の別路に生(よイ)る葛のはかつら
このころの野山の露を身一にをくやかたみの秋の別路
ちり殘るもみちはあれとけふにしもかきる夕の秋の哀さ
別しを思ひ出れは春の日の一日の程の秋の暮かな

## 冬十五首

### 初冬

山里はしくれの雲を先たてゝみそれの空に冬はきにけり
神無月名はかはるとも隔なくいつもやへかき冬はたつらん
今朝のあさけ冬立雲の半天に風の音さへめにさやかなり
さしなから晴くもる日の空にけふ都も冬のおくそしらるゝ

### 時雨

一とせのめくる日數もうつり行時雨の雲にたく(て歟)へそ見る
さそはれし夢をはかなみ驚けはいやはかなゝる初時雨哉
眞木の板ふきかさねたる下にねて夜の時雨を聞みともかな
おもふ事心〳〵のね覺をやもよほし過るしくれなるらむ

### 落葉

色やたゝこきもうすきもはて〳〵はおなし落葉に木枯の風
山かつよ柴のみとらてむつましき落はをなにゝ拾ひ行らん
淺き瀨も淵とこそなれ山風の絕ぬ落はに水のせかれて
分て入跡たに見えぬ春日山下にいく世の木のはなるらん

### 朝霜

いつよりか結ひそめけん朝霜をしらていねつる程をしそ思ふ
心あるかはらのをしのつはさ哉うちもはらはぬけさの朝霜
宵のまは雫音せし竹のはを起出てみれは霜そこほれる
みちのへの芝生か上は朝霜もいたやの軒の色は寒けし

### 寒草

風わたるすさきの蓬冬枯て夕霜しろき闇(遠イ)の川浪
かれて又ひとつ草葉と成にけり秋は色々の花野なれとも
松かきのかけにかくろゝ草の葉も限のあれは霜かれにけり
冬かれて草のはつかに成行を見るにそ人は心あるへき

### 千鳥

友千鳥おなし所に立かへり跡こそのこれわかの浦浪
たゝひとり鳴行浦のさよちとり友やまとはす妻やたつぬる
友なしに成はつる身は千鳥鳴うらのすみかそうらやまれぬる
浪の音しつまりはてゝ更わたるよさの湊に千鳥鳴なり

### 水鳥

岩たゝむ池の心は縮にもはたらつさまほしきをしの一つれ
立居にもたゝ翅おしかはしまの水のなかれや契なるらん
河風の落くるかたは水鳥もつかひはなるゝ聲の哀さ
さえさゆる梢のおしは霜よりもうきねの床の浪や侘しき

### 氷始結

こほるらし淺瀨なからにかち人のわたれとぬれぬ水の朝かけ

かけろふの岩かき沼のうす氷有かなきかにむすひ染けり
結ふ手の雫そかはる山のゐの曉かたやうす氷けん
ふかきよの水の汀に立かへり汲はとちたる朝氷哉

冬月

花紅葉ちる跡とをき木の間より月は冬こそさかり成けれ
冬そ猶春秋よりも照まさる月のかつらの花ともみちと
ふゆかれの木のまに殘る槇ひはらさやけき月の曇なりけり
冬のよの戸さしあけねは寒渡る嵐そ月のさはりとはなる

鷹狩

たつ鳥に手はなすたかの飛よるやつま心みしつはさ成らん
あかす猶思ひたてとや狩衣櫻にまかふ雪のちり山
鳥さへもむかしやしたふ大原やかる人なしにをのれ立行
たか人のちかきとたちに玉鐙ふたよりみよりあはせつる哉

野霰

むこ山やあまつたふ日もさえくれて霰になりぬゐなのさゝ原
しら玉か何そと問む人かけも霰降なり野へのさゝはら
山〳〵は嵐にもろき玉あられたまゆらかゝる野への篠原
霰ふる野への緑はむら〳〵に生る眞砂の小草なりけり

淺雪

降つむも夜のまの雪は朝日影松と竹とのけちめ見せけり
さをしかのつめひつ水にたとへてや岩ふむ山の今朝の初雪
杉むらの緑木ふかき山本の甍に見ゆる今朝の白雪
むら鳥のうちはふきつゝ今朝はまたあまりまとはぬ雪の上哉

積雪

心あてのかきほの竹のふしのまも雪にかくるゝ朝かとの庭
みわの山杉の梢も見えぬこそ降つむ雪のしるし成けれ
山ふかき雪をそ思ふ九重の内さへ道の絶はつる哉
梢迄重りぬれは雪折の聲をもきかぬ峯の杉村

閑中雪

ともし火をまもりつくして更る夜に窓うつ雪のをとを聞哉
雪折の音のみ聞てなかきよを獨そあかす竹の下庵
とふ人は中〳〵絶て松風の聲さへうつむ雪の下道
九重の道のちまたの外に住やとの心や雪つもる比

歳暮

老の浪あはれとしもこゆるきのいそちといはむとおしそ思ふ
吉野川岩きる水もとし浪のよとますくるゝ程はあらしな
さため置命のきはの年の暮あすより後はさもあらはあれ
なけきこし我身の上に留置て又やとしもくれて行らん

## 戀二十首

寄月戀

月ひとり空にしりてややとるらんしのふる袖の涙なれ共
ほの見えし影は雪まの月なれや人の心を空になしぬる

獨ねてなかむる人もかたふけは空にうらみの有明の月
月は猶待えしかひも涙哉ことかはさねは恨られつゝ

寄雲戀

たちかへりしのふの山にゐる雲の又半天に何迷らむ
しのふれと思ひは身よりあま雲のよそに立行名こそおしけれ
あた人の詠やすらん半天にうかへる雲も行ゑ有とは
傳にたにえやは夕の空の雲消かへりつゝ物おもふ身は

寄露戀

いさゝらは人の心の秋風をふせきてや見ん袖の白露
あはれしれうき世の秋もしのふ身のかことに頼む袖のしら露
身のうきをこたへて消む草の上に置たる露をとふひともかな
見せはやなあさちか末もくるゝよは結ひならはす露の契を

寄雨戀

よしやふれ身をしる雨も天雲のよそになり行人のかたみと
かよはしやたのめてみわか崎ならはいかなる雨の暗き夜成と
夕暮の雨もかこたしぬれ〳〵てゆかは哀と人やあはまし
僞と思へはつらしさはりありてこぬよはせめて雨もふらなん

寄風戀

たよりある風にうきたる心ちしてとつてやらん人を待哉
けふいくか便たになしあすか風又いたつらに待やくらさん
いく度かあけて出らん閨の戸に人たのめなる風のをとつれ
ひたすらに心とめぬも野分せし風はうれしきこすの俤

寄山戀

ふしのねをはたちあまりは重ぬとも麓にや見んわか戀の山
年をへて分入戀の山路には人の心の岩木をそ見る
ほの見ゆる心の末はちりひちの山としつもる我思ひ哉
哀いかに思ふをいさといさなひて絶ぬいもせの山に住はや

寄關戀

我ためは隔つる關に成にけりなと逢坂の名を頼みけん
いかにせん治れる代のかひもなし我かよひちの關の戸さしは
うき人の心のうちの關の戸は忍てこえむ道もしられす
逢さかやとたえぬ中の道ならて越ぬる後の關守そうき

寄海戀

みるめかる方こそなけれあら海の浪の立ゐに心よせても
大うみをはかるためしも有物をつらき心はくむかいもなし
大うみを硯の上にうつす共恨をかゝは筆やかはかむ
何にかく海の底まで思ひ入る心ふかきをかこちすてはや

寄原戀

こひしなん身の思出に草の原とはんと契る一こともかな
さしも草さしもかなしき頼哉人のしめしかはらと聞より
その原やふせやの道をとめ行んよそめにたにも君を見るやと
人心いさしらま弓引そめてあたちの原の名にやたゝまし

寄橋戀

よひ／＼の人め思ぬ通路やうつゝに増る夢の浮はし

年をへてこけに朽たる橋板の音せぬ人を戀わたるかな

生れあふ契をたのむよの人は行てそ見ましあまのはし立

あはぬ名のうきは草にも木にもあらす橋柱にて朽やはつへき

寄木戀

色見えぬ心の松もくすの葉のうらみは下にさはく夕かせ

知すへきたよりの風はなく／＼も宿の梢を詠やるかな

炭やきのこりつむ木々の煙よりたえぬや胸の思ひなるらん

身をしれは色見せ侘るはて／＼や心の杉の谷のむもれ木

寄草戀

見せはやなお花かもとに咲花の色よりふかき露のたもとを

跡たゆる人の心のわすれ草しけりし程や庭のあさちふ

雨とふる涙もあやな下もえの草葉も色に成行をみて

いひよるはうき人つまも月草のうつし心のなきためしかは

寄鳥戀

わしさへも木ゐに心をかけぬれは空とふ鳥もおつるためしを

恨むへきわかれはしらて鳥のねの待とをならぬ曉もなし

はる／＼と隔つる中も鳥ならは飛立つゝもゆかまし物を

さむるまは夢も有ける面影をゐわたる鳥のわかれ悲しき

寄虫戀

聞すてし君もやくるとまつ虫の鳴ねにきほふ夕くれのやと

こぬ人をまつてふ虫のねに鳴て千とせを過す秋のよすから

夏虫を見てそうらやむさすか我思ひには身をこかしかねつゝ

一よたにあふ事ならてひをむしのあらそふ命いかにしてまし

寄獸戀

はかなしやかゝる戀路におり立て隙ゆく駒も身にはしられす

笛のねにはかなくよるの棹鹿のまとふもこひの山ちならすや

乗こまの足音さへも忍ふ夜にいさとき犬の聲そ侘しき

見し人を思ひあまりてかふ猫のねよとの聲にいとゝなくさむ

寄玉戀

我袖のうへにそおつるひろひをきてからんといひし瀧の白玉

わたつ海の龍の身にそふたま／＼もとりくるしきや心成らん

いひさくる中も待みん光なき玉も行衛は顯にけり

わか思ひたくへていはゝよる光玉成けりな晝は消つゝ

寄鏡戀

手向てもあらぬ思ひにます鏡うけすやいかにあらみさき姫

おほへ共いとゝ思ひのますかゝみとし故かはる妻ならねは

天てらす神をうつせる鏡たにあるにつれなき君かおもかけ

あひ見んを共日はかりとまつら成鏡の神の頼みむなしき

寄枕戀

人にやはつけの枕と頼そよとけてわかぬるよはのなみたに

さゝれ石のいはほもかけし新枕こけのむすまてとはぬ君哉
君か手をふれし枕とより臥も獨しあれはかいなかりけり
あかさりし人にしかせし手枕はわか身なからもむつましき哉

寄衣戀

よかれきぬ中の衣のへたてさへあはれ恨のあれは有よに
立名をは何につゝまむこひ衣よしや袂はゆたか成とも
さよ衣へたてありともよりそひて袖に人香をうつしこしかな
たのめつゝ返してねやのさよ衣いかてか夢のへたてとはなる

寄絲戀

かた糸のその一ふしはのこる共又よりあはんかきりをそまつ
たまのをよ今朝まて何にかゝるらん心やいとによるの別路
亂つゝうきかた糸もくり返しあはれをになるを君みさらめや
さゝかにの糸のたのみも絶はてゝ哀はかなき夕なかめ哉

## 雜十首

浦松

心あるあまのしわさにつり舟をよせてはつなく松か浦しま
見わたせは山も綠の水うみに今一しほの志賀のうら松
高きやにのほる煙も松はらのかけにそつゝく住吉のうら
名におひて千とせの浦に松やうへし松をや植ていひや初けん

窓竹

なひきあひて窓におほふも植置し一もとゆへの紫の竹
冬は風夏は日影をへたつるは千尋あるかけの窓のうち哉
風ふけはおきふす竹に山〳〵もうこき出たる窓の前哉
竹の葉の露こほれ入窓にこそあかさる誰の枕をはせめ

山家嵐

都にてあらしと聞し音はたゝ深山の里の朝な夕風
柴の戸にたえぬ嵐も哀也又我ならてとふかたやなき
世のうきをきかて嵐に聞なるゝ深山の奥をたのしみてすめ
わひしらにましらの聲の山嵐よいかてうるほす柴の戸の袖

田家

よころへてもる小山田のいな莚かたしきなるゝしつか衣手
見せはなや玉のうてなに住人に小田もりわふる露のやとりを
すそわたの山の庵を見わたせはさしそむるよりかたふきに鳬
秋の風田面はたゝてかりつめる芦屋のうちの稻葉にそふく

故郷

行とまる所を宿と定ても猶ふる郷のかたそこひしき
深草や都のたつみ住わひてをのかよをすらうつら鳴也
古郷と名にこそたてれ櫻花紅葉もならの都成けり
あはれなと思ひ捨ては出つらん侘しきとても馴し古さと

浦路

船人もしらすはるけき浪路をはたゝ吹風に身をやまかせん
一すちに思ひさためしつなて縄心ほそくもなる船ちかな

わたの原星をしるへの船やたゝ明行かたに漕まよふらん

行かたをもろこし迄と思はねとふなてかなしき我心哉

羇旅

さすらふる旅にしあれは宿毎のあるしの心とりそわつろふ

しらせはや宮この人に都にて思ひしに似ぬたひのつらさを

侘て住都はなれて行國の心やすきを思ひくらへよ

草枕うき宿なから住はてぬ旅にしあれはいとひしもせす

述懐

うつもるゝ身とも恨みしよの中の人をしらぬをまつ憂へてん

をのつから住をすむとも思はねはいとはていとふ浮世成けり

よしあしをえらまぬ時に生れなは人なみに世を送りこそせめ

子を思ふ道なかりせは心にもかなはぬ世とてさのみなけかし

神祇

大かたは鏡を見ても思ひしれ空にくもらぬ神の心を

たのめたゝちりうせぬ松のとのはのみちをまもるは住吉の神

そのかみにかよひ馴にし春日山みちを心に猶思ふかな

岩戸あけし神代おほえて出る日に雲こそはるれ天の香久山

祝言

治れる御代のしるしはしられけり君と臣との身を合つゝ

君かよにいく度ひかんをのゝえの朽木の杣のふるきためしを

國々を知人たのむ末〳〵は立居に萬代といのるらん

秋津洲のすゑの代かけて民草のなひくや君か心なるらん

〔右四吟百首以淺草文庫本加一校更以玄旨紹巴昌叱百首校合畢〕

# 續群書類從卷第三百九十八

和歌部三十三

## 殷富門院大輔百首

〔右舊本闕〕

## 安嘉門院四條百首

春二十首

關路早春

關守もまたおとろかぬあふ坂の山路夜ふかく春やこゆらん

湖上朝霞

けさはみな霞にけりなさゝ浪やあふみの海はそらもひとつに

霞隔遠樹

木末こそそれともみえねはゝそ原いはたの小野は霞こめつゝ

羇中聞鶯

きゝなれしこゑは都のうくひすを旅のそらまて誰たくりけん

隣家竹鶯

ちかけれと人のまかきの竹なれはへたてゝつらし鶯のこゑ

田邊若菜

とちこむる氷の下の小山田にいかて若菜の春をしるらん

野外殘雪

なかめやるすゑ野の原の若草につもるとみれはきゆるあは雪

山路梅花

梅かゝをみねのあらしや誘ふらんさなからかほる春の山みち

梅薫夜風

春かせの吹おとろかす梅かゝにねなましとこの夢もむすはす

水邊古柳

河岸のあやうなからもわか身世に久しくへぬる青柳の糸

雨中待花

咲ぬへき日数はふれと山さくらもよほす雨に猶そつれなき

野花留人

尋ぬへきみ山櫻ををきなからすそのゝ花に今日やくらさん

遠望山花

山櫻色たちまかふくもゝなほ霞に消てえやはみえける

曉庭落花

しのゝめの別をしはしとめかほに花ちりかくす庭のかよひち

故郷夕花

ゆふくれの霞にこもる故郷に人みぬ花の何匂ふらん

河上春月

影やとす月をそれとも分かねつふかき霞のなか川の水

深夜歸鴈

春のよの有明の月もいてぬまにかへるこしちをいそく鴈金

藤花隨風

むらさきの雲のゆきゝをさためぬや藤さく比のみねの松かせ

橋邊款冬

山ふきの花色ころもかけてけりさほの川原の瀬々の岩はし

舟中暮春

こく舟もくれ行春ももろともにさも跡もなき浪の上かな

## 夏十首

卯花隱路

わかためはあな卯花のさかりとていとふ山路も跡たへぬへし

初聲（聞イ）郭公

ことし又はつねはきゝつ郭公うたかはれつるいのちまつまに

山家時鳥

まちわたる此山本をほとゝきすなかなくさとの數にもらすな

池朝菖蒲

五月とてけさ引あやめなかきねに池の心もそこしられつゝ

閑居蚊火

かやり火の烟の末もやとあらはおもひなしにや淋しかるらん

盧橘驚夢

匂へたゝ夢にかはせる袖のかのなこりもしろき軒のたちはな

杜五月雨

さしてそのみかさの杜をたのめとも猶袖ほさぬ五月雨のころ

野夕夏草

おもふ事あまりにしけき夏草の下にみたるゝをのゝゆふ露

澗底螢火

これかしる忍ふの山の谷ふかみもゆる螢のおもひありとは

行路夕立

ゝさきも家路も遠き半天にやとるかけなき夕立のあめ

## 秋二十首

初秋朝風
けさかはる風につけてや荻の葉も露おきあへぬ秋なしるらん
閏月七夕
おなしくは後のふ月のなぬかにも又星あひのある夜なりせは
野亭夕萩
花にさく萩の古枝のゆふつゆをかけてむすへる野へのかり庵
江邊曙荻
あかすみる入江の月をおしむ間によも明わたる荻のうはかせ
山家初鴈
山こゆるはつかりかねのをとつれも軒はにちかき雲の通路
海上待月
興津舟ゆたのたゆたにこきくれてよるへ浪ちは月そまたるゝ
松間夜月
高砂の松に木の間のなかりせはいさよふ月を猶やまたまし
深山見月
あきの夜の哀は月にしられけり鳥の音きかぬ太山なれとも
草露映月
こきませて草の花さく秋の野の露にしたかふ月のいろ〳〵
關路惜月
かくはかりおしむ心をはゝかりの關ともいはす月そ明ゆく
鹿聲夜友
うとかりしみ山の鹿も夜もすからなくを友とて尋ね來にけり
田家擣衣
夜さむなる山田のおしねかりそめの庵もるしつも衣うつなり
古渡秋霧
たとらしなわたしなれたる浪路とて霧の下こくよとの川舟
秋風滿野
あたし野は露のかくれもなかりけり秋風たちて色かはるころ
籬下聞虫
くすかつらくる人たゆるまかきにも心なからやまつむしの聲
紅葉寫水
谷川の水もしくれや染つらん嶺のもみちの千しほうつして
山中紅葉
ありとたに人にしられぬ紅葉かな木末は四方の山をへたてゝ
露底槿花
日影さす露のしけさを重しとやかつしほるらんあさかほの花
河邊菊花
むすふてに香こそしるけれ白菊の花のみひたす山川の水
獨惜暮秋
をく霜もたれと共にかはらはましふるき枕にあきのくれなは

## 冬十首

初冬時雨

ことさらにうちしくれてそしらせけり空さためなき冬の始を(にイ)

霜埋落葉

ちりつもる谷の木の葉のくれなゐを色ことになす庭のあさ霜

屋上聞霰

しくれにも木のはにもにぬ音たてゝあられはしるき板庇哉

古寺初雪

霜よりもさえまさるらし初雪のふりそふ山のかれのひゝきは

庭雪厭人

しら雪の庭をさかりに消ぬ間にとへとおもひし人もまたれす

海邊松雪

興津風雪ふきかけて白たへになるをの松は葉かへしてけり

水郷寒蘆

難波江やありしにもあらぬ冬枯にあとまとはるゝ霜のあし原

湖上千鳥

遠さかるかたゝの沖のさよちとり跡やはとめぬ浪の上には

寒夜水鳥

かつ氷る涙の床にならはすはをしのうきねもよそにきかまし

歳暮澗水

谷川のうへはつれなくこほるともあすを春とや下にとく覧

戀二十首

初尋縁戀

ことゝはん思ふそなたのうき雲にかゝる心のしるへありやと

聞聲忍戀

音はかりそれと吹こす松かせを身にしむとたに人にしらせし

忍親昵戀

おなし野の草のはらから尋ぬとも物思ふ袖の露とこたへし

祈不逢戀

逢事を祈りてしるしあらはさて神もつれなき三輪の杉むら

旅宿逢戀

あたなりな夢路ほとなきかり初の草の枕も露の契りも

兼厭曉戀

わかるてふ曉かりと思ふよりよふかき鐘もおとろかれつゝ

歸無書戀

きぬ／＼の別れ思はゝ今朝は先とはれなましと身をそ恨むる

遇不逢戀

花すゝきなひきはてにし袂より又吹返しあき風そふく

契經年戀

いつまてそ年月とほくなからへて契りしすゑをたのむ命も

疑眞僞戀

まことゝは思ひ定めぬことのはもよしたゝしはし頼みこそせめ

返事有戀

よそへとも猶うとまれぬなてしこに露おきそふる水くきの跡

被厭賤戀
ことはりやさしもけはしき葎生の宿からつらき人の夜かれは
途中契戀
なをさりの道行ふりもわするなよ契りしまゝの心かはらて
從門歸戀
尋ねつる人はつれなき槇の戸をあけぬ夜なからさ（すイ）てや歸らん
忘住所戀
せめて思ふ心まとひといひなからをしへし宿をさやは忘るゝ
依戀祈身
なからへて逢をかきりと賴ますはおしからぬ身を祈やはせん
隔遠路戀
野も山もこへていくかをへたつらんさかひ遙にまよふ戀路は
借人名戀
通ふとは宵々ことにしるくともあらぬ人をやそれといはまし
絶不知戀
おほつかな嵐にまかふさゝかにのいかなる方と誰にとはまし
互恨絶戀
はては又つらさくらへしとのはもをのかさま〳〵色かはり鳧

雜二十首

曉更寢覺
鳥の音にわか涙そふあかつきをいつよりなれし寢覺なるらん

薄暮松風
いとせめて夕くれことにかなしきはきく我からの庭の松かせ
雨中綠竹
なよ竹の心とはさはよのほとの雨にもたへすなれふしにけり
浪洗石苔
苔ころもわかなきぬらすたくひとや岩こす浪のまなく歸らん
高山待月
よの常の山にはまさる峯ならはまつよふくるも月のをかゝは
山中瀧水
遠近のいもせの山の（にかくれすはイ）へたてすはよしの〻瀧やあらはならまし
河水流清
あさしとはおもひはてそ（な[illegible]）山川の底まてきよき心みえねは
春秋野遊
菫つむ春のならひに小萩さく野をなつかしみ宿やからまし
關路行客
東路の關の行きゝはたれとしもしらぬになるゝ契りありけり
山家夕嵐
あらし吹山の柴屋のすみうさよなれて年ふるゆふへなれとも
山家人稀
すみあらす（漫イ）庵あまたになりにけり猶うき時をわかしのふまに
海路眺望

山もなく雲もかからてらなはらや行ゑもしらぬ浪のはてかな

月羇中友

をくりくる月をよな〳〵たのむ哉旅のそらなる友なしにして

旅宿夜雨

夜もすから雨に涙を手もたゆくしほりそへたる旅衣かな

海邊曉雲

いもか島かたみの月のあり明に浪こそかけめ雲なへたてそ

寄夢無常

有物とたのむこの世のはかなさは夢をみてこそ思ひあはすれ

寄草述懐

れを絕てみなはにましろ浮草のうきなから又行方もなし

寄木述懐

枝かはす昔のちきり朽はてゝひとりふる木のなにのこるらん

逐日懐舊

年月も遠さかり行むかしそとおもふにつけてこひぬ日はなし

社頭祝言

萬代をさそな久しくてらすらんたのむ日よしの神のちかひに

〔右安嘉門院四條百首以南葵文庫本校合〕

# 續群書類從卷三百九十九

和歌部三十四

## 仙洞五十首 建仁元年十二月

作者

御製　攝政殿　前大僧正

俊成卿女　女房宮內卿　定家朝臣

點者

御所　攝政殿　前大僧正

三位入道釋阿　定家　寂蓮

初春待花

雪きへてけふより春をみよしのゝ山もかすみて花を待ける
左大臣

春きてもつれなき花の冬こもりまたしと思へは峯の白くも
前大僧正慈圓

春くれは先そまたるゝかさすへき我君か代の千世のはつ花
俊成卿女

はるきぬと霞む梢の鶯の花をゝそしと聞そわきつる
宮內卿

花ゆへにはるをはけふと待えても梢はゆきのなをさゆる哉
正四位下行左近衞少將兼安藝權介藤原朝臣定家

はる霞かすみそめぬる外山よりやかてたちそふはなの面影

山路尋花

雲かゝる梢をはなとたとり來てまた比あさし志賀の山越
左大臣

はなをみし去年のしほりは跡もなし雪にそまとふ御吉野の山
慈圓

行末の雪やまことの花ならんすきつる峯の花は白くも

俊成卿女
面影のはなを山路のしるへにてあとなき峯のくもを分きぬ
宮内卿
尋かねふもとにさかぬ花の色を木するにやとす峯の白雲
定家
御吉野の花もいひなしの空めにと分入みねにゝほへ白雲
山花未遍
左大臣
大かたの花はまたしき峯の月晴ゆく空にのこるしら雲
慈圓
花もまたさかぬかたには山川のうち出るなみをはるの物とて
さきやらぬ峯の梢の雲の上によそめは花のさかりなりけり
俊成卿女
をしなへてかせこそかほれ春の山さく櫻あれはさかぬ梢も
宮内卿
見わたせはふもとはかりに咲初て花もおくある御吉野の山
定家
山かけはなをまちわひぬ櫻花いたりいたらぬ春をうらみて
朝見花
明わたる山路の花のほしもあへす朝露なから春風そふく
左大臣

ほの〳〵と花は外山にあらはれて雲にかすみの明はなれゆく
慈圓
いかゝせん今朝は梢にかせ過てはるもなかむるあさかほの花
俊成卿女
朝露にしほるゝ花の色みれはわかれにまさるまのゝぬの袖
宮内卿
庭のおもを花にやつしてをのれまた朝きよめする山の下風
定家
かす〳〵にさきそふ花の色なれや峯の朝けの八重の白雲
遠村花
櫻さく野への春風かほるなりいさみにゆかんおちの里人
左大臣
たつねはやたかすむ里の一むらそぬしおもほゆる花の奥哉
慈圓
三輪の里の花のしるしはいそのかみふるの梢にかゝるしら雲
俊成卿女
はるはまたかすみ隔つる遠の里くもこそまかへ花やちるらん
宮内卿
山たかみなかめにかゝるいく里の花のこすへは雲のむらきえ
定家
たれかすむ野原の末の夕霞たちまよはせる花の木の本

古郷花

さきのこる吉野の山の花をみて春やむかしと誰恨らん　左大臣

かはらすなしかの都のしかすかにいまもむかしの春の花その　慈圓

ちりちらす人も尋ぬ古郷の露けき花に春風そふく　俊成卿女

あさちふと誰すみすてし古郷の籬のさくら春を忘れぬ　宮内卿

へたてつる霞はよそに成はてゝ花にこもれるしかの山里　定家

あすか川かはらぬ春の色なから都の花といつにほひけん

田家花

庵むすふ春の山田も時しあれは苗代水に花をまかせて　左大臣

なれ〳〵て門田の澤にたつ雁のなみたの露は花おちにけり　慈圓

櫻さく山田の原の花さかりあきならすとも庵むすはなん　俊成卿女

春くれは花ちる里となりにけり秋風なれしを山田の庵　宮内卿

花のもとにかくてをへなん春雨のふらはやなけの小山田の庵　定家

古寺花

春をへて門田にしむろなはしろの花のかゝみの影そかはらぬ　左大臣

はつせ山やまたちはなれちる花を行末さためすさそふ春風　慈圓

のかれすむ小初瀬山の苔の袖花のうへにや雲匂ふらん　俊成卿女

春の苔もいくへになりぬはつせ山ふりぬは花の匂ひなりけり　宮内卿

なへてよな花ともいはしをはつせの山の櫻の明ほのゝいろ　定家

むかしよりうへけん時を人しれす花に古ぬるいそのかみ寺

河邊花

ちらすなよかさきの山の櫻花おほふはかりの袖ならすとも　左大臣

よしの川ゐせきに花をせきとめて水の心も春をしみける　慈圓

鈴か川なみとはなとの道すから八十瀬を分し春はわすれす

しら河の浪にみたれてさく花は糸よりかくろさくらなりけり

吉野川きしの櫻にかせ吹は岩こすなみに花そくたくろ　俊成卿女

ゆく水の底にやとれる花の色をやかて名におふ白川のさと　宮内卿

すゝか川八十瀬のなみに春の色はふりしく花の淵とこそなれ　定家

深山花

あたら夜の吉野の奥にひとりたれ月と花とのあはれしるらん　左大臣

かへりみる山ははるかに重なりてふもとの花も八重のしら雲　慈圓

吉野山春は過ぬと尋ぬれは奥こそ花のさかりなりけれ　俊成卿女

おくやまの杉のは分にをのつからたれ來てみよと花の咲らん　宮内卿

花といへはなをみ山木の梢まて風をへたる（つ一説）心なりけり　定家

山ふしの人もきてみぬ苔の袖あたし櫻をうちはらひつゝ

暮山花

みよしのやなけの櫻をたのみにてしほりもしらぬ花の夕暮　左大臣

深山いてゝ花のかたみとなる月は木の間分にや曇るなるらん　慈圓

春くれはうれしき山の櫻かり花の木陰にくれかゝりぬる　俊成卿女

今はとてねくらに歸る鳥の音に哀もまさる山さくらかな　宮内卿

暮ぬとて人のみいつる山路かは花もいまはとねに歸るなり　定家

誰もまた雲のはたてに吹かよふあらしの峯の花をうらみん

古溪花

さきてちる思なしともいかゝせん谷にも花のよそならはこそ　左大臣

しもとゆふかつらき山の谷風に花の雪さへまなくちるなり　慈圓

谷川のかけの岩もと苔ふりて春のみこゆる花のしら浪　俊成卿女

ふりはてゝしられぬ谷の埋木も春はむかしの花そ朽せぬ　宮内卿

春來ても霞のふかき谷の庵は花ありとてもとふ人そなき　定家

山人の跡なき谷の夕霞こたへぬ花ににほふはるかせ

關路花

不破の山風もたまらぬ關の屋をもるとはなしに咲る花哉　左大臣

あふさかの關ふみならすかち人のわたれとぬれぬ花の白浪　慈圓

駒なへてたかひにし跡を惜かな花の雪ちる白河の關　俊成卿女

すきかはる月日は花もしらせけり秋風吹ししら川の關　宮内卿

あふさかや梢の花を吹からに嵐そかすむ關の杉むら　定家

櫻色に四方の春風そめてけり衣の關のはるのあけほの

羇中花

旅衣きさらきやよひ日かすへて花になれたるそてのうへ哉　左大臣

たひねする花のしたかせ立別いなはの山のまつそかひなき　慈圓

あつま路や山に日数もちかひゆく花なき里に宿からしとて　俊成卿女

都には思ひすてゝし別さへ花にはおしきみちのうらかな　宮内卿

花にふる日かすをしらすけふみてや古郷人のわれを待らん　定家

おもふ人心へたてぬかひもなし櫻の雲の八重のをちかた

湖上花

春風のにほてる奥を吹からにさくらを送る志賀の浦波　左大臣

雲の浪煙のなみやちる花のかすみにしつむにほの水うみ　慈圓

「歌闕」

にほのうみはるは霞のしかの浪花に吹なすひらの山かせ　俊成卿女

はなさそふ比良の山風吹にけりこきゆく舟の跡みゆるまて　宮内卿

さゝ浪や櫻ふきかへす浦風を釣する海士の袖かとそみる　定家

いは橋の神をたのむの鴈なれや櫻を分てよると鳴なり

橋下花

あつま路のさのゝ舟橋しら波の上にもかよふ花のちる比　左大臣

かせわたる花な三河の八橋のくもてにかくる瀧の白いと　慈圓

俊成卿女
かつらきやたかまの山の山かせに花こそわたれくめの岩橋
宮内卿
信濃路や谷の梢をくもてにてちらぬ花ふむ木曾の梯
定家
あともなき山路の櫻ふりはへてとはれぬしるき谷の柴橋

花似雪

古郷はよしのゝ風やかよふらん櫻の雪もふらぬ日はなし
左大臣
吉野山木のめも春の雪消てまたふるたひはさくらなりけり
慈圓
あやなしを去年の白雪はるかけて花さく比も散すやはあらぬ
俊成卿女
〔マヽ〕木のしたをはらぬ嵐も身にたへて雪との〔又疑衍〕ふる庭の花かな
宮内卿
風吹は峯の雲よりちる花や空にしらるゝはるのあは雪
定家
みよし野に春の日かすやつもるらん枝もとをゝの花の白雪

花下送日

花のかけの旅ねの嵐夜比へて月になれゆく袖の手枕
左大臣
古郷のあれまくたれか惜むらん我世へぬへき花の陰かな
慈圓
さきてちる日數おもへは山櫻ほとはなぬかの花の下ふし
俊成卿女
いたつらに待と惜むと木本に花よりほかの春そしられぬ
宮内卿
すみなるゝ岩をかすみの外にしもいく夜に成ぬ花の下ふし
定家
木の本に待し櫻を惜むまておもへはとをきふるさとの空

庭上落花

かりにたに人こそとはね古郷の櫻は雪と庭にしけとも
左大臣
春雨のわか身よにふる詠より淺ちか庭に花もうつりぬ
慈圓
いとふへし庭こそいまは花さかり梢の風やともの宮つこ
俊成卿女
ねにかへる庭の櫻の花をさへ木すゑの風の猶さそふらん
宮内卿
名殘には花のみ庭の物とみる心はのこせはるのやまかせ
定家
花の色ときえすは今朝もみるはかりすこし梢に春ものこらて

暮春惜花

いたつらに春くれにけり花の色の移るを惜物（む歟）なけきせしまに　左大臣

さほ姫の霞の袖の花のかもなこりはみえぬ春のくれかな　慈圓

散のこる花に春風心せよけふのわかれのわすれかたみに　俊成卿女

ことわりや春の暮とはいひなからおしみもあへす花のちるらん　宮内卿

くれて行春のかたみはこれのみとをしむにつけてつもる花哉　定家

いかにせん春もいくかの櫻花かたもさためぬ風の匂ひを

初秋月

秋の來て露またなれぬ荻のはにやかてもやとる夕月夜哉　左大臣

あきはきぬ露は袂にをきそめて木間の月のもらぬよそなき　慈圓

ほしあひの空をまつまの夕月夜秋のおもひはこれよりそしる　俊成卿女

ゆふ月夜かけもる袖の露よりそ秋の哀をならしそめつる　宮内卿

風の音におもひもあへぬ木の間より秋のけしきは森の月影　定家

露やをく宿よりそむる秋の月またひとへなるうたゝねの袖

月前草花

月影をわか身ひとつとなかむれは千々にくたくる萩の上の露　左大臣

古郷のもとあらのこはき咲しよりよな〳〵庭に月そうつらふ　慈圓

秋の野に月すむ夜半の小萩原よるの錦を人にみせつゝ　俊成卿女

よな〳〵の月より秋をしりそめて花さきにけり宮城野の原　宮内卿

都にもつきはかくとそしかはあれと花をはたれか宮城野の原　定家

みやきのに風まち侘る萩の枝の露をかそへて宿る月影

雨後月

夜半になく鴈の涙に雨過て月にうつらふ野への色かな　左大臣

深き夜のはしにしたてる秋の雨の音たへぬれは軒端もる月　慈圓

何せんにしはしくもると歎けん月影あらふ秋のしくれを

俊成卿女

かきくもり時しもわかぬ村雨のはれゆく空の月そあきなる

宮内卿

月をなを待らん物かむら雨のはれゆく雲のすゑの里人

定家

かきくもりわひつゝねにし夜比たに詠し空に月そ晴ゆく

松間月

ほの〳〵と心つくしにもる月をなを吹しほる庭のまつかせ

左大臣

松かけのまやのあまりにさし入て梢に月はかたふきにけり

慈圓

松にすむ木のまの月をなかむれは葉分の霜に秋風そふく

俊成卿女

大かたの秋もさひしき木間より月もる松をかせはらふらん

宮内卿

さ夜すから風にしくるゝ音はして松の木のまの月そもりくる

定家

あき露もたゝわかためや岡邊なる松の葉分の月の衣手

山家月

山かけや秋ははらはぬ庭の面の桐のたち葉にすめる夜の月

左大臣

月みよといひしはかりの都なりつれなくもこぬ山のおく哉

慈〔そ脫歟〕圓

山里に月はみるやと人はこす空行風そ木のはをとふ

俊成卿女

山ふかみ秋風ふかぬね覺たに月には落るとこのなみたを

宮内卿

たへてすむ人もいかてか在明の月にさひしき山のへのさと

定家

をのつから身こ宇治山に宿からはさもあらぬ空の月もすみ覧

月前竹風

古郷の月ふく風になよ竹のなよりあひてもいくよへぬらん

左大臣

ひとりかも月は待出て吳竹のなか〳〵し夜を秋かせそ吹

慈圓

月のすむ籬の竹に吹風はをのかくまをもはらふなりけり

俊成卿女

月さへて事そともなき秋の夜の風にくたくる露の玉篠

宮内卿

色かへぬ竹の葉しろく月さへてつもらぬ雪をはらふ秋風

定家

ふし侘て月にうかるゝ岡のへのかきねの竹をはらふ秋風

野徑月

わするなよ月にいく野の道すから袖になれぬる女郎花哉　左大臣

行末は空もひとつのむさし野に草の原より出る月かけ　慈圓

秋のゝに月のかゝける衙なれはなかめゆく社とまるなりけれ　俊成卿女

むすひをく里はかりねの草の原枕の露に月そすみける　宮内卿

古郷を思出てやとをつ人野原の月の露にゆくらん　定家

めくりあはん空行月のゆく末もまたはるかなるむさし野の原

澤邊月

くもりこし野澤の芦のむもれ水やとしもなれぬ月の影かな　左大臣

月かけのくすれすやとる忘水野澤にたれかあきをちきりし　慈圓

月すめはさはへのあしにすむたつの雪の衣に霜やおくらん　俊成卿女

かすならぬ野澤の水のたえ／＼に人しれてさへ月はすみけり　宮内卿

水清き野澤のあさちふきわけて月影やとす秋の山風　定家

人しれぬ芦間に月の影とめて入江の澤に秋風そふく

月前聞鴈

おのかくる峯のゆふ霧はれ出て月に數しるはつ鴈の聲　左大臣

こしちより千里の雲を隔きて都の月にはつ鴈のこゑ　慈圓

大江山かたふく月の影さへてとはたの面におつるかりかね　俊成卿女

さよ深て月すむ空の秋風にたのめるをきし鴈そ鳴なる　宮内卿

雲かゝる遠の山田のはするより月にほのめくはつ鴈のこゑ　定家

しろたへの月も夜さむに風さえて誰に衣を鴈の一聲

浦邊月

明ぬへきよをしほかまのうらみ侘からくも月のたけにける哉　左大臣

かち枕つきをしきつの衣手に立よる浪もうらふれにけり　慈圓

月の秋あかしの浦に心せよ島かくれすむ海士のもしほ火

俊成卿女

月すめは明石も須磨もあきの夜の哀へたてぬおのかうら〱

宮内卿

あかて入月をみよとや興津風けふりふきしく鹽かまの浦

定家

浪風の月よせかへる秋のよをひとりあかしのうらみてそぬる

月照瀧水

ぬきみたる瀧のしら糸くりはへてよるともみせ（えイ）ぬ月の影哉

左大臣

山人の衣なるらし白妙の月にさらせる布引のたき

慈圓

やはらくる影そふなちの月影に夜ともみへぬ瀧の白糸

俊成卿女

音たえぬ吉野の瀧も秋の夜は月に氷をくたくなりけり

宮内卿

瀧津せやちる玉とに影分て露ももらさすやとす夜の月

定家

秋の月そてはなれにし影なからぬるゝかほなる布引の瀧

杜間月

月のこる生田の杜に秋更て夜さむの衣よはにうつなり

左大臣

ふりにける立田の杜は神さひて木本てらす秋の夜の月

慈圓

中〱にしつかにやとる月をみんしのたの森の千枝の下かけ

俊成卿女

おほあらきの秋の木間をもりかれて人たのめなる秋の夜の月

宮内卿

大荒木の森の木の間をゆく月の光によらぬ下草の露

定家

露にうつる月より秋の色に出てときはの森のかけそかひなき

月前秋風

たかためとわきてはふかぬ秋風も月みるそての露をとひける

左大臣

その色と思ひわけとや秋風の心つくしの月にふくらん

慈圓

さひしさや月の光にたくふらんいつくもおなし荻の上風

俊成卿女

なみたとふ床の月たにさひしきにふるきあとゝふ風の音哉

宮内卿

秋風になひく草木のたくひとや月のかつらもかたふきにけり

定家

ふきはらふ床の山風さむしろに衣手うすし秋の月影

江上月

みしま江の入江のあしのしたみたれ亂てもなを月はすみ㒵

旅人を送し秋のあとなれや入江のなみにひたす月かけ　左大臣

松風にちきりをきつる月影のあらはれわたるすみの江のあき　慈圓

ひとりのみあしやの庵に詠つゝ秋のよすからみしま江の月　俊成卿女

玉柏うつもれはつるなには江のもにあらはるゝ秋のよの月　宮内卿

すみの江の松かねあらふ白浪のかけてよるともみへぬ月かけ　定家

月前虫

秋ふけぬなけや霜夜のきり〳〵すやゝ影さむしよもきふの月　左大臣

誰となく人まつ虫をしるへにてさこふろ野へにひとりゆく月　慈圓

我も鳴てけさそかなしききり〳〵すよもきか袖に有明の月　俊成卿女

虫の音のわれさへあやな月影をうらみぬ袖も露みたるらん　宮内卿

人とはて月にふりぬる淺茅にたかあらましの松虫の聲　定家

よるのかせさへ行月にたか秋の衣おりはへ虫のわふらん

月前聞鹿

ね覺のみすゝのしのやにきこゆなり月に妻とふさを鹿の聲　左大臣

さをしかも小野の草ふしふし侘て月夜よしとや妻をこふらん　慈圓

さをしかは聲にたてゝそなかむなる涙にやとる野への月影　俊成卿女

おのれのみ秋の哀を音にたてゝ月影かこつさをしかの聲　宮内卿

あられふるみやまの奥の月影に秋をわすれぬさをしかの聲　定家

秋のゝにさゝわくる庵の鹿の音にいくよ露けき月をみつらん

旅泊月

船とむるむしあけの秋の秋かせにわすれかたくもすめる月哉　左大臣

わするなよ出し都の夜半の月淸見か關にめくりあふまて　慈圓

秋の夜のうきねに夢をみなと河さむる枕に月そなかるゝ

俊成卿女

袖のうへにぬるゝかほなる光かな月こそ旅の心しりけれ

宮内卿

またしらぬうきねの床の浪よりもなれたる月の袖ぬらすらん

定家

むしあけの松もしらせよ袖のうへにしほりしまゝの浪の月哉

月前草露

ゆふ露にやとして月をみやき野のこはきか風も心してけり

左大臣

秋の夜はさせもか露のはかなきに月のよすかとならぬ物かは

慈圓

白露をゝのかやとりとみせかほに千里にかゝる秋のよの月

俊成卿女

風さむみした葉かれゆくあきの夜の露にそこほる淺茅の月

宮内卿

白玉かなにそと月に人とはゝ露とこたへよ荻のうは風

定家

草の原月のゆくえにをく露をやかて消ねと吹嵐かな

菊籬月

白菊もうつろはんとのわさなれや霜のまかきに有明の月

左大臣

月のすむ空にまれなるほしの色をまかきにのこす白菊の花

慈圓

ませのうちにうつろふ菊の色をまたかへすは月の光なりけり

俊成卿女

秋ふかき菊のかきねの月影に霜かと露そきへかへりける

宮内卿

霜をまつ籬の菊のよひのまにをきまよふ色は山の端の月

定家

しらきくのまかきの月の色はかりうつろひのこる秋の初霜

暮秋曉月

秋はいなは戀しかるへきことよひ哉たのめてをきし有明の月

左大臣

秋はいますゐ野にならすはし鷹のこひしかるへき有明の月

慈圓

詠かねて秋もいまはの有明を心ほそくそかたふきにける

俊成卿女

なか月の有明かたの空の月心ほそくそかたふきにけり

宮内卿

なかめこしあきは浪になり(マヽ)ぬとやしくろゝ雲に有明の月

定家

いまいくか秋もあらしのよこ雲にいつれはしらん山の端の月

寄雲戀

わか戀は嵐にまよふ夜半の雲うきてそこともなき世なりける　左大臣

うつりゆく人の心は白雲のたへてつれなきちきりなりけり　慈圓

我戀は花にのこりし春のくも晴てさ月の空になりぬる　俊成卿女

したもえに思ひきえなん煙たに跡なき雲のはてそかなしき　宮内卿

今はとて人は出ぬる跡になをひとりなかむるあかつきの雲　定家

しられしな千入の木のはこかるとも時雨る雲に色しみへねは

寄風戀

わかそてに露はもとよりをきけるをあらはす秋の風の音哉　左大臣

ゆきかよふ風のたよりもなれぬれは吹こぬ夜半は戀しき物を　慈圓

花にいとひ月にしのひし風の音のよな／＼人を松のこすへに　俊成卿女

いかなりし風の便に聞そめて身にしむ戀のつまとなりけん　宮内卿

あふとのたゝ〔ゑ歟〕にしねやの板まよりたのめぬ床にはらふ秋風　定家

いかにせん又もたのめぬくれ竹のすゑは吹こすあき風の聲

寄雨戀

こぬ人を月にまちてもなくさみきいふせきよひの雨そゝき哉　左大臣

わすられて我身時雨の古郷にいはゝやものを軒の玉水　慈圓

我たもと時雨に色をみよとてや猶さみたれに朽のこるらん　俊成卿女

待よひの過る村雨かき曇たのめしそらも袖ぬらせとや　宮内卿

色に出ぬ思ひのみこそときは山我身時雨はふるかひもなし　定家

雨そゝき程ふる軒の板ひさし久や人めもるとせしまに

寄草戀

袖にをく露のゆくゑを尋ぬれはあはてくる夜の庭のさゝ原　左大臣

やすらひにたのめて出し跡しあれはなをまつ物を庭の蓬生　慈圓

あふとのたえにしねやの板まよりたのめぬ床にはらふ秋風

俊成卿女

わかるれは袖にみたるゝあかつきの露を草はの上とのみゝし

宮内卿

たのめこし人の心は霜むすふ淺茅かするゑになりはてにけり

定家

いまはとてわするゝ種やしけりにし我すむ里は軒の下草

寄木戀

人こゝろ秋の木葉にうつろへとかはらぬ松のかせの音哉

左大臣

たか秋の心木葉に枯ぬらんまつとしきかはよゝもへぬへし

慈圓

袖よいかに深山にしけき槙の葉もしほれて色はかはらさり鬼

俊成卿女

秋はてゝちきりむなしき椎柴のはかへぬ床もさひしかりけり

宮内卿

たのめつゝこぬよあまたと恨てもひとり身にしむ松の風哉

定家

せく袖よせゝの埋木あらはれてまたこす波に朽やはてなん

寄鳥戀

しはしこそ明ぬるかとも恨みしか待はそいまは鴫の羽かき

左大臣

ふかき江におもふ心はみかくれてかよふはかりのにほの下道

慈圓

しるへなき涙の川の浪かせにおもひかねても千鳥をそきく

俊成卿女

(作録)清にあけぬとつくる聲きけはあふ夜の鳥のうきは物かは

宮内卿

逢とのやかてたへぬる歎きまて思へは鳥の音こそつらけれ

定家

かりにたにとはれぬ里の秋風にわか身鶉の床はあれにき

寄嵐戀

わすれてはわれぬへき物をなにとまたたれ松風のあらく吹らん

左大臣

秋はてゝみ山はけしく吹嵐ありしいまはのなけのことのは

慈圓

色かはるのへのけしきに吹そめてむへ山かせを人のこゝろよ

俊成卿女

中々にさてもねぬへきよなよなをうたて嵐の窓たゝくらん

宮内卿

嵐ふく木のしたふしはあふとをへとしりてもさめましもやは

定家

わひはつる我思ひれの夢路さへちきりしられて吹嵐哉

寄舟戀

和田の原あとなき浪のふな人もたよりの風はありとこそきけ　左大臣

浪たかきむあけ〔しま歟〕のせとに行舟のよるへしらせよ沖津しほ風　慈圓

わか戀のなかめをみせん明石かたこき行舟に秋のあさ霧　俊成卿女

心からうきたる舟のうきしつみあし分舟のさはるのみかは　宮内卿

逢とはいなにはあらすいな舟のうき身の程をしはしはかりそ　定家

こぬ人を盡せぬ浪にまつら舟よるとは月のかけをのみ見て

寄琴戀

かすく〵に思ひしとは音に立しかよふ松風いかにふくらん　左大臣

戀侘てなくねにかよふ琴の音にこほれる水の下むせひつゝ　慈圓

松風や籠のうちの鶴の聲すみて袖よりおつる瀧も流す　俊成卿女

身にそしむ戀しき琴の音に立てかきなすのへの風のしらへは　宮内卿

琴の音にかよひてけりなうしとてもかれなて人を猶や松風　定家

形見そとたのみしとのかひもなくうき中のをのたへや果なん

寄衣戀

から衣きしもせぬよの詠こそさても忘れぬつまとなりけれ　左大臣

我戀はやまとにはあらぬからあひのやしほの衣深くそめてき　慈圓

から衣いかにかへして逢ことのねぬよの夢にならんとすらん　俊成卿女

くちはてんなみたのつまとしらさりき契りし中の夜半のさ衣　宮内卿

忘らるゝ身をしおもへはから衣うらみぬ袖もあやしかり鬼　定家

みし影よさて山あひのすり衣みそきかひなきみたらしの浪

于時貞享元年於京都富永乃喜秘本令恩借書寫一校畢。

于時元祿九年秋月如本寫之。一二首落字有之。是如寫本者也。

# 續群書類從卷第四百

和歌部三十五

## 天正五年親王家五十首 天正五年於親王御方御出題同前

### 春十首

早春　竹鶯　江上霞　雪中梅　岸柳
春夕月　歸鴈　初花　花埋路　雲雀

### 夏七首

新樹　郭公　盧橘　夏草　夏月涼
野夕立　水邊螢

### 秋十首

七夕　聞荻　薄露　秋田　雨夜虫
月契秋　濃月　擣衣　菊久馥　黃葉

### 冬七首

初冬　時雨　寒草　氷始結　冬月
積雪　鷹狩

### 戀十首

寄月戀　〻雲〻　〻山〻　〻河〻　〻門〻
〻床〻　〻草〻　〻木〻　〻車〻　〻鏡〻

### 雜六首

曉寢覺　山家　浦船　旅行　述懷
寄松祝

竹 點廿七首。無品誠仁親王。廿六歳。
聖護院准后 沙門道澄 十四首。
持明院從三位 權中納言藤原基孝 一首。五十八歳。
庭田中納言從三位 權中納言源重通 三首。三十二歳。
中山宰相中將從三位 左近衛權中將藤原親綱 十五首。三十四歳。
中院宰相中將從三位 參議左近衛權中將源通勝 廿二首。廿四歳。二イ
飛鳥井從三位 右兵衛督藤原雅敦 廿四首。三十歳。

積善院僧正尊息
權僧正尊雅　十三首。
竹内正四下
左兵衛督源長治　四首。
冷泉從四下
右近衛權少將藤原爲滿　三首。十九歳。
高倉從四下
右衛門佐藤原永孝　十一首。十八歳。
五辻正六位上左近將監
藏人左馬助源元仲　八首。廿歳。

惣點數百四十五首

早春

竹

數ならぬかきねの内の草までもみとりにかへる春や來ぬらん

聖

またさむき去年のあらしに音羽山朝日の色に春やみすらん

持

萬代の春をかさねてさほ姫の霞の衣今朝やたつらん

源

にほの海やさゝ波よする音までも氷をくたく春の初風

中

やふしわかす移る日影のその儘に長閑さそひて春はきにけり

通

朝な〳〵四方にのとけき日影よりくもりなきよの春やきぬ覽

兵

霜氷心にとけてさほ姫の袖さむからぬ春のはつかせ

積

くる春のきのふけふ日の空の色も出る日影はさらにみえけり

長治

いつのまに春はきぬらん白雪もまたふる年のみよしのゝ山

爲

ふりつみしみ谷かくれも春來ぬとけさあらはるゝ雪の下水

永

出る日ものとかになりぬ雪の山きえまあらはす春やきぬらん

つくられたる雪の山ならはきえ間の間の字不審歟

元

日をかさね春にけたれて絶々の霞にみゆる雪の遠山

竹鶯

兵

夏冬もかくれてやとれ千尋ある竹のそのふの春のうくひす

近習歌に同類あるやうに存候

竹

竹の園になれてそきかむ一ふしに千代をも契れ鶯の聲

中山宰相中將

なれもたゝかしこき跡やしたふらん竹の林にきゐる鶯

持

幾春もかはらすきなく鶯の千代のやとりや窓の吳竹

聖護院准

鶯のねくらの竹は春の色もありとやこゝにあさな〳〵なく

通

呉竹の園生かはらぬ代々のやともありとやこゝになるゝ鶯

元

生そひてかけものとかに呉竹のねくらにふかし鶯の聲

長　治

のとかなる窓の呉竹よをこめて今や初音のうくひすの聲

積

ふしなれし竹の林の鶯やいくよゝかけてなをちきるらん

爲

梅の花咲やらぬまは呉竹にねくらやたとる鶯(のむ歟)の聲

源

かけしけき竹の林をうくひすの住家になしてねをや鳴らん

永

うつしうへし軒端の竹に鶯の花になくへき初音をそきく

江上霞

爲滿朝臣

小舟こく入えの水のけふりさへ春は霞に立かはるらん

積

みちひなき入江は春の八重霞えやは吹とく浦のしほ風

永

ほのかにも霞にこめてみしまえや夕への波にかへる友舟

京極納言みるめなきさ両前歟

竹

難波かた入江の波のみつしほにくもるとみしや霞なるらん

長　治

あしかきのまちかき程も難波えの霞へたつるいさり火の影

中

よせかへる浪も小舟も見えぬまて湊えふかくたつ霞哉

元

かすみけり出るも入もとをきえの波のみかくれ舟そ浮へる

持

室に霞のこめたるよしにて波の見えさらんこといかゝ

難波えやそらは霞の立こめてみぬ夕波の音をきくかな

聖

苫の村立を霞の隔へきこと不得心音聲ならはかやうにも可申

なにはえや夕日の波に風絶て霞そわたるあしの村立

通

萌出比の芦に舟のわくへきことわりなし

もえ出るあしわけ小舟さはらねと霞をたとる難波江の春

源

難波えやあしま絶々さす舟もほのかにかすむ春の明ほの

兵

朝ほらけ水のけふりのけぬか上に入江ふかめてたつ霞哉

雪中梅

持

第四句云若侯哉

ふりつもる雪のうちにも匂ひきて風のしらする梅の初花

聖護院准后

色にしもまかふのみかは梅か枝の雪や(の歟)雫も香ににほふらん

中院宰相中将

かつきゆるたえまに花の色みえて雪に咲つゝ軒の梅かえ

永孝朝臣

淡雪も消残る色のそのまゝに匂ひくはゝる梅の下風

竹

ふる程はまかひし雪の同し枝をわきてそ匂ふ梅の下風

右兵衛督

ふるほとに雪（ヒイ）ともみしかつもりての枝はみなから匂ふ梅か香

元

つもりあへぬ木のまの雪を吹たてゝ（雪に梅のにほひは残す由しく候）梅か香しめる袖の朝風

中

にほはすは咲ともいさや白雪のふりのみまかふ軒の梅か香（えイ）

爲

それとしも雪になみ木はみえねともかにあらはるゝ園の梅枝

長

折てこそ色かもわかめなへてふる雪も匂ふやゝとの梅か枝

積善院

さく枝の雪は色こそうつむともかやはかくるゝ梅の下風

源中納言

けぬか上にまた降そふも咲梅のかをはうつまぬ（埋残鍋一段句法）春の雪哉

中

岸柳

朽残る此川岸のふし柳いく年なみのえたにかけゝん

---

風わたる岸の下水そこひなき淵さへさはく青柳のかけ

右兵衛督

春雨の雫つたへて青柳のみとりになひく岸の下草

源元仲

波かくるきしの青柳みたれあひて露さへなひく春の朝風

積

池の面の波のあやをる春風に糸くりいたす岸の青柳

源

川そひのきしの青柳吹風にみたれて落る露のしら玉

長

朝みとり誰そめかけし糸ならん波のあやをる岸の青柳

持

それも又わする（春の〻ふを兼）ゝ草の種ならてきしに生てふ青柳のかせ

竹

うき草の露もひとつにみたるめり水行岸の（糸に並なく候歟）青柳のいと

聖

中院

かけひたす水のみとりは枝をそめ波をそめたる岸の青柳

永孝

かけふか（みえて）く岸に生てふ青柳の枝はさそはぬ波のうき草

爲

梢より水もみとりに川岸や波にみたるゝ青柳のいと

春夕月

春はたゝかすむ朝けといひをきし人やみさりし月の夕影　聖

くるゝよりかすむ光の色そひてみゆるたかねや月になるらん　元

こしの文字より下句の初にいひかけたる好まぬ躰候下句を引はなちて吟し候時何事やらんと聞え候

待えてもかすみのひまの夕月夜ありとはかりの詠ならまし　竹

此歌は有明にても夕月夜とに題にあらはしても夕と覺しき會釋分聞えす候此義は題ことに渡るへく候結句もたかふ様に候

とりとめぬ影そあやしき行月の夕はかすむ隙はあれとも　永

霞のひまあらはとりとめぬ月の不審あるへきにあらす

イ光

はらふにも終にかすみてことはりの春にまけぬる月の夕風　中山

くれやらてうすきひかりと見る月に夕や霞むとかもかくれん　中院

みたて所よろしく候

山のはに出て夜をまつ月影も霞なからにくれやはつらん　源

半天もおもひやらるゝ夕かなかねてかすめる山のはの月　積善院

山のはゝくれあへぬまと出てたにかすみを出ぬ月そわりなし　左衛門督

老のなみこえぬ物から春といへは夕は何とおほろよの月　爲

おほろ月にには可然をかやうにいひかへては如何に聞え候

秋の夜の空もおよはし山のはにかすむ夕の春の月かけ　持

山のはの空吹はらへ春風のたゆめは月のかすむ夕くれ　長

歸鴈

秋霧に道もまとはてくるかりやかへる霞もいとはさるらん　積

ふる里の心もしらて行かりやうはの空なる音をもなくらん　中院

惣別源氏物語の歌本歌のことくに取ましきよし申來候歟

春になとうすき契そ旅衣立かへるとや鴈のなくらん　長

今はとて秋こしかりのかへり行とこよの里は春なかるらし　聖

鴈は春を始よしに候歟

雲井にもたとりやはする忘れすも時をたかへす歸る鴈かね　永

ゆくそらに契りやふかきとふ鴈のむかへる雲路に羽をかはして　右兵衛督

あま人のひく玉琴のこときてふ見えて霞にかへるかりかね　持　元

天人はあま人とよみ候やらん本歌いまた不明候

こむ秋のたのみをこめてわかくさの春の澤へを鴈の立こゑ　源

いかなれは花のみやこの花をしも咲とはみつゝかりかへる空　爲

名にしおふ都の春のいかなれはかへる雲路に鴈のなくなる　竹

かへるさをしたふとしるや春なから秋をたのむの鴈も鳴らん　中

いかにしてをくれし友そ一行は雲路はなれて歸る鴈かね　源

初花

うつしうへし花も南の枝よりやまつ春をしる色をみすらん　中
（南枝のえたは梅と覺しく候古今の花のかせの歌は雨を中候）

なへて咲比とて世にもあかれしをましてとむかふはつ櫻はな　源元中
（花の字あまり候）

うへをきし一木か上の春やとき花もをくれぬ色をみるにも　聖護院
（そふ色か哉歟）

年毎の花にやはあらぬ咲といへはまたみぬ計なとめつらしき　通
（一字を以て一句を損し一句を以て一首を損すると申候は此歌にて候歟）

かつ咲はこそ見し枝にあらぬかと又めつらしき花の色かな　爲

吉野山このめも春と見しまにそ程なく花もほころひにけり　右兵衞督
（下句同類）

冬に先（イ无）心そにほふ咲そめし梢はゝなの一木はかりも　竹

咲初し（イ无）一木なからもみし人のことはの花や四方にみつらん　永孝

わきてみる色香もふかしあるか中に春しりそむる花の梢は　長
（うへしより歟）

咲そむるはなは一木の色なれとにほふ春邊は九重のそら　持

いつよりかかく咲初て櫻はなかはらぬ色を代々にみすらん　積

をしなへて外山の花の色香をもかつ咲庭のなかめにそしる　竹

花埋路

ふみ分てとはぬもつらしとふ人には（は歟）はらふもおしき花の白雪　爲

分入しあともにほひてうす雪のかへるさうつむ花の下道　積善院

いとゝ猶ふかき吉野のかよひちをちりしく花にまよふ山ふみ　永孝

もろ人もゆきあへぬまて散つもる花を山路の關守にして　源

み山ちの苔のむしろも色かへてちりにし花の錦をやしく　持

ちりてしもあかぬなかめやみよしのゝ山路を花に埋む白雪　長
雪とのみ人やみるらんちる花に道ふみまよふ志賀の山越　中山
みよしのやをくまて道も絶やせん花をつくして山風そふく　源元仲
道遠き春のしほりの埋れて歸るさたとる花の白雪　兵
今はとてなれもしたふやかへるさの道ふりかくす花の白雪　聖護院
爲家卿は草木をおのかと云し候ことをさへ難を加候けるなれは花を申すへきはよろしからす候歟
ふみ分てとひこぬ人の心こそおもへはふかきはなの白雪　中院
ちるからに人も問こぬかよひちはいかなる跡か花にいとはん　永

雲雀

雨過る草葉の露に鳴すてゝ床をひはりの空に立らん　長
夕ひはり雲路はるかに鳴こゑはきゆるはかりのあはつのゝ原　聖
草ふかき中にそおつる夕ひはりこゑのかきりは空にのみして　中山
子を思ふ道は雉子にをとらしとすをはなれても鳴ひはり哉　右兵衛督
春の野のしけき往來に半天を床とさためて鳴ひはりかな かけ兼　通
朝露の床をやいとふたつひはり日影まつまは空に〔の兼〕しみして　爲
すみなれし床もかすみて芝生よりあかりておつる夕ひはり哉　元
朝またきあかるひはりの聲の色も霞にこもるのへの春けさ　持
あさちふのをのゝしはふに鳴落てこゑのとかなる夕ひはり哉　積
朝夕におなし雲井をとひあかるのへのひはりの床そかくれぬ　第三句俗語候歟　竹
かきりなくあかるとみれは白雲に羽うちかはす夕ひはり哉　羽うちかはすは雲雀にては不似合鷗鷺の差に候へき歟　長
朝な／＼あかる雲雀も霞ては野澤の水にかけもうつさす　中院

新樹

今よりの人ならすへきやとならし涼しくしける柏木の影　中山 比兼
ときは木の色とはなにをわかみとり同し木末に茂る夏かな　持

おしまるゝ春くれはてゝ後は猶花にまされる夏木立かな　竹

夏きてはうすきたもとの一重山なにと靑葉のかけしけるらん　右兵衛督

花咲はかたはらに見し太山木もなへて若葉のふかき色かな（ひとつ歟）　永孝

咲殘るさくらか枝の春の色にならふ紅葉を若葉にそみる　長治

ときは木も猶茂るらん夏山の葉分の風のもる隙そなき　源

ときは木にあらぬ梢もをしなへて綠ふかむる夏は來にけり　爲

朝またき露をちらして夏木立茂る葉山に風わたるなり　聖

名殘まて花のゆかりと見るに猶若葉のかけのあかすもある哉　元

花にみし山をいつれは茂る木のみとりにつゝくしかの海つら　積善院

花にみしあとは若葉のみとりにてみやこも夏の深山とそなる　長

時鳥

待わひて打ぬる夜半の一こゑは夢かうつゝか山ほとゝきす

時鳥いつはありともわするなよ宵の村雨月のあかつき　聖護院

有明の空めつらしき一こゑを雲井にのこせ山ほとゝきす　源

つれなきも人にくからぬ時鳥またこりすまの心つくさん　中院

一こゑに心のおくの名殘まて人あくからすほとゝきすかな　中

待ほとはよそに過つゝ五月雨の雲間にもれて鳴ほとゝきす　爲

こゑしたふ枕にかへる時鳥雲のへたてのよはゝかひなし　元

しのひねは木のまもしらぬ雲路にも心つくしのほとゝきす哉（めつらしき木のまの郭公にて面白候）　竹

つれなさをわれやはまくる郭公心くらへのよをかさねみん　積

をきかへり又も鳴なん一こゑはいかて心に山ほとゝきす　兵

聞く人もなきさの杜の夕くれになく聲おしき郭公哉　持

永孝

山ひこになれもこたへて一こゑの後もまたなくほとゝきす哉
盧橘　元
五月やみおもふむかしの面影もよはにかくれすにほふたち花　持
何事もうつりかはれる世中にむかしわすれすにほふたちはな　積善院
一もとを風のさそへ（ゆかり歟）る庭の面の草はみなからにほふ橘　通
たか袖のなこりとなしに橘はなへて匂ひのむつましき哉　竹
（イ无）橘のかほる軒はにかけふりてまつもむかしの友とやはみん　源
あはれたかそのいにしへの袖ふれて匂ひえならぬ軒の立花　爲
手をらすも袖にうつしてしはし見ん葛〔マヽ〕はす軒のたちはな　永孝
たか袖をしる人にして橘の花はむかしに猶匂ふらん（をおとろかす歟）　聖
むかしみし軒はに生る草の上に花たちはなの露そみたるゝ　長
いにしへをおもひそ出る我袖にしるき匂ひや軒の橘　中
道も今むかしにかへるうれしさを（かけふむさたなくて道といふ事橘により来らす候哉）花たち花のかにあまるらん　兵
月のうきにあらぬかつらの追風にうへぬ軒端も匂ふ橘
夏草　持
夏草のしけれるのへを分わひて道やはいつく誰に問まし　永孝
あれやすき物とはしれと八重葎あまりなるまてしける庭かな（夏草）　爲
分行は袖そ露けき夏草のしけさまされるもりの下道　源中納言
とひよらん（いらん）道もやいつく生そふをそのまゝかこふ庭の夏草　右兵衛督
萩薄しけるか上の露ちりて夏のにみする秋風そふく　通
八重葎茂りはてゝも草の戸の（八重葎の茂るは誰に可来歟）心にとちぬ跡や殘らん　源
しけりあふ夏野の草の露わけて吹も（夏野に風の聲は不審候）さなから秋風のこゑ　中
中にさくもありける（夏草の五文字を先候）花を分入てみよとやしけるのへの夏草　竹

玉ほこの道一すちははらはねとしけるともなき夏の草哉（のへの）

積善院（に兼）

春にこそひとつ色にはもゆるとも夏は千種を分花もかな

長（野もせ庭もせ狭の字にてせはきと云也かきほのつゝきいかゝ）

夏ふかくなりまさるらん庭もせのかきほもみえぬ露の草村

聖（つゝい字與に申候）

道もなくしけりにけりな冬草のかれにし人のかことそへつゝ

夏月涼

竹（山本は候へとも氷室は木ふかきうへに又かこひはへたる山なれは月みんためはねかふましき境地哉）

氷室もる此山もとの月影や夏をもしらぬ光りみすらん

兵

なつかりの汀のあしのみしか夜の月はくまなき影の涼しさ

元

みるからうちにやかてふけゐの浦の月波に入さの影の涼しさ

長（此五文字近代容易に不関候）

なかむれは影もすゝしき夕月の明るほとなきみしかよの空

聖護院

夏の夜も涼しかりける天河水より出る月にやあるらん

永

河瀬にも秋やかよひて月も今ひかり涼しきみしか夜の空

中院

むすふ手に涼しきかけは山の井のありてやいとゝ短夜の月

吹かせに木かけの露の音たてゝ月は霜夜の影そすゝしき

積善院

秋風や月のかつらに通ふらし落くるかけの袖に涼しき

中

為（扇の風にて炎熱を奪候つゝ月に涼意のなきなるへし）

手にならす扇の風に心より涼しくすめる夏の夜の月

持

たちすゝむそともの月のほともなくはやふけ渡る短夜の空

源中納言

野夕立

端居して更行まゝにをく霜のしろきをみれは短夜の月

右兵衛督

さそひゆく風より雲のうき島やふしのすそのに過る晩立

長

かすか野はふるともぬれし夕立の雲はみかさの山に晴れは

聖護院准后（封の事にや分明ならねと数一百のうち故事まれなる故に付罷候）

やとりかる野中の松の一木にもそのかみしろき夕立の空

源

末とをき野原の風にきほひきて一村くもるゆふたちの空

竹（夕立に篠のはのさやくへき事はいかゝ候へき）

空さゆるあられならすもをとするや夕立きほふ野路の篠原

永

時のまに雲を分つゝ吹かせにふるやかたのゝ夕立のそら　持
夕立の雲の一村のを分てふらぬかたさへ涼しかりけり　中
家もあらは野守はいてゝしろへせよ俄にきほふ夕立の空　野守のしろへ夕立にに不似合候哉
中院宰相中將
大江山とをしとみえしほともなくいくのゝ末にかゝろ夕立　積
外山より空こす峰のきほひきてをとのみはるゝ野への夕立　淺深不分明候
爲
時雨にもあらぬ物からくもろかとみれは晴行夕立のそら
元
旅衣立よろかたの草も木もぬれていくのゝ夕立の空

水邊螢　積

なかれてもかへらぬ水にすむ螢なとか思の消てもゆらん
中院宰相中將
思ひありとなみたの河を尋はやよるは螢のうきてもゆらん
源
夕やみをのか物とやとふ螢ゆく澤水の上にみたるゝ
兵
くれぬまは水草かくれにこもり江の螢は夜そ光添ゆく　螢の夜そふに何歟草かくれは夜またすとも光そはへく候

中山宰相中將
うき草にやとりもあへすまたさそふ水のまに〳〵とふ螢哉
爲
涼しくも夜をかさねつゝとふ螢さそなみるらん宇治の橋姫
竹
消やらぬおもひならまし水に入波にうかひてもゆる螢は　螢の水に入とは申かたく候歟
永
蚊遣たくかけかとみれは難波江や蘆のしのやに螢とふらん　上の句にみきためて下句にうたかひをのこしたるはいかゝ
聖
かけみれはおもひやけつと水底に入ぬるはかり飛螢かな
長
うきしつみ影そなかるゝ宇治川の岸まにみゆる夜の螢は
元
亂あふ光あまたにうき草のさそはるゝ水に行螢かな
持

七夕

いかなれはもゆる螢の池水にぬれても消ぬおもひなるらん
中山宰相中將
待えても一夜のほとや七夕の逢さきるさに物おもふらん
聖
いつとなくおもひをしらは年にまれの根もあらし星合の空
持

いつのよのいつの秋よりしら雲（さためなきて歟）のかゝる契そ天の川橋
長
かはらぬや頼成らん織女の年に一夜の契なれとも
竹
七夕の名残よさそな逢とても（續古今集匡房卿同類候）また初秋のみしか夜の空
兵
僞のあるをならひの人の世の契をしらぬ星合の空
僞
一夜そと契をきつゝ天川わたりて袖や猶しほるらん
永
空にありて過る月日をかそへてもおもひはつきし天津星合
源
絶々のうき名やなかす天川年にかはらぬ逢瀬なれとも
中院宰相中将
銀河なかれてはやき月も日も中にはろけき星合の空
積
七夕のうき年月の（年のへたては七夕の契にあるへからす况や月のへたて不及沙汰）へたてをもあふ一夜にや恨はるけん
元
契をきしむかしもいとゝくやしきやあかぬ一夜の星合の空

聞荻
僞
夕くれのさひしさそへて軒ちかくそよき立たる荻の上風
永
吹風も猶心せよさらてたに夢はむすはぬ水の下荻
竹
明やらぬ夜半におきゐて白露も夢も結はぬ荻の上風
元
荻のはにまた吹なれぬ風の音も秋に聞えて打そよくらん
源
夜をふかみ打おとろきて荻のはのそよく音にや夢は覺らん
中院宰相中将
心なきあまの袂もいかはかり秋風しほる伊勢の濱をき
長
植をきし軒はの荻の今はゝや秋をしらする（連歌めき候）風の音つれ
通
さめにけり夢のうちにも荻のはのそよと（風味よろしからす候）聞つる音は殘りて
聖
きひしさそ今は友なる故郷は荻のはならぬ音信もなし
持
さそひくる夢なかりせはうき秋のかきりはしらし荻の上風
積
みしはみな殘らぬ夢のうきはしにひとり夜わたる荻の上風
右兵衛督

夕くれと何かはいひしね覺する枕のためのをきの上風

薄露　　　　　　　　　　積善院僧正

物おもふ身はならはしの夕より尾花か袖も露そあまれる
　　　　　　　　　　　　元
野邊の露さそな夕の花すゝきかりねの袖の打しほるらん
　　　　　　　　　　　　中
まねくとて尾花かもとに立よれは人の袖まてふかき夕露
　　　　　　　　　　　　永
みたれあひてまねく尾花は末葉とも（薄に末葉と詠候哉）下葉もわかぬ庭の朝露
　　　　　　　　　　　　長
白露になひく尾花の打みたれおもはぬ方に浪やたつらん（波に露の景色各別に候歟）
　　　　　　　　　　　　爲
吹風のすそのゝ原のかたよりになひく尾花の露そみたるゝ
　　　　　　　　　　　　通
吹むすふ露かとみれは秋風にまつみたれゆく糸薄かな
　　　　　　　　　　　　持
まねけとも人はとひこすいたつらに尾花みたるゝ露の故郷
　　　　　　　　　　　　右兵衛督
秋にたへぬ夕もさそなつゝむともあまる尾花か袖の上の露（五文字あまりて候も此等にふかく耳にたつまてはきこえす候歟但秋とならくても　たえさらんとをきてはいかゝ候へき）
　　　　　　　　　　　　竹
をくとてもあたなる露のいと薄風をもまたてなきふすらん
　　　　　　　　　　　　源
をくとならは尾花か袖に餘るとも（未來のふりにて候）みたれなはてそ野邊の夕露
　　　　　　　　　　　　聖
うへをきし一村薄色々の花にをとらぬ露やしけらん（本歌は二句のうへ三四字これを掠るすとは申候へとも数ある詞をはをかしかたく候）

秋田　　　　　　　　　　竹

心なくかるてもさすかをしからむ霜をく比の秋のわさ田は（人丸か霜はをくともといへるはあらましこと也わさ田の比霜のをかん事かつてあるまし　きを時節相違候へからす候）
　　　　　　　　　　　　持
淋しくも小田もる賤の袖のうへは露のをきちる秋の夜すから
　　　　　　　　　　　　聖
入日さすいなはの雲のたえまよりみつふきいたす秋の夕風
　　　　　　　　　　　　源
いなつまはやとる程なくかけ消て田面をわたる風そ音する
　　　　　　　　　　　　右兵衛督
春秋の花もおもはぬ山かつはいな葉色こき盛をそみる
　　　　　　　　　　　　長
秋の田の（秋田かる歟）露なれ衣きてみれは月をもはこふ賤かかりいほ
　　　　　　　　　　　　積
かくて猶しはしはきかむ鹿の聲田面の庵に秋はすくとも
　　　　　　　　　　　　中院宰相中將
かるまゝにもらぬ田面もをのつからを鹿の聲の遠さかりつゝ（ゆくイ）
　　　　　　　　　　　　永

秋ふけてかりし山田のをしねをもしゐて守とや鹿の鳴らん
元
秋更てひろふおちほに打むれてなれも田つらのさほしかの聲　さをしかもおちほひろうやうに聞なされ候哉
中
かりはこふ人しけくして秋のみそ山田の原のさひしけもなき
爲
さ苗よりうへて程なき秋の田にはやかりしほの露やをくらん
長治朝臣

雨夜虫

夜半もやゝふけゆく秋の蛬身にしむ雨と音をやなくらん
爲
ふる雨にさしこもりにし草の戸をおもふ夜すから松虫のなく
永
長夜をあさちか原の村雨にしはしとたゆる松虫の聲
兵
さらてたにねられぬ雨のつれ〳〵の枕ともなふ松虫の聲
通
秋の雨のなかき夜すから袖に又涙ふりそふすゝむしの聲　なにゆへの涙ときこえず候
聖
雨の音虫のなく音や大かたの秋の夜ならぬ哀そへけん
持
ふくる夜にたれをまちてかふる雨の露のまに〳〵鳴むしの聲　露はをくも葉のはるも晴ての時にかきる物也くもれる夜は露いをく事なし　これにて分別あるへし
中
終夜をのかなみたの雨とのみふるを恨て虫のなくらん
元
よをさむみ時雨にそめて草衣はたをる虫の聲しきるなり
源
鳴虫のおもひよいかにあさち原比は夜寒の雨のつれ〳〵
竹
くれて行秋もしられて雨にさへ枕にちかききり〳〵すかな
積

月契秋

そことなく枕にちかき虫のねもねところまとふ夜半の村雨　枕にちかくはそことなき道理なし虫のね所もうちまかせさるにや
聖
いつとてもかけやはつゝむ空の月いかに契りて秋を分らん　かけをつゝむと云事みゝなれす候
右兵衛督
あはれ身の秋いくめくり月になれ月もなれてか契きぬらん
竹
月よ□契たかふな秋といへは一夜も千代の光そふらん　とて兼
元
治しる秋津島ねは光ある君に契りて月もすむらん
通
さきの世も月にいかなる契ありて猶行末の秋したふらん
長

長夜もあかぬなかめの月かけにまたこん秋や契をかまし
爲
天地のひらけしよりも秋といへは名のみかはらぬ望月の影
中
行末の猶秋とのみ契かなめてこし月のかけになれきて
積善院僧正
神代よりかくすめるをや月も秋あきも月とそ契をきけん
永
すみのほる月のかつらの追風に秋もかはらぬ光そふらし（その理たしかならす）
源
いつはあれと秋を契りて久方の月のかつらのかけそさやけき
持
長夜の秋を契りていつかたの月やくまなく空にすむらん
長

瀧月

清瀧やみたれておつる白糸はよるとしもなき月のかけ哉
中院宰相中將（ニイ）
おきたきつきよき流をもとめきて月の御舟のかけうかふらん（ち瀧）
長（月の部に貫のさた如何）
てる月にさらすとやみむ布引のよるひるわかぬ瀧の白糸
源
いはほさす松冷しく月かけも千々にくたけておつる瀧波

白妙の月かけなから水わけの山のたきつせみゆる一すち（一すちなととめ候事違歌にこそ候らん）
積
爲
一すちにみれよりいつるうき川は月にさらせる布かとそみる
永
白玉をかそふるはかり瀧津瀬の岩まもてらす秋の夜の月
聖
つらぬきて月さへおつる光哉波の白玉たきのしら糸（日を貫とあれは月をもいふへきとおさへられけるにや）
中院宰相中將
かけはいま音羽のたきに流來て關のこなたに月かたふきぬ
竹
諸ともに流もやらて月かけは猶すみのほる瀧のみなかみ（みをさかの誤）（此句法例文のやうなれと聖案候うへは苦なく候）
兵
秋をへて水のみなかみすむ月にくろきすちなき瀧の白糸
元
みるからうちに流れて西になるたきや川瀬の月のあけんとす覧
源

擣衣

秋風の身にさむけれは小夜深て賤は衣を今やうつらん
聖護院准后
遠近にうつ音すなりから衣たか袂より夜さむそふらん
竹

あれまさるしつかふせやはわきて猶夜さむもはやく打衣哉　永

たゆる間も袖（や歟）さむからし里人の打もねられぬ夜半のさ衣　持

ふけて猶やすむ間もなくきぬた打音にぞ秋の夜さむをはしる　爲

うらみわみ露にしるしもまき返し日も夕くれにうつから衣　兵

夜やさむきをきまかふ霜は白妙の衣うつなり淺茅生の宿　元

から衣打すさむ間もなかりけりまたねぬ人の夜寒なるらん　中

吹おちて今はたさむし山里はきぬたにかよふみねの松風　中
（上句あるへく候哉下句にすてかたく候）

あはれとは誰きかさらん閑なる草のいほりに衣うつ音　積
（連歌にては音よろしく候[illegible]の時うつ音とゝめ候事いやしく候と祖父[illegible]候き）

衣うつ身にはわりなし秋風のいとゝ夜さむを袖にさそひて　中院宰相中將

待わふる人のためなるから衣うつ夜は秋の風ぞ身にしむ
（征夫の爲の砧とおほしく候）

菊久馥　源元仲

露にひらけ霜にうつりて白菊の秋をつくして花ぞ匂へる　右兵衛督

散うせぬかけはちとせも匂ひなん松をためしの庭の白菊　通

あらぬ色にうつりはてたる籬まてもとのにほひの白菊の花　積

咲ちらぬまかきの菊の色香をもひさしき秋の例にぞみる　爲滿朝臣

さきしよりうつろふまでに色（かへ歟）みせて紅にほふ白きくの花　竹

霜八度をきての後も老せぬやにほひにあまる（花歟秋歟）ませの白菊　中

仙人のちとせふるてふかさしにとうつしもしるくにほふ白菊　聖

うつろはん色とも見えすけふ稀に咲つゝ菊のにほひぬる哉　長（の歟）

さきしよりつきぬ匂ひや白菊の籬もをもく霜をゝくまで　持

仙人のうへにしたねやこれならんにほひ久しき白菊の花　源

百種はかれにしあとに咲のころにほひいく世ぞ庭の白菊
（百花のかれにし跡を申さはいく世の詞不相應に候ひの不審にて久しき心は分明候哉）

永

くむ袖に匂ひはつきし仙人のよはひをうつすきくの下水　竹

黄葉　中

たく露のよすかはかりにそめなして深くは見えぬ木々の色哉　爲

露霜にいくしほそめて朝な〳〵色なをそふるみねの紅葉は　元

梢まていたりいたらぬ露霜をはゝそに分てもみちしにけり　源

いく度か時雨きぬらんはゝそ原ちしほはしらぬ紅葉なからに　聖

白露のいかにをけはか梢みな青葉のこらぬ色にそめけん　積善院僧正

（イ元）露時雨ふりかはりてもはゝそ原下染なから色や朽まし　永

いまよりや色はまさらん露霜を秋の紅葉の下そめにして　持

村時雨かつそめし色のまつ見えて後やちしほの紅葉ならまし　右兵衛督（陛歟）

（イ元）千入にもかへてそおもふ紅葉はの梢にうすき色しちらねは　通

なへて世に先たつ比の一入は千入の木々の色もおよはし

（イ元）山はゝや先千しほなる露霜のそむるもうすき庭の紅葉は　竹

長

色うすき柞の杜の紅葉はゝまた下染のにしきとそ見る　實枝上

桂林之一枝　九十首（自春至秋）

竹　十四首

聖護院准后　九首

源中納言　二首

中山宰相中将　九首

中院宰相中将　十四首

右兵衛督　十五首

積善院僧正　十首

長治朝臣　二首

爲滿朝臣　二首

永孝朝臣　八首

源元仲　五首

初冬　聖

冬の來るまさの葉かつら秋風に散をくれしや又さそふらん（まさきのかつらにさるへくは申かへてもさせるめつらしけなく候歟）　竹

山のはも冬こもりしていつしかに秋みし雲のいろも殘らす　持

けさの朝け初霜うすくをき初て冬來にけりと誰にみすらん　兵

此比のはけしき音もみやこにはけさそ入たつ冬の山風　永

秋風にはけしさそひて冬立や雲のけしきもけさはかはれる　通

さひしさのまさる夕をおとろけは秋は昨日と冬も來にけり　源

草も木も吹しほりたる朝風の空のけしきに冬そしらるゝ　元

あたゝかに春日わするゝ面影の空にかよひてたつ神無月（神無月立といふ事無才覺候）　爲

露にのみみたれし野邊も霜にけさ結ひかへてや冬のきぬらし　積

人とはぬむくらのやとに吹しほる嵐そ冬をしらせかほなる　長

昨日まていなはそよめく秋風もけさはあらしの冬そ來にける（そよめくといふ詞きゝよろしからす候）　中

くれぬへき年のをたまきくり返し先をしまるゝ冬は來にけり

## 時雨

中院宰相中將

吹音をまかふはかりに染なして終にしくれぬ松風もなし　長

夕日かけはやくれそむる小倉山みねの時雨や雲まよふらん　爲

遠方に村立雲のふるかともみれは晴ゆくゆふしくれ哉　源

伊駒山たゝよふ雲の一とをりしくれてわたる遠近の里　竹

さためなき名には立ても村時雨時をたかへぬ冬の空哉　中

空にのみ雲の立まひ昨日今日はやさためなくふる時雨哉　右兵衛督

風さそふ時雨にそよく竹の葉にいくたひ窓の晴くもるらん　永孝朝臣

木枯の音する松の下かけはしくれしあとも又時雨けり（國生云）　持

打むかふ山は朝日のかけなからはるゝまもなく又時雨ゆく　聖

雲風の遠山のはをみるからうちに宿に音きく時雨ふるなり（くたけたる歌さまにて候）　積

此比は木々のもみちも散はてゝ松を時雨のおり〳〵そとふ（第四句穏當[illegible]秀歌候）
元
松たかみ霜におもひしみとりなをしくるゝ後の色にみすらん（半臂の句例の通目なき詞つかひに候）
竹

寒草

かれのこる色もさむけし雪霜にもれし木かけの草の一村
右兵衛督
露なからわけし千種はあともなし色はひとつの野邊の冬かれ
永孝朝臣
枯殘る色とみる〳〵をく霜にしほれはてたるみちの篠原
中院宰相中將
かれ殘る色もはかなき淺茅生にあまりてむすふ霜のさむけさ
積
みし秋の千種の花はかれてたにしはし心に殘るおもかけ
中
あさな〳〵草の袂は白妙の霜をかさねてさむき色かな
持
秋の野に咲し千種の花の色も消てはおなし霜の下草
聖
春秋の色もにほひも冬かれて霜の花さく庭のむらくさ
源中納言
みし秋の露の花のゝおもかけはのこるともなき霜の下草
元
山風のかれ葉におちて小さゝ原音もあられの玉そみたるゝ
長
凬わたる庭の荻はらほのかにものこる枯葉の霜そさむけき
爲
朝戸あけてみれはさなから枯れはてゝひとつ色なる霜の下草

氷始結

爲
宵のまは岩ねの波の音たてゝあけかたこほる谷川の水（谷川に岩うつ波はこと〳〵しき言哉）
源
昨日けふ氷やすらん谷川のなかれたえ〳〵よとみてそ行（五文字に一首の眼頭滞濁たるへく候是は餘に優美ならす候）
聖
すゝみつる水の水上さへまさりけさは氷そむすひかへぬる
持
きゝなれし川瀬の浪は音たえて氷のうへをわたる小夜かせ
元
行水のおちはによとむ谷川のそのまゝこほるみねの朝凬（嶺の朝風無何候）
竹
今朝よりや氷とつらんたえす行山のかけひの水もらぬまて（さりしせ）
長
あらし吹せゝのしからみ氷るらん昨日にかはるけさの川音
積

よひのまは流るゝ水のいつしかにけさは筧の氷とつらむ
永
さえしよの名殘なるらし池水の汀の氷かつむすひけり
中
ゆく水の音をとゝめてみるからちにむすふ氷や下ひもの關
兵
河波は音する夜半もさしくみに氷るやあさき山の井の水
中院宰相中將
今朝はまたとけゆくいけの名殘かと汀計のかつ氷りぬる
春

冬月

積
さゆる夜はたゝをのつからみる人もなくてそ月はみねに傾く
結句よろしからす候
聖
落葉してさやけき月をみるまゝに心つくしの木のまともなし
中山宰相中將
くまなきを冬はくまなるかけなれやあまりさひしき木枯の月
永
落葉せし森の下道とめ行は霜にかさなる月のさやけさ
中院宰相中將
をくは先はらふに消て衣手の霜とは月の色そ殘れる
け候
兵
さゆる夜は入まて雲もさはらねは山のは遠き月をみるかな

長
ふけて行雲いかならんよひの間のかけも氷れる冬の夜の月
爲
雲もなくふけゆくまゝに池水のかけも氷れる冬の夜の月
源
春秋の日かすつもりて花紅葉おもかはり行月の木枯
一首の建立たしかならす候哉殊第四句行の字不審候
元
かれの聲あかつきかけて有明のひかりさえゆく月の下ふし
寒夜の月の下ふしことはりなくて難詠候歟
持
木々の葉は皆散はてゝさゆる夜の空にくまなき月の影哉
竹
冬のみそ月はくまなき花もみちはらひつくせし木枯の杜
花紅葉を木枯森に詠し候哉不然は如何候

積雪

永
朝朗猶ふりつきてけぬか上の雪は軒はの山もふしのね
造作なるしたてにて候
爲
かくれかやさそ埋もれしふる雪に道ふみわけてとふ人もなし
下句全篇古今集候
持
へたてなく雪ふり埋むあしかきの吉野の里はいつくなるらん
長
かつら木やたかまの嶺はいかならん晴間も見えすつもる白雪
千山萬壑の中にたかまのみねを雪のすくれてふる所にさためんは心せはくや候へき
惣別題の心深と積と着天あるへく候
源

ふりつみし雪の光にみかゝれてむかふ鏡の山そはるけき
元

すむかけもふりそふまゝにうつもれて雪にとちたる竹の下庵
聖護院准后

うす雪の夕は人もまたれしをおもひたえたる朝朗かな
積善院僧正

おれかゝる枝より雪はつもりけん松には（濃なる歟候）残る木かくれもなし
竹

松か枝はをのれこほれて木かけたに山としつもる庭の白雪
中院宰相中將

底にみる海松なれや枝も葉もふかくかけたる（みかくれはつる）雪の白波
右兵衞督

いくへとも更にいはねにつもりこし木葉なこ（はらさ歟）うつむ今朝の雪哉
通

みるかうちにさなから玉の塵ひちをかさぬる山とふれる雪茂（しら歟）

鷹狩
通

くるゝ日の鳥のおち草分すてゝ歸るさあかぬけふの御狩場
竹

今も猶かたのゝ狩場心あらはありし行幸のあとや尋ねん
永

はしたかのをのへはるかにかりくれて折もつくさぬ山の下柴
兵

狩くらす袖はぬれつゝ霙ふるかたのゝみのゝ名にもかくれす
篤

すへかへる狩はもくれつ（や）（し歟）山鳥のおのへにすゝの音計して
聖

ふみしたくかけより立て狩衣日も夕くれの鳥のおち草
中山宰相中將

はしたかの（もまれ）鳥にあふせやたのむらん（の君はつや）狩野（片イ）に近き天の川波
元

かり衣袖にあらしの吹落て鳥柴さむけき野邊の歸るさ
持

おほつかなすゝの音とをき（すゝのね作例候哉不審候）はし鷹の狩場のをのゝ雪の夕暮
長

箸鷹にとりかふ道のやすらひにしらぬかたのゝ假寢をそする
積（結句さしなれす候）

夕日かけのこる裾野にをしかへしあかぬ鳥立の狩場をそする
源

かり人やたか引すへて雪の中に鳥の落草尋ねわふらん
持

寄月戀

人しれぬ忍ふの草の庵にすむ月によな〳〵涙おちけり
右兵衞督

やとしてもみすへき袖は朽はてゝなみたに殘る月そかなしき

中山宰相中將

くもるなよかことになしてとはれすは月に恨をかけもこそせめ（れたゝ歟）

竹

僞そふけにしよひのおもかけはのこるもつらし有明の月

源元仲

みし夜半のうきかけ計やとれとは契らぬ月の袖にのこれる

源

なかき夜も月に心のあくかれてたゝすむ袖は露なみたのみ

爲

（雲のはたては夕月いさよふそらを申けるにや時分の相違不審なきにあらす但家々之說々區なれは一愚の管見非恐あり）

おもふそよ空行月のめくりあはん限は雲のはたてなりとも

積

いかにせんつらさそまさる三日月のみえて入さの山し急けは

通

契をきて獨み夜の僞をかこたぬ月もくもろ袖かな

永

友にみしそのよひの間のかけをしもおもふになしき有明の月

聖

面影のそをたにしたふなかめ哉物いひかはす月にはあらねと（第四句ちかき世の秀逸おかしかたき詞候）

長治朝臣

きぬ〳〵のそのおもかけはとゝまらてなみたに殘る有明の月

寄雲戀

消歸り身をこそなけゝ日にそへて人の契のうす雲の空　中

絶すして思ひの雲のかゝるをもそれとしらすはかひやなか覽　積

心こそへたてとはなれ浮雲のたちゐにみても人のつれなき　元

今さらにおもひ社しれ白雲の晴ぬまよひのあるみなりせは　源

うき中にたくふもつらし別てのゆくゑはかなき峯の横雲　通

わすれしと契し中はへたてしを心にかゝる空の雲哉　聖

しられしな我名はまたき立雲の消歸りつゝ物思ふとも　竹

したひてもかひこそなけれ横雲の峯にわかるゝ曉の空（京極黄門秀歌候）　持

さためなき世のならはしかうき雲の空たのめなる人の心は　永

あくかるゝ心や空になりぬらんかゝる思ひにまかふ白雲　長

兵

夕へより立ゐるかたのやますのみまたれ、つらき横雲の空　爲
あしひきのやますむ心にかゝりてもと俊頼詠し候ゝ分科骨候へは不可然候哉

明ほのやみねにわかるゝ横雲の消て物思ふ我身なりけり　通
みねにわかるゝ子細右に申候謌并本歌の差別此道の肝心候

寄山戀

いかにせん煙も空も時しらぬ山はふしのねきえぬ思ひは　爲

ふかきその心の奥の忍ふ山しのひて通ふ道ともゝかな　兵
本歌大意にかゝりにて作者の昔懸あらはれす雖境の返言類候

わか中にいつ分そめておもひねの夢さへたとる宇津の山越　聖

杉村の名のみなりせは三輪の山いのるしるしをいかに待らん　持
みイ

おもふ中へたつる關のなかりせはたゝ逢坂の山こえやせん　永
山すみ戀の歌には優美ならす候哉おなしかさしといへるも心に同しけれともやさしく候與

三室山いのるかひなし眞葛葉の茂るか後も恨はつれは　竹

とへかしなきかすかほなる耳なしの山をためしの心つよさも　源
しれ

おくふかく分こそ入らめ戀の山かへらん道はよしたるとも　長
戀の山に分入らんにはおくふてとこそおもふへきを歸らんは心のふたくしおぬにや有けん

片いとのよる〳〵とに忍ふ山しるへなくても逢みてしかな

かはるなよしけき言葉のつくは山つくしきて社道もしられ　元

もれてはやうき名計そ立田山夜半の契はまたしらぬ身に　積
またしらぬ契は本系の心雲治作意悪個者乎

もらさしと忍ふの山に入し身も色には終に出ぬ物かは　積
忍ふ山のふもとの歌は近代の作意なれは本歌にとり用へからす

寄河戀

おもひ河おもひにしつむ身は終に末はあふせの有世ともなし　竹

雨ふれは水まさりゆく河島のなかれも袖にせく心地して　聖

身の上におもひなしてよいもせ川流てたえぬ末の契りを　永
二句おろかにて戀の本意をうしなひ候

よそなから尋ねてもみよおもひ河ふかき心をくみてしらせん　長

色みえは千入とおもひそめ川にたつあた波はいふかひもなし　中山宰相中將

我中よ氷りとちたる冬川のそこゐしらねはわたりかねぬる　積

つゐに身のあふせあらすはおもひ川なかれての世の後や頼ん　兵

片いとの…　爲

人しれすふかき心をいはせ川いはては過しくちはゝつとも　持
朽のよしその色目何ともきこえす如何

いもせ川たえぬ思のふかけれは我身につもる年なみそうき　源

限なきおもひにゐての玉川のよとみはてたるしからみそうき　通

おもひ川身のうたかたの流れてもしらぬ逢瀬はよる方もなき　元

なみた川袖よりもれて立波もあふせにかへはよしやいとはし　兵

寄門戀

さりともとたのむ月日も杉の門おもふしるしの末はとをらて　竹

人しれぬ契りはいかて恨まし我通路の門させりとも　元

露はらひ葎の門もとひよらん契りし末のみちはありとも　源

つれなしと恨たえてもいもか門行過かたき身をいかにせん　長

なれし夜の明るそをしき杉の門またいつとたに契りをかねは
聖護院准后

門よりもえも入やらて忍ふれは道にしあらぬ道もとむなり

たつねてもつれなき色のしるし哉人の心のすきたてる門　通

うきにのみ立てみ居てみ槇の戸ををし明きたきに袖しほる也　爲
從門路戀を眞木戸と詠し候その作例候哉それは自然の事なるへし
寄戸戀のまきれあれは門はかゝにて可然由申候

しるしなき物ゆへ行て歸るともたゝにはいかゝ杉たてる門　積

よそにのみ人の心は杉の門さすかにたえぬ中にありても　永

必といひつゝとはてすきの門やかておもはぬしるしみせけり　中

さりともとまつ夜むなしく杉の門さゝて明ゆくしのゝめの空　持

寄床戀

こぬまても衣かたしきまてといはゝふすゐの床も枕からまし　聖護院准后
契なき
くへきよひの必定ならはふす猪の床はかりかたかるへし

獨のみねられん物か床の上打もはらはぬ夜半の枕に　源

侘つゝもまたそ打ぬるとことはにさても語らふ中としもかな　中
永孝朝臣

きぬ〳〵を又こむまてとたのむまに塵にむもるゝ床のさ莚　長

身もしつむ（梅集）ふちとやならん獨寢の床につきせぬ泪（床の涙不打任候）とをしれ　積

うくはかりなみたよ何をなけく覽たのめぬ夜半の床の獨ね　兵

塵をたにはらはぬまゝのさむしろの床はなみたの氷をそしく　元

それそともみせはや山とゐる塵のはれぬ根（もとは）のよるの床とは　持

袖よりもあまれる露（涙）の床の上になかれて立やうき名なるらん　通

いたつらにみるめはおひす泪のみおちては床の海となれとも　爲

袖の上も露けかりけりちりをたにすへしとおもひし獨寢の床　竹

獨寢にはらはぬ床はちりならぬ根も山と猶つもるらん　源

寄草戀

下もえの草のはつかに契り初るとはの末は誰かしらまし　爲

露になひくその神山の草の名も思へはつらしあふひならねと（西行か風になひく何[illegible]字をあます事[illegible]まさるよし申候）　竹

草もけに秋（イ死）は色々の花心うつろひやすき中そかひなき

みそめしをおもひの草の種とのみ心に茂る身をいかにせん　持

つむ人のなきそかなしきおもひ草庭も籬も生茂るまで　聖

しらせはやあさかの沼にかる草の其名許もぬるゝ袖とは　通

長治朝臣

誰かなをつけそめぬらん忘草おもふあたりはねをもたえ（て歟）なん　中

せめてさはあやめを草の枕とてむすふ一夜の契ともかな　永

なとてかくあさき緣そ（そといひてけんとは中にくゝ候哉）いたつらに忘草おふる中と成（ゆく歟）けん　元

右兵衛督

おほつかなたか名殘よとをきそめてふかく成ゆく道芝の露（草に別名を詠する事本意ならす候況や道芝なとは殊に[illegible]）

茂りゆく人の心のわすれ草我にはわくるねさしもそなき　積

つゐにそのつれなきふしは忘草わすれすは又身をいかゝせん　兵

寄木戀

おもひのみ年ふるからに木たかくも今は心の松に見えなん　爲

うきみそと名にたちそふる錦木の千度一夜もいたつらにして（て歟）
聖
よしやさは朽もはてゝよあはれともしられぬ身こそ谷の埋木（這裏の歌にはかふへく候歟）
積
人心ひかてやつゐに埋木のたにゝ朽ぬる身のちきり哉（も）（てにをは参差候哉）
永
世の人につゝむ心は埋木のいつか詞の花もさかなん（なんと候へはてにをはたかい候）
中山宰相中将
人心よそにひかれていたつらにわれや杣木のあとの山守
通
こりはてぬ我そつれなき人はそのいとふにたにもしけき歎を
竹
ほと〳〵の情はかけよ谷かけの埋木たにも花さけるよに（むもれ木の花本説候ける哉らん）
源
朽はてん物ともしらす鹽木とりからき思ひにしつむはかりそ
長
へたてなく打もとけなんなら柴のなれてつれなき人の心よ
爲
色も香もよそにうつるな人心かけてたのめし神の榊は
元
憑ますようきたる浪のよせかへり名もなかれ木の定なき身は（にひかれてし歟）
長

寄車戀

うつり香をとゝめをかはや小車の廻りあふ夜の後のかたみに
竹
けふのみの思そまさるみすもあらす見もせぬ人の小車の内（むすひ迄はめる候）
積善院僧正
戀すてふおもひのいゐに沈む身もよしや車のわれからにして（はいて歟）
右兵衛督
さ夜ふけて音もとゝろく小車にしのふる道のかひやなからん
源
心引人しなければ小車のめくりあふへき契りをそ思ふ
元
したふにはその名まきれぬ小車の匂ひもあれな立交るとも
持
めくりあはんかきりもしらす小車の別しまゝの日数をそふる
永
思ひよる末しとをらは小車のめくりあふへき世をやまたまし
爲
別ては袖にぬれける小車の又めくりあふ事やあらしと
聖
玉すたれおもひかけきや吹風のほのかにみてし道の小車
通

鏡の小車は数を申候哉然は車の正躰にあらす作例は定てありもや候らん

廻りあふ一夜はつらし小車のにしきの紐のとけもはてすは　中

されと本意ならす候也

めくりあふ數にしもかな小車のきてもかひなきひちのはし書　永

寄鏡戀

とゝめえぬ涙は袖に十寸鏡くもりなはてそ逢夜ありなは　積善院僧正

むかふとうらなくなれる物ならは人に鏡をかけてみましや（や　みせまし歟）　持

うつしてしそのおもかけをそのまゝにむかふ思のます鏡哉　爲

立よりてみるにもつらし鏡山人の心のうつるならひに　中

をもかけのさらぬ物からをくひまもなく〳〵むかふます鏡哉　聖

つゝとゝむる詞は何の字にてなからと云儀なり

わすれては鏡をみても歎あまり我かけにさへ打かたりつゝ（そかたらふ）　源

然れはいひ残して三十一字之餘情此一字にこもるこれによりて大かたの秀逸にはゆるし用々々なしふかく数寄あるへきか

鏡のうちにかけのこらん事信しかたし源氏物語にも

おもかけの殘るをそれと見るたひにあらぬ思のます鏡哉　兵

かけたにと申候ならはといへり

むかひみる程こそあらめます鏡立はなれても同しおもかけ　竹

立よれは我もはつかしくもりなき鏡にうつる戀のやつれは

くもれとよなをも思のますかゝみ涙うつろふ影もはつかし　長

あひみるも覺束なさのます鏡よりそふかたにうつる心は　元

うきかけのむかへは曇る涙より鏡もわれをいとふとやみん　中院宰相中將（有朱）

曉寢覺

年々にあはれかすそふ曉のねさめをしらぬ時もありしを　聖

またきかぬ人の枕に鳴そへてねさめ數そふ鳥のはつ聲　元

こしかたを思ひいつれはあかつきの夢おとろかすかねの聲々　長

こし方をおもふに夢の後なるへし前後参差に似たり作者の意巧にかゝりてねと歟　かたけれと今案有之儀　中

鳥かねにおとろかされて中たえぬあとは昨日のゆめの浮橋　爲

衣手は露けかりけりおきもせすねもせて夢のさむる枕も　竹

それとなく寢さめかちにて秋の夜は老ならぬ身も明やらぬ空　永

なるゝ身はきかても知や鐘の音におとなふ室のあかつきの空　積

老の坂半こえ行身にたにもねさめかちなるあけかたの空

中院宰相中将

かれの音を曉毎にきゝなれておとろかされぬ夢も覺けり
ぬさへ夢は

右兵衛督

夢さそふかねのみたけのをのつからそのあかつきにすむ心哉
ねてよりか

源

夢もさめ心もすめる月かけにはやあか月の空もしられし
題可分明ならす候

持

わすれすもねさめせよとやかねの聲鳥も八聲の曉の空
曉の材木おほくこえ歌の詮すくなく候哉

積

山家

のかれ來て今はその世のましはりを人の上までおもふ山住
うき歟

永

あとたえてわけゆく山の岩やこそ心うこかぬ住ゐなりけれ

源

かくはかり浮世をいとふ山住の友とやきかん松風の聲

爲満朝臣

住わひて尋入にしかくれ家も猶うき時はおく山もかな
いつち行らんといへる語勢と覺しく候

持

山ふかき草のいほりは冬かれてやとりあらはにみゆる竹かき
戸さし　のこ歟
いほりと候へは居所もなき冬かれと覺しく候すむ人なきに似たり消は門戸は一は竹かに相應すへく候

長

さひしさをかたりあはせん友もなし風音つるゝ山の下庵

聖護院准后

をのつから岩ゆく水を砌にて柴引かこふやまの下蔭
いほイ

兵

心もそよそにまきれぬ市のうちにあるたにあるを奥の山住

竹

すみなれてさひしさしらぬ山里もさすか夕は友そまたるゝ
山里にては夕は友のかへるへき時分に候を待へき事如何候へき未の儀にさらてたに夕は物のかなしきにとふ人かへる岩のかけ道也歌題分明候

元

のかれえぬうき世の夢の立歸むすふもはかな山の下庵

中

世の外はこゝそとおもひつくは山はやまのおくに結ふかり庵
筑波山にかりほのさた證歌候哉

通

世間の外とてしめし山里のまたうき時そせんかたもなき

持明院中納言

浦船

灯の明石の浦をゆく舟の波にくもらす風や吹らん
こ　や　ぬ住來なる
此風はいかなる故に吹候やらん

爲

浦人やうらみなからも漕出て跡遠さかるおきの友船
此假何事の遺恨候哉

兵

明石かた島かくれ行なかめまて昔にかへる浪の上の舟
波の上の月といへるにかはりて作に道理なく候哉

聖護院准后

舟人に身をしかへなはあくまてに漕とめましを鹽かまの浦

竹

すこならすともなくさみはいつくの浦にもあるへく候如此追用の義
声勝せさるよしを注申候

なのつから慰みやせん須磨の浦の月にもなるゝ蜑の釣舟　源

浦風にあけほのとほくこく舟のゆくゑいつくそおきつ白波　中院宰相中將

たゝぬ日もありとみえつゝ田子の浦やなきたる波に出る釣舟　積

明くれのあまの心になすわさをおもふもはかな浦の釣舟　中

舟の上浪のいつくに又やみむ名にしほかまの浦のあけほの　永

浦かへるあまの小舟の逐風も涼しくみゆる袖のうら波　源元仲

へたてこし浪のさかひは浦の名もしらぬ詞をかはす舟人　長

おきつ浪よるかとみれは吹上の浦にたゝよふあまの釣舟　中院宰相中將

旅行

我いてしなこりの袖もかゝらすはしほる野山の哀しらなん　中
（いてゝこし歟にも）（の歟）

さゝ枕一夜二夜のほとたにも都いてゝはしほる袖かな　源元仲

こしかたのたより過さぬ事つての筆も取あへす行別ぬる（イ）

都いてゝいく日もあらねと逢人に事つてやらぬ便もそなき　聖
（ん歟）（やらぬの歟猶宜不及候）

竹

行やらてしほれやはてん野邊にふし山にもとまる旅の衣手　持
（かたしく歟）

旅衣秋は來にけり白露のやとりとなれる我袖のうへ　長

故里をあとにするかの旅なれはふしても夢にみえぬなりけり　源
（金葉詞花に異本候）

世中のうきわさにのみ身をなしてやすむ日もなき旅衣哉　右兵衛督

いさしらぬ行衛のみかは分てこし跡もはるけきむさしのゝ原　爲
（また）

うつの山うつゝにしもやこえなましたつきもしらぬ蔦の下道　積

たつきなき野にふし山にとまる身や浮世の旅の門出とはせん　永
（あかす歟）

けふいくか野山を分て草枕いはかね枕又やむすはん　竹
（むすひおへけん）

述懐

浮世そと思ひとりても身をかこち人をうらむる我そはかなき　爲
（玉葉二々一首三歟）

うしとのみ思ひなからも此世をは猶すてかたき我身なりけり

積

誰もみなた（しれ）くひありとも身の上はひとり〳〵の浮世ならまし（すゃ歟）

持

いひかはす友もなけれは山里をいてゝ都にすみやかへまし（是は山家の題に相應すへく候）

源

天か下あふく心はかしこきもおろかなる身も隔あらしな

永

をしなへて花さく比はわひ人もうきをわするゝ春の山住（これも山家と覺しく候）

元

つかふへき道にそねかふ（もれすに）愚さの昨日にかはれけふの我身に（は歟）

中

埋木の身は朽はてぬいかにして人の詞の花にましらん

長

いのるてふ神そしるらん朝夕につかへん道をおもふ心は

通

人なみに立交りても和歌の浦によらて朽なんもくつをそ思ふ

聖

何にかく生れいてけんなす事のなき身なからに世を盡せとや

右兵衛督（朱文公の勸學の文眼前候）

今年あれはまたこん年もたのむまにつもる月日の身たそ驚く

寄松祝

兵

萬代もつもらんかけをむつましと君やみかきの松のとのは

源

をくりきぬ代にすみよしの松の葉の散うせぬ色を君に契りて（五文字なにをゝくりけるにかおぼつかなし）

聖

一木つゝかそへやせまし君か代のいく千とせにかあふの松原

長

おさまれる君の御影は住よしの松もろともに幾千代もへん

爲

君か代の八百萬代は高砂のおのへ久しく松のみや知る

持

君か代に老せぬ松のとの葉やつきぬためしの和歌の浦波

永

おさまれる世に住よしの松か枝を君かみかきに移してやみん（此うつすは久しきためしをうつすの道理なるへければ治定すへき所にて候をやの字よろしからす）

通

生そはむ松に小松をならへても君に較ふる千代やな（それなる）からん

積

散うせぬとの葉のたねは君か代のかはらぬ色や末の松山（詞の種を末の松山にくもとあん中はいかゝし候へき）

竹

今よりの千とせの數は君たのみしる人にせん松のゆく末

中

生そひて砌にたかき松風や君に友なふ萬代の聲　實枝上

崑山之片玉　五十五首自秋至戀

竹　十三首

聖護院准后　五首
持明院中納言　一首
源中納言　一首
中山宰相中將　六首
中院宰相中將　八首
右兵衛督　九首
積善院僧正　三首
長治朝臣　二首
爲滿朝臣　一首
永孝朝臣　三首
源元仲　三首

〔右天正五年親王家五十首以圖書寮本校合〕

# 大永二年八月四日御會和歌

## 戀五十首

不知名戀

蛋の子のなのりもよしや今よりは我によるへの宿をさためは上歌

忘名難尋戀　知仁

あらぬ名に人やなしへしたつねても杉むらならぬ宿の木末を

被慰人戀　實香

ことはるを涙のひまの袖の上をあさき方にはなしてもらすな

被妨友戀　堯空

しる人のへたてしなくは高砂の松もむかしの夕ならまし

思移妹戀　曉覺

たゝならす思ふとしれな年月は人につたへし人のなけきも

祝芳言戀　宗清

身にしまぬ情ならすやこからしの吹につけてもとをいひし空

憑深言戀　季種

つらきさへ慕ふならひをとの葉のふかき色しも頼まさらめや

詞和不逢戀　元長

なをさりに頼むはかりのとの葉の末もとをらぬ年もへにけり

答言不逢戀　公條

恨すやうち思ふまゝの言の葉にかことかけたる人のこゝろは

他行時來戀　爲和

玉たすきかけてを頼む今夜しも行ちかひぬる身をいかゝせん

過門不入戀　實香

花ならぬ身をこそなけゝ我門のたよりをよそに人そうつろふ

立門空歸戀

問こしを空にこたへてあくる夜は門たかへにや思ひなしけん

度々延約日戀　堯空

終にいかに一夜二夜のさはりをはさもやと人に思ひゆるせと

辭後會戀　季種

早くより思ふかひとていな舟のいなにもあらぬ逢瀬をそしる

不憚人目戀　知―

暮るよりまよふ戀路にいつまてか人目の關に夜をふかしけん

隔物讀戀　宗清

きませとはいひ交しても東屋のその戸開かぬ夜半のつれなさ

不知身程戀　曉覺

つれもなき人になにそはわすれ貝うき世の浪にあらぬ此身を

被輕賤戀　元長

塵ならぬ名にのみたてゝいひしほる袖の淺黄や深くうらみし

閑怨我戀　公條

いかにせん人のうらみはおふ物と我身の上にきゝもさためは

被嫉妬戀　爲和

さらに我よそにうつらん心ともなきをあるにや人のなしけん

僞教在所戀　季種

たのめつゝそことをしへし僞もしらてまことの宿をとはゝや

見家思出戀　堯空

そことみて行過かてのやすらひに草むすふ袖の露こほれつゝ

老後恥人戀　宗清

戀そうききさらても老の秋風にちらんとの葉はつかしの杜

被忘人戀　元長

みたれゆく忍ふもちすり人はなとわするゝ草の種をまきけん

思未知人戀　知―

小車のわりなき道をいかにいはん見もせぬ人のみすも有すと

觸事思出戀

夢にても又いかならん世にかはとわすれぬのみのこと草もうし

思後世厭戀　實香

思色をみるか内なるつれなさは有さらん世にさはるとをしれ

賤忌貴人戀　曉覺

空になひくためしやはなき山かつの身は下もえの宿の烟も

稱他人戀　公條

試みに名をかへてたにつれなさのかはらすは身を慰めてまし

誓思絶戀　爲和

恨をもうらむるほとのうらみそと今は神かけおもひ絶にき

隔一夜逢戀　宗清

不知夜にわかれし空の面かけもゐまちにかへる月のたまくら

每夜待戀　季種

そひもせぬ面影なからいく夜さてまちふくる鐘を聞明すらん

隔日來戀　元長

昨日社とたえなりしをけふこすはあすは露とも消なまし物を

隔年序戀　公條

尋ぬるやをそき十年の春の夢うつろふ花はいふかひもなし

悦僞言戀

かはかりのと絶もうられし僞の言の葉なからなくさめにして

無二相語戀　堯空

わすれしなこゝろに殘す一言もともになく〳〵かはす手枕

契來世戀　爲和

命たにたえはといひし心よりこん世を人やちきりをきけん

悔前世契戀　曉覺

うき契くゆ共いかにむくひあるわか前の世を思ひとくにそ

關路相伴戀　實香

ともに聞空さへかなし關の戸のうき別路と鳥もこそなけ

旅宿馴戀

かりそめの夢もいく夜の草枕古鄕人にいかゝかたらん

祈神不逢戀　季種

したひえぬ中とそあらめかひもなき言葉つくす神もはつかし

詣古寺祈戀　元長

行こしゝるしは見えす初瀨山人のみさほや二もとの杉

期曉顯戀　宗清

こん年の命にむかふ空とたに雲のはたてをみやはとかめん

留形見戀　曉覺

あひ思ふ中ならはこそ稀にきて殘すかたみもあはれとそみ（は歟）め

初逢後思出戀　公條

いくたひか月や春やとかこちけん忘れかたきは本の身にして

稀逢不絶戀　爲和

やよいかにあはれかけてよ七夕もおなし逢瀨の天の川波

曉欲留戀　知―

名殘あれや猶出かての眞木の戸に人やりならぬしのゝめの月

見僞書慰戀

待えてはうたかはて見ん一筆の人に墨つくためし成とも

押淚愧戀　實香

我や又いつはろならしなみたをもさらぬ色にも人に見えぬる

船中馴戀　堯空

うきなからえにしあれはそ大船のみなるゝ中を人な咎めそ

# 詠五十首和歌

大膳權大夫行文

春十首

春といへはまつくむけふの若水や老せぬ君かためしなるらん
橋たてや中空かけてかすむらしよさのふけゐの春のあけほの
はるならてたれかはとはん我やとにはやあと見ゆる庭の白雪
いつる日も長閑き春のあさもよひ木々の梢に鶯そなく
難波かたおしてる月もむかしにてありしみやこの梅匂ふなり
暮るまてわくる山路のさくらかり月こそ花のしほりなりけれ
山さくらいまかさくらし志賀のあまのつりする袖も匂ふ春風
雪とたにつもりもやらてちる花の行衞さためぬ山風そ吹く
ならひにもさのみはいかゝ霞まゝし老はまたきの春の夜の月
わたつ海のかさしとみえて浪かゝるたこの浦藤いまさかり也

夏六首

日數たにうつらさりせははな衣更るならひもしられさらまし
郭公待夜のかすやつもるらんうつゝときけはまとろみにけり
住吉や岸田のさ苗とりそめぬゆきあひのわせの秋をまつとて
かくてなを身をてらさぬやあつめえぬ窓の螢の思ひなるらん
うかひ舟いまや早瀬をくたすらんとをさかり行かゝり火の影
さと人はみそきしぬらしみなせ川あさの葉末もありてゆく也

秋十首

夕つく日うつろふ雲の色まてもいとはれてうき秋はきにけり
星合のあまのたなはし秋かけて契も空にとたえやはせぬ
吹すてゝすきゆく風のあとになをこゝろとそよく庭の荻原
いかにせん身には限らぬあはれともなくさめかぬる秋の夕暮
いく秋か契らぬつまを思ひいつるときはの山に鹿のなくらん
ふけぬるか月は夜寒の秋風に雲もまとをの衣かりかね（第五文字疑ふなとにて可宜歟）
うす霧のまかきの島もへたてなく月のかけみつしほかまの浦
ふか草やさとは野となる秋風にたれすみなれて衣うつらん
そめ殘す梢もあらしやま姫の時雨に袖をかしはきのもり
行秋のとまらすとてもこんとしのけふの夕とちきりをかなん

冬六首

秋の色をそめし名殘もいま見えて庭の木葉をうつむ霜哉
山かせの吹まく四方の木葉さへしくれて月のくまとみえつゝ
いまも猶つかへし世々の跡とめてみかきの雪をふみわくる哉
つもりそふ雪こそけさはみわの山なひく檜原のかさし折なれ
河風に八十うち人の袖さえて月を友とやあしろもるらん
こん春をいそく心に身につもるならひもしらぬ年の暮哉

戀十首

果しなき戀のたゝちよいつしかと何をしるへにふみ迷はまし
しらせはや上にはしける浮草の下にねをたえおもひわふとも
みなの川音にきゝつゝつくはねのみねとも袖に浪はかゝりき
後の世と契りをかはそこひしなむあふにはかへぬ命なりとも
つゐにさてあはぬ命の露と消えは草の蔭にや人をうらみん
神もゝしまさるかたにやなひくらん祈るによらぬ中の契は

したにのみ思ひみたれてかくとたにえこそいはねの瀧の白糸
宮木ひくみほの杣人なれよりもくるしき物をさのみたつ名は
いまはゝやうらみし比を身の程のおるになしてや思出てまし
はし鷹のとやのゝすゑのま葛原うらみつこひつ世をつくす哉（こひつうらみそ歟）

雜八首

きゝそむるゆふつけ鳥の一聲にいく里人の寢覺しぬらん
いかて猶おくへし庭の松かえにかはらぬ家の風を殘さん（神あ如之家之を遂歟）
暮にけり日影は峯におちこちの里のつゝきの入相の鐘
山深き草のとさしのかりの庵かりそめにたに人はとひこす
わかの浦の塵につけとやかきをかむかひも波間の藻屑なれ共（新續古今）
浮世とていとひし人やいとはぬをはかなき物とよそにみる覽
はこや山千年のさかもいく度かいま君か代にこえんとすらん
ます鏡あまてらす神の宮ゐをもうつしかふへき時は來にけり

僻案點十二首

## 詠五十首

春十首

長閑なる日の川上のあさかすみ神代にかへるけふの春哉
あさ風もはやさむからてうちふやま霞の衣たちかさねつゝ
春をへて花になくなる鶯は色香にのみや心そむらん
さそひくる嵐のよはるほとなれや枕にうすき夜はの梅か香
いかにせん我世ふけゆく涙にもさなからかすむ春の夜の月
花のえにさへつる鳥もある物を見すてゝなとか鴈の行らん
さきやらぬ花の爲とやいそくらんしたふならひの春の日數を
これも又花のかゝみややまさくら咲るおのへをいつる月影
瀧津せやなかなるよとにちる花もなかれてはやき春風そふく
花鳥のなこりな跡に殘しおきていつくにけふは春の行らん

夏五首

夏ころも袖こそあらぬいろならめ心は花に猶やそめまし
今夜しもなをつれなくてむら雨の空たのめなるほとゝきす哉
さらてたに月はよそなる谷かけの夜な／＼くらき五月雨の頃
草かくれあさゝは水にとふ螢たま／＼見ゆるかけたにもなし
里人やみそきしぬらしみなせ川麻の末葉もありて行なり

秋十首

里はあれて松ふく風のまつ人にあらぬものから秋はきにけり
秋毎にけふかすいとのふして思ひ起てやまちし星合の空
萩の葉の露ふきすつる風ならはぬるゝ袖ほす夕暮もかな
たちくもる遠の山もといつくともえこそみなせの秋の河霧
秋風におのへの霧のたちわかれいなはの山をいつる月影
時しあれはあらたまるへき神垣にかはらぬものと月をみる哉
つくはねの峯行鴈も聲おちてこのもかのもに月そ殘れる
いり日さすいな葉の雲も色かへて夕さひしき小田のかりいほ

さたかには音もきこえすさ夜衣ふけてやしはし打たのむらん
紅葉はもろきあらしの山かつら尾上の秋やくれかゝるらん

冬五首

新續古今
夢さむるまくら（夜半イ）の時雨冬（かイ）きぬとおとろかしてやよそに過らん
谷ふかみ人目もつれて枯にけりとはれぬ道の霜の下草
大井河瀬々になかるゝ木葉こそ山の嵐の行衛なりけれ
あつむとも世にしられしな數ならぬみやまかくれの窓の白雪
かくはかりつもるはやすき年波の跡なき雪にいつならひけん

戀十首

下にのみおもひみたれてかくとたにえこそいはねの瀧の白糸
さらは又たのめぬ暮や憑まゝしかく僞のある世なりせは
我中はありしにもあらぬゆふ暮をむかしになして秋風そふく
つれなさの色のみ見えていたつらに名はかり殘るあふの松原
月みすはよも問れしとことよひさへ猶身の程をまつかこちつゝ
神たにもけたぬ思ひのけふりこそ上なきふしの名には立らめ
かへしてもつゐにねられぬ小夜衣夢の契もまとをなりけり
よしさらは底にも沈めふせの海や恨ありそのかひもなき身は
せめてけになくさむかたと思ひねの夢路はかりや契なるらん
あはぬにもまさりてつらきならはしのありける物を人の別路

雜十首

松になを音を殘しておきつなみたかしの濱は秋風そふく
くれ竹はゆかりにあらぬ色なから千代のかけそふ紫の庭
てらさすは身をいかにせんかゝけても我世ふけゆく窓の燈火
あしやかたなれぬうきねの浪枕我すむかたの夢もゆるさす
やとなくはよしやいなのゝ小篠はらかりねの月を手枕にせん
世の行衛さてもうつゝに何として昔はかりを夢とおもはん
宮河のすめるなかれにすゝくこそにこりにしまぬ心なりけれ
露霜のあかつき起もいくたひか神わさしけき身にならふらん
名草山みねなる月のかけよりも御影そ高き日前の神
あし原の世々のことの葉末終にたえぬ道とやさかえ行らん

後小松院樣御點。判詞御自筆。
作者國造行文也。

此一卷當家名譽子孫之重寶也。

以宮內省圖書寮本一讀了芝葛盛

明治四十三年九月十一日印刷
明治四十三年九月十五日發行
昭和十一年八月廿五日四版發行
昭和十四年十一月二十日五版發行



發行者　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市淀橋區戶塚町一丁目一〇九
永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戶塚町一丁目一〇九
新英社印刷所

發行所　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八